

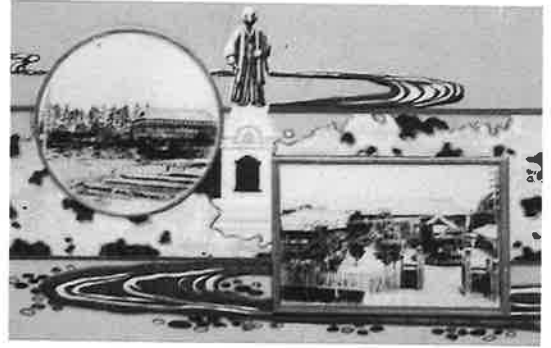
# 本庁管内の民俗

— 旧前橋町を中心として —

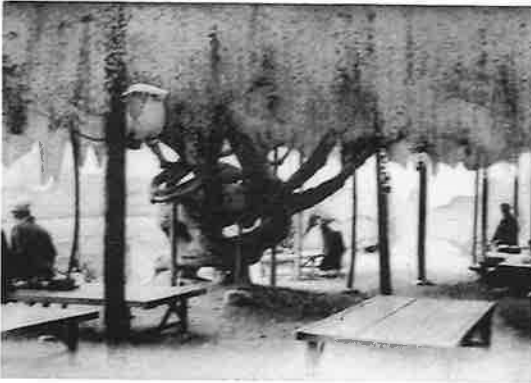




(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



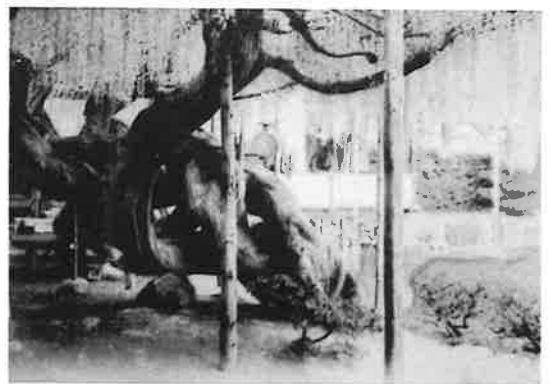
(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



利根川から榛名山を望む  
(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



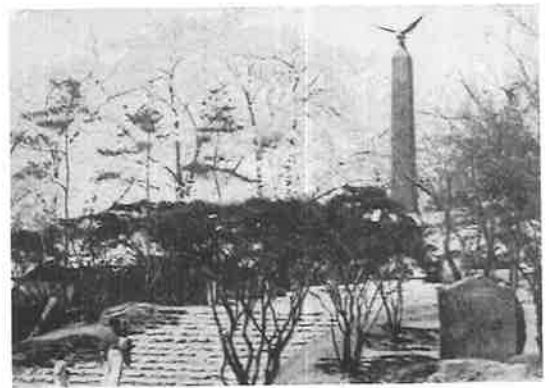
(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)

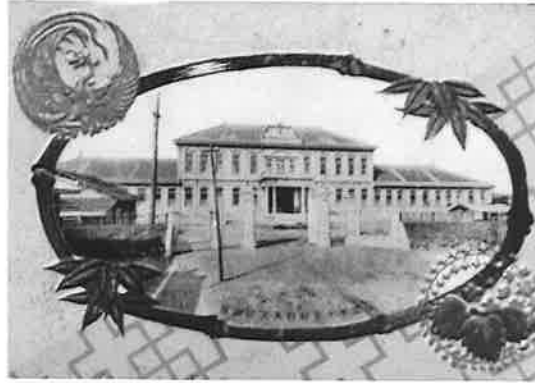


前橋公園  
(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)





(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



(文京町三丁目 新井武雄氏蔵)



昭和12年長野県警察官の冬服  
(城東町三丁目 小林敏明氏蔵)



昭和12年長野県警察官の合着 (夏服は上下白)  
(城東町三丁目 小林敏明氏蔵)



昭和13年水戸工兵隊への入営記念写真  
(城東町三丁目 小林敏明氏蔵)



# 序

前橋市教育委員会

教育長 岡 本 信 正

昭和六十年から十年の歳月をかけた行つた民俗文化財調査事業もこの報告書刊行をもって終了することになりました。社会の急速な変化の中で、失われつつある古い習慣や知識を記録保存するというこの事業は、これ自体が生涯学習の資料になるものですし、お年寄りの記憶の中にあつたものを、文字化して市民の皆さん共有の知識にする意味を持つていました。

それだけでなく、この調査がきっかけで、歴史の勉強会が生まれたり、町の歴史をまとめようといった動きが生まれたことを一層うれしく思うものです。

本庁管内は古い前橋町を中心とした地域です。町場の民俗を残している地域であり、近代化の流れを強く受け、その記録も多く残されていました。この報告書にも掲載させていただいております。いずれも貴重な記録です。こういった記録をのこされた先人の努力に敬意を表したいと思います。

この報告書は、そういった記録と聞き取りを中心としたお話をまとめて掲載しました。この報告書も一つの記録として市民の皆様に活用されてこそ、調査した意味が出て来るものと思います。これまで刊行した四冊の報告書を生涯学習の中で利用していただければ幸いです。

最後になりましたが、この調査実施にあたりましてご協力いただきました地元関係者の皆様、調査にあたられた調査員の皆様に感謝申し上げます。ごあいさついたします。

平成七年三月二十日



## 経 過

### 一、目 的

民俗とは、一般には民間伝承と呼ばれ、衣食住を始めとして、人々が先祖より受け継いできた日常生活の上で、繰り返し行われる生活事実のすべてを意味するものである。こういった伝承や残された民俗文化財を調査することによって、一般庶民の伝統的生活様式、社会形態を明らかにしようとするものである。

それは、民俗が、日本人であるならば、誰でもが無意識のうちに繰り返し表出する類型的行為の総体を意味し、いわば、日本人を日本人たらしめているものだからである。

そこで、社会の急激な変化により、滅び去ろうとしている民俗を、総合的に調査し、資料収集を行うことで、記録保存を図り、地域をみつめる心を取り戻させる契機とする。

また、資料整備により、博物館、資料館建設に資する。

二、調査組織〔前橋市民俗文化財調査委員会〕

委員長

近藤義雄 前橋市文化財調査委員

副委員長

井田安雄 日本民俗学会会員

顧問

阿久津宗二 前橋市文化財調査委員

梅沢重昭 前橋市文化財調査委員

近藤義雄 前橋市文化財調査委員

### 調査員

松島栄治 前橋市文化財調査委員

丸山知良 前橋市文化財調査委員

福田紀雄 前橋市立新田小学校

今井英雄 群馬県立榛名高校

村田敬一 群馬県立前橋工業高校

井野誠一 前橋市教育委員会文化財保護課

岡野 健 群馬県教育委員会吾妻教育事務所

畠村真也 玉村町教育委員会

新保一美 早稲田大学演劇学会

浜田博一 前橋市立箱田中学校

池田 修 群馬県立前橋工業高校

菊池誠一 昭和女子大学

小暮正剛 赤堀町立赤堀中学校

横田雅博 高崎市史編纂室

田口智彦 群馬県立富岡東高校

佐藤 健 桐生市立広沢小学校

綿貫綾子 群馬町教育委員会社会教育課

### 地元協力員

各町自治会長

生涯学習奨励員

協力員

### 事務局

本山 卓 文化財保護課長

宮下 寛 文化財保護係長

駒倉秀一 埋蔵文化財係長

井野修二 文化財保護課主査  
齋藤仁志 文化財保護課主任

三、調査経過

昭和六十年 芳賀地区  
昭和六十一年 南橋地区  
昭和六十二年 桂萱地区  
昭和六十三年 清里 総社地区  
平成元年 元総社 東地区  
平成二年 上川淵 下川淵地区  
平成三年 旧木瀬地区  
平成四年、五年 本庁管内

四、報告書の刊行

第一集 芳賀 南橋 桂萱地区調査内容  
昭和六十三年刊行  
第二集 清里 総社 元総社 東地区調査内容  
平成二年度刊行  
第三集 上川淵 下川淵 旧木瀬地区調査内容  
平成四年度刊行  
第四集 本庁管内調査内容 補遺 総索引他  
平成六年度刊行

五、第四集関係  
事務局

町田重雄 文化財保護課長 (四、五年度)  
本山 卓 〃 (六年度)  
高橋賢靖 文化財保護係長 (四年度)  
宮下 寛 〃 (五、六年度)

六、調査の留意点

高橋正男 埋蔵文化財係長 (四、五年度)  
駒倉秀一 〃 (六年度)  
関口 孝 文化財保護課主査 (四年度)  
井野修二 文化財保護課主査  
齋藤仁志 文化財保護課主任 (五、六年度)

本庁管内については、その土地生まれの人を捜して調査を行う。  
本庁管内では、町屋の民俗と共に、職人についての民俗に留意して調査を行う。

話者 一覽表

岩神町一丁目	根津 作治	明治四四年	八月二五日
	いくま よし江	明治四〇年	二月一五日
	関口 文江	明治四〇年	六月一五日
	加藤 武次郎	大正 五年	二月二〇日
	杉本 賢一	大正 一年	一月一五日
	五十嵐 源次	明治四一年	二月一四日
岩神町二丁目	谷 登志吉	明治三八年	二月 五日
	高橋 茂子	大正 九年	二月一四日
日吉町二丁目	多胡 ウシノ	明治三四年	六月 六日
	斉藤 琴子	明治四四年	九月 四日
	佐藤 初子	大正一四年	一月二五日
	金子 晴義	大正一二年	五月一七日
	佐藤 米三	大正一四年	一月一五日
住吉町二丁目	皆川 房子		
	佐藤 義之		
	丸山 コウ		
	小川 ふみ子		
青木			
北村			

表町一丁目

藤倉 壯活	大正一三年	一月 四日
奈良 正夫	明治四三年	四月一九日
小林 茂利	大正一二年	四月二六日
久家 行夫	大正一二年	八月 一日
加藤 一雄	大正 六年	一〇月 八日
新井 隆司	大正 六年	一月 七日
城東町三丁目	立花 朝光	
	木村 章友	
	宮本 登	
大手町三丁目	瀬尾 武彦	
	落合 八郎	
	北爪 泰一	
	沼田 健	
	石鍋 賢次	
千代田町二丁目	外山 亀男	明治三八年
千代田町三丁目	関根 伝司	明治四一年
	文京町一丁目	三月一八日
	遠藤 正美	大正 七年
三河町二丁目	前川 隆司	大正 五年
	山本 清一郎	大正 四年
		一〇月二二日
		八月 四日

代田郷一 大正四年三月三日  
 齊藤文二郎 大正五年二月八日  
 渡辺信司 大正一〇年四月二十六日  
 渡辺辰治郎 大正一〇年四月二十三日  
 朝日町一丁目

佐藤実 明治四二年六月二十八日  
 反町豊吉 大正三年四月二十四日  
 大野末子 大正一四年九月二日  
 川野弥寿代 大正一三年九月二〇日  
 小沼新造 明治四二年五月一日  
 大沢治憲 大正一三年一〇月三日  
 石井行美 昭和四年六月二十三日  
 文京町二丁目・天川原

篠田永次郎 大正八年二月三日  
 岩佐直衛 大正一五年二月八日  
 加藤勇作 大正一二年三月六日  
 内山巖 明治四二年八月七日  
 矢部初夫 大正四年五月二十五日  
 寺沢正義 明治四〇年三月三十一日  
 松本紀佑 大正一一年一月二日  
 中村庫三 昭和三年二月二七日  
 和田松太郎 明治四二年一月五日  
 文京町三丁目

齊藤秋次郎  
 低引満言  
 碓井忠夫

新井武雄  
 天笠美枝  
 清水正枝  
 南町一丁目

高橋義孝  
 高橋たか子  
 森田好太郎  
 南町二丁目

田村誠夫 昭和七年二月二十四日  
 林茂隆 昭和一六年八月二〇日  
 小林孝男 昭和九年六月二一日  
 竹内正治 昭和一八年五月八日  
 信沢良徳 明治四二年八月一九日  
 林慎一 昭和三年五月一五日  
 小林富次郎 昭和三年一月一九日  
 小林初治 明治三五年一月二日  
 小林仙十郎 明治三八年六月一日  
 林クラ子 大正七年一月一日  
 中村利三郎 大正七年五月二〇日  
 高橋優介 大正一一年五月七日  
 大矢善一 大正一二年二月二五日  
 南町三丁目

清水きよ  
 南町四丁目  
 前田みつ 明治三九年六月一三日  
 樋口竹次 明治四一年三月二五日



高橋由男	新井吾郎	荒木忠雄	高橋とく	牛島俊夫	小林吉男	高橋清茂	高橋作太郎	高橋益治	小林貞二	高橋澄雄	高橋一郎	六供町	石関徳太郎	萩原昌次	片桐清	小林久美
昭和四年一月二六日	大正八年一月三一日	大正一五年九月二九日	明治三三年三月七日	大正一二年一月二五日	明治四二年二月二三日		大正一三年二月二日		明治三五年一月一日	大正一四年五月三〇日	昭和一五年三月二一日		明治四二年一月一五日	大正三年三月二二日	大正一〇年六月二四日	大正一三年七月二四日



# 本庁管内民俗 目次

序  
経過

話者一覧表

## 本庁管内の調査

一 町の様子	三
二 衣食住	三
三 生産・生業（職人）	四
四 交通交易	五
五 信仰	五
六 石造物	六
七 民俗知識	六
八 芸能・あそび	九
九 人の一生	一〇
十 年中行事	一〇
十一 口頭伝承	一一
十二 民家	一一
十三 資料	一一
虎淵 関係記	一四

## 補遺

おもい出の記	一六
広瀬河岸の想い出	一七
国領町は生きている（抄）	一八
堀川町小史（抄）	一九
北曲輪（抄）	二〇
宗甫分今昔物語（抄）	二一
大正期の前橋を偲んで	二二

一 民具（調査全地域）	三七
二 民家（上川淵・下川淵・旧木瀬・本庁管内）	四二

## 総索引

これまでの調査報告書第一～四集に加え、県の報告書を第五集の扱いとして掲載しています。



# 前橋市全圖



	凡例
	国私号郡市
	鉄飲界界



# 本庁管内の調査





## 一町の様子

住吉町のおいたち 「向町」向町は長町八丁といわれ、相生橋から細ヶ沢先まで長々とした一本道路に沿って伸びている。明治二十二年細ヶ沢新道が出来るまでは、沼田街道と称せられて、即ち国道で前橋の咽喉であった。塩原多助などもここを通り、当時としては相当ににぎわったものだそう、貞享（一六八四年）の頃の前橋の町としての向町は、広瀬川の北へ通ずる町である。これは大渡りに通ずる町であった。広瀬川以南の人々から川向うにあるというので、向町と呼称されるに至ったのだそうであるが、思い合わせると、いかにも簡明卒直の感じの良い町である。もつとも町はずれは狐狸の棲むという田畑や藪の地帯だった。昔、他所から城下町へ入る時、旅人達がこの川で手足等を洗い、わらじのヒモなどをしめ直し、さっぱりとした気分で行入ったとのことで、又、川沿いには沢山の茶屋があり、ここで一息入れたりしたといわれるそうである。

「細ヶ沢町」呼んで古末加佐波（コマカザワ）という。この町名の由来も不明であるが、広瀬川に入る小支流が、この辺にいくつかあったと思われる。古い地図を見ると佐久間川が細ヶ沢となっている。これに因んで小さい川、すなわち細ヶ沢と呼ぶに至ったものであろう、その頃の細ヶ沢通りは、才川口といって今の前橋乾藪取引所（近年古市町へ移転）のあるあたりで、田畑や藪が多く、比刀根橋東北岸辺りは芦が生い茂り、荒涼としていたものだったらしい。渋川街道の開かれた明治二十一年以前は、狐などの棲む橋林寺の山と藪だったのであ

る。当時の渋川本道は岩神稻荷・向町・細ヶ沢を経て堅町へ抜けていたものである。小柳町と鍵の手に隣り合うところに東細ヶ沢町があり、もとはここが本通りであった。馬車の開通した明治二十三年七月当時の細ヶ沢は堅町についての繁華街であったそうである。当時の細ヶ沢町は細ヶ沢新田（西側）と細ヶ沢町（東側）に分かれていたものである。

「琴平町」琴平町の成立はちよつとややこしい。琴平町はもと国領の琴平神社の近辺にあったところから、琴平前といわれ南勢多郡岩神村に属していたが、明治四十三年に町となり、乙岩神と称せられていた。この乙岩神を改称して琴平町となったのが昭和三年の元日である。琴平前に因んでこう名づけたのである。岩神村当時の琴平は、佐久間川沿いの細長いのかな村落であったのであるが、渋川に直通する新道が明治二十一年に開通したあたりを契機にして、自他共に発展する様になった。新道開通前後のこのあたりは、殆んど田畑で、佐久間川べりの篠藪などに「アヒル」が群れ泳いで卵を生み、それを子供達が見つけ出しては食べたそうである。古老の話などによると、琴平町と称するのは国領の村社「琴平宮」の名前を取り上げた、国領より抗議があったそうである。

〈参考資料〉 前橋風土記

前橋新風土記 酒井松男編

田中喜代造氏 記録

「住吉ものがたり」より

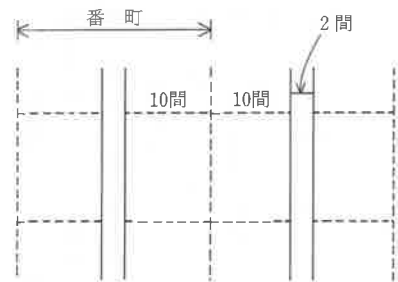
昔の様子 「私は十一歳の時、今の神明幼稚園の所にあつた厩橋高等小学校へ通いました。裏はカシ林で、その先には水車が廻っていた。卒業して当時つきりだつた女学校（上毛共愛女学校）へ行きかけたが、親が許してくれなかつた。比刀根橋は木橋で手すりがついていた。弁天通りはせまくて、西側は昇竜社の長い塀があり、夜など淋しく「おいはぎ」が出た。商店は殆んどが古着屋だつた。小柳町通りの一部にはまだ桑畑があり、屋並のすぐ裏は桑畑ばかりだつた。共進会はよく雨が降り、前橋市内の家々では友人、親せきがおしよせて大騒ぎでした。私の家は大きな米屋だつたので、共進会場内のすし屋や食堂へ米を配達するので、入場無料の馬てい型の鑑札を支給されていました。私は花電車より吾妻温泉の宣伝仕掛花火とサーチライトを始めて見て驚いてしまった。田舎の親せきの人の中には、前橋まで電灯のつくのを見たいからと、わざわざ出掛ける人がいましたよ」小畑コトさん談

田久園のおじいさん（田中喜代造氏 故人）のお調べによると、向町通りの真中に小川があり、生活用水にも使用し、藤井新兵衛さん宅の倉の西側へ曲つて向井理髪店東側を流れ、広瀬川へ落ちていたが、明治十年頃廃止となつた。向町の半分以上は製糸工場で占められており、工女さん相手の商店がたくさんあるのも、屋並表でもお解りと思えます。

百軒町 名前の由来は百軒くらい、あるいは百軒足らずの家があつたので、この名がついたという。

東群馬郡に入つていて、東群馬郡前橋百軒町といつていた。

慶応の時、百六十二軒の足軽屋敷があつたが、明治二十一年に九十戸、四百八十二人になつたのは、出て行く人がいても屋敷地に他から



入つて来なかつたためらしい。

百軒町には一毛町の飛地があつた。領地の関係らしい。

一〜七番町の屋敷には、平均七十坪の屋敷地と四間×三間の建物があつた。四軒に一つの共同井戸がある。

敷地の半分以上はお茶の木が植えてあつた。普請奉行から指定されて屋敷に植えさせられた。他に梅、ドクダミ、雪の下、ザクロなどが植えてある。

町の道路はすべて二間道路で、南北の通りになつてゐる。屋敷地は十間背割りに作られていたので、道路をはさんだ向かい合せて町を作つていた。

北裏は湿けた畑、桑畑で、畑の裏に高岑院が見えるくらいだつた。

慶応の地図を見るともとは赤亀橋がなく、もう少し北の堰の所を渡つていた。

昭和八年に大塚町から庚申塚を持つて来て、その後一号公園に移した。（朝日町一丁目）

町の様子 昭和十年頃の町の様子は次のようだつた。

鯉池が多い。医者が多い。駄菓子屋が多い。職人が多い。

しけ地で少し掘ると水が出た。防空壕を作ると胸まで水につかるくらいで、空襲の時は頭に長靴で水をかけながら火をふせいだ。ほとんど焼けて加藤薬局から南が焼け残つた。野沢さんの家を燃やして南を守つた。

鯉池は士族の殖産のために養鯉として掘つた池である。

（表町一丁目）

一面の桑原で農道(馬道)が通っていた。

清水、宮寺、井上さんの家がワラ屋根で建っていたくらいだった。

(文京町三丁目)

番町 百軒町には一七番町まであったので、番町といった。

百軒町は西百軒、一七番町、東百軒、禪正林からできていた。

(朝日町一丁目)

足軽屋敷 六十坪平均の屋敷があった。組頭は九十坪だった。二軒で共同に使う井戸が屋敷の境にあった。

田二反と畑をつけてもらった。(文京町一丁目)

立川町 五間の通りで真ん中を川が流れていた。(千代田町二丁目)

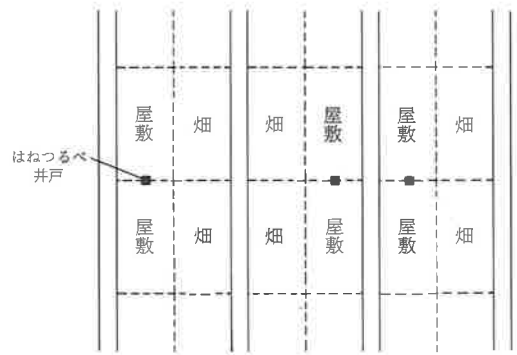
宗甫分 最初は八軒くらいだったらしい。それが新立で入り、十七軒くらいになった。

河原の田は新立ての人でなければ使えなかった。

刑務所の近くに各家のタメ池があり、ふん尿を腐らせてから、くみ出して肥料に使っていた。(南町二丁目)

高田町の昔の様子 大正十二年(震災の年)現在地へ移る。私が小学校四年生の時です。

廻りが桑畑で地主を分ける農道(馬道ともいう)があるばかりで、井上さんの裏の崖道を通らせてもらって学校へ通い、当時一銭五銭



を貰って安藤のおばあさんのところまで毎日のように駄菓子を買に行ったのを覚えている。

家で越した当時は、廻りが全部桑畑で、井上、清水、宮寺の士族の家が三軒あったきりで、ランブを使用した。

私と妹が暗いのを恐がるので、父が東電へ申請してはじめて電気がついた。

お使いに行くのに河(端気川)に橋がなくて、一本橋を渡ってお使い(新町まで)に行った。我が家を開墾する前は、小さな塚が畑に二つ程あったと記憶している。

父があ土地を買うに当たって市役所で調べたところ、耕地整理で道が出来るとの話だったので、土地を買ったといっていたが、間もなく道路が出来た。(年代不明)

その頃矢田町、天川町高台が一緒になって高田町三八三番地になったのではないかと思う。その頃はまだブロック塀などなく、いけ垣を作って北風をよけていた。

戦後農地開放で地主から小作人に土地が移ったため、急激に開けてきた。

井戸は掘ぬぎ。つるべを使用した。

炉は土をこねて、へつついを造り、鉄なべで薪をたいて御飯を炊いた。

下水が無いので溝をつけて穴を掘って洗濯の水、流しの水を流した。夏は蚊を防ぐため蚊屋を吊って寝た。

煉炭火鉢を使ったのは何時頃から分らないが、長火鉢に炭を起こして使ったのを覚えています。

女学生の時は着物を着て袴をはいて行った。二子山へ登ると、桑畑の続くはるか彼方に、我が家と他に二、三軒

の家と赤十字病院の屋根が見えた。

幼い時、つくし、レンゲ、ノビルを採りに行った。

蟬もよく鳴いたし雀も沢山いた。(文京町二丁目)

高田町 高田町は、同じ屋敷町でも六十坪平均だった。百軒町より同じ足軽でも差があつたらしい。(朝日町一丁目)

大正十一年頃はランプを使っていた。その前住んでいた曲輪町には電気が通っていたので、越して来た頃は暗くて恐かった。昭和十年に電気をひいた。

古河線沿いに平家の土族の家が並んでいた。商店はなく、自転車屋があつただけだった。

端氣川に木橋があり、新町(現朝日町)買物に行く時、渡って行った。一本橋と行った。

元川の鯉池から鯉が流されて来てよく釣れた。

ここは天川町高台と行ったのを、矢田町東高田、西高田と一緒に高田町とかわり、文京町三丁目になった。

前代田の農業試験場の農場があり、真ん中に物置きが一つあつた。北を見ても家が二〜三軒あつたくらいだった。

栗の木があり、実を拾っておくと八百屋が買いに来た。

(文京町三丁目)

琴平町のことなどー愛宕神社 住吉町二丁目は一丁目の分家みたいなところである。

琴平町、細ヶ沢町、小柳町

昔は細ヶ沢の新開地みたいところが小柳町だった。

もとは細ヶ沢新町と書いていた。

明治六年に小柳町になった。

広瀬川のふちの広瀬川河畔と細ヶ沢新町が一緒になって小柳町に

なった。

細ヶ沢で愛宕神社を管理していた。

分離してから小柳町でまつるようになった。今も祭典の時には旧細ヶ沢の役員を招待している。両方でおまつりをしている。

愛宕神社の境内に松尾神社があつた。

震災にあつて焼けてしまった。

山になつていた。急な階段があつた。

子供の時、夜、度胸だめしをした。

夜、神社の回りを一まわりして来ることであつた。

石垣があつて、よじ登って遊んだこともあつた。

高さ三メートルくらいの石垣があつた。

愛宕神社のお祭りは、三月二十四日と九月二十四日。

神社の総代は五名いた。今は十名。

細ヶ沢と小柳町で一緒に出た。

総代の人は町政に関与し、役付きだった人の中から選んだ。

細ヶ沢から二人、小柳町から三人選んだ。まとめ人に細ヶ沢の荻野与三さんと小平喜久松さん(今は大胡へ越してない)、小柳町が今井

嘉代治さん、平方貞雄さん、須藤さん。

このうち亡くなったのが、平方さん、須藤さん、小平さん。その代りの人を補充した。荻野さんが自治会長の時十名にした。今から十年程前のことである。この時に住吉町二丁目として選んでいる。神主さんは東野操さん。

秋祭りは十月の前橋まつりの時に一緒にして、九月の祭りはやめにした。この日は神社の中にお灯明をつけてお祭りする程度で、特別の行事はない。

下田さんの工場が焼けた時、その火がこつちへ来て銀杏の葉が枯れ

た。神社は助かった。神社の付近が焼けても神社は助かる。

(住吉町二丁目)

世帯数の変遷 昭和三年に三十五戸あつて、三組に分かれていたものが、少し経つて四十二戸になり、戦後三十年頃には百世帯になった。

(南町四丁目)

家族数 一家族五、六人から七人くらい。子供は三〜四人だった。

(朝日町一丁目)

耕地整理 大正二年〜十四、五年に耕地整理があり、裏通りができ

広桃橋(石橋)もできた。(朝日町一丁目)

帯田 女溝のところ。一坪以上まわりより深かった。北は松竹院の所で、天川二子山古墳の前を通つて風呂川に落ちていた。

(文京町一丁目)

五合たんぼ ダイハツの西は五合たんぼといい、酒五合飲まないと寒くて通れないといった。(文京町一丁目)

鯉池 野口の鯉池は孝顕寺の地所だった。湿けていた池で何もつくれないので、天元が馬場川と井戸から水を入れて鯉池にした。

(朝日町一丁目)

区 区長制度の頃、三十六区前代田の付属で区長代理がいた。昭和八年に四十三区となって独立した。十銭、二十銭という区費を集めた。この区費は昭和三十〜四十年頃同一になった。

昭和十五年の区費の支出の八〇％は戦事費で、出征入営の歓送迎費、戦死者の迎え、国防婦人会等の団体への補助、防空演習の費用、慰問袋などに使った。

皇紀二千六百年記念の祭として、運動会を開催した。松を十本小坂子から大八車で持つて来て記念樹として植えた。

戦後の区費は街灯費が大部分だった。町の中が暗いので街灯をたく

さんつけた。(南町四丁目)

土地の様子 大正十三年に東道上を耕地整理をしたが、それまでは一面の田んぼだった。帯田という田もあった。道は北西向きに通っていた。

建物ほとんどクズ屋根で三十二世帯あり、西原、東原、三軒家に分かれていた。(文京町二丁目・天川原町)

天川原 水田が多く、農作業が大変だったので「バラへ嫁に行くか、裸でバラしようか」といわれた。

養蚕もやったが出小作もした。天川や朝倉の方の桑原でやった。

(文京町二丁目・天川原町)

表町一丁目 南曲輪・石川・堀川・前代田・紅雲・田中・田町の一部が合併してできた。

南曲輪・石川・堀川町は東照宮、前代田町は淡島様、田町は八幡宮の氏子になっている。

お寺は大泉寺、龍海院、寿延寺、永寿寺、橋林寺と分かれていた。若草公園の南の駐車場に観音寺というお寺があった。これは寿延寺の出張所だった。

田町と堀川町の間には川があり、水車があった。この水車は小林さんの所でやっていた。

この水車は田町と堀川町の間にもたがって建っていた。川は三〜四尺の幅だった。

この川に鯉池から水が溢れ、鯉がとび出したことがある。

この辺は地下水が浅くて、三十センチくらい掘ると水が湧いた。奈良さんの前にも水車があつて、田植の前には棹につかまって足で水車を回して田に水を入れた。

川の底は砂地で、とてもきれいだった。



併して住吉町二丁目となりました。

名称変更に当たって歴史を紐解き、細ヶ沢町と小柳町を住吉町一丁目、住吉町二丁目としたのだと思います。

次に町並について申し上げます。私達の町は、南は糸の市場があった本町に通じ、北は赤城山の登山口として栄えた町です。今は八間道路も立派な道路ですが、私の子供の頃は高柳医院の所で行きどまりでした。町並は余り変わりませんが、店主、職業はかなり変わったようです。参考までに、大正末期までの商店名を調べてみました。完全なものではありませんが、ご参考までに。

**区長** 区長が伍長を集めるのにホラ貝を吹いた。区長宅で小使の人が吹いた。大正始めの頃までやった。小使いの人は伍長への連絡もしていた。

今も初詣の時吹いている。

大雪が降った時は太鼓をたたいた。(六供町)

**寄居村** まわりの人はこのことを寄居といっていた。

私がここに十六歳で来た時には寄居村といっていた。まわりは全部田圃だった。道の端に家がたっていた。(日吉町二丁目)

**町の役員** 区長がいてその下に伍長がいた。

戦争中に隣保班になった。今では自治会長―組長―班長という形。

(日吉町二丁目)

**土地のこと** この土地は壁土にいいといった。

奈良製糸をつくる時、掘った。その時土を抜いた。そのあとに石炭

ガラをおいた。(日吉町二丁目)

小柳町で古い家は、青木さんとか須藤さんの家。

小柳町はあらじんしょうの家が多い。

細ヶ沢では一丁目の家が古い。ここにはお大尽がいっぱいいた。

藤井新吾さん、中野さん、井口さんなど。(日吉町二丁目)

町に入る 引越や結婚などで町に入る時は、手拭いを持って挨拶をして回った。(文京町三丁目)

**地名** シヤガミ……バクチをした所という。キマゲド……下水処理在の南の所という。(六供町)

**番地** 戸番・地番とある。戸番は八幡宮から番地をつけたものと、線路上から番地をつけたものの両方があり、また地番もあり一層ややくしくなっている。(文京二丁目・天川原町)

六供には三つの地番が共存している。戸番、古い地番、耕地整理後の地番。(六供町)

**共有林** 赤城山に天川原の共有林があった。大きな柳の木があった。

(文京町二丁目・天川原町)

六供の共有林が利根川の河原にあり、アカシアの木が植えていた。この木は切って分けてしまった。(六供町)

**松林** 六供から上福島へかけて西光寺の松林があった。そこへは松葉拾いに行った。

土が固くて粘り気があるので、松林になっていた。昼間でもうす暗くて、一人で行くのも恐いようだった。(六供町)

**消防団** 市内に六分団があり、(1)市役所、(2)向町、(3)交水社、(4)駅前、(5)日赤、(6)城南学校の所にポンプが置いてあった。

火事はまた榎町かというくらいあった。よくホースが干してあった。

(表町一丁目)

第六分団が元の城南小の所にあり、青年会がやっていた。

昭和十五年、前橋中学校の講堂が焼けて、手押しポンプが出て活躍した。

消防組と防護団が一緒になり警防団になった。

青年会は二十歳〜四十歳くらいの人が二十四人ほどいた。

(南町四丁目)

夜番 子供から年寄りまで出て夜番をして、火の用心と言って回った。(文京町三丁目)

火事 火事が多いので青年団が火事場の警備に出た。麻屋の角に警備があつて、人を誘導した。

家財道具は野次馬が運び出してくれた。建物は大家のものであった。火事にあつた家の前に保険会社が「金〇〇百円也 〇〇火災保険会社」と書いた看板を立てた。

保険は一カ月五十銭で二年六円払うと火事の時三円戻る割合だった。(千代田町三丁目)

立川町同志会 四十歳くらいの中堅の人が集まって作った会。軍人部会、青年会、警防団などがまとまって同志会になった。会員は八十数名から百四、五十名にまで増えた。

貯金会や年二回の旅行をした。  
市制六十周年の時、碑を建てた。昭和二十七年までであった。

(千代田町二丁目)

青年会 四十歳までの青年が入っていた。会長、副会長、会計、幹事という役があつた。

八月に第二公園といつた敷島公園で子供を集めた催物をやつた。福引きや焼きまんじゅうなどをやって、子供たちを楽しませた。

会員は百五十人くらいいて、会費を集めた他、貯金会で収入を得た。貯金会は地元の人に協力してもらい、お金を貯金してもらい、暮に払い出すと会の方に手数料が入った。(千代田町二丁目)

松竹院 バラの寺といい天川原分だった。

この寺の前に堀田があり、土ごと連雀町にやつたという。

(文京町二丁目・天川原町)

そうてん場 日通の倉庫の前に、そうてん場があり、石炭をたいた。その石炭ガラで道を舗装した。(文京町二丁目・天川原町)

精神病棟 観音さまの裏にあつた。中央小の西から北へ行き風呂川を渡つた所。

宗甫分へ移り戦時中に江木に移った。(表町一丁目)

米屋の話 小林の米屋は戸を一枚だけいつもすすばけたままにしておいた。

お金がなくて米を一合、二合と買いに来る人がいるから、そういう人が気がねなく入れるように、そのままにしておくといわれた。

(表町一丁目)

飲み屋 立川町の南の方や、呑竜マーケットへ行つた。

立川町の事務所がマーケットの中にあり、会議のあと飲みに行くのに寄りやすかつた。(千代田町二丁目)

榎町と紺屋町にあつた。(表町一丁目)

屋形舟 広瀬川に屋形舟を料亭の松志満が浮かべて、宴会の場所にしてた。(千代田町三丁目)

弁天湯 昭和五年にできた風呂屋で、四万円できたという。建てたのは退役の軍人だったが、うまくいかず、警察官だった細井さんが買った。一万円だったという。細井さんは満州で一財産を作つた人。

その後地元の人五人で買い取り、人に貸して代金を返済した。今は営業していない。(千代田町)

風呂屋 前代田の白山湯があり、ずいぶんあとまでやってた。

(表町一丁目)

呑竜マーケット 大蓮寺の墓地があつたところで、任職の発案で闇市を作つたのがマーケットになった。



一〜二年で飲み屋にかわった。入り口の地蔵も中田屋の所にあつた。一度火事になったことがあり、建て替えて今のようになった。

土地は寺のもので、建物は店のものになっている。(千代田町三丁目) ポンチ 長崎屋の前の床屋の上に本店があつた洋食屋で、カレーが有名だつた。稲垣さんがやっていた。

ライスカレーにビールを飲んで映画を見て、五十銭で二銭のおつりだつた。(千代田町三丁目)

草分け 岩佐、篠田、内山、太田。

岩佐は越後から来た。他は信州から来た。天川原はまだ篠の生えた原で、殿様から開墾すれば土地をやるといわれた。何年間かは年貢を免ぜられたという。

松竹院の所から川が流れていた。(文京町一丁目)

出身地 天川原に住みついた人の出身地としては、更植・松代といった長野県の人と、越後出身の人が多い。(文京町二丁目・天川原町)

屋代さん 松平様の御殿医をしていた医者で、横浜銀行の所に病舎があつた。

地所が広く堀川町の公民館が建つた。(表町一丁目)

医者の新井さん 人力車をおかかえて持っていた。往診に使っていたが、昭和十四〜五年頃自家用車になった。

応召して海軍軍医少佐になった。葬式の時、天皇陛下から勅使が来た。(表町一丁目)

医者 県庁のそばの松山医院、堀川町の神田医院にかかつた。

前代田に深井さんというお産婆さんがいた。町の人はほとんどお世話になつていた。(南町四丁目)

信沢さん 天明の大水で家が流された。北に移つて瓦屋根にしたので瓦屋という屋号になった。

もとは実政の関所の隣で宿屋、船頭をしていた。江戸の大相撲が解散をして通る時、泊つたお札に小判を一枚くれたという話がある。

お祭りのこと 前橋まつりの時は前は町内として参加することはなかつた。(南町二丁目)

今から十二、三年ほど前から、町内で納涼祭をやっている。子供からお年寄りまで全部参加している。

だるま供養もする。どんどん焼きは一月の初市前後の日曜日にしてゐる。これは十四、五年前から。

子供がリヤカーを引っぱつて(大人がついて)古だるま、おかざり、お札などを集めて来る。それを神社の境内に集めて神主さんがおがんでから、お清めをして燃している。

どんどん焼きと呼んでいる。消防車は前から呼んでおく。

(住吉町二丁目)

堤防 天明五年から三年かけて宗甫分から新堀まで利根川に堤防を作つた。今の群銀の研修所の所から下が溢れたので工事をした。この工事は浅間の軽石を使い、六尺くらいの堤だつた。(六供町)

勢多会館 勢多郡の役所があつた。今は建物はなく駐車場になっている。

南の細い川が勢多郡と群馬郡の境になつてゐた。勢多郡前橋町もあつた。

空地にデパートが来る話もあつたが、反対が多くてつぶれてしまつた。(千代田町三丁目)

家の屋根 トタンか石置きの板葺きだつた。(表町一丁目)

南町二丁目

・水神社。昔は利根川の中に社殿があつた。天明の時に流され、町の

一番北に直した。おみこしは利根川で洗った。

・刑務所は明治十八年より工事をして二十一年に仕上がる。この金で神社を直した。深谷よりレンガが来た。桜のマークが入っている。

農家が元日を除き糞尿を取りに行った。負担金を出したが、宗甫分はよいと言われた。

### 日吉町 鈴木直なまさんの話

・鈴木家は広瀬河岸にあり「河岸の鈴木」といった。伊勢崎より船で荷物 came。

・交水社は正門を入る所に大きな水車があった。名前のいわれは「水魚の交わりをするように」ということからきている。

建物糸を調べるのに北からの明かりを入れる仕組みになっていた。

馬場川より北は水が良いので製糸工場が多かった。

・暮になると出入りの職人さんに半天を配った。暮になるとみんなして織った。もらった職人さんは三〜四枚も着て正月に来る。大店に何軒も入っている印になる。来て御祝儀をいただく。

・マルコー（交水社）の女工さんは、越後で募集した。いい人を集めるのは大変であった。何百人単位で連れて来た。

・お盆は今の日産のあたりにやぐらを組んだ。国ごとにやぐらを組み、毎日盆踊りをした。二晩眠られないほどであった。

・花見は行列を作って行った。近県より店が出て、売りあげも多かった。

・マルコーの煙突は、伊勢崎から荷車を引いて来る人の目印になった。郵便局ができる時に壊した。

・交水社の女工さんになるのはあこがれであった。現金収入が多かった。入れずに洪女に入った人があった。

・カキ舟。戦前よりあり松島が始めた。のち金光が代わってするようになった。

になった。

戦後もはやっていた。川魚料理を出した。屋形舟形で、川の三分の二の幅を占め、両側にいくつもの小部屋があった。

舟の高さは道の高さに同じで、板をわたして出入りした。東京より客が来ると連れて行った。底が下についているくらいで、ほとんど揺れなかった。「カキ舟」で通用した。

・暮のモチつきは、頭が土間でしてくれた。暗いうちよりはじめ、アンピン、カラミモチを作った。

・正月には猫足膳を使った。輪島塗りで毎年売りに来た。洗ってふいてしまうのが大変であった。部屋の間をとばらって広くする位の客が来た。

・御祝儀は自分の家でした。嫁は振り袖を着ると引き物は倍にしたので、普通の家は留袖で行なった。大正中ばに自動車で回った。それまでは人力車。

・お盆は盆の棚を作った。ナス、キュウリにオガラ足。シツポはトウモロコシ。

イモの葉にナスをきざみみせた。

萩二〜三本を紙で巻き、そばにドンブリの水をおいた。ハギでナスに水を少しかけた。

・正月はお供えの三宝の上に、ウラジロ、干し柿、松の板、カタズミをしぼったもの、ダイダイをのせておいた。

正月の酒は小笠原流の飾りのついたいものからついで。

稲荷、物置、井戸にお供えをした。

正月の輪飾りを門、玄関、倉、井戸、小屋にかけた。

三河町二丁目

・公民館のところの神社（稲荷社）は昔、英数学館（大利根学園）の

ところにあった。区画整理で道幅を広げた時に、レールを敷きトロッコで引いた。二十四〜五年頃。

・産泰様には子供の安産でおまいりに行った。

貴船様は戦争の召集を受けた時に行った。朝日町一丁目の高岑院には厄除けで行った。三河町一丁目の正幸寺（呑竜様）は毎月八日がお祭りで、売り店が二十〜三十軒出て賑やかだった。

養行寺では四月八日に甘茶を出した。一銭出してかけてもらった。

・七つまで坊主頭にした。七つ坊主、五つ坊主もあった。丈夫になるように願ってやった。

七つになってお椀をかぶせてはじめて髪をたてた。（おグシをたてる）

・製糸工場が多くあった。糸屋さんは山本（二軒）、小川、西屋、島村、長谷川、黒川、落合。燃り屋さん岡田、後藤。

家内工業が多くあった。

・川（広瀬川）には舟が上がった話がある。米の間屋への舟があったらしい。けっこう深かった。

・橋のこちらには水車が三〜四あり、穀屋二〜三軒が共同で使っていた。

・昔の地図には長島、黒川など三軒しかのっていない。川越から来て土地をもらった。

・中川町は表通りのみの記憶しかない。JR沿いの道はアゼ道で、田、桑畑があり、前高（現生涯学習センター）まで家はなかった。川つぶち桑畑で篠が生えていた。

・百軒町の付属に百軒大塚町があった。塚があったが区画整理で壊わした。

・十六本橋の辺ではよく泳いだ。もとは板の橋で落ちた人もいた。

・昔の葬式で近所の人は柴橋でお別れをした。大八車で引いた。

・荒砥、桂萱はまだ勢多郡の頃は遠くに行った気がした。

・片貝の虚空蔵様の六十年に一度の祭りが小学校一、二年の頃にあった。近所の田を借りて家が一軒入るような竜虎の人形を作った。見せ物にして人を呼んだ。寄付させられて食事券をくれた。二合の酒をくれた。正月十三日が祭で、村の人はウナギ、キュウリは食べない。ウナギを買って池に放した。寅年の人の守り本尊なので、寅年の人はよく行った。

・葉は富山から行商が来た。一、十五日はサカキを売りに来るおばあさんがいた。

赤城山よりキノコを売りに来る人があった。

・造り酒屋があり、正月二日に買いぞめがあつて行った。

・マルイチ神楽。正月に一軒ごとに回った。一円から五円くらいの金で芸が違った。

・青年会は戦争前であった。十八歳で入った。会長は五人で交代でやり、年変わりで交代。総会をするくらい。商人の使用人が入っていた。その上の人は荘年会に入った。

・昔町には消防団があった。昭和十二〜三年に警防団になり、のち防空・消防の二部になった。

・文治稲荷。昔町内に神社がない時に文治という人が町に作る金を置いていなくなったといわれる。文治の名より学問に機能があるといわれ、学生のお詣りが増えた。

・戦後、駅に降りたら自分の家がわからないほど焼けていた。道もわからぬほど。三河町は二丁目ギリギリまで焼けた。

・夜は縁台を出して碁、将棋をした。通行人が見て仲間に入ってくる。

・竹の間屋さんがあり、コマイカキ用やカゴ屋さん用などいろいろの竹が用意してあった。

#### 千代田町二丁目 横山昇氏の話

・明治十六年より前橋にいる。

・祖父慶一郎は木曾の寝ざめの床の出身で、横浜開港の時、横浜に四〇五年行っていた。その後木曾にもどり、娘と上州に来た。明治の四〇五年前。本家は十六代目でソバ屋。

・荒牧の関口氏の家に落ち着いて百姓を四〇五年していた。関口氏が伊勢詣りの時に横山家に泊ったのが縁になったらしい。

・祖父は彫刻をしていたが、横浜で覚えたらしい。のちソバ屋をしていた。

・明治十六年にソバ屋を止めて計量器の商売をはじめた。住吉屋の火事の後、今の店の地を店をかまえた。同時にお茶屋「寝ざめの園」をしていた。はかりの販売、製造、修理をした。戦時中の企業整理で、関東では東京二軒、千葉一軒、県内には修理業者として一軒残った。

・戦後また販売を始めた。今は計測器が多い。

・戦前にボリースカウトの運動をしていた。これは戦争に入り日本少年団にかわりつぶされてしまった。昭和九年の大演習では奉仕団体として出た。台をかつぐ役目がボリースカウトだった。戦後進駐軍が来て再開を命ぜられたが、食うや食わずの状態で断わった。

・空襲で残ったのは金垣洋服店の一画で、市役所の近くにいた憲兵隊が残した。毎日防空演習をしたが、実際には何の役にも立たなかった。防空壕に入ったまま出られなかった人が多い。

・ここは古くは桑町と書いて、古い人はクワノキマチと呼んだ。桑の市が立ったというのは年寄りの話にあった。全国にもない名で群馬県桑町で手紙が届いた。

・海軍、陸軍の指定工場であり召集はなかった。中島飛行機の指定工場が太田にもずいぶん行った。はかりの検定では県内を回った。油を売っている家は大きい家が多かった。

・戦後良いと思うのは、言論の自由である。今の子供は勉強が大変である。

・十一月十五日に稲荷祭りを行っている。並びの四軒の裏が続いていて、横山家の井戸をみんな使っていたので共同で祭りをした。

・戸板を一枚出して煮しめを出した。今はオデン。子供にはオコワをくれた。七十〇八十人来たこともある。

・「オイナリさんのおまつりで、あとを見るなスコンコン」と言ってみる。イカやゴマメも出し、おわりにミカンを出す。今も山内のハンコ屋と二軒でしている。

・稲荷祭りはマンジュウ屋さんもしていた。家のまつりをすませてから行った。マンジュウをくれた、戦後はしなかった。

・水道ができて様子が変わったが、昔は道の南は水がなく、北に水を貫いて来た。そこで稲荷様にお供えを持って来る。オンベロをあげ、オコワとイナリをあげた。

・片原通りは手職の人が多い。半商半工。富岡のタタミ屋、折り屋（料理屋用に十〇十二時まで仕事をした）、山内のハンコ屋、永井の印刷屋、おけ屋（朝四時より仕事）があった。

・昔は組内が親戚みたいになつきあいである。近所はしきたりが一緒に助かる。

・桑町のおはやしは幸塚町の人があると決まっていた。みんな大人がやった。

・花柳界。一円五十銭で半玉さんを一人あげ、銚子一本ついた。少し上の人はみんな長唄、小唄をした。都都逸もした。



横山衡器店（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



横山衡器店（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



県内各地の測量をした時の道具（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



大正7～8年頃の葬儀の様子（朝日町一丁目）（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



結婚式（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



結婚式の引出物（入間）（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



結婚式の引出物（入間）  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



桑町通り（大正末）（千代田町  
二丁目 横山昇氏蔵）



桑町共有整理祝賀会（昭和6年2月24日・  
臨江閣）（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



深沢利重夫妻（千代田町  
二丁目 横山昇氏蔵）



前橋グランドフェア（昭和29年）  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



桃井小奉安殿（昭和17～18年頃）  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



頃に鮭の塩出しをしていた。川に入れて塩抜きをした。大正〓戦前の頃のことである。

・関東大震災で前橋より家具が行き有名になった。桐ダンス作りが盛んになった。

#### 岩神町二丁目

・前橋製糸場は明治三年に細ヶ沢にできた。三カ月で岩神に移った。廃藩置県で民間に売りに出した。

この岩神製糸場より全国に人が散っている。ここで教育をした。昭憲皇太后さまが伊香保の帰りに寄り、松を三本植えた。近年まで一本残っていた。

工場の水は風呂川を使った。幅一ひくらの分れた水を使った。

・この工場には松平氏が力を入れた。工場は約二千坪あり、工女があちこちから来ていた。女工と言わず工女と言ったのは専門職であったことによる。

・大渡製糸場は工女学校をはじめている。生花やお茶を教えた。

・風呂川の回り一画は工場であった。製糸場では国外製糸（外国用）で良いものを作った。そこで燃り屋ができた。ここは燃り屋さんの町であった。全て水力を使った。風呂場の水車をかけて動かした。冬は凍ったのに湯をかけて溶かしたものである。

・製糸場では良い繭を使うので、玉マイ（繭）とビションマイ（繭）を座操りで使った。家のオヤジが農家より直接買って来たものだった。できる糸は玉糸で変化の激しいもので、織物にすると変化のあるものができた。岩神は盛んであった。

・前橋藩の連中で座操りをした人が多く出た。士族でも多くやっていった。ここは昔の屋敷町だが生活には苦労した。一の小路から五の小路まであり、武士の家が並んでいた。

・観民亭は神社の東の辺であったらしい。礎石が二個あったという。昔は桑畑であった。旧の戸籍に勢多郡岩神村観民四の小路とあった。

・前工のところに日本人造織維株式会社（ニチジン）があった。赤羽工兵隊の跡地にできたもの。第一工場で人絹を作った。

上州は乾燥して糸が切れやすいため撤退した。

・明治三十三年頃から昭和初期まで、水戸の工兵隊や赤羽の工兵隊が夏になると来て演習をしていた。後に兵舎を作って駐屯するようになった。市も駐屯するように力を入れた。「バラック」と呼んだところを作った。

このバラックは敷島小が焼けた時に一時学校にした。

・水道局のそばに日人機械があった。人造絹糸より分かれたもので、機械を作っていた。工員二百五十人くらいで日立の下請けをしていた。軍需施設で電波探知機を作っていた。

・才川沿いには工場があり、製糸をしていた。駅の西の淡島様には月に何日か縁日があり、おまじりの人がゾロゾロと歩いて行った。昔のガスタックの下にある。

・工女さんは年決めの年季奉公であった。年が明けるとお礼奉公で二〓三カ月働いた。終了すると金をもらい帰る。盆、暮の帰省は会社持ち。一月十六日はヤブ入りで親のところに帰った。日曜はなく、盆か正月しか休みはなかった。お花見もあった。

工女になるのは口ペラシでもあった。福島・新潟の人が多かった。年季に入る子には着物（お仕着せ）を与えた。帰る時にはこづかい、みやげをつけた。義理人情があった。

子供扱いで家族の一員として扱っていた。年が明けると、裁縫所に通わせてやった。それがお礼奉公になり、洋服もできるようになり、いいところに嫁に行った人もいる。



工場には毎日下肥を馬で取りに来ていた。

終戦直後までであった。年に何回か野菜を持って来た。最後には金を払った。工場は人が多く集める効率が良かった。

床屋さんも出張して来てくれた。

・観民山があった。上毛会館から神社まで山になっておりカブト虫がいた。

・ドンド焼を一月十四日にした。一戸いくらでお金を出してもらった。一戸十銭は多いほうだった。燃えさしでまたお金をもらった。上級生に言われてやった。

・三丁目は度胸だめしをした。できるほどさみしい所であった。水道局のところに祠があり、帽子を置いて次の人がとって来た。

・電気は共進会の年(明治十三年)に入った。それまではランプで、石油を買った。毎日夕方のランプのホヤ掃除は子供の仕事であった。

・大渡橋は何回か(三回)壊れた。一回は吊り橋になった。昭和二十二年の洪水ではもう少しで岩神ものまれるところだった。清王寺は腰まで水で、敷島の池のボートを使った。

大渡橋は一時清里へ鉄道の話があり丈夫な橋となった。

・今のドームのところは、アカシヤの林が大正末期まであり、映画のロケがあった。

・昭和の初め頃、草競馬があった。商品にタンスや鏡台があった。場所は南橋分の中川原で、真ん中に杉の木があった。旗が立つとはじまる。農家の駄馬が出た。

戦後一回敷島公園で公営競馬があった。昭和二十五、六年頃、券は一円で買った。柵があった。今の松がないところは馬場である。

・岩神、才川、清王寺は祇園になると前橋町より抜け、終わるとまた入った。(金がなかったのだ)

・万代橋は敷島川原と呼んでいた前工のところにあった。

・岩神には武家屋敷があった。昭和十年の岩神の大火で何軒も焼けた。一ブロックに七軒ほどで、一軒分は百六十五坪、間口は十間。一軒は切妻の二十八坪になっている。

家の廊下はたての板葺きで、すべらないようになっていた。城の廊下も同じである。

谷氏の家の場合、宝生流の能をしたので奥の部屋は板の間であった。上にタタミをしいた。

雨戸はたてでおろしたもの。あげて棒をかって明かり取りにした。居間にはコタツと火鉢があった。八畳の間には刀タンスとタンスがあった。

家は川越から来る時には建っていたもの。家々の回りは竹ヤブであった。

間口十間、奥行十五間五尺の敷地で、四尺幅の道(小路)があった。門は杉の丸太二本で、杉の高さも六尺の生け坪があった。この杉はカイブシ(蚊取り線香)にした。

・大正十三、昭和七年の北部耕地整理で、四中の道ができた。昭和九年に舗装をした

・大正九、十二年に飛石稻荷の下を流れていた広瀬川をまっすぐになおした。

・観民のうち一・二の小路を東観民、三・五の小路を西観民と言った。稲荷は明治のころは「お稲荷」とのみ言っている。途中で観民稻荷となつたらしい。元禄三年に作られた観民亭より来ている。

酒井の時代には観民小路があった。

・万代橋が安政五年にできた時、桜の木を三百本植えて並木にした。昔一石一字塔があった。今は養行寺にある。南は天川大島にもある。

東と西は不明。

・吾妻よりイカダが来て、前工のグラウンドの辺で船頭が替わって江戸に行った。大正の初め頃までで、水がなくなつた。イカダは五つくらい連なつたもので、船頭は前・中・後の三人いた。

船頭の替わる所には出格子の女郎屋があり、「昼のヒナカに白いキツネが出る」と言われた。

・大正の頃まで、材木のうち陸上げをして駅に行き、貨車で行くものもあつた。

野菜、果物もイカダで来た。

駒寄の「関の渡し」まで、利根川の上流に渡しはなかった。

前橋市旧町村めぐりのうた やがて忘れられて行くであろう前橋の旧町名をなつかしんでこの歌をつくる。一番は自分が若い頃、人から聞いたもの、三番以下自作。旧町名四十五か町をうたう。「松の木小唄」「ストトン節」その他の曲で歌えます。

昭和四十八年一月二十五日 平和町二丁目（旧三七区岩神町）の住

人（故人）加東杜世志

一、わたしやあなたに堀川町

毎晩かよつて曲輪町

三度の食事も桑町で

逢えば話が細ケ沢

二、あなたに来るか向町

暗い夜道に立川町

待てばあなたが北曲輪

今宵ほんとに紅雲町（幸運の意）

三、六供でないことくどくどと

いえば才川（妻が）怒り出し

何を国領とどやされて

わたしや何にも岩神町

四、わたしやワイフに天川町

仕事は新町熱心で

家中中川（仲が）芳男で

家はますます栄町

五、土堤の小柳町（蝶）とまう

神明（新芽）も萌えて春が来た

こころ諏訪諏訪散步すりや

田中一面れんげ草

六、萩の花咲く萩小路

昔なつかし琴平町

さむらい屋敷の百軒町

きつねこんこん紺屋町

七、ダイヤの指輪は高田町

見るだけみんな見いくるわ（南曲輪）

恋し東（吾妻）に買ってやろか

お金もないのに一毛ません

八、榎の下で逢つた人

あなた本町忘れぬ

恋は悲しい片貝町

敷島河原でひとり泣く

九、県庁の南の石川町

国道はさんだ豎町を

すぎて走れば下小出

伊香保へ向う二人づれ

十、横山すぎれば前代田

田町のお寺は清王寺

それは出まかせこの辺で

市内めぐりもひと休み

十一、天川原の萱の野に

相生の松生い茂り

市の坪には白さぎの

舞いて栄さか行く世をたたえ

十二、大塚町に宗甫分

いわれゆかしいそのかみの

旧前橋の町々の

名はいつまでもなつかしや(以上)

## 明治二十一年修正

本町申合町則

東群馬郡前橋本町申合町則

### 第一章 総 則

第一条 官令ノ趣キ遵奉スヘキハ勿論單ニ当町互民ノ便益ヲ謀リ此申

合町則ヲ履行シ本地將來ノ榮昌ヲ企画スルモノトス

第二条 此申合町則ハ一町内ニ限り履行スル者ニシテ他ニ關係ヲ及ス

一ナク故ニ事ノ布告布達ニ抵触スルトキハ速ニ廃止ス

第三条 此町則ハ町内ニ居住スル者ニ限り本籍寄留ノ別ナク確守スヘ

キモノトス

### 第二章 規 約

第四条 凡ソ町内ニ居住セント欲スル者亦移転セント欲スル者ハ必ラ

ス頭取及其組長エ届ケ出ツヘシ

但借家借地人ハ其家主地主同道届出ヘシ

第五条 町費トシテ徴集スルノ費用ハ各自ニ於テ負担スルノ責アルモ

ノトス

第六条 臨時費及ヒ町費徴集ノ為メ予テ役員ニ委託シ毎戸等級ヲ定メ

シムヘシ

但シ此等級ニ堪ヘサルカ亦ハ不当ト認ムル時ハ三名以上ノ証人ヲ立

テ其事由ヲ具申シ変更ヲ得ルヲアルヘシ

第七条 火防及ヒ夜警等ノ諸規則ハ総シテ役員ノ制定スル処ニ任ス

但シ規則中不都合ト認ムル者ハ随意ニ建議スルヲ得

第八条 共有ニ対スル一切ノ事務ハ総テ役員ニ委託スヘシ

### 第三章 役 員

第九条 町内ノ庶務取扱ヒノ為メ頭取一名副頭取二名組長十二名組次

長十二名ヲ置ク

第十条 役員ハ町内一般ノ投票ヲ以テ之レヲ公選スヘシ

第十一条 役員ノ年期ハ滿一ケ年トシ毎年一月之レヲ改選ス然レモ衆

望ニヨリ再選スルハ妨ケナシ

第十二条 役員中其職ニ堪エサル者アリト認ムル時八十名以上ノ意見

ニヨリ臨時黜ちゆうてい陟しやうスルヲアルヘシ

第十三条 役員中退職死亡移転等ニテ自然欠員ヲ生スル時ハ第十条ノ

手續ニヨリ之レヲ補充スルモノトス

第十四条 役員ハ年期中任ヲ他ニ讓ルヲ許サス然レモ不心得ノ情実有

テ勤役ニ堪サル者ハ其事実ヲ具申シ集議ノ決裁ヲ俟ツヘシ

第十五条 左ノ五項ニ抵触スル者ハ役員タルヲ許サス

一 町内ニ本籍ナキ者

二 二十歳未滿ノ者

三 白痴及ヒ瘋癲ノ者

四 身代限りノ処分ヲ受ケ未タ其義務ヲ終ヘサル者

五 軽罪及ヒ重罪ノ刑ニ処セラレタル者

第十六条 役員ハ義務ヲ以テ任スル者故総テ給料ヲ要セス

#### 第四章 職 務

第十七条 頭取ノ職掌ハ左ノ如シ

第一項 町内一般ノ事ヲ管理シ諸役員ヲ監督スル事

第二項 公布及ヒ廻達等ヲ司ル者

第三項 居住者移転者等アル時ハ其身元取調不都合ナキト認ムル上

ハ其届ケ書ニ認印ヲ捺シ役場エ届ケシムル事

第四項 共有品ノ貸借及ヒ会計ノ事

第五項 夜警及ヒ火防等管理ノ事

附経費並ニ実費支払決算報告及ヒ詳細明簿調製ノ件

第六項 町費報告及ヒ詳細簿調製ノ事

第七項 祭典ノ事

第八項 町内ノ者ヨリ事務ノ顛末会計ノ要点ヲ尋ヌルモノアラハ速

ニ其帳簿ヲ展見セシメ若シ不了解ノ廉アル時ハ具サニ之レカ説明

ヲナスヘキ事

第十八条 創頭取ハ頭取ヲ補助シ一切ノ事皆之レカ協議ニ与カルヘシ

頭取疾病事故アルトキハ其代理ヲナスヘキモノトス

第十九条 組長ハ正副頭取ヲ監査シ直接ニ組内一切ノ事務ヲ処弁シ組

内居住移転等ノ届アル時ハ之レニ認印ヲ押捺シ頭取ニ報告スヘシ

第二十条 組次長ハ正副頭取ノ指揮ヲ受ケ夜警消防祭典等総テ町務ニ

関スル一切ノ事ヲ処弁ス

#### 第五章 会 議

第二十一条 当会ハ町内ノ利害得失ニ関スル一切ノ事ヲ議定スルモノ

トス  
第二十二条 会議ハ通常会臨時会ノ二種トス

第二十三条 通常会ハ毎年一月開会シ臨時会ハ会頭ノ意見若クハ會議

員三名以上ノ需メアル時ハ之ヲ開クモノトス

第二十四条 會議員ハ正副頭取組長組次長ノ二十七名ヲ以テシ正副會

頭ハ會議員中ヨリ各一名ヲ互選スルモノトス其任期ハ一ケ年タルヘ

シ

第二十五条 會議ノ日数ハ通常会五日以内臨時会三日以内トス

但シ時宜ニヨリ日数ヲ伸縮スルハ會頭ノ意見ニ任ス

第二十六条 會議ハ會議員三分ノ二以上出席スルニアラサレバ會議ヲ

開クヲ得ス

第二十七条 議事ハ過半数ヲ以テ之レヲ決ス若シ相半スル時ハ會頭之

レヲ裁決ス

第二十八条 通常会ハ左ノ各項ヲ議定スルモノトス

一項 町内ニ関スル利害得失百般ノ件

二項 町則更正加除ノ件

三項 町費予算及毎戸等級変更附賦課徴集方法ノ件

四項 共有品貸与興廃並之レヨリ生スル所得金処分ノ件

五項 正副頭取及勉勵者へ慰勞金贈与ノ件

第二十九条 通常会ハ前年度町務ノ顛末其報告ニ対シ経費決算実費等

ヲ調査スルモノトス

第三十条 臨時会ハ特ニ會議ヲ要スル事件ニ限り其他ノ事ヲ議スルヲ

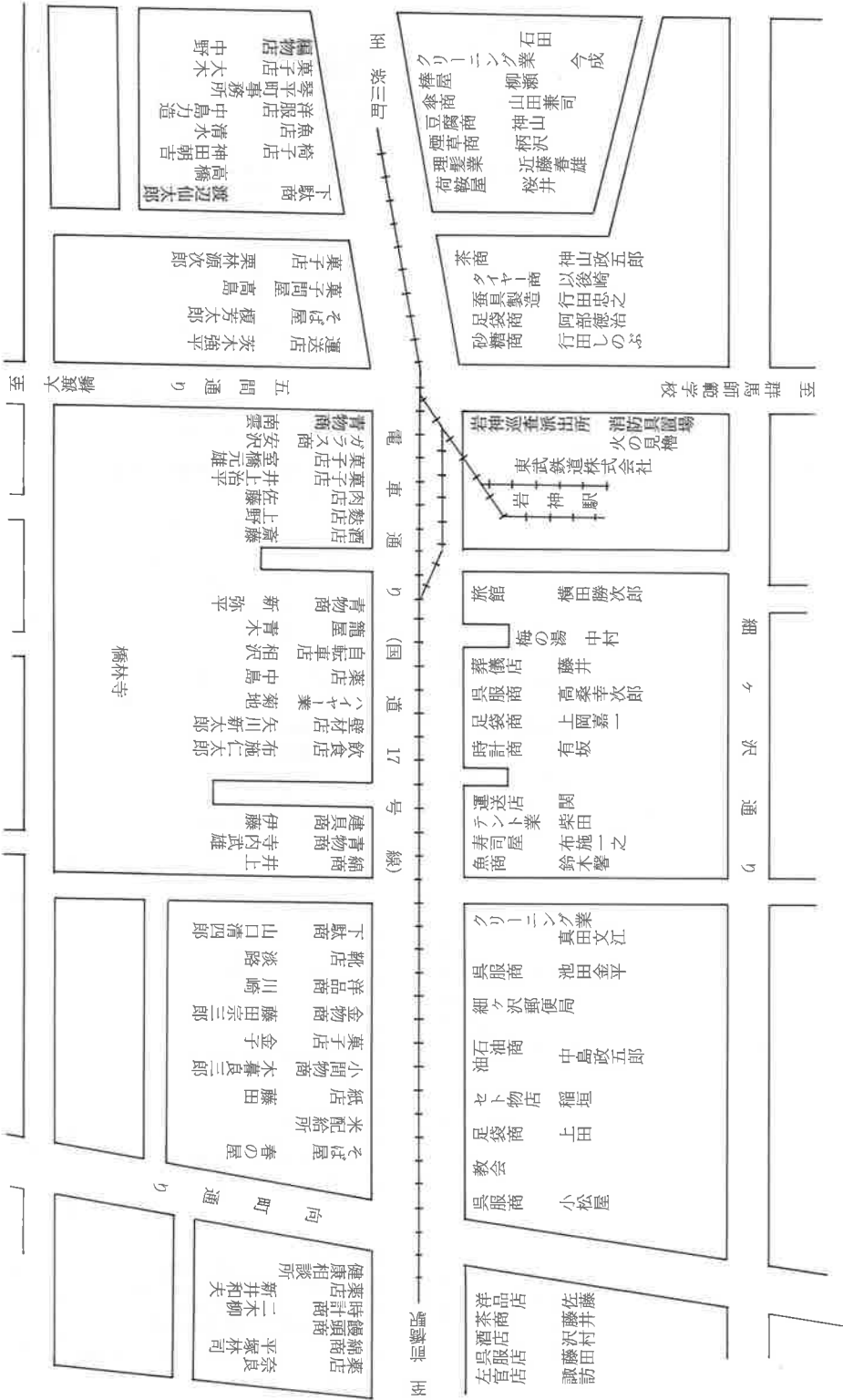
得ス

第三十一条 開会期日ニ不參スルモノハ決議ニ対シ異議ヲ容ル、ヲ許

サス

第三十二条 当町内ニ於テ馬車營業ヲナサントスル者ハ町内衛生委員

ノ承認ヲ得ルニ非ラレハ其業ヲナサ、ルモノトス





昭和30年(明)の風土記増補地名帳

岩 神 村

酒類商 中沢藤次郎  
 量販商 細山井五郎  
 穀類商 横山初太郎  
 金銀商 清水ひで太郎  
 煙草商 伊藤庄内  
 調理師 近藤次郎  
 靴業商 松井八三郎  
 屋敷

座繰製造 大日向六郎  
 茶商 神山竹次郎  
 陶器商 福井昌平  
 足袋商 大能富五郎  
 細ヶ沢町消防員置場  
 上毛馬車鉄道株式会社  
 旅人宿 横田りね  
 人力車話所  
 梅の湯 平形せき  
 飲食店 池田たけ  
 干温饅頭商 永貞要吉  
 足袋屋 上岡喜平  
 茶類商 二宮定吉  
 菓子商 竹内和吉  
 運送業 松井支店  
 穀商 入山鶴作  
 煙草商 黒沢橋三郎  
 飲食店 布施安太郎  
 魚商 鈴木はる

売薬 中野しげ  
 油石油商 中島政五郎  
 煙草商 山本善重  
 洋紙商 稲垣まん  
 鉄業職 中村善吾  
 蕎麦製 新井堀一  
 金物商 高橋多吉  
 理髮業 井上重太郎

細ヶ沢町巡查派出所  
 茶商 藤井利七  
 玩具商 関根藤次郎  
 酒類商 沢村寛平次  
 饅頭商 奈良勇三郎

岩 神 村

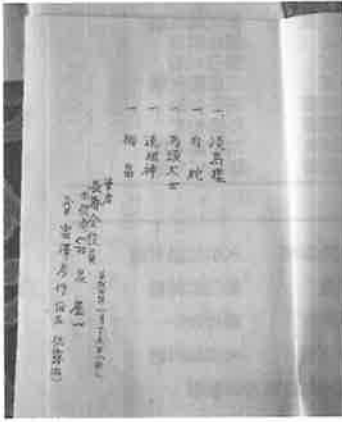
下駄商 渡辺仙太郎  
 煙草商 兵藤彦三郎  
 菓子商 武内傳吉  
 産婆 石井なを  
 散医 坂梨弥三郎  
 職工 安福強松

飲食店 阿部佐平次  
 筑屋 藤井吉郎次  
 綿商 佐藤忠吉  
 鋸台工 后藤忠吉  
 荒物商 柄沢勝次  
 飲食店 原源八  
 飲食店 本田松造  
 飲食店 関口たけ  
 焼酎商 上野久三郎  
 下宿業 西村金次郎  
 鍛冶職 若林小一  
 荷車製造 内田泰三郎  
 龍職 相沢喜七郎  
 人力車業 小林三五郎  
 書物商 寺内安吉  
 下駄商 関熊次郎  
 饅頭商 矢川幸太郎  
 旅人宿 中沢興七郎

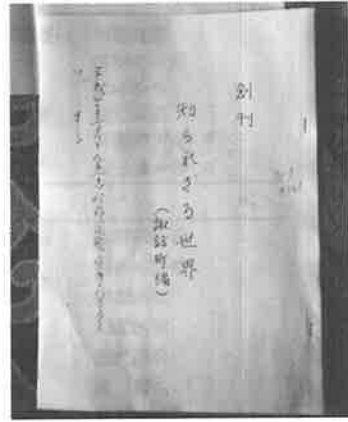
傘職 関根忠吉  
 道具商 伊藤傳太郎  
 酒類商 布施仁太郎  
 綿商 品川せへ  
 菓子商 中野松美

補職 尾高和吉  
 道具商 拓植治三郎  
 煙草商 川崎万平  
 金物商 藤田五郎造  
 菓子商 金子重太郎  
 酒類商 丸山藤吉  
 小間物商 大森幸作  
 鞆商 大井傳次郎  
 菓子商 関口きよ  
 印刷製本業 篠原貞衛  
 旅人宿 小関宇吉

料理店 鹽広亭  
 書物乾物商 小林茂  
 足袋商 上戸虎治  
 印刷製本 小松しへ  
 小間物店 清水眞次郎  
 産婆店 新井きち  
 呉服商 亀井甚四郎



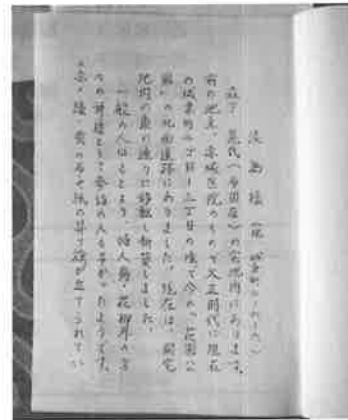
目次



知られざる世界 表紙



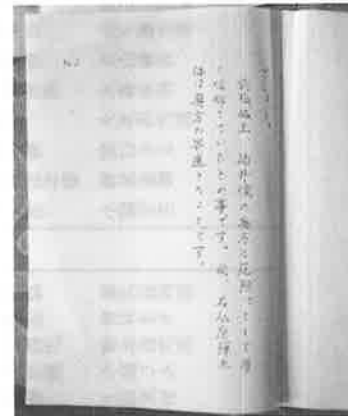
No 2



No 1



No 4

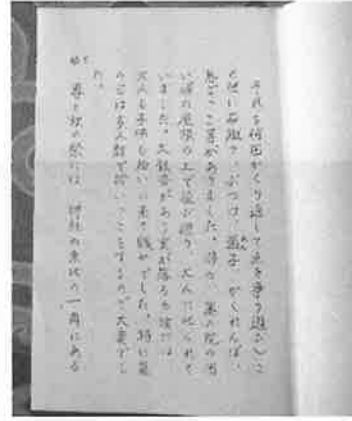


No 3

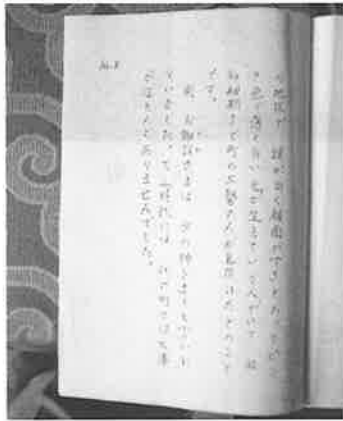




No. 6



No. 5



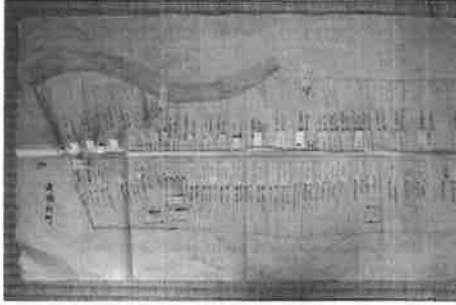
No. 8



No. 7



No. 9



向 町



向 町



向 町

右今般町内一同ノ協議ヲ以テ此申合規則ヲ制定ス故ニ各自互ニ確守スヘキハ勿論ナリト雖モ万一是ニ違背スル者ハ事ノ輕重ニ抛リ金貳拾錢以上金拾円以下ノ違約謝金ヲ差出スヘシ依テ各自記名調印後証ニ供スル如件

同	高	田	栄次郎
同	橋	本	栄平
同	角	田	久吉
同	松	井	音三郎
同	牛	込	半平

### 南町一丁目

○戦後間もない頃は、不便な所で近所に市川屋という魚屋があった程度。

何日おきかに、野菜を売る行商人が来た。町にリヤカーを預けて、しよって来るとのことだった。

○他の土地からの行商人は、富山の葉売りの他、新潟から黄色い玉の毒消し屋、わかめ売り、時には瞽女さんなどが来た。

○昭和二十三年頃、前橋駅北口から編笠をかぶせられた受刑者が徒歩でやって来たものだった。仕事は利根川の河原の砂利取り、畑の草取りなどだった。

○町入りのあいさつは、タオル等をもっておばあさんが連れて行ってくれた。

自宅で行く時は、ソバと赤飯位を用意、近所の人ギンピラを持って来てくれた。

○結婚式は身内と両隣りの近所を呼ぶ位だった。

○お嫁さんの御祝儀の着物は、婿さん側が用意し、お祝い金は五円位だった。

○嫁入り道具は、日頃持っていた着物、タテイタ、タライ、鏡台、裁縫箱、タンス等を持って行った。

○結婚前は、産業組合（現在の農協）に勤めていたが、仕事着は銘仙か木綿の着物に白い割烹着をきた。

○結婚の翌日、丸まげを結って里帰りした。

○葬式は町内のつきあいので、金は持って行かず、各自名刺を持って焼香する程度だった。家によっては、翌日、折箱つきでごちそうしてくれることもあった。

○神社まいりは、月の八日に、弁天通りのドンリュウ様へおまいりに行った。

○弁天通りは別名、古着屋通りといって、正月と七月十五日の農休み（盆休み）の時に、着物や下駄等を買った。

○前代田のアワシマ様は、女の神様といって、月の三のつく日におまいりに行った。

○紅雲町の人丸様は、正月元旦に甘酒をふるまってくれた他、くじびきなどがあった。

○火の用心は、半年交替で班長がやる他、各自手伝いの名のりをあげてやる方法が常だった。

○普段の食事は、いもの煮物、野菜の煮物、時にカレーライス等だった。

○正月元旦と三日間の食事は、雑煮の他、三日間の内に一年で食べる物を食べると病気をしないといって、とろろめし、ソバ、すし、煮物、かまぼこ、黒豆などのごちそうを食べた。

○京橋義孝さんは群馬バス（群馬合同バス）の運転手をしていたが、勤務時間は朝六時から夜の八時頃までだった。

○戦前のバス代は、前橋〜総社駅まで十五銭だったと思う。  
○タクシーは、前橋〜富士見まで、百円位かかった。

○戦前の車の免許は、どんな種類の車にも対応できる甲種と、一種類の車しか対応できない乙種とがあったが、昭和十一年頃から区別がなくなかった。

#### 文京町三丁目

○大正十一年頃は、まだランプの生活で、電気がついたのは昭和十年頃だった。

○昭和三年頃は、電車道沿いに、平屋の家が整然と並んでいた。

○平屋が多かったのは、赤城おろしへの対策で、防風林（マサキ等）がかならずめぐらしてあった。

○近くの商店は、自転車屋と駄菓子屋が各一軒ある位だった。

○日常の買物は、端氣川の木橋を渡って新町（現朝日町）方面に出かけた。

○行商人は、自転車の後に荷をつけて、どじょう屋、またにはいなご屋等が来た。

○他地からは富山の薬屋さんがやって来て、ふうせんをもらったことがある。

○高田町住民のの大半は、勤め人で、さほど生活に困る人は少なかった。そのせいか、こじきの人達がやって来ることが多く、一銭あげる

と喜んだものだ。

○子供の遊びは、ブンブンヤッコダゴ、モグラばたき、ホウズキならし、さかなすくい等があった。

○二子山古墳の上に登ると一面桑畑だった。節句の頃は、露店が並んでにぎやかだった。

○節分の時は、手ぬぐいで袋をつくり、家々をまわるとお菓子や豆等をくれた。

○おやつは、ごはんのすえたのを洗って餅にし、中にしその味等を入れて、やき餅にして食べた。

○女の子の遊びは、れんげ、つくし、のびろ取りに行った。れんげは輪に編んで髪飾りにした。

○赤城おろしの影響か、昆虫、蝶々等が多く、ぞうりを投げるところも一緒に落ちてきたりした。

○共同作業は、葬式以外普段の生活ではなかった。近所づきあいは非常によく、桑取りの時期は奥さん達が天川四丁目方面に働きに行った。

○冷蔵庫のない時代だったので、買ったものはその日の内に食べた。トマトやバターを買って来たが、こわがつて誰も食べなかった。

○祝儀の日の食事は、焼き豆腐、ぬっぺ(かたくりの入った汁物)、きんぴら、おから等があった。金のある人は仕出しを頼んだ。

○娯楽は、とりの市、初市に行く他、一年に一回位映画を見に行った。弁天通りのどんりゅう様の他、祭りにはよく出かけた。

○家の囲りに植えていたものは、お茶の木、熱さましや、化膿止めに効くどくだみを植える家が多かった。

○町入りのあいさつは、手ぬぐい程度を持ってまわった。

○言いつたえは、葬式の行列が通った時は指を隠くせ。同い年の子が死ぬと、すまんじゅうを買って来て耳につけ、「いいこと聞け、いやなこと聞かない」と唱える。かしの葉を死んだ人の年の数だけ取って、手でなでて川へ流して来る。

○十五夜のおかざりを盗むことは、いいことで罪にならない。

○十五夜のおかざりは、里芋、大根等、時期に取れたもの、だんご十五、くだもの等だった。

○火の番は、子供が年寄り等の大人ともち回りで出たりした。  
○井戸は一丈位浅く掘ると水位に達し、水に不自由はしなかった。

○井戸を埋める際は、息ができるようにと竹を中央に立て、全部は埋めなかった。

○井戸を埋める際は、息が

### 旧中川町 大塚田

○町内は、商店、借家が大半を占めており、葬式は大家が段取り、隣組同士で協力した。

○当時の荒物屋で売っていたものは、米、豆、麦、タワシ、ホウキ、ザル等があった。

○瀬戸物屋は、日常容器の他、ホウロウ、せいろ、臼、キネ等も売っていた。

○食事は、朝七時、昼十二時、夜は暗くなると食べた。

○開店時間は、夜が明ければ営業、夜は十時頃寝るまで営業した。

○大正頃の荷物を運ぶ運搬法は、リヤカー、牛車、馬車等があった。

○行商人は、市内から呉服屋、羅字屋が来た他、農家の人がリヤカー、大八車等に野菜等をつけて売りに来た。

○おしんこやといった人が、米の粉を練ったものをいろいろの形にして売っていた。

○男の子の遊びは、広瀬川や端気川で泳いだ他、昭和十年頃にあった上泉町のタケノハナプールへ行った。  
○メンコ、竹馬、ビー玉、チャンバラごっこ等をやった。  
○女の子の遊びは、お手玉、まり、石けり、紙人形、キシヤゴと称したおはじき等があった。



大正頃の荒物屋の見取り略図

## 二 衣 食 住

和裁の手習い 龍海院の前の裁縫学校へ行った。十七、八歳から行っていた。牧先生の奥さんが教えていて、二十人くらい生徒がいた。

炊事 昭和十四、五年までかまどで炊いていた。米七と押し麦三の割合の混ぜごはんを食べていて、ハレの日は米だけのご飯だった。

(旧一毛町)

主食 一日一人三合、一年で一石二、三斗となった。

供出の頃、保有米が一人三俵で、牛馬の分で一俵、山羊、豚の分で半俵あった。この保有米を衣類に換えることもあった。

今は四人で六俵くらいいきり食べない。

戦中は米を供出して昼にもうどんを食べ麦を食べた。主食やおかずが質素になり、胃腸病の人が減ってきたといわれた。(朝日町)

米が四、麦が六の割合で混ぜたご飯だった。麦は最初のひきわりでポロポロして食べにくかったが、その後押麦になりやわらかくなった。トロイモをすってかけると食べやすかった。三杯くらい食べられた。

(文京町三丁目)

米が七、麦が三の割合だった。町場だから四・六ということはなく、ほんの少し麦を入れるくらいだった。(旧一毛町)

麦と米が七対三、六対四の割合で混ぜてあり、六対四の家が多かった。

三度ともごはんを、うどんはお客さんに出すくらいで、戦前には出

さなかった。(文京町二丁目・天川原町)

精米 市ノ坪ダルマに精米に行った。(文京町二丁目・天川原町)

内一升外一升 麦と米を混ぜるのに、麦一斗に米一升を入れるのは内一升という。(九升が麦、米が一升)

麦一斗に米一升を足すと、外一升という(麦が一斗、米が一升)

(文京町二丁目・天川原町)

ひもかわ ひもかわはゆでてあるもの。おきりこみは生のまま煮たもの。汁の中に野菜をたくさん入れて食べた。寒い時に作った。「今日は寒いからおきりこみにすべえや」といった。

つみつこも食べた。

おきりこみのことは、にぼうとうと言った。(住吉町二丁目)

おかず 質素で、魚は正月や祭の時に食べたくらいだった。

ドジョウをとり、カサの骨をくしにしてワラツトツコは刺しておいた。

川にクキがよく泳いでいて、片貝まで魚採りに行った。

(朝日町一丁目)

士族の家は魚や卵もおかずで食べていた。

バターを買って来たが、ベタベタしていやだったので主人が一人で食べたという話がある。

牛乳がたくさんとれ、カッターチーズを作って食べた。手拭で牛乳を搾って天井に下げると、一晩でチーズになった。

(文京町三丁目)

つけものが多かった。大根、きゅうり、なす、にんじん、ごぼう、白菜の漬物だった。

味噌は買って食べた。(旧一毛町)

副食など 前代田にあったカフェで、カツとコロツケを揚げて売っていた。ハム、ソーセイジは戦後売れるようになった。チーズ、バターも戦後のもの。

魚はよく食べた。人によつては魚の頭、尾を買いに来ている人もいた。

病気になるとバナナ、サイダー、卵を食べさせてもらった。

(表町一丁目)

特別の食べもの 夕飯はうどんが多く、そばは余り食べなかった。

餅はつくことはせず、菓子屋で買って来た。餅をつく日もなかった。

赤飯はお祝いの時に食べた。餅も赤飯も食べたい時に食べていた。

おはぎはお盆、彼岸の時に作った。

まんじゅうは買って食べた。(旧一毛町)

餅 正月に餅をついた。この時は弁当も餅だった。

粉餅といつてクズ米をひいて、餅米の中に半分くらい混ぜた餅をついた。

餅をつく時は一俵くらいついた。(文京町二丁目・天川原町)

洋食 呑竜マーケットの洋食を食べるのが楽しみで、特に山本屋の

カツを食べるのを楽しみにしていた。

ポンチのカレーもあった。ここは元一毛町、のち柴町になり、今は

千代田町三丁目になっている。(千代田町二丁目)

野草 ツクシ、ノビロ、レンゲを女の子がつんで来て料理して食べた。(文京町三丁目)

寒天 竹の筒に詰めて売っていた。口をつけて吸って食べた。

(文京町三丁目)

お菓子 ようかん、もなか、片原まんじゅうを食べた。片原まんじゅうは親戚の人がおみやげに持って来てくれた。

黒砂糖をかたまりで売っていた。(旧一毛町)

こじよはん さつまいもややきいもを食べた。

(文京町二丁目・天川原町)

じり焼 少しすえた米をきれいに洗ってつぶし、ホウロクで焼いて食べた。

(文京町三丁目)

シソの実をとつて中に入れると臭いが消える。(文京町三丁目)

ザルメシ 弁当用の米を炊くために、米だけをザルに入れてお釜に入れて炊いた。(文京町二丁目・天川原町)

日の丸弁当 アルミの弁当箱に梅干しを入れると、梅干しの酸で弁当箱に穴があいた。

タクアンを入れて冬温めると、臭いが広がって大変だった。ヒキワ

りを混ぜるので食べにくかった。(文京町二丁目・天川原町)

弁当の交換 小学校の時、麦のたくさん入ったまっ黒い飯の弁当を持って行ったら、担任の先生が自分の弁当と取り替えてくれた。

(文京町二丁目・天川原町)

女堀 天川の中を通っていた。水車があった。これは町内の持株の水車で、株券があった。

米、粉に使っていた。(文京町二丁目・天川原町)

士族の家 長押に刀や槍が掛けてあり、タンスにも刀が入っていた。

マサキ、カシノ木の防風林が必ずあった。

勤め人の奥さんは家で用がなく、天川町の方へ繭かきや桑摘みの仕事に出していた。(文京町三丁目)

建物は曲り家で、敵が来た時裏口から逃げられるようになっていた。

(文京町二丁目・天川原町)

西洋館 町内に昭和四年の西洋館が二軒ある。おじいさんがアメリカへ行って覚えたらしい。大工で建築業者を指導した。(文京町三丁目)  
ホヤみがき 学校から帰ると、新聞紙をぬらして石油ランプのホヤをみがいた。一銭のこづかいがもらえ、あめ玉を二つ買った。

(千代田町三丁目)

電灯 大正四年に電灯がついた。(文京町二丁目・天川原町)  
もし木 大水のあと、利根川へカワギを拾いに行った。



水道の共同栓 (水道資料館蔵)



水道の公共栓 (水道資料館蔵)

赤城山の金丸へ、リヤカーでボヤ拾いに行った。金丸の人が冬になると、松の枝を切ったマキを売りに来た。

馬で松葉拾いに行った。馬の背に二束つみ、二回往復して持って来た。冬行くと梅雨の頃まで残っていた。火がつきやすくてよかつた。(六供町)  
風呂 近所の家で交代に入りっこをしていた。風呂を立て

るとサタをして歩く。

風呂を立てた家は、蓄音機をかけたりにして接待した。嫁は最後まで世話をしてから入るので、大変だった。何人も入るのでアカが浮いていて、出る時アカをしようので、もりっこ湯といった。(文京町二丁目・天川原町)

水 六供は水位が高いので、浅い井戸が多かった。冬は水が減った。昭和三十一年には水びたしになったことがある。

大雨の後は井戸の縁まで水がいつぱいになった。田の端と井戸の水が同じくらいになった。

大水の後、利根川にカワギを拾いに行った。カワギは乾かしてもしきにした。(六供町)

井戸 はねつるべで水をくみ上げるようになっていた。中に金魚を入れておき、金魚が生きていれば大丈夫だといった。大雨が降ると、ひしゃくで汲めるくらい水が増えた。

(文京町二丁目・天川原町)

高田町のあたりは水位が高く、良い水が出た。十尺〜一丈で水が出た。浅い井戸はひしゃくで水が汲めた。

風呂が家ごとにあつた。  
下水は穴を掘ってしみ込ませた。

井戸を埋める時は息ができるようにといって、竹筒を差しておいた。(文京町三丁目)

水道 朝日町の下は河原で、石がごろごろしていて、水が良いので水道工事が昭和四年にあつても使い手がいなくなった。はねつるべの井戸があり、井戸水が良かった。(朝日町一丁目)

### 三 生産・生業（職人）

農家 戦前十一軒、戦後でも八軒あった。今は一軒になった。平均七反の田を持っていた。

五軒でエエ田植えをした。稲刈りもエエでやった。

裏田だけだったからそれほど広くなかった。（朝日町一丁目）

田植唄 田植えをしながら唄を聞き覚えた。

仕事始めに朝の唄、昼食になるのに昼の唄、仕事が終わる頃に夕の唄を歌った。（六供町）

田植え 田植えは早乙女を集めてやった。地走りという男が苗配りをした。

六供は朝倉と人的交流があり、米つきや味噌作りもやった。（六供町）共同作業が普通だった。早乙女が公田、横手、朝倉、宿阿内から来て、一日一町から一町五反植えた。（文京町二丁目・天川原町）

肥料 ワタダルといって魚を腐らせたものを肥料にした。人糞が肥料にするので一番多かった。農家では競走で個人の家などに貰いに行った。貰う時はおみやげを持って行った。（文京町二丁目・天川原町）

米の検査 米の検査には検査官が来た。検査官は紺のサージの制服、制帽だった。

一等は出ず、二等が出ればいい方だった。甲乙丙の時もあった。丙は青米の評価だった。（文京町二丁目・天川原町）

小麦の圃場 中島飛行機の工場が昭和十三年にできるまで、そこは十町歩の広さの小麦の圃場があった。農林省の農林十二号を作っていた。

た。働きに行くと、男は八十銭、女は五十銭の賃金だった。

（文京町二丁目・天川原町）

用水 六供と朝倉の境の用水は、もとは倍以上広がった。南は広瀬、桃木の用水である。（六供町）

馬 農家ならどの家にも母屋の中に馬小屋があった。

モノ日にウマのツメ切りに本家に行った。

蹄鉄は昭和八年以降普及した。細野という蹄鉄工がいて、蹄鉄を作っていた。（文京町二丁目・天川原町）

麦 庭に広げて干した。この時はミカボの三束雨がこわかった。雲が出たかと思うとすぐ降ってきた。（文京町二丁目・天川原町）

製糸 昭和二十六年に佐藤さんが転入して来て、製糸の仕事を始めた。（四十五年まで）その頃、市内に三百軒の糸引き工場があった。「出釜」で座操りをやってもらった。今は市内で工場は六軒、機屋は六く七軒、撚糸は七く十軒くらいになっている。

三十年の景気のいい時は、一日四万円かせぎ、市議員が糸関係で十人くらいいた。

金井製糸が大手で、あとは二十人くらいの中小の工場で、七く十軒くらい町内にあった。

広瀬川から端気川の川沿いにあり、水車を使った。のちに電力を使うようになった。各家で踏みどりで糸をつむいだ。また座操りで玉どりした。



撚糸も製糸も同じく減ってきている。  
働いている人は近所の人で、大工場だと信州や越後から連れて来た。

(朝日町一丁目)

おばさん糸 おばさん糸というのは、勢多郡の富士見村あたりのおばさんたちが引いた太い糸のこと。玉繭やのび(中まい、繭の悪いもの)で引く。鍋一杯の繭を一本の糸にして引くので太い。引いた糸は前橋の市場へ持って行って売り、繭市場へ行って繭を買って来て糸を引いた。繭市場は小柳町と立川町にあった。糸市場は本町にあった。

(大渡町)

おばさん糸は田舎の方が人が引いているもので、町で糸ひきの人たちが引いている道具とは違うものを使っている。玉繭を鍋の中で煮て、太い糸をとる。太い糸なので年寄りでも引けた。(旧新町)

おばさん糸というのは、座繰り引きの時いわれたもので、ポタン糸がはやつてからは、おばさん糸は馬鹿にされて悪い糸とされた。おばさん糸はふしがたつので悪いとされた。糸は糸買いに売った。繭は自分の家のものもあつたが、買ったのもあつた。繭が高くなつた反面、糸が安くなつたのではやらなくなつた。

前橋の北の村で、チューチュー糸という言葉が聞かれる。これは賃引きをする人に関係するもので、繭を預つて糸を引いていた人がその繭を二粒、三粒をとつて置いて糸に引いたもの。これは内緒のはなしで、はなしとして聞く程度である。(幸塚町)

糸ひき女工さんのはなし

・悪口うた

ひげさんひげさん いばりなさんな たかが生糸の検査官

・盆踊りは女工さんの出身の国ごとに分かれてやつた。

・月に休みは二回

この時は淡島様へお詣りに行った。淡島様は女の神様だった。  
・花見もした。

正月にはそれぞれ故郷(国)へ帰つた。お金を貰つて行った。

ひいた糸に等級がつけられ、給料が違つた。

・女工の年季つ子は、一年とか三年とか決めて勤めた。給料の前借りをするものもいた。

・女工さんにはしきせもでた。寝る所があつて三食つき。昔は三十銭あれば一カ月暮せた。

・めだしと皆勤。

めだしは標準以上に糸がでたもの。廊下に貼り出された。皆勤賞もあつた。給料は故郷の親に送つた。

・ある女工さんは父親がお伊勢詣りがしたいということで、給料を前借りして送つてやつたという。

・町の中を糸ひき女工さんが通ると、臭いがしたといわれた。髪に糸ひきの臭いがしみついていたのである。

・糸ひき歌

糸をひくならむらなく細く

あげてふしなく やわらかく

それを歌いながら糸をひいた。(日吉町二丁目)

繭袋 まゆ袋のことはユタンといつた。(日吉町二丁目)

女工さんの待遇 大がまが五つも並んでいた。蒸気がまだつた。炊事のおじさんがいた(めしたき)。

女工には米の飯を出した。しゃけのゆでたもの、たくあん(つけもの)のおみおつけ。

こつちへ居つた女工さんもいた。

年に三回、先生を頼んで礼儀作法について教えてもらった。先生は

黒いのかまをはいた女の人だった。下駄のぬぎ方と挨拶の仕方などを教えてくれた。

雇い主は人の子を預って責任があるからというので、嫁に行く時は寝具布団を持たせてもらった。反物とか、傘、鏡台くらいは買ってもらった。(日吉町二丁目)

市場のこと、製糸工場のこと 細ヶ沢には糸市場があった。才川には繭の市場があった。赤城の根っこしのおばさんたちが糸をひいて売りに来た。糸の間屋があった。おばさん糸といっていた。市場は四・九日にたった。

製糸工場には四斗樽が外に出ていた。そこに蒸気の湯を出した。そのお湯は自由にくんで来てもよかった。そこへバケツを持って湯をもらいに行った。その湯でぞうきんをゆすいでぞうきんがけをした。昔は製糸工場の煙突が立っていて、そこから出る煙で太陽がさえぎられるほどであった。

前橋は製糸家だらけだった。市議員も糸繭関係ばかりという時期もあった。(住吉町二丁目)

デカワリ 二月二日はデカワリの日といって、奉公人の休みの日だった。(文京町二丁目・天川原町)

田町 田町には職人がたくさん住んでおり、店も多かった。万石屋、ブリキ屋、足袋屋、氷屋、畳屋、米屋、酒屋、魚屋、八百屋、馬車屋などがあった。

馬車は玉村へ出ていて連雀町の坂の下にたまり場があった。諏訪町からは大胡へ行く馬車が出ていた。

魚屋は自転車に入れ物をつけて回って売った。(表町一丁目)

商店 町中には通りに団子屋が一軒あったきりだった。他に下駄屋、酒屋ができた。

一時期商工会ができるくらい増えたが、戦争中に減ってしまった。

(朝日町一丁目)

酒屋 酒屋では樽から栓の口をゆるめ、杓に酒を受けてお酒を飲んだ。

馬を連れて来た人は、外につないでおき中でお酒を飲んだ。

(表町一丁目)

カバン店 外山カバン店は、馬具の製造、販売から始まった。父の代からで百年くらいやっている。

鞍は洋鞍と荷鞍とあった。洋鞍は東京で乗馬用に使う皮の鞍で、荷鞍は芯がワラでできている農耕用の鞍だった。

大正の末まで盛んに商売をやっていた。

上越線開通前は、豆などを吾妻から運送で運んで来た。前橋からは砂糖などを運んだ。

カバンは官員のカバンがほとんどで、昭和の始めからランドセルを販売している。

学習院型の最上等のものが一つ五円だった。一番安いランドセルは五十銭だった。

終戦後一般にカバンを使われるようになった。

鞍のお客は上川淵、下川淵、木瀬、荒砥、芳賀、桂萱、宮城、新里あたりだった。総社あたりは割合馬が少ない。(千代田町二丁目)

傘作り 祖父が横浜で修業して仕事を覚えた。布を切るのに、昔は定規を使いハサミで切ったが、今は型があつて包丁で切る。

骨の数が多くと布の形の曲りが強くなる。骨は今では六本か八本だが、十四本まである。にぎりはお客の好みで棒につけた。

問屋さんは雨の時店に来ると「いいお天気ですね」。晴の時は「悪いお天気ですね」と言つて入つて来た。(千代田町三丁目)

賃金 昭和四年の年間賃は一日五十銭だった。三十五銭で米、もう二十五銭でおかずが買えた。

郵便局でも日給・月給で一日九十銭だった。ポナナスが三十円で年二回出た。(表町一丁目)

共同水車 西片貝分があり、斉藤さんが一軒車でやっていった。大麦専門だった。

堰があり、その上で水あびができた。(朝日町一丁目)

検番 四丁目からいろはの前にあつて、芸妓を管理していた。(千代田町三丁目)

## 旧市域の職人の民俗

### 表具師

鈴木操 (明治四十二年生)

表装師と装演師 一口に表具師といっても二つの区分があつた。襖張りとは装束屋があり、ともに表具師であるが、襖張りは表装師、経文など裏打ちできるのは装演師といふ大経師である。正式の装演師は朝廷から大経師の官名を許された官名のもので、前橋には大経師、装溝師と呼ばれるほどの人はいない。現在市内に二十一ほど表具師があるが、上手にできるのは数人しかない。

修業 鈴木氏は父の代から表具師であり、普通は小学校が終ると弟子入りし、一年間位は主人の傍で整理の仕事などして見ている。掛軸など取扱えるようになるのは三年位過ぎてからで、一人前といえるまでには十年位かかった。たいてい兵隊検査までで、そのあと一年間はお礼奉公をした。弟子入りする時にその礼書きを書いて受け入れても

らうのが普通だった。

寒糊 糊は表具師の生命であり、枯れた糊でないと表具した掛軸などがまくれたりする。糊が強過ぎるからである。普通二年から三年を経た糊を用いる。その製法は、大寒に入ると正麩糊を煮る。正麩は麩を作る時に底によんだ小麦粉の澱粉で、中銀、生麩という上等なものである。これを寒水の中に入れてよく混ぜて一時間位煮る。煮ていると透明になり固まってくる。これをメン棒でよくかき廻して、更に煮ているとゆるくなりアメ色近くなる。そのとき火を止める。火を止めた後も焦げつかないようにかき廻し続けて熱をさます。あらかじめ熱湯で消毒しておいた瓶に糊を移し、湯気の治る頃密閉し、瓶に年号(製作年)を書いて床下に貯蔵しておく。この時瓶は半分位土に埋める。

二〜三年経ると、糊の上面がカビで固くなっている。それを馬の毛でできている裏こしのフルイに入れ、シャモジでこすり網目の下へ落とす。糊盆に落ちたのを搦鉢でよくすると粘りが出てくる。糊が新しいと腰の強いねばり過ぎの糊でよくない。

一年間に使用する糊をまとめて作って置く。一斗五升入りの瓶が三つあると足りた。古い糊は粘りが少ないので壁や襖を貼る時は新しいもの、掛軸や経巻は古い糊を用いる。

紙つぎ 下張りに古文書などが用いられた。主に額や塀風の下張り、新しい紙は五十枚か百枚を巻いて口出しをし、そこに糊をつけて継ぎながら巻いていく。馴れないとのろいので糊が乾いてしまう。

額・塀風 骨ごしらえは骨屋から買う。今は骨木だけ買って来て寸法に合わせて自分でつくる。それに下張りをするのは二年位修業した者ならできる。

裏うち 三年目位から習い、主人がついてさせる。はじめは傍にい

て板をふいたり糊付けをさせてもらったりし、そのうちに安物の掛軸を裏打ちさせる。裏打ちのコツは糊の濃い薄いが感じてわかるようにならないとできない。次に墨の見分けが必要で、墨汁などで書いたものは水をつけるとシミがでる。青墨や宿墨（ためておいた墨）も同様。これを止めるのは明礬を水で溶いて字の裏側から後なせするとシミが出ない。この時、字の書かれていない白い部分まで塗ると後に変色して目立ってくる。

ノシツケ 大板に水張りする。このとき本画仙紙はすぐ破れるので要注意。喰裂けのあるものは、別の紙を水ハケで水をつけ、へらで条をつけてから手でちぎる。すると毛羽立っていて裏打ちでつなぐことができる。段がつかない。次に裏打紙に糊を付け、棒板で運んで本紙の上に置く、継ぎ目が段にならないよう注意する。二回以上裏打ちを重ねる場合は、裏打紙を次第に薄いものを用い、一回毎に乾かしてからする。

軸物一本を仕上げるのに上物は一年かかる。（四季の風を当てるという）普通は一〜二カ月で仕上げるが、入梅時期などは仕上げられない。乾燥しないうちにカビがはえてしまうからである。

軸物は三年目ではじめ、四年目で形を整え五年目でやっと初物がまかせられる。責任のもてる仕事ができるようになるのは七〜八年かかる。鈴木氏は東京で九歳の時から手伝い、夜は裏打紙の紙継ぎ、朝は早起き炊事当番や掃除、特に大板はいつもきれいにふいておいた。絹地の軸物は縮みが出るので水縮みを入れた。水縮みは絵の具のニカワが戻らないうちに、一度にサツと水ハケをかけ、何回もする時は必ず一度乾かしてからする。

表具師が一流になるのには、裏打ちの技術だけでなく、茶道、華道や漢詩から書道の行・草などの心得もなければよい仕事はできないと

いう。

刷毛の種類 水刷毛、糊刷毛、なぜ刷毛などある。水刷毛は鹿毛がよい。毛に節があるので水が一度に落ちないで平均して塗れる。糊刷毛は熊毛がよい。腰が強い。三歳駒やタヌキ、兎の毛も用いるが熊の毛が一番よい、なぜ刷毛は兎の毛やシロ刷毛も用いた。そのシロもツクモと称するところのものがよい。（昭和四十四年七月調査）（鈴木氏は前橋職業訓練所主任教授として指導していた）

## 簞笥職人

福田良作（明治二十九年六月十一日生）

日吉町二丁目五―四

歴史 前橋の名産の桐簞笥は、川越藩士で幕末期に前橋に移ってきた小林亀也（良作の従弟）が早い。桐簞笥を東京に売り出した最初の人は白石沖太郎家と福田家である。良作は土族のため十七歳まで局に勤めていたが頭が押えられるのを嫌い商売をはじめ田中町に居候していた。

小林亀也とともに早かったのは旧沼田藩士の柘植寿三郎と高山菊太郎（桑町）で、高山は親の代から木工屋だった。福田は柘植に弟子入りした。当時四人位弟子がいた。また、小林は城内に居候し家老格の家であったと伝える。

前橋簞笥の基礎が固まったのは大正末期で、この頃になると関東各地に知られ、福田・白石・阿部・木原・九谷などの同年代の諸氏がいた。

工程 桐の原木は下駄屋が買い集め、それを手挽きしたのを簞笥屋が買った。

桐材はA級は会津、新潟、南部産、B級は群馬、C級は栃木、茨城産。会津桐は特に只見川上流のものがよく、桐の目の太さ、堅さがほどほどよく、盆地性の気候が適していたのであろう。会津の柂目板だけは後々まで買ひに行つた。戦時中の統制が続くまで続いた。この頃は丸太で買つて来た。会津桐は箆箭の表に用い、上州桐などは中や脇に用いた。

原木から板にするのに大正期には帯鋸が使われるようになる。上毛製材や妙安寺入口の神山が早くに帯鋸が入り、それ以前は木挽が挽いた。

桐板の長さは六尺四寸と三尺二寸、厚さは二分・三分・四分・六分・八分とあり、二分は柂目で表材料、三分・四分は底や向う（地板・背中等ともいう）に用い、八分板は実際は七分で引き出し横に用いる。六尺四寸は下駄の基準で、下駄は八寸のため八分割した。三尺二寸物も四つ切りにすれば下駄材にもなるので、箆箭材も下駄を基準に用いたのである。

乾燥は天日で自然乾燥した。二か月位はかかった。今は水でアクヌキをする。狂いを直すのは内側へ水をつけて火であぶるとよく直つた。材料が揃うと①木どりをナタでし、②狂いを直す板焼き、③板こなし（一枚毎に削る）④接ぎの順で仕事を進める。接ぎ終るとコバツキ、アラヒコ、通ツキなどという鉋で薄く削り整える。

板削りの鉋は五種類ほどあり、アラシコカンナ、トリツキ、中シコ、仕上げ、コバツキとあり、これらが十分に利用できるようにカンナ台がよくできていないと良い削りはできない。鉋の台なおしが十分に出来ないといふ仕上げができない。箆箭の上手、下手はこの鉋台いかんによるといふ。

ソクイ 当時は麦飯であったが、ソクイ飯は米だけで麦を入れない

で別に煮た。ネリ棒を用いてよく練つて用いた。

組立 ソクイで組み、このとき引出しが入るように調節する。反対にしてもよく入るようなら上々。釘は金釘は用いない。竹釘は板をはぐとき内に入れるところに用いる。ウツギの木の木釘は固さがよく、表・裏がなくどちらから削つても差支えない。水につけておき釘の形に削り、ホーロクでキツネ色になるまでいる。ほんやりして焦がしてしまつたりしたこともある。

板はぎ 前板をはぐ。これは二分板の上物で、これが余り厚いのもよくない。

色つけ仕上げ トノ粉を塗りよくこすり、その上をヤシヤの実でこする。ヤシヤの実は伊豆のものがよく、上州物は余りよくない。次に草の根をまとめたウツクリでこする。ウツクリには二種類あり、粗いウツクリと仕上げウツクリとある。最後に白ろうでこすり仕上げする。

最近防水剤などで箆箭のシミの出るのを防ぐようになつた

金具つけ 昔は川越で金具を造っていたが、近年は東京から仕入れる。金具つけで難しいのはチョウウツガイの取付けで、開いた時に前が平にならない。

一人前になるまで

最初は木釘削りで、ウツギの木釘を小刀で削らされた。簡単そうである一定の太さに削れないものだ。ウツギの木はもと利根郡から買ったが、今は千葉県から買う。東京の職人はウツギ釘を一升いくらという単位で千葉から買うので、東京の箆箭職人はウツギ釘が上手に削れない。次は板こなし、板焼き、板はぎ、ハナ切り、組立てで、この仕事は二年間位でほぼ覚える。問屋から文句を言われぬようになるのは三〜四年かかる。これで一人前だが、人により個性差があり、いく年やつても上物ができない者もいる。一般に木どりは親方、木地は職人がし

た。近年色つけ仕上げは東京の間屋へ出して仕上げるが、もとは地元で色つけまで仕上げた。

**信仰** 箆筒組合で妙安寺の太子講の祭りをした。もとは差物師、建具屋と共同でしたが、大正期に箆筒屋単独で祭るようになった。その太子講は十月半ばで、妙安寺の太子堂に預けておいた掛軸を床の間に掛け、神酒、お供餅、菓子などを供えた。この日は女性は仕事場に入らなかった。また、この日に役員改選、決算などもした。組合長は投票で、その下の役員は年番で決めた。(昭和四十四年六月二十一日調査)

## 鋸職人

丸山武次(明治四十五年生)

三河町二丁目一六一一六

**屋号** 鋸屋には中屋・一力屋・二力屋という屋号があった。一力屋が旧琴平町にあり、二力屋は一力屋から分かれた。一力屋の倅が父親と仲が悪く勘当されて二力屋と称した。その二力屋へ武治の父親正吉が弟子入りしたので二力屋の屋号を名乗った。中屋の弟子は全国に多い。いずれも弟子が分かれたものである。川越には二見屋というものがあった。

**修業** 十一歳の頃から父親について習った。一人前になるのは十年位かかった。当時は鋸の目立てだけでなく、鋸そのものも造った。目立てだけなら五年位で一人前になれた。目立ても目を削るだけではなく、鋸の曲りも直した。曲りのある鋸では板を斬る時に曲ってしまうので曲りを直す。曲りのことをクルイといった。

### 製法

①材料は東郷鋼を主に用いた。前橋の岩内鉄鋼から仕入れた。仕入

れた時は厚い板状で、これを焼いて叩きながら伸ばす。向う槌を使い鍛冶と同様に焼いては伸ばし約一時間半位かかる。この時同じものを二挺づつ伸ばした。一挺だけだとすぐ冷えてよく伸びない。表と裏を返しながらいいて伸ばした。

②形をつくり刃付けをする。刃はプレスで抜いた。今は電気ハンマーになっている。刃の形ができたところで焼入れをする。

③焼入れは食用油の中に入れる。食用油をドウコに五く六升入れて置き、その中へ真赤に焼けた鋸を入れる。非常に硬くなるので少しアマクするため火であぶる。曲げても折れない程度にする。この時ヒビが入りやすいので色で見分けをする。焦げ茶色の時は硬すぎるので紫色がかかった時がよい。

④狂い直し。焼入れすると狂いができる。イカのように丸くなったりする。これを平らにするのが難しい。これさえできれば一人前だともいい、金敷の上に乗せて玄翁で叩いて平らにする。修理に来た鋸も狂いを直す。この時の狂い直しはトンボ槌で叩く。腰の曲った時は丸槌で中央を叩く。腰の曲りを腰がぬけたといい、中央がペコンペコンする。安物の鋸は叩くと伸びてしまい修理しにくい。

⑤スク。鋸の形を整えて削ること。大体半分位に削ってしまう。削りはセンで削り、削っていると狂いができるので直す。一尺一寸の両刃の鋸の場合は削り上げるのに一日かかる。

⑥仕上げ。目立てをすることで、二時間位かかる。削ったあと色つけをする。色つけは油を塗って火であぶる。

⑦目立てのコツ。ミチ出しとかアサリ出しといって、歯が板より外に一本おきに反対に出すと中央が開いて道ができる。この時片方歯がよけいに出ていると曲って切れるので不揃いにならないようにする。よく目立てができていると、細い棒を軽く引いても飛びあがらない。

一般に素人の使う安値の鋸はすぐ使用できるように目立てをしておくが、本職が使う上等なものは売った時目立て直しをする。この時まで無銘であったのを目立ての時に銘を入れる。

#### 鋸の種類

- ①両刃鋸 八寸、一尺二寸があり、目が粗いのと細かいのがついている。粗い方が縦挽き、細かい歯が横挽きである。
- ②片歯 一尺三寸、一尺六寸で先丸の方が多く出る。
- ③新切り 一尺四寸と一尺八寸で目が粗い。
- ④胴突き 九寸と一尺があり、歯が細かい。
- ⑤竹挽き 刃を浅くたてたもの
- ⑥廻し挽き 先が細く曲線的に切るのに都合よくできている。下駄屋、桶屋、家具屋などで用いる。

#### その他の道具

ヤスリ 三〜四インチのもので、目の粗さにより使い分けをする。万力を挟んでヤスリかけをして仕上げる。  
万力 ヤスリかけのとき用い、挟み板がある。  
金敷 狂い直しのとき用い、六貫目ほどある。  
金槌 丸槌、トンボ(片方が鋭っている)キリ出し、刃槌などあり、トンボも二種類以上、刃槌は三本以上必要。  
信仰 十一月八日がフイゴ祭。この日は稲荷様に頭付きの魚と赤飯をお供えした。組合は戦後にでき太子講などに入ろうになった。(昭和四十四年五月三十一日調査)

#### 紋型紙職人

長谷川仁助(明治二十九年三月十一日生)

朝日町二丁目一七一一二

修業 十一歳の時、立川町の小林刺繍店に奉公に出て二十二年間いた。三代目の方に習った。一人前になったのは二十歳の時であり、当時は何年他所へも出なければ一人前になれなかったため、兄弟子が浅草にいたので何年か浅草で修業した。

兵隊検査(満二十歳)までは無給奉公で、その間は仕着せと盆と正月に若干の小遣いを貰った。休みは一日・十五日と盆と正月であったが、十月から三月までが忙しく、年により正月頃まで忙しかった。一番忙しいのは十二月から三月までであった。二十歳を過ぎると金も貰え、他所へ職人として出ると一日に八十銭位貰えた。

#### 工程と道具

- ①上衣 白く抜いてあるところへ黒く入れてしぼ紙の型紙をつくり塗り込む。五月のノボリなどをよく染めた。
- ②刺しゅう 黒地に白糸で刺しゅうした。糸は時には金・銀糸なども用いた。刺しゅうには日向と影とがあり、日向はスガ縫いと織り縫いがあり、白く見えるようにすることである。影縫いは点々と縫って白く形をつくるケシと擦った糸を縫いつけるジャバラ縫いとがある。日向の方が難かしい。手間も三倍位かかる。日向にはカマ糸といって擦りのない糸を二本から六本位合わせて用いる。
- ③型紙 シブ紙に自分で紋の絵を描いて切り抜く細かい仕事である。特に縫い紋用の型紙をつくるのが難かしい。道具は細鉛筆、定規(中に筋の入ったもの)、ブンマワシ(コンパス)、切り出し、胡粉を塗るハケなどが必要である。
- ④針 普通細八、糸八と呼ぶ細かいものを用い、メドは平メド針である。針の種類は十種類ある。細八は細かい順では四〜五番目位のもので、長さは八分(二〜三纏)、時には極細というのものも用いた。

⑤角枠と角枠台 紋を刺しゆうする時の台と枠で、左光線にすえて用いる。角枠は布を挟むもので一尺角ほどのもの。

⑥仕事量 簡単なものは一日に三個、難かしいものは二個が一人前の仕事。一個が八百円位で、糸により百円増し。

⑦信仰 愛染明王を祭る。染色工業仲間の組合があり、正月の新年会と九月の愛染様の日に祭った。(昭和四十四年六月二十一日調査)

## 紺屋

住吉町一―一

住吉町一―一

紺屋大黒屋の歴史 向町の大黒屋は前橋藩の酒井氏時代からの染物屋で、酒井侯から木彫りの大黒天様を拝領し、向町と小柳町に支店を出している。

修業 小学校の六年が修了すると小僧に入り、兵隊検査まで働き、その後は五年間位働かないと一人前の本仕事にならない。親方が安心してまかせられるのは三十歳前後からである。

小僧に入ると、盆・暮に若干の小遣いが出た。親元が困る家の場合には五円・十円の賞与を出した。明治末年までは十円以下。衣類は親方の家でくれる以外に親元から一部出た人もある。

店の中の各々の位置づけは次のようである。

親方(主人)——職人頭(職人頭)——職人(糸師・染師)——小僧(宣道)

親方は仕事の段取を決めて職人頭に指示し、職人頭は作業を自分でもするが全体の監督をする。職人は職人頭に聞きながら仕事を進める。小僧は雑用。職人は住み込みと通いがあつた。

店によっては外交もあつたが、大黒屋は外交の人はなく、客が尋ね

て注文に来るので手いっぱいだった。

得意先は主人が御機嫌伺いに行つた。時には職人頭が主人の代理で行くこともあつた。

染めは糸染めと型染めがあり、糸は藍瓶の上で糸専門に染める。張師は染めた反物を庭に干す。

染料は明治以前は植物染料で

○カヤ黄

○クルミの根と皮茶

○クチナシの実黄

○キブシの実ネズ色

○ヤシヤの実ネズ色

○シブキの皮と根ネズ色 シブキの場合は茶色にもなる。

○アイアイ色 キブシを混ぜると黒になる。アイは阿波と行田からも買つた。阿波のアイは小玉で黒っぽい。行田付近のものは色が薄く粗い。値段は阿波の三分の一から五分の一位である。

明治以後(後半)になると、植物性染料はアイが主で、ドイツから化学染料が入ってきた。明治三十年以後のことである。この時以後も技師が派遣されてきたがアイで補つた。

型紙は伊勢が本場で、主に伊勢から取り寄せた。高崎や熊谷などでも簡単な型紙ができたので仕入れた。

シンシは染めた反物を干く時に用いる。前橋には製造するところがなく高崎から仕入れた。

洗いは川ザナ(水洗所)をつくりそこで洗つた。

客は個人以外にヒロイ(拾い)と称する人が二人ばかりいた。半田(渋川町)の人で沼田辺まで集めて来た。歩きで大きな風呂敷で背負つて来た。二十反位一度に持ち込むこともあり、オバサンコウヤなどと



もいわれていた。

休日は毎月一日・十五日。時には仕事の都合で二日と十六日にずれることもあったが、月二回。盆と正月と町の祇園には休み、職人は月に三円から十円の月給。小僧には若干の小遣いが出た。

ノレンワケは永年勤めた人で、その場合は店の土地は借りてやり、鍋、釜まで準備してやった。その後は親子のようなつき合いをした。職人は三十歳位でも一人者が多く、三十五歳ころ妻帯したので、ノレンワケはそれ以後である。

向町と小柳町に大黒屋からノレンワケした店があるが、店のノレンには大黒屋の看板の㊦に㊦など加えたものを使用した。

信仰 愛染明王を神棚に祭り、十一月二十六日は染物組合の愛染講が開催され、その日に役員を決めたり、値上げの相談などをした。神棚にはお酒をあげる程度である。(昭和四十年十月二十七日調査)

## 芸 妓

竹内てる(明治十八年生)

横山町

明治期の盛況 明治時代は糸の街前橋は浜商人なども市日には多く集まり、芸妓も多く夜が賑やかだった。二業組合といって茶屋(料理店組合)と芸妓屋が栄え、見番は横山町と榎町の二か所にあり、二か所の見番に登録された芸妓は三百人位もいた。この中には半玉も含まれていた。見番とは箱丁ともいう箱屋が詰めていた。箱屋は二〜三十人位いた。

見番は「月三吉野」「三吉野から分かれた」と「新月三吉野」とあり、もとの「三吉野」は真中病院のところにあった。

箱屋は料理屋から見番に注文がくると、三味線入れの箱を持って芸妓より一足先に料亭に届ける。料理屋は箱屋に芸妓料の一割五分から二割をもらい(見番からも五分位もらえた)、見番から渡された何時入りという紙を渡した。

客の半数は商人、県へ用事があって来る役人なども多かった。芸妓の働き場所の料理屋は榎町・紺屋町・横山町の三町が大部分であった。芸妓の修業 竹内てるさんは明治三十一年八月に数え十七歳でこの道に入った。中には七歳位からこの道に入る女の子もいて半玉といった。明治三十五年頃からは小学校六年が終了しないと出玉に入れなかった。十六歳から一人前の一本になれたが、一本になるのには芸事の試験があった。三味線、踊り、お囃子の試験で、三味線は長唄や清元でもよく、その他歩き方、酒の酌など家によって異なる動作も必要だった。半玉は踊りとお囃子だけでもよかった。

一本は大人で一時間二十五銭位だったが、半玉は十二銭五厘であった。

一日の生活は、朝の七時頃からお稽古事をはじめ、三味線、踊り、お囃子の師匠の家を五〜六軒も廻って習った。それは厳しい毎日の稽古で、今の芸者とは全く異なっていた。当然、他の教養も身につけていないといけなかった。座敷ではタバコは吸えなかった。一本になっても段階があり、二十五歳からは中年増ちゅうねいぞく、三十歳以上は年増と呼ばれた。健康診断は明治十二年から毎月一回、下の検査があった。その指定の医者もあった。またガス燈時代は時間がうるさく、十二時になると臨検があった。

正月には得意先の茶屋や馴染客の家へ年始廻りをした。

仕度は夏も重ね着で暑く、冬は厚着をしないので寒かった。髪は自髪で、一番つらかったのは厳しい稽古事だった。

馴染客に身受けもあった。たいていは芸者屋の抱えて、四年間六十円位の時に二百円から三百円が身受け金だった。前借金の場合の抱えにも一切主人持ちの丸抱え、着物は自分持ちの七三抱え、四分六分抱え、わけ（半分わけ）などがあり、晩年を考えて貯えるか自分で独立した家を持つ人もあった。

税金は県税・市税合わせて七円位であった。

時にはいじめられる事もあった。芸事ができないと座敷へ出されないうで下働きであり、一人前までになるのはどうしても十年位はかかった。今は芸ができなくてもすぐ座敷に出られる。

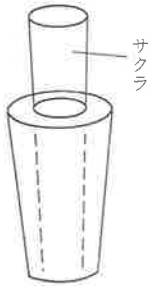
忙がしいのは年末・年始と夏三月。夏三月というのは生繭期に多くの糸が出るので、多くの商人が前橋に集まって来る月である。

（昭和四十年八月二十七日調査）

## 酒屋道具

三河町二丁目一六一一三  
原田弥太郎

酒屋には三ツ目錐、木槌、木栓、コルク、カラシ、呑口などが用意してあった。呑口は主に東京から仕入れ、ロクロで丸く削ってあり、樽に三ツ目錐で穴をあけたところに入れる。そのとき木槌で打込む。呑口の栓はサワラが用いられた。カラシは大樽から小樽に移す時用いる安全呑口である。（昭和四十四年五月三十一日調査）



## 旧市域の戸主の主な職業

明治・大正期における旧市域全般での各世帯の戸主（注・現在世帯主）が、当時はどのような職業に従事していたかを、年次を追って調べてみることは、前橋町（市）の発展過程を知る上に重要なことであるが、それを示す好資料というものはめったに見当たらない。ただ、ここにその一端を示す資料（注・前橋市立図書館蔵、「明治四〇年一八九〇七」）がある。これにより当時の状況を探ってみることにする。

しかし、この資料は明治四十年末の市中の戸主が主業にしていた職業を、十項目に分類し、そこに含まれた二百九十種類の職業と、そこに従事した戸主の七千三百八十三人を職種ごとに書きあげているが、各町ごとの記載がないので、それは判明しない。これを一表にするが、次のようになるが、その中には庶業の次にでてくる産業のように、そこに記載された戸主の計と、戸主の内訳数とが合致しないものもある。それらについては、『同書』の計の下に、戸主数を合算して得た仮計も※印を付して追記しておいた。

明治四十年十二月末現在

前橋の戸主の主たる職業

（明治四十二年刊『第三回市統計書』）

一、庶業（七七一戸）	官吏 四一七	公吏 四三	教員 一三〇
	牧師 一三	教導職 二	獣医 二
	軍人 二	公証人 一	弁護士 一三
	薬剤師 二	産婆 七	看護婦会 一
	医師 三八	歯科医 五	新聞業 三

看護婦	二	画工	一	写真師	六	洋灯商	一七	塗物商	四	瓦商	二
新聞記者	一八	神官	一五	僧侶	二七	竹細工商	四	金物行商	一	洋灯行商	七
代書業	一五	易者	五	鉦山業	三	篩行商	一	荒物商	一二	荒物行商	一
一、産業(一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)											
銀行員	二九	会社員	五二	商店員	一六	穀商	一四	鹽商	一	醬油商	一八
金錢貸付	四八	質店	三四	銃砲店	二	砂糖商	三	洋酒商	一	酒商	六三
新聞売捌	二	洋物商	一〇	物品貸付	五	古物商	一四八	馬具商	一	下肥商	二三
小間物商	二〇	袋物商	七	玩具商	八	鳥糞商	一	蠅商	七	木灰商	一
機械商	一	古本屋	一	貸本屋	二	小鳥商	三	空樽商	二	露店	一六
煙草屋	四五	煙草行商	九	玩具行商	二	馬壳買	一	旅館	三七	麵麩商	二
屑爾商	五	古着商	四二	足袋商	三九	菓子商	二三四	川魚商	四	水商	一
照降商	七	下駄商	三六	太物行商	二	茶商	二五	煎餅屋	四	餅屋	八
周旋業	三七	中立人	一	請負業	一一	壽司屋	一	材木商	三四	肥料商	一六
書籍店	四	時計店	六	藥種店	八	苗木屋	三	蚕種商	三	種物商	一
度量衡器店	〇	薪炭商	四四	石炭商	四	下宿商	一七	木賃宿	一六	湯屋	一七
油商	八	青物商	一三二	乾物商	八	料理店	三三	飲食店	一四九	芸妓寄留宿	三二
魚商	五二	獸肉商	九	鳥肉商	五	貸席	一				
鶏卵商	三	漬物商	二	自転車商	五	一、工業(九一、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)					
雜貨店	一	三味線屋	一	絵葉書商	一	製糸業	一二四	真綿製造	七	乾燥業	一
筆墨商	一	紙商	七	醬油行商	一一	麵麩製造	一四	麩製造	五	精白搗碎業	五七
菓子行商	六	油行商	七	茶行商	一	麵麩製造	一四	印刷業	一一	菓子製造	六五
青物行商	二〇	魚行商	二四	蕎麥行商	二	度量衡器製造	一	酒釀造	四	製菓業	六
鰻頭行商	一	豆腐行商	三	納豆行商	三	麵製造	一四	酒釀造	四	醬油釀造	四
焼芋屋	四	生糸商	八	糸繭商	一〇三	麵製造	五	酒釀造	四	製革業	三
呉服商	一八	綿糸商	五	綿商	一三	土器製造	六	團扇製造	三	製革業	三
熨斗糸商	一四四	金物商	一三	陶器商	一一	馬具製造	七	農具製造	二二	建具製造	五六
						指物製造	二二	洋服裁縫業	一五	傘製造	六

竹細工製造	二九	提灯製造	一一	染物業	二〇	形付職	八	麵職工	五	菓子職	一九
折箱製造	二	饅頭製造	四	豆腐製造	三九	銅職	一	桐油職	二	玩具職	二
附木製造	五	桶製造	四三	鍛冶屋	七八	印刷職	一四	眼甲職	三	油締職	一
座繰製造	二五	麻裏製造	二五	下駄製造	三〇	陶器書画師	二	焼継師	一	傘職工	六
蠟燭製造	二	帳面製造	二	ボール箱製造	三	綿打職	二七	篩職	五	板割職	七
電気枕製造	一	三味線製造	一	線香製造	一	経木細工	一	ペンキ塗師	一	弓職	一
元結製造	一	レース製造	一	編物細工	一	竹刀職	一	蹄鉄工	一	理髪師	六二
鉄葉細工	一七	凧製造	二	蒲鉾製造	一	女髪結	三四	活版職	二九	瓦職	一
櫛製造	一	鬘製造	一	ブラシ製造	一	紡績職工	四	金物細工職	一	料理人	二
紙漉業	一九					絵草紙屋	一	革職工	一	糸撚り	一
一、運輸・交通(一二戸)						糸挽工女	五	賃糸挽	一一	鑄掛屋	七
運送業	七	郵便事務	二	切手売下	三	蚊帳直し	三	洋傘直し	八	靴直し	五
一、農業(五九四戸)						箕作り	一	帽子直し	三	雪駄直し	一
農業	五九二	蚕種製造	一	果樹栽培	一	白の目立	一	下駄齒入	七	羅宇屋	一
一、牧畜(六戸)						鳥刺	二	按摩	五四		
搾乳業	四	養豚業	二			一、労保者(八八四戸 ※八四四)					
一、水産(六戸)						郵便配達	二〇	新聞配達	四	牛乳配達	一四
養鯉業	六					鐘樓番人	一	人力車宿	六	人力挽	一一三
一、職工(四二二戸 ※九〇八)						馬車車掌	一	馭者	三	馬丁	一
裁縫職	二七	西洋洗濯	三	大工	一二九	駅夫	二	工夫	三三	土工	六三
左官	四九	木挽	三一	畳職	四〇	荷物挽	二八	使丁又ハ二〇	二〇	雇人	二八
家根職	二八	鳶職	五九	塗物師	六	用達夫	四	屠夫	二	日雇	三〇二
鋳職	三	表具師	七	仏師	一	一、遊芸・その他(九〇二戸)					
石工	二一	指物職	二	搦糸職	一	大弓場	一	遊芸師匠	八	遊芸稼人	一〇
衡職工	二	植木職	二八	繰物職	五	箱廻し	七	舞台廻し	一	興業出方	五
機織職	二	張物職	七	染物職	四						

表一 戸主の主な職業

職業種	職業		戸主	
	数	比率%	数	比率%
産業	二四種	八・二八%	七七一種	一〇・四四%
運・交	一一二	三・八六	二、三七四	三二・一五
農	五五	一・八九七	九一三	一二・三七
牧	三	一・〇三	一二	〇・一六
水	三	一・〇三	五九四	八・〇五
職	二	〇・六九	六	〇・〇八
労働者	六四	二・二〇七	九二一	一二・四七
遊芸・他	一八	六・二一	八八四	一一・九七
計	二九〇	一〇〇・〇〇	七、三八三	九九・九九

前表の職数とそこに従事していた戸主数を要約してみると第一表になるが、ここに掲げた戸主数は、その内訳から見て『同書』の計に符合しないものであっても、そのどちらに誤りがあるかが判らないため、ここでは『同書』の計に従ってみた。

これらの職種のうちでは、もっとも多くの戸主が従事していたのが産業である。そこには当時の戸主が職業としていた全職種の三十八・六割の職業と、戸主数の三十二割余に当たる戸主が携わっていた。これに次いで多くの戸主が従事していた職種には、職工・工業・庶業・労役などがあげられる。また、戸主数が特に多かった職種には、産業の次に職工があり、以下には工業・遊芸・労保・庶業などがあつた。

以下、各職種に含まれたそれぞれの職業の中から、主なものについて述べてみることにする。

**庶業** この職種には、当時の官公吏や医師・弁護士・報道関係者・宗教人などが含まれている。このうちの七十六割に相当する人々は現在という公務員であつたが、それは当時の官吏・公吏・教員となる。庶業中の戸主で、これ以外の職業に従事していた人々というのは、全部合わせてもこの職種で二十四割弱にしかならなかつたのであるから、この数は僅かであつたといえる。

**産業** 市中の戸主で、この職種に従事していた人々というのは非常に多かつた。その職業は百十二種類にもなり、戸主数では二千三百人にもなつていた。このうちで特に多くの戸主が従事していたのは、各種の商店の経営者であるが、とりわけ食品関係者は多かつた。それはざつと数えてみても七百人(注・菓子商三三四人、飲食店二四九人、穀商二二四人、青物商二二三人など)からになり、これは農業中の三十五割にもなつていた。またこれに次ぐ職業には生糸の附帯産業に従事した人々が挙げられるが、この戸主数は二百六十人(注・糸織商一〇三人、製斗糸商一四四人、履織商五人、生糸商八人など)にもなり、これは産業中での十一割にもなつていた。

しかし、ここ職種の中には、その後には消滅してしまつたため、現在ではまつたく見ることのできなくなつた洋灯商・洋灯行商・石炭商・饅頭行商・篩行商などもあるが、これらはいずれも昔懐かしい職業である。

**工業** 市中の戸主で、この職種に携わつていた人々は約九百人いた。これらの戸主は市域全体からみれば十二割程度であるので、さほど多かつたとはいえないが、この中には、幕末以来の前橋の街で花形産業と讃えられていた糸関係者がいた。その数は二百人(注・製糸二四人、燃織二三人)を越え、工業中での二二割を占めていた。

また、これに次ぐ職業には

- 鍛冶屋 七八
- 菓子製造 六五
- 精白搗碎 五七

建具職	五六	桶製造	四三	豆腐製造	三九
下駄製造	三〇	竹細工製造	二九	座繰製造	二五
麻裏製造	二二	指物製造	二二	農具製造	二二
染物業	二〇				

などもあった。しかし、この職種中には右の業種の他に製菓業六人、飴製造二人というものもあるので、これを菓子製造業に含めればその関係者は七十人ほどになっていた。

この職種中で今ではまったく見られなくなったものに、附木製造、麻裏製造、蠟燭製造、電気枕製造、三味線製造、線香製造、元結製造、蒲鉾製造、紙漉業などがある。これらの職業はその後の生活様式の変遷によって、市中からその姿を徐々に消してしまつたのであろう。

**運輸・交通** この職種に従事していた市中の戸主というのは、僅かに十二人であつた。これもここには運輸と交通の経営者だけがあがつているが、そこに従事していた荷車挽や郵便配達夫などは、後出の「労役」に含まれているので、分類の仕方によってはここにも含められるため、この職種の従事者をもっと多かつたといえるようである。

**農業** 市中の戸主で、この職種に携わつていた人々というのは、農業と蚕種栽培者だけである。それらの戸主は市中に約六百人もいたが、蚕種製造と果樹栽培は一人だけであつたので、ここでの九九割以上は農家の戸主となる。これらの人々は、市中でも外周部にあつて特に農業などが盛んであつた岩神や清王寺・一毛・六供・天川原・市之坪などに多くいたのであろう。

市中での果樹栽培については、明治二十四年刊の『前橋繁昌記』(注・保岡申之著)に、

「大渡(注・現在の県立前橋工業高校の南付近)に近き辺りに数百の桃樹あり、花(注・下の河原)時ハ紅霞一抹遠景殊によし。諏訪の桃も有名なり」

とあるので、これに従事していた戸主一名というのは、そのどちらかにいたのであろう。

また、市中での蚕種製造については『同書』に「蚕種の販売会社は明治二十二年九月に本町に設立」されたという意味の記載はあるが、その製造所がどこにあつたかは不明である。

**牧畜** 当時の市中で搾乳や養豚に携わつていた戸主は、全部で六人であつた。うち四人が搾乳で、二人が養豚家となる。

市中での養豚については、保岡申之著の『繁昌記』に「岩神にあり」(注・保岡申之著)とだけあるので、これを業としていた戸主二人というのも、この辺にいたのであろう。

**水産** この職種には、市中で養鯉を営んでいた戸主六名があがつている。

**職工** 市中の戸主で、この職種に従事していた人々というのは九百人もいた。その職業は六十四種にも及ぶが、なかでも多くの戸主が従事していたのが大工職の百二十九人である。これに次ぐものに賃糸挽の百十一人、理髪師の六十二人、鳶職の五十九人、現在のマッサージ師の五十四人、左官職の四十九人、畳職の四十人などがあげられる。以上の職業に従事していた戸主を合わせると、この職種中の五十四割に当たっている。

この職種の中にもその後の生活の変遷で姿を消した銅職・桐油職・甕甲職・蹄鉄職・絵草紙屋・蚊帳直し・篩作り・雪駄直し・齒(注・下の馬の歯)入れ、羅宇屋などがある。このような職人には当時の市民はどんなに世話になつたことであらう。

**労役者** 市中の戸主でこの職種に携わつていた人々というのは九百人もいた。その職業は十八種に及ぶが、もつとも多くの戸主が従事していたのは日雇三百二人である。これに次ぐのは荷車挽の百二十人、

使丁などの百二十人、人力挽の百十三人などとなる。この四種の戸主を合わせると、労保者中の七十五割にもなっていた。したがって、これ以外の労務に従事していた戸主というのは、職業の多い割りには少なかつた。

しかし、これらの職種中にも明治から昭和期の前半を知る人々にとつては忘れることのできない人力車夫や鐘樓の番人、馬車鉄道の車夫などがいた。

遊芸その他 ここに含まれた戸主というのは、これまでの職種にてこなかつた人々である。その人数は九百二人であつたが、これらの人々は市域全体の戸主数からみれば、僅かに七割程度にすぎなかつた。それも、そのうちの五百二十三人が離職した戸主であり、これはこの職種中の五十八割弱にも当たつていた。これに次ぐ職業には雑業の三百四十七人がいたが、離職者と雑業者を合わせれば、この職種中での九六割にも当たるのであるから、これ以外の職業で当時の市民に憩いの場を提供してくれた戸主というのは、この職業中での僅かに三・五割にすぎなかつたのである。

## 旧市域の主な商家

明治から大正にかけての前橋町(市)にはどのような職種の商家がどの位あつたのであろうか。それらの一端を示す資料に豊国覚堂著『前橋繁昌記』(注・明治四〇年)がある。しかしこの資料は著者が冒頭に「市民全般の商家職業を分類彙別し、悉網羅するは到底能くすべきに非ざれば、茲には重なるものゝ一斑を挙げて其全豹を窺知せしむるのみ」と断つてゐるよう、明治末期の商家をすべて書きあげたものではない。また、この資料は、これらの商家を調査した期日の記載を欠く

が、これは『同書』の他の内容や奥付けなどから推して、明治三十八年ごろに調査したものであろう。

著者はこの資料で当時の市中の商家を次のように分類している。

蚕糸業に関する職業(三六八)

製糸業九〇、糸繭商一二八、生糸熨斗糸屑繭商八九、生糸仲買

二四、擦糸業三七

土木其他に関する職業(四六)

土木請負業二〇、石工及び材木商二三、度量衡商三

工業に関する職業(八二)

印刷業八、写真師六、銃砲店三、陶器商八、漆器商四、塗物業

二、染物業九、瓦土器商三、靴製造業二、金物商八、時計商四、

金属具製造業六、製糸機械製造及販売業八、建具指物業一〇、

屋根板業一

衣服に関する商店(六七)

呉服大物商一七、古着商一六、綿商七、洋服商七、足袋商一七、

夜具貸付業二、蚊帳商一

紙・荒物・薪炭・油・下駄商(二〇八)

荒物二五、紙商一〇、石炭商七、薪炭商二八、石油・油・塩類商

一一、洋灯商四、蠟燭商二、下駄商一七、草履商三

和洋雜貨・小間物・書籍・古物商(五四)

洋物商八、袋物雜貨商一一、玩弄物商五、小間物商一二、団扇

商一、書籍店六、古物商一一

旅人宿・料理店・其他の飲食店(一二三)

旅人宿三一、割烹店二八、下宿屋一三、西洋料理五、牛肉店六、

豆腐商六、蕎麦屋一〇、すし屋五、飲食店一二、天麩羅屋三、

うなぎ屋四

米穀・肥料店(一三七)

米穀商一二二、肥料商一二、挽割商一、石灰商二

飲食に関する商店(一二七)

酒造業二、酒商四五、味噌油商二七、同製造業三、茶舗一二、

煙草商二九、製氷卸販売商三、ラムネ製造業一、牛乳搾乳業五

乾物・青物・魚商(八六、ただし植木職には他に教名)

青物乾物商二七、魚商七、魚乾物商二五、鰻鮓商四、素麵商二、

鳥商一、鶏卵鳥肉商一、蕎麦粉商一、秣味噌商三、飴商一、甘

藪商一、乾鰹鮓商二、植木商一、鯉商一、菓商一、粉商一、菊

蕪商三、笹折商一、焼麩商二、漬物商一

砂糖並に菓子商(六二)

砂糖商六、菓子商五五、菓子種商一

医薬並に人扱に関する職業(九八、ただし蹄鉄專業者には他に数

名)

業種及び売薬商一三、産婆四一、医師三七、薬剤師五、獣医及

び蹄鉄工二

男女理髪並に湯屋業(九二)

理髪業三九、女髪結四二、湯屋一一

代書人並に雇人受宿業(一〇、ただし雇人受宿業者には他に教名)

代書人九、雇人受宿業一

以上を整理すると、職種は十四項目、職業は百四種類、商家数は一千四百六十戸となるが、この中に現在の社会通念からみてその項目に入れておくのはどうかと思われる職業(注・工業中の陶器(商・明計商など)もあるにはある。それはそれとして、各項目に含まれた商家数の比率は次のようになる。(注・数字はパーセント、名称は省略)

蚕糸 二五・二一

土木

三・一五

工業

五・六二

衣服 四・五九

荒物 七・四〇

雑貨 三・七〇

料理 八・四二

米肥 九・三八

飲料 八・七〇

青乾 五・八九

糖菓 四・二五

医療 六・七一

髪湯 六・三〇

代書等 〇・六八

これによると、当時の市中でもっとも商家数が多かった職種というのは蚕糸関係の業種であって、これらは全体の四分の一にもなっていない。これに次ぐ職種には米穀肥料商・料理店などがあつた。

また、これらの商家の中には、同一の町内に同業者を数多く持ったものもあつた。それらは個々の町々の商業形態を特徴づけているので、その主なものを挙げると次のようになる。(注・数字は商家数、ただし同一町内に同業者が四戸以上あつたもの)

曲輪町(米穀商五、土木請負業四、書籍商四、旅人宿四、味噌醬油

商四、青物乾物商四、医師四)

北曲輪町(製糸業六、撚糸業六、薪炭商四、下宿屋六、医師四)

南曲輪町(撚糸業七、米穀商四)

堀川町(生糸のし糸屑繭商五)

田中町(旅人宿四、理髪業四)

本町(糸繭商一二、生糸仲買商七、旅人宿一一)

横山町(割烹店五、青物乾物商四、産婆四、医師四)

堅町(呉服太物商六、荒物商八、袋物雜貨商四、味噌醬油商四、

茶舗四、医師四、魚乾物商五、産婆九)

桑町(古着商四、紙商五、袋物雜貨商五、青物乾物商四、菓子商

四)

萱町(製糸業一〇、生糸のし糸屑繭商五)

紺屋町(割烹店九、米穀商四、理髪業四)

榎町(生糸のし糸屑繭商一四、割烹店七、女髪結六)

田町(米穀商五)



立川町(製糸業五、糸繭商二六、生糸のし糸屑繭商六、生糸仲買商

一〇、古着商八、荒物商四、米穀商五、酒商五、菓子商五)

連雀町(酒商五、煙草商四、魚乾物商四、菓子商七、女髪結五)

片貝町(生糸のし糸屑繭商五、米穀商五)

新町(米穀商五)

芳町(生糸のし糸屑繭商七)

天川村(米穀商九)

紅雲分村(糸繭商四)

前代田町(米穀商一九)

小柳町(製糸業五、糸繭商七、生糸のし糸屑繭商一〇)

細ヶ沢町(製糸業九、糸繭商三〇、酒商六)

諏訪町(糸繭商六、米穀商七、酒商四)

清王寺村(米穀商四)

才川村(製糸業一〇、生糸のし糸屑繭商五、生糸仲買商四、撚糸業

四)

国領村(撚糸業五、米穀商七)

神明町(産婆四)

向町(製糸業一七、糸繭商六、生糸のし糸屑繭商四、米穀商四、

女髪結五)

炭神町(糸繭商一〇、撚糸業四、米穀商一〇)

以上の町々で、市の中央部にあつたものには青物商・魚乾物商・荒物商・飲料商・料理店・割烹店・医療関係者などのような生産を伴わない業種が目立つが、本町や萱町などは中央でも例外であつて、そこには蚕糸関係の業種が多かつた。また、市の中央を東西に流れる広瀬川の以北一帯には、蚕糸関係の業種がとりわけ多い。しかし、米穀商や屑繭商などは地域の周囲に特に多くみられるものであつた。

ここで、当時の市中にあつた商家のすべてを、各町ごとにまとめてみると、それは第四五表のようになる。ただし、町によっては職業数が多すぎるので、ここではこれを項目ごとにまとめたため、職業名の具体性に欠けるものもできたが、それでも各町の特徴は掴み得る。また、前記の項目中には、関連性の薄い職種を連記したのもあるので、これらは表中に職種をうまく表現し得ないものもできた。

当時の町村中には、町内に主な商家を一軒も持たなかつた柳町や百軒町・萩村・市之坪などもあるが、これらとは逆に、この表のほとんどの項目に商家数を連ねた町々も多く、それは曲輪町・田中町・田町・横山町・本町・豎町・桑町・紺屋町・立川町・連雀町・諏訪町・小柳町・細ヶ沢町などとなる。中でも立川町・豎町・細ヶ沢町には商家数が多く、そこには各町平均の約三倍に当たる一〇〇戸からの商家があつた。

また、市中にあつた当時の商家を、職業形態によつて大きく分類してみると、それは第二表のようになる。もつとも、ここでは町内の商家数が四十戸以下であつた町々は、その町名を掲げるとどめた。

これらの商家形態を一層集約してみると、

一、蚕糸型の町

一五か町村、七三二戸、全商家比で五〇・一四%

一、中間型の町

一五か町村、二二三戸、一五・二七%

一、蚕糸以外型の町

八か町村、四九六戸、三三・九七%

となり、これによつても当時の前橋街というのが、生糸産業を主体にしていた街であつたことが判る。しかも、それらが市の中央を東西に流れる広瀬川の以南の一部と、以北の一帯に多くみられたのである。

第二表 各町の商家形態

中間型の町	蚕糸型以外の町	蚕糸型の町								区	
	そ紺桑横連曲豎 の屋山雀輪 他町町町町町	そ小榎北岩諏本向細立 の柳曲神訪ケ川 他町町町町町町	南	二	一	一	一	二	四	四	蚕糸
前代田町・天川町	四 一 一 四 四	二二 一七 一五 一六 一四 一九 二九 四〇 四七 戸	南曲輪町・萱町・芳町・片貝町・一毛町・才川町	四	五	二	一	二	一	戸	土木
	二二 一六 三	二 一 一 四 九 六 六 一 戸									工業
	四二五五九三	二 一 一 四 九 六 六 一 戸									衣服
	九八八三二	一 一 一 五 一 二 四 戸									荒物
	二二五七六七	四 一 四 四 二 三 一 九 八 戸									雑貨
	一九四四七六	一 一 三 六 戸									料理
	一六四〇四二二	一 〇 七 三 三 一 六 八 戸									米肥
	四 二三五	三 三 一 七 一 六 五 五 戸									飲料
	一四七〇〇五	五 二 一 七 八 二 四 三 一 戸									乾青
	二八七六六七	一 一 一 四 四 六 七 八 戸									糖菓
	三六三七三五	一 一 四 三 三 三 五 戸									医療
	二四〇二八七	二 一 五 四 二 二 五 七 戸									髪湯
	一〇一二七九二	一 七 二 五 二 六 三 六 戸									代書等
	一	戸									計
	五 一 六 六 六 八 一 二 三	四 四 四 四 五 六 六 五 〇 二 七 戸									

なお、当時の市中にあつた職種の中には、その後の時代の変遷によつて、前橋街から姿を消したものに、次のようなものがある。

製糸機械製造并同販売業（注・細ヶ沢町、片貝町各二、小）、古着商（注・立桑町四、横山）、挽割商（注・前代）、洋灯商（注・相生町、連雀町）、ラムネ製造業（注・小）、節折商（注・堅）など。

（『前橋市史第五卷』より）

## 四 交通 交易

テト馬車と昔の大通り 御者は当時の花形職業といわれ、また一般の人が馬車に乗ることは珍しいことでした。関口とくさんは次のように話しています。

「馬車が終りになるといふ噂を聞いたので、ある時親孝行をしようと思い、家へ帰る母親を、前代田の八幡様の東から六供のお寺まで乗せたところ、乗りもの酔いで降りても動けなくなり、電話もない時代だったから近所の人が知らせに来てくれて、親孝行どころじゃなかったよ」という話でした。揺れがひどかったようです。この話の記憶をたどってみると、大正十四年頃らしいことがわかりました。

テト馬車の立て場（現停留場）は、もと田町、野口氷店（表町一丁目）前の道を隔てた東の角地にありました。そこはいま上村商店南支店となっています。当時使っていた井戸は、つい最近までありました。

「前橋・新堀線の始発場所は、もとの田町だった」という人がいます。立て場を出発したテト馬車は、もと田町通りを南下し、前橋駅のすぐ西の大通りを走りました。前代田の踏切りを越えると、この道は現在、市民文化会館の西に通り抜けられますが、当時は県立農事試験場（昭和二十五年農業試験場と改称）の正門に突き当たってT字路になっていました。

この突き当たりを左折した馬車は、約二十ほど東進した所で、今度は右折して農事試験場のからたちの垣根沿いに、圃場内の道を南へ向って走り、現在南町四丁目の平山繁夫氏宅の南角あたり（以下この

南角あたりを「A地点」と称します）から市之坪へ入り、さらに南へ向って走りました。

からたちの垣根沿いの道が、昔の大通りでした。

馬車が右折した所から、圃場用に分流した川幅約一・五メートルの川が、右折した道に沿って流れていました。また、この右折した所には故若井三郎氏宅が、川を隔て道に面して西向きに建っていました。

今、市民文化会館の顕著なもので、ここ右折した地点を示すことは困難です。あえて平成大橋に通じる道路の北側で、この地点の対象となる場所をさがすと、その場所は、南町三丁目田村紹二氏宅と、小暮弘氏宅の間にある、幅約四メートルの道路の入口（以下この場所を「B地点」と称します）あたりになります。

圃場内の、からたちの道はたいへん淋しい道でした。暗くなった時など、この道を市之坪・六供方面へ帰宅する学校（久留万）の子どもや女性にとつて、この道は薄気味悪く、特に蝦蟇の鳴く時季には通るのが怖い道だったそうです。

圃場内道路の閉鎖後、若井宅は家の向きを北向きに変えました。道路の閉鎖された時期は、たぶん大正の末か昭和の初め頃ではなからうかといわれています。

（表町一丁目小林発三氏・南町三丁目若井里代さん・吉田恒吉氏談）  
テト馬車のことで、新堀町の田村千秋・古沢時松両氏の話聞く機会がありました。話の大略は次のとおりです。

車体の色で呼称された赤馬車と青馬車の二つのテト馬車(乗合馬車)が、前橋・新堀間を走っていました。赤馬車は新堀の故古沢菊次氏が明治四十三年(一九一〇)の一府一四県連合共進会の際に開業しました。それから約二年後、同じく新堀の故古沢門米氏(もんべい)が青馬車を開業しています。また、前橋・新堀間の料金は五銭位で、定員八人乗りの馬車は、それぞれ一日三往復程度走っていました。

『前橋市史・巻七』によれば、

その後大正七年ごろ、青馬車の古沢門米が全線を経営することとなり、大正十四年前橋市前代田町の宮地竹次郎が同区間に乗合自動車を運行することになったので、馬車は廃止となった。

とあります。なお、この収録時の談話者の一人に、当町内の故古沢梅太氏の名前が見えますが、同氏は赤馬車を開業した故古沢菊次氏の子息です。

テト馬車は、赤馬車・青馬車とも新堀町のそれぞれの自宅を出発し、仕事を終えると再び自宅へ帰って来ました。

この馬車のコースは、鶴光路町・阿内宿町(定方医院の東かた)・春日神社西の旧道を上り、現在の上佐鳥町公民館前を西へ進み、かない橋を渡り、六供町の飯玉(いだたま)のお墓の西の道を通って山田嘉平氏宅方向へ走りましたが、ここまでの途中に、いわゆる「四十八曲り」といわれた曲折の甚だしい道路がありました。山田宅南の旧道を西へ進んだ馬車は、六供町のまち中の道路を北上して市之坪へ入り「A地点」から「B地点」方向へ抜け、前代田町を経て、終点の田町の立て場へ到達していました。

馬車の通った六供町の旧道は、今でも昔の面影を残しています。

ちなみに信号機の「六供町」から前橋立工業短期大学付近の「上佐鳥町」に至る、県道前橋・玉村線のできたのは昭和七年(一九三二)

頃のことです。

福島橋のできたのが大正十五年(一九二六)です。それ以前、新堀から福島橋に至る間には端氣川があり、この川の「火の滝」の川上には一本橋しかなかったため、馬車が玉村町まで走っていたということはないだろうということです。

旧道入り口「A地点」のこと 区画整理で平山繁夫氏が家屋の移転をしたのは、昭和四十五年(一九七〇)夏のこと、この移転は南町四丁目大通りの北の方では早いほうでした。

平山氏は、職業がら移転先の地形は自分でしたそうですが、その仕事で、家屋の南東角のすわるあたりから、敷き詰められたように出てきた、ぐり石や砂利石を見て、かねて父親(故平山繁三氏)から聞いていた、旧道のもかど直感したそうです。それらの石は、まぎれもなく斜めになって、もと農事試験場の方へ向いていました。

ところで、平山宅の区画整理の時の家屋の移転は、道路に係って二回目の移転だったそうです。

話によれば、平山宅は家屋の南あたりから農事試験場の方へ走っていた旧道沿いに建っていました。その家屋の向きを七段道路に合うように変えたのが第一回目の移転でした。

一回目の移転後、つまり三回目の移転前の話になりますが、平山宅の南には小さな用水路を隔てて、いわゆるリヤカー道がありました。この道路上のちょうど平山宅の南にも、同じようなぐり石や砂利石がたくさんあって、これらの石が旧道のものだということを、平山氏は父親から聞かされていました。また、近所に住んでいた私も見ています。

二回目の移転によって、家屋が旧道の入り口近くに、より近づいたといえます。

残念なことに、第一回目の移転の時期については、前代田の故若井三郎氏宅（B地点）と同様、明確な特定はできませんでした。また斜めの旧道が、いつごろなくなったかを知ることもできませんでした。ちなみに、平山宅が区画整理時に移動した距離は、西へ八段、南へ十二段くらいでした。（関口勇市記）

南町四丁目の大通り 昭和六十一年十月にJ R前橋駅の南口が開設されました。

この南口に通じる南町四丁目の二十五段道路が市道認定になったのは昭和六十二年三月三十日のことで、市道認定番号は第〇〇一〇二二号（以下一〇二二号と称します）となっています。

この市道一〇二二号ができる前の大通りの道幅は約七段で、当初の道は砂利道でした。いま、舗装された南町四丁目の、北から南までのこの道の長さは、約三百四十段あります。

ところで、市之坪の大通りが北から南へ一直線ではなかったことがあります。

大正六年（一九一七）前橋市役所発行の地図には、平山繁夫氏宅の南角あたりの前述の「A地点」から、農事試験場のわきをやや斜めに走る道が描かれています。この道が、当時市之坪と前代田を結ぶ大通り（以下旧道と称します）だったのです。

平山宅から前代田十字路（信号機に「南町三丁目」の標示あり）に至る七段の大通りは、まだ載っていません。その間は約三百段ありますが、七段の大通りは旧道の廃止と係わって、廃止前にできたように思われます。

町誌をつくるうえで、この間の七段の大通りが、いつ造られたかを知りたくて、県や市の各機関をはじめ、これと思う人を探ね歩き、また地図などを調査しましたが、道路の造られた時期を確定することは

できませんでした。

ところが、子どもの頃から明治三十五年（一九〇二）生まれの故関口熊次氏（以下文中に父とあるのは同氏のこと）に聞いた次のような話があります。

大正十二年（一九二二）一月九日、兵役で入営するため、同時に入営する友人たちとそれぞれが馬に乗って、大勢の村人に見送られ前橋駅から出立した。往きは市之坪の故平山繁三氏宅南（A地点）からやや斜めに、農事試験場わきのからたちの道を通って、前代田（B地点方向）へ入ったが、大正十三年十一月三十日の除隊の時には、農事試験場の東の大通りが通れるようになっていたので、今、まんじゅう屋（深町）のある十字路から市之坪の大通りを通って上佐鳥の家へ帰った。

除隊という感激と、昭和五年（一九三〇）市之坪の大通り端に、家を建てて住んだという父にとって、前代田から市之坪への七段大通りは、よほど印象的だったのでしょうか、この話はたびたび聞かされました。

父の話から直ちに、大正十三年頃砂利の七段道路ができていた、と思うのは間違いだと思えますが、何度も聞いていたその頃は、何の疑いもなくそう思い込んでいたから不思議です。

大正十四年十月に父母が前代田八幡様の西石垣沿いに世帯をもったということや、実家がそれぞれ上佐鳥と六供にあつたということなどから推して、これらの区間の道路事情には明るかったものと思われれます。もっと詳しく聞いておけばよかつたと思えて残念でなりません。

この話についても思い当たる方面を探ねましたが、立証できる資料はありませんでした。

ところで、出来上らないが通行可能な道があります。時によれば、

そのような状態が長く続く道もあります。このような場合も「通れるようになっていた」といえるように思えます。

このあたりのことについて、明治三十七年（一九〇四）と同四十二年生まれの関口とくさんと石川たつきさんは、「除隊の時には前代田十字路と平山宅の間は砂利道になっていた」と話しています。

ところで、明治二十八年（一九九五）岩神町に創立された農事試験場が、前代田に移転したのは明治三十四年（一九〇一）のことです。

この区間の新道の建設は、農事試験場の拡張と係わっていったようにも想像されますが、前代田から市之坪へのこの区間は、前橋と玉村を結ぶ重要な道路の一部なので、南部の耕地整理が大正十三年（一九二四）一月に着手されると、より早く七ヶ道路として整備されたのではないのでしょうか。

この新道ができる前の、平山宅から北への道は、人が往来するような道ではなく、田圃中の細い道だったそうです。

ところで長い間、県道前橋・玉村線の呼称で親しまれてきた、市之坪のこの七ヶの大通りが、同路線の一部だったのは、昭和三十八年（一九六三）三月八日までのことです。

**七ヶ道路の舗装** 市之坪の七ヶ道路は交通頻繁でしたが、砂利道だったので、いろいろな不便がありました。いくつかをあげてみます。道路わきは溜った砂利で、歩行も自転車に乗るのも容易でなく、用水路は石で埋り、田畑に入った石は農具を傷めたり、また農具に当たった石は、その都度拾って捨てなければならぬ手間があるので、作業能率に災いがありました。風や自動車のたてるほこりはものすごいものでした。

道ばたの家では、ほこり除けに川（用水路・側溝）の水をひしゃくで汲んで撒きました。ほこりの立ち方はその日の風向きや風力によっ

て違うから、自分の家だけ撒けばよいというわけにはいかず、撒く場所や距離はそほ時によって決めたものです。乗合自動車がほこりといっしょに走っていたこともありました。

暑い夏の日などは、道に流れるように撒いた水も、すぐ乾いてしまうので、あちらこちらで一日に何回も水まきをしている姿が見られました。水まきは大通りに面した面の欠かせない仕事だったのです。

昭和十年（一九三五）前後の市之坪あたりの川は、養鯉業者が鯉に食わせるぼうふらを、すくい集めていたような川でしたが、流れる水はとてもきれいでした。また、車がはねた小石でガラスを割られたことも数多くありました。へこんで乾いたわだち跡に、数個残った小石は、車輪ではねられやすいので、道ばたに溜った石を凹部に運び、石どうしの作用で石の飛ぶのを防いだものです。音がするので急いで出てみると、小石をはねた自動車も自転車に乗った人も、すでに遠くに走っていることがしばしばありました。

当時大通りに面したガラス戸は、どこの家も腰高で上に小形で薄いガラスが六枚入った引戸だったから、割れやすかったのかも知れませんが、迷惑なことでした。

市之坪の砂利道の七ヶ道路が舗装されたのは、昭和三十三年（一九五八）のことです。

当時、県庁の関係課職員で、直接現在の監督に当たった六供町の平井茂氏の話によると、「すぐやれ、というので直営事業で実施しました。急がしい仕事でしたが、付近の住民の協力も得られてしっかりした舗装ができました」ということです。

この舗装については、自治会長前田みつさんの、石井繁丸市長を通しての県への働きかけや、前橋南部地区連絡協議会（会長石関徳太郎氏）が昭和三十三年（一九五八）に提出した「県道前橋・玉村線の一

部路線変更並びに舗装について」の請願書などが、早期舗装化のうえで大いに関係していたということです。（関口勇市記）

「南町四丁目誌より」

**交通** 伊香保・四万へ行くのに滝窪・宮城・富士見の人が立川町を通っていた。

荷鞍に杵をのせ、片方へ荷物、もう片方へ人が乗っていた。七十年位前の話である。

小坂子の人の嫁入り行列が、伊香保の木暮金太夫さんの所へ行く途中、立川町を通った。

危いから馬の後ろへ行くなと言われた。

牛方の宿が立川町の立花屋、連雀町の本あゆだった。

馬を動かさないようにするには、端網で前足二本をしぼっておく。

山の方の人が馬に米を乗せて売りに来た。町の方が一俵三十銭は値が高かった。

諏訪町に馬を止めて、食事をとらせてくれる家があり、農家の人が酒を飲みながら食事をしていた。（千代田町二丁目）

**ガソリン車** 道を車が通ると、その後を追いかけて排気ガスの臭いをかいだ。（表町一丁目）

**トラック** 昭和四〜五年頃、アメリカから輸入されて走っていた。チューブの中までゴムがつまっていた。

四輪のトラックは千六百円もした。（表町一丁目）

**電車** 小学校六年の時、電車に乗って伊香保まで行った思い出がある。（旧一毛町）

前橋駅から伊香保まで電車が出ていた。喚乎堂前と住吉町ですれ違ひになっていた。

国道一七号に曲る所でよく脱線した。

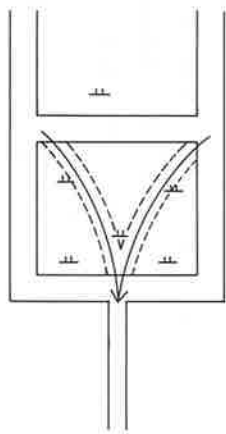
ポイントの切り替えは、車掌が走って行ってやった。

遠足で伊香保まで電車に乗って行った。その後歩きで登り、下りは渋川まで下って来て電車に乗った。

伊香保は石段の両側に宿があるだけで、福一も修学旅行用の建物があり、お湯だけいっしょだった。（表町一丁目）

**スグジ道** 田の中を通りやすいように歩いて通った道のこと。

（文京町二丁目・天川原町）



**古河線** 五間道路といい、草の生えた道だった。

南側はすべて桑畑で、天川二子山古墳の桜が見えた。西の方は田んぼだった。

行幸道路の記念にイチヨウを植えてあり、広がったがバラスの道だった。（文京町一丁目）

**道普請** 町の石置き場・砂利置き場から石や砂利を出して工事をしていた。（表町一丁目）

**実正の渡** 渡しの東の方は、たいこ橋になっていた。これは明治二年か三年に造ったもの。その後、明治十二年四月に就安橋ができたが、十月に大水で流れてしまった。

この実正というのは、上杉謙信の家来、宇佐美実正からきたものという。宇佐美は橋の名に、実正は渡しの名になった。



般の鑑札 (南町二丁目)

え以上もある松があり、うつそうとしていた。

御嶽山、八海山が祭つてあった。(南町二丁目)

橋 町内に三つあった。市之坪、天川原の境の二ツ橋、松が枝橋、境橋だった。

二ツ橋は東道の橋だった。(文京町二丁目・天川原町)

台橋 木の橋だった。石の橋になって「うてなはし」と書いた標柱が建っていた。(文京町一丁目)

黒い木の橋だった。たもとお稲荷さんにお金をあげる人がいると、登校する子がお金をもらった。(文京町三丁目)

たて場 今の朝日町四丁目の四ツ角がたて場になっていて、馬車、運送車の発着や折り返しの場所になっていた。普通の人は出かける時歩きが普通だった。(文京町三丁目)

市 暮から正月にかけてが一年で一番賑やかだった。

市は四九の市といって、月に六回開かれた。戸板をみかん箱に乗せた店が出た。

ブリキのおもちやは一割三銭だった。オットセイの肉も売っていた。これは心臓によいといわれた。

植木の市、桑苗の市もあった。

市のとりしきりは、雑商組合が警察から許可をもらい、出店者から金をとった。

商店の前に店を出した人は、お金を少し商店に置いて行った。ガマの油売りが刀を抜いて口上をいったり、詰め将棋で勝ち負けで一円とったりも多かった。

その頃片原まんじゅうが一個二銭で今の倍くらいあった。精進あげの天井が十五銭だった。(千代田町二丁目)

行商 どじょう、卵を自転車のかごに入れて売りに来た。荷台の大きい実用車だった。

魚屋はリヤカーに魚を積んで廻って来た。(文京町三丁目)

薬屋 富山から一年ごとに来て、家に置いてある薬のうち、使った分だけのお金を集めた。おみやげに紙ふうせんをくれた。(文京町三丁目)

(文京町三丁目)

店 昭和十年頃、駄菓子屋が二軒くらいだった。昭和二年にカフェのライオンという店があり、白いエプロンをつけた女給がいたが、戦時中に肉屋になった。(南町四丁目)

掛け売り 店の方で町を四つに分け、順に御用聞きに回って来た。給料日に集金に来た。(表町一丁目)

店の戸 板戸でガラスは入っていないかった。上下する戸で、戸をお客が叩くと上に持ち上げ、下から品物を渡した。(千代田町三丁目)

店の景品など フロシキ・マッチ・フキン・瀬戸物の茶碗を配った。

暮には手拭い、お盆にはウチワを配った。

盆・暮には前掛けや麻の手下げ袋を、問屋が小売店にくれて使ってもらった。(表町一丁目)

店の売出し 暮の売出しは十二月二十五日から始まり、正月は二日の初売りから始まった。



元日は午前中休んで、午後準備して夜中の十二時から始めた。景品をつけた。

新聞にチラシを折り込んだり、チンドン屋でチラシを配ったりして宣伝をした。(表町一丁目)

お中元 七月下旬から八月上旬まで、上役や得意先に送った。缶詰、卵の折り詰め、ビール・サイダーだった。ビール・サイダーは縄でしばった。(表町一丁目)

アーケード それまで五びの広さまででないと、アーケードが作れなかったものを、広くても作れるよう運動して弁天通りのアーケードを造った。

三千万円の融資を受け、店の店員・広さ・間口で店ごとの負担金を決め、十年間で返した。(千代田町三丁目)

治水の碑 利根川の治水工事の完成を記念して作った碑で、昭和三十三年に作られた。

昭和二十二年から三十四年まで二十八億二千万円の金をかけ、関根町から大手町群馬大橋までの八キロびの長さの堤を作った。

この工事の作業に刑務所の受刑者八百人が出ている。昭和二十五年十二月に大渡橋作業隊を開設し、一年間延べ三十万人が働いた。

(敷島町)

くみとり 近郊の百姓が家ごとに約束をして汲み取りに來ていた。豎町は国分村、田町は六供村と市之坪村から來ていた。

汲み取りのお札は野菜だった。(表町一丁目)

馬車鉄道 明治二十三年七月十二日、上毛馬車鉄道株式会社が岩本町(現在の住吉町一丁目一五)に営業許可を受けて開設された。資本金は六万円。(従業員は四十名、客車数二十二台、馬五十三頭であった)馬車鉄道は旧市内では、客の希望に応じてどこでも停車した。そして

これより下小出・上小出・荒牧・関根・田口(金前)を通り箱田にて馬の交代が行なわれた。板東橋で利根川を越えてから、半田・松原・中村・大崎を経て終点渋川新町に至っていた。近郷の人々はもとより、遠くは東京から伊香保・四万・草津への温泉旅人はすべて利用し、以後鉄道は荷物の運搬も扱った。

其の他前橋駅方面は、乗合馬車を別途に出し連絡をしていた。営業は午前五時から午後七時迄、一時間毎に発車していた。発車五分前になると手振りの鐘が鳴らされ、駅の出札口で切符が発売された。料金は前橋駅より岩神まで三銭、岩神より田口迄九銭、渋川迄十二銭で、当時としては高い乗物だった。特殊なラップを吹きながら運行していたため、人々は「トテ馬車」と呼んで親しんでいた。黒い制服を着た御者が、二頭の馬で客車一輛を引き、定員は十名で満員になる事は稀であった。又車掌も乗っていた。早朝又は夜間の運行には、ガス灯とランプを使用した。特別に「上等馬車」と呼ばれた客車があり、異人、事業家、有名人のほか旧前橋城主も乗車したとの事である。当時の岩神駅は、駅長が田部井氏で、ほかに駅員が四名ほどいた。株主総会もここで開かれたという。駅前の道中は六間位で駅の前に柵があつて、夜になるとこの間に客車を置いた。駅の向い側には馬が十頭ぐらい常に待機していたし、また駅の裏側には、馬の食糧倉庫があつた。二十年の間、地域社会の交流発展に役立った鉄道馬車も、時代の変遷には勝てず、共進会の開催とともに電気鉄道へと発展的に消えていった。会社の設備も新しい「電車会社」へ受け継がれ、御者達も電車の運転手となつていった。

前橋の共進会へ電灯を点けるのを目的の様に利根発電株式会社が創立された当時、本社は東京市京橋区弥工門町にあつたが、後日前橋豎町八十七番地高田園茶店の前に転じて來た。が、其の後北曲輪町二五

○番地に転居した。現在の東京電力群馬支店の所、元前橋高等女学校が紅雲町へ転じた跡地があったので、大正二年八月二十二日新築移転した。その頃、前橋の大きな建物で、群馬県農工銀行（現在の第一勧銀前橋支店）のレンガ造りだけ位。木造ではあつたけれども、洋館建ての利根発電は、堂々たるものであつた。その北隣に共進会のとき第二会場となつた洋館建物と並んでそびえ立つた。反対角に前橋警察署。その南に前橋電話交換局があつた。高崎水電株式会社がすでに開業して、前橋は高崎水電が供給権を持つていた。利根発電は利根郡利南村上久屋に発電所を作り、北から南へ送電していたので、渋川町は利根発電が供給していたが、恐らく共進会場へ電気供給することを契機に、渋川と前橋と区域の交換が成立したものであろう。

前橋電車が同時に利根発電の経営であつたことと思われる。高崎水電は前橋市の表通りを主に供給していたが、裏通りはランプであつた。夕方になると、脚立を持つて軒先の軒灯に点灯して歩く姿が目には浮かぶ様だ。市内の製糸所交水社（現在月世界）は、広瀬川の水を取り入れ水車を廻して発動力としていたが、製糸・精米などに利用する水車が町の本通りのそこに見られたものである。尚、当時の利根発電の役員は、葉利利蔵（利根発電社長、衆議院議員（太田町）、大塚久右エ門（太田町）、大沢惣蔵（利根発電支配人）専務、小林庄太郎（佐野町）、萩野万太郎（足利町）、山口平四郎（沼田材木町材木商）、久保田健次郎（前橋堅町茶商）、小泉善六（前橋紺屋町質商）、高斉義一郎（前橋堅町戸野屋呉服店）以上右記の方々であつた。

又当時の電灯料金は左記の通りである。

五燭三十八銭（四十五銭）、十燭五十八銭（六十八銭）、十六燭六十八銭（七十八銭）、二十四燭七十八銭（八十八銭）、三十二燭八十八銭（九十八銭）、五十燭一円二十銭（二円五十八銭）、百燭二

円（二円）

（ ）は改正後

動力料金一（三馬力（七円）、四（五馬力（六円五十銭）、五馬力以上（六円））

昼夜間は十四円五十銭であつた。

かくして共進会は電灯事業を躍進させこれを契機に前橋も急激な発展をなし、ここに市内交通機関として前橋、渋川とを連ねた馬車鉄道が馬を電気に乗りにかえた。この年、新時代の衣装をつけたチンチン電車がはじめて現れたのである。電車は共進会に間に合わず、名古屋より一時借り入れ同年九月ようやく購入できたのである。そして明治四十三年四月二十一日代表者高橋諄三郎氏、資本金十五万円により、前橋電気株式会社が創立され前橋―渋川間の電車が開通したのである。

明治四十三年の秋、一府十四県連合共進会が前橋で開かれた時の知事は神山閔次知事だつた。共進会は日露戦争後の生産工業を盛んにするために各地で開催され、関東では八王子、足利、長野、甲府などで開かれたことがある。前橋の共進会は明治三十九年の山梨県甲府、四十一年の長野を上回る大規模のもので、参加県をあげると青森、岩手、宮城、福島、山形、千葉、茨城、栃木、埼玉、東京、神奈川、山梨、長野、新潟の各県と群馬であつた。会場は現在県民会館のある所で、日吉町（当時の清王寺町）を第一会場とし、第二会場は電々公社のあるところへ、ここは参考館となつた。第三会場は紅雲町の県立女子高校のところへ、ここは畜意振興のための牛馬を主とした畜産の会場で、ほかに私設の外国館というのが設けられた。共進会の会期は、九月十七日から十一月十七日迄の六十日間、従来の共進会は昼間だけの開場であつたのを、この結果電気が必要になり、あらかじめ共進会を見越した人達が利根川を水源とした利根発電会社を作り、利根郡白沢村の上久屋に発電所を設けて送電を計画し、建設工事に馬力をかけ、そ

れが見事に成功した。共進会は会場にイルミネーションを飾り、又市内にも電灯をつけて電車を走らせる様になった。

チンチン電車（我々の愛称）は共進会の開場とほぼ同時に開通し、共進会の会期中花電車が出た様だ。花電車は一日何回も出るわけでないので、「花電車は何時頃通るのでしょうか」と聞いて、「何時頃に通る」といわれ、その時間前にそれを見ようと子供も大人も詰めかけて、電車が来ると嬉しがり、電車の後を追いかけるという騒ぎだった。松屋（住吉町交番前菓子屋）のおぼさん談「私はその花電車に乗せてもらい、当時とても鼻高々だったですよ」；しかし、花電車は電力を喰うので、一台きり動かせなかつた模様だった。電車は共進会日（九月十七日）に車体を名古屋から借りて間に合わせ、新しい車体が揃つたのは翌年であった。花電車の飾り付けの様子は（松屋さん談）、現在の私達の考える華やかな花電車と違って、ブリキで花型を作り色を付け裏側に電球をつけた。そんな花を電車の前面のまわり両側面車体の色変りのラインや各窓のまわりなどに取り付けた。色彩はとにかくその照明の素晴らしさは、当時の人を驚かせ、押すな押すなの人垣が豎町まであふれた。花電車に限らず乗つたり乗せてもらったという事は大変自慢の種であった。

ちなみに当初の電車料金は、一区間三銭で（田中町〜丸ト製糸）、一般職人の月給二十銭から三十銭であり（明治四十二年前後・師範学校教員初任給十六円五十銭）、代用教員十二円、共進会入場料は子供五銭、大人十銭だった。

明治二十二年頃 乗合場車 岩神―両毛鉄道（私鉄）、前橋駅迄三銭  
明治四十三年迄、上毛馬車鉄道 岩神駅―田中町―前橋駅まで三銭  
明治四十三年九月 前橋電気軌道 岩神駅―田中町―前橋駅まで三銭  
昭和二十五年頃 前橋市―渋川新町間 五円。

前橋駅（田中町）より渋川新町迄の駅名

・印交換場所

前橋駅（田中町）―会議所前―曲輪町（或は煥乎堂前）―豎町四ツ角―細ケ沢―上小出―大師―荒牧―関根―法華沢―田口―橋橋―下箱田―坂東橋―半田―松原―中村―渋川駅前（伊香保行乗りかえ）―渋川新町

バス関係は大正初期設楽氏、斉藤氏（横浜の人）によって運行されていたが、大正十年頃琴平町（住吉交番斜め前の空地の所）で横田勝次郎氏（田中屋旅館先代）、茨木平作氏、大木氏、小畑氏（リリー美容院）四名の合資によって、はやぶさ自動車商会が設立された。昭和十六年頃群馬合同バスに合併す。昭和十八年頃群馬バスと合併、その他富士見乗合自動車（小林耳鼻科の所）代表古屋清太郎所長高津氏や、榛名合同自動車があり、昭和十六年富士見乗合は上毛中央自動車（代表岩崎メ吉氏）大正十二年創立に買収される。東武バスは昭和初期運行された。

電車の運行に関しては、廃止される迄運転などに勤務されていた岸公雄さん、塩原守さんのお二人にインタビューした。軌道中は鉄道と全く同じ一・五坪（一四三・四五坪）で、モーターは三十馬力二台を搭載し、メーカーはシーメンス（独）デエカー（英）と（後には明電舎とか国産品も使用した）、電力直流五百五十V、定員三十八名であった。満員の場合は百名位乗れ、道路側へは人がはみ出してぶる下がったりしたため、ケヤキ製のボディの両端がたれ下がってしなうほどだった。

質問一「電車は何台位ありましたか」

答「最盛期は三十台位あったかな、市内唯一の安い乗物だったからね。貨物専用車は二台で、真ん中にボールの立っているやつですよ。（一日二回運行）御召電車もあったんですよ。真ん中に仕切

りがあつて前に待従武官、後に皇族が乗り、内部には鏡がついて具合の良い電車だつたな。うーん、コントラーはシューメンスでいい電車だつたな。ローソク立もついていたよ。停電の時を考へてあつてね。扇風機もあつたな。カバールの無い羽根だけのヤツで俺も持っていたが、どこかへ行つちやつたなあー」

質問二「修理なんかはどうしたんですか」

答「修理は殆んど渋川新町（渋川終点）でした。田中町（前橋駅前車庫）は検査位でした。新町には木工部と鍛冶屋（鉄工部）があつて電車のシャーシ（台車）は昔のもの（殆んど輸入品）をそのまま使つて、傷んだボデー（箱）は電車大工（関根の泉酒店のおじいさん（八十一歳）達が全部新しく作り直しては使用してしましたよ。モーターも全部巻き変え再生しては再使用し、タイヤ（鉄車輪）は、フランヂ（アゴの部分）が減れば溶接で肉盛りして、旋盤加工しては何度も使いましたよ。ブレーキシューも鋳物で作り、台車以外は全部手作りで取り変え取り変え使っていましたよ。特に電車には具合の良い電車と悪い電車があつて、配車係が「○さん今日は○号に乗車してくれ」と言われても「あれは具合が悪いから○○号にしてくれ」なんてこともよくありましたよ。タイヤは前後二輪宛タイプでした」

答「そうなんです。運転台はクサリで仕切りがあるだけで、昇降口には戸が無く前面にガラスがあるだけでした。お客さんは車内へ入つて戸を締めるからいいけれど、風通しがよすぎて寒かつたですよお……」

質問四「赤旗を立てておく電車を止めてくれたそうですね」

答「交換所の近くの民家に委託して交換電話を置き、交換連絡とか荷物の集荷受け渡しをして頂いていたので、赤旗が立っていると、

車掌が受取りに行き積み込んだりしましたよ。その他にも集荷を積んだ家もあり、荷があると赤旗を立てていましたよ。面白いのは、乗り遅れた人が駆けながら「その電車待ってくれ」と追いかけて来る。車掌が運転台迄続いている紐を引いて、運転台の警報をチンと一つ鳴らすと、運転手は電車を止めてお客を乗せることもちよいちよいありましたよ。呑気な良き時代だつたね（笑い）」

質問五「運転は」

答「運転台にはコントラーという箱があつて、シリーズとパラリーに別れていた。①②③が現在のロウ、④がセコンド⑤⑥がサード、⑦⑧がトップの役目をしています。その隣の大きいハンドルは、手動ブレーキで、警笛のペダルを足でポンポンと踏んでチンチンと鳴らして運転ということ。カーブ交換所の出入りは減速したり、ブレーキを使ってスムーズに電車の横揺れは少ない様に運転をします。交換所の出入りとか、進行方面の交換には、ポール（パンタグラフ）の先から下つている紐を引っぱつて、トロリー線（架線）からはずして、進行方向反対側に廻す。そしてトロリー線へポール先端を接触させ下つている紐を車掌室の処へ結んで置く。しかしトロリー線が切れたり、ポールが何かの調子ではずれると、ポンとはね上つて立つてしまい、困る事がありましたよ。それからお客さんの中では「まけてくれ」と言う人がいて、私なんか「ハイまけますよ。待つて下さいね」と次の停車所迄余分に乗せてやつた事がありましたよ。私の友達の運転手は「満員の場合お客さんの中へ、積めて下さい、積みなれば楽がつめます」と車内へお客を押し込み押し込み、中へ入つて行きいつ迄も出て来ずに「お客様がつめてくれなければ、電車はいつ迄も動きませんよ」とすましていた人がいましたよ。ヘッドライトは前後

へ取りはずして付け変える様になっていて、各自名札を付け岩神車庫の運転者控室の壁に並べて保管してあって、運転手はそれぞれ前方が明るくよく見える様、反射鏡を磨いたり、角度を直したり工夫していましたよ。電灯は電源が五百五十Vのため、百V五灯以上つけないと電球が切れてしまうので、車内へ三灯、ヘッドライト一灯、尾灯兼車掌室へ一灯という具合です。急行とか特急は無いけれど、修学旅行等は（注）遠方から伊香保など旅行の場合は、よく田中屋旅館へ団体さんが泊っていたから行った様です。普通全部渋川新町駅で乗り替え伊香保へ向ったんだけど、乗り替え無しで（ポイント切換のみで）貸切りとして運転したんですよ。（渋川迄五十分位かかった）」

質問六「事故なんかは」

答「ごんじの様なレールタイヤ、車体なので脱線事故はちよいちよいあった。けれど慣れたもので、車掌と二人でタイヤの下に「かいもの」をして、電車を少しずつ動かしか何とかレールに乗せたものでしたよ。私も向き合い（上り下り電車が連絡ミスによって、一つの交換所に入って衝突しそうになること）を一回。大きな脱線は、最終便なのでいい気持で走らせちゃって。道路東側の端を走っているレールは、勿論道路を横断して反対側の民家迄突込んで、こりちやいましたよ。（怪我なし）四十分位かかって何んとかレールに乗せましたが、当時はこの間トラックが一台（ワイヤーを借りアースにした）来たのみで交通防害にならなかつたのだから、如何に交通量が少なかつたかわかりますよね（ホー）。死亡事故は三回程。大きは衝突は一回（怪我は運転手一人、（注）一年間では無いのです数十年間にですぞ）。俺は（塩原さん）トロリー線が切れた時、その線を四歳位の女の子が握ってレールを踏んだの

で電気がアースされ、足のカカトに電気が抜け怪我をし、そこへ兄ちゃんが助けようとして妹さんに触り、又怪我をするという事があつてこりましたよ。又線路工夫は全員ハッピを着ていまして、衿に社名を入れて仕事をしていたよ」

質問七「空襲について」

答「昭和二十年七月三十日、運転手は佐藤さんという方で、岩神駅ではもう警戒警報が出ていたが、駅長命令で出発し、丸登の辺で空襲警報となりました。艦載機が見えてきたので、小出町の中島クリーニング店前で電車を止め、お客さんを近くの桑島へ避難させたのです。既に遅く、機銃掃射を受け、中島さんでは子供さんが二人、乗客も死者と負傷者を出し、その上通行人にも死傷者あり。電車は三十数発被弾。（十九発との説もあり）レールも天端が弾丸で欠損。トロリー線のカバーパイプの真ん中も弾丸がブチ抜いたり、機銃の威力はすごいものです。後で中島さん方からは電車を止めたからだ、大変うらまれましたが、気の毒でしたね」

質問八「つらかつた事は」

答「冬、寒かつたのはつらかつたね。あと田口の橋山を通る時、冬とか台風の後にはよく落石事故があり、お客さんに手伝つてもらつて石の向う側の道端まで転がして片付けたりしましたが、怖かつたですね。それと人の休日には忙がしくて休めないことですね。友達づきあいの出来ない事、朝早くから一日中終電車迄はつらかつたですね。他に台風の時などは、停電して歩いて帰つて来たことですね。こんな事もありましたよ。キティ台風の時、坂東橋が落ち、交換電話線が切れたので俺（塩原さん）は利根川で産湯を使つたんだと……。まだ若かつたからロープを背負い五米位（？）の波の中を泳いで線を引きましたよ」「その時私（岸さん）の電車は

洪川の松原で停電し、お客さんはトラックで洪川へ送り、我々は岩神駅まで帰って来いとこの指示で、歩いて帰り始めましたが坂東橋が落ち、前橋へ来ると大渡橋も流れていました。びっしりになりながら、利根橋を渡り、朝の四時頃やっと帰って来ましたね」

質問九「良い事は」

答「余り無かったけれど、当時電車の運転手はトップ技術者であり、花形職業であったので、女性のがれと、とてもよくもてた様ですよ。運転台に乗せる女性はそんな関係が多かったのではないかな……(笑い)。正月、伊香保線なんかは旅館組合からいたみ樽(四斗)の寄付があり、酒を汲み交わし車掌なんか酔っぱらっていても運転してきました。良き時代でしたね」

〔住吉ものがたり〕より〕

## 五 信 仰

お寺 妙安寺、大蓮寺、明聞寺に分かれている。妙安寺は檀家が四百〇五百軒くらい。大蓮寺はすこし少ない。明聞寺は百軒くらい。

(千代田町三丁目)

町内のお寺は長昌寺、正幸寺、松竹院、隆興寺になっている。

(南町四丁目)

寿延寺が最も多い。他に多いのは松竹院で、他には橋林寺、妙安寺、

孝顯寺、養行寺がある。(六供町)

妙安寺 入口は今の所ではなく、西にあった。

了覚寺が入って左、今の墓地の所に建っていた。(千代田町二丁目)

高岑院 もとは立川町にあり、明治二十七年に移って来た。

(朝日町一丁目)

尾曳稲荷 御神体は白い狐にまたがった姫神。文政六年に正一位を貰っている。この時、五百貫持って伏見に行き、棟札を貰って来たという。百貫は一両にあたる。(朝日町一丁目)

今の建物は宝暦九年の棟札があり、諏訪町の大工、伏見かへいじ、てるしげが造ったことがわかってる。(朝日町一丁目)

神社の祭礼

・一月一日「元旦祭

・二月三日が追儺式。昭和八年から始まったもので、もとは神社でやっていたが、中断が二回ほどあり、今は自治会や各種団体共同で境内でやっている。

始まった昭和八年には、年男は二円で十六名が参加してやっている。

・春まつりは四月十五日で、十四日が前夜祭

・秋まつりは九月十五日で、十四日が前夜祭

神社の運営費を集めて、春・秋の費用にしている。

神主は前代田の代田さんで殿様と一緒に川越からついて来たという。

氏子は一丁目と二丁目、三丁目にもいる。(朝日町一丁目)

人形大祓じがたおほほい 男用の青と女用の赤の人形を切り抜き、名と年齢を記

入し、息を吹きかけ、体の悪い所をさすり、罪、ケガレを移し、神社でお祓いをする。

毎月一日。例祭日になっているので、毎月一日にお祓いをしている。

十五日も祭日になっている。(朝日町一丁目)

八幡宮 神社の神主は広幡宮司から桜井なおまる宮司(文学博士)、そして昭和三年からは、宮沢宮司へと変わった。

神社には白木の鳥居があり、十二月十三日にしめ縄をかけた。

(文京町二丁目・天川原)

市之坪村の稲荷神社は、小柳町の愛宕神社に合併してカラになっているという。(南町四丁目)

本殿は明治四年に再建し、棟札がある。

御神体は右手に矢、左手に弓を持っている。五十センチくらいの木像である。

明治四辛未年 神主

正遷宮八幡大神

足仲彦尊

誉田別尊 鎮座

息長足姫尊

廣幡亮充源親廣

九月吉日

事由

言伝ニ白ク宮社之儀ハ勸請大同三年中村民鎮守之為メ誉田別命ヲ以テ祭神としテ創立シ八幡宮ト号スト云フ殊ニ当社沿革モ正歴年迄ハ不詳建久年中社殿改造其後貞享三年中焼失ス仍テ元禄元年戊辰八月十五日新築ス後明治四年八月九日改造ス(六供町)

本町の八幡宮の元宮という。神社の所はナラの林になっていて、<sup>(省想)</sup>ありなし塚の上に祠が立っていた。

川越からお殿様が前橋に帰って来た時、分社を連雀町に祀って城を守らせた。

祭神は品田和氣命<sup>ほんだわきのみこと</sup>

江戸、本町の田が天川原に三段あった。大鳥居の張り替えを天川原青年会がするならわしだった。(文京町二丁目・天川原町)

淡島さま 南町の淡島様は女の人の病気に効くということで、三のつく日にお詣りの人が多かった。花柳界の人が髪の毛とおこしを結わえてお祈りしていた。(表町一丁目)

女の人の病気に効くことで信仰された。腰巻きと髪の毛を奉納して願かけした。三日、十三日、二十三日が祭日だった。

縁日にはおばあちゃんが鉦を鳴らして、念仏をとなえていた。



城東三丁目 淡島様

大中小のけやきの三つのみこしがあり、若い衆が刑務所の裏へ行って利根川にほうり込んで来る。一週間くらい入れておくので、水をふくんで重くなつた。(表町一丁目)

八坂神社 七月十四日・十五日は八坂神社の祭で、参道に籠灯を上げた。籠灯にはキュウリやナスの絵を書いた紙を貼った。のぼりがあった。祭の時にはあげた。

みこしを青年がかつぎ、夕方から夜にかけてかついで回った。重いものだった。このみこしをかついで六供と宗甫分が喧嘩をした。

(南町四丁目)

熊野神社 立川町の鎮守。千代田町三丁目は六割が元の立川町である。今の神殿は昭和三十四年に新築したもので、鉄筋で平らな屋根だつた。雨もりがあつて修理した。

百年たつた、からたちの垣根をとり、つつじの垣根にした。

(千代田町三丁目)

行者 島田ゆうはくという行者がいて、御嶽教の信仰を広めていた。修行して大教師になった。(文京町二丁目・天川原町)

屋敷神 古い家には屋敷神があるが、屋敷神のある家はごく少ない。小川さんの家にはある。平方さんの家には稲荷様がまつてあり、屋敷神のことは屋敷稲荷といっている。(住吉町二丁目)

御岳山 八幡宮の山は御岳さんを祭っている山である。(六供町)



三峯さま・古峯さま 代参で代表の二人が参詣して、おこもりをしてお札を受けて来た。昭和の始めまでやって来た。三峯さまは足尾線で通洞から歩いて行った。(六供町)

馬頭 船渡しする時に暴れて利根川に落ちて死んだ馬を葬らうために祀ったもの。(南町二丁目)

薬師 二月八日は薬師さまのお祭りの日である。

もともと今の道路の所にあり、昭和十三年に工事が始まる時、工事に来っていた信沢さんがかついで水神社に移した。十三年の暮のことである。

翌年の三月に信沢さんが急性肺炎で死亡し、またその時に七十戸くらの村で十三人も死者が出たので、元に戻すことにした。高橋さんの地所にまつり、昭和十四年に子供の奉納相撲をして祀ったら、たたりがなくなった。(南町二丁目)

庚申講 一年に二回、春と秋に集まっている。集まっている最中に地震があると、もう一回やらなくてはならないので、今は早目に終りにする。(六供町)

庚申塚 神社の裏、西の所で丸い塚なので、道が曲っている。

小さいお堂があったものらしく、作るにあたり盛り土をしたものだろうか。

その上に後に覆屋を作り、改築して今は鉄筋の建物が建っている。(朝日町一丁目)

庚申 天川二子山古墳の中腹に、庚申塔がたくさん並んでいた。

(文京町二丁目・天川原町)

イボ神さま 床の石を持って来てイボをこするとイボがとれる。とれたら二つにして返す。よくとれると評判で、遠くから人が来た。

(六供町)

祭り 年番が二人で準備した。「八幡武大神」ののぼりをあげた。百社まいるの人がよく来た。

出征の人が挨拶をして、見送りの人がパンザイをした。

(文京町二丁目・天川原町)

おまいり 毎月八日、芳町の香竜さまへ行ってキマメを買ってもらった。

片貝町の鬼子母神へもお詣りに行った。(文京町三丁目)

百軒町の高岑院へ四つの子を連れて厄除けに行った。

芳町の鬼子母神へもお詣りした。

太田の香竜様へもお詣りに行った。

弁天通りの香竜様(大蓮寺)へ毎月お詣りに行った。

近所の人の子供を七つ坊主にするとうちの女の子でも頭を坊主にした。

成田山が芳町にあった。そこへも厄除けに行った。

安産になるようにと下大屋の産泰様へお詣りに行った。そこまで歩いてお詣りに行った。底抜けびしゃくをあげて来た。嫁さんを連れて行った。

青柳の大師様は一月五日がご縁日。ここへお詣りに行って帰って来てからおしるこを作って食った。

愛宕様の初詣は最近やりだした。役員の人は大晦日の十時頃から神社へ行って準備をしている。お詣りに来た人に甘酒を出している。

初詣には総社の明神様へ行った。八幡様へ行く人もある。青柳の大師様へお詣りに行く人もある。

初詣にはあんまり遠くへ行かなかった。

迦葉山様へは商売繁昌のためにお詣りする人もあった。

お天狗さんのお面を借りて来て、翌年、ご利益がありましたといって、



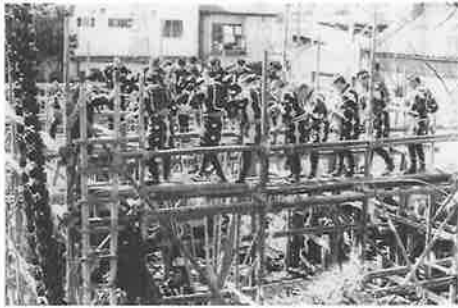
平和町 雷電神社雷電図



平和町 雷電神社



平和町 雷電神社古文書（板倉 雷電神社へお金をおさめた領収書）



大蓮寺 建物の地固め作業



諏訪神社（城東町）

もう一つ買って納めて来た。  
 昔、少林山へ行ったことがある。一月六日の頃から七日にかけて行った。高尾山へは講をつくってお詣りに行った。赤城神社には特にお詣りに行かない。榛名神社の人も行かない。  
 渋川の笠間稲荷へお詣りに行ったことがある。ここで交通安全、身体健全、家内安全ということで祈願した。ここへは昔から行っている。（住吉二丁目）  
 おめこさま 芳町の養行寺の鬼子母神の祭りは、おめこさまとって、大変な人手だった。（千代田町三丁目）  
 裸みこし 六供の八幡様へ移した妹神を迎えに行かないと、みこしがかつげなかつた。  
 提灯をつけてむかえに行つた。  
 村境に八丁ノを立てる。  
 矢田川でみこしを三回洗い四時くらいから町内を回りだす。  
 回るみこしに町の人が水をかけてくれる。（南町二丁目）  
 稲荷神社 高台の神社で矢田とは別だった。区長をしていた梅津さんが自分の土地を提供して公園を作り、そこに神社を移動した。

お七夜にお詣りに行くし、元日にはオサゴをあげた。(文京町一丁目)  
稲荷神社は本村市之坪大道西に鎮座、村社稲荷神社として南から小さいながらも参道が約七十歩もありました。

この神社の由来は古文書によりますと、本社方九尺、拝殿間口三間、奥行三間一尺五寸、明治十三年十月八日開届

また『神社明細帳写』によると、群馬県管下上野国東群馬郡市之坪村字中通 村社稲荷神社 祭神倉稻魂命 由緒不詳 境内五十四坪 民有地

境内末社 根本社 祭神大山祇命 由緒不詳 社字 方八寸  
一、境外所有地 耕地六畝二十歩 本村字大道西 地価金三十円八十錢六厘 一、氏子十戸 一、管轄庁迄距離二十五町 享保十三戌申年(一七二八)三月の『上野国群馬郡市之坪村検地水帳』一冊があります。また文政辛巳四年(一八二二)二月の『地図』には神社境内の回りには大きな堀があります。神社水田反別六畝二十歩 氏子十戸で管理していました。当時、前橋人口(享保十三年)総人口六百五十八人、男三百七十八人、女二百八十人、市之坪村総面積 十二町八反四畝十歩と記録されています。

#### 『区内議定書』(村のきまり)

- 一、新年会 年々元日午前八時ヲ期シ稲荷神社へ参会スル事 一戸ヨリ一人以上出席スル事 但シ不止得事故の場合此限ニアラズ
  - 一、春期祭典 二月十五日
  - 一、秋期祭典 十月十九日
  - 一、節 句 三月・五月共男女共初子ダケ祝ウ事
  - 一、兵士入営帰郷 入営者一名ニ対シ金二円饑別スルコト
- ソノ集金法ハ一等二等區別シテ毎戸ヨリ寄付ス

#### ル事

兵士宅ハ送迎ノ際稲荷神社ニ於テ酒二杯、毎戸招待ハ除ク事、但シ縁故ノ為メ招クハ此限りアラズ、送迎ハ毎戸窓出ニテ盛会ナス事

旗持ニハ一回金十錢払フ事

寄付ハ伍長一名、青年一名ニテ執行ス

儉約ヲ旨トシテ行ヒ 手ツダイハ各自テキギ頼

ムノ事

一、仏 事 従来通りトシテ成可節儉ニナス事

右之通り協議ノ上相定候也

明治四十四年十月二十日

高橋五郎吉 外二十三名 一原文のまま

市之坪の住人 市之坪の住人は生れた時から、稲荷神社へ母親に抱かれ初詣りから始まり、七五三の参拝から入学の参拝、岳士の入営帰郷等すべてが神社が中心でありました。

おいなり様掃除 学校に入学すると、すべてが六・五年の先輩の指揮で、毎日曜日毎に朝六時からお稲荷さまの掃除に行きました。これが子供のいこいの場でもあり、先輩からいろいろの指導を受けて成長する楽しい時でもありました。

稲荷神社の境内 稲荷神社は約七十歩の参道があり、赤い鳥居をくぐると、右側に梅の古木、その隣に銀杏の巨木があり、また近くに枝振りのよい紅葉の木があつて子供達はよく登り遊んだものでした。その奥の方に杉の木があり、鬼ごっここの時には好都合の木の影を利用してたものです。左側には椎木があり、その下隣に約三歩の石山があつて上に御嶽山神社の石塔がありました。石山の北側に順次、石宮が八つ

ありました。神社の左側前にも紅葉の木があり、子供向けの手ごろな木なので、登っては飛び降りて遊んだものでした。前述の銀杏の木の紅葉の木と杉木の紅・黄・青の調和のとれた絵が、小学四年生の図面の木にモデルとして掲載されていました。

お稲荷さまのおこもり 毎年十月十九日のお稲荷祭を子供達は四五日前から楽しみにして農家の五・六年生が先輩になり、家から寝巻を持って来て十二・三人が神社の狭い部屋で、太鼓を打つやら腕相撲するやら、いろいろな遊びに疲れて寝込みます。子供の空腹は早く、四時頃になるとさかんに太鼓を打ち鳴らすと、やがて一番のりの赤飯が届く。子供達はワァーと喜び、温かい赤飯にとび付くが、先輩になると、その内に栗の入った赤飯が届くの待っていて、栗赤飯に手を出します。年の功です。

子供相撲大会 戦前は各村でも神社の庭で子供相撲大会がありました。子供達は他の村に出掛けて相撲をとり、賞品を貰うのが楽しみでした。賞品にはホーキ、バケツ、学用品等が多く、相撲は幼児から学年別に高学年になり、元気に相撲をとつたものです。子供相撲の後に、大人の相撲が何組かありました。中には、仲人さんと婿さんが相撲をとり、婿さんが大きく負けて仲人さんに勝ちを譲る場面もあって、村中総出の賑やかな催しでした。

力石 今のように娯楽が無い頃に、若者達の楽しみの一つに力自慢がありました。誰々は十三歳で米俵を持上げたとか、誰々は十六歳になっても米俵が担げないとか、力自慢する時代であって、市之坪を初め近郷の各村の庭に必ず力石が置いてありました。農閑期や祭の時には若者が集まり、十五貫(五六・二五キログラム)、十八貫(六七・五キログラム)、二十貫(七五キログラム)の力石を担いで自慢し、一番強い者が大関の名のりをあげたという話を老人から聞いております。

### 御輿

昭和十年、市之坪に御輿が造られました。御輿の製作は大工の前川龍太郎・前川安五郎氏兄弟によつて造られたもので、総樺造りのがっしりした重量のある御輿です。御輿は大人が二十人以上でなければ担げない。道路や家々の前に祭礼の灯笼が夜道を照らしている。御輿は神社を出て道々をワツシヨイワツシヨイ掛声をかけて採み歩き、各農家の庭で採み続け順次家を廻り、農家では御神酒を出して祭を盛り上げ、七月十四日の夜遅くまで祝が続きます。

小さな村に大きな勝るもの 一つには稲荷神社の祭幟旗で、長さ四間(七<sup>尺</sup>二<sup>寸</sup>七<sup>分</sup>)幅二尺五寸(七十五<sup>分</sup>)の大きな祭礼幟旗でありました。幟の中央に大きく、御祭礼と書かれた左側下方に小さく、氏子村中と書いてあるもので、旗柱を立てる時は農家をはじめ村人達総出で柱を立てたものです。

二つには長箱です。長箱は代々の区長宅に引継れる歴史ある文獻、昔からの重要書類が入っていた桐箱製のもので真黒に煙に染つた長箱です。大きさは高さ一<sup>尺</sup>二<sup>寸</sup>七<sup>分</sup>、幅五<sup>寸</sup>七<sup>分</sup>、奥行四<sup>寸</sup>七<sup>分</sup>程の長箱が二個ありました。区画整理で稲荷神社を取壊した時、長箱は書類とともに焼却されたことは残念に思います。

三つには、おかんばあさんのことです。おかんばあさんは厩橋城の奥女中頭として勤めた人で、美人で教養があり立派な人格者でした。村でも大変自慢にしていた婦人といわれていました。

旧市域の神社一覽

(群馬県所蔵「明治十年神社明細帳」)

社名	所在	祭神	祭日	境内末社	由緒
東照宮	東群馬郡前橋北曲輪町	徳川家康 菅原道真	六月一日	稻荷社	慶応三年旧前橋藩主松平大和守武州川越より移城の際、彼城内より遷座廃藩後は氏子持ちとなる。
長壁神社	東群馬郡前橋曲輪町	瓊々杵尊、木花開耶姪命、武甕槌命	三月一日	なし	勸請年不詳、旧藩主松平大和守崇敬にて年々金穀の寄付あり、武甕槌命は明治十年九月合祭する。
稻荷神社	東群馬郡前橋百軒町	倉稻魂命	九月十日	なし	文明六年太田左金吾持資造宮、寛延二年旧城主酒井氏再建
八幡宮	東群馬郡前橋連雀町	誉田別尊、比咩神、息長足姫尊	八月十五日 毎月十五日	菅原社、殿島社、琴平宮社、□□社、稻荷社、三峯社、宇部社、大國主社	創建不詳、貞観年中山城国男山より勸請の由、然して前橋町の総鎮守なり。近古元龜・天正以来旧城主累世崇敬あり、特に酒井松平両城主代々特別の尊崇あり、明治五年第一大区郷社、同六年三月県社に列す。
諏訪神社	東群馬郡前橋連雀町	健御名方命	七月二十七日	なし	明応年間勸請という。当時前橋城及び市街利根川洪水のため信州諏訪神社より分霊を勸請し、洪水鎮護の神と称し爾來代々の城主、土人等厚く崇敬する。
八坂神社	東群馬郡前橋連雀町	素戔鳴尊	八月十四日	なし	文明年中の勸請にて前橋総社市街の市神といわれ旧城主代々崇敬厚く祭典の節は供米六俵、太刀一腰、神馬一匹奉獻の例ありしと伝う。
稻荷神社	東群馬郡前橋中川町	倉稻魂命	十一月十五日	なし	不詳
神明宮	東群馬郡前橋堅町	大日靈尊	九月十六日	三峯社、菅原社	勸請年不詳なるも古より神明山と称す。社殿によると文明年間に宮殿再建という。
稻荷神社	東群馬郡前橋堅町	倉稻魂命	十一月十五日	なし	勸請年不詳、当社は神明山にあり伊勢の内外宮に倣って神明山に相並ぶ倉稻魂命は外宮大神と同神のためか
熊野神社	東群馬郡前橋立川町	櫛御氣野命、大屋津姫命、五十猛命	九月二十四日	松尾社、八幡宮、菅原社、三峯社	勸請年不詳、社記には元禄十五年旧城主酒井忠孝再建とみえる。
雷電神社	南勢多郡前橋向町	大雷命	四月一日	三峯社	慶応元年邑楽郡板倉村雷電神社より勸請する。
稻荷神社	南勢多郡岩神村	倉稻魂命	九月十九日	なし	勸請年不詳、旧領主酒井雅楽頭崇敬の社であった。

雷 神 社	稻 荷 神 社	八 坂 神 社	愛 宕 神 社	諏 訪 神 社	八 幡 宮	白 山 神 社	太 田 稻 荷 神 社	寄 居 稻 荷 神 社	琴 平 社	諏 訪 神 社	飯 玉 神 社	琴 平 社	稻 荷 神 社	絹 笠 神 社
東群馬郡天川村	東群馬郡前橋萱町	東群馬郡前橋横山町	南勢多郡前橋小柳町	南勢多郡前橋諏訪町	南勢多郡萩村	南勢多郡清王寺村	南勢多郡清王寺村	南勢多郡清王寺村	南勢多郡清王寺村	南勢多郡才川村	南勢多郡才川村	南勢多郡国領村	南勢多郡岩神村	南勢多郡岩神村
火雷命	倉稻魂命	素戔鳴尊	火産靈命	健御名方命	誉田別尊	菊理姫命	倉稻魂命	倉稻魂命	大物主命	健御名方命	保食神 大日靈尊	□物主命 大山祇命	倉稻魂命	保食神、木花開 邪姫命、植山姫 稚産金山姫命、 一命、天目
三月二十五日 八月二十五日	十一月十五日	八月十日	九月十五日	九月二十六日	九月十五日	九月二十九日	十月十五日	九月十日	九月二十九日	九月十九日	九月十九日	七月十日	九月十九日	三月十五日
菅原社	なし	三峯社、 社、琴平社、 産泰	三峯社、 社、大山祇 社	御嶽社、 社、菅原社、 稻荷	石神社	なし	なし	なし	なし	なし	菅原社、 社、石神社、 稻荷	稻荷社、 社、淡島社、 八坂	殿島社、 社、菅原社、 秋葉社、 琴平	なし
不詳	不詳	不詳	不詳	もとは一毛村内にあって本郡中の古社と伝えられ、文明年中に 箕間明玄入道によつて今の地に遷座したという。前橋に城主在 城中は代々祈願所となつていた。上野国神名帳に従三位諏訪若 御子明神とあるのは当社だと口碑にあり。	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	勸請年不詳、旧領酒井・松平城主代々の厚く崇敬するところで あつた。	勸請年不詳、祭神は保食神を主とする外五神も亦古来の合殿で 旧領主大和守をはじめ領内農桑民の崇敬厚く遠近人の参詣多 し。



旧市域の寺院

寺院名	所在地	宗派	本末関係		由緒
正幸寺	東群馬郡前橋芳町	浄土宗	山城国愛宕郡 東山知恩院末		円蓮社大嘗上人証榮和尚文龜元西年十月十五日旧城内水曲輪に堂一宇建立、第八世経善良融上人の代に城主平岩親吉に実子なく尾張正幸寺に傳依す。第九世深誓上人の代、明暦七年申年城主酒井雅一頭城地御用を付、当芳町へ地所替えになる。旧酒井家老高須隼人の居宅を除き本堂、末寺等残らず焼失す。よつて、寄付願ひ文久元年八月に本堂を再興する。
(地藏堂)	東群馬郡前橋芳町 正幸寺内	浄土宗		勝軍地藏	当山第八世経善融上人、城主平岩親吉の命により慶長六年高岳院殿追善のため、同人葬儀跡に堂一字を建立し、勝軍地藏を安置する。明暦二年正幸寺城内より当芳町に所替えの砌、地藏堂も移転する。
隆興寺	東群馬郡前橋芳町	曹洞宗	同引紅雲分村 竜海院末	釈迦仏	寛永十三年三月二十九日酒井雅楽頭忠世開基する。
養行寺	東群馬郡前橋芳町	日蓮宗 本成寺派	越後国蒲原郡本成寺村 本成寺末	宝塔多宝 釈迦	天正七年三河国酒井河内守重忠の母君当寺に帰依創建、天正十八年武州川越に所替えにより随従、慶長六年前橋所替えの砌御供仕、城内高浜曲輪に寺地を給う。後利根川洪水欠地にて明暦年中に当芳町に移転する。
(鬼子母神堂)	東群馬郡前橋 養行寺内	日蓮宗		鬼子母神	不詳
般若寺	東群馬郡前橋 片貝町	天台宗	南勢多郡竜蔵寺村 竜蔵寺末	弥陀如来	年歴不詳、中興開山大阿闍梨堅者法印春海慶長十八癸巳年
天王寺	東群馬郡天川村	天台宗	那波郡西善村善養寺末	阿弥陀如来	不詳
光明院	東群馬郡天川村	天台宗	同郡六供村寿延寺末	阿弥陀如来	不詳
大慶院	東群馬郡天川村	浄土宗	新田郡入太田村 大光院末	阿弥陀如来	不詳
孝頭寺	東群馬郡天川村	曹洞宗	下総国結城町孝頭寺末	釈迦如来	開基は幼名松平五郎八郎、寛永元年八月十九日訪て結城七郎開基と名乗り越前勝山城を領した砌、彼の旧國菩提寺の寺号を勝山に移し、祖父陽山孝頭寺と朝実父孝頭寺秀康の法号を山寺菩提寺と用ひ、侯追福のため泰陽山孝頭寺と分寺号にて建立、同家の本菩提寺となる。以後松平家の泰國替ごとに従ひ、慶応三年前橋入封の際には十八郷町正幸寺に明治五年十月まで借寺、同曆同月当地へ新築移転する。



高岑院	(阿弥陀堂)	(観音堂)	大蓮寺	大泉寺	源英寺	寿延寺	冷泉院	長昌寺	(開山堂)	龍海院	観音寺	永壽寺	松竹院
群馬郡前橋立川町 <small>(東久)</small>	東群馬郡前橋立川町大蓮寺内	東群馬郡前橋立川町大蓮寺内	東群馬郡前橋立川町	東群馬郡堀川町	東群馬郡神明町	東群馬郡六供村字南	東群馬郡紅雲分村字村内	東群馬郡紅雲分村字村西	東群馬郡紅雲分村龍海院内	東群馬郡紅雲分村字村北	東群馬郡前代田村字三前原	群馬郡天川原村 <small>(東久)</small>	東群馬郡天川原村
曹洞宗	浄土宗	浄土宗	浄土宗	真宗	曹洞宗	天台宗	曹洞宗	曹洞宗		曹洞宗	天台宗	日蓮宗	曹洞宗
橋林寺末 <small>南勢多郡前橋向町</small>	同町大蓮寺持	同町大蓮寺持	山城国愛宕郡東山知恩院末	山城国愛宕郡下京常葉町東本願寺末	同郡紅雲分村龍海院末	新田郡世良田村長楽寺末	同郡同村長昌寺末	武蔵国児玉郡骨波田村長泉寺末		三河国渥美郡大久保村長興寺末	同郡六供村寿延寺末	下総国葛飾郡真間村弘法寺末	南勢多郡前橋向町橋林寺末
釈迦文仏	阿弥陀如来	朝日観音	無量寿如来	阿弥陀仏	釈迦牟尼仏	阿弥陀如来	弥陀如来	釈迦如来		釈迦如来	千手観音	宝塔多宝釈迦	釈迦仏
橋林寺十二世天巖巽堯和尚の徒弟、龍怒僧慶安三年十月二十八日創建。	不詳	不詳。但し明治十二年四月十八日焼失	開基開山超蓮社勝誉文益、創建元龜二年	開基了寿は旧前橋城主酒井忠清家臣俗姓本多丞忠久で、東本願寺教如上人の教えに随喜して弟子となり、元和九年三月城内に一字を建立し大泉寺となす。第二世了応の代万治九年境内を上地として前代田村の内に替地を拝領、今日に至る。	酒井氏開基	不詳	不詳	永正十六年己卯十月長野信濃守開基する。	不詳	酒井氏開基	不詳	旧領主松平大和守播州姫路在城の寛文十庚戌年六月開基、以後国替ごと随に随行し慶応三丁卯年武州川越より当所に移転飯堂のころ明治四年十一月飯本堂を建立す。	永禄元年四月八日台僧照惣鑑創建

千日堂	薬師堂	(聖天堂)	東福寺	(太子堂)	政淳寺	明聞寺	了覚寺	隆勝寺	妙安寺	(薬師堂)
東群馬郡天川村	東群馬郡天川村	東群馬郡前橋芳町 東福寺内	東群馬郡前橋芳町	東群馬郡前橋榎町 政淳寺内	東群馬郡前橋榎町	東群馬郡前橋榎町	東群馬郡立川町	群馬郡前橋立川町 (東久)	群馬郡前橋立川町 (東久)	東群馬郡前橋立川 院高岑内
曹洞宗	天台宗	真言宗	真言宗	真宗	真宗	天台宗	真宗	真宗	真宗	院同町高岑持
同村孝頭寺持	同村天川寺持	同町東福寺持	南勢多郡日輪寺村 日輪寺末	同町政淳寺持	山城国愛宕郡下京常葉 町東本願寺末	同郡紅雲分村寿延寺末	山城国愛宕郡下京常葉 町東本願寺末	同町妙安寺住職兼務	山城国愛宕郡下京常葉 町東本願寺末	薬師如来
阿弥陀如来	薬師如来	大聖天歎喜	阿弥陀如来	聖徳太子	阿弥陀如来	弥陀如来	阿弥陀仏	阿弥陀仏	阿弥陀仏	不詳
不詳	不詳	寛徳年間、宥智和尚の代に天宮、庚申堂を南勢多郡川端村東福寺中に 建立し、大聖天歎喜天、青面金剛明王を安置す。慶長年間前橋芳町へ 東福寺移輪転の際同断引移と伝稱す。	寛徳年間南勢多郡日輪寺住職宥智の代、観世音御供所として同郡川端 村に一字を建立し、東福寺と称す。十五代宗順の時前橋城主酒井氏暇に よつて慶長七年寅三月前橋芳町へ移転すと伝えられる。	天保五年三月中先住信是信仰によつて創立	建長八年辰六月三河国碧海郡赤法村に一字建立浄妙寺と称す。十六世 超意の代寛永二年酒井氏の招きで前橋城内に堂宇を建立して移転。貞 享三年政淳寺と改称。享保十七年利根川洪水により境内流失のため翌 十年当町に移転。	開基年不詳、中興開山大阿闍梨春海法印元和壬戌年八月	開基年不詳、俗姓山城国加藤右兵衛尉、天福元年下総国に坊舎を建立し て川越山了覚寺と号す。その後酒井河内守の招きにより天正八年に武 蔵川越山了覚寺に上野前橋に移転。明和七年二十三世倫往死去、後無 住となり妙安寺管理。文政元年寂靜法師二十四世を継いで別立し、明 治六年堂宇再建して今日に至る。	寛文年間越後国村上に創立、以来旧松平大和守の招待により諸方を移 転。元治二年前橋に移り廃藩の際に住職を土族へ結び、寺名を本 山へ返奉。本山はその寺号を拾ひ寺務を同宗妙安寺に兼務させる。	開基有縁の衆生を化益し、天正八年十五世成空は酒井河内守に從い川越山最頂院 妙安寺と号す。天正八年十五世成空は酒井河内守に從い川越山最頂院 移立に付き、当寺傳來の壽像内府所望ありて本願寺へ進納。東本願 寺取立に付き、古書等を拝領。その後代々登城の砌には大判巻物、時 服を賜はる。	開基有縁の衆生を化益し、天正八年十五世成空は酒井河内守に從い川越山最頂院 妙安寺と号す。天正八年十五世成空は酒井河内守に從い川越山最頂院 移立に付き、当寺傳來の壽像内府所望ありて本願寺へ進納。東本願 寺取立に付き、古書等を拝領。その後代々登城の砌には大判巻物、時 服を賜はる。

森 巖 寺	(観 音 堂)	橋 林 寺	地 蔵 堂	阿 弥 陀 堂	観 音 堂
南勢多郡萩村字萩 小路	南勢多郡前橋向町 橋林寺内	南勢多郡前橋向町	南勢多郡六供村字 南	南勢多郡六供村字 南	東群馬郡紅雲分村 字北
浄 土 宗	曹 洞 宗	曹 洞 宗	天 台 宗	天 台 宗	天 台 宗
山城国愛宕郡東山 知恩院末	同町橋林寺持	利根郡上苑知村 龍華院末	同村寿延寺持	同村寿延寺持	同郡六供村寿延寺持
阿 弥 陀 如 来	聖 観 世 音	釈 迦 牟 尼 仏	地 蔵 菩 薩	阿 弥 陀 如 来	馬 頭 観 世 音
不 詳	開基長野景信の本尊一厨子秘仏	文明七末年厩橋城主長野左衛門尉景信旧城内金井曲輪に建立、青松山本橋院と号す。御用地につき慶安二月当向町に移転する。	不 詳	不 詳	不 詳

# 六石造物

大手町二丁目 県庁土堤

1	番号	
記念碑	名称	
460・193・28	高・巾・厚	
前橋城址碑 勅撰議員正四位勲三等文学博士重野安繯撰 (撰文略) 明治四十一年三月從五位伯爵松平直之題額 正五位日下部東作書 田中禾年刻	銘	文

大手町二丁目 高浜公園

2		
紀功碑		
285・117・15		
宮崎有敬翁紀功之碑 正二位大勲位候爵松方正義篆額 (撰文略) 明治四十年五月貴族院議員從二位勲二等男 爵榎取素彦撰 藤生高書 井上澹泉刻 前群馬県令榎取君功德碑 參謀總長兼議定官陸軍大將大勲位熾仁親王 篆額 (撰文略) 明治二十三年十月元老院議官從四位勲四等 文学博士重野安繯撰 元老院議官從四位勲三等金井之恭書 宮龜 年刻字 (裏)群馬県下有志者建立 発起人(名前多数)		
3		
功德碑		
307・185・21		

大手町一丁目 虎姫観音堂

4		
聖観音		
180・50・30		
無銘		
5		
字賀神		
45・35・35		
無銘 蛇体		
6		
弁財天		
80・50・40		
無銘		

大手町一丁目 長壁神社

7		
由来碑		
97・68・8		
長壁祠址「ここは長壁祠のありしところなり」長壁祠は前橋城の守護神にて「転封移城に関する奇しき幾多の伝説を生む」古前橋研究会		
8		
水天宮		
61・37・7		
水天宮「九繯溝□□(近世末カ)		
9		
二十三夜塔		
61・51・22		
二十三夜		

紅雲町二丁目 龍海院

18	17	16	15	14	13	12	11	10
寒 念 供養塔	庚 申 塔	燈 籠	如 意 輪 觀 音	聖 觀 音	延 命 地 藏	馬 頭 觀 音	地 藏 菩 薩	結 界 石
122 66 65	41 28 16	155 42.5 42.5	70 31.5 28.5	102 82 78	84 83 73	132 51.5 23	49 40.5 32	199 171 36
(左側面)天文四己未天十月一日「下廣澤村 建立 福島中	(裏面)文化六己亥「十二月吉日(台石は別) 庚申塔 (右側面)施主福島平右衛門 (正面)毘舍闍尊天王	(竿)寛文十一辛亥天七月十四日	(基礎)右(女性名三十二名) (正面)女人講中 (左)(女性名三十名)	(右側面)弘化三丙午九月吉日 宝曆壬午四月辛未「当山二十卷世造立	(八角台座)成仏給聞「得多大畢竟尊像聞名 無縁(聖觀音と一對丸)	(台)此馬也「大旦那所納」乃先込「君乘馬 也畜」子当院八年「以天保十五甲」辰年八 月一日「斃」二十六世雄道代	馬頭觀世音 無銘(近世中期丸)	(右側面)雜時享保十一年霜月八日「当院十 七葉立是 (正面)不許葷酒入界内

大手町三丁目 源英寺

21	20	19
庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔
83 48	167 120 17	92 67 12
庚申 (裏)万延元年「極月日(八名の屋号と名)	寛政二戊戌年「庚申塔」四月吉祥日 講中 [衛] [林右エ門] 須藤理右エ門	庚申塔(書家銘あれど不説) (裏)萬延元年庚申十月敬建「一万塔拝禮大 願成就」上州碓氷郡上秋間村「願主秋 間儀兵衛

千代田町一丁目 神明宮

27	26	25	24	23	22
菅 原 神 社	手 洗 石	門 柱	庚 申 塔	庚 申 塔	青 麻 大 明 神
79 60 92	46 77 43	250 35	107 50	78 53 12	58 38 25
(左右三十名の氏名略)	寛政三辛亥季「春正月吉日 (台右)中島氏門人(台左)女連中	安政三歲次丙辰夏五月「堅町氏子中	猿田彦大神「萬延元季庚申九月吉日」荒井 文七建之	猿田彦 (裏)慶応三丁卯年五月吉日「大谷字三郎	青麻大明神

28	道祖神	93・44・25	(右)弘化三丙午歲正月吉祥旦 (正面)道祖神「一徳齋書」㊦
29	手洗石	57・100・57	奉納 (裏)須田傳吉「竹内久四郎」荒井甚八「襟川勘兵衛」関口善八「同文右工門」櫻井佐兵衛「文化十三丙子九月吉日」
30	鳥居	270・380	(右)宝暦元年辛未十一月吉日 (額)太神宮(裏)慶純謹書 (左)御鳥居寄進講中
31	玉垣		豎町氏子中「嘉永五壬子龍集夏六月」 (西)文久三年癸亥秋九 (東)豎町氏子中
32	石橋		

岩神町 原島屋店先

33	道標	55・23・23	享保十七壬子天正月十三日「右水沢道」左江戸道「石田八右衛門」飯塚傳左衛門「松村勘八」岸忠右衛門「同喜平次」同政右衛門「同伊右衛門(移設したもの)」
----	----	----------	---

大手町二丁目 前橋市立図書館

34	道標	25・50・90	北大道「東さんたい宮」西まいはし「南いせさき(元荒子町と荒口町の境にあつた)」
----	----	----------	---

紅雲町一丁目 長昌寺

35	地藏菩薩	100・75	慶安五壬辰年四月下旬「奉逆修彫尊像為」 道師台巖住「代田山房門」俗名館 左工門
----	------	--------	---

住吉町 橋林寺

36	光明真言塔	115・117	文化元甲子年(円周に光明中真言梵字)「奉仲春吉祥辰」法印大観講協「町小禾与八郎」
37	結界石	105・29	(右)施主前橋向町小禾安太郎 (正面)不許輩酒入山門「建之」 (裏)天明三癸卯「前橋青松山橋林寺」
38	観世音	255・140	明和「年庚寅天」観世音菩薩「十一月吉祥日」
39	手洗石	55・130	万延元庚申年「四月吉日」向町世話人「刀屋八十七(他七名略)」
40	庚申塔	87・35	寛政元己酉年三月「青面金剛」桑町稲村伊兵衛
41	庚申塔	50・20	文久二戊辰十二月吉日「庚申」
42	庚申塔	73・47	庚申 (裏)横町「鈴木兵七」黒崎甚右工門「松村三内」月壽市郎兵工「発倉甚兵工」池谷権左工門「天明八戊辰年」仲呂
43	馬頭観音	50・21	文久二戊辰十二月吉日「馬頭観世音」

44	地藏菩薩	享保五庚子天八月
----	------	----------

本町三丁目 薬師堂

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	
庚申塔	庚申塔	庚申塔	道祖神	道祖神	大黒天	名号塔	回国塔	大国主神	馬頭観音	
150 95	105 70	122 52	53 58	102 51	59 32	130 70	120 70	95 105	87 45	
庚申「萬延元庚申歲」夏五月庚申日申刻録行妙書 ㊤ 片貝町中	庚申「寛政十二庚申年」十一月吉日」片貝町中	為諸願成就也」庚申塔 寛政十二庚申歳霜月大吉日	双体像 無銘	文化元年大歳甲子秋九月吉日」道祖神	大黒天」文化元季甲子九月吉日	(裏)安政三丙辰年秋日造立 (台)念仏講中	南無阿弥陀仏」妙哲行者 (左)孝子田中宗兵衛	(右)願主願誓正翁居士 (正面)宝永五戊午年」奉納大乘妙典回国六十六部」十一月十六日	万国主神 菅生陽謹書 (裏)元治元歳在申子夏四月	万延二年歳在辛酉青陽吉祥日建之」馬頭観世音

55	馬頭観音	馬頭観世音
----	------	-------

文京町 八幡宮

56	道祖神 (兼道標)	道陸神」天保二辛卯年」十二月吉日」右さねまさ」左はぎハラ
86 41		

文京町 八坂神社

62	61	60	59	58	57
道祖神	道祖神	庚申塔 (兼道標)	庚申塔	一字一石塔	護摩千座 供養塔
102 60	90 52	161 65	78 38	130 45	120 50
当所講 〇〇」道祖神」寛政六甲寅歳十二月吉祥日	道祖神 (裏)明和七庚寅年三月吉日」天川町」若者中	庚申塔 寛政三辛亥歳三月吉日」東日〇〇」西さ柵 〇〇」当町連 〇〇」	享保七壬寅龍集」庚申供養塔 講中」四月吉辰」義利」義清」福田氏」 〇〇」氏 〇〇」氏 〇〇」氏	(右)五穀成就萬民快樂 (正面)大乘妙典一字一石塔 窓月亭書 (左)午頭天王御寶前 (裏)天下泰平国土安全 (台)氏子中」宝曆元年」辛未中冬」天王寺十 一世元服	護摩千座供養塔」寛政十乙卯年」二月吉祥日」慧光

文京町 相統庵

70	69	68	67	66	65	64	63
念 仏 塔	庚 申 塔	地 蔵 菩 薩	庚 申 塔	庚 申 塔	地 蔵 菩 薩	地 蔵 菩 薩	百 番 供 養 塔
120 31 26	62 28 10		62 25 14	94 32 23	38 30 13	65 54 25	83 44 38
(右)文政三庚辰年 (左)十一月二十二日 (台)念佛惣講中(二十二夜塔カ)	享保 [ ] 天「奉庚申 [ ] 十一月 [ ] (日月二猿)	享保十八癸丑天(地蔵立像)六月十六日	(左側)(三名氏名略)(白・月・二鶏二猿) 月吉日 (正面)享保三戊辰天「奉納辰日供養」二一 仁兵衛 (右)今泉 [ ] 兵衛「小沢長右之門」野村	(右)寶永元年甲申九月 [ ] 「松本久兵之」 小林九兵之「高山文助(青面金剛立像)」 (左)これより左 二ノ宮道「上町 [ ] (二 鶏、二猿、日月、六臂像)	(右)文政四辛巳年「十一月 [ ] 新町」念 仏講中	(台)施主「当町」新町「念仏」講中「願主 善心」天明五乙巳年「十二月 日	百番供養塔「右江戸」左日光 (左裏)安永六西歲十二月吉日「中川町」大 河原定八

平和町一丁目 雷電神社

71	72
庚 申 塔	庚 申 塔
111 75 11	90 69
猿田彦大神「八十五翁伝平書」石工黨翠山 刻 (裏)明治三十一年二月向町鎮座雷電神社氏 子総代「昭和七年三月迄此間三十五年 就任余生於猿歳」今年当七回期之猿歳 依而為記念建之「昭和七壬申歳十一月 十五日」岡部傳平	寛政十戊午年十一月吉日「庚申塔」中河町 組講中

三河町二丁目

72
庚 申 塔
90 69
寛政十戊午年十一月吉日「庚申塔」中河町 組講中

三河町一丁目

73	74	75	76	77
二 十 二 夜 塔	聖 徳 太 子 塔	石 橋 供 養 塔	不 動 明 王	庚 申 塔
69 29.5	65 28.5	100 21 20	92 50	36 23
女人講中(如意輪坐像)文政二己卯年十月吉 日 文政元戊寅歳「聖徳太子」九月吉日 (台)石工講中「世話人政吉」 (右)経文略 玉潭謹誌 (正面)石橋供養塔 (左)願文略 (裏)文政二己卯年六月善日	文政元戊寅歳「聖徳太子」九月吉日 (台)石工講中「世話人政吉」 (右)経文略 玉潭謹誌 (正面)石橋供養塔 (左)願文略 (裏)文政二己卯年六月善日	石橋供養塔 (左)願文略 (裏)文政二己卯年六月善日	不動明王(台石に二童子のレリースあり)	庚申 (裏)文化元壬申年「串田氏



82	81	80	79	78
馬頭観音	庚申塔	庚申塔	道祖神	秋葉山
221・70・40	137・95	100・52	80・40	51・29
(文政甲申春日玉潭建)馬頭観音(馬のレリ)フ)菱湖巻大任書 (台)当駅一附方中	庚申	寛政五癸丑一庚申塔 願主 本町講中	道祖神 (裏)寛政五癸丑季)十二月吉祥日)講中	秋葉山 (左)本町願主)田□助

朝日町一丁目 高岑院

84	83
庚申塔	宝篋印塔
86・47	148・57
氏 寛政十二庚申年十一月吉日)庚申塔)須永氏)□崎氏)舟山氏)高野氏)小林氏)□氏	(右)千時寛政七龍舎乙卯)冬十一月吉日)当院現住□(大日如来 智拳印)

千代田町三丁目 諏訪神社

86	85
御神燈	手洗石
203・80	73・131・84
(裏)嘉永元戊申)初夏上澁日 御神燈	漱盥 多行妙書 (左)嘉永元戊申年四月吉日再興

岩神町 観民稻荷(続きあり)

88	87
手洗石	二十三夜塔
49・59・37	87・58
小林(以下地中)	文政二乙卯九月良辰)大勢至菩薩)講中 享保十九寅年三月(以下地中)一奉納御寶前

表町一丁目 大泉寺

94	93	92	91	90	89
石殿	馬頭観音	薬師如来	地藏菩薩	石殿	石殿
103・27	37・23	37・23	53・19	107・(69)・36	110・(70)・36
昌室□敏□信女(鬼面あり、墓石?)	安永七寅戌年(馬頭尊合掌立像)七月二日 元和九年癸亥八月特正)桔岑常栄禪定門	宝永□□丑天二月吉日)一(薬師如来坐像)	享保十三庚戌歳)早世釈尼□无生)七月二十一日	利□宗)寛永十年癸酉□月七日	無銘 鬼面あり

若宮町 飯玉神社

96	95
庚申塔	道祖神
76・40	97・58
(裏)春山氏)中里氏)加藤氏)春山氏	道祖神 (裏)天明五乙巳年四月吉日)當村中 (右)寛政十二庚申)十二月吉祥日 (正面)庚申

97	灯籠(二対)	182・64	(右)文政十三庚寅年 (正面)御神燈 (左)九月良辰
----	--------	--------	----------------------------------

城東町 教徳寺

103	大里天	100	99	98
庚申塔 (兼道標)	大里天	地蔵菩薩	聖観音像	十二面観音
	100・60・25	138・54・37	72・40・24	80・31・28
寛政三辛亥歳十二月大吉日「庚申 左大胡日光」津久井氏「綿貫氏」藤井氏	大黒天	(裏)当所講中	空像 無銘	(右)天保十五年龍集申辰「十一月吉祥日建之」 (正面)十一面観音立像 (左三十四番 水くつ里「御詠歌」) (台)講中(女性名十一名略、他面にもあり)
			文政十三庚寅年九月「聖観音立像」秩父一番志まふてらく「御詠歌」講中	
			(台石)「十三名氏名略、他面にもあり」	

住吉町 愛宕神社

104	灯籠(二対)	255・61	文政三籠集「庚申年四月吉日」御神燈(人名四名略)
-----	--------	--------	--------------------------

106	観世音	34・21	〔文政二巳卯天〕「観世音」□月吉日
105	庚申塔	75・56	庚申(瑞雲・日月) (裏)安政四巳四月吉日

文京町 天王寺

112	地蔵菩薩	76・44	奉唱念仏供養塔 (地藏立像) 寛延二巳吉日 (台)本願「中村五兵衛」掃窓妙観信女
111	念仏塔	68・38	南無阿弥陀仏 (左)(銘あれど不詳) (台)大念
110	二十三夜塔	86・38	〔裏〕寛政十一己未年正月大吉鳥 (台右)(六名氏名略)
109	二十二夜塔	7・32	〔裏〕二十三夜供養塔 (左)十一月吉祥日 (台右)(女性名八人) 女人講中 (台左)(女性名九人)
108	庚申塔	102・54	(右)萬延元庚申歳 二十二夜塔 (左)十一月吉祥日 庚申塔 (花押)當町講中 (裏)寛政十二寅申九月吉日
107	馬頭観音	83・47	馬頭大士 (右)さねまさ (裏)享保二壬戌年九月吉日

113	聖觀音像	92・39	卍 (聖觀音立像) 秩父順禮供養塔 (台) 延享「三丙」寅天「八月」十〇「日」建
-----	------	-------	---

三河町 隆興寺

119	118	117	116	115	114
庚申塔	地藏菩薩	六地藏	庚申塔	詩 碑	結界石
90・58・45	98・36	80・31	76・42	165 153 21	165・36・35
庚申「万延元年」再建之	無銘	(台)慶応二年丙寅「三月」惣檀中	(台)寛政十二「庚申歲」奉造立	坦道和尚寂距今數年俗弟子某某等欽慕之餘刻違篇取貞砧 望炊烟圖 幾度除租又減租、炊烟何怪偏邨区 傳聞苛政□收席 好使人君觀此圖 偶得 悠然身侶白雲閑 吟杖時時得不用 一囊阿堵物買來 幾処好溪山 秋晚雜興 饑餐困睡日相困 僻地偏宜養道耳 魏莫園荒菊多倒 咲言也亦得天真 文久紀元龍集辛酉三月 蘭洲處士川島連書	維時文化□□卯歲晚秋「山門禁葷酒」當山十二世觀光代

126	125	124	122	121	120
遺詩碑	琴師の碑	筆子塚	念仏塔	蚕神	庚申塔
117・48・16	187・74・14	(復元) 5~6m	95・46・40	65・36・17	76・39・38
其詩日霜□寒野色林容無可觀梅□ 孕香猶未放欠看南燭一枝丹	(裏)建碑寄付者六段に百八名の女性名 発起人(女性一名)世話人 中野駒吉郎	琴師乙部松寿之碑 (公石)天保十四載歲次癸卯十一月二十八日 普門山隆興寺十五世此丘機外建	(基礎)世話人松井文四郎(以下二十七名略) 筆弟中中嶋源太郎(以下男七十九名、女十八名略)	蚕祖神「天明二年八月十日」天光女王「上州勢多郡一ツ藪橋」倉本吉右衛門 正徳四年天 願主「常念佛二千日之供養」 十月七日 臺普源山	(右)寛政十二年「十二月吉日」勝山嘉兵衛 後藤伊右衛門「宮内文蔵」武藤清兵衛「高山卯吉」 庚申 (左)松井儀兵衛「小見山正蔵」中島平治「松井文四郎」石工 由五郎 文治

三河町 養行寺

129	128	127
題目塔	題目塔	題目塔
87・58	300・55	191・55
(法歌) 南無妙法蓮華經一無二日」登坂五兵衛」明和元甲申歲十二月三日	(右)大乗経王一石一字塔 南無妙法蓮華経 (左)閻淨提内廣令流布 (裏)弘化四歲在丁未行妙院日盛(花押) (台)発願主」榎町」関口文之輔翁正(花押) 他に発起人 世話人以下数百人 石工棟梁本町中村左次朗外」信州高遠石工数名助力(書は行妙)	(右)妙経一万一字供養塔 南無妙法蓮華経 (裏)從五百歳遠治紗道 (裏)弘化二年歲在乙巳八月吉祥日」功德主五十嵐喜代治行妙院主願主日 (台)世話人(七名略)(行妙書)

三河町 正幸寺

132	131	130
庚申塔	庚申塔	道祖神
64・33・20	80・56・35	72・53・30
(裏)天保七丙申」四月三日 (台)(人名十二名略)	庚申 (裏)三辛亥年」庚申塔」十月吉祥日 (左)三組講中	寛政三辛亥歲」道祖神」陽月大吉日」願主」子供中 寛政三辛亥年」庚申塔」十月吉祥日

紅雲町 巖島神社

140	139	138	137
庚申塔	月夜見命	庚申石祠	庚申塔
85・49	63・27	69・42	98・78
森田氏」世話人講中 (裏)文政七甲申歲」仲冬吉辰」願主」当処	猿田彦命 (裏)明治四年辛未正月廿五日」森田清七	無銘 三猿あり	無銘 鬼面、三猿あり

136	135	134	133
句碑	句碑	句碑	地藏菩薩
75・72・30	50・50・15	92・56・20	43・25
祖父祖母の」 <sup>(歌)</sup> にも於ける」十夜かな (台石)文中」曾水」杉雪」催主素東」麦四寿董」李雪」安永八己亥冬」喝祖坊」素輪建	素輪翁 (裏)安永八己亥十一月」門人建之	三日月や」広いそらにも」曲て置」喝祖坊」素輪翁	(地藏坐像) (蓮台)子音

千代田町三丁目 大蓮寺

147	146	145	144	143
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	地藏菩薩
107・40	63・39	90・37	72・24	140・60
<p>（裏）寛政十二庚申年正月吉日「庚申塔」西田氏「<b>飛札</b>」                  日（六名略）（台に三猿一鶏）</p>	<p>庚申                  （裏）寛政十二庚申年十二月吉日                  「<b>飛札</b>」享保元丙申奉納庚申供養」十月吉日</p>	<p>寛政十二庚申年正月吉日「<b>飛札</b>」                  □□氏</p>	<p>寛政三辛亥年「猿田彦命」南呂吉日（六名略）</p>	<p>（台）文政九丙戌年「六月吉日」当所「世話人」細ヶ沢町「相模屋」新七「横町」佐野屋文蔵「石工」宮下政吉昭盈（花押）北原藤左工門久寧（他）</p>

●	142	141
歌碑	阿弥陀三尊	庚申石祠
97・65	98・67	
<p>於久や満週いは我築ぬ麻農美都「古も里耳吾比や和多舞」阿婦与指乎那弥                  （おくやまの いはがきぬまの みこもり                  に こひやわたらむ あふよしをなみ）</p>	<p>（人名多数）                  「<b>飛札</b>」□□□□「奉供」明暦元□□</p>	<p>（右）慶安三曆寅閏「拾月吉日」                  （正面）奉造立石□庚申「行□□成就供□□                  □□□云者也」政世安穩□前                  （左）願文？                  （裏）堀越七右門「原□右門」萩原九左門「                  笛文兵衛</p>

朝日町三丁目 一号公園

153	152	151	150	149	148
庚申塔	道祖神	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
120・30	87・62	35・29	110・74	83・45	157・80
<p>庚申</p>	<p>道祖神                  （裏）寛政十二庚申年「四月吉祥日」町内中</p>	<p>無銘（正面に二猿一鶏）</p>	<p>庚申塔                  （裏）寛政十二庚申年「四月吉祥日」町内中                  （瑞雲と日月あり）</p>	<p>庚申塔                  （右）為五穀成就造立                  （正面）猿田彦神                  （左）家内安全施主敬白</p>	<p>猿田彦大神「石田静林謹書」                  （裏）安政七庚申年春三月吉日「百尊造立施主」町内中（百庚申の主尊カ）</p>

朝日町一丁目 公民館・稻荷社境内

155	154
庚申塔	庚申塔
70・27	68・40
<p>（左）（人名六人）建之</p>	<p>庚申塔                  （裏）万延元龍次庚申仲冬望後四□                  （右）嘉永四年歳辛亥春三月「前橋横街」石工嘉勝治                  （正面）庚申塔「梅興謹書」</p>

166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156
馬頭観音	馬頭観音	石祠	聖観音	観音	庚申塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	庚申塔
86・35	51・26		46・25	40・26	82・35	51・29	35・27	29・25	66・41	30・38
馬頭観世音 (裏)文政十丁未年「九月大吉祥日」世話人馬持中「施主前橋田町」日野屋嘉兵衛	馬頭観世音 (裏)元治元申子十月	(天満宮など七基)	(聖観音立像)	(観音合掌立像、馬頭観音カ、首なし)	天和三年(地藏菩薩合掌立像)四月吉日(日月に二猿、十二名の氏名略)	文政五天(馬頭尊合掌立像)七月廿五日「弥吉	寶曆十辰天(馬頭尊立像)六月朔日	文□□午年(馬頭尊合掌立像)十月吉日	(馬頭尊合掌立像)真正世話人馬持中	庚申

南町 水神社

175	174	173	172	171	170	169	168	167
庚申塔	庚申塔	百庚申	薬師如来	道祖神	庚申塔	庚申塔	庚申塔	馬頭観音
76・42	79・37	120・72	52・29	110・50	60・34	94・45	80・30	42・26
(裏)明治七年戊七月吉日 猿田彦大神「石田静林六十二老人書	無銘(二猿あり)	百庚申「龍海山像」書 <small>(金紙)</small> (裏)歳庚申萬延元年葭月「当邑中」次建	無銘(舟形光背坐像)小型薬師十二体あり	(裏)安永五 <small>(酉)</small> 申歲「十一月吉日	道祖神	庚申塔 (裏)寛政十二年七月吉日「当村中	庚申塔 (裏)寛政十二庚申十一吉日	(右)安政元寅年 (正面)馬頭大士 (左)十一月吉祥日

南町 代田神社

南町二丁目二番地

お堂

南町二丁目三十番地

交差点南西角

187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176
石 祠	甲子大黒天	石 祠	八幡宮	靈符神	二十三夜塔	庚申塔	庚申塔	馬頭観音	鳥居	蚕神塔	庚申塔
45・36	51・38	52・37	48・37	60・40	50・29	93・77	140・76	32・20	340・460	183・68	20・17
施主「中島」茂兵	甲子大黒天「明治二十二年一月吉日」	麻「祠」弘化戊申三月吉日「当村」	八幡宮「弘化三年」當村中「三月十七日」	靈符「」文政七甲申年「一月吉日」村中	二十三夜塔 嘉永五年	庚申「」 新町講中 （裏）萬延元年庚申冬十一月敬建「田町」田	庚申「」若天拝書 （裏）萬延元庚申年「九月吉日建之」発起人 （六名略）	無銘	慶応四年戊辰四月令辰「世話人（七名略）」	世話人「當村中」田町（四名）前代田（一名） 六供村（一名）	身延山「蚕影山大日天子」七十世 （裏）慶応三年丁卯三月吉日「願主田町」 世話人「當村中」田町（四名）前代田（一名） 六供村（一名）

198	197	196	195	194	193
道祖神	大黒天	秋葉大神	力石三基	鹿島神宮	曲神尊
75・50	40・29	182・85	86・36	64・48	45・38
道祖神 （裏）安永五丙申天十一月吉日	（左）寛保三亥年「當村中」 （正面）大黒天	秋葉大神「東宇拝書」 （裏）明治九年歳次丙子夏四月吉辰日	①五拾貫②五十五貫（九名略）③二拾八貫	（裏）元禄十三年庚辰「十一月吉日」尊順時代 （鹿島神宮の木札あり）	曲神尊

六供町 八幡宮

192	191	190	189	188
馬頭観音	石祠	天王宮	石祠	富士浅間
45・23.5	66・43	51・40	57・37	52・35
氏 天保四巳年「馬頭観世音」七月吉日 小野	無銘	天王宮「天保五午年」四月吉日	天保癸巳年「四月吉日」当村中	富士浅間

六供町二二三

199	馬頭観音	92・33.5	寶曆十四甲申天四月吉日(馬頭尊合掌立像)寒念仏供養塔
-----	------	---------	----------------------------

六供町 寿延寺

209	庚申塔	90・52	庚申塔 (裏)心連主村中「宝曆六丙子歲十一月吉日
206	二十二夜塔	89・31	(右)文政四辛巳十一月(如意輪観音) (台)当村「女人」講中
205	立山登山	110・56	立山登山供養 (裏)文政十一戊天十二月吉日
204	出羽三山塔	105・66	月山「湯殿山」羽黒山供養石「願主高橋」 (裏)文政四年十一月
203	地藏菩薩	104・34	(台)享保四己亥歲「十一月十四日」願主「行善安心
202	六地藏	175・52	(右)願文略 (正面)元禄十一戊寅季「奉造立地衆祈現当苦楽」也「十月十日
201	手洗石	123・53	奉寄進講連中「寛延三庚午歲三月吉日」惠海代
200	二十二夜塔	67・28	天保六乙未夏五月(如意輪観音) (左)当藩女人講中建

219	馬頭観音	45・25	寛政十二申年(馬頭尊立像)十一月吉日
218	庚申塔	82・45	無銘(一猿一鶏あり)
217	道祖神	78・68	双体道祖神像 (裏)天保十二辛丑二月吉日「村中
216	光明真言塔	100・75	享保四己亥天「(梵)字光明真言」三月十五日
215	馬頭観音	44・33	安永五丙申天(馬頭尊合掌立像)十月日
214	馬頭観音	52・35	安政三丙辰年「馬頭観世音」三月吉日 願主□代
213	念仏塔	65・59	宝永四丁亥年「念仏供養」四月吉日「從是南福嶋 六供村施主敬白 從是西真正 從是東二宮
212	庚申塔	83・31	(欠)申 右さねまさ たかさき「向前橋ぬまた いせさき (左)新田町 (裏)三庚午十月 白銀町」中西□三
211	庚申塔	70・38	庚申塔 (裏)寛政十二庚申年十月吉日
210	庚申塔	165・77	(右)惠海代 (正面)庚申塔 (裏)宝曆十三癸未四月吉日「田町」田新町「講中
209	庚申塔	41・36	寛政十二庚申年「庚申塔」六月吉日「□川書
208	庚申塔	88・58	庚申塔「當村中 (裏)寛政十二庚申年十二月吉日



227	226	225	224	223	222	221	220
巡 拝 塔	地 蔵 菩 薩	二 十 三 夜 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	一 字 一 石 塔	馬 頭 觀 音	回 國 塔
92 34	98 35	125 57	81 42	92 65	93 33	43 26	75 31
(右)宝曆十庚申歲十一月吉日「百番順禮供養塔」 (左)願主圓心		(裏)安政五戊午歲四月吉日 五右工門	干時寛文元年辛 <sup>(丑)</sup> 月吉祥 (二猿二鶏あり)石殿	(裏)萬延元年十一月「柿之宮講中(十二名略)」 庚申「脇屋梁」	宝曆十一辛巳歲十一月吉日「大乘妙典一字一石塔」八幡宮御寶前	文政十亥年(馬頭尊立像)八月吉日	(右)明和六己丑年九月吉祥日 (正面)天下和順「 <sup>(丑)</sup> 奉納大乘妙典六十六部供養塔」日月清明

236	235	234	233	232
庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔
36 27	80 40	41 38	65 37	70 26
庚申	向町木村万治他	庚申「桑町吉村屋」	庚申「寛政十一庚申年向町講中」	庚申

大手町三丁目 柳原発電所土手

231	230
如 意 輪 觀 音	道 祖 神
87 66 35	90 54 33
無銘	双体道祖神 村中 (裏)天保十二辛丑二月吉日

城東町二丁目 稻荷神社

229	228
馬 場 翁 碑	手 洗 石
189 145 10	85.5 132 69
(裏)文略 (裏面九十八名氏名は後出)	馬場翁碑(明治二十六年建碑 群馬町金古より諏訪神社を持って来た記念碑) 杜多持妙書 嘉永元戊申年「四月吉日再興」 漱盟

城東町二丁目 諏訪神社

240	239	238	237
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
56・60	51・40	26・24	49・27
庚申	庚申	庚申	庚申

南町四丁目 稻荷神社

249	248	247	246	245	244	243	242	241
石碑	馬頭観音	御嶽講碑	御嶽講碑	石祠	毘沙門天	八坂神社	八幡宮	葉師如来
一戊年四月 曲尊風神」天皇皇神」摩多利神」明治三十	戌年一月吉日 馬頭観世音」中林氏」前田氏」明治七年甲	安政三丙年辰四月吉日」御嶽講中	治三十九年丙午三月吉日建之 八海山神社」御嶽山神社」三笠山神社」明	あつた 石神井様(元、矢田川の端、盲学校の南に	天保十亥三月吉日講中(石祠)	慶応三年丁卯十一月吉日(石祠)当村口	明治二十八年七月吉日(石祠)	天保六未年十一月吉日

251	250
道祖神	御嶽講碑
道祖神」当村中」明治二己巳年式月吉日	八海山神社 御嶽山神社」三笠山神社」明治四年戊辰十二月吉日

南町四丁目

253	252
庚申塔	庚申塔
庚申塔」安政□年正月吉日	庚申塔

岩神町二丁目 観民稻荷境内(続き)

259	258	257	256	255	254
水神講社碑	天満宮狛犬	天満宮	秋葉権現	不動明王碑	勢至菩薩碑
157・96・9	35・14・27	81・37・64	84.5・35・64	139・123・8	84・31・19.5
水神講社寄付連名碑」秋元山主僧正澄観書	(右)小柳氏」遠藤氏」横地氏」大野氏 (左)荒井氏」荒数氏」関口氏」清水氏	(正面額)天満宮(石祠) (背)昭和四十年」九月吉日建之	無銘(石祠、神名札あり)	象頭山」不動明王」安政五年三月廿二日生」小沢勇吉」安政六年十月三十日生 小沢いの金婚記念」昭和十二年一月十日浄業内成	(右)文政二己卯九月良辰 (正面)大勢至菩薩 (左)講中

267	行在所碑	204 31 30	(右)史蹟名勝天然記念物保存法ニ依リ史蹟トシテ昭和八年十一月二日文部大臣指定この指定は戦後新法により解除 (正面)明治天皇前橋行在所 (左)昭和九年九月建設
-----	------	-----------------	--

大手町三丁目 臨江閣

266	石宮	41 38.5 36	奉造立為石塔菩提也」于時寛永九年壬申
-----	----	------------------	--------------------

岩神町二丁目 伝静御前墓所前

265	狐一对	67 40 23	(背)納主「長谷伊蔵 (左右)奉納
264	水盤	54 60 41	享保十九寅季「奉納御宝前」小林 (右)大正十四年九月十九日
263	弁財天坐像	40 26 12	無銘(元禄期頃カ)
262	水盤	54.5 83 50.5	(左)発起人「荒木岩吉」橋本常吉「小沢幸作」神山熊治「森田金次郎」浅田勇七 (背)世話人(二十四名略)
261	鳥居	275 204	(右)明治四拾四年九月拾七日「製作人」本田宮内 (額)水神 (右)大正元年十月建之
260	水神	87 39.5 67	(正面額)水神 (左)明治廿七年一月吉辰

270	安井与左衛門功績碑	350 184 30	正四位勲四等但爵松平直之篆額「安井与左衛門功績碑」(本文略) 大正十一年十月一日「群馬県知事從四位勲三等大荒惣吉撰」高木繁書「針谷光年刻
-----	-----------	------------------	---

大手町三丁目 児童遊園

269	句碑	65 84.5 45	(正面)雨亭「世念を」捨てしに「非ず」竹植うる (背)前橋市民「故雨亭」関口志行先生吟 昭和三十五年六月建「前橋市
268	茶筥供養碑	157 73 9	(正面)茶筥塚「関州書 (裏面)文面略 (大正六年建 昭和二十四年再建)



群馬郡金古町  
首 天田傳七郎  
唱 狩野 浦人  
者 羽鳥 寛  
施主

馬場 巖  
同 篁

### 記念碑等調べ（前橋公園周辺）

#### 1 前橋公園内

- 1 「故下村翁銅像建設賛助人名碑」
  - ・明治四十三年八月竣工
- 2 「県治記念碑」
  - ・大正六年四月一日
- 3 「群馬県殉職警官吏・警防団員霊祠」
  - ・建立記載無し
- 4 「柱野前川死事之碑」
  - ・明治十九年十一月
- 5 「殉職消防組員之碑」
  - ・昭和九年四月
- 6 「永久橋記碑」
  - ・大正四年十一月十日
- 7 「上毛文徳碑」
  - ・建立記載無し
- 8 「句碑（天野桑古）」
  - ・明治三十五年四月

9 「関口志行先生彰徳碑」

・昭和四十五年十二月

10 「市制施行八十周年記念植樹」

・ハナモクレン一本

11 「早起健康友之会碑」

・昭和四十六年七月十一日

12 「歌碑（水間可免）」

・明治二十八年十一月十八日

13 「句碑（田村貫水）」

・昭和四十八年四月十五日

14 「藤枝泉介顕彰碑」

・昭和四十八年十二月

15 「坂東水系総合開発記念碑」

・昭和四十二年六月

16 「日本青年会議所第13回関東地区会員大会  
前橋青年会議所創立15周年記念」

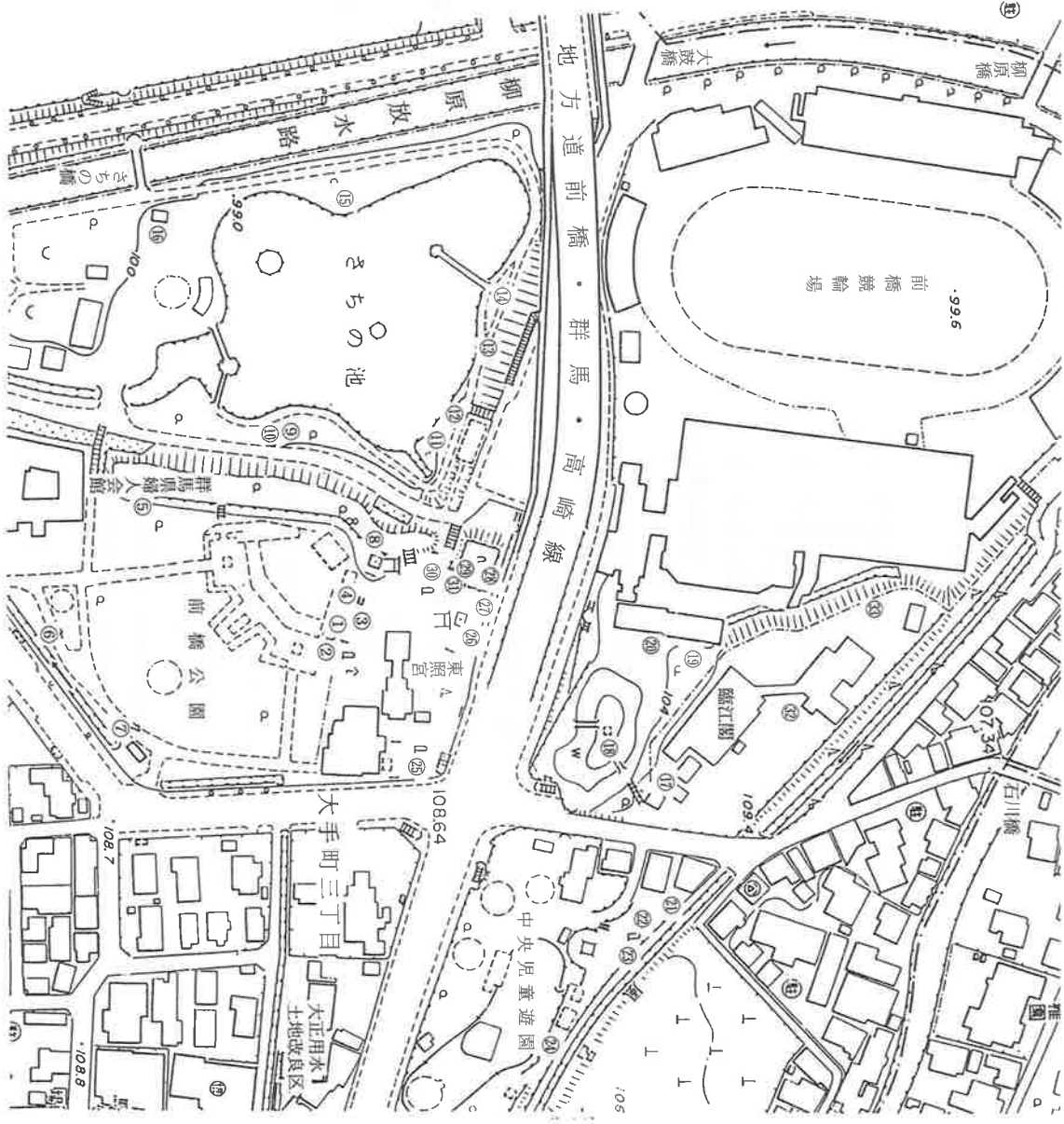
・不明

#### 2 臨江閣内

- 17 「明治天皇前橋行在所碑」
  - ・昭和九年九月
- 18 「詩碑（平井晩村）」
  - ・昭和六年九月二日
- 19 「翁藤移植の記」
  - ・大正元年
- 20 「星野翁碑」
  - ・大正十一年十一月三十日

記念碑等名

1. 下村翁銅像建設賛助人名簿
2. 県治記念碑
3. 群馬県殉職警察官吏・警防団員霊祠
4. 柱野前川死事之碑
5. 殉職消防組員の碑
6. 永久橋記碑
7. 上毛文徳碑
8. 句碑 (天野桑古)
9. 関口志行先生彰徳碑
10. 市制施行80周年記念植樹園
11. 早起健康友之会碑
12. 歌碑 (水間可免)
13. 句碑 (田村貫水)
14. 藤枝泉介顕彰碑
15. 坂東水系総合開発記念碑
16. 前橋青年会議所創立15周年記念
17. 明治天皇前橋行在所碑
18. 詩碑 (平井晩村)
19. 翁藤移植の記
20. 星野翁碑
21. 句碑 (関口雨亭)
22. 茶苑塚・記念塔
23. 赤城牧場碑
24. 安井与佐衛門功績碑
25. 安井翁建碑寄附者碑
26. ラゾオ塔
27. 東照宮由緒記
28. 厩橋沼魂祠記
29. 忠烈碑
30. 傷痍之碑
31. 彰忠碑
32. 神恩感謝之碑
33. 至誠崇敬之碑





大蓮寺の地藏尊



大蓮寺の地藏尊



矢頭右衛門七の母の墓



矢頭右衛門七の母の墓



町医者 後藤玄格の墓 (大蓮寺)



町医者 後藤玄格の墓 (大蓮寺)



お虎供養塔



馬場翁の碑  
(諏訪神社・城東町)

- 23 「ラジオ塔」
- ・昭和八年
- ・大正十一年十月一日

4 東照宮内

- 25 「東照宮由緒記」
- ・昭和四年四月十七日
- 26 「厩橋招魂祠記」
- ・明治十二年十月
- 27 「忠烈碑」
- ・大正十五年五月二十四日

- 28 「傷痍之碑」
- ・昭和五十四年十一月二十三日

- 29 「彰忠碑」

- 30 「神恩感謝之碑」
- ・昭和三十七年三月再建（建立明治三十五年）
- ・昭和五十二年五月十五日

- 31 「至誠崇敬之碑」
- ・大正十三年五月

- 32 「句碑（関口雨亭（志行）」
- ・昭和三十五年

- 33 「茶笕塚」

- ・A（茶笕塚）大正六年十一月末酉日
- ・B（県茶道会創立20周年記念塔）昭和四十九年三四月二十七日

3 児童遊園内

- 21 「赤城牧場跡碑」

- ・昭和五十三年

- 22 「安井与左衛門効績碑」



## 七 民俗知識

まじない 葬式に出会った時は指をかくす。(文京町三丁目)

同じ年の人が死ぬと、素饅頭を買って両耳に当て、「いいこと聞け、よくないこと聞くな」という。(文京町三丁目)

こうで 障子の棧を通して手を出し、こうでになったのが男なら女の末子、女なら男の末子に手を縛ってもらうとなおる。

(文京町三丁目)

天気 下気……浅間の雲が北へ流れると天気が悪くなる。

浅間の夕焼けは天気になるきざし。

雲が南になびくと、天気がよくなる。

赤城に雲がかかると雨になる。

猫が顔を洗うと雨が降る。

利根川の瀬音が聞えると雨になる。

雷 原の田んぼにはよく落ちた。うんこをまくと、雷除けになるという。

落ちた所にはしめ縄を張った。

草刈鎌を竹の棒の先につけて立てておいた。

前高に避雷針が立って、余計落ちるようになった。

(文京町二丁目・天川原町)

六三除け 小石神社の中に実相寺があった。ここで六三除けをしてくれた。六算除けのお札をもらって来て、天井裏に張っておいた。また、人形を貰って、体をこすって家でおたき上げをした。

(住吉町二丁目)

三隣亡 むかし三隣亡を祀る人があった。相手の家へ何かやる。相手にわかっているといけない。三隣亡の日に何か持って来ると、あすこんちは三隣亡を祀っているといった。今でもある。(住吉町二丁目)

俗信 年寄りの人は反物を裁つのに、今日は何の日だからはさみを使ってはいけないといった。

旅へ行っても七日がえりはするなといった。

北向きに寝ていけない。

厄年も気にした。(住吉町二丁目)

薬草 ドクダミ……熱さまし、化膿止め。

ゲンノショウコ……胃薬(干して煎じてから飲む)(文京町三丁目)

キュウリ 天川(文京町四丁目)では、キュウリを作らない。それは八坂神社と他の神様がキュウリ畑で喧嘩して、八坂様が負けたからという。

食べない人と作らない人がいる。(文京町一丁目)

へび へびがたくさん出た。垣根にヤマガカシが出たが、家を守るから殺してはいけないといわれた。(文京町三丁目)

こうもり ゴウリをこうもりが飛んで来る中に投げると、これについて下りて来る。(文京町三丁目)

## 八 芸能・あそび

映画 映画の入場料は五銭で、冬は火鉢代で五銭追加された。この頃、生菓子は一ツ一銭だった。

楽士がベランダで「美しき天然」を演奏してお客の呼び込みをした。上映中は楽士席で映画に合わせて演奏した。

尾上松之助やアメリカ映画のジャッキー・クーガンを覚えている。

「ジゴマ」「鉄の爪」などがあった。

帝国館・電気館・第一大和館・第二大和館という映画館があり、他に柳座という芸居小屋があった。(表町一丁目)

活動 入場料は五銭くらいだった。音はついてないので、弁士がいて、せりふなどをしゃべった。

その頃一銭で鉄砲玉の飴が五個、二銭で饅頭一個が買えた。(文京町二丁目・天川原町)

柳座 小柳町愛宕神社の西側にあり(現在住吉町一丁目 愛宕神社のとなり児童公園)、明治二十一年八月の創立にて、初めは愛宕座と称し、資本金二千余円の株式組織であった。明治三十六年中に組織を改め、柳座と改称した。

野中倉吉、福島謙三郎その他数名の共有とする柳座は、敷地千三百坪、建坪百八十坪である。明治末期から大正中期にあたっては地方廻りの歌舞伎、新派など交々に来演した。その中でも越後長岡の金六一座、松本錦枝の錦座、新派では西野薫、志村松之助、高浜喜久義等。

志村松之助は群馬郡の生まれで、得意の出し物は俠艶録等である。当

時の木戸銭(入場料)は十五銭であった。明治四十三年先代六世尾上梅幸一座が来た時、座主の野中倉吉さんが、当時水害や不景気の時でもあり、名優を宿屋に泊めては失礼だということで、自宅に泊め料理人まで雇って歓待した。当時は顔見世せといって開演当時俳優一同七十余名が賑やかなお囃しの底抜屋台を先頭に人力車を連れ、町廻りをしたものだ。最後の車には座頭の梅幸が乗っていた。梅幸の車には紅白の綱を肩き掛けた先挽が二人、梶棒が一人、後押が二人、軽い梅幸の車には五人も掛けて町廻りしてから、初日の幕を開けた。その時の入場料は初日に限って三十五銭均一ということで、大入り満員、舞台上手、下手まで一杯になるという騒ぎであった。

歌舞伎の大名題が来演の時は前橋だけでなく、高崎、伊勢崎、桐生等の花柳界に呼びかけ、人気をつけるようにし、又、出方など名入の半纏を配って景気をつけたものである。明治から大正にかけて、柳座には別記のような名優が来演している。

来演した名優

六代目 尾上梅幸一行

出し物 伽羅千代萩 累

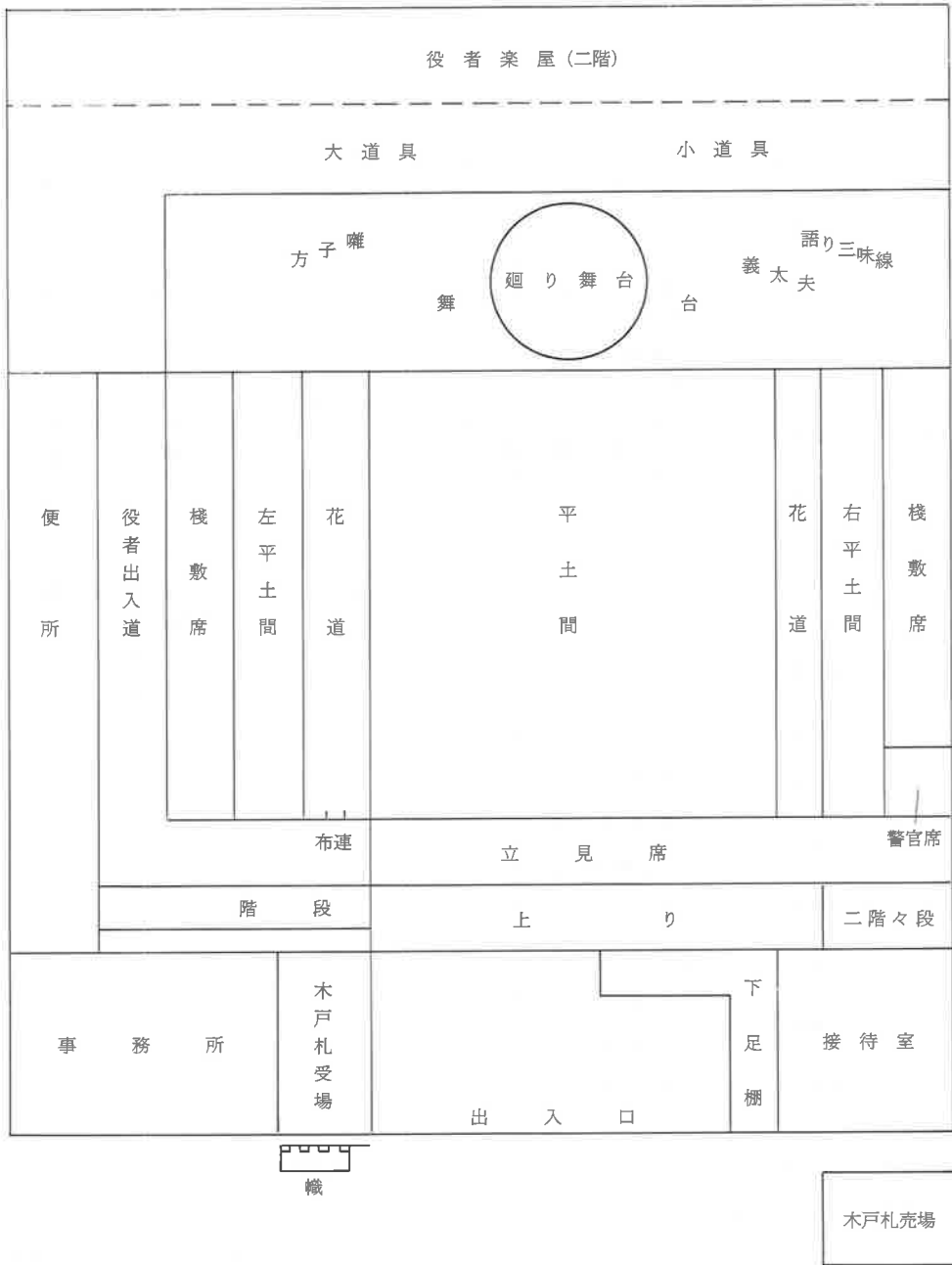
土蜘蛛 等

市川九藏一行

出し物 里見八犬伝

め組の喧嘩 本蔵下屋敷





柳座の内部構造

先代 中村鷹次郎（大正初期）

六代目 尾上菊五郎（昭和八年頃）

坂東彦三郎（単独にて）

市川男女蔵（単独にて）

市川佐団次

「住吉ものがたり」より

帝国館 今のオリオン座の所にあつた映画館。野中さんが空地を買つて建てた。

白黒の映画で音はついていず、解説を弁士が言い、音楽は伴奏をする楽士が二〜三人いた。

週に一回やつて入場料は十八銭だった。（千代田町三丁目）

二階の外がバルコニーになっていて、楽士が「天然の美」を演奏して人を集めた。

夜の九時から割引きになっていて、十二時過ぎまでやつていた。

店の使用人は仕事・夕食後見に行った。（千代田町二丁目）

電気館 立川町の駐車場の所にあつた映画館。

映画俳優では松竹の大河内伝次郎、板東妻三郎、市川桃之助、日活の尾上松之助などを覚えてる。

弁士は高給取りであこがれだった。（千代田町三丁目）

尾上松之助が出た「忠臣蔵」や「大江山酒呑童子」の映画をやつたのを見に行った。

新派のお芝居もあつた。

映画の弁士ははげていたので、百爛というあだ名だった。

大谷きじやくという悪役と尾上松之助、最近では片岡千恵蔵も来たことがある。

入場料は子供十銭、大人二十銭だった。

敷島座 火事で焼けた。明治三十八年一月八日のことで、死者百二十人、負傷者二百名が出た。（千代田町二丁目）

いろは 榎町にあつた小屋で、浪曲、浪花節、落語をやつた。

（千代田町二丁目）

天野の藤園 入場料を十銭、二十銭ととつたので入場者がなくなつてしまった。

中で焼まんじゅうや団子を売つた。（表町一丁目）

夜店 連雀町の八幡宮から八間道路の夜店に遊びに行った。

（表町一丁目）

ダルマ屋 榎町と紺屋町に乙種料理店、俗にダルマ屋があつた。

（南町四丁目）

女郎買い 浅草まで女郎買いに行ったことがある。上野まで国鉄で九十円、浅草まで市電で七銭だった。市電はいくら乗つても乗り替えても同額だった。

女郎屋の格子は、大正大震災で廃止されて写真になった。写真を見ているとギュー太郎が出て来て、入るように案内した。芸者はつぶし島田をしている。部屋に入っていると、やり手ばあさんがガラスの皿に果物を入れて進めに来る。断ると悪口を言つて出て行つた。

フロに入ると女郎が背中を流してくれた。ゆかたは出してくれるが、フンドシは出してくれず、自分のものをしめた。

歯を磨く時は竹のブラシに桃色のみがき粉をつけてくれ、後から着物のたもとを持っていくれた。

一人で一人を相手にし、一円五十銭だった。

ここに比べ、新宿は洋装でベツトだったが、一人の女が何人も受け持つていた。新宿では、翌朝使つた紙を廊下に捨てると、店の男が掃いて掃除した。

この女郎買いで意見されたことがある。女郎買いは、若さをほとぼす（発散させる）のに行つてもいいが、同じ女郎を続けて買うと情も移るし、病氣も移される。

女郎屋は甲部と乙部の区別があり、甲部は遊郭だった。乙部はダルマ屋といわれ、嘱託医がいて、定期検診で病氣になつてると休まされた。一円五十銭の料金だったが、ちよんの間なら一円でいいよと誘われたことがある。

食堂の中にも便所バーといわれ、女給が和装で着物の腰のところが開き、エプロンをかけていても、手が入られる仕度の所があった。

かつぎ石 南無阿弥陀仏、三十二貫と彫つてあつた。

(文京町二丁目・天川原町)

芸人 獅子舞、猿まわし、三河万才、流しの三味線引きなどが来た。

三河万才は下でやるものと、座敷に上るものとあつた。(表町一丁目)

バイオリン弾き 大学帽をかぶり、カスリの袴で、素足にゲタばき

の男がバイオリンを弾いて、ガリ版刷りの楽譜を売つた。一部五銭だった。「金色夜叉」や「籠の鳥」を演奏したのを覚えてる。

(千代田町二丁目)

三河万才 正月になると毎年三河万才が来た。烏帽子をかぶつた太

夫とかぶらない才蔵が組んで、同じ人が同じ家を順に廻つて来た。明治末から大正初め頃まで来ていた。(千代田町二丁目)

競馬 前代田と六供の裏田圃(今の城南小の所)で競馬をやつた。

(文京町二丁目・天川原町)

草競馬 大演習の前の年、昭和八年にやつた。入場料を二十〜三十

銭とつた。(文京町二丁目・天川原町)

金井製糸の跡地でやつた。前高が文京町に建つ時と交水社の地鎮祭

にもやつた。

交水社は金井製糸になつて居る。(朝日町二丁目)

前橋駅南の前代田に城南小学校が建設される前の、昭和二年(一九二七)前後の話です。建設予定地で競馬がありました。いわゆる草競馬です。

昭和四年(一九二九)四月、前田真澄氏は、新築になつた城南小学校に、はじめて入学した一年生でしたが、見に行ったこの競馬の時の思い出を次のように話しています。

「人込みがものすごかつたので、連れてもらった競馬場ではぐれて迷子になつてしまつた。仕方なく、わが家を目ざして一人で帰るね、どこをどう間違つて歩いたのか、有刺鉄線くぐりをし、着ていた上等の着物をかぎ裂きして、母親から大目玉をもらった。」

とにかく小さい子どもなど、大勢の大人の人がきに隠れてしまうような賑やかさだつたのを、私もおぼろに覚えて居ます。

競馬場の西側の一段高い所に飾られた箆笥や長持など、昔の嫁入り道具のようなものや、高い所から色とりどりの反物が幾つも幾つもとたれ下り、とてもきれいだつたことや、騎手が落馬して大騒ぎのあつたことなども、子ども心の記憶として残つて居ます。

出走馬は農耕馬と競走馬に分けて競走しました。優勝すると箆笥とか梵天ぼんぜんといつて、葉を付けたままの長い杉丸太に、反物が三反とか五反とか下がつた「三反下り」とか「五反下り」の賞品ののぼりが出たそうです。賞品はスポンサーの寄贈によるものでした。

勝つてこのような賞品をもらった馬主は、隣り近所の人に手伝つてもらい、家に帰れば大盤振舞いをしたそうです。

また競馬では、ところによって賞金が出たり、養蚕具や勝手道具などもたくさん用意して、これらは参加賞として贈られたとも聞いています。(新堀町田村千秋氏・古沢時松氏談)

「一龍号」といつ競走馬が、故中村益一郎氏宅にいました。長男の房夫氏の話によると、「一龍馬」のいちは「一の坪」のいちにちなんでつけたそうです。

この馬はアラブ系栗毛の優秀な馬でした。遊びに行くたびに、そば近くで見せてもらいましたが、板に書かれた勝利の記録がずらり並べて掲げられていて見事でした。

この「一龍号」が、この時の競馬に出て優勝し、桐箆笥と「五反下り」の梵天を買ったそうですが、帰宅すると、まず馬をすそ洗い桶に入れてよく洗い、その後、騎手はじめ関係者へのお祝い振舞をしたそうです。

なお、中林辰夫氏は城南小学校が市之坪になった時の最後の年度（昭和三年）の一年生でしたが、その時の様子を次のように話しています。

競馬場が狭く、馬が何回もぐるぐる回るので見物する方も容易でなかった。また、競馬になれない農耕馬の中には、騎手の言うことを聞かなかつたり、走路を走り出す馬もいて、はらはらさせられたが面白かった。

日本馬改良とか軍馬資源保護法とかの国策があったようですが、草競馬は農村娯楽のひとつとして、ほうぼうで開催されていました。

「南町四丁目誌」より

草競馬余聞 市之坪に生まれ育った小川よし子（旧姓平山）さんと、城南小学校の草競馬の話をしたことがありました。

その時小川さんが「東の天川原の方に林立した五色ののぼりが、きらめいていたのを覚えている」という話をしてくれました。「そう言えよ」というわけで、早速、天川原の牛島重利氏に聞くと、それは県立前橋中学校（現前橋高等学校・天川原への移転は昭和九年七月）の建設予定地（現群馬県生涯学習センター所在地）で、天川原の人たちが

主となって、昭和七・八年の頃開催された、草競馬の時のものだということが分かりました。

平山さんの家は市之坪の大通りに面していました。

昭和十四年（一九三九）、天川原に中島飛行機前橋工場ができるまでは、市之坪の大通りの北半分あたりの路上から、天川原の神社や一面の田、前橋中学校や、果ては二子山北の桑園まで見通すことができました。また前橋中学校のサイレンの音は、昭和十六年（一九四一）頃までこの大通りの最北に住んでいた私の家まで聞えました。

（関口勇市記）「南町四丁目誌」より

出車 田町と堀川町には祇園の出車があった。（表町一丁目）

昭和五十七年に出車を三百万円かけて作った。（朝日町一丁目）  
前代田の御輿 前代田のみこしは、血を見ないとおさまらないといわれた。寄付金をあまり入れない家には、上り込んでガラスを破ったりした。警察につかまって取調べを受けた。差し入れて三十五銭の入船の天井をとってくれた。自白した人から帰されるが、天井を食べたくて黙っていた。在郷軍人会と青年会が暴れる家を指示した。

（表町一丁目）

娯楽 ・輪ころがし：自転車のリームを使ってころがして遊んだ。

・ベীগマ

・ビー玉

・紙芝居……代りに太鼓を叩いて町内を廻るとただでを見せてくれた。

・ニツキ飴を売って、買った子に紙芝居を見せてくれた。

・少年クラブ……この本は図書館の児童室の机に紐で縛りつけて

あった。

・射的屋……八幡宮に店が出ていた。アセチレンランプの灯がつけてあった。



桑町入り口（千代田町  
二丁目 横山昇氏蔵）



桑町イルミネーション 昭和天皇御大典  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



大正天皇御大典のだし（千  
代田町二丁目 横山昇氏蔵）



桑町のだしの上の人形（天狗）  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）



（千代田町二丁目 外山亀男氏蔵）



熊本 細川氏父と祖父  
（千代田町二丁目 横山昇氏蔵）





和たこ (文京町三丁目 齊藤秋次郎氏)

・曲芸……芝居小屋があった。猿を飼っていた所もあった。(表町一丁目)

・ネツクイ……三股の枝を土に投げてつき刺し、相手の刺さっている枝を倒して遊ぶ。

・ビー玉

・こままわし (文京町二丁目・天川原町)

剣つくり レールに釘をおき、列車の車輪で平らに伸ばして作った。

(表町一丁目)

たこ上げ 天川二子山古墳の裏でたこ上げ大会をした。全国大会もした。畳八十畳のものが上がった。(文京町二丁目・天川原町)

古河線でたこ上げ大会があり、障子一枚くらいなたこを上げた。大きい石がごろごろしていてその石に糸を縛りつけていた。

(文京町一丁目)

ブンブンヤッコダコというのは、後にゴムをつけて音がするようになっていた。(文京町三丁目)

ホウズキ 中の種をとり、口に含んで音を出して遊ぶ。

(文京町三丁目)

スケート 両毛線の南の土地は線路を作る工事で土をとったので、池になっていた。冬には凍ってそこでゲタスケートをした。

(文京町一丁目)

水あび 端気川の栄橋から飛び込んで三丁目の天笠さんの所まで流されながら泳いだ。

元川の池から鯉が逃げて来てよく捕まえた。(文京町一丁目)  
あそび ・めんこ

・ビー玉

・根つき (木をとがらせて土に刺す。他の木で前の刺った木を刺して倒す)

・こま

・たこあげ

・おはじき (きしゃご) (文京町一丁目)

・けんか……村の中の西原の子どもと東原の子どもでけんかをした。西原と東原で組んで朝倉とけんかしたこともある。場所は上川淵との境の念仏橋だった。(文京町二丁目・天川原町)

お手玉

おっさーらい

おひとつ おひとつ おひとつ

おろして おっさーらい

おふたつ おふたつ おろして おっさーらい

おみつつ おのこり おろして おっさーらい

おみんな おっさーらい

お手のせ お手のせ お手のせ お手のせ

お手うら お手うら お手うら お手うら

おろして おっさーらい

おはさみ おはさみ おはさみ おはさみ

おろして おっさーらい

おちよ切り おちよ切り おちよ切り おちよ切り

おろして おっさーらい

おきりんこ おきりんこ おきりんこ おきりんこ

おろして おつきーらい  
 おにぎり おにぎり おにぎり おにぎり  
 おろして おつきーらい  
 つぼのせ つぼのせ つぼのせ つぼのせ  
 おろして おつきーらい  
 つぼうら つぼうら つぼうら  
 おろして おつきーらい  
 あなのせ あなのせ あなのせ  
 おろして おつきーらい  
 あなうら あなうら あなうら  
 おろして おつきーらい  
 石のせ 石のせ 石のせ  
 おろして おつきーらい  
 石うら 石うら 石うら  
 おろして おつきーらい  
 くまのせ くまのせ くまのせ  
 おろして おつきーらい  
 くまうら くまうら  
 おろして おつきーらい  
 お手ぶつけ お手ぶつけ お手ぶつけ  
 おろして おつきーらい  
 ひじぶつけ ひじぶつけ ひじぶつけ  
 おろして おつきーらい  
 かたぶつけ かたぶつけ かたぶつけ  
 おろして おつきーらい  
 小さな橋くぐれ 小さな橋くぐれ 小さな橋くぐれ

おろして おつきーらい  
 大きな橋くぐれ 大きな橋くぐれ 大きな橋くぐれ  
 おろして おつきーらい  
 おばけの橋くぐれ おばけの橋くぐれ おばけの橋くぐれ  
 おばけの橋くぐれ  
 おろして おつきーらい

〈説明〉

これは、ふつうおてだま五つであそぶ。それより多くしたり、すくなくしてあそぶこともある。ここでは、五つであそぶことにして説明することにする。

- ・お手のせ 手の甲にお手玉全部(小さい子供は一つか二つときめる)をのせること。
- ・お手うら てのひらのこと。ふつておちてはいけけない。
- ・おはさみ 指と指の間にお手玉を四つはさむこと。ふつておちてはいけけない。(以下同じ)
- ・おちよ切り 人さし指と中指との間にお手玉をはさむこと。
- ・おきりんこ 中指だけを立てて、ほかの指はおりまげ、中指のつけ根のところではさむ。
- ・おにぎり 手のひらを下にむけて、お手玉を一つ一つにぎっていく。掌を下にむけてはいけけない。また、お手玉をにぎってふつてみておちてはいけけない。
- ・つぼのせ 指をまるくつぼめてつぼをつくる。人さし指とおや指の上にお手玉をのせる。お手玉が一つでもおちてはいけけない。
- ・つぼうら うほのときと同じ形だが、てのひら側にお手玉をのせる。
- ・穴のせ 人さし指と親ゆびをまるめてあなをつくり、その穴の上にお手玉をのせる。

・あなうら 穴のせのときと同じ形にして、手のひらの方にお手玉をのせる。

・石のせ こぶしをつくり、手の甲にお手玉をのせる。

・石うら 石のせの形で、てのひら方にお手玉をのせる。

・熊のせ 手の指を第二関節でおりまげ（こぶしにはしない）、手の甲の上にお手玉をのせる。

・くまうら 熊のせの場合と同じ形で、てのひらの上にお手玉をのせる。

・お手ぶつけ・ひじぶつけ・かたぶつけ それぞれ、手のひら・ひじ・肩に、お手玉をぶつける。

・小さな橋 人さし指とおや指の先をまげてアーチ型に床の上などに橋をつくり、その間を一つ一つお手玉を通し、全部通しおわたたら、その橋をねかせて、お手玉がその橋にさわらなければよい。

・大きな橋 ひじと指さきで右と同じようにアーチ型に橋をつくり、右と同じようにする。

・おはけの橋 これも同じように、ひじと指先とで橋をつくるのだが、この場合は、指先を下につけないで、ぶらぶらさせていて、その下をお手玉をくぐらせる。

一番はじめは一の宮

二また日光中禅寺

三また佐倉の宗五郎

四また信濃の善光寺

五つは出雲の大社

六つは村々鎮守様

七つは成田の不動さん

八つは八幡の八幡宮

九つは高野の弘法さん

十で東京シンガン寺

これほどしんがんかけたのに

浪子の病はなおらない

ゴーゴーとなる汽車は

武夫と浪子のわかれ汽車

二度とあえない汽車の窓

泣いて血をはくほととぎす

ああ浪さんはなぜ死んだ

僕のかえりが遅かった

十一二宮金次郎

十二は浪子の墓参り

十三桜の吉野山

十四は新年おめでとう

十五は御殿の八重桜

十六、六六六地蔵

十七飛行機空高く

十八花屋のはいからさん

十九は勲章胸につけ

二十は東京の日本橋

いちれつらんばん（談判？）はれつして

日露戦争がはじまった

さっさとにげるはロシアの兵

死んでもつくすは日本の兵

五万の兵をひきつれて

六人のこして皆殺し

七月八日の戦いに

ハルビンまでも攻め入って

クロバトキンの首おとし

東郷元帥万才（大手町）

〈説明〉

これは、お手玉を二つまたは三つつかってあそぶもの。どの位つづ  
くか歌いながらしていく。

この歌は、場所によつて、文句は多少のちがいがあがあるが、それは、  
なまりによるものと、以上のものにすこしばかりつけ加えたもの。た  
とえば、前橋市江木町では

「浪子の病いも直らない」のあとに

武夫が戦争に行く時は

白い真白いハンカチを

打ちふりながらもねえあなた

早く帰つてちょうだいな

という文句が入る。

また、「東郷元帥ばんばんざい」のあとに

朝日のはてまでばんばんざい

夕日のはてまでばんばんざい

が入る。

また、これも前橋市付近のものだが

十四は死んで名を残す

十五連隊ばんばんざい

というのもある。

お手玉の唄

一番はじめは一の宮

二また日光中禅寺

三また佐倉の宗五郎

四また信濃の善光寺

五つは出雲の大社（ヤシロ）

六つは村々鎮守様

七つは成田の不動様

八つは八幡の八幡宮

九つ高野の高野山

十で東京本願寺

これ程神願掛けたのに

浪子の病はなおらぬか

ゴーゴーとなる汽車は

浪子と武雄の別れ汽車

二度と会へない汽車の窓

泣いて血をはくホトトギス

ああー浪さんはなぜ死んだ

僕の帰りが遅かった

なわとび

月ちゃん 火ちゃん 水こちゃん

木ちゃん 金ちゃん どろだらけ

日曜日 おはいり

朝鮮の 山奥で

たしかに聞こえる 豚の声

ブーブーブー ジャンケンポン

勝ったお方は おにげなさい

月ちゃん 火ちゃん 水こちゃん

(以下くりかえし) (三侯町・若宮町・大手町)

〈説明〉

「日曜日」というところまでは、一人ずつとんでいる。この間は、一人で二まわりずつとんで、次のものと交代する。

「どろだらけ」で一人出たあと、「日曜日」で一人入り「お入り」でまた一人入り、二人一緒にとびつづける。

「ジャンケンポン」のところで、二人がとびながら、ジャンケンをして、勝った方が出る。まけた方はあとに残って、再び「月ちゃん」からとびつづけて、前と同じことをくりかえす。

月ちゃん 火ちゃん 水こちゃん

木ちゃん 金ちゃん どろだらけ

日曜日 おはいり

山の風 そよ吹けば

風の神様 さんだいしよ

ピーヒャラ ピーヒャラ さんだいしよ

そら出る そら入れ

そら出る

そら入れ (前橋市東上野町)

〈解説〉

これは、前のものと同じあそび方だが、「そら出る」で、日曜日のところで入ったものが出る。つぎに交代者が入る。これをくりかえしていく。

この時のうたは、土地によって若干文句がちがうのがある。

江木・力丸では

月つくり 火つくり 水兵さん

木つくり 金とき どっこいしよ

日曜日 お入り (おはいんなさい)

朝鮮の 山奥で

静かに (かすかに、たしかに) 聞こえる 豚の声

プープープー ジャンケンポイ (ジャンケンポン)

勝ったお方は お逃げなさい (勝ったらさっさとおにげなさいよ) というのもある。

幼い時は、お手玉・縄飛び・キシヤゴ・羽根つき・メンコ等で遊んだ。

羽根つき唄

一人来な二人来な三人来たらば寄つといで

何時来て見ても七子の帯を八の字にしめてしやれかけ一貫せ

まずく一たん貸しました

大阪つき米米屋の娘がイチヨイチョ、シンジョといったらばこんなも

のかになりました

片目つ子はいいか(?)ぢやないとて名無しの五兵衛さんがお腹立ち

はてな、はてな、はてはてはてな

山王のお猿さんが赤いおべべが大好きで

てるちゃんく夕べ隣の恵比須講に呼ばれて

うなぎの蒲焼、すゞきの吸物一杯すゝれ、二杯すゝれ、

三杯目には魚がないとて五兵衛さんがお腹立ち

ハテナ、ハテナ、ハテ、ハテ、ハテナ

清水の観音様へ雀が三匹止まって

その雀が蜂にさされて

アイタブンブン

コイタブンブン

まずく一たん貸しました

まりつきの唄

源義経

父は尾張の露と消え

母は平家にとらえられ

兄は伊豆に流されて

おのれ一人は鞍馬山

かたきの平家……

昼は学問 剣術は

人目を忍ぶ 夜のわざ

金売り吉次につれられて

落ちゆく先は 奥州路

只より……の命を受け

かたきの平家 ほろぼさん

ひよ鳥越えの 逆落とし

屋島の浦の 弓流し

壇の浦八艘飛び

長くほまれを……にけり(文京一)

十日夜の唄

十日夜とうかんや 十日夜

十日の晩は ねらんねえ

大めし 食っちゃ 腹だいこ(文京一)

田植唄

朝の唄

朝つゆに髪結い上げて イヤハノノ

花摘めど 花摘めど 花はたまらぬ

アソレカラドシタイ

昼の唄

今日の日の 鐘がなる 鐘がなる

いやはの いくつなる

ああ いくつなる

ななつもやつも

夕の唄

夕暮に千鳥鳴く 千鳥鳴く

いやはの千鳥鳴く

いく声も アー 千鳥鳴く また鳴け

千鳥(六供)

# 九人の一生

## 一、産育儀礼

### (一) 子授け

子授け祈願 安産祈願に産泰様に行った。

子授けには伊香保温泉に行った。(住吉一丁目)

産泰様に行った。さずかると、安産祈願をし、生まれるとお礼まいりに行った。(岩神)

### (二) 妊娠から出産まで

妊娠を最初に話した人 夫婦のみの場合は夫へ。実家の母へ。

(住吉一丁目)

ダンナさんへ。次に親へ。(岩神)

妊婦の呼び名 ミモチ、ハラシダと言った。(住吉一丁目)

特になし。悪い意味でハラミオンナと言った。(岩神)

安産祈願 産泰神社。ヒシヤクを買ってあげる。底ぬけで、安産になる。(住吉一丁目)

産泰様。(岩神)

妊婦中の禁忌やことわざ 火事は赤いアザができるので見るなと言われた。鏡をフトコロに入れておく。葬式の列は見ない。高いところ

に手をあげない。

(住吉一丁目)

ソバや柿は冷えるので良くない。手は肩より上にあげたり、高いところのものをおろすと流産する。

火事をみるなと言われた。アザができないように小判型の鏡を五カ月あとの帯じめをした後に入れておいた。(岩神)

腹痛 五カ月目のイヌの日にした。神だなにあげ、サンバさんがしめてくれた。まくだけ。(住吉一丁目)

五カ月目のイヌの日にサンバさんがしてくれた。帯に犬と書く。

(岩神)

臨月における妊婦への配慮 普通の生活。高いところに手をあげない。重いものを運ばないようにと言う。(住吉一丁目)

便所のそうじをした。きれいな子ができると言った。

動くように、家の中の用はするようにと言うこと。

高いところには昇らないように。

ウエツガタ(殿様)は豆をまいてひろわせた話がある。軽く動くほうが良い。病人ではないので。商人の子は生むまで同じ。(岩神)

出産前後の妊婦の食事 産後、イワシを食べた。古血がおりると言う。豆が良いと言った。

生まれたのちしばらくはカツブシとオカユであった。油類、からいものは良くないと言った。(住吉一丁目)

生まれるまでは普通の食事。

鯉、ナマズを食べると乳の出が良くなると言い、ミソ汁したてにし  
た。

二十一日までカツブシミソのオカユ。(岩神)

出産時に用意するもの 産じゆく布団(あとですてる)、肌着、オシ  
メ。(住吉町二丁目)

布団の上に油紙を敷き、上にワタをおいた。タライに湯を入れ、ゴ  
ザの上においた。

太陽を見せるなど言つて、雨戸をしめた。(岩神)

### (三) 出 産

出産をするところ 奥の部屋。明るくないところ。(住吉一丁目)

ナンド。奥の間。(岩神)

お産の方法 ヤグラにつかまった話は聞いたことがある。

(住吉町一丁目)

寝て生んだ。(岩神)

お産に立ち合う人 サンバさん、姑さん。(住吉町一丁目)

オサンバさん、実母。(岩神)

お産を取り扱う人 オサンバさん。トリアゲバアサンとも言つた。

(住吉町二丁目)

オサンバさん。(岩神)

お産時の夫の役割 サンバさん呼びに行く。お湯をわかす。ダン

ナはいないほうが良い。(住吉町二丁目)

「外に出てな」と言われる。「はじめて」にいと、次の時にいと  
と生まれないと言う。

ダンナはサンバさん呼びに行く。(岩神)

ウブタテメシ なし。(住吉町二丁目・岩神)

後産の処理 オサンバさんが始末した。(住吉町二丁目)

オサンバさんがとりにきて、人の踏むところにいけた。エナ。

大正昭和のころは、出生届をすると市役所でとりにきて、「エナ」  
のカマで別にもした。(岩神)

産湯 サンバさんが入れた。(住吉町二丁目)

一〜二週間はオサンバさんがいれた。いといと姑さん、ダンナさん。

(岩神)

へソの緒の処理 しまつてある。とつておくのが良いと言う。

(住吉町二丁目)

干してしまつておいた。桐の箱。紅白のヒモでしばつてあつた。

(岩神)

新生児の呼び名 アカンボウ。(住吉町二丁目・岩神)

異常分娩児 サカサツコ。へソの緒をけさにかけて生まれた子には

「ケサ」の名をつける。(住吉町二丁目)

ケサツコ、サカサツコ。(岩神)

初めての授乳 乳はすぐ出ないので、はじめは砂糖水をくれる。ホ  
ウズキをなめさせる。

薬局で吸いフクベを買つて、もんだり、吸つたりした。しないでた  
まると大変であつた。

モチ、鯉こくを食べたり、親元の力米ちからめが良いと言つた。

(住吉町二丁目)

砂糖をつつんだガーゼをしめらせてなめさせた。

鯉コクを食べると良い、モチが良く出ると言つた。(岩神)

産婦の食事 ウブヤあけまではオカユは別に作つた。オカユと白イ  
ンゲンインゲンを煮たものなど。(住吉町二丁目)

出産後の禁忌・ことわざ 髪はすぐ洗わない。



冷たい水にすぐ手は入れない。(住吉町二丁目)  
頭を洗わない。

神社の鳥居はくぐらない。

二十一日間は安静にしている。(岩神)

避妊や中絶 ホオズキを食べて、と言ったことがある。

(住吉町二丁目)

石段をとりおけるとか、桑の根と言ったことがある。(岩神)

流産・死産 帯をしめる前に亡くなると墓にそのままうめた。しめ

ると一人前に扱った。(住吉町二丁目)

医者を頼んだ。(岩神)

流れ灌頂 なし。(住吉町二丁目・岩神)

命名 一週間目につけた。(配給の関係で)

お七夜までにつけた。

決まった名は神棚の下にはり出した。

実相寺さんでつけた。

神主さんがつけた。三〜四の名をもらい、神棚にあげ、小さい子が

引いた。

仲人をした人がつけた。

おじいさんがつけた。(しきたりがあった)字画をみた。

就名をする例がある。渋谷弥兵衛、藤井新兵衛、中島政五郎などが

あった。特に被露はなく、ハガキで出すくらい。(岩神)

二十一日目までには作った。

一週間くらい(お七夜まで)で作った。

作った名は神棚の下に貼った。

エトを入れたものもある。

東照宮でつけてもらった。いくつか書いてくれるものを細い紙に書

いて、カンジコヨリにして、一番下の子に引かせた。

横山町の実相寺では、その子のさわった名が名になった。(岩神)

産育のこと 子供が産まれたときにはお宮まいりをした。

子供の名前は、実相寺へ行つてつけてもらった。また、五つくらい

の名前をつけてもらって、その中からみんなであらんだ。おじいさん

がつけた。(住吉町二丁目)

出産式 赤飯をふかす。神棚、イナリにそなえた。内々ですませた。

ウブスナ様につれて行った。

出産見舞いには、二十一日のオビヤの日に赤飯と紅白のトリノコモ

チのおかえしをした。

見舞いはメリンスの一丈とか羽二重が届いた。(住吉町二丁目)

お七夜には、赤飯をふかし、オカシラ付き。神様や仏様にあげた。

お七夜に赤ん坊を三カ所の便所をオサンバさんにつれてまわってお

じぎをさせた。

家の中の三つの便所で、庭の便所、年寄の便所、家の便所。

お産見舞いは、金や物で、反物(サテン)などが届いた。着物は実

家で用意した。(岩神)

産婦の床上げと就労 二十一日間は床についている。

ウブヤがあけると言う。(住吉町二丁目)

二十一日目。(岩神)

#### (四) 子供の成長と祝

出産祝 翌年の正月に、破魔弓、羽子板が届いた。(住吉町二丁目)

二十一日目のオポヤキにお宮まいりをした。(岩神)

産婦の里帰り ウブヤあけに行った。(住吉町二丁目)

初子だけは実家に行った。生み月か、その前一週間〜十日前に。

次は婚家で。

実家にどのくらいいるかは肥立ちによる。

一カ月〓三・四カ月の人もいる。実家に帰らない人もいる。(岩神)  
食い初め 百日目に小さな膳をそろえた。(住吉町二丁目)

百日目。(岩神)

生児へのお歳暮 なし。(住吉町二丁目・岩神)

初節句 男は実家より「幟」や、家により床の間用の台のぼりが届いた。お返しは柏モチと酒。

女はおひな様が届いた。お返しは桜モチに酒とカツオブシをつけた。

(住吉町二丁目)

男には「幟」が届いた。上の子くらい。柏モチとタラの干物をかえした。

女にはおひな様が届いた。菱モチと桜モチに白酒をつけた。(岩神)  
誕生祝い 大きい一升モチを作り、風呂敷につつんでしよわせた。

あるける子がいた。(今の子はあるく)昔はあるくのは誕生三月と言った。(住吉三丁目)

一升モチをしよわせる。風呂敷につつんだ。誕生であるける子は少なかった。(岩神)

子守りと子守唄 兄弟が多いと上の兄弟がした。大きい商家では子守りがいた。モリツコ。

シヨイヒモやオブイヒモ(サラシ)を使い、戦後カメノコになった。ハンテンの袖なしでハンテンがわりになった。

唄はネンネンヨ、オコロリヨと言った。  
人形を天井からさげておもちゃにした。

学校にしょって行ったこともある。(いやだった。)(住吉町二丁目)  
母かおばさん。兄弟がおぶう場合もある。小僧さんがいれば小僧さ

ん。(燃り屋などをしているとその家につとめている)

オブイヒモ。

ネンネンコロリヨとうたった。(岩神)

七・五・三の祝い 生まれ方がいいと七・五・三になった。

八幡様や雷電様にお参りした。

実家より三歳の晴れ着が届いた。(住吉町三丁目)

氏神様に行った。親類にあいさつに行った。(岩神)

幼少年期の習俗 昭和中頃のこと、丈夫に育つように、生んだ子を捨てて、拾ってもらった。(岩神)

弁天通りの呑竜様で七ツ坊主の願をかけた。女の子も教え七ツまで坊主頭にした。毎月八日の縁日には行った。

本名と別の名をつけることもあった。(住吉町二丁目)

## 二、厄年・年祝儀礼

### (一) 厄年と厄除け

幼少年期の厄年と厄除け 百軒町の高岑院。四歳の正月にゆく。

おばあさんがお札をもらってくる。(岩神)

病気に対する呪法 虫封じ―坊さんに頼んだ。

あつけよけ―笠をかぶり、水をかぶる。雪の下をかじる。(岩神)

生涯の厄年と厄除け 女―十九・三十三歳

男―二十五・四十二歳(岩神)

川崎大師に行った。(岩神)

(二) 年祝い

年祝い なし(岩神)

三、婚姻儀礼

(一) 青年期の動向

青年会 青年会は部落や町のでつたをいした。

春は敷島公園で運動会をした。戦後二十一年ころよりはじめた。四月三日に行っていたが、寒いのでのちに五月五日になった。四

処女会はモノ日のでつたをいした。

壮年会もあり、夜警もした。(岩神)

夜あそび 祭りに行ったり、映画に行ったりした。大渡りよりむこうに渡ったりもした。(岩神)

学校 小学校は中川小に行つた。月謝を払つたが、額は忘れた。尋常は四年までで、高等科もあり六年まで通つた。(旧一毛町)

勉強 寺小屋はなかつたが、先生の所で勉強を教えていて、何人かで勉強していた。

小学校は中川小に行つた。各学年五学級ずつあつた。卒業すると久留間高等へ進んだ。ここは元尋常科もあつたが、高等科だけになつた。

桃井―中川―敷島―城東―城南の順に学校ができた。家の仕事に追われて、学校には半分くらい行き行っていない。

恋愛の呼び方 クツツキアイ。(少ない)

親が決めて、三三九度で初めて会つた例もある。(岩神)

(朝日一)

(二) 婚姻の条件

結婚適齢期 男は兵隊検査後の二十五く七・八歳まで。女は十八く九歳。戦前はいいなづけもあつた。(岩神)

見合い 仲人とその家に行つた。見合いまでゆくとだいたいOKであつた。(岩神)

婚姻圏 両毛線の南で近い町と、上川淵、下川淵になつている。

(南町四丁目)

(三) 婚姻の成立

婚約 タルたてと言う。仲人がむこさんの家と嫁さんの家の間をまわつた。祝いだるは二つに分かれていて、一升ずつ入つた。

戦前はその他四斗ダグが一つつき、その酒を祝いだるに入れてもつていった。(岩神)

仲人まわり たるたての前に、むこと仲人が、嫁さんのとなり三軒に手ぬぐいを持ってあいさつに行つた。(岩神)

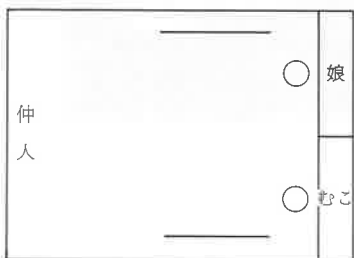
婚禮の座敷 右が上位で、むこが右。昔は左むこ、右嫁であつた。(岩神)

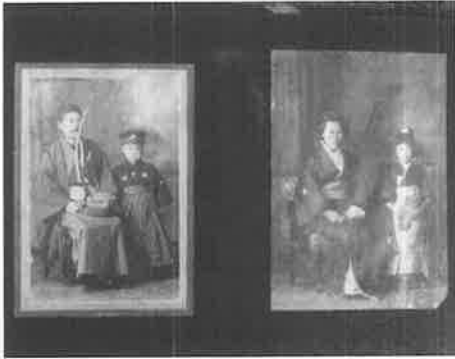
取り結び 嫁と親戚が入る。仲人が下座にゆき、説明とあいさつをして上座にもどる。

三三九度。オチヨウ・メチヨウがする。

親戚の紹介があり、(むこ側から嫁側へと)親戚のカタメがある。のち自由に宴会

となる。おひろめが長い。(岩神)  
式の翌日の行事 カネツケで赤飯を持つ





明治時代（城東町三丁目 小林敏明氏蔵）



明治頃の写真 右は明治40年頃  
（城東町三丁目 小林敏明氏蔵）



大正5年の写真（城東町  
三丁目 小林敏明氏蔵）



大正2年頃の写真 左の女性の髪型が二百  
三高地（城東町三丁目 小林敏明氏蔵）



大正13年の写真（城東町  
三丁目 小林敏明氏蔵）



大正5年の写真（城東町  
三丁目 小林敏明氏蔵）

て行った。嫁さんの家へ。

明治の代のおばあさんはオハグロをしていた。嫁さんは髪を島田から丸マゲにした。二〜三軒を半紙を持って嫁の仕度でまわった。(岩神)



大正の頃の写真(城東町三丁目 小林敏明氏蔵)



(城東町三丁目 小林敏明氏蔵)

むかしの嫁入り  
人力車四台のつて嫁入りした。

嫁・婿・仲人夫婦が、大胡まで人力車にのつてきた。大胡からは馬車にのつてきた。

大胡・前橋間にとて馬車があつた。(日吉二)

さかづき 入営記念や除隊記念に日の丸や軍艦旗の絵柄を入れたものを作った。

現役入隊は、昭和十七年には甲種のみだったのが、十八年には第一乙まで、十九年には

第三乙まで広がった。

十九年以降男がいなくなり、バスの運転手を女の人がやるようになった。(表一)

#### (四) 葬送儀礼

葬式 共同墓地があり、墓碑の穴掘り当番が四人ずつ順にまわってきた。

村中でのべおくりをした。

その晩、各戸一人が出て、念仏をとなえた。

お寺は、長昌寺、正幸寺、松竹院、隆興寺だった。(南町四丁目)

村中でのべ送りに出た。順番で穴掘り仕事ができ、四人でやった。

葬式の晩、各戸から一人(年寄りだけでなく)出て、念仏をとなえた。(南四)

町内に死者がでると、今は組単位で世話をしている。

隣保班があり、その前は組長さんがいて世話をしていた。

組の人が交代で世話をしている。

むかしは、組長は組の葬式の世話くらいしか仕事がなかったので、

組長のことは、じゃんぼん組長といっていた。

えらい人がなくなつた場合はべつだが、ふつうの人がなくなつた場合には、組長(むかしは伍長)が世話をした。

組は、家のならびで区切っている。

香典は、組でまとめてだしている。

産見舞とか病気見舞などは組としてはとくにやらない。各個人につきあいとしてやっている。

お通夜のときは、近所の人、知人がくる。

新盆のときは、近所の人をよぶ。

もとは四十九日の供養をしたが、今は三十五日ですませることが多い。

一年忌、三年忌のときも、親戚の人、近所の人をよぶ。  
七年忌になると親類だけをよぶ。(住吉二)



## 十年中行事

むかしは、神棚におしめをはった。

三が日の間、ぞうに。

七日の朝が七草がゆ。

十一日がくらびらき、あずきをにて、おしるこをした。

十五日の朝、あずきがゆ。

うまくないので、砂糖を入れて食べた。

十五日のことは、でっち奉公の正月といった。

二十日正月はよめさんの正月といった。二十八日はしまい正月。この二つは町にはない行事。

二月のまめまき。今でも豆まきをしている。

三月、五月の節供は、子供がいらないとしない。

お彼岸、春と秋に墓まいりをする。

盆もした。町は棚かざりをしない。

仏壇をきれいにする。かむりもんをする。

十五夜・十三夜はやらない。となりのうちではやっている。

十日夜の行事はない。

えびすこうは、子供の時分はやった。

これは、今でも、やっている人とやらない人がある。

秋のえびすこうのときは、たいをあげた。

十二月下旬、お札をうける。これを正月の神棚にかざる。

むかしは、暮の二十八日に、もちつきをした。

朝から晩までもちつきをしていたうちもあった。(住吉二丁目)

### 一月

若水くみ 正月一日の朝、井戸から水をくむ。二軒で共同の井戸だったので、二軒で早くくむのを競争した。(文京一丁目)

年男 三カ月にソバを作ったり、雑煮を作った。(文京町四丁目)

初参り 芳町の成田山に行った。(文京町四丁目)

年始回り むこさんは四日に手ぬぐいを持って嫁の家へ行く。(文京町四丁目)

事始め 買いぞめ、初荷があつた。初荷の札をつけておとくいさんを回った。(文京町四丁目)

七草 セリ入りの雑煮にした。モチを小さく切つて煮て、上にセリをのせたもの。神棚にあげた。(文京町四丁目)

前橋の初市 前橋の初市は毎年一月九日で、本町の大通りを中心に

だるま市があつた。

一月八日に、初市に店を出す人たち(雑商組合)があつまつて、場

所の割りあてをする。

一月九日には、午前中に店をかまえる。

天王様は、午前九時頃、八幡宮で修祓式をおこない、九時半ごろか

ら、中央商店街を渡御する。天王様のおみこしは、きやりを先頭に、

市民以下町内役員をしたがえて行列をする。昭和三十六年からは、従来とはコースをかえて

貿易会館——諏訪町——立川町——豎町——横山町——桑町——本町

というコースをたどって、だるま供養として行列のうしろに自動車をつけて、古いだるまを回収することになった。だるまをおさめた人には、おみごくをやった。

天王様のみこしは、十二時ごろまでには、㊦材木店前の天王屋敷とよばれるところにおかりやをつくって安置した。このあと、貿易会館で、なおらいがおこなわれた。

天王様におまいりに行く人は、夜の十一時ごろまでであるが、そのあと、天王様を八幡宮へおかえりする。天王様をおくるのも、むかえたときの人たちである。神主は八幡宮の宮沢氏。なお、八幡様のお札を、店の人たちに配布する。(本町)

## 十四日

小正月の飾りかえ オカザリカエでモチをついた。三十〜四十cmの枝にモチを小さく切ったものをつけた。(文京町四丁目)

小正月 お飾りの飾りかえをして、片貝の虚空蔵さまにおまいりにいった。(文京町二丁目・天川原町)  
どんど焼 どんど焼きの時、松飾りを集めてお金をもらう。どんど焼では、ミジンコのお菓子を配った。



どんど焼 (日吉町二丁目)

(文京町三丁目)

十五日かゆ 小豆かゆを作った。十八日にあためて食べた。

(文京町四丁目)

えびす講 マスマス繁盛するようにまつた。マスとコブまきを供えた。一升ますには金が入るように、お金を入れて供えた。

(文京町四丁目)

## 二月

### 三日

節分 主人がまとめてまいた。(文京町四丁目)  
袋を作ってもらい、家々でまくお菓子をひろいに行った。

(文京町三丁目)

豆まき 二月三日に五軒の隣組をまわった。子供がまわるとお菓子くれた。(文京一丁目)

ヤカガシ ヒイラギにイワシの頭をさして、玄関の上にさす。イワシはツバをかけて焼く。(文京町四丁目)

初午 米の粉でマユ玉を作った。(蚕をしていた家)(文京町四丁目)  
お節句 三月三日には、おすしを作って、二子山古墳にいつて食べた。その日は学校が半日だった。

二子山は一年生の遠足の場でもあったし、芝ふの上を竹スキーですべるあそび場でもあった。(文京町二丁目・天川原町)  
もちつき大会 三月の節供前の日曜日にやっている。

神社の境内でやる。

子供としよりをよんで、もちを食べてもらっている。



ねたきり老人、一人ぐらしの人、高齢者にはこのもちを届けている。  
あんぴん、からみもちをくばっている。(住吉町二丁目)

## 四 月

春まつり 四月二十五日。相撲をした。近郷より来た人がある。親戚を呼び、ふるまいもした。(文京町四丁目)

## 五 月

八十八夜 五月一日は八十八夜で、シモよけにシモヨケモチをついた。(文京町四丁目)

シヨープ 五月五日にシヨープ湯をたいた。

軒先にシヨープをさした。へびをよけると言う。(文京町四丁目)

## 八 月

八朔節句 八月一日にシヨীগを持って行き、メカイをもらってくる。(昭和はじめころ)(文京町四丁目)

お盆 お盆のあと、笹や花ダンゴをそなえて、端氣川の橋から流した。

盆には、ヒヨウナのみそよごしを十五日の晩に作り、ナスの油いためを少し、団子を六つ皿にもってそなえた。

十六日には竹笹、花、キュウリの牛、ナスの馬をつつんで川に流し、線香をあげた。

「盆だ 盆だ 提灯だ 提灯だ」

もえたら おしまいだ」

小さい子が提灯をつけて、ゆかたを着て、町内を歩いた。

十五日から二三日やった。

十七日は盆ガラといって、遊んだ。(文京町一丁目)

天王まつり 七月十四日、宗甫分から、子供が提灯を持って、妹神

がいて、六供におまいりしないと、祭りができないといつて来た。

妹神は、八幡の西の小さなお宮にまつてある。

六供はその日は農休みになり、みこしに水をかけた。(六供町)

オクンチ 九月十七日にオクンチのお祝いをした。

八幡宮におこわ飯を上げた。夜中の十二時にあがつたおこわ飯を、

夜あそびの人が上がるのを待つて食べた。それまですもうをとつてあ

そんでいた。(文京町二丁目・天川原町)

## 九 月

十五夜 ダンゴを十五個作り、ススキ、果物とそなえた。

十三夜もした。十三個のダンゴを作った。よけいに作ると子がよけ

いに行けると言う。(文京町四丁目)

敬老会 九月十五日にしている。

六十五歳以上のとしよりの人のいるうちへ、組長が赤飯の折をくばっている。

公民館によんでやっている。

床布団、ねまきなどを高齢者の人にやる。

このことも、ここ十四、五年のうちにはじまったこと。

(住吉町二丁目)

## 十月

寄居稲荷 十月一・二日がおまつり。

むかしは、清王寺全体の鎮守様だった。(日吉町二丁目)

十日夜 旧曆、十月十日の日、モグラ退治のために新ワラで筒を作り、地面をたたいた。

イモガラを入れるとよい音がするといった。

「十日夜、十日夜

十日の夜は ねらんねえ

夕飯食っちゃ はらでえこ」

とうたいながらたたいた。(文京町二丁目・天川原町)

十五日 竹の先に五寸釘をつけ、よその家の縁側にそなえてある団子をつきにいった。

つきに来られると縁起がいいといった。

団子の他には、りんごなどを出しておいた。(文京町一丁目)

果物、団子を十五、里芋を縁側にそなえる。ススキをとってきてかざる。

子どもが各家をまわって、団子を下げる。(文京町三丁目)

トウカンヤ 斉藤さんの家の庭で、モグラツタタキをやった。

ワラたばに、サトイモのカラを中に入れてたたいた。(文京町三丁目)

## 十一月

十日夜 ワラで中にイモガラを入れて作った。それで地面をはいた。(戦前まで)(文京町四丁目)

お酉さま 酉の市

は、小石神社の祭りで、熊手を売る店が出てにぎやかだったが、神社がせまくなったり、戦争のためすたれてしまった。

神社は、今のスズラン

の本店の所にあつたが、九十九年契約で借して、敷島町に移った。移転費用、新築費用、公民館の費用はスズランに出してもらった。酉の市はにぎやかで、連雀町から比刀根橋まで人でうまつたことがある。

市内の東西南北の青年団長が警備してくれた。

## 十二月

正月飾り 町のとび職の人が門松を売りにきた。店を出して売った。門、物置、便所、仏だん、エビス様、水神様、台所にそなえた。今はクジメをたてるのみ。昔はお松にごはんをあげた。(文京町四丁目)

正月棚 タナかざりを作った。一間近い長さで、竹の棒にさげた。ミカン・コンブ・鮭などさげた。糸でつるしてあつた。

上に八坂神社の幣束とお供えをおいた。(文京町四丁目)



酉の市

## 昭和六年当時宗甫分の年中祭事

一月

一月一日 午前八時に成ると、其の年の年番五名（年番と言う役は昔より五人組と言うのが江戸時代から全国に御触れが出されて居た事）其の名残が今に伝えられて五人組が有る。其の組の長を務める人をご長と言った。

其の人々が神社に来て先ず第一に水神社の拜殿の真中に有る三尺角の箱火鉢に炭火を一杯おこす。其れから御供物を上げて代田宮司を迎えて四方拝の儀が行われる。四方拝は今年一年の村中の無病息災と豊作を祈る。

四方拝に立ち寄る人は氏子総代、ご長、外に年番等であつた。祈禱が終わると供物を下げて御神酒を飲み、するめ等を食べて今年を祝つて帰る。

一月十四日はどんど焼である。此の行事はどういう訳か知らないが上組と下組とに分かれて二組のどんど焼小屋が造られる。上組は今の前橋機材の東北角に造る。下組は今の（いづみハイツ）の北東の角に造る。

其の日子供達は、心待ちにして学校から急いで帰り、子供の大将は六年生か、高等小学二年生（今の中二）の男子である。荷車を高学年の子供の家から借りて、各家々の正月のしめ飾り、大根しめ、ごぼうしめ、長じめ、お正月様の御顔隠、門松、古いお札、子供の書初等を集める。其の時に少々の御養錢をもらつて来る。其の錢で御神酒一升、蜜甘と雑菓子等を買う。そうして又大きな竹を三本買つて来る。

いよいよ夕暮れになると、子供の大将等が小屋を造り始める。其れは其れは高いのである。竹の先端には書初等を結え付ける。高さは六メートル位あつたらう。其の中に大人達がぞくぞくと寄つて来て、小屋に御神酒が掛けられると上下組の長老の人が火を入れる。高々と燃え上り勇壮である。竹の割れる音、炎のゆれる音、なんとも言えない。集まつて来た老若男女に子供達は蜜甘や雑菓子を配つてやる。又、寄つて来た人達は、切餅等沢山持参して焼く。又するめ等も焼いて食べる。焼いた物を食べると、此の一年間風邪等をひかずに健康で暮らせる等の言伝が有る。

其れにどんど焼で燃え残りの松の枝を持ち帰つて家の屋根の上に上げて置くと、一年間其の家は火事にならないと言うので、皆、てんで持ち帰つて屋根に上げたものである。

二月

節分は大体二月三日頃である。どの家でも夕方になると、柊の小枝と、豆幹一本に、鯛の頭だけを其の二本の木にさして、火で焼いて、玄關の所に差して置く。其れを差す時に呪文を唱える。「やっかかし、やっかかし鬼も魔物も払つて、鬼も魔物も払つて」と言う。次に、大豆をいって、一升升に入れて神棚へ上げてから、家長が一番先に水神社へ行って、「福は内福は内、鬼は外鬼は外」と、大きな声で豆を撒いて来て、其れから一家の男子は入れ物に豆を入れてもらい、家の庭へ出て「福は内福は内、鬼は外鬼は外」とねり廻つて家に入り、各々の年の数だけいり豆を食べたり、お茶に入れて福茶にして飲んだりした。其の行事も今年の無病息災を祈つた。

### 三 月

二十一日は彼岸の中日で、今年の年番の五名の人々は、十九日に、村中の家々を巡って、少々の米と銭を集めて来る。其の米と金で雑菓子を沢山買い、又、三升つきのお供餅を作った。水神社の東に如来堂が有って、其のお堂の中に、大日如来様が安置されて居た。二十一日には年番の人が、大日如来様を、お堂の奥座敷の前に机を出して、其の上にお供餅や雑菓子を供えて、大日如来様に灯明をあげ、太陽の上がらぬ中に鐘を叩き始める。だんだんに村中の子供達が、手に手に木槌を待って、大日堂へ寄って来て鐘を叩く。其の日は太陽の出始めから太陽の沈むまで叩くのであるから、子供達は飽きるので、年番の人が、度々時を見計らって菓子を与えるのである。

日暮に近くなると、年番の人は、お供の餅を村中の家々に菓子も少々入れて半紙に包んで配ったものである。其れは仏教から始まったものだ。

三月十五日春祭、今年の豊作を祈願する。  
今は四月十五日と成る。

### 四 月

八日は花祭である。村に念仏婆さんと言う人が十名程居た。其の人は、村で人が死んだりすると、其の家に行き、死んだ人の世話をしたり、葬式の日には念仏を唱える。又、一と七日、三十五日、四十九日の日も行って念仏を唱えた。

前日の七日には、其のお婆さん達が、大日堂に安置されたお釈迦如来（高さ十五センチ位の唐金製）を出して良く洗い、又、組立式の小さなお堂が有って、其のお堂の屋根に桜の花や、菜の花、又は椿の花

等を糊で付けて華麗に仕上げる。お堂の中に直径四十センチ位の飯台の様な物が有って、お釈迦様を飯台の真中に立たせて、甘茶を作ってくれて、お釈迦様に頭から甘茶を掛けて、横に置いてある甘茶を瓶等に入れてもらって来て飲んだ。

### 七 月

十四日は宗甫分村水神社の夏の大祭である。年番の人は、十日程前より各家々に有る村の名入れの手提提燈を集めて、紺屋町の小西提燈屋へ貼り替えに出す。手提提燈に、氏子総代用に、青年会代表に、長幌二本総代用（青年会用は弓張提燈である）を出す。そうして、十四日の日は、午前六時には年番を始めとして、村中から一戸一名づつ出て境内の清掃やらのぼり立て、又は粹燈籠を組み立てたり、神輿を洗うのである。若者は神輿を利根に担いで行き、流れに入れて洗いながら、六供河原迄流して、又担いで神社に持って来る。其れが終わると、一般の人は家に帰り年番だけが残って造花を作る。又粹燈籠等を準備する。

午後二時頃には、代田宮司が親子二人で来て、水神社の奥の院の幣束等を新しいのに取り替えたり、締めを張り替えて、四時頃になると氏子総代や、区長並に、村世話人、年番等が、供物の準備が終了して拝殿に座す。二人の神官にて御祈禱が始まる。祈禱はすべて、村民の健康と秋の豊作を願うのである。八百万の神々に祈る御祈禱が終わると、神官が村境に八丁しめと言う竹の先に御神符と幣束の付いた二本を子供に渡される。八丁しめは村の内に悪病や災等が入り込まぬ様魔除けである。

大曲の角、新東道、風呂川境、代田境、六供竹内工場裏風呂川境に立てた物だ。魔除けが立て終わると、こん度は子供等で、六供の八幡

様へ妹神を迎えに行く。もう其の時刻は闇が迫って皆提燈に火を入れる。子供達は、村の年番が配った豆絞りの手拭で鉢巻をする。其れで年長の子供が先道で迎えて来ると愈々子供神輿の出る番だ。其の頃は、神社の巡りに永屋、子供商の店が五店程出て居る。もう時刻は八時位である。

子供神輿と言つても、十六、七歳以上の若人が担ぐのである。皆裸で白の六尺ふんどし姿で続々と神社に寄つて来る。時を見て氏子総代が神輿を水神社正面に安置させて御神酒を掛ける。神輿は今でも総けやき造りで素朴な出来であるがかなりの重量である。輿の四方に麻で作つた縮縄が張られ何となく荒々しさが見える。若衆は一勢に担ぎ「わっしょいわっしょい」と掛声も勇ましい。子供は手提提燈に火を入れ、又長幌提燈を持つ人、また大仏と言う三メートル位の竹竿の先に大きな幣束が付けてあり、其れは、村の御獄様の信者で、先立の人が白装束で来る。先立は何やら呪文の様な物を唱えている。だいたい、子供神輿は午後十時頃に終わる。其れから大人の神輿が出る。

又、総代が神輿に御神酒を掛けてから担ぐのである。それはそれは実に壯観で威勢が良い。又、掛声も違う。気候も暑いし、酒も体に入つて居るので、もんでる人の体から湯気が立つて居るので川の水をバケツで掛ける。

当時の村の中を流れて居る水は、それはそれは澄んで針を落としても見える程きれいであつたからどんどん掛けた。

十二時近くに成ると隣村の六供から若い衆がもみにやつて来て、酒を飲んで喧嘩と成る事が度々有つた。あの神輿を放り出して勢いよく落としたりしても誰一人怪我をする人が居なかつた。其れも神の加護かもしれない。若者は肩から血がにじむ人も居た。そうして身体を鍛え上げるのかもしれない。又、今年の豊作と無病息災も共に願うの

である。この神輿がもみ終わる頃には東の空が白々と明けて来る。そうして十五日は若者は、ゆつくりと体を休める。水神社では八時から大抜の儀が始まる。又代田神官が二人来て祝詞を上げる。そうして村全体を浄め一年の無事を祈る。

書き遅れたが、宗甫分村は毎年利根川の大洪水に依り、土地が崩壊されて行くので、其の危害を防ぐ為の祈願も併せてしたものである。

十六日は村の年番の人は、一年間の祭典費用を長が立替えて置いた金を清算して、村中の家々を巡つて祭典費を徴収する。だいたい区費の何パーセントとしてもらう。其の仕事が終わつて一年の万払をする。当日は、村中の人々が事務所の上階に上つて、祭に奉納された御神酒を飲む。昔の酒は酒屋が水を沢山入れるので、夏の日には三日もたてば腐り始めるから、皆夢中になつて飲んだ。これが終わつて年番は次の年番に引継がれる。

## 十月

九日 十月の秋祭。お九日。遠い昔は十月十七日であつたが、大正の末期に九日と成つたと言う。

八日の朝六時に成ると、七月のお祭後引継がれた年番が大太鼓を鳴らす。すると、各家庭から男衆が出て来て、神社境内の掃除をしたり、のぼりを立てたり、粹燈籠を立てたりする。後は年番の人達が造花を作つたり、粹燈籠の軒先に差ししたりする。

午後になると、子供達は高等小学校二年生が先になつて荷車を借りて来て、薪を各家々からもらつて集める。村では、毎年利根川の洪水に依り、河原に流木が上がるので、其れをほとんどの家が出す。水神社の庭は薪木で山に成る。これを年番の人が、少しづつ火を付けて一晚中燃すのである。季節は秋なので、甘藷又は、馬鈴薯等を、火の中

に放り込んで焼いて食べた。其れが何よりの村人の楽しみであった。夜になって、少年達十数名は水神社の拝殿の中で、のほりにくるまて寝る。

九日の朝は、農家の人々が先を競って、蒸したての赤飯を重箱に一杯入れて水神様を始め、境内中に有る神様に皆奉納する。だから少年達は温かい赤飯が食べられるので良き想い出になった。

九日の朝八時頃に、年番が来て掃除をして、水神様と神長宝様に供物をして神官の来るのを待つて居る。昨夜の燃え火を神社の箱火鉢に一杯入れて中を温めておく。九時頃神官が来て、秋の豊作の感謝と喜びをお祈りして、報告祭をする。そうして十月のお九日祭は終わる。

## 旧十月

旧の十月十日は十日夜で、毎年十月下旬か十一月の始めに成る。其の頃は、農家では収穫の真最中であるが、十日夜餅をついたり、里芋等が出来るので、野菜、魚等を煮て沢山食べる。農繁期なので、体に栄養を付けてもうひと働きせねばならない。又、子供達は藁鉄砲というものを作って庭を叩く。どかんどかんと実に良い音がする。藁鉄砲を叩くと、家の周りや、田畑に居るモグラが驚まげて逃げると言うので、一生懸命になって叩いた。

又十日夜の唄が有った

『十日夜はいいもんだ』

朝そば切に昼団子

大飯食つて腹大鼓、どかんどかんと鳴れ

此れは昔、殿様が農民から年貢を沢山取り立てて居たが、秋の収穫時に、農民に沢山食べさせないと、農民が一生懸命働かないから、年貢を取る為に、秋の一日だけを御馳走して食べる事を許したのが、十

日夜の始まりと古老から聞いて居る。

## 十二月

二十八日頃になると、どこの家でも正月の準備で大忙しだ。此日各家ではしめ縄作りをする。農家では新藁も沢山有るから、農業しない家も、藁を沢山もらつてしめ飾りを作る。当時、門松などは大きなのが競つて飾られて、高いのは二メートル半位のを立てた家も有る。しめ飾も、長しめと言つて五メートル位長いを作つた家も有つたり、其れは其れは実に奇麗に飾り付けてあつた。

年番の人も、水神社と各神々にしめ飾をして新年を待った。お正月の餅は二十八日頃から三十日頃迄で、各家庭によつて餅をつく日は違つた。其れでお正月の準備が完了する。三十一日は寝ないのである。

昭和六十三年四月吉日

前橋市南町二丁目三十八―二十七

高橋 優 介 著

水神様の由来 この神社は明治二十一年頃、利根川の中程に位置した所にあつたのが崖がかけて来て今の位置に社殿を移したのである。祭神は水波能充命と申し上げる。当時の南町二丁目は四〇戸位の戸数で宗甫分村と言ひ、この少ない氏子が立派な社殿を造営したのは立派である。社殿の天井板の榫目の画などとても貴重な文化財である。区画整理で少々移転し屋根なども銅板葺など手を加え今では八〇〇戸になろうとして居る氏神様として南町二丁目の発展を見守つてくれて居る神社である。

昭和十年頃まで前橋近郊でつかわれた言葉

あぶせえ

危い

早ようえんでり

早く歩いて行け

お早ようがんす  
温てえだむし  
にしは  
よくおいでなんし  
早くやべ  
安んじゃねえ  
おやげねえ  
おどす  
おつつあれる  
それそれする  
一個くんどの  
どうまん  
かつくらせろ  
(駄菓子屋で子供が)  
おくれ  
くつちやべる  
学校つ子  
たしなむ  
めんごんぜ  
瀬戸っ方  
けつころがす  
良いあんべえだ  
あまつちよ  
野郎子  
おぼんでがんす  
早くけえれ

お早よう御座居ます  
暖かいですな  
あなたは  
良く来て下さいました  
早く行きなさい  
大丈夫だ  
可愛想だ  
叱る  
叱られる  
可愛がりすぎる  
一ツ下さい  
乞食き  
げんこつをくれろ  
売って下さい  
話をして居る事  
小学生  
大事たのしむ  
片っぱしから  
裏の方  
ころがす  
良い具合だ  
女の子  
男の子  
こんばんは  
早く帰りなさい

しつちよつて行く  
自転車ふんどばす  
ひきずり  
こぢよはん  
こやな  
べらほうめ  
……だんべえ  
天ぐるまする  
ばんげ済んだか  
赤っ子  
戸をたてろ  
ほんつく  
腰をひんまくれ  
でれ助  
うかつ  
げえ戸  
とぶ口

背負つて行く  
自転車をこぐ  
だらし無い  
昼と夜の間食べる物  
堆肥場  
馬鹿げている  
……でしょう  
肩車する  
夕食は済んだか  
赤ちゃん  
戸を締めろ  
間抜け  
腰をはしよれ  
間抜け  
ほんやり  
門の入り口  
玄関

## 十一 口頭伝承

六供のこと 源義家が奥州征伐に行く時に、今の六供の八幡様のところで休んだ。その時に六人の供を残して村をひらかせたという。六人の供にはここへ住めと行って、義家は奥州へ行ったものという。

(六供町)

古利根のはなし 昔、この辺は利根川が流れていた。五十歩ほど掘ると、その下にきれいな砂利が出てくる。

広瀬川の流れがもとの利根川という。広瀬川にはもと船がのぼって来たという。ひとね橋の上には船が止まっていた。

料亭の松島の近くには、前橋藩士の家があった。おかんたくといいていた。

川島団子は昔からある団子屋さん、しょんべん団子といった。川のまわりの農家の人が来て、団子を食べに行った。(住吉町二丁目)

百軒町の尾曳稲荷 その昔、厩橋城築城の時、大工の棟梁はいかにして立派な城を築こうかと、ある朝早く利根川べりにたたずんで、構想を練っていると、南の方にポツカリと白雲が現われたかと思う間もなく、あたり一面深い朝霧に囲まれた。うつとりと見とれた棟梁がふと気づいたのが金色の二つの目であった。よく霧の中をすかして見ると、確かに狐の目であった。

驚きながらも凝視していると、狐が長い尾を引きながらあちらに行き、こちらにかけりする姿が、正に怪奇そのものであった。

その後が次第に赤線に変わって現われてきた。それは棟梁の構想に浮

かぶ厩橋城の図面であった。やがて狐は東の方に去り、姿を消した。そこで棟梁は喜んで、その図面に従って立派な城を造り、殿様のおほめをいただいた。その狐の消えたあたりを、今もなお百軒町尾曳稲荷として祭っている。(旧片貝町)

東照宮について 明治三年に刻んだ材木を川越から貰って来たが、組み立てられず、明治四年になって組み立てられた。費用は天満宮で五百両持っていて出してくれた。

天満宮は酒井氏が連れて来た神社で、前橋より出る時置いて行った。本流が東照宮の下を削った時もあり、増田という材木屋があり、いかだをつけて材木の引き上げをしていた。

境内は酒井あき屋敷といわれた所で、そこに入ったもの。南は前橋公園の真ん中、北は堀までが範圍であった。

宮司の先祖は高輪の陣屋につとめていた松平の家臣だった。

板絵は天満山の土の中に埋っていたもの。烏帽子に直垂の人物が描かれていろいろらしい。

船頭屋敷 真正の渡し船頭が住んでいた屋敷が、南町四丁目にあつたという(南町四丁目)

真正の渡しの船頭の屋敷が南町四丁目(宗甫分)にあつたという。推定場所がある。一つは清水万平さんの家、二つはその北百餘くらいの清水徴さんの所、三つ目はもつと北の清水晴男さんの所などの説がある。(南町四丁目)



京安寺 昔、六供にあつた寺で、上新田の地蔵は大門の入り口に建っていたという。

土地改良で炭が出た所は、お寺の瓦を焼いた跡ではないかといわれ、建物の跡ではないかと思われる礎石が出ている。(六供町)

刑務所 明治十八年から土地の買い上げを始めた。明治二十一年に仕上げた。使ったレンガは深谷で焼いたもので、囚人が焼き、桜のマークが入っているという。

刑務所から出る糞尿を宗甫分が毎日汲みに行つて肥料にした。負担金の額にに応じて払い下げられた。汲み取りは元日は休みだった。

(南町二丁目)

天川二子山古墳 三日のお節句には、露店が出て賑やかだった。

(文京町三丁目)

山に穴があいていた。これは東の上から掘つたものだった。

祖父福太郎が子供の時、狐の穴をふさいだら、狐の親がおして来た(文句を言つて来た)。そこで夜中に山へ行つてもとのように直して来た。(文京町二丁目・天川原町)

不二山古墳 駒井さんの所有地で、何か出土したという話は聞いていない。

昭和二年頃、一晩で掘つた。石室の穴があり、子供が中に入れた。中は広がった。

北にカプト山古墳があつたが、終戦後平らになつてしまつた。

天笠さんの土地にも塚があつたが、何も出なかつた。

地続きの土地から古銭が時々出た。(文京町三丁目)

大正十三年の七月のお盆の時、大雨の中で墓泥棒が西の上から穴を掘つて入つた。中には石畳があり、自然石の石が積んであつたという。

(文京町二丁目・天川原町)

カチカチ山といつた。

北の新町から見ると、高台のきわに狐火が見えた。

不二山古墳に狐や狸が住んでいてカチカチ山というようになったという。(文京町一丁目)

カロウト山 カロウト山古墳の北の土地は、高田町の共有地で三百坪あつた。斉藤さんが二百円で買った。囲りは桑畑だった。

大正十三年に中川小に入学した時は、石棺があつた。

市古墳一三号の杭が打つてあつた。石やカワラケがたくさん出た。

今は畑になつている。(文京町一丁目)

弾正林 今の田中鑿泉の所(日赤の裏)が林になつていて、長野弾

正の出城があつた。(朝日町一丁目)

源田島 前橋市東片貝町(旧勢多郡桂萱村)に源田島(ゲンタジマ)

と呼ばれる湿地があり、そこには小さな沼があつて、あたりはヨシやスキに囲まれた、何となくさみしい所。昔、殿様が年貢米を取るために、農地の一斉調べを行った事があつた。その時、村の有力な人々が調べを担当し、役人たちはその記帳にあたつていた。調べに当たつている村人たちは縄を張り、長い竹ざおによつて一画一画を調べまわしている時に、村の有力者は役人の目をかすめて、縄を引き伸ばしたり、竹ざおをすべらせたりして、歩積をごまかし、反別のごまかしをした。やがてそれが役所の目に止まり、村人達は重罪にとわれ、この源田島で十数人打首の刑を受けたという。その時以来、この沼から夜な夜な人魂が数箇飛び乱れ、村人の心を寒からしめたという。

(旧片貝町)

源田島についての他のはなし ゲンタという坊さんが、シマという嫁さんをもつたので生き埋めになつたという。それが幽霊になつて出てきたという。生き埋めになつた当時は、毎晩のように出たという。

この火の魂は源田島からとび出す時は二つで、途中で一つになって野中と片貝の境の辺にあるえぼ薬師に来て、そのえのみの木に止まり、それから野中に入って二カ所ほど大きな木にとまるといふ。

この人魂は人に見られると、その人を追いかけて来るといふ。実際に追いかけて家へ逃げ帰ったという人も野中にはいた。

野中の南と上大島でもゲンタジマのはなしは同じように言い伝えてゐる。ただ上大島では、この二人がどういう理由で生き埋めになつたかについては、説明がなかつた。上大島の人の説明では、この人魂はゲンタジマから出て、野中の木にとまり、その後、上大島の樋下といふところにあつたイチッコ塚のイノミノ木にとまつたといふ、これより南へは決して飛んで来なかつたといふ。

ずっと以前に、上大島のある人が、片貝へ行く時に、えぼ薬師の辺に来た時、えの木あたりでワイワイ騒いでゐる声が聞こえ、火の玉でも出た。このえの木はよじれていて、これがゲンタとシマの姿を現わしてゐるといわれてゐた。その人はおそろしくなつて念仏をとなえたところ、声も火の玉も消えたといふ。

マンカイ塚 前橋の市街地から東方の片貝に通ずる幅四畝位の道がある。その道の端に、二十年ほど前に七く八畝位の大きさの塚があつた。その頂上に古びた塚をマンカイ塚と呼んでゐる。このいわれは、昔マンカイ上人という坊さんが、生あるうちはこの鐘を叩けといわれ穴の中に生き埋めにされた。

この話を聞いた人々は、あわれに思つて人の目を避けて竹筒を差し込み、おにぎりを落してやつた。鐘の音は七日七晩続いていたといふことである。

これ以後、この塚の前を通る人は、履物をぬいで、土下座して通つたといふことである。(旧片貝町)

銀杏の神木 稻荷社を移して来た時植えたものらしく、三百年くらいたつてゐる。保存樹木になつてゐる。

昭和十年に落雷が何回もあつて、ウロができてしまつた。中で火を燃して上から火が出て大騒ぎになつたことがある。(朝日町一丁目)

桃中軒雲右工門 宮城村にいた時、十九の厄年の時に来てもらつて講談をやつてもらつた。うんとたかい金を出した。髪が長く太つてゐない。でつかい家をやつたが、床が落ちちゃつた。その時は義士伝をやつた。とても上手だつた。声に張りがあつた。(日吉町二丁目)

市會議員 警察の巡查で市會議員をしてゐた人がいて、議會に出ると出日当を貰つてゐた。(文京町三丁目)

白金屋文七 石川島監獄を破獄し、天川の分所に押し入り、看守をつかまえ、仲間と共に県庁前の前橋監獄の本所に押し入つた。

その後、秩父騒動に加わり戦死した。(南町二丁目)

江原さん 味噌などの雑貨を扱い、金貸しもした。明治のはじめ税金を払えない人が、名義を江原にして税金を払つてもらつた。

倉が七つあつて小作米を入れてあつた。駅に行くまで、他の家の土地を踏まないといふほどであつた。(文京町一丁目)

齊藤氏 酒井氏の時代、庄屋をしてゐた。朝日町三丁目の郵便局から森庄までの間口の屋敷があり、奥行は国道五〇号から高架まであつた。三千坪近くあつたらしい。

殿様が姫路に転封になり、兄は殿様について行き、弟が前橋に残つたといふ。

松平の頃も庄屋をしてゐて、江原より羽振りがきいた。日赤の所も齊藤の土地だつた。

借金の保証人になり、郵便局以外の土地はとられてしまつた。

株六 朝日町二丁目にいる熊谷さんは足軽頭で、株六なまろくといい、足軽株を六つ持っていた。

江戸時代には萩町にいて、明治になって引越して来たという

(朝日町一丁目)

六部大尽のこと それは北の方のムラのことである。あるうちで、旅の六部を泊めた。ところが、その六部さんがその家から出て行ったのを見た人がいない。六部さんを泊めた家は、後で大尽になったという。ところがその家の人は早いうちに出て行ったといっている。

(住吉町二丁目)

大火事 宝暦六年五月十三日に、井上宅から出火し燃え広がった。三百四十二戸を燃やす大火となり、松平の藩主みずから消火に出るくらだった。

ここは宝暦三年に松平の殿様が三百七十一軒の足軽屋敷を作った所である。(朝日町二丁目)

提灯 皇紀二千六百年祭が祭りらしい祭りだったのを覚えている。径九尺、高一丈余の荷車に積むくらいの提灯を作った。

昭和三年十一月の昭和天皇の御大典の時も作った。(朝日町一丁目)  
提灯行列 南京陥落と皇紀二千六百年の時に行列をやった。

(表町一丁目)

狐の嫁入 町の東や南の方、孝頭寺から源太島の方に出た。

(文京町三丁目)

大演習 昭和九年に陸軍の大演習があり、高田連隊の人が天川原の家に民宿で泊った。井戸水の検査をして(適)の印をつけた。

(文京町二丁目・天川原町)

航空隊 大正六年二月二十九日に前橋に飛来して、一週間くらいい

た。ダイハツの西を整地して、降りる所を作った。

モーリスファルマンという飛行機だった。雪が降って寒い時だった。

(文京町二丁目・天川原町)

ことば おまえということ、にしはという。

うらの家のことをせどんちという。

便所べん所のことは、ちようず場という。(住吉町二丁目)

天川新町 十八郷

ペンペンチャカチャカ板屋町 (千代田町二丁目)

火事はどこだ 実政だ どうりでへのこがとんでくる

天川新町 板屋町 十八郷町 十八郷には 倉がねえ

(文京町一丁目)

思い出 昭和十八年に八十八歳のひいおばあさんの話として、こんなことを聞いている。

みの様という槍術師南が、馬に乗って下人を連れて、登城するのを見た。帰る時は「だんな様おかえり」というと奥方以下が出迎えた。

(朝日町一丁目)

# 十二 民 家

## 一、はじめに

### (一) 調査目的

最近、伝統的な民家が壊され、現代様式の住宅に建て替えられるスピードはとみに増している。構造的な耐久性に問題はなくても、贅沢な生活が可能となった現代人は機能性や快適性の面から、民家の生活に耐えられなくなってしまうている。昭和三十年代半ばからテレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機の三種の神器は急速に普及し、日常の生活様式は大きく変貌した。現在、住宅へのエアコンの普及率は八〇%にもなっている。このごろの社会生活の変化は、かつて経験したことのないほど余りにも激しい。

しかし、民家は私たち祖先が長い間暮らしてきた日常生活の場であり、そこには祖先の知恵や技術が凝縮されている。最近の画一化した町並みに比べ、昔は風土に育まれた特徴ある美しい町並みが全国各地にあった。伝統的な民家はその地域に潤いや個性を与えてくれた。このままでは近い将来に伝統的な民家はほとんど消滅してしまうことが予想される。せめて調査して記録だけでも採取して未来に引き継ぐことは、現代に生きる私たちの責務であると考える。

### (二) 調査対象と調査方法

今までの一般的な民家調査は戦前までに建てられた土着の伝統様式を持った農家、町家、武士の家などを対象としていた。しかし、本地区が町場であり、建替えの度合いが激しいこと、昭和二十年にアメリカ軍の大空襲を受けていることから、調査前に対象となる遺構の極めて少ないことが予想された。そこで、本調査では戦後に建てられたものであっても、民家の間取りや構造の特性を保持している遺構、特徴ある近代住宅、庶民の生活に密着していた施設なども対象に含めることにした。

調査は予備調査と本調査の二段階で実施した。予備調査は市の文化財保護課で作成した調査リストを基にして、それらをくまなく直接見て回った。調査内容は、構造・形式・規模等の建物概要の把握、建造年代に関する聞き取り、外観の写真撮影などである。表1に対象とした二十四棟の遺構を示す。

本調査は予備調査の結果、精査する必要があると考えた遺構を対象とした。調査内容は現状平面の実測、復原平面の考察、構造・形式・建造資料などの記録、内部にまで及ぶ写真撮影、住まい方に関する聞き取りなどである。この調査の対象となった遺構は、表1においてNo欄の数字に(一)を付けたものである。その総数は十棟である。調査期間は平成四年度・五年度である。なお、「ふくげん」の言葉には、「復

元」と「復原」の二通りの漢字がある。本項では地上に何の建築も無くて過去の建築を新たに建てるものを「復元」、改造されたところを原形にもどすことを「復原」とする一般的な用例に従うことにした。

表1 調査遺構一覧

No.	遺構名	所在地	種別	構造・形式・建造年代等	図	写真
11	金垣進次家	本町 一〇一七	町家	木造二階建・瓦葺・ 建造年代不詳・アゲ ド有り		48 〜 49
10	(伝)旧赤城亭	千代田町 二〇一一	その他	木造二階建・瓦葺・ 明治期建造		47
9	旧神明公民館	千代田町 一〇二二四	その他	木造二階建・瓦葺・ 明治四四年建造		46
8	旧上州新報社	千代田町 一〇一八	その他	木造二階建・瓦葺・ 大正六年建造		45
(7)	丸山和貴家	大手町 三二七二〇	近代住宅	木造二階建・瓦葺・ 昭和六年建造	6	23 〜 27
6	旧六本木内科 医院	大手町 二〇〇一一	その他	木造二階建・瓦葺・ 昭和三年建造		44
5	前田光雄家	大手町 二五八	近代住宅	木造二階建・瓦葺・ 明治期建造		43
4	松山医院	大手町 二四五	その他	木造二階建・瓦葺・ 大正一四年建造		42
(3)	小島定子家	大手町 一九一八	近代住宅	木造平家建・瓦葺・ 昭和一三・四年頃建 造	5	18 〜 22
2	佐久間一郎家	南町 一六二五	農家	木造二階建・瓦葺・ 建造年代不詳・イト ザマ有り		41
1	原沢賀尋家	文京町 三三一一二	近代住宅	木造平家建・瓦葺・ 昭和二年建造		40

23	(22)	21	(20)	(19)	18	(17)	(16)	(15)	14	(13)	(12)
吉田繁之家	山田庚子吉家	長洋家	亀乃湯	尾高俊之家	芳乃湯	渡辺うめ家	佐和豊家	小関芳枝家	高柳内科医院	式部こと家	松村庫吉家
六供町二二八	六供町七二	朝日町 二〇一五	朝日町 二七一一	朝日町 一五二四	三河町 一三三〇	若宮町 二二一一	若宮町 二五二三	若宮町 一一一五	若宮町 一四二二	岩神町 二八二五	岩神町 一九二二
農家	農家	近代住宅	その他	武士の家	その他	町家	農家	武士の家	その他	武士の家	農家
木造二階建・トタン 葺・建造年代不詳	木造二階建・瓦葺・ 昭和二七年建造	木造二階建・瓦葺・ 昭和七年から日赤 病院長の官舎	木造平家(一部二 階建)・瓦葺・トタン 葺・昭和二年建造	木造平家建・トタン 葺(当初草葺)・一九 世紀中期建造	木造平家建・トタン 葺・大正一四年建造	木造平家建・トタン 葺(当初草葺)・一九 世紀末期(一九世 紀初期建造)	木造平家建・トタン 葺・明治八年頃建 造	木造平家建・トタン 葺(当初草葺)・一九 世紀初期(中期建 造)	木造二階建・瓦葺・ 大正一二年建造	木造平家建・トタン 葺(当初草葺)・一九 世紀中期建造	木造二階建・瓦葺 (当初板葺)・明治四 年頃建造
53	8 〜 13	52	34 〜 39	33	51	14 〜 17	5 〜 7	30 〜 32	50	28 〜 29	1 〜 4

表2 平面図の主な表示記号

種類	図と記号	備考
柱間装置不明		
土間		コンクリート叩きを含む
こたつ		
仏壇		矢印は仏壇の向きを示す
神棚		矢印は神棚の向きを示す
かまど		
ガス台		
流し		浴槽・洗面器も同様 ○印は水廻を示す
テレビ		
戸棚		
机		
タンス		
下駄箱		
冷蔵庫		
洗濯機		
電話機		
卓と椅子		

## 二、建築解説

### (一) 本調査の対象となった遺構

本項では本調査の対象となった十棟の遺構を、農家(三棟)、町家(一棟)、近代住宅(二棟)、武士の家(三棟)、その他(銭湯一棟)の順で解説する。各遺構の解説における桁行何間、梁間何間はおおよその遺構規模を把握するために、最近の増築部などを除いた主屋の主要部の大きさを示すものである。なお、正確な寸法は平面図に尺を単位として記している。

各平面図における主な表示記号は表2に示す通りである。また、各平面図や本文における室名などは、その家での呼称を尊重する観点から話者の発音通りカタカナで記すことにした。

※(1) No欄の( )は本調査を実施した遺構を示す。  
 (2) No.4・5・6・8・9・10・14の建造年代は『旧アメリカンボード宣教師館保存修理報告書』(学校法人共愛社共愛学園)による。

24	木暮祐三家	六供町	農家	木造二階建・トタン 葺・建造年代不詳	54
----	-------	-----	----	-----------------------	----

## ① 農 家

松村庫吉家（岩神町一―一九一二、図1 写真1〜4） 当遺構は庫吉氏（大正八年生まれ）の曾祖父にあたる清太郎が、明治四年に後妻に子供ができたので現在地に移り住んだものであると伝えている。その後の自家の生業は農業であるが、清太郎の子である善吉（現在地で二代目）は糸繭商であったという。

当遺構は切妻造、瓦葺（当初は板葺であったという）の二階建て、屋根頂部に「ヤグラ」を設けている。「ヤグラ」は養蚕の換気用の造りである。規模は一階が桁行八間半、梁間五間、二階が桁行八間、梁間四間である。図1に平面図を示す。

一階平面を建造当初に復原してみると、整形田字型の間取りとなる。桁行の半分の下手は土間であり、「ドマ」と称する。表側には幅一間の出入口である「トボグチ」を設けている。「トボグチ」は現在では珍しくなった「オオド」の構えとしている（写真2・3）。上手は「ドマ」に接した表側を「ザシキ」、その裏側を「ナンド」、「ザシキ」の上手を「オク」（写真4）と称している。「オク」の裏側の部屋は呼称が無いという。なお、県内における田字型では、当遺構の「ナンド」を「チャノマ」、呼称無しの部屋を「ヘヤ」「ナンド」などと称していることが多い。呼称のある柱は図1に示すA柱（杉）であり「ダイコクバシラ」と呼んでいる。

「オク」は結婚式の「トリムスビ」（昭和二十二年、庫吉氏の結婚）、葬式の「ユカン」（昭和三十一年、庫吉氏の父）などに使用した。庫吉氏の結婚当時、新婚部屋は最初から別棟の「クラノニカイ」（三カ月位）、その後は「ナンド」を使用したという。普段「オク」は父、祖父、義弟、「呼称無しの部屋」は親類の人に貸していたという。この結婚式の時、お嫁さん（友江夫人）は「トボグチ」でなく「エンガワ」から上

がって「オク」に入ったという。

二階は養蚕用として造られた部分であり、建造当初は間仕切のない一室空間であった。表側の一番東の部屋は、昭和二十二年頃すでにあり、最も早い時期に造られたものである。その西側の部屋（4畳半）は群馬大学生の下宿用として昭和二十五年頃に造ったものであるという。更に、その西側の二部屋（6畳と4畳半）は昭和二十五年頃、背面側の一部屋（8畳）は昭和五十年頃に庫吉氏の子供用の部屋として造ったものであるという。

当家は建造年代を確定する資料を残していない。しかし「オク」の桁行方向二間の柱間の内法寸法が二・〇一尺、心々寸法が二・四三尺、「オク」の北側の八畳」の梁間方向二間の柱間の内法寸法が二・〇一尺、心々寸法が二・四三尺であることや、各種の建築的特徴からみて、伝承通り明治四年頃の建造とみてよいであろう。

神棚と仏壇は「ナンド」（当初チャノマ）に設けている。仏壇には庫吉氏がお茶を毎日、ご飯を炊いた時はご飯を上げていたという。正月三日が「フツウノゴハン」であるという。なお、庫吉氏は家相に関することについて「キモンのベンジョはよくない」という事項を聞き込んでいる。

佐和豊家（若宮町二―五―二三、図2 写真5〜7） 当家は武士

の家柄である。豊氏（大正四年生まれ）の曾祖父にあたる弾司は川越藩の勘定方であったという。当遺構は弾司の子である清美が明治八年頃に、県庁近くの敷地から現在地に移り住むようになった際に建てたものであると伝えている。清美は無尽会社を経営するとともに、近所の人を集めて養蚕を行ったという。

当遺構は切妻造、瓦葺の二階建てで、屋根頂部に養蚕の換気用としての櫓を設けている。規模は一階が桁行六間半、梁間五間、二階が桁行六間、梁間二間半である。図2に平面図を示す。

復原の一階平面を見てみると専業農家とは異なる点に気付く。「ゲンカン」を建物中央部に張り出して設ける、土間部分が少ない。当初風呂場を正面側に張り出して設けるなどの点である。農家というよりむしろ武士の家の造りに近い(二階が養蚕用としての造りであることや、明治になっての建物であることから本項では農家として扱った)。

「四畳半」は当初「風呂場」であったところを昭和二十七年に豊氏の母のために改造したものである。「オザシキ」は結婚式の「トリムスビ」(昭和二十年、豊氏の結婚、葬式の「ユカン」(昭和四十五年、豊氏の父)、出産(昭和二十四年、豊氏の長男)などに使用した。豊氏の結婚当時、新婚部屋は「キタノヘヤ」であり、「オザシキ」は父母、弟、「イマ」は姉夫婦の一家が疎開で使用していたという。この結婚式の時、お嫁さん(千鶴子夫人)は「ゲンカン」から上がって「オザシキ」に入ったという。

当家は建造年代を確定する資料を残していない。しかし「オザシキ」の桁行方向二間の柱間の内法寸法が一・九二尺、心々寸法が一・二四〇尺であることや各種の建築的特徴からみて、伝承通り明治八年頃の建造とみてよいであろう。

神棚は「ナンド」、仏壇は「チャノマ」に設けているが、神棚は戦後祀っていないという。仏壇には千鶴子夫人がお茶を毎日進んでいる。正月三が日の朝には「ゾーニ」を食べ、二日の夜は「トロロ」であるという。「ゾーニ」は柏子木に切ったお餅で、具には里芋、大根、人参を必ず入れるという。なお、豊氏は家相に関することについて「ピワを植えるとウナリゴエ(又はビョウニン)が絶えない」という事項を

聞き伝えている。

山田庚子吉家(六供町七二 図3 写真8〜13) 当遺構は、現当主である庚子吉氏(大正九年生まれ)が昭和二十七年に建造したものである。大工は庚子吉氏の仲人親の弟子にあたる関口利光氏(六供町六九)であり、「こんな家はこれが最初で最後だろう」と言っていたという。材木は岩神町の「イワタ」から購入したという。

当家の生業は農業であり、現在耕地面積は水田が一町、畑が四反五畝である。昭和五十一年まで養蚕をやっており、昭和四十五年頃の収穫量は春蚕が一〇〇貫、夏蚕が四〇貫、秋蚕が六〇貫であったという。

当遺構は切妻造、瓦葺の二階建てで、屋根頂部に「ヤグラ」を設けている。規模は一階が桁行八間半、梁間五間、二階が桁行六間、梁間三間である。図3に平面図を示す。

一階平面を建造当初に復原してみると、不整形田字型の間取りとなる。この形式は田字型をしているものの表側二室(各八畳)と裏側二室(各六畳)の大きさが異なるため、四室とも同じ大きさである整形田字型と区別するものである。二階は養蚕用であり、改造はされておらず建造当初のままとなっている。

建造当初、下手は土間とし、「オカッテ」「フロバ」「農作業場」「ダイドコロ」等を設けている。表側の出入口は幅一間の引違い戸であり「トブグチ」と呼ばれている。「アガリハナ」は出を一間とし、一般的な古いものよりは大きな出となっている。上手は「ドマ」に接した表側が「ザスキ」、その裏側を「オコタツノヘヤ」、「ザスキ」の上手を「オクリ」、その裏側を「ヘヤ」と称している。「トコノマ」は「オクリ」に東向きに設けている。呼称のある柱は図3に示す二本である。A柱が「ダイコクバシラ」(又はカミダイコク)、「B柱が「シモダイコク」



である。なお、C柱の呼称は特にならないが、C柱は「七夕飾りを行う柱」であるという。

改造の変遷をみると、当遺構の西側に接続する部分（七畳半、六畳、台所、玄関、便所）は昭和五十七年に赤城国体の選手用宿泊施設として増築、「フロバ」は昭和五十七年、「コドモベヤ」は昭和四十四年に改造したものである。

部屋の使い方をみると、「ヘヤ」は新築当時の庚子吉氏の若夫婦と長男の寝室、二女（昭和二十九年生まれ）の産室、「オクリ」は新築当時の庚子吉氏の両親と長女の寝室、湯灌（昭和四十三・四十九年、庚子吉氏の両親）、「ザスキ」はかしこまった時の食事の場、お客が来た時の寝室、お盆の時の「ボンダナ」のしつらえの場、「マユダマ」のお飾りの場、「エビスサマ」や「イナリサマ」の祀りの場などとして使用されたという。なお、庚子吉氏の両親の葬儀の時、お坊さんは「トブクチ」を用いず「オクリ」の「エンガワ」部分より出入りしたという。

ところで「オクリ」の桁行方向二間の柱間の内法寸法は一二・〇二尺、心々寸法は一二・四六五尺、「ザスキ」の桁行方向二間の柱間の内法寸法は一一・九五尺、心々寸法は一二・三九五尺である。一般的に関東は柱割りで心々一二尺といわれているが、それは都市の家やサラリーマンの家に当えはまることであり、農家ではこの家のように戦後の昭和二十七年になってもまだ畳割りなのである。筆者は県内の民家調査において、農家造りの家では昭和三十年代半ばにおいても、まだ内法一二尺の家があることを確認している。農家では心々一二尺を「スロク」、内法一二尺を「ホンマ」といい、前者の方が格の低い造りとされている。庚子吉氏によれば「スロクのスズマリ、ホンマのブノビ」という言い回しがあり、ちよつと足らない人」のことを「スロク（女の人

の場合はシチリン）」と呼ぶという。

神棚と仏壇は「オコタツノヘヤ」に設けている。仏壇は昭和四十三年に購入したものであり、かず江氏（庚子吉氏の夫人）が毎日お茶、ご飯を進ぜるといふ。また、貰い物した時や「カワリモノ」を作った時はそれらも必ず進ぜるといふ。

庚子吉氏は家相に関することについて次における事項を聞き伝えている。

- ・ 母屋より東に高い建物を造ってはいけない。そうすると主人が亡くなってしまう。
- ・ ホウギョウツクリだとシンドマリ（発展しない）。
- ・ オモテキモンの方は空けておけ。
- ・ イチヨウの木を（母屋）の棟より高くしてはいけない。
- ・ ビワがあると病人が絶えない。
- ・ クラ（土蔵）がキモンにかかっているの、石宮を祀った。
- ・ 普請中リュウバシラをキモン位置に立てておいた。

なお、年中行事は当家では以前よりやらなくなったというが、現在でも次にあげる特殊食物を作っているという。

- ・ ナナクサガユ（一月七日）
- ・ 小正月のモチツキ（一月十三日）
- ・ エビスサマ（一月二十日、オスシ）
- ・ セツブン（二月三日、ケンチンシル）
- ・ ハツウマ（節分の終わった初めてのウマノヒ、マユダマ）
- ・ ヒナマツリ（三月三日、オスシ）
- ・ ハルマツリ（六供の八幡様、三月十五日、セキハン）
- ・ ヒガン（三月二十日と九月二十三日、ボタモチ）
- ・ ゴンチノセツク（五月五日、セキハン）

- ・ノヤスミ（七月の初旬、フカシマンジュウ）
  - ・カモノクチアケ（八月一日、フカシマンジュウ）
  - ・オボン（八月十五日、ボタモチ）
  - ・アキノマツリ（六供の八幡様、十月十七日、セキハン）
  - ・イナリマツリ（十二月十五日、セキハン、オカシラツキ）
  - ・正月のモチツキ（十二月三十日）
- ※正月三日は現在特に決まったものを食べていないという。

## ② 町 家

渡辺うめ家（若宮町二―二―二 写真14） 当遺構はうめ氏（明治四十年生まれ）の主人である秀太郎（明治二十九年生まれ）の祖父にあたる勇蔵が越後から移り住んだ家であるという。屋号は「福田家」である。秀太郎は米麦と肥料を昭和十二年頃まで商っていたが、その後食糧営団に勤めたという。なお、秀太郎の弟にあたる渡辺錦三郎は前橋駅の東側で「渡辺商店」（精麦業）を経営していたという。

当遺構は切妻造の平家建てで、規模は桁行五間半、梁間四間半である。図4に平面図を示す。うめ氏が昭和九年に嫁いだ時、当遺構と「クラマエ」を繋ぐ部分は土間で台所と風呂場であったという。現状の「ロクジョウ」は改造前、部屋であり、うめ氏の夫婦寝室として使用していたという。

平面の復原は改造がかなり行われていることや、市内に類例の乏しいことなどから苦慮するところである。「ロクジョウ」「通り庭の部分」と店側との境の差鴨居には二本溝が彫られていることからみて、「ロクジョウ」部分はもと土間であったとみてよいであろう。詳細は不明である。

「チャノマ」は家族の食事の場であり、「クラマエ」の七畳半では昭和十三年に湯灌をしたことがあるという。なお、昭和九年のうめ氏の結婚式は、当遺構ではなく臨江閣で行ったという。

「チャノマ」の柱間二間における内法寸法は桁行が二・二三尺、梁間が二・一七尺、心々寸法は桁行が二・六一五尺、梁間が二・五二尺である。当遺構は建造年代を建築の各種特徴や伝承から、一八世紀末期〜一九世紀初期と推定する。なお、土台の有無は確認できなかった。

## ③ 近代住宅


小島定子家（大手町一―九―一八 写真18） 当遺構は定子氏（昭和四年生まれ）の義父にあたる小島友治郎が貫井という裁判官から譲り受けたものである。友治郎は日本銀行に勤めた後、昭和十六年に群馬銀行の頭取として前橋に単身赴任し、白井屋旅館に泊まって改修を指示したという。なお、当遺構の建造は昭和十三・四年頃と伝えられているが、確実な資料は無い。

当遺構は寄棟造（「オウセツマ」部分は半切妻造）、瓦葺の平家建てであり、規模は桁行七間、梁間五間半である。図5に平面図を示す。「ダイドコ」と「フロバ」が改修されている程度でほとんど建造当初の姿を見せている。平面は中廊下を挟んで南側に家族の居室、北側に浴室、便所などを設ける中廊下形式である。この形式は明治末年から大正時代に中流階層の住宅として現われ、その後の日本の都市住宅の平面構成のモデルとして普及したものである。

「オウセツマ」だけは洋風の意匠であるが、全体的には和風の意匠でまとめている。「エンガワ」と「ヒロエン」の天井は化粧屋根裏としている。貞子氏が嫁いだ昭和三十七年当時、「キャクマ」は若夫婦、「シ

ンシツ」は年寄夫婦の寝室として使ったという。神棚は「シンシツ」、仏壇は「オチャノマ」に置いている。

「キヤクマ」は桁行方向二間の内法寸法は一・六一五尺、心々寸法はちようど二・〇〇尺である。

丸山和貴家（大手町三―七―二〇）（旧神明町六七―一〇） 写真23（27） 当遺構の建造は昭和六年であり、建築許可証を残している。これによれば前橋警察署の受付けが昭和六年二月二十八日、群馬県警察部の受付けが同年三月七日、建築許可が同年三月十二日、起工予定日が同年三月一日、竣工予定日が同年四月二十日となっている。建築主は丸山勇助（弁護士）、工事請負人は渡辺吉兵衛（旧神明町一六）である。なお、和貴氏も現在弁護士を開業している。

当遺構は入母屋造（「ハチジョウ」と「ロクジョウ」）部分は寄棟造、「ヨウマ」部分は陸屋根）、瓦葺の二階建である。規模は一階が桁行八間半、梁間六間、二階が桁行四間、梁間三間である。図6に平面図を示す。復原平面は建築許可証の平面図と洋子氏（和貴氏の母）からの聞き取りによってまとめたものである。


当遺構は「ダイドコロ」「コードモベヤ」「ヨクシツ」部分が改修されている程度でほとんど建造当初の姿を見せている。「ヨウマ」だけは洋風の意匠であるが、全体的には和風の意匠でまとめている。一階「ハチジョウ」と二階「六畳（東）」には「違棚」付きの「トコノマ」と「平書院」を設け、一階と二階の「エンガワ」の天井を化粧屋根裏としている。

「ヨウマ」の屋上の陸屋根の仕様は建築許可証によれば、「床構造ハ松四寸・十寸・十二尺を使用シ小梁松四寸根太松二寸・四寸を架渡シ大クギ打付ケトス火打梁ハ松四寸角ヲ隅々ニポールト締メトス床板松板

割ヲ使用ス板上ニハフェルト一号ヲ敷キラス張リトシコンクリート二寸打チ水垂勾配二寸ヲ付ケ防水工事ヲ施シ上部防水モルタルヲ以ツテ仕上ゲ雨水ノ少シモ室内ニ滲入セザル様施行ス手摺木製ペンキ塗リトシ高サ二尺五寸トス」となっている。

「ハチジョウ」の柱間二間の桁行方向の内法寸法は一・七一尺、心々寸法は一・二〇二五尺、梁間方向の内法寸法は一・七〇尺、心々寸法は一・二〇三尺である。

#### ④ 武士の家

式部こと家（岩神町二―八―一五） 写真28（29） 当家の先祖は川越藩の足軽の家柄であり、現遺構を川越から前橋に移築して移り住んだと伝えている。屋敷内にある「ラカンマキ」はその時植えたものであるという。西側の道はもと「サンノコウジ」と呼ばれていたという。現在当家の姓は式部であるが以前は奥山であった。

『御築城別記録』（文久〜元治）によればその中の町中に「観民一之小道路」、「同二之小道路」、「同三之小道路」、「同四之小道路」、「同五之小道路」がある。（『前橋市史第二巻』）この資料は陣家が置かれ川越藩松平氏の分領であった前橋の地が、再び城地としての立場を取り戻し、そこに家臣が移動して来た時の屋敷地の地割記録である。家臣の移動は文久三年（一八六三）五月よりはじまっている。当家に伝わる「サンノコウジ」はこの資料の「同三之小道路」とみてよいであろう。また、この資料によればそこに配置された者の身分とその数は、勘定奉行より銃隊（二九）、遊隊・小遊隊その他（一〇）となっている。

当遺構は寄棟造、トタン葺（当初草葺）の平家建であり、規模は桁行六間、梁間三間である。図7に平面図を示す。復原は建造当初まで左手の土間部分に出入口を設け、床上は三室で構成している。奥の「ハ

チジョウ」には床の間を設けている。土台を設けず、玉石の上に直接柱を立てる石場建てとしている。

「ハチジョウ」の柱間二間における桁行方向の内法寸法は一一・七一尺、心々寸法は一一・〇五五尺、梁間方向の内法寸法は一一・六九尺、心々寸法は一一・〇三五尺である。当遺構の建造年代は建築の各種特徴や伝承などから一九世紀中期と推定する。なお、川越からの移築に関しては、元段階ではそれを裏付ける資料は特に見当たらない。

小関芳枝家（若宮町一―一―一五 図8 写真30〔32〕） 当家は武士の家柄であり、川越から現在地に移り住んだと伝えている。当家の位牌を調べてみると、元文五年（一七四〇）、寛保二年（一七四二）のものなどがあり、家歴はかなり古くまで遡ることができる。しかし、当家は川越から現在地に移り住んだ時期を明らかにする資料を残していない。なお、芳枝氏（大正十五年生まれ）の祖父にあたる栄太郎は永明小学校の第二代校長であったという。

当遺構は寄棟造、トタン葺（当初草葺）の平家建であり、規模は桁行八間、梁間四間である。図8に平面図を示す。復原平面をみてみると、北側に「ゲンカン」が配置され、四畳の「ゲンカン（寄付）」を経て床の間を備えた「ザシキ」に通じる。当遺構の「ゲンカン」は農家の出入口である「トブグチ」とは異なり、武士の家特有の格式空間となっている。

「ザシキ」の柱間二間における桁行方向の内法寸法は一一・〇三三尺、心々寸法は一一・三三八尺、梁間方向の内法寸法は一一・〇七尺、心々寸法は一一・四一尺である。当遺構の建造年代は建築の各種特徴や伝承などから一九世紀初期～中期と推定する。

尾高俊之家（朝日町一―五―二四 図9 写真33） 当家は足軽の家であるといわれているが、それを裏付ける資料を残していない。切妻造、トタン葺（当初草葺）の平家建であり、規模は桁行四間半、梁間三間である。図9に平面図を示す。

復原は改造が多く建造当初まで遡るのが困難なことから、中古の段階のものとした。これによれば、土間部分に出入口を設け、床を二室の構成としている。八畳には床の間を置いている。当遺構は規模や通りからみて足軽の家とみてよいであろう。

八畳の柱間における桁行方向の内法寸法は一一・七一尺、心々寸法は一一・〇四尺、梁間方向の内法寸法は一一・六六尺、心々寸法は一一・〇〇尺である。当遺構の建造年代は建築の各種特徴からみて一九世紀中期と推定する。

なお、朝日町はもとほ百軒町、新町と高田町・天川町の各一部からできた町であり、尾高家のある朝日町一丁目はもとの百軒町にあたる。酒井氏時代の様子を示す天和四年（一六八四）の『前橋外曲輪御絵図』によれば、百軒町には足軽の家が百軒置かれ、足軽町と記されているという。前述した『御築城別記録』によれば、松平氏の川越から帰城後の地割地として、西百軒町、百軒一〜七番町、百軒町の町名が見えるが、尾高家の百軒町がそれらのどの町に該当していたのか、現段階では不明である。

##### ⑤ その他

現在では各家に風呂のあるのや当たり前になっているが、昔町場では多くの家が風呂を持たず、銭湯を利用したのである。町場では銭湯は生活の一部であった。大正末期から昭和十年代は銭湯の全盛期であったという。入母屋の屋根に唐破風の玄関を持つ書院過風の「御殿

造り（又は宮造り）の銭湯、また洋風建築の意匠を凝らした銭湯は、銭湯が単なる風呂場としてだけでなく、非日常の特別なところを意味していた。銭湯は単に一日の疲れを癒し健康を保持するばかりでなく、情報空間の場でありサロンでもあった。

大場修氏によれば、記録の中の銭湯という文字の初見は、元享年間（一三二二〜一三二四）に銭湯を営む記述であり、江戸における銭湯の始めは、天正九年（一五九一）頃であるという。そして、今日よくみる銭湯の原形は明治十年頃に出来上がり、今日のようなタイル張りが出始めるのは、大正十年頃であるという。（『いま、むかし・銭湯』INAX）

朝日町の「亀の湯」（昭和二年）の当主である石見章一氏（大正六年生まれ）によれば、昭和初年には市内に約五五軒もあったが、平成五年の調査時点において営業しているのはたったの一三軒だけであるという。その中で戦前から始めていたのは当「亀の湯」と三河町の「芳の湯」（大正十五年頃）、岩神町の「桐の湯」（昭和三・四年頃）の三軒であるという。そして現在市内の銭湯は毎年一軒ぐらい消えているという。

亀乃湯（朝日町二一七一一 図10 写真34〜39） 当遺構は、現当主の石見章一氏の父与吉（明治二十八年生まれ）が昭和二年に建造したものである。与吉は市内の才川で経営していた「玉の湯」を売り払って現在地に出て来たという。大工は木造学校建築を専門としていた一毛町の小林三次郎である。

与吉は石川県鹿西郡西馬場の出身であり、東京の親類の「ユヤ（湯屋）」（銭湯のこと）で修業したという。しかし、姉が高崎にいたことから前橋で営業を始めたのだという。なお、東京都内の銭湯の経営者

の八・九割は北陸三県新潟・富山・石川の出身者であり、新潟が四、富山と石川が各二、それに福井が一の割合であるといわれている。

当遺構は「ゲンカン」「ダツイバ」「ヨクソウ・ナガシバ」「機械室・居住」の各部分からなっている。「ゲンカン」部分は正面二間四尺、側面一間のモルタル造陸屋根、「ダツイバ」部分は桁行三間、梁間五間の切妻造（正面は半切妻）瓦葺、「ヨクソウ・ナガシバ」部分は桁行三間、梁間五間の切妻造（中央の高い部分の正面側は半切妻、トタン葺、「機械室・居住」部分は二階建て一階が桁行五間半、梁間二間半、二階が桁行三間半、梁間二間半の寄棟造トタン葺である。正面側の外観の意匠は洋風でまとめられている。図10に平面図を示す。

「ゲンカン」に入ると男女別の入口があり、それぞれ別れて「ダツイバ」に入り、「バンダイ」で入浴料を払うのである。脱衣した衣服は籐製の籠に入れ、脱衣棚に置く。「ダツイバ」と「ヨクソウ・ナガシバ」の境の中央部には民家の大黒柱を彷彿させる〇・七五尺角の柱が配置されている。「ヨクソウ・ナガシバ」は「ダツイバ」と同様に、高さ一・八メートル程度の壁で仕切り、その上部を開放している。浴槽は熱め（中央寄り）と温め（窓より）の二つある。浴槽の背面には松島（男湯）と魚（女湯）の「タイル絵」を施している。この「タイル絵」は三十年ほど前に市内の信沢タイルが施工したものであるという。「ヨクソウ・ナガシバ」の天井部分は、外壁側から幅一間を円弧形、そして中央部（幅三間）を更に高くして、変化に富んだ見応えのある空間となっている。

一方「機械室・居住」部分の東側に接続する居住部分は昭和二十八年に増築したものである。また、現在使用している重油ボイラーは昭和三十年後半に設置したものであり、それ以前は木の廃材を燃料にしていたという。

なお、当銭湯も加入している群馬県公衆浴場業環境衛生同業組合の現在の入浴料金は、平成五年一月の群馬県告示により大小（中学生以上）三百円、中人（小学生）百三十円、小人（幼児）六十円となっている。

## (二) その他の遺構

本項では本調査の対象とならずに予備調査のみで終了した遺構十四棟の写真を掲げる（表1参照）。

## 三、まとめ

伝統的な民家建築の特徴として個室のないことと接客空間の充実していることがあげられる。農家である松村庫吉家、山田庚子吉家などの整形田字型や不整形田字型民家の四室は、各室に接する部分の建具を取り去ってしまうと一室空間になってしまう。これらの家には部屋が壁で仕切られておらず、現代住宅でいうような個室がない。松村庫吉家は二階に現在五室も設けているが、これは建造当初にはなく、後補のものであった。両遺構とも二階はあるが、共に当初は養蚕用であり居室ではなかった。

現代の住まいでは機能性と合理性、そしてプライバシーが尊重され、壁で区画された個室の充実は当然のことと考えられている。昔の家が接客や格式を優先して個室が無いのとは対照的である。現代の住まいはある意味では、家族個人個人の幸せの思いを優先しているともいえる。その結果、家の外の人があるか来ないかではなく、同じ屋根の下に住む人同志さえも孤立しているのが現状であろう。間仕切りが無い空間から触れあいや対話が始まるのである。個室の充実は家族

の分解につながる恐れがある。

田字型の表側の「オク（又はオクリ）」と「ザシキ」の二室は冠婚葬祭の主役の部屋であった。年に一度あるかないかの「ヒトヨセ」のための空間を用意しているのである。近代住宅である小島定子家と丸山程和實家はともに、和室と洋室の客間を設けている。田字型民家と近代住宅は、いずれも現代住宅より家全体に対する接客空間の占める割合は大きい。

人の住まいが他の動物の住まいと異なる点は、「他人を客として受け入れるか否か」にあるといわれている。つまり、接客空間を意識した住まいでなければ、人が住んでいても人の住まいといえないのである。人は一人で、そして家族だけでは生きられない存在である。確かに伝統的な住まいでは他人を意識しなければ生活できないのである。しかし、その煩わしさによって社会性が磨かれるのである。日本の住まいから社会性が無くなっているのだ。日本人は「もの」より「心」に拘ってきた民族であったはずだ。伝統的な民家の平面や住まい方は、現代の住まいの在り方に多くの示唆を与えてくれるのである。

また、伝統的な民家、特に農家における生活で忘れてならないこととして年中行事がある。山田庚子吉氏の家では、少なくなったとはいえ、年に十六回も特殊食物を作っていた。現在の食事はハレとケの区別がつかなくなり、いつもハレになってしまっている。現代生活から季節感やけじめがなくなってしまう。仏壇や盆棚がなければお盆でポタモチを作っても家の中では進ぜる場所がないのである。年中行事はそれに対応した部屋、設備、装置などがあるからこそ可能となるのである。建物とともにそこでのような生活をしていくかということにも注目すべきであろう。単に民家を器としてだけみるのではなく、そんな観点から民家をみることも重要であると考ええる。

佐和豊家は田字型平面に格式空間としての「ゲンカン」と「フロバ」を取り付けた形式の家ということもでき、農家の武士の家が融合した家であり、近代住宅史を考察するうえに貴重な遺構といえよう。

町家は町場でありながらその数は少なく、予備調査でも対象となった家は金垣進家（金垣洋服店）と渡辺うめ家のわずかに二棟だけであった。このことは、アメリカ軍の大空襲が昭和二十年七月十日に始まり八月十四日まで続き、市街地の約八割を焼け尽くしていることから止むを得ないことかもしれない。金垣進家は「アゲド（揚戸）」もある典型的な町家造りであったが、残念ながら本調査が実施できなかった。本調査の対象となった唯一の渡辺うめ家も、改造が激しく復原は難しく、当初の姿を明らかにすることはできなかった。

小島定子家と丸山和貴家は昭和と建造年代は降るが、本県の住宅の洋風化の変遷を知る上で貴重な遺構である。明治大正期の大邸宅は一般的に(1)洋館のみ、(2)洋館の内部に和室を持つ、(3)洋館と和館の併存、(4)和館の内部に洋室を持つ、(5)和風のみ、の五つのタイプに分類される。これらの中で洋館と和館の併存様式は、人々の憧れでもあって、明治大正期の住宅の頂点に立つ様式であった。小島定子家と丸山和貴家は全体的には和風の意匠としながらも、接客用の一室部分のみを、外観と内観を共に洋風の意匠としていた。これは洋館と和館の併存を志向したものであり、現代住宅でもよくみる玄関脇の洋風の応接間の原形ともいえるものである。

武士の家は三棟あったが、いずれも家歴を明らかにする確実な史料を残していなかった。しかし、これらの中で小関芳枝家は比較的規模も改造も少なく、解体調査を実施するならば当初への復原は可能であろう。一戸建ての武士の家としては県レベルでみても数少ない大変貴重な遺構である。早急は保存対策が望まれる。なお、今回の調査では

町割りに関する文書や絵図などによる検討が不十分であることから、今後これらの面からの研究を進め再検討したい。

銭湯は直接住まいとは関係ないが、町場の内湯のない人にとつては大切な生活関連施設である。しかし、経営者の高齢化が進むとともに、内湯の常備により入浴者は激減している。経営者の多くは、経済的には成り立たなくなっており、自分の代で閉鎖せざるを得ないというのが現状であろう。こうした中で、由緒ある銭湯の調査ができたことは幸いであった。銭湯の単に風呂に入るだけではなく、情報交換の場、コミュニティの場としての価値を高く評価すべきであろう。

本調査の対象となった遺構の所有者（八軒）に「住まいとして良い点、悪い点はどんなことですか」と尋ねてみた結果は次の通りである。

(一) は例数を示す(例数1は省略)

良い点

- ・せいせいしている
- ・夏涼しい(4)
- ・広々している
- ・乾燥していて湿気ない
- ・無駄な空間のあることが良い
- ・開放的である

悪い点

- ・冬寒い
- ・廊下が無くて人の部屋を通らねばならない
- ・部屋が大きすぎる
- ・電気配線に困る

「夏涼しい」は半数の家であげており、昔の家は開放的で夏に適した造りであることを裏付けている。一方、「廊下が無くて人の部屋を通

らねばならない」という指摘は、住まいにおけるプライバシー確保の考え方が普及した現代を感じさせる。

また、本調査の対象となった遺構の所有者（九軒）に「現在、家にどんな電化製品がありますか」と尋ねてみた結果を表3に示す。

表3 電化製品の保有率（調査対象九軒）

製 品 名	例数
カラーテレビ・冷蔵庫・洗濯機・毛布 電話（ツッシュ式五・ダイヤル式四）	9
こたつ・トースター・掃除機・ラジオ・扇風機・アイロン・ドライヤー	8
炊飯ジャー・アンカ・カミソリ	7
ラジカセ・ジュース・エアコン・ストーブ	6
オーブン	5
カーペット	4
VTR・ステレオ・アンマ・レンジ・電子蚊取り	3
石油ヒーター・パン製造機	2
衣類乾燥機・カラオケ	1

※ 例数は保有数にかかわらずその家で有していれば1とした。（）内は内訳を示す。

今回調査対象となった家は、一般の家に比べれば電化製品の保有率は低いと推測していた。しかし、その品目は三〇にのぼり、カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機、電機毛布、電話は九軒のすべてに、そしてエアコンは九軒中六軒が備えていた。これらのことは、伝統的な家に住んでいゝるものの、日常の生活様式は大きく変貌していることを裏付けている。

最後にどんな建築を民家の調査範囲に含めるかということについて

考えてみたい。民家は社会的階層性と建築様式の特性の両者の意味を含んでいることから、その範囲は意見の別れるところである。民家は江戸時代の被支配者階級の商業、工業、農業に従事した人々、及び明治時代に入ってから、それらの職業に従事した人々の建てた住まいであるということは誰も異論はなからう。しかし、急激な社会変化にともないそれらの住まいは激減している。都市化の進んだ地区では、従来の住まいを対象にした民家調査は成立しにくくなっている。

都市化の進んだ地区の民俗調査においては、従来の民家調査だけに拘らず、近代住宅調査も含めて実施すべきであろう。最近では近代化遺産という文化財の分野も市民権を得ている。現代住宅は民家に直接繋がっているのではなく、民家↓近代住宅↓現代住宅となるのである。歴史の連続性からみても、近代住宅を無視するわけにはいくまい。従来の民家調査を決して否定するわけではないが、余りにも早く建替えが行われるために近代住宅もなくなってしまうのである。こうした観点から、たつた二軒であるが洋間付き和風住宅が記録できたことは、今回の調査の一つの成果であると考ええる。





写真1 松村庫吉家（岩神町）



写真2 松村庫吉家（大戸一外側）

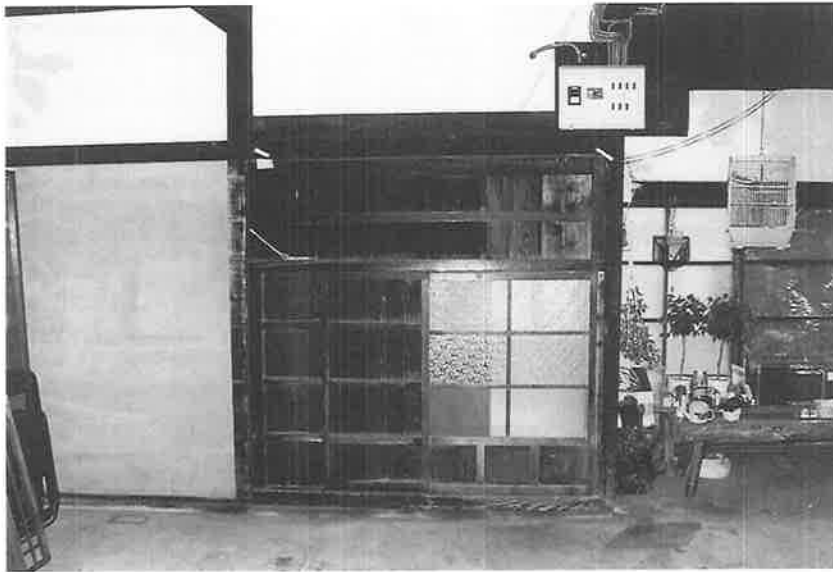


写真3 松村庫吉家（大戸一内側）

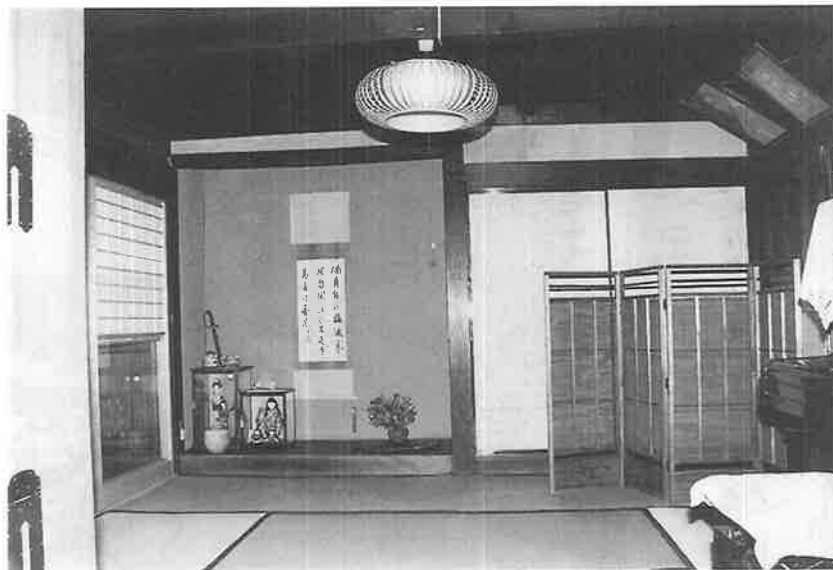


写真4 松村庫吉家（オク）



写真5 佐和豊家（若宮町、正面）



写真6 佐和豊家（東側面）



写真7 佐和豊家 (オザシキ)



写真8 山田庚子吉家 (六供町)



写真9 山田庚子吉家（せがい造り）



写真10 山田庚子吉家（2階）

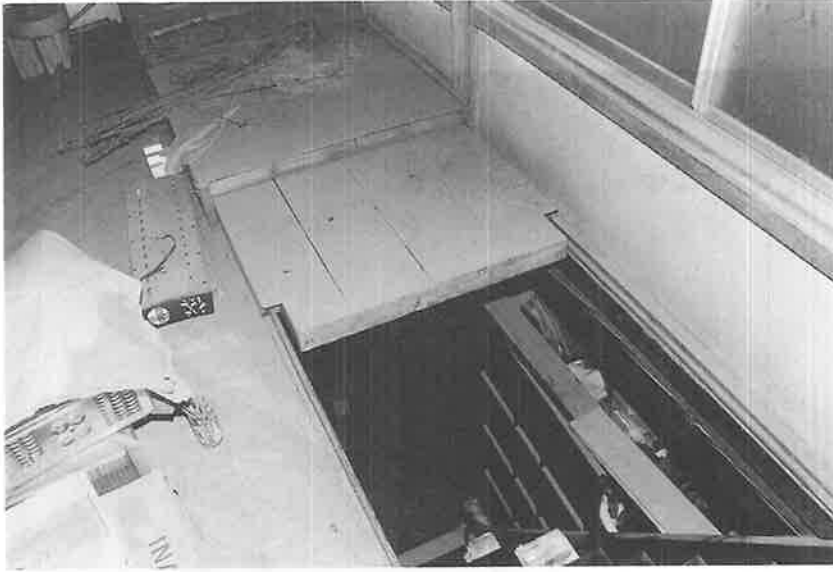


写真11 山田庚子吉家（2階の階段部スライド戸）



写真12 山田庚子吉家（仏壇）



写真13 山田庚子吉家 (神棚)



写真14 渡辺うめ家 (若宮町)



写真15 渡辺うめ家（背面庭）



写真16 渡辺うめ家（チャノマ）





写真17 渡辺うめ家（通り庭）



写真18 小島定子家（大手町、玄関部）



写真19 小島定子家（北側外壁）



写真20 小島定子家（キャクマ）

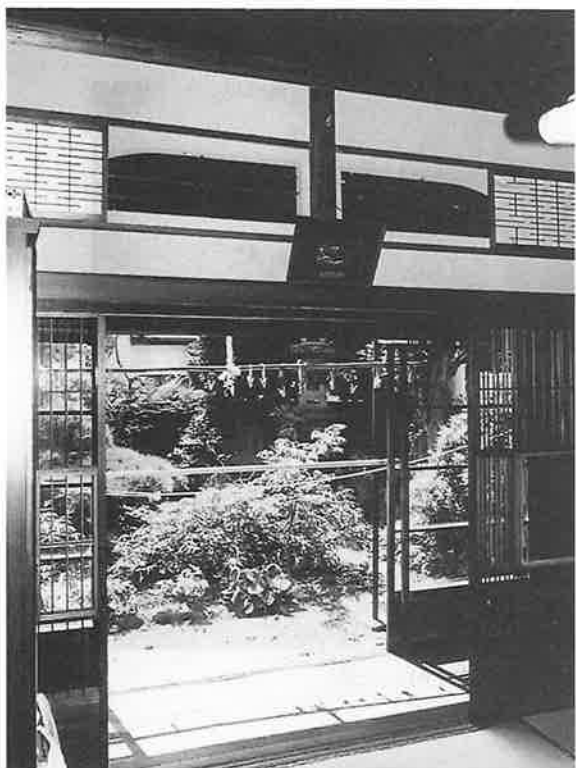


写真21 小島定子家（キャクマ）



写真22 小島定子家（オウセツマ）



写真23 丸山和貴家（大手町、正面）



写真24 丸山和貴家（東側西）



写真25 丸山和貴家 (ハチジョウ)



写真26 丸山和貴家 (エンガワの化粧屋根裏)



写真27 丸山和貴家 (ヨウマ)



写真28 式部こと家 (岩神町)



写真29 式部こと家 (ハチジョウ)

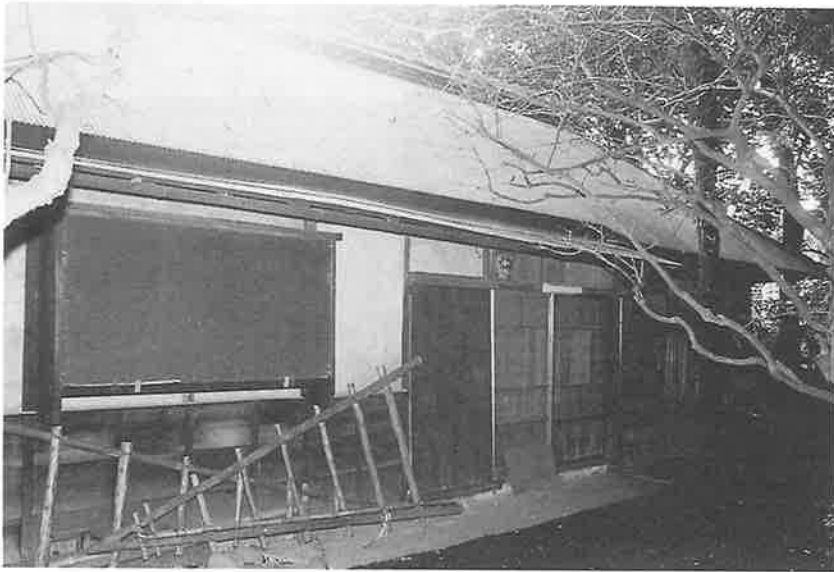


写真30 小関芳枝家 (若宮町、正面)



写真31 小関芳枝家（背面）



写真32 小関芳枝家（ザシキ）





写真33 尾高俊之家（朝日町）



写真34 亀の湯（朝日町）



写真35 亀の湯 (浴槽、ダツイバ屋根)



写真36 亀の湯 (バンドイ)

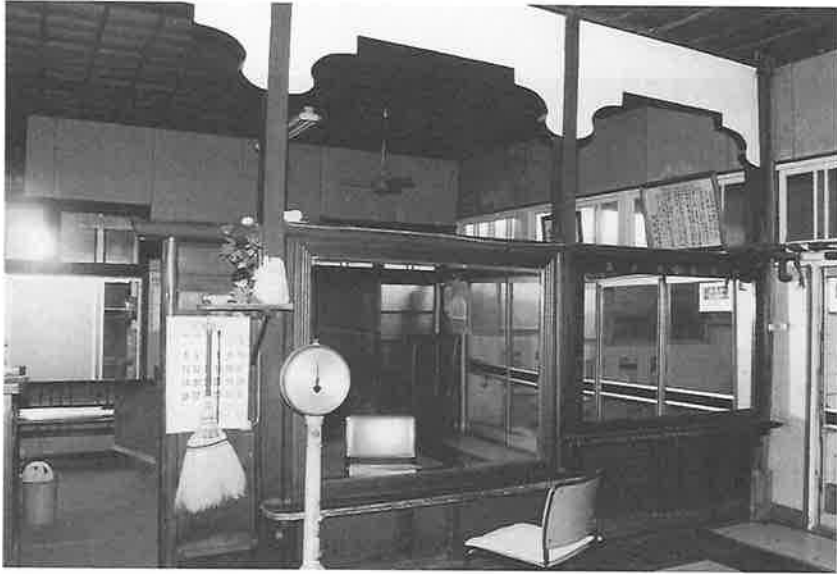


写真37 亀の湯 (ダツイバ)



写真38 亀の湯 (中央部を高くした天井)



写真39 亀の湯 (男湯の「タイル絵」)



写真40 原沢賀尋家 (文京町)

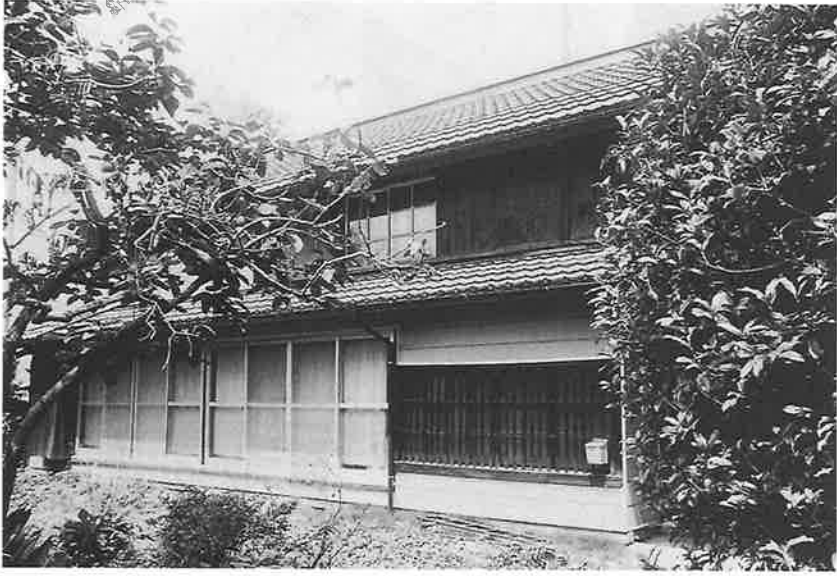


写真41 佐久間一郎家（南町）



写真42 松山医院（大手町）



写真43 前田光雄家（大手町）



写真44 旧六本木内科医院（大手町）

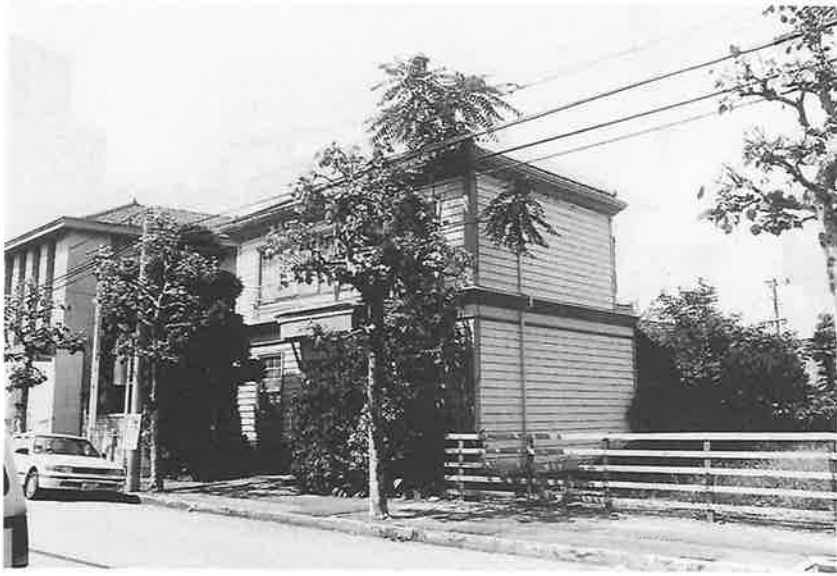


写真45 旧上州新報社（千代田町）



写真46 旧神明公民館（千代田町）



写真47 (伝)旧赤城亭(千代田町)



写真48 金垣進次家(本町)





写真49 金垣進次家（アゲド）

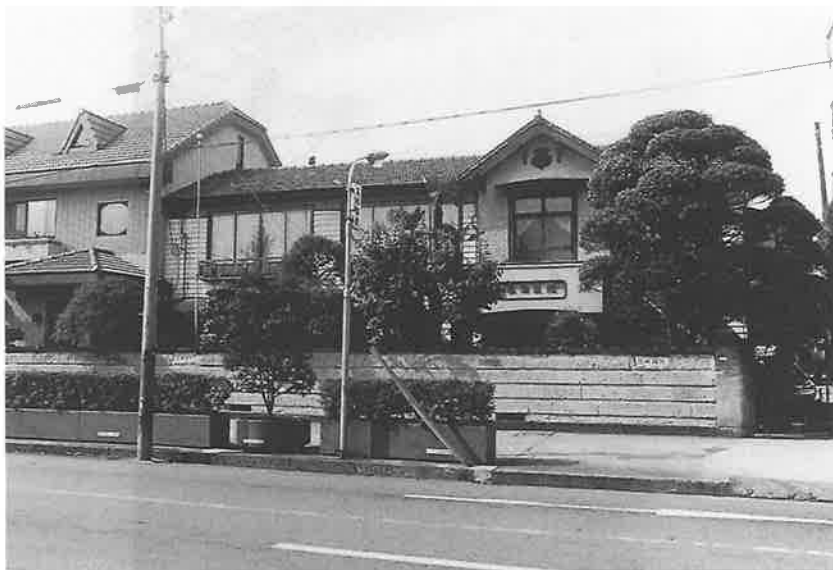


写真50 高柳内科医院（若宮町）



写真51 若乃湯（三河町）



写真52 長洋家（朝日町）



写真53 吉田繁之家（六供町）



写真54 木暮祐三家（六供町）

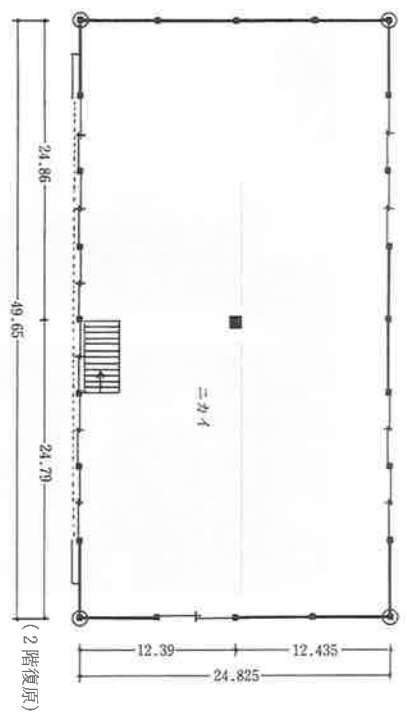
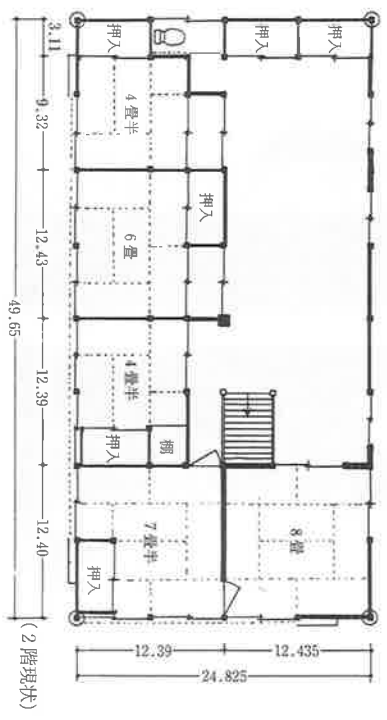
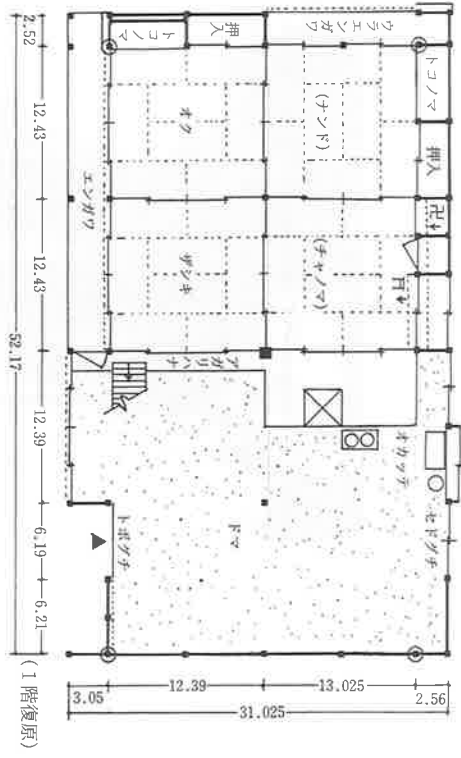
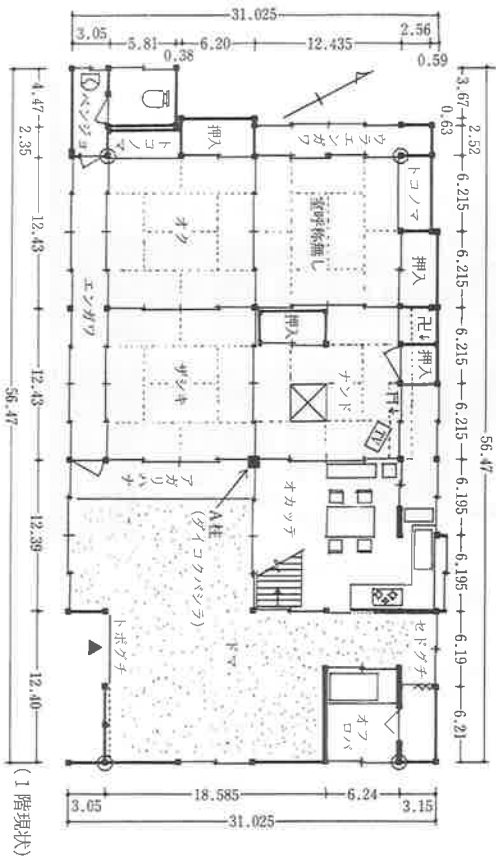
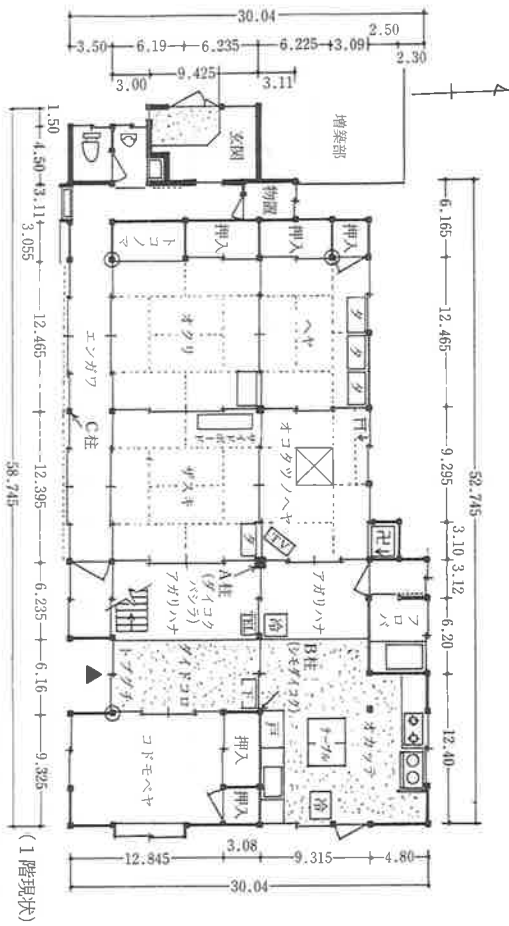
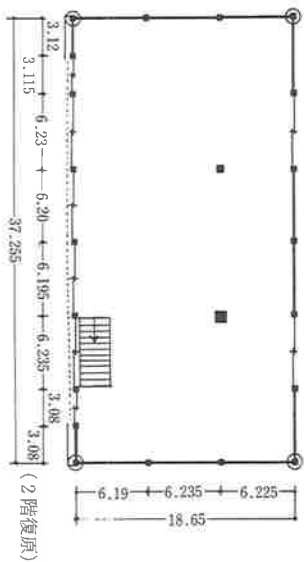


図 1 松村庫吉家平面図 (単位尺)

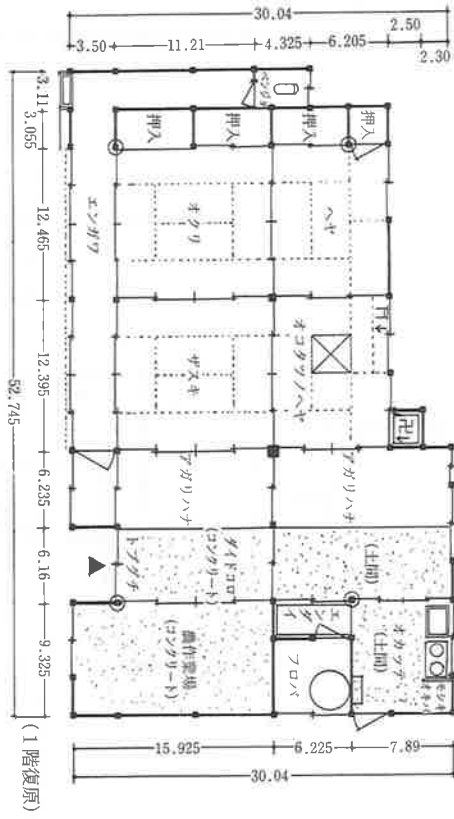




(1階現状)



(2階復原)



(1階復原)

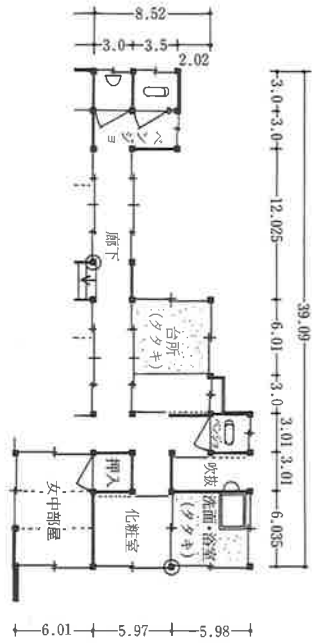
図3 山田庚子吉家平面図(単位尺)



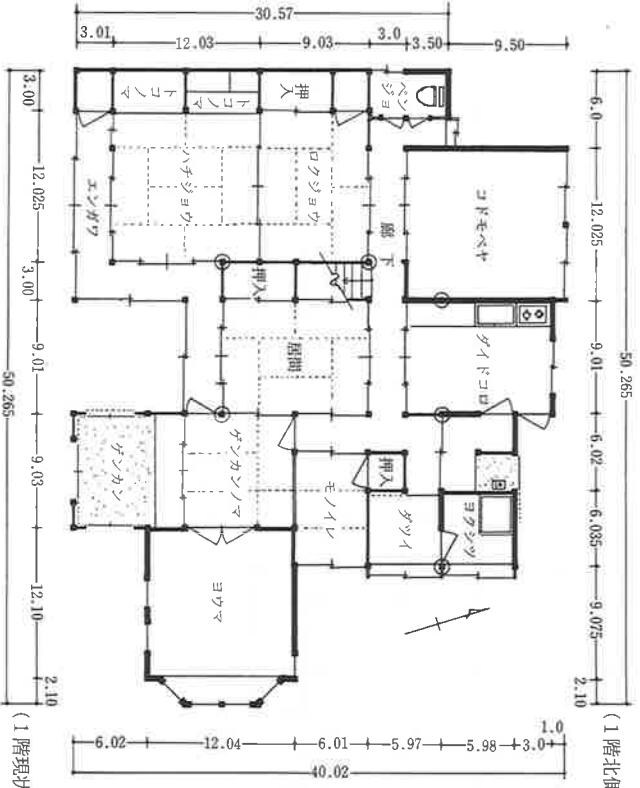
図4 渡辺うめ家平面図 (単位尺)



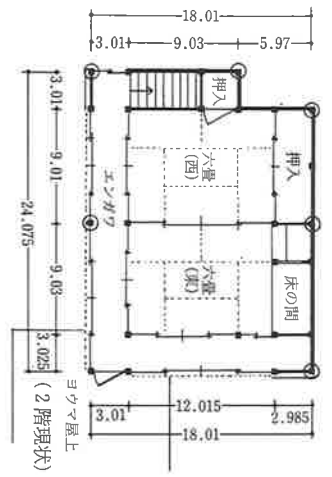




(1階北側部分復原)



(1階現状)



(2階現状)

図6 丸山和貴家平面図 (単位尺)

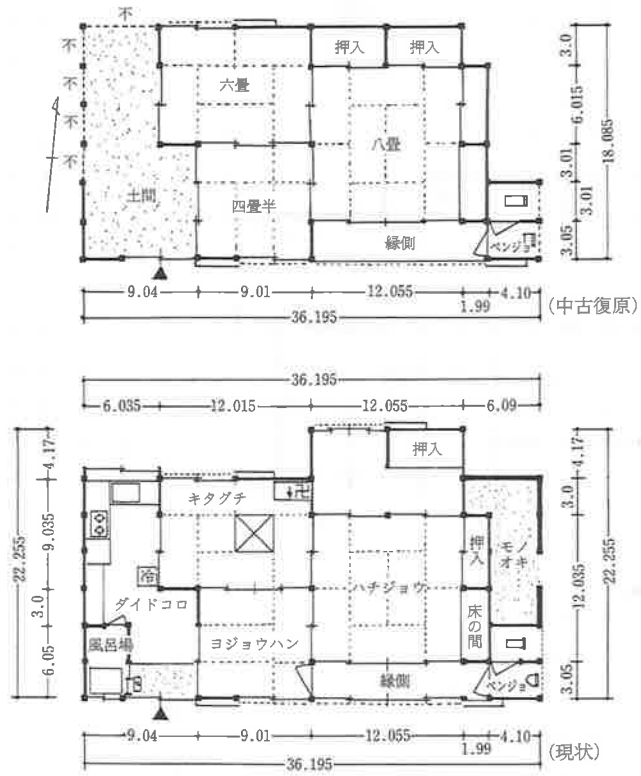


図7 式部こと家平面図（単位尺）

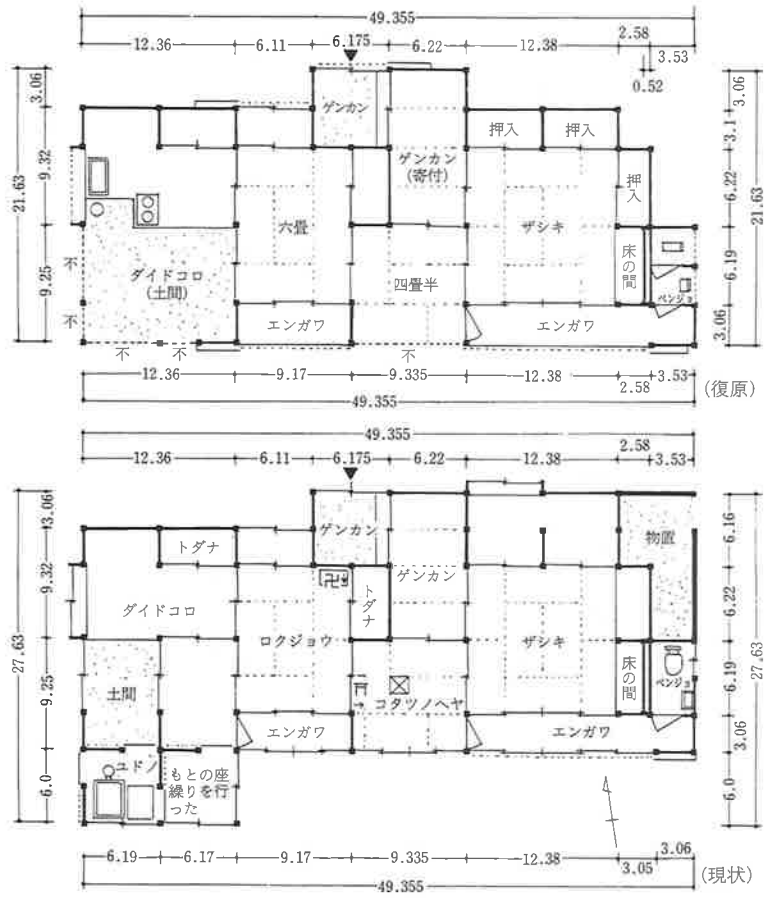


図8 小関芳枝家平面図 (単位尺)

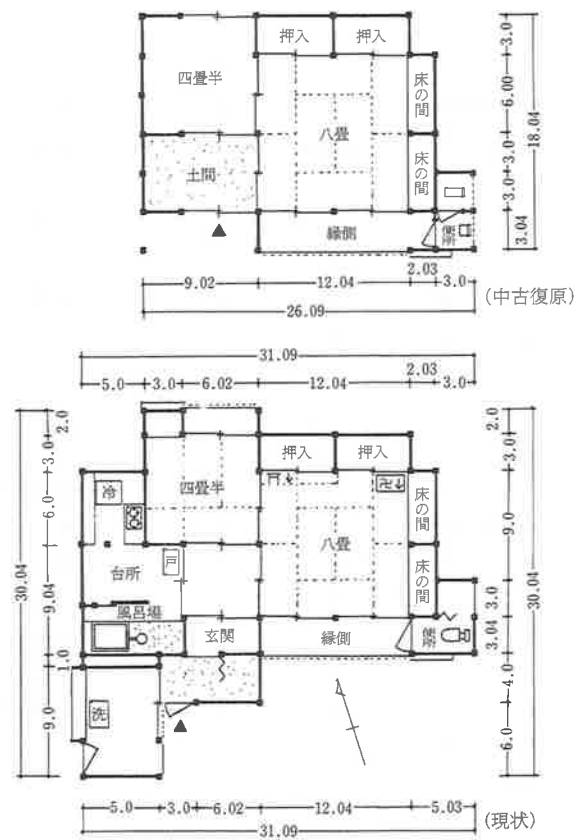


図9 尾高俊之家平面図 (単位尺)

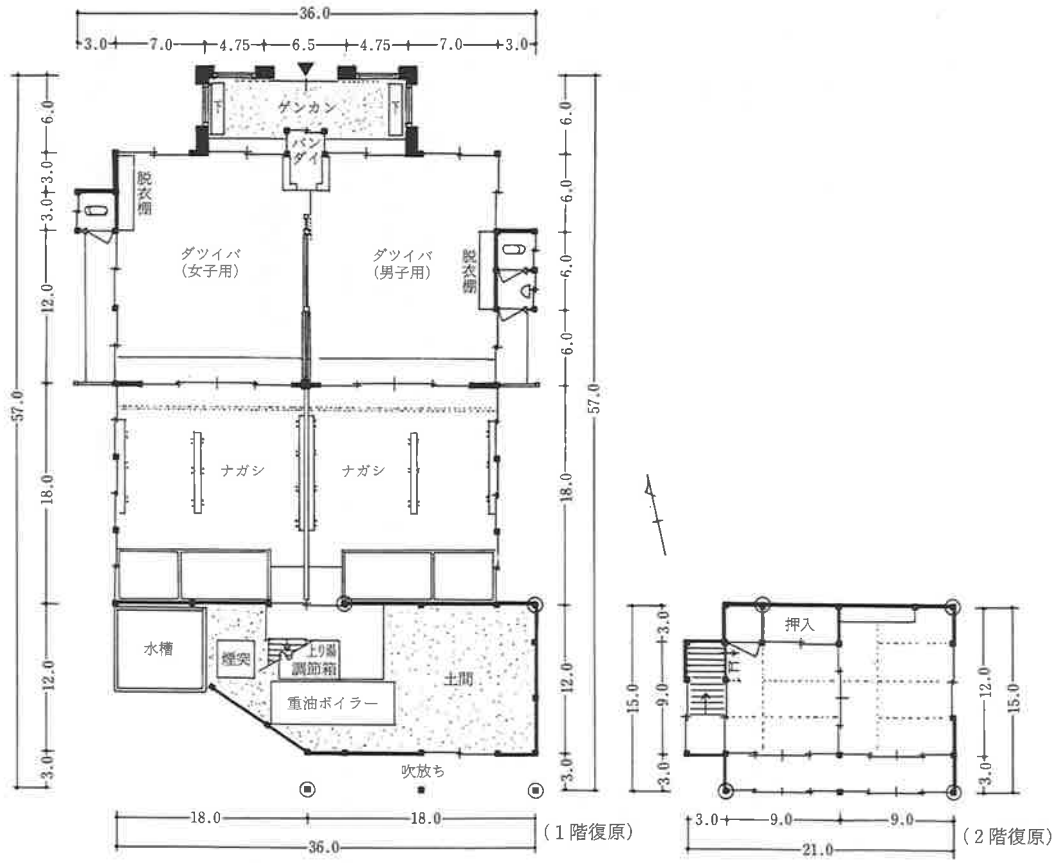


図10 亀の湯平面図 (単位尺)

# 十三 資料

## 昭和二十八年十月 虎淵関係誌

前橋にお虎ヶ淵の伝説あり、お虎という一女性が生きながらにして沈められたと伝えられ、その名に因つて「お虎ヶ淵」と称せられると言ひ、虎ヶ淵は古来存在し、そこにお虎が沈められたといひ、その真相は今を知る由がないとはいひながら、現在伝えられている所は其の通りである。

昭和二十八年十月調査

### 目次

- 一、虎ヶ淵の名
- 二、お虎供養塔
- 三、淵守虎霊稻荷
- 四、お虎の事件
- 五、虎淵山大蓮寺
- 六、お虎の生家
- 七、お虎と城主との関係 その他
- 八、須賀清十郎氏
- 九、お虎関係の古文書
- 十、御虎明神

### (一) 虎ヶ淵の名

虎ヶ淵は県庁裏、又は臨江閣下と伝えられているが、臨江閣の下とする説が真実に近いようである。即ち岩神町、柳原、須賀芳造氏の祖父、故須賀清十郎氏（七・八参照）がこの辺の地理に詳しく、清十郎氏は昭和五年五月十二日九十二歳で没したが、その人の生前の話に

お虎ヶ淵は今の臨江閣の前あたりで、お虎の供養もその河原で行つた。（供養は明治三十六年六月）

と語っていたという。又お虎についてのことも相当知つていて、市の有力者でこのことについて氏を訪ねる人多く、俳優にしてお虎の劇を演ずる際にも、氏の教えを乞うた者も少なくない（芳造氏談）との事である。（八参照）

虎ヶ淵というのは、お虎が沈められたから虎ヶ淵というのではなく、利根の対岸を龍ヶ鼻といひ、それに対するにあの辺を虎ヶ淵といつたもので、大利根の流水の激する有様と河岸の地形よりして、同所の一方を龍とし、一方を虎とした龍虎相對せしめたものであつて、その証左としては、大蓮寺は元龜元年の創建にして、当時は現在の臨江閣付近にあり、寺の名も「虎淵山宝池院大蓮寺」と移し、後、現在の所に移り、今なお虎淵山宝池院大蓮寺と称している。その虎ヶ淵にたまたまお虎という女性が沈められたから、これをお虎ヶ淵と称し、これを以て有名になつたものであらう。（立川町大蓮寺現任職蓮池俊岡氏 第



#### (四) お虎の事件

岩神町須賀清十郎氏が明治三十六年六月作成した「喜捨連名簿」(お虎を始め幾多の水死者の供養を行った時のもの)の趣意書にその片鱗がうかがえるが、これは大蓮寺住職蓮池忍圓氏の署名もあり、原文のまま転記すると次の通りである。

夫れ仏陀大慈の光明は普く無辺の土を照し広く有縁無縁の精霊を攝する事

教□に見へたり而して仏教の要旨は自他等しく救ひ思を会獸に及ぼす之れ仏陀の吾人に訓誨し給ふ所なり凡そ宇内の広きに身を災害疫病に葬死し骨を怒得荒草の裡に没する者数を知らず何そ其れ悲惨なるや中にも天寿を全ふする事を得ず怒を偲んで泉下の鬼となる苟くも情織あるもの誰がか葛斛の涙無らむや

伝へ聞く旧前橋藩主酒井侯寛永年間国老某なる者あり侯の侍嫂阿虎の容貌美なるを見そめて之を挑めども阿虎堅く貞操を守りて之れに応ぜず国老某なるもの己が意の如くなるざるを怒り密かに謀計を以て阿虎を罪に陥れんと欲し侯の御飯の中に針を入れ以て阿虎の所為とし讒誣百計侯を怒らす侯大いに其の所作を惡み遂ひに活きながら罪なき阿虎を利根川に沈む人之れを阿虎が淵という後暫洪水氾濫城地の次第に欠損するは阿虎怨霊の為なりと之れ因より信ずるに足らず然れども亦大いに考え可き点ならんや其当時西光庵と称する庵は阿虎追善菩提の爲めに建立する処今は絶えて跡なく後諏訪町新田(宗念坊)に改葬する阿虎埋葬式の導師は大蓮寺住四世光普上人圓宿和尚也と現今世人阿虎ヶ淵とは児童に至る迄口にするも未だ其靈魂を招じ追遠作善して厚く同情を表し以て冥福を修する人なし此に阿虎の菩提に回向せんが為の川施餓鬼を

勤修し墓碑を建築し近年水死者の靈を合祀す仰ぎ冀くは大方の篤志者の御賛成を得て応分の喜捨を募り追善会を修するならば怨を偲んで泉下に瞑目せむる阿虎が幽魂及び入水者の冥霊悦んで成仏する者ならん吾等の所願既に達して自他共に水殃無からん事を祈る也

發起人 須賀清十郎 ㊦

虎淵山大蓮寺住職

蓮池忍圓 ㊦

遠藤悔家

(以下水死者二十五名記載)

この時の供養塔は結局木製で建てられ、虎ヶ淵の所にあつたが、明治四十三年の洪水で流失した。(須賀芳造氏談)

#### (五) 虎淵山大蓮寺

大蓮寺に弁財天堂宇修繕記念碑あり、碑文に虎淵山大蓮寺の由緒記されあり。

弁財天堂宇修繕記念

当大蓮寺ハ住古ハ城外丑寅之方虎カ淵ニ存スル儀ニテ虎淵山ト称ス元和元年酒井河内守重忠当城捍領同二年大阪御陣ノ戦功ニ依リ十万石ヲ賜ハル干時虎ヶ淵守護トシテ重忠ニ於テ弁財天ヲ大蓮寺ニ祭ラレシ者也。其後再度堂宇転地、現在ノ地ニ移ル。今回堂宇修繕ヲ記念シ之ヲ建ツル者也。

昭和六年十二月十六日

虎淵山宝池院大蓮寺十九世忍誉代

又明治四十三年九月一府十四県聯合共進会群馬県協賛会前橋委員部発刊「前橋案内」に次の通り記載してあり。



## 大蓮寺

浄土宗にして立川町に在り、元亀元年起蓮社勝誉上人、文益浄阿和尚柳原の虎ヶ淵に創建し、虎淵山宝池院大蓮寺という、後此地に移す。

## (六) お虎の生家

前橋市向町にお虎の生まれた屋敷跡というのがある。(中島吉太郎氏著「伝説の上州」)

お虎は当家(前橋市向町染物屋大黒屋本店||当主渋谷菊三郎氏)で生まれたといわれているが、いつ頃か明らかでない。当家は初め勢多郡小暮にあり、前橋に移り、その時紺屋を始め、また小暮に移り、再度前橋に来たといわれ、再度来た時にはお城の御用紺屋であったので、酒井侯からの拝領品(刀、手洗鉢等)がある。拝領したのは大黒屋弥兵衛で、その三代の後の主人が私である。(渋谷菊三郎氏談)

弥兵衛の時代に頂いた物については、家へ来る人が皆珍しがって行く。野中康弘さん(三代吉氏)の時、お虎の芝居をするにつき、私の家へ野中さんが来ている聞き、お虎に縁のあるお宅の拝領品を借りたい。それはお虎の芝居をするのにお虎さんを祀らないと、芝居がうまく行かないので、そのお虎さんに縁のあるお宅の物をお借りして、お祀りしたいといって短刀を一ふり持って行き、それから芝居の終わった時、お虎について調べた物だといってお虎年代記という書いた物をお礼に持って来てくれました。それにいろいろ詳しいことが書いてあり、その時野中さんはお宅がお虎さんの生まれた家だと判った。お虎さんの供養塔(宗念坊の)は、お虎さんの妹が建てたのだといっており、その時の名は「せい」というのだと聞きました。事件の際、初め柳原の庚申様にお虎の父親が無罪になる様祈願しましたが、その満願の日(二十一日目)に遂にお虎が殺されたといわれました。お虎

が私の家で生まれたといっているので、私は早速宗念坊にお詣りして□華を手向けましたが、あれはいつ頃のことだったか、今は思い出せないが相当古いことです。お虎年代記は調べるのに大変苦労したと言っていました。戦災の時(昭和二十年八月)に焼いたらしく、今見当たりません。(渋谷菊三郎氏談)

あれはどこかへ貸して、それきり返って来ないのではないか、あれを調べる時、図書館その他いろいろの方面で聞いたらしいがなかなか判らなかつたとの事です。私の家は四百年も続いている、前橋では何軒もない旧家だと言われていますが、系図などは小暮で火事に遭い焼けてしまつて今はありません。拝領品だけは、この間の戦災にも焼けずにあります。□社構内に渋谷仲助という墓があるとのことですが、それも私の家の関係と思う。(渋谷菊三郎氏談)

芝居にされたお虎は家のお祖父さん(須賀清十郎氏のこと)も、芝居は芝居になるように仕組んであるとよく言っていました。私の家で庚申様を祀っておりますが、これはお祖父さんが柳原の堤に埋めてあったのを掘り出して祀ったもので(明治維新の際埋められたものらしいが)その庚申様がお虎の件にまつたかどうかはわからない。(須賀芳造氏談)

## (七) お虎と城主との関係、その他

お虎は御殿女中というのではなく、殿様が鷹狩りの際、途中お休みのため私共へお立ち寄りになり、その際お茶を勧めたお虎が殿のお気に入り、お付きの者が側女にお勧めしたとのことです。私共が戦災で焼けるまでは殿様がお休みになるという部屋(座敷が一段高くなっていた)もありました。お虎には許婚もあつたらしい。お虎を虐めたのは豊岡(碓氷郡)にその人の子孫が今も続いているらしく、その家

は代々嫁を貰うと、その嫁が気が変になつて死ぬといわれるが、今は日蓮宗を信仰しているといわれます。私の家には弥兵衛時代の前橋城のできた由来を書いたもの(天保四年のもの)があります。(渋谷三郎氏談)

右古文書には、前橋城は明応年間上杉の命により太田道灌の築城と記されており、従来の説文明年間より多少の差あり。

文明年間 西暦一四六九〜一四八六

明応年間 西暦一四九二〜一五〇〇

#### (八) 須賀清十郎氏(供養関係の人)

明治八年以来広瀬川・風呂川などの水元(注 その身分等不明、一種の水利権代表者か)をしていた。明治二十六年十月二十六日の夜、豊秋村民族と大演習の際、明治天皇の行幸あり、□もその時洪水により大渡橋流失の時であったため、須賀氏が瀬踏みの任を帯びて大渡橋(吊橋)のありし個所を示すため、ロップを持って利根の激流を泳ぎし、その功により慰労金を賜り、これを基金として同二十七年一月観民稻荷神社境内に水神様を祀った。又明治三十三年二月十二日東京の大林区署林務官島田剛太郎氏が「桜樹献植□□ノ件聞キ届ク」の許可を得て柳原に桜その他を植付けた。この時の「風呂川堤上樹栽賛成人名簿」には、

本町百十三番地 勝山善三郎

新町七十七番地 江原 芳平

国領村三十八番地 高須 泉平

細ヶ沢町 藤井新兵衛

本町八十八番地 下村善右エ門

の五氏の名が連ねられている。

明治三十五年四月二日には前橋市役所から「前橋市臨江閣付近市有地樹木監守ヲ□托ス」の辞令が出ている。

同三十六年六月お虎の供養を企てたことは前記の通りである。(須賀芳造氏談、須賀清十郎風呂川堤上樹栽二十年記念碑はがき説明文及び東京大林区署の許可書、前橋市役所の辞令による)

#### (九) お虎関係の古文書

お虎の件に関する文書は、事件後密封され、何人とも雖も開封すべからずとの命で、大蓮寺に保管を命ぜられ、住職といえども、それを見る機会のないままに代々伝えられたが、明治十一年十一月八日夜の同寺火災で焼失したとの事である。(大蓮寺住職蓮池俊岡氏談、火災年月日は市役所寺院台帳による)

#### (十) 御虎明神

御虎明神は教徳寺境内にあるが、これは昭和六年現在在職によって建立、爾来毎年春秋二回大祭を行っている。昭和二十八年には十月二十一日大祭を行う。(教徳寺住職木村全忠氏談)

### 虎淵関係追録

#### 目次

一、石川河岸と虎霊稻荷

二、旧監獄

#### 追録

一、石川河岸と虎霊稻荷

揖取県令の碑のそばにあった虎玉稻荷の自然石は昭和の初め、東京

の人が持つて行った。その人は秋葉写真館の縁故者である。(東照宮社司瀬尾斉宮氏談)

あの石を持つて行ったのは、石川政三の養子同名政三で、昭和七年頃と思う。先代の政三の妻ふさが秋葉慶治郎(注 秋葉写真館の先代)の姉で、養子政三の妻はすいさんである。石川は東京に移り、養子の代になって埼玉県へ移ったとの事である。ふささんの縁故者青鹿さんが曲輪町に住んでいる。(秋葉写真館主談)

私たちは初め前橋にいて、後、東京に移り、震災のため又前橋に来たもので、中程の事は判らないが、昔は武徳殿のあった所へ(注 現在労働基準局)石川河岸というのがあり、石川の家が三階建(当時前橋としては初めてか)で建っており、現在の弓場のあたりに番頭その他のために六、七軒の長屋が建ててあった。この三階建は間もなく勢多郡上沖の岩田とか内田とかいう人(注 桂萱村上沖之郷岩田氏、現在は松七朗氏)へ売られ、その建物は今でもあるとの事ですから、数十年位も前のことである。石川の家はそばから河原へ下りられる道があり、そこへ筏で上流から運ばれて来た材木が陸揚げされたり、その□流れの静かな所へ浮かせてあったりした。この河岸が利根川の洪水で時に被害があるので、そこを安全にするために石川が「淵守虎玉稲荷」の小さい石碑を建て、お虎さんを祀ったものである。今の公園の真ん中に川が流れていて、その川が石川河岸の長屋のある方へ流れていたもので、自分たちはその川で物を洗ったものである。県庁の裏には監獄があり、険しい崖があつて物凄かった。山にはタヌキなどもいた。先代の石川が亡くなり、養子政三さんが妻すいさんの実家埼玉藩松山(注 比企郡松山町)にいらるとの事である。(曲輪町一〇二番地 青鹿さん) 明治十三年生まれ 談)

## 二、旧監獄

県庁の裏にあつた監獄へはよく弁当を持つて行ったことがある(父が勤めていた)ので知っているが、南の方が表門、北(武徳殿側、即ち石川河岸の方)は裏門であつた。自分は子供だったが弁当(宿直の弁当)を持つて行って

「今晚は、今晚は」  
と門の外から声を掛けると、中で

「誰だ」  
と問う。

「青鹿でございます。弁当を持つて参りました」

と返事をする、開けてくれるのが例でありました。門には厳重な門があり、牢は太い格子作りで、芝居で見る牢屋そのままだった。監獄の西の山のタヌキが私たちの真似をして「今晚は、今晚は」と門番を起し、門番が「誰だ」と聞くと黙ってしまう。或る日とうとうそのタヌキを退治し、その門番がタヌキをブラ下げて、朝家へ持つて行くのを見た記憶がある。それ程ひどい所だった。現在の利根川の半分位のところまで地所が続いていたように思う。(青鹿さん)の夫青鹿三郎氏：明治十四年生まれ 談)

利根の本流は旧監獄署の岸に沿つて滔々と流れています。我々の豫つて以て頼む所の県庁は利根川の一部の流れと化してしまします。此らについては前橋市民は志想を凝らし、此改修をなすことに全力を尽さなければなりません。(中略) 旧監獄の岸を実測する所に依れば、利根の流れより県庁裏に至る迄、短き所は十二間しかない。長き所でも二十有余間にすぎない。霖雨滲々たる候に於には、地面に雨水の侵入することは数尺に及び、地底の上部は雨水のため凹凸している。其追水流を堪えている所の部分は潭々たる所の水流を前後に控えて、其追

る所の水勢に於て監獄の所は、跡も遺さず水底のものとなるでござりませう。(明治二十七年十月八日市会に於ける生形柳太郎議員の発言：市会記録 原文は片仮名)

利根の流れが旧監獄の方面に向かつて注いできたことは何人も知る所で、毎年五間十間必ず崩壊せざることをなし。其崩壊したるものが、今日では□常なもので、旧監獄の絞首台は現在の河身の所である。又其近辺の崩れ落ちたる所は百間余にも及んでいる。畢竟此事に付ては、県庁でも心配したに相違なし。前橋に於ても寄付を為し、河身工事を為した。併し其河身工事は、一も効を奏せずして一片の水流と共に流失した。(中略)前申した旧監獄の敷地なるものは、現在僅か十二間になつてゐる。其十二間を崩壊し尽せば県庁裏の堀である。此堀は霖雨の際、又は洪水の際は裏崩れがするかもしれん。否裏崩れがするに違ひない。(明治二十七年十月十三日市会に於ける生形柳太郎議員の発言、市会記録、原文は片仮名)

(注) 監獄は明治二十一年宗甫分に移転

## おもい出の記

清水きよ

### 目次

はじめに

#### 第一章 幼い頃のおもいで

- 一 鶏卵というもの
- 二 伊香保温泉にて母の湯治
- 三 怪我
- 四 「ねえちゃん」の謂れ
- 五 瘤爺さん
- 六 病氣
- 七 太田の吞龍様
- 八 「精や」こと須賀精吉
- 九 二年目の吞龍様詣り
- 十 三年目の吞龍様詣り
- 十一 大間々の家
- 十二 孝顯寺と殿様の墓参
- 十三 兄とおまつり
- 十四 夜

#### 道

#### 第二章 私の生家と家族

- 一 私の生家
- 二 私の兄たちと妹
- 三 私の父
- 四 私の母

#### 第三章 宮沢家と清水家

- 一 宮沢家
- 二 清水家
- 三 祖母
- 四 祖父の再婚

#### 第四章 祖父の茶づくり

- 一 祖父と茶の製造
- 二 祖父の店

#### 第五章 私の町

- 一 私の町「新町」
- 二 町の暮し
- 三 町の世話役
- 四 上手の人々と店
- 五 天元社
- 六 日赤病院
- 七 下手の人々

#### 第六章 小学生時代

- 一 一年生になつて
- 二 二年生・三年生時代
- 三 四年

生・五年生時代 四 六年生時代

第七章 高等小学校時代

- 一 久留万高等小学校に入学して
- 二 女子師範附属小・高等科に編入して
- 三 保護者会と発表会―謡曲「鉢ノ木」―
- 四 「梅溪」という号
- 五 受験勉強
- 六 入学試験日
- 七 卒業式
- 八 合格通知
- 九 石川先生

第八章 女子師範学校時代

- 一 女子師範学校に入学して
- 二 寮生活の仕組
- 三 授業
- 四 本校先生と寮生との交流
- 五 放課後の生活
- 六 帰省
- 七 三学期
- 八 大正八年の夏休み
- 九 成長期
- 十 教  
育実習
- 十一 卒業と惜別
- 十二 任地決まる

第九章 部活動について

- 一 学芸部
  - 二 購売部
- 前編しゅうたいの出来に当って

はじめに

昭和六十三年七月二十日起稿

今年は何と梅雨つゆ期の長いことだろう―夏休みに入るといふのに、空は相変わらずの渋い顔してそぼそぼと降る雨は肌寒い。誰もいない室の中……一時を過ぎたが空腹も感じない。

高台から贈られた誕生祝の額に、先頃描きあげた「いちはず」を入れてみる。馬子にも衣裳か……立派な額だ……と私は何しろ気をよくした。額を表の六畳に運び、正面に掲げて、長椅子に腰をおろしてじつくり眺め、再び気をよくした。

大きな欠伸が一つ出た。ゆっくり立ち上がり、両手を伸ばし、首を

前と後ろに二、三回曲げ、ぐるりと一廻り回した。ふらふらとして腰を下ろす。膝頭がうすら寒いので、腰掛けに坐り込む。目の前の遊び人形が、ケースの中で呼びかけているようだ。私は心でささやいた。

♥ お手玉をしたつけね 「花ちゃん」と呼んでみる。

◆ 「おりんちゃん」 あなたは坊やおんぶして いつもみんなの石けりごっこを そばでじつと眺めていたネ

♣ 高台のうちの畑で 桑の木に登り 紫色に熟した大粒の「どどめ」(桑の実のこと)をもぎとりもぎとり頬ばって 「精や」に見つかり怒鳴られて お猿のような早わざで木から飛び降りて逃げちゃった すばしっこいのは「竹ちゃん」だ

♥ れんげ畑で遊んだネ 肩まで埋まる花の中は 甘い香でいっぱいだった みんな競争で花束づくりをした 二つも三つも作ったネ 花束手に帰る道 竹ちゃんひとりは れんげの冠を頭に載せ 首飾り巻き付けて のっそりのっそり誇らしげに 先頭立って歩いていた

五月のお節句も過ぎた頃で 新井さんちの矢車がひとりくるくる回ってた

夏ともなれば

孝頭寺の前を流れる小川を目ざして、暑さ逃れの遊びに出かけたネ

♣ 水あびして……水着など無い時代 「赤いお腰」のまま川に入るので 泳いだ後も帰れない 濡れたお腰の乾くまで 水田の蛙を追いかけたよ

♥ さかな取りして……竹の「箆」や「しょうぎ」の不用になったものを 家人かぞへびとの許しを得て持ち出し 水止め(広瀬川から水田用の

水を引く「せき」を止めて流れを一時中止するもので、一日一回くらい行われた。)のとき すくいどり(魚の姿を見つけてすくう。)した

◆すうとめ(水すましのこと) すくい……水面を輪を描いてすくい泳ぐ 夜になると飛び出す可愛い虫だ

♣風船虫取りはおもしろい……水止めするとき 川底の水たまりにいるのをすくい取る

(赤い小布などを水筒に入れておくと、水底の小布を水面に運んで離すので、布と虫が上下に往復しておもしろい。)

遊び呆けて 「みんな帰ろうよ」と川からあがり 見れば花ちゃんの右足に蛭が吸い付いて真っ赤な血が流れている 気が付いた花ちゃんは大きな声で泣き出した 取り除こうとして つまんでみても 引っぱってみてもなかなか離れない みんなでかかつて篠の棒で扱きとった(花ちゃんは幼いので、水たまりの中で「立ちん棒」していたのであろう。)

## 冬の朝

小正月(十五日)も過ぎて 終い正月(二十八日)も終わる頃 毎日のように吹きまくる赤城風ほこりかぜに 朝の登校は寒かった

埃ほこり溼しめしにまいた水がすぐ凍って 道路の表面が硝子しょうしのように光っている うっかり走って滑って転ぶ一年生もあれば 勢いつけて滑って喜ぶ腕白小僧の上級生もいた

前まへっ川(家並に沿って北側を流れる)の橋の下には、流れの飛沫しぶきをうけて「つらら」がたくさん下がつっていた 学校に遅れるのも気にとめず 一人がつららをおっ欠いて(「おっ欠く」の「おっ」は強める言葉) カリカリかじれば みんな真似しておっ欠いて駆けりっこしながらなめていた 真っ赤な指を縮かめて……(元

気な登校風景であった。)

明治に生まれ、大正・昭和に至る。世の中の激しい動きに今更驚き、夢のように過ぎ去った幾年月かをしみじみと偲ぶこの頃である。

行燈からランプ時代となり、電灯のひかれたとき(明治三十九年)は、大きな進歩に目を見張ったものだ。

着物の時代が洋服へ、草履や下駄が靴となり、和装時代から洋装へと時代は移る。

また住居も同様に、草葺・藁葺・板葺屋根が洋建築へと進歩した。食生活に至っては、「麦飯」のばっかり食事が「栄養食」へ……

暮らしが豊かになれば人の心も豊かになり、そのうえ、弱者には福祉制度がゆきわたる。この「昭和の御時代！」

経済大国日本と外国にまでもてはやされる。交通事情もすばらしく、世界中が身近になった。吾も吾もと競って海外旅行に出かける。

止めどもない発展に、この情勢どこまで進むか?この先どうなっていくものか?

しかし、何と住みよい世の中になったものなか。私はしみじみ考えた。

自分の育った子供の頃は、暑さも寒さも何のその、元気いっぱいねまわり、遊びの工夫は「三人寄ればなんとかなる」と、

♥細引き見付けて「なわとび」したり

◆小石を拾って「おはじきごっこ」

♣何もないときは「かくれんぼ」して遊んだものだ。

物は大切にするものだ……と、

母は教える。「瀬戸物を持つときは両手で持ちな。」

祖母は諭した。「端布・小布はしまっておきな。」

父は言う。「どんな物でも三年たてば役に立つ。」

日頃の躰を身につけて、先生の訓を素直に守り、幼年時代を過ぎてきた。そして今年八十七のわたくし!

物の足りすぎている現在よりも、何もかも不足だらけの子ども時代をなつかしむ。

こんな思いがきつかけで、忘れもしない四歳の頃からの「想い出ばなし」を綴ってみることにいたしましょう!

小雨降る日のひとりごと

## 第一章 幼い頃のおもいで

### 一 鶏卵というもの

当時、卵は貴重な食品だった。

農家でも、養鶏をしている人は稀で、たとえ三、四羽放し飼いにしても、餌がないので卵はめったに産まない。病気でもしなければ卵にはありつけない状態だった。

十二月も半ばを過ぎたある日、粕川の叔父が見えた。そして、お歳暮にといつて卵を二十個程母の前に差し出した。

叔父は、父の末の妹の夫で、東片貝で精米業を営んでいた。小米や、よく実らない糶しなの屑米が出るので、鶏を放し飼いにしていたのである。

私は、叔父の差し出した卵をさわってみたかった。白くて可愛い肌のきれいな卵……手に持ってみたい!

私はたまらなくなつて一つ取り上げた。そして、両方の手のひらでそうと抱えてみた。冷たかった。

そのとき、母があわてて私から卵を取り上げようとした。

私は一生懸命逃げた。縁側を走り、跣足はだしで往還へ飛び出した。本家

のくぐり戸の前あたりまで走つて後ろを振り向いた。そのとたん……卵はかじかんだ手から放れて足元に落ちた。

母が、心配そうにおいでおいでをして私を呼んでいる。私は怖かった。その時の母の顔、忘れられない。風は冷たい。小石の上の足は痛い。卵は足元で割れてしまっている。私はとても悲しかった。わけもなく泣いた。

### 二 伊香保温泉にて母の湯治

母は胃弱で時々苦しむことがあった。

甘いものの好きな母は、お正月の初午の「まゆ玉館ころ」、お盆の「お萩」などの物日の料理には、必ずというほど胃弱を起こした。母の苦しみは家中の不幸であった。

私の五歳の頃のことである。父のすすめで、母は、秋の取り入れが終わると伊香保温泉に湯治に出かけることになった。母はその準備に忙しかった。

お手伝いには上泉のお杉さんを頼んだ。お杉さんは宮沢の祖母の娘で、若くて賑やかな明るい性格のお姉さんで、時々母の手伝いに来るので私もよく知っている。

湯治の効果は「なか十日」といって、往きと帰りの二日を入れると十二日間となる。入浴は、疲れぬ程度は一日四回とのこと。

当時の伊香保は、電車を利用する以外には乗り物はなかった。今考えると、乗り物に弱い母の身のことがいちばん気遣われるはずであるが、私は、母と泊まりがけで出かけることが嬉しくて有頂点になっていた。幸いに何の故障もなかったらしく、お杉さんに付き添われて母は宿に着き横に臥した。

宿は階段通りの中程で、小じんまりした湯治客専門の家であった。

私たちの室は、通りに面した二階の四畳半の小屋であったと覚えてい  
る。

出で湯の街の朝は早い。「おさつ温かい、温かい。」と威勢のよい声  
が聞こえてくる。湯煙で霞む階段坂を、せいろうのままかついで駆け  
昇ってくる。法被姿の兄さんだ。私は布団の中から母にせびり、熱い  
ふかし芋三本を買ってもらった。嬉しい楽しい朝だった。

お杉さんの作った朝食は、ご飯に味噌汁、鮭の缶詰、若芽の佃煮……  
朝食がすむと、物聞山へ栗拾いに出かけた。落ち葉の中をあちこち  
探し、栗の木を見つけて大喜び。一時間ほど散策して三合ほどの栗を  
拾い、紙袋に詰めて宿に帰った。

皮をむき渋皮を削り取り、明日の栗ご飯の用意に、水に浸して箆に  
あげ水切りをしておく。これが一日の仕事だ。残ったものは、ゆで栗  
としておやつにする。山栗は、小粒であるが甘味が多く新鮮な香りも  
あり、最高の「山の幸」である。

そして、午後はゆつくりとお湯に浸り休息した。

翌日は、伊香保神社にお詣りして健康と家内安全をお祈りし、帰り  
には、土産屋の店を一軒一軒覗いて歩いた。

山の散策は日課で、当てにしない獲物もあって母を喜ばせた。時に  
は土地の人も知り合いになり、わらび・ぜんまいなど分けてもらっ  
た。

十日位は夢の間に過ぎてしまった。

帰りに、階段通りの「ろくろ屋」で、杓文字や茶托を本家や近所の  
土産物に買い求めた。私はその時、「うなりごま」を買ってもらった。  
母は見違えるように元気になった。私は、母が何もしないでのおんび  
りと笑顔で過ごした伊香保での十日間を、忘れることができなかった。

### 三 怪 我

その頃我が家では、野菜として作ったのは、菜っ葉類のほか大根・  
人参・胡瓜・茄子・馬鈴薯くらいで、果物やとうもろこしは本家で時々  
貰うほかは食べられず、幼な心にもそれがけなくなる。心満たないも  
のがあった。

ある夏の午さがり、私は母の帰った後、ひとり本家の台所で遊んで  
いた。野良から戻った作男たちが、「めかい」にいつぱいのとうもろこ  
しを土間に降ろした。叔母がすぐに皮をはぎ、大釜で茹でる仕度を始  
めた。私は、山のように放り出されたとうもろこしを驚いて見ていた。  
二兄が房の実入りを確かめ、私に「ねえちゃんにもやろうか。」と大き  
な房を二本持たせた。

私はとても嬉しかった。「早く母に見せよう。」としっかり両手で抱  
えた。そしてぐり戸から出ようとした。右足の駒下駄の歯が格子戸  
の敷居にはさまり、上体が、抱えたとうもろこしといっしょに前への  
めり出して、あつと思う間に表へ放り出された。

私は大声あげて泣いた……らしい。それきり、傷の痛みも何も感じ  
ない。

気がつくくと、竹屋のおじさんに抱かれ、白いエプロンに真っ赤な血  
が流れている。通りを、幾人かの大人が駆けつけてきたらしい……と  
おぼろげに覚えている。

それからのことは記憶にない。只、竹屋のおじさんの赤ら顔と、そ  
の表情は今でもはっきりしている。何だか恐ろしくて逃げ出たくて、  
一生懸命わめいた。

(付記) ○現在でも、鼻の上と下唇の下にその時の傷痕が残っている。

○「ねえちゃん」とは、当時、周りの人から呼ばれた私の呼  
び名である。



#### 四 「ねえちゃん」の謂れ

私は幼い頃、親戚や近所の人から「ねえちゃん、ねえちゃん」と呼ばれてきた。自分でも何の疑問も持たず、「ねえちゃん」で満足していた。小学校入学後からは自分の名前を呼ばれ、改まった気持ちになつた。

私は、母に「ねえちゃん」と言われる訳を訊ねた。母は、「おまえの子守をした娘が、おまえと同名だったので、子守を、ねえちゃんと呼ぶことにした。するとおまえは、『あたいがねえちゃんだ。』と言って聞かず、名前を呼んだのでは返事をしなかつた。仕方なく、おまえをねえちゃんと呼ぶことにした。」と話してくれた。

私は母の話を聞いて、おぼろげに思い当たることがある。

— その一 きみねえちゃん —

いつも私について遊んでくれる「ねえさん」がいた。母は「きみ、きみ」と呼んでいた。

或る時、「七軒長屋」の「為さん」のうちの小母さんに、「赤のご飯」のお客に呼ばれた。私は、小豆のご飯が大好きだつたそうだ。

小母さんは蚕の忙しい時に桑摘みに来たり、繭かき・茶摘みなどに来て、私のことをよく知っていた。小母さんの家には小さい子供が何人かいた。

その日私はきみねえちゃんに連れられて小母さんの家へ行き、台所のあたりはなに座って待っていた。小母さんの家は七軒長屋の真ん中で、畳は真つ黒で周りの壁も汚い。おずおずしながら見廻していた。その時、這い這いしていた赤ちゃんが、私の座っている脇で「うんち」をした。

小母さんが慌てておしめて拭きとり、前つ川へ洗いに外へ出た……が、私はもう家に帰りたくなつた。小母さんは、濡れた手で「赤のご

飯」を茶碗にもり、出してくれた。そして、「ねえちゃん、食べておくれ。」と何回もすすめた。私はどうしても食べる気がしない。きみねえちゃんもしきりにすすめる。私は泣きそうになつた。

きみねえちゃんは仕方なく、私の手を引いて帰つた。そして、そのいきさつを母に話していた。

— その二 磯吉叔父さんと友だち —

その頃、私の家へ三人の若者が遊びに来た。三人揃つてとても剽軽者で、夕食後のひとときを皆を笑わせては喜んでいた。

その三人とは○喜三ちゃんは父のぎりいとこ

○愛造さんは喜三ちゃんの友人

○磯吉さんは母の弟

この習慣は、父母がまだ製糸工場で女工さんを大勢使っていた頃からのことで、三人は夕食後の遊び場として、住みこみの女工さんたちをからかいにやつて来た。話し上手の三人は、女工さんを褒めたり、笑わせたり、怒らせたりして喜んでいたのである。

愛造さんほどこの人か知らないが、時々「東京に行つてきた」といつて、私に何かしらお土産を持ってきてくれた。

或る時、ゴム毯の大きなのを貰つた。とても嬉しくて大切にもつて遊んだ。空気が抜けると自転車やで入れてもらつて……古くなつたゴム毯は、表面が光つて弾力がなくなり、つくのにとても力が入つた。右手の甲のひびが、ひとつきする毎に割れて血が滲んだ。

— その三 磯吉叔父 —

私の五歳の頃、太田の叔母の家に預けられていた「とみ叔母」が私の家に戻り、長男の兄が亡くなつた年に、「精や」が年期契約で我が家に住込みとなつた。

そして何時の間にか「きみねえちゃん」はいなくなり、喜三ちゃん

も一家を持ち、愛造さんも消息が絶えた。

只、本家の磯吉叙父だけは、時々顔を見せて私をからかった。私の顔を見ると必ず、「おいネエ、オツはどうした、オツは何してる？」と言う。私が怒ってかかっていくと、おもしろがっていた。私はよちよち歩きの赤ちゃんの頃、「父ちゃん」が言えなくて「オツちゃん、オツちゃん」と言ったそうだ。

(付記) ○「ネエ」は、ねえちゃんのからかいの言葉

○「オツ」は、オツちゃんのからかいの言葉

○磯吉叙父は、明治三十八年、日露戦争で戦病死した。葬式は、大勢の人で参列者が自宅から千日堂まで続いたと言う。

(千日堂は宮沢の墓所である)

## 五 瘤爺さん

或る晩、土間の戸が開いてよちよちと誰か入ってきた。「湯はまだあるかな？」大きな声だ。本家の瘤爺さんだ……と私はすぐわかった。

瘤爺さんは私の生まれる前から本家にいるじいさんで、出入りの人たちは「松井さん」と呼んでいた。

どこの人か、どこから来たのか私は知らない……が本人の説明によると、「官軍に従事して九州に渡り、野戦で凍傷にかかり引き揚げて来た」とのことである。

侍言葉で威張っている。眼光するどく赤ら顔で、瘦せたたるまさんのようだ。大きな声で怒鳴るので作男たちは反抗できない。小作人のかけ合いも、爺さんのひと睨みで解決すると言っていた。本家は女主人同様なので、この人を用心棒のように考えていたのかもしれない。爺さんは晩酌をかかさなかった。(本家の台所にはいつも四斗の酒樽が備えてあった)

そして夕食後はフラフラと遊びに出かけ、江州やの前の石橋屋と言う餅屋で大福餅を食べるのを楽しんでいたらと言う。甘い物も好きだった。本家の人たちは「両刀つかいだ」といつて笑っていた。爺さんは、私を見ると顔に似あわずにこにこして、「ねえちゃんや、あんも好きか、あんもうまいぞ。」などとお世辞を言った。私は、こわい爺さんになるべく近付かないようにしていた……。

土間に入った爺さんは、よろめきながら上がりかまちに近づいた。(今夜は本家では風呂を立てないらしい。爺さんはそんな時は貰い湯に来た。)そして、「ねえちゃん起きとるか。」と小袋を差し出した。とみ叔母が受け取って私に渡した。受け取って見ると、石橋屋の一個五厘の大福が二個入っていた。叔母は、立ち上がって湯加減をみたりうめ水を用意して、「松井さん熱かったらうめておくれ、ゆっくりおはいり。」とすすめた。爺さんは渋茶色の古びた手拭を腰からはずし、凍傷で指を失った足を包む黒ずんだ繻帯をゆっくり解きはじめた。布は思ったよりたくさん使っていた。すっかり解き終わった足の形を見て、私はおどろいた。細い脚は骨張っていて薪のようだ。棒の先に紅味をおびた華大の塊のようなものがついている。これが足らしい。指はなく、巾着の口をくくったように先がつぼめてある。そして踵のふくらみもない。全々足の形をしていない。「かわいそうな足！あれでよく歩けたものだ。」と私は目を放さずに見ていた。爺さんは解き終わった布をていねいに巻いた。そして仕事着をぬぎ風呂に入った。

「いい湯だった。」と出て来た爺さんの顔はゆで蛸のようだった。右の目と耳の間にピンポン玉くらいの瘤がある。ランプのうす暗い光をうけて先が光って見える。仕事着をつけた爺さんは足の繻帯にかかると巻指先のところを何回も丁寧に巻き、そのまま横に何回もくるくと巻き付けた。足は可成り大きくなった。次に足首に一回巻き、豎に布を

かけてしつかりおさえ、最後に横に三々四回廻してしばった。爺さんは気持ちよさそうにさせるを出して煙草をすった。そして叔母の用意した煮豆のお茶うけで、父母も加わりひとしきり話して出ていった。私は瘤爺さんを気の毒な人だと思ふようになった。

## 六 病 氣

### —玩具—

私は五歳の時、腸をこわして高熱が続いた。父母は寝ずの看病をしたそうである。津久井先生が毎日往診に見えたのを覚えている。後になって、母は私の病氣について次のように話した。

「あの時あの状態で菌が出れば、腸チブスといって恐ろしい病氣になり、病院につれていかれることになるので先生も真剣だったんだよ。」と。

私は薬が嫌いで飲もうとしなかった。父は毎日出掛けてはおもちゃを買ってきた。そして小袋に入れた玩具（時には大きな人形等もあった）を私の枕元に出して、「薬を呑めば開いてもよい」と言った。私は一生懸命で薬を呑み込んだ……。

後に、この玩具は大小併せて八十個余りになった。（現在、当時の人形が一個と、張り子の犬一個が残っていて、ひな祭りに飾る。）父は幅七十cmほどの五段飾りの雛壇をつくり、空色の色紙で化粧張りをして常時見られるようにしてくれた。

### —半月形のふかし芋—

父母の熱心な看病により、私は一日一日と快方に向かうことができた。私は、一日三回の病人食では空腹で我慢できなくなった。丁度甘藷の出まわる時季で、家族の者がお茶うけにしているのを知って、母にせびり断わられた。そのときはあきらめても、少し過ぎるとまたせ

びる。こうして母を困らせていた。或日のこと、父の留守中、母は直径六cm程の甘藷を厚さ十cm位の輪切りとし、その輪切りを真二つに櫛形にしたのを一切れ、「よくかんで」といつて渡してくれた。私は天にも昇る気持ちで少しずつかみしめながらのみこんだ。こうして1/2切れが丸一つとなり、翌日は厚さが二cmとなり、食事に自信がつくようになった。同時に、先生から普通食が許され、めきめき体は回復した。

## 七 太田の呑龍様

父母は、私の病氣によくよく心身をすり減らしたことから。病氣の全快を、太田の「子育て呑龍様」に祈願したそうである。私は三年間呑龍様のお弟子となり、呑龍坊主になった。髪は、上部を少しおいて、まわりを剃刀ですっかり剃りあげてしまった。それから、年一回、御礼の参詣に出かけることになった。私は、母に連れられて乗り物で出かけることは少なかったもので、とても楽しいことだった。

四月八日はお開帳の日である。お開帳の日には、呑龍上人のお姿を一般信者に公開する。母は準備を整え、今日のお礼参りを決めていた。

### —駅までトテト馬車で—

当時、駒形方面から前橋へ通う馬車があった。中年を少しまわったと思われるおじさんが御者で、あまり若くない馬に車をとりつけ、「トトオウテトト」と金属製のラップを吹きながら、時々むち棒で馬の尻をたたき、威勢をつけつけ、下手から上ってくる。「トテト馬車」といった。バラスの道を走る埃と車のきしむ音、それにラップの音が入り交じってすごい光景である。乗り場は決まっていない。手を揚げれば、どこでも停止して乗せてくれる。また、話し合いで、旗を出しておく者もあった。車には幌が掛けられ、中は、両脇二列に長腰掛を取付け、古い敷物が敷かれてある。一列に四人腰掛けられるが、

こみあうと五、六人は乗せる。そんな時でこぼ道にかかると、馬の進むごとに体が宙に浮いて、お互いに支えあわないと倒れそうだ。歩いたほうがましだと思いが、荷物の多い時はこれでも助かる。

叔母は、街道へ出て馬車の上つてくるのを待ち受けていた。定刻を少しまわった頃の馬車によりやく乗り込んだ。五人の先客がいたが、顔見知りはいなかった。「すいててよかつたネ。」と叔母の声を後に、御者がひとむち当てる、馬はそのそ歩きだした。二回目の鞭とトテトラつばの声に、馬は歩を早め、勢いよく走り出した。埃も遠慮なく舞い上がる。

中川町を通り片貝町を過ぎ本町へ入ると、馬車はそのままつずぐ進むので、駅への道は、曲がり角で降りて徒歩で行かねばならない。今日は手荷物が少ないので早く駅に着いた。

母は、切符を買うため窓口に着いた。馬車からいっしょに降りたおじいさんが、大荷物を抱えて入ってきた。あたりを見回し、待合所の椅子に荷物をおろし、自分も腰を下ろしてぼつとしたように手拭で顔を拭いていた。

私は母に促され席に着いた。そして、外の景色がとんでいくようなので、目を離さずこの不思議な光景に見入っていた。途中で一回乗しかえたようだった。

太田駅に着いたのは正午近かった。改札口を出ると、人力車が四、五台待ち受けていて、俵夫は競って客を引き止める。母はその中の一台の俵夫に掛け合っていたが、値段の折合いがつかないのか……私は母の膝の上に腰掛け、二人は赤い毛布を掛けられ、太田の街を見物しながら悠々と呑龍様の大門に着いた。

ここからは参道になるので、どなたも徒歩になる。さすがに今日はお開帳で、参詣の人でいっぱいである。

先ず目についたのは干瓢売の店である。前を通るとその匂が鼻をつく。真つ白い幅の広い上等の品が、竹竿に行儀よくかけられ見事だ。家で使う、薄茶色の縮れたものは一つも見えない。

参道を進むと、仲見世というのか、土産屋・料理屋等が軒を連ね、大賑いである。丁度時分(食事の時間)とみえて、寿司屋・うどん屋・井物等々の店は客がいっぱいだ。赤いたすきのねえさんが、忙しそうに立ち働いている。どの店も表の戸障子をあげはらつて、奥の方までまる見えである。母は私の手を引いて、大光院の正門に入った。

母は先ず、正面の呑龍上人をまつる本殿に近づき参拝し、係の僧侶さんに申し込んでお護摩を奉納した。母は、読経が終わつても座を立たずにお姿の前で正座していた。「私の病氣全快の御礼を述べているのだナ。」と思い、私も丁寧に頭を下げた。そして、お護摩や本尊様のお札、お守り等を受けてお別れした。

昼食時間は過ぎているのに、店はどこも満員だった。母は比較的すいていたお菓子屋に寄り、おだんごと大福餅を誂え、おかみさんの入れてくれたお茶を呑みながら、持参の海苔巻とお稲荷さんを取り出した。母はおかみさんという話し込んでいる。私は空腹でたまらない。お弁当やおだんごを思い切りほった。

帰りは、土産物店などをゆつくり見て歩き、大門で待ち受けていた人力車で駅に着いた。汽車は立込んだが、夕方無事帰宅した。

#### 八 「精や」こと須賀精吉

「精や」の生まれは、勢多郡桂萱村大字西片貝村三十五番地 農業須賀惣吉の二男で、精吉と呼ぶのが正しい。兄は惣作という。父親が病氣のため、明治四十年、十六歳で私宅に住込みで奉公に来た。

その頃は父親も居たが、寝たり起きたりのようだった。母親は気の

毒なほど腰が曲がっていたが、まめでよく働き、長寿であった。齒並みの美しいのが目につく。大豆を炒つてお茶菓子とし、正月のお餅は、かびの出ないうちに日光で乾しあげ、焼いて食べるのが好きとのこと。すぐく強い齒の持ち主であったと聞いている。

精吉は、その名のとおり主家のため、黙々として働いた。父を尊敬し、また実父のように慕っていたらしい。男の子を亡くした父母は、精吉の人となりを受して信用し、「精ならば」と一切を任せ、信頼しきっていた。お盆や正月には、母が、心付けのお仕着施や、小遣と土産物を持たせて母のもとにかえすが、泊まってきたことがない。夕方には帰ってきて、宮沢の若者や、近所の農家の息子たちと過ごしていたようだ。

病気をしたこともないのに、二十歳の兵隊検査には「乙種」になつて、入隊は逃れた。

— 虚空蔵様のおまつり — 豆柿 —

片貝村は、精やの実家の西片貝と東片貝の二ヶ所に分かれていた。

虚空蔵菩薩をまつる虚空蔵寺は、東片貝にあった。あらゆる人々の幸福をもたらすとの評判で、毎年十一月の例祭には、村を挙げての催物を仕立てて、村内はもとより、近村の人々の参詣で賑わつた。

私は五歳の年、精やに連れられてお祭りに行った。寒い寒い日であった。赤城風をまともに受けて……「虚空蔵様に風はつきものだ」と定評のあることを、精やは教えてくれた。

やと精やの家に着いた。おかあさんがにこにこして迎えてくれた。おかあさんは、腰が曲がってお髪が真っ白で、おばあさんのように見える。眼が細く、丸顔の艶のよい顔をしている。室の中頃にござを敷き、お赤飯や煮物など御馳走してくれた。奥の室におとうさんが横になつてしたが、私の方を見てにっこりした。

精やに促されて虚空蔵様に出かけた。向かい風は一層強くなった。その上、道のりも遠いので、私は殆ど精やに背負われて境内近くに着いた。

入口に、鰻売りの小父さんが、土間に桶を並べて大・小の生きた鰻を捌いている。参詣の人たちはみんな一匹ずつ買って、傍の古井戸に奉納していた。(昔からこの村では、鰻は絶対食べない風習になっているとか)。境内は、露天商と参詣の人たちで雑踏していた。かぐら殿では、赤鬼・青鬼と白髪の装束を着けた舞手が、「ピーコ シヤシヤリこ どうん どん」と、笛と太鼓のはやしにあわせて踊っていた。この寺は、「牛と虎」に関係があるのか？ 藁で作った牛と虎が睨みあっている藁の大きな像ができていた。

帰りは追い風なので、ゆつくり歩いて帰つた。

西片貝の家へ立ち寄ると、おかあさんが、庭の隅の「豆柿」の枝を大きく一枝切り取ってお土産にくれた。豆柿の実は「きん柑」位の大きさで、鈴なりについた粒が餡色に熟して美しかった。

私は、こんな可愛らしい柿を見たことがない。大喜びで家へ帰ると、一個ずつ家中の人に分けてやり、自分も食べてみた。甘くてとてもおいしい。花瓶にさして毎日眺めながら、一個ずつ配り、自分も食べて楽しんでた。日がたつにつれて、柿は少しずつしぼんできたが、味はかえつておいしくなつた。残り少なくなつてからは誰にもやらす、ひとりで食べてしまった。

翌年精やは、ひとりで虚空蔵様に出かけた。そして、去年のような一枝を取ってきてくれた。私は嬉しくつてたまらなかつた。

次の年も忘れずに豆柿の枝を取ってきてくれた。

私が二年生のときであった。精やは、「今年木が弱つて枯れてしまったので、豆柿はおしまいだよ。」と気の毒そうに言つた。「そんな

ん！」と私は言ったが寂しかった。

あの小粒の、あまいあまい柿、そして日がたつと、表面がしぼみ、ねっとりしたうまさ、あの豆柿……

精やの顔と重なり合って、懐かしい思い出である。

## 九 二年目の呑龍様詣り

―精やに連れられて―

母は乗物酔いをするので、二年目の参詣は精やが行くことになった。精やは十六歳になるが、まだひとりで汽車に乗ったことはないそうだ。

母は一切を精やに言い含めて頼んでいた。そんなことには頓着しない私は、精やと行くのが嬉しくて何やかやと話しかけるが、口もきかず緊張しているようだ。

汽車に乗ってからも、私は「精や、精や」と話しかけたが……返事もしない。そのうち精やは、いつになくむずかしい、怒った調子で小声で、「精やって言うんじゃないよ。」……と注意した。私は異様な感じがした。「なぜ精やがいけないのか」「なぜ今日は不機嫌なのか」……私は突き除けられたようなショックを受けた。それから、私は黙って精やの後についた。

御本尊の参詣をすませ、お守りやお札を受けた。精やはすっかり元気な表情になっていた。境内を一回りして、いろいろ説明してくれた。呑龍様は、新田家の菩提寺、金龍寺の住職で、慈悲心の厚い高德の上人であったこと、子供を病苦から救い、「子育て上人」と崇められ、世の人の信仰の厚かったこと、本殿に横たわる「臥龍の松」のいわれ等を、説明書を見ながら楽しそうに話してくれた。昼食も、持参の海苔巻とおいなりさんを裏手の口ハ台でうまそうに頬張り……

人力車など勿論のこと使わず、私の歩き方が遅くなると六歳の私をおんぶして、予定の汽車に間に合って、予定の時刻に帰宅した。

## 十 三年目の呑龍様詣り

―お願果し―

母は、「お願果しには何としても自分が行かなければ申し訳ない。」と言っていた。

母の心配は車酔いなので、人力車で伊勢崎の駅まで行くことになった。そして武田の宣吉俣夫に交渉した。母は父に、「宣ちゃんはまだ壮健な体ではないし、年も年だから気を使ってやらなければネ。」と話していた。

武田宣吉さんは、祖父の貸家に住む子だくさんの俣夫で、おかみさんは、子供を育てながら、ざぐりの糸挽賃仕事をしていた。

駒形に入る頃には、もう宣ちゃんの足の運びは速度を落とす。そのうち、息づかいも荒くなってきた。母は、沿道の茶店でひと休みすることにした。

宣ちゃん、茶をすすりながらひと息入れた。そして私に、「ねえちゃん、この辺は『みやこ』という所で、日本中の雨の集まる所なんだよ。雨はみやこへ帰らせってね。」と言って笑った。ほんとかな？……私はずいと思いついた。「雪はドンドン降ってこい、雨はみやこへ帰らやっせ」という唄を。そして私もいっしょに笑った。(なぜか後々まで思い出すひとこまだ。)

伊勢崎から東武線で太田駅に着き、人力車で大門まで……

参道を進み、最後のお願果しをねんごろに済ませた。「今日は平日で入出が少なかったので、お護摩の申し込みも、お札を受けるにも、気の急がることもなくお参りが出来た。」と母はとても御機嫌のよう

だった。

帰り道、母は、「これから大間々の叔母の所へ立ち寄る」と言つて、一昨年昼食したお店で羊羹や生菓子等の土産物を求めた。

太田駅に着くと、叔母の小僧さんが迎えに来ていた。小僧さんの案内で、桐生から岩宿に着いた。

## 十一 大間々の家

岩宿から馬車で叔母の家に向かった。馬車は大型でがっちりしていた。十人ぐらいいはゆっくり腰掛けられる。馬も二頭立てで、目の両脇に黒いおおいをしている。御者も若手で威勢がよい。二十分程で叔母の店の前に着いた。

叔母は待ちかねたように、「馬車の来る度、出て待つていたんだよ。よかった、よかった。」と大喜びで、店を通り、奥の座敷へ招き入れてくれた。

この叔母は父の妹で、祖父の長女である。大間々へ嫁いでも、父や母を親のように信頼し、私等の訪れるのを、この上もない楽しみだといつてもなしてくれた。

主人は高村寅吉といつて、「青梅」から裸一貫で出てきてこの地に落ち着き、今日に至つたという。見るからに抜け目のない、頭の良い人のように思えた。最初は、荷物運搬の人足から始まり、僅かな資本で露店商をし、夜は空地を利用して野菜作りをした。何事も計画的で無駄のない方法を取り、世に言う、夜を日についで働いた。叔父は予定通り店を持つことができた。そして青梅から母親を呼んだ。

去年までは焼芋を焼いていたが、評判が良く、長い行列は一日中絶えなかつたそうである。その当時から、叔父の店は誰言うとなく「いも寅」と呼ばれ、そのまま本格的の屋号となつた。

叔父の経営方針（これは後日叔父から聞いた話）

・商品の仕入れについて最も気を使い（そのための犠牲はいとわな

い）

・良いものを安く売る

・利を少なくして数でこなす

その後、鮮魚・乾物・果物・雑貨等を手広く商うようになった。朝早くから仕込の小僧七、八人が、番頭の指図で新鮮な魚を自転車につけ、近在に引き売りに出かける。早い者は正午近くに、遠くに出た者も二時頃には売り上げてくるが、二回目に出る者もあり、夕方までには品物は残らなかつたという。みんな、競争で捌いてくるこのことだった。従つて、朝夕の賄いはたいへんなもので、私は何を見ても物珍しく、驚いていた。

叔母は、子供（従兄弟）が五人あつた。

長男 十二歳 おとなしい はにかみや

長女 十歳 男のようできかん坊

二女 六歳 お人好し 私と同年で仲良し

二男 四歳 よく動くいたずらっ子

三男 二歳 赤ちゃんと小僧におんぶしていた

家中で優待してくれるので、二晩の予定が延びて五日目に帰宅した。その後大間々との交流は、八月のお祭り、四月の月遅れのお節句、この二回は私たちが出かける。叔母夫妻は、店があるのでお歳暮と年始を兼ねて、七草前に一晩か二晩の予定でこちらへお客にみえた。そんな時父母と叔父母は、毎晩夜の更けるまで、楽しげに話し込んでいた。

叔父の商売の話は、「立志伝」を聞くようで、家中熱心に耳を傾けた。「時を大切に、働くことを楽しみ、御客様を大切に……それが己も

栄える基である」との意味を、自分が歩いてきた実例を軸に説明した。私は偉い叔父さんだと思った。

僅か一、二日の逗留だったが、その間の叔母夫妻の機嫌のよい表情は忘れることができない。

そして、大量の鮭や乾物・果物等をお歳暮にといつて、また、お年玉を家中に渡して帰宅した。お歳暮は、精やが一日がかりで親戚に分配した。

(付記)その後、大間々の店はどんどん得意先を増して町でも有数の大店となり、叔父は町の顔役となつて信用を専らとするようになった。

番頭たちもそれぞれ独立して、桐生・大胡等に店を出し、本店に勝る商人となつた者もいる。

長谷川四郎氏もその一人で、押されて政界にまで出馬するようになった。しかし顧みて叔母夫妻の真の幸せは？どの辺にあつたのだろうか……

叔母・叔父の没後私たちとの交流は殆どなくなった。現在はどうなつたかわからない。

時折私は二人の墓参をするが、まだ石碑は建てられていない。

—昭和六十三年—

## 十二 孝顯寺と殿様の墓参

「孝顯寺は、前橋藩主松平氏の菩提寺である。慶応三年、麩橋城を再建し、松平直克が川越から移り、前橋藩主となった。現在の藩主は伯爵松平直方侯である。」と父の話である。

今日は、その松平直方侯がお墓詣りに来られるとの事だ。

町では、殿様のお墓詣りとあつて、家伝いに「ふれ」が出て、通路

に当たる家では、自分の家の前の草むしりや、汚物・危険物の取り除き、道路の凸凹などの手入れ等、朝から掃除に忙しかつた。私は、「殿様ってどんな人だろう！冠をかぶり、束帯をつけたおひな様のような出で立ちの人かな。そして奴さんが毛槍を持って、『下にー下にー』とついつくるかな。」と興味深く待つていた。私の家は孝顯寺の入口なので、家の前には大人や子供が集まつていた。

定刻になつた。目をこらして上手を見ていた。自動車一台走つてきた。中に、洋服姿の人が三、四人乗つていた。車は、私たちの前から大門の方へ曲がり、孝顯寺へと走り去つた。私は後続を心待ちして立つていた。しかし何も来ない。久保田の小父さんが「今、乗つていたんべ。あの真ん中のが殿様だよ。」と言つた。私はがっかりした。(六歳春)

## 十三 兄とおまつり

今日は、天川の雷電神社の春まつりである。

私たちの町には鎮守様がないので、雷電様のおまつりは新町のおまつりでもあつた。

私の家では、この日、芳町の親子を招いて夕食を御馳走することにした。子というのは、養子に行つた兄のことで、親は、父の叔母なのである。私たちは、芳町のおばさんと呼んでいた。

母は、とみ叔母に手伝わせて、朝からあれこれと準備を始めていた。二人の好物は手打ち鰻鮓なので、とみ叔母は腕によりをかけて作る。

学校から帰つた私は、友達に誘われておまつりに出かけた。千日堂のあたりから、露天商が店を出している。神社の入口を曲がると、両側に、おもちゃ屋・せんべい屋・飴屋・風船売り等の天幕張りが続く。風船屋に近づくと、瓦斯の臭いが鼻を突く。私たちの目当ては、ほお



ずき売りの店である。

巾着の形をした赤や黄の「うみほおずき」、薙刀なまなの形の「薙刀ほおずき」、なめていると育つという「天ぐさ」等、名も解らない数々のほおずきが、赤・黄・緑の色に染められ、生々して美しい。隣には「ゴム」で作った「ゴムほおずき」の店もある。海ほおずきに似せたもの、鳩や毬の形をした可愛いもの……ここも女の子でいっぱいだ。

小遣とにらみ合せて、海ほおずき一個と鳩のほおずき一個を買って、私はみんなと別れた。

家に帰ると、おばさんと兄が着いていた。家中で、そわそわして迎えるところだった。

兄は今年十四歳で、四月から、県庁へ給仕という仕事で勤めることになったそうである。紺緋の着物に、黒っぽい袴をはいていたが、細かい縞があつたようにも記憶している。顔の色は白く、はつきりした目、高い鼻、黒い髪は二、三分刈りか？卵のような顔かたちは、お節句の「親王びな」のようだな……と思えた。私に見慣れている宮沢本家の男の子とはたいへん違う。男のくせに色が真っ白だ。

私は、兄には余り逢うこともなかつたので、この時つくづく眺めた。そして、どうしても兄さんという気持ちにはしなかつた。

私を見るかぎり、芳町のおばは兄のおばあさんに見える。とても親子には見えない。おばさんは、がっちりした肉付きのよい性格で、背丈もあり、お角力すぢりさんのようだ。少ない髪はきれいに撫でつけ、繭玉くらいの「まげ」をつけている。おむすびのような顔立ちで、切れ長の目で鼻も口も大きく、一面に笑みを浮かべて御機嫌のよい様は恵比寿のようだ。先程から、兄の自慢に他意はない。

奥の八畳の床の間を背に、どっかり座つたのは養子親のおばさんで、並んで兄が座つた。その両側に、父はおば側、母は兄側に席が決

まつた。私は母の傍にこっそりくつついて、二人のお客の様子を見ていた。

そのうち、手料理が運ばれ、それぞれに分配され、兄の好物だといふ鯉の料理も出た。会食は始まつたがお酒は出ない。宮沢本家とは違い、みんな不調法なので、不思議とも思っていない。おばは恵比寿顔を振り撒いて、途切れもなくおしゃべりしている。「余程嬉しいのだナ。」と私は思った。そのうち、おばは帯を解き、肥満の腹部をゆるめた。そして、手打ちうどんをほめほめ、またおかわりをした。兄は一言も言わない。母がそばですすめる料理を、うなずきながら食べていた。

一同食事の済んだ後、おばは兄に剣舞を命じた。兄はすぐに支度にかかつた。父は、「木刀がない」と言つて、祖母みねから父に伝わつたという「真剣」を取り出した。おばは怪しげな声で、兄の舞に合せて吟じた。川中島・立志壁に題す・子捨行等を演じた。兄は、声も透り迫力のある舞ですばらしかつた……と私は感心した。

おばは疲れたらしく、祭には行かず、兄を促して早々に帰宅した。初めから熱心に見ていた精やは、「真剣を振り回されてひやひやした。」と言つたが、さすがに父も、「あの重い刀をよく上手に扱つたものだ。」とは言いながらも、反省したのか以後は木刀に切り替えた。

夕食の片付けも済んで、父に留守番を頼み、私たちは連れ立って雷電様の参詣に出かけた。境内は、たいへんな人混みだった。お燈明をあげ、参詣を済ませ、余興小屋をのぞいた。

今夜の催物は、浪花節と祭文である。浪花節はすでに終わり、祭文が始まつていた。語り手は、天川の八百屋の主人で、通称「のりやん」と呼ばれ、毎年必ず出席する顔である。

「祭文」というのは、「塩原太助」とか「荒木又工門」等の読みもの

を、独得の節をつけて語るのであるが、その合の手に「ほら貝」と「錫」を使い、デロレン、デロレンとお囃子を入れるので、デロレン祭といわれている。

(注) 錫は、竹を裂いた板状の棒の先に、金の輪が数個付いていて、振ると金属性の音がする一種の楽器である。

今しも、のりやんが錫棒を右手に高く振りながら、デロレン、デロレンと、ほら貝を吹いて合の手を入れている。力演中である。しばらくデロレンが続ぎ、次の語りに入るわけであるが、よく解らない。この人は、発音が不明瞭な上に、「どもり」の癖がある。何を語っているのか聴き取れない。私たちは、人を分け分け前に出て、聞き耳を立てた。「デロレン、デロレン」というところが、「レロレン、レロレン」と聞こえる。「遅かったぞっ、又エ門！」が、「おっオオオとかかかたろ……まままま、またエモ！」これでは、わからないのは当然だ。みんなの笑い声とかけ声を後に、そっと引き上げた。

家につき、留守居の父を交えて、買ってきた「金つば焼」でお茶を呑みながら、のりやんの真似をしてお腹を抱えて笑った。

北風荒れて、凍てつく朝は

お高祖頭布を深々かぶり

目だけ出して急いだ。

(注) お高祖頭巾とは、紫色の風呂敷大の布に、赤いメリンスの裏を付け、斜めに折って耳かけをして、頸のまわりに巻きつけ、後ろで結ぶ防寒頭巾である。布の色は違うが、母も、寒い日には常時使っていた。

#### 十四 夜 道

私が七歳の頃、暮からお正月にかけて、小柳町の「柳座」に、当時

流行した浪花節芝居がかかった。義大夫で所作を踊るところを浪花節で行うもので、長期興業であったが終わりまで満員の盛況であったという。

太田の叔母(母の妹)がこの近くに住んでいたので、この叔母の口ききで座席を取ってもらい、母と私と叔母の三人で、「一週間替り」の出し物を何回か見にかけた。

(付記) 太田の叔母

母はこの叔母とは仲良しで、時々、諏訪町の叔母宅を訪れた。太田は士族で、格式も私の家よりも上だったそうで、叔母が里方の宮沢に来る時は、お駕籠に乗り、仲間がお供に付いてきたという。

先代は、裁判所で書記をしていた。当主は会社勤めで、叔母は、広い家にひとり家事に過ごしている。

母は妹を気づかかって、野菜もの、その他時々届けていた。

開幕は午後四時半頃であるが、家を出るのは二時頃であった。

入場口に、仲居の小母さんが待っていて案内してくれた。三時過ぎると、お茶やお弁当が運ばれた。叔母の家からも、小型のお櫃に入れた温かい片原饅頭も届いた。今日は、「義士銘々伝堀部安兵衛高田の馬場の仇討」のくだりから始まった。役者は若手で、テンポが早くはきはきして、子供の私にもよく判る大衆むきの芸であった。

幕の打ち上げは九時過ぎであった。

柳座から久留万橋脇を通る頃までは、人足もあり店も明るかったが、これから、無縁所橋へ向かう頃から急に暗くなり、人通りもなくなつた。中川小学校東角の半鐘の電灯が、ようやく足もとを照らしてくれた。角を右に折れ、中川町の「銭湯横丁」を通り過ぎると、ようやく大通りに出た。家々は戸を閉じて、南側の電柱の五燭光が、行先を知

らせているようだ。さつきから五、六間前を、三、四人の若者が、大声で話しながらよろめくように行くのが見える。母もとみ叔母も黙々として……下駄の音ばかりがカラコロとあたりに響く。大通りになつて私はほつとした。そして一生懸命歩いた。街灯に近づくとつれ、私たちの影法師は後ろに長く伸びてものすごく大きくなる。いよいよ電柱の真下になると、影はどこかに消えてしまう。通り抜けるとまた現われ、今度は、私たちの前に長く伸びていく。そして消えてしまう。そこは電柱と電柱の中央の地点で、いちばん暗い所だ。その間は、百米位は離れていたのかもしれない。私がそんなことを考えながら歩いているうちに、栄橋を過ぎ、天元社の前にきた。気がつくと、若者たちも見えなくなった。めいめいの家へ入ったのであろう。番小屋の灯も消えている。江州屋（酒屋）の前を通る……もうすぐ我家だ！

その時、裏の桑畑の方角から、トーン……トーンと地面に何かたたきつけるような音と同時に、ケーン……か？コーン……か？無気味な声が暗闇に響く。何だろう。たしかに動物の声である。その音と声は、私たちの歩く方向に平行して裏路を進む。私は気を呑まれたように固くなった。そして母に、「何だろう？」と小声で聞いた。私は母の袂をしつかり握っていた。「狐だろうよ。」母も小声で答えた。不思議に、新井さんの裏あたりで、声も音もびつたり消えた。

その夜、私は中々眠れなかった。翌朝食事の時、家の人に話すと、精やが事も無げに、「弾正林あたりには菓があつて、狐がいるらしいよ。」と言った。

私は、狐の声をこの時初めて聴いた。そしてそれ以来聴いた事も無い。

## 第二章 私の生家と家族

### 一 私の生家

私は、明治三十四年七月二十四日、新町四十五番地清水玄太郎の長女として誕生した。

私の家は、町の東端を南に折れて天川に続く道と、北に折れて孝顯寺に入る道と、野中方面に通じる道との交差点（四ツ角）の北側で、南向きの板葺総二階建の農家である。

町の北側を流れる前つ川は、私の家の西角から、天川通りと孝顯寺方面へと分流し、この点が堰になっていた。

この堰が、夏の稲作期になると水嵩が増すので、ものすごい水音を立てる。流れは澄んでいて、鮒や泥鰌、川がになどが棲んでいた。「水切れ」ともなると、川沿いの大人も子供もみんな出て、魚とりで賑やかだった。時折、大きな鯉を捕えて、得意げに見せびらかす小父さんも居た。

### 二 私の兄たちと妹

私は、兄三人、妹一人の五人兄弟であるが、長兄は、私の六歳の時腸チフスにかかり、病院で死亡した。十月頃のことであった。

私は本家で丹波栗の大粒なのを二個もらい、あまり見事なので仏壇に供えておいた。翌日見ると栗はなくなっていた。

二、四日前から腸を痛めて寝ていた兄は、急に容態が悪くなり、津久井先生の三回目の診断で病院へ送られたのである。私は、兄が「生栗を食べたのではないか」と母に告げたが……何となく気になつてななかつた。

無口で優しい、そして夕食後は奥の部屋でひとり、活花・尺八・木

琴などの稽古に専念し、ほとんど遊びには出なかった兄だが、芳町の清水きぬおばさんの話によると、「物日にはその道の師匠や友人宅に出かけ、帰宅の折には必ず芳町の弟宅を訪れ、床の間の花を活けてくれた」とのことである。

活花は遠州流で、当時使用の花器類は、昭和三十五年頃まで物置に蔵められていたが、区画整理の頃整理されたらしい。

二番目の兄は五歳で夭折。父は、病状が現在の疫痢だったと言つて後々まで惜しんでいた。三番目の兄は、私の生まれる二年前、五歳で清水宗太郎（清水本家）の養子となった。

兄たちの居なくなった私は、ひとりっ子の状態になった。

妹は、明治四十一年七月「七か月児」として生まれた。私が中川小学校に入学した年であった。芳町の大塚さん（助産婦）がとり上げたそうで、産湯をつかわせるのに裸にすると、手のひらの両脇と頭と足に少し出るくらいであったと、父は後々まで笑い話にしていた。

母は肌身離さず付ききりで育てたそうで、私にはかまっていることは出来なかつたそうである。幼い頃は「瘦せぎす」な気難しやで、家中をてこずらせていた。そして、父や母に叱られることも多かつた。

私は、そんな妹の気持ちがどうしても理解できなかつた。只、傍観するほかなかつたので、当たらず触らずの態度でいた。妹は、なぜかそんな私をかえって信用していた。旅行の帰りに買ってきたお土産を、細かく説明して渡すと、じっと聞いていて、宝物のように大切に取扱っていた。そして私の言うことは何でも素直に受け入れた。

### 三 私の父

―夜なべの時間―

父は、暇ある折はいつも本を読んでいた。

農家では、農閑期に、「夜なべ」といって夕食後のひとときを明日への準備やその日の残り仕事の仕上げに当てた。

男の精やは藁仕事

母ととみ叔母は針仕事

明かりはランプなので手元が暗く、母はなかなか糸が通らない。（私がそばで応援する。）精やの藁仕事はいつも正確で、縄ないなら三十尋ぐらい、草鞋は三足……正月過ぎると蔴を作っていた。十時になると、きちんときれいに仕上げで片付けにかかる。

父はその仕事で、馬琴作「南総里見八犬伝」や「弓張月」等の続き物を話してくれた。毎晩一節ずつ、ゆっくり感慨深そうな調子で語る。私はそれが楽しみで、八犬士の活躍するところになると、固唾を呑んで聞き入ったものだ。十時になるのがとても惜しかった。

父はまた、一か月遅れの婦人雑誌を求めてきて家の中に読ませた。村井玄斎の健康法や、跡見花溪・鳩山春子・下田歌子などの女流作家や教育家の話も、夜なべの席の話題であつた。

十時になると、お茶を一服しておやすみとする。

―父の趣味―

また父は、俳句や書画を好んだ。私の書取帳の古いものに、先の擦り切れた筆でたくさん覚え書をしていた。

師匠は其角堂永機先生で、通信教育の形式で指導を受けていたそうである。年に一回、伊香保や渋川を会場に、先生をお招きして句会を開き、直接指導を受けたという。

父は、永機先生から「柳影居晋水」の俳名を贈られ、地域の選者をしていた。月に一回ぐらい「円座」が開かれた。私方が会場になり、二十人位の集まりがあつたのを覚えている。

（注）円座とは、俳句の同志が自作の句を発表し、優劣を競う句会の

こと。選者が、床の間を背に中央に座を占め、会員は、選者を中心に円形に座につくのでこの名がある。

父の座る茶の間の本箱には、円座の句集や折々の自作の冊子、永機先生の書状や画集等、たくさん保管されていた。

(付記) 私は、父の遺品はそのままに保存して鑑賞している。

—父の小学生時代—「清水のながれ」による

父は、明治八年九月、十一歳で中川小学校に入學した。

中川学校は、明治七年八月十五日の創始で、中川町四十二番地鍋屋という菓子商を借り受けて開校したもので、(父の話)第一大学区第十七番中学区第八番中川小学校といつて、下等と上等とに分ち、各八級から始まり一級に終わる。当時は、職員八人生徒二百八人、内、男百四十二人、女六十六人で、父玄太郎の教師は、小林鑽太郎といつた。明治十一年九月十二日、前橋片貝町三十二番地に校舎新築し、同年十一月六日竣工移転、翌七日、楯取県令が臨席して開校式を挙げた。(健二注)楯取素彦という群馬県初代の知事 細君は吉田松陰の妹 父玄太郎は総代となつて朗読し、褒賞として半紙数帖を賜つたといふ。

## 褒状

中川小学校下等二級生 清水玄太郎

其方儀学業勉勵殊勝に付 誉置候事

明治十一年九月十五日 群馬県印

(この褒賞状は善助蔵)

—父と養蚕—

農閑期のゆつたりした生活も、三月の種子まきを手はじめに、木の

芽もふくらむ四月に入るとともに、農作業はいっせいに忙しくなる。

養蚕器具の手入れや消毒の準備や、また、桑の新芽につく「かつくい」(桑喰いの訛り)で、つまり、「枝尺とり虫」を拾うのが春先の大きな仕事であった。

五歳頃から、私は、母やとみ叔母について、遊び半分の気持ちで手伝いをしたものであった。

かつくい虫は、色・体形・姿勢ともに桑の小枝にそっくりなので、慣れないうちは見落とすことが多い。牛乳びんや空き缶等に少量の水を入れて、これに拾い込むのである。卵からかえりたては木綿針ほどの細い虫が、蚕の成長と共に大きくなり、蚕の「四齡」の頃になると、拾い残した尺とり虫は、自然の中に蚕以上に大きく育っている。

私はこの虫が大嫌いだつた。四齡期に入ると桑の量も増すので、「桑もぎ」は総動員で、猫の手も借りたい忙しさである。私も勿論手伝うわけであるが、「桑こき」で桑の木の元から先に向かってこくと、桑の葉は気持ちよくさらさらと落ちる。—が、そんなとき、大人の小指ほどに成熟した虫が指先に当たり、滑り落ちて手の甲にくっついて離れない。私はゾーっとして総毛立つた。その気味悪さ……そんな時助けてくれたのは精やで、笑いながら無造作に、尺とり虫をつまみ捻って投げ捨ててくれた。

毎年五月五日前後が春蚕はるごの掃き立て(蚕卵紙の卵が幼虫に孵化したものを毛蚕けごという。毛蚕を、蚕室の蚕かごに羽ぼうきで掃き落として飼育を始めること)であるが、これからの父は、人が変わったように緊張して養蚕に熱中した。

蚕室は、和紙で造つた緞帳とんちやうのようなもので張り巡らし、室の中は、蚕室用の大火鉢に炭火を起こして室を暖め、人の出入りも許さない。「そつと」のぞくと、中から「ムウツ」と暖かい空気が顔に当たる。

掃き立てたばかりの毛蚕に若葉の柔らかい桑を与えるのであるが、ま  
ず揃えた葉を糸のように刻み、これをまた横に刻み、みじん切りにし  
たものをふるいで静かにまんべんなく落とす。これを二時間おきくら  
いに行う。

四六時中目を離さず、夜も熟睡することができないようである。「小  
ばがい」(蚕が一回目の脱皮をするまで)中の桑切は、母が担当して他  
の者には手を出させない。夜間は、時刻を間違えないように目覚まし  
時計をかけておいた。

ある晩のこと、突然大きな声が出た。私は目を覚ました。父が母を  
叱りつけている声だ。母が寝過ぎたらしい。(母も毎晩のことなので、  
疲れていることは私もよく知っている。)母が何か口の中で言ったよう  
であった。父は、手元にあつた目覚まし時計を母に投げつけた。よく  
判らないが、母は泣いているようだ。

私は、こうした父の態度や大声は、かつて一度も聞いたことも見た  
こともなかった。私は布団の中で身を縮めた。高い崖から蹴落とされ  
たようなショックと恐ろしさで、震えが止まらない。そして非常に悲  
しくなった。……とても尊敬していた父が……一回の口論も聞いたこ  
とのない父と母が……

その後私は憂鬱であつた。みんな蚕のためだ。大嫌いな尺取虫……  
家中が十二時過ぎまで休めない……父と母の大きな骨折り……私は、  
大きくなったら——絶対蚕を飼うことをやめると決心した。

私はその後、養蚕をうとむようになった。そして、蚕についている  
いる批評的にもなった。

——豆腐屋のおばあさんと蚕——

私の家の近くに、豆腐屋の老夫婦がいた。おばあさんは、新潟県柏  
崎の人で、私の生まれる十五、六年前、宇都宮の兄を頼って出てきた。

兄の世話で弁護士宅に奉公していたが、世話する人があつて、その土  
地の豆腐屋、川田某の二男と結婚し、前橋に移ってきたそうである。  
落ち着く場所を探しているとき、丁度祖父の隠居所の隣が合っていた  
ので、相談を受けた父は、祖父の了解を得て入居させたという。夫の  
川田清吉は直ちに開業した。以来、この夫婦とは親しい交際を続けて  
きた。その後、新町五十六番地(現在私宅の西隣)に引越し、——私の  
覚えているのは、五十六番地に移った後のことである。——味のよい豆  
腐を作るので繁盛した。

おばあさんは「おいわさん」といって、色白の越後美人で、お歳黒  
の口元が清潔きれに見えた。おばあさんはお店で「煙草」を販売し、かた  
わら日用雑貨品もおいていた。台所の板敷に台を作って菓子箱を並べ、  
駄菓子箱をはじめ生菓子も商っていた。きれいな好きで、いつも白い木  
綿の雑巾を手にしてほこりを拭いてまわった。

このおばあさんが南の縁側むすろに筵むしろを敷き、近所の農家のごみ捨て場か  
ら捨てられた蚕を拾い集め、裏庭の垣根の桑の葉をもぎ取って来て与  
えて蚕の飼育をしていた。それがいつも上出来で、「ずう」になりまゆ  
を作る。おばあさんはまゆを煮て真綿をつくり、一年間の使い用にし  
ていた。

(注)ずう……幼虫が最も成熟した時の状態で、蛹になる前に体が黄  
色つぼく透きとおる。これをずうという。にかわ状の粘液を口  
から吐き出し、空気に触れて糸になり、繭を作り、中で蚕は蛹  
となる。

私は不思議でならなかった。養蚕家の捨てたお蚕が「繭」を作る。  
しかも蚕のことは何も知らないおばあさんだ。やり方は、ただ桑を与  
えるだけであるが、それも切りもせず、気のついた時に、山盛りに小  
枝のままのせておくだけのことなのである。町の養蚕家は共同で教師

を頼み、その指導を受けていた。教師は一日に二、三回巡回して指導をしていたようだ。(宮澤の長男も高山社出身の指導員であった。)

蚕室の温度を一定にするとか、雨のかかったぬれ桑を与えてはいけないとか、夕方むし暑い「いきれる」時間は、空気の流通に注意せよとか、その他「こぼ飼い」の時の桑のくれ方、時間、糞の状態等細かい指導があったようである。

私は、父の作った直径一米もある「大うちわ」で、「蚕の目」のまわりをゆつくり扇いでまわった。空気を動かすのであるから、急激に扇いでは蚕に刺激を与えるので気をつけねばならないというのである。夕方の一時間足らずの間であったが、たまらなく永く感じた。これは、夕方の「いきれる時間」の私の役目であった。

教師の指導を守って全力を尽くして飼育して、結果成績のよい時でも、一かごに十四や二十匹の死蚕が出る。時には全滅ということもあった。一、二齢は無事に過ぎて、三齢頃から元気がなくなり、四眠からおきると体色がどんよりとぶくなり、上簇間際になると全身がむくんで関節がくびれ、桑も食はず大儀そうな顔をして斃たおれてしまうのである。これは伝染病なので、この微候が出ると救う方法はないといわれていた。

そんな時の養蚕一家の惨めさはたとえようもない。泣いても泣ききれない哀れさだ。人目をはばかり、真夜中に「めかい」や「ざま」に積み込んで、そっと畑にいけたり大川に流したりするのである。

私は四年生の頃からその疑問が一層高まった。

○春先ひろい残された「枝しゃくとり」が、雨や風の中でつやつやと成長している。

○「桑子」(蚕によく似た虫で、まだら模様がある)という小型の桑の木にたかる虫が、やはり、雨、風の中で成長し、「繭」をつくつ

ている。

私はそのことにつき、父に聞いてみた。父も幾分不審に感じていたのかもしれない。「大量に飼うのと少し飼うのとでは違うのかもしれない。」と言った。

しかし、この飼いは当分続いた。

(付記) 後年、養蚕の研究が進み、自然にあった方法に移り変わった現在、子供時代の疑問も解消された感がある。

#### ★蚕道具

桑切り機械 木鉢(ずう拾い用の浅い鉢) 桑くれ台 まぶし  
桑摘み爪 笊ざる いろいろ 桑こき機

#### ★蚕このめ

蚕かごの上に筵むしろを敷き、「さんざ紙」の上に蚕が居る。その上に、蚕した(糞)を除くための「あみ」をのせ、桑を与える。蚕は網の上に出て桑を食す。この「かご」を差し込んでおく棚を「蚕このめ」という。

#### 四 私の母

私は、母に対しては何でも相談した。父には言いにくいことも母には相談できた。母は私の言い分を聞いてくれた。

母は明治二十年、父のもとに嫁入りし、祖父から渡された製糸工場の切り盛りに、父を助けて精一杯働いたそうである。

もともと、父は工場の経営は性格に合わなかったため、母はとても気を使った。繭の買入に出ても、途中で俳句の友達に会うと話し込んでしまつて戻らない。繭はなくなるし、女工さんの手は空あくし、大釜の湯はたぎるので、母は気がではなかった。父は夕方になって、空手ではんやり帰ってきたという。

ちようど、製糸の仕事も変換時期に来ていたので、父母は相談のう  
え、農業に転職したのだそうである。

母は気丈な人で、私達姉妹の他に、父の妹三人と、祖父の子二人を  
親代りとなって育て上げた。農閑期には、裁縫は近所のお針の師匠に  
通わせ、父の妹三人については、座繰り（繭を煮て糸を引き出し、枠  
に巻き取る装置）糸あげ（枠に取った糸を、機に移せるように仕上げ  
る）いざり機の織り方等、繭から布に仕上げるまでの一切を自ら教え、  
祖父の子（父の異母妹）とみ叔母については、いざり機は旧式なので、  
バツタン織りの技術を、講習所に通わせて習わせ、修了後、織機一台  
を購入して与えた。家内の仕立物や嫁入り支度まで自分で仕立てさせ、  
他家に嫁して恥ずかしくないよう、厳しく仕込んだそうである。料理  
なども、お秋・煮物、お節句や正月料理等、叔母の味について褒める  
ことは殆どなかったという。叔母たちは、母は難しい人だといって  
いたが、大間々の叔母だけは、いつも母に羨られたことを感謝していた。  
母は、とみ叔母に織らせた一匹（二反）のちりめん、私ととみ叔  
母の羽織りを作ってくれた。叔母のは茄子紺、私のは紫色だった。六  
年卒業の時、私はその羽織を着て賞状総代に出たのを記憶している。  
母はまた、味噌・醤油の作り込みの時期になると、日頃出入りして  
いる日雇の家族や近所の子だくさんの家に、残りの味噌や味噌漬を  
配って歩き喜ばせていた。主人が酒飲みで、その日の米の買えないお  
かみさんたちに口説かれると、自分の貯えから小銭（二十銭か三十銭）  
を渡してやったり、永病みの主人を抱え、子供を育てている家庭を見  
かけると、敷布団の古いのや、私たちの小さくなった着物などを運ん  
でやっていた。そうした人達の中にも律儀な人は、利息だといって、  
二銭〜三銭を時々届けに来る感心なおかみさんもいた。が、大方はそ  
のままになつたらしい。

私は母に付いていき、そうした家々を見舞った。薄暗く、曇もない  
室内でひっそりと暮らしている人達を、とても気の毒に思った。そし  
て、母のしていることを嬉しく感じた。

—四十年ぶりの同窓会—

母逝いて何十年か……中川小学校同級生の四十年ぶりの同窓会が、  
新町公民館で開かれた。みんな、買禄豊かな商人やサラリーマンになっ  
て、私にはどなたも見当のつけようもない。

女性組は毎年集まりをもっている。その心遣いはない。お互いに  
名乗りあつて、昔を語り、現在を紹介しあつていた。

私は寮生活から教員生活へと過ぎ、娘時代のつながりが無い。突然  
四十年前の級友に出会って戸惑っていた。幸い、皆さんから名乗って  
もらって挨拶したが、幼顔さえ思い出せない。

「おせんべや」の小林君、「市会議員」の大島君等は近所の人だ。  
しかし、何より嬉しかったのは、弁護士になった丸山君が、「父が弱  
く寝たきりのとき、二日も三日も満足のものを食べられなかった。そ  
のとき貴女の御母様からお金を時々貸して頂きました。寝着物や、漬  
け物・味噌・野菜なども……深いお世話になった。」と、わざわざ私の  
席に来て丁寧に話を述べられたことであつた。丸山君は、諏訪町で開  
業しているとのことだつた。血色のよくない顔に、背丈のひよろひよ  
ろと伸びた少年時代の丸山君の倅を思い浮かべて、私は感慨深いもの  
があつた。

私たちが育つた幼い頃の世の中……母についてあちこちと困る人の  
家を訪ねて歩く頃、裏通りの四つ角や人通りの少ない家の入り口など  
に、歩くことのできない「いざり」や、盲のやせこけた子供づれの老  
人が、塗りのはげたお椀や小鉢を前に置いて、土下座して物乞いして  
いるのを見かけた。また、狂人（ごんさんという男と矢川という女の



二人がいた)の「ごんさん」が、棒切れを振り回して往還を暴れさまよい、子供達を脅かした。しかし、人々は見向きもしない。自分の生活に追われて、他人のことまで考えられなかったのかもしれない。

### 第三章 宮沢家と清水家

#### 一 宮沢家

「孝顯寺入口」と筆太に書いた文字がかすかに読める標柱に接して、南向きの農家がある。瓦葺総二階、間口七一八間もあろうか……。これが宮沢家で、母の生家である。

長い廊下の格子戸に沿って流れる前つ川の川端には、紫や白、しほりなどの花菖蒲が、五月の暖かい日を受けて色鮮やかに咲いていた。塀の内側には、古木の百日紅がある。ピンクの花は美しい。枝もたわわに咲き誇る。磨き上げたような幹は、古木の貫禄を語っている。蔵の前の植込みは、うつそうとして中はよく見えない。高く繁った櫨は、蟬のすみかで、冬は風よけとなる。

ある日の午後、私は、母が本家の祖母の頼みで叔母と仕事中、三男のK坊のあとについて遊んでいた。しばらく過ぎて、K坊は植込みの奥に入っていた。私は気味が悪いので立ち止まった。K坊は、棒切れで何かいたずらしているらしかった。そのうち、棒で何かつつき出した。見ると、大きい泥鰌どじょうくらいの(細長い虫だが目が鋭い)長虫を十五、六匹かき出してきた。そして、棒の先にぶら下げて、「蛇だぞうーッ」と私を追いかけてきた。私は、おどろして一生懸命逃げたが、間に合わず、とうとう蛇は私の背中に打ちつけられた。私は泣きながら母のところへ飛び込んだ。叔母は怒って、K坊を蔵の中に閉じ込めて鍵を閉めた。

宮沢はこの辺の大地主で、人々は「油屋」と呼んでいた。私は、油屋と呼ぶ訳がわからなかった。母に聞いたら、「母の育つ頃、時期(菜種の収穫の頃)になると油しぼりの作男が、幾日もかかって菜種から油をしぼった。菜種をよく乾燥して細かく砕き、これを蒸して柔らかくなったものを、袋に入れて重しをかけて気長く絞る。製品は食用や灯油として販売した。」と説明してくれた。

母は、先代駒太郎の二女で、現在は弟の忠六が当主であるが、忠六は別に事業を経営しているので留守がちのため、祖母「とも」が中心になって仕事の指図やら交際をすすめている。

家族は、

祖母(母のおかあさん)	とも
叔父(母の弟 当主)	忠六
叔母(叔父の妻)	いね(天川 大島家より)
長男(叔父の長男)	奎太郎(あんちゃんと呼んだ)
二男	清一(二あんちゃんと呼んだ)
三男	甲輔(K坊)
四男	五郎
五男	六郎
長女	てつ(明治四十一年生 私の妹と同年である)

作地が広いため、住込みの作男や通いの雇用人など、いつも十人からの賄いなので、叔母は休む暇もなかった。祖母は、誰よりも母を頼りにしていた。祝儀・不祝儀など、大勢の人寄せの時は、母が取りきって指図に当たっていた。そんな日常だったので、私は、祖母の家を自分の家同様に振舞っていた。

祖母の家は、当時、男の子ばかりものすごく暴れんぼう揃いで、私

などそばへも寄れない。遠くから逃げ腰で見ている。ただ、二男だけは兄さんらしく声をかけたり、桃や梨・栗など出来る頃にはお愛想してくれた。私はそんなことが嬉しくて、二男にはなついていたようだった。

(付記) 先代駒太郎は、初代新町区長を勤めた。

## 二 清水家

私の祖父は、この「油屋」の先々代勇輔の三男として生まれ、元治元年、百軒町三番丁の、士族清水常内の二女美祢と結婚して入籍し、同町百四十一番地に居住したとのことである。

私をとりまく人と家の関係を明らかにするため、祖父母や父母の出所について調べてみることにする。

## 三 祖母

祖父の舅、清水常内は清水家三代の当主で、一男二女を残して妻に先立たれ、小頭をつとめていた関係もあり、細民からの頼みに東奔西走、家庭を顧みるいとまもなく、経済上も貧困を極めたという。

そうした家の切り盛りや弟の世話一切を、祖母美祢は、父常内を助け、形振かまぎらず尽くした。その孝行の行いにより、時の城主松平直克から褒賞され、松平家定紋のある懐中物と、金一封を賜った。(現在、清水善助本家に保存されている。)

常内は、六石二人扶持と頂戴禄八石三斗を受けていた。美祢の結婚につき、頂戴禄八石三斗を与えて、百軒町百四十一に分家されたとのことである。

その後、慶応元年に父玄太郎出生。五歳の祝には、髪を丁髷に結び、小刀をたばさみ、士族のしきたりで祝を行ったそうである。

その時の小刀は、大東亜戦争の際供出させられ、他の三振と共に返すてこなかった。現在、家に保管されている一振は、許可証とともに終戦後程隔て返されたものである。

二男 亀三郎 笹岡家の養子となる(東京)

長女 く に 高村家に嫁す(大間々町)

二女 つよ 鈴木伝吉死亡後増田家に嫁す(市内神明町)

三女 きく 粕川家に嫁す(勢多郡片貝)

明治十二年十月七日、三女「きく」の出産時の手落ちらしく、祖母美祢は、同日三十四歳をもって他界したそうである。

## 四 祖父の再婚

祖父は、祖母美祢の死後、近親の人たちの勧めにより、宮沢祖母の妹、小針谷平三女善子を後妻に迎え、子供等の世話を委せたそうであるが、この人も、明治二十二年病没したとのことである。

明治二十五年十二月、祖父は、百軒町より新町四十五番地に移転した。つまり、私の兄善助や妹あいの生まれ育った家である。

父は、祖母美祢を深く敬慕していた。十五歳の父は、母を亡くした悲しみと自分の将来に対して絶望のあまり、幾度か家出の覚悟をしたとのことである。父の願望は、東京へ出て勉強したかったとのことだった。

老後、父は、当時のことをこんなふうには話していた。「小針から後妻を迎えられてからは、自分の覚悟はいよいよ固くなり、手荷物などまとめ、その機を待っていた。或夜、家人の寝静まるのを待ってこっそり家を抜け出そうとした。そして、妹たちの寝ている脇を通り過ぎようとした。暗がりに、まだ二歳を過ぎたばかりの末の妹の寝顔を覗いて、思わず立ち止まった。後妻の母は、いつもこの子を厄介者扱いに

して、食事の時など、小さな手でお代わりを出すと、ひたたくるように茶碗をもぎ取るのをつらく思っていていた。長男の自分の居ないあとの子たちは、どんなことになるだろう……。そう思うとどうしても足が出なかった。」と……。父は、茶をすすりながら感慨深そうにつぶやいていた。

後年、私の出産の時の「心づかい」は並々ではなかった。ジツと静座して無事を祈っていてくれるようで、私もどんなにか力付けられたことか……。私は幸いに健康であつたので、一回の失敗もなくすんだ。父は、出産後必ずお産婆さんに、「手落ちはないか？」と処置について確かめてくれていた。

百軒町から移転した祖父は、当時、製糸業が盛んになりつつあつたのを目をつけ、「のし買ひ」からはじめ、ついで坐繰り製糸を始め、女工を雇い、町工場を開いたそうである。

#### 第四章 祖父の茶づくり

##### 一 祖父と茶の製造

その後、糸値の暴落により、祖父は工場を父母にまかせ、自分は茶の製造と販売を始めた。苗や種子は、狭山まで出かけて求めてきたとのことである。畑作の間や周りを利用して種子を蒔き、苗を植え、茶の木は栽培に専念し、自分は茶の製造のため、現地に実地修行に出かけたそうである。これ等のことは母から聞いた話である。

こうして新芽も出る頃ともなると、宮沢（本家）の台所に、半坪程の焙炉（乾燥器）を二ヶ所もつくり、茶づくりの準備にかかる。祖父の働いている様は私もよく知っている。

五月に入ると、近所のおかみさんたちと茶摘みの予約をし、五月頃

から茶づくりが始まるのであつた。

やわらかい新芽に、たぎった湯釜の上で手早く蒸気を通す。それを台所に敷いた藁の上にひろげ、急速に冷す。これを、半俵程の炭火の上にかけて焙炉で、手早く休みもなくもみながら、自然の色によりあげる。乾くに従つて、若緑から濃緑に細く仕上がっていく。ちよつとの手も休めない。油断したり手の動きをゆるめれば、製品は茶褐色になり、味も番茶になってしまう。五月の暖かい陽気に、半俵の炭火の上の仕事なので容易でない。みんな裸体になつて頑張る。こんな日が一週間から十日も続く。

丁度春蚕の掃立の時期なので、忙しいなかを、父も仕事の隙を見ては、祖父の休憩時には代つて手伝っていた。

「焙炉」を抱いての茶づくりは、見る目も気の毒のようだった。結局、若い精やが動員され、三人交替で食事や休憩をとるよう、やりくりしているようであつた。

しかし何が幸せになるか予想は出来ないものだ。祖父から指導された甲斐あつて、後々父に代わつて、我が家の「茶づくり」は精やが引受けてやるようになった。そして、味も香りも色も、祖父に勝る上物で、近所の人たちも見習いに来るようになった。

（付記）後年、私の教員時代、この「手製の新茶」を心待ちにしている先生方が、「新茶はまだかネ。」と新茶の出来るのを楽しみにしてくれた。

##### 二 祖父の店

祖父は、父に家業を委せた後は、宮沢本家の真向にある自分名義の三軒長屋の西端の一戸を隠居家とし、店に改造して茶の販売を始めた。そして、晩年はそのかたわら、駄菓子・宝探し・こまなど、子供

相手の簡単な玩具を並べ、凧づくり・竹とんぼや紙鉄砲づくり等、子供達を集めて教え、楽しんでいた。

私も母から五厘銭をもらって、祖父の店へ紋付くじや宝さがしを買いに通った。くじの「外れ」は飴玉一個、一等から四等までは「きんか糖の人形」が当たる。四等は四センチくらいのお人形で、三等になると五センチ位になり、二等は十センチと、丈も巾も大きいものになる。一等になると二十センチ近く、厚さもしつかりとした立派な人形が当たる。しかし一等は一枚だけなので、三等が当たればみんな大喜びだった。私は何回ひいても外れで、時たま四等でも当たると、鬼の首でも取ったように喜んだものだった。そんな訳で私は「くじ」は諦め、専ら「宝さがし」を買っていた。

或日、例のように五厘銭一枚を手にして祖父の店の前に立った。「何にしようかな」と物色していると、奥から祖父が出てきて、「これ引いてみな。」と、菓子箱の上の「とっこくじ」の紙を指差した。私はちょっと考えたが、祖父の言う通りに、残っていた一枚の「紋づけくじ」をもぎ取った。そして祖父に渡した。祖父は広げて、「そら、当たりだ、一番だぞ。」と私にくじを見せた。私はびっくりした。くじを見る余裕がなかった。渡された大黒天の大きな「きんか糖」を抱えて、夢中でうちへ駆け込んだ。そして家中に自慢した。私は天にも昇る気持で仏壇の前に供えた。大黒天は薄紙をかけられたままで、半年近く仏壇の前に笑顔で座っていた。

(付記) 母は、「変わりもの」(日常の食事以外に作るご馳走のこと)が出来ると、いつもとみ叔母に言いつけて、祖父に届けさせていた。私は祖父とは一緒に居たことがなかったたので、祖父のことを「売り屋のおじいちゃん」と呼んでいた。こんな祖父の暮らしも、明治四十五年二月私が小学校五年三学期、

寒い晴れた日、七十歳で終止符を打つことになった。祖父の残した茶碗は、今も古い長持の中にひそんでいる。

〜ひとりぐらしの〜祖父の小遣帳より

明治四十一年十二月

炭一俵	四十六銭
シャボン一個	三銭
うどん一束	五銭
こんにやく一丁	三銭五厘
油揚	三銭(二枚)
だんご	三銭(三串)
マツチ一包	三銭
ランプのほや一本	五銭五厘
さんま一尾	三銭五厘
切身(生ひと切)	八銭
町内費	十九銭(他に記録なく、年末により年額かも?)
足袋一足	十八銭
餅一枚	三十九銭
家賃二軒分	四十八銭(収入)

〈その他、変体仮名のため、難解のものを除く。〉

合計 五円九十八銭也

(付記1) 子供の小遣銭

その頃の子供の小遣銭は、その都度親にせびり、五厘銭一個を貰うのに五回も十回も辛抱強くねばって目的を果たした。

そして五厘銭で買えるものは、

花林糖	一個
振り棒	一個

黒パン 一個  
 黒飴玉(てっぽう飴) 六個  
 大福餅(小型のもの) 一個  
 饅頭(小型のもの) 一個  
 ふかし芋 中位のもの二本、小さいものは三本  
 かた豆(蚕豆を炒ったもの) 三勺位  
 から豆(落花生) 六、七粒  
 煎餅 ぐず煎餅をかうと三角袋に一杯来た。

お節句やお祭りなどの物日には、二銭位のお小遣をかうことができた。

(付記2) おやつ

農家では、雇い人の三時には、「下山饅頭屋」の焼饅頭が最上  
 に受けがよかった。「一串五個さし、二銭なり。」「うまさは、  
 串のままがよく、唇を焼くような味噌味と、横食いするとこ  
 ろにある。」とか言いながら……

おやつで想い出すのは「三時まめや」の小父さんだ。

三時になると時計のように正確に、町の上手から煮豆売りの  
 小父さんがやって来た。小父さんは、二台の桶を振り分けに  
 天秤棒でかつぎ、鐘を鳴らしながら威勢のよい声で、「お豆  
 ……あつたかい……三時豆や」と呼んでくる。私はこの煮豆  
 が大好きなので、母を急かせてお金を持ち、小父さんの近付  
 くのを待ちうけた。

二つの桶には、隠元・青豌豆・蚕豆の甘く味付けしたものと、  
 うす塩のえんどう豆とが、それぞれに分類して容器に入れて  
 ある。磨き込んだ桶の「たが」が金色に光っている。三角袋  
 は、大・中・小と大きさが分量が違い、小袋は五厘で「おた

ま杓子」に一杯、一銭になると中袋で二杯……となる。  
 丁度三時のお茶の時間なので、母は時々容れもの持参で買  
 に出た。この小父さんは、片貝町の人だとのことである。

## 第五章 私の町

### 一 私の町「新町」

県庁前の大通りを東に下り、現在の五十号線に入ると、片貝町、中  
 川町、新町と続く。片貝町から中川町に移る境が急坂になっていた。

この急坂にかかる南側が小高い堤になっていて、小料理屋が一軒  
 あった。(今の英数学館のある位置)軒先にはいつも赤い提灯がぶら下  
 がっていて、その脇にしだれ柳が一本、半ば提灯を隠すように植えら  
 れていた。夜になると、夜遊びの若者たちが遅くまでたむろして、街  
 の噂の種をまいていたという。

小料理屋を背に、中川町の鎮守のある稻荷神社があった。古びた建  
 物であったが、「みかげ」の垣をめぐらし、がっちり構えた風格は赤  
 提灯と似つかぬものがある。春秋の祭には賑わったという。

急坂はこの神社から二十米とはないが、中央が高く両側が一米も低  
 くなっていて、丁度大鼓橋を渡るようなもので、年寄りでなくても  
 ても難儀の坂だった。

坂を過ぎると道はなだらかになり、筋違橋に出る。筋違橋は端氣川  
 に架かり、新町との境になっている。この橋は、後に「さかえはし」  
 と改名された。

新町は東西の街で、東へ四百米程下り、西へ折れて百米足らずで天  
 川村に続く。この一本通りが私の町である。

進んで天川村を通り抜け、関所跡の並木を経て、大島、駒形を過ぎ、

伊勢崎に続く道を伊勢崎街道と言った。当時、前橋の南口の交流はこの道を往来して行われ、並木は前橋への入口になっていた。

—交流風景一—

私はこんな風景をよく見かけた。

その頃、「ためがいっぱい」という味のよい南瓜があった。甘くてほくほくして、「砂糖いらす」ともてはやされた。大島あたりのためがいという所が産地だそうである。五、六個を縄で結え、運送ぐるまに積んで、上町へのぼって売りに行く農家の小父さんを待ち受けていたおかみさんたちが、無理に足を留めさせ争って買っていた。

その中に母もいた。

—交流風景二—

正月二日の初荷には、朝の暗いうちから、運送ぐるまに米俵を山と積んで宝舟の紙旗を林のように押し立てて、五、六人の若者が、威勢のよい掛声をかけながら上町めざしてのぼっていった。前の掛声が消えぬうち、後から後から続いていた。

お正月には欠かせない初売りの風景であった。

二 町の暮し

前橋は生糸いとの町といわれていた。

この町の資産家は、生糸いとまゆを業とした商人であった。農家も養蚕を主とした農業経営であった。従って、農家の年間収入源は養蚕にかかっていた。

米麦の主食を除いた、大根・人参・芋類等の野菜は自家用程度で、出荷する程の生産はされなかった。まして、梨・ぶどう・桃等の果物に至っては殆ど作られず、庭木や、屋敷内に昔から伝わる自生の桃や柿・あんず・びわ・栗などが熟れると、若者や子供達を喜ばせていた。

日常欠くことのできない味噌や醤油は、共同研究で自家製のものを使った。発酵の素になる糶作りは、素人のこととどここの家でも苦心をしたそうである。

町でも、「店持ち」の商人や手に職のある職人などは、生計は豊かに見えたが、そうした力のない家庭では、子女を製糸工場に働かせ、他出のかわらない主婦は、自宅で子供をみながら坐繰りの糸ひきをした。裏通りを行くと、どこの家でも坐繰りの音が聞こえた。一日中、女の人によく働いた。一家の主人は、養蚕期の日雇い仕事が主となっていた。中には、年末のうちに一年間の雇用の予約をして、収入の安定を図る者も多かった。しかし、お正月から三月にかけての農閑期には農仕事もなく、また、新繭の出るまでは、繭の不足から、主婦の仕事の坐繰りの糸とりも休みの日が多くなる。こうした時期の人たちの暮らしは貧しさを極めた。

—屑紙ひろい—

古びた箆を背負い、道路や路地裏を歩き回り、紙屑や金物等を拾い集め、夕方やっと、仕切やで僅かなお金に換えて帰る。家には子供が待っている。

とても、現在では考えられないような事実であった。

—古もの買い—

「ごぜん箆」をかういで家々をまわり、「お払いものはありませんか。」と、僅かな代金を置いて買い集め、仕切やに渡してお金に換え、その日その日を過ごしていた。

こうして、職のある時期までをつないでいたのである。

(注) ごぜん箆 古物買の人が使った荒目の大きな箆のこと。二個を天秤でになって歩き、買上げたものを入れる。

### 三 町の世話役

― 区長・伍長と呼ばれる人 ―

市の記録によると、明治二十六年に区長制度が施行され、新町の初代区長は宮沢駒太郎（母の実父）で、その後北爪善太郎氏・清水鹿蔵氏等の有力者が就任したそうであるが、私の記憶に親しく残るのは、齋藤銅造氏が区長であった頃からのことである。

新町は、市の行政上「第十一区新町」と呼ばれ、区は八組に分かれ、各組に「伍長」が委嘱されて組の世話役として働いていた。私の父も七組の伍長として永いことつとめている。町の代表、区長は伍長の推薦だそう。

当時は、齋藤銅造氏が推されて永年この職にあった。齋藤さんは人格も農業経営も立派で、模範の人物だと父は尊敬していた。また齋藤さんは、町内だけでなく、東部五ヶ町にも信頼され、東部地区は、新町が中心となって市の行政に尽くすところが多かったという。

### 四 上手の人々と店

― 北側 ―

栄橋を渡ると、北側に大十だいじゅうという穀屋があった。品のよい年配の夫婦がお客の応対をしていた。店は狭く、何も置かないが、裏手に広い仕事場があって、北爪さんの水車に通じていた。

その東隣が奥貫という和菓子屋である。おかみさんは脊せの高いスマートな人で、お愛想がよく、客を引きつけて商売上手といわれていた。清潔な手拭を二つ折にして肩にかけているのが、おかみさんの顔をいつそう小ざれいに見せた。主人は菓子職らしく、がっちりした口数の少ない人だった。町でも目立った生菓子屋だったので、甘いものの好きな母は通りがかりに立ち寄って、何かしら求めてきて、私たち

を喜ばせた。

菓子屋の隣はランプ屋で、町で只一軒の専門店である。ランプの「ほや」・芯・ろうそくなど、ここまで買いに来なければならぬ。私は母の言い付けで、時々ローソクなど買いにきた。色の黒い、目は細いが妙に光る瘦せぎすの主人が、無愛想に品物を突き出し、左手を出す。私がおそろのお金を渡すと、黙って受け取りお釣りを持ってくる。室の中は、いろいろのランプが天井から吊り下げられてあり、床の間には、台ランプの大型のもの、小型のもの、きれいな模様のあるものなど、雑然と置いてある。奥が深いので中はうす暗い。その暗がりから出てくるおやじさんが、私はとても無気味に見えた。

その頃、ランプのほや磨きは、仕事から帰った父が引き受けてやっていた。私はそばで、父の手先をじっと見つめていた。石油の臭いが鼻を突く。曇りがあれば明るさに関係するので、父は、石油のついた布で、夕暮れの空に何回も透かして見ながら丹念に磨きあげていた。

（付記）明治三十九年九月、前橋市中に電灯が引かれ、私の町にも付設されて夜がにわかにも明るくなった。その喜びはたいへんたものであった。

その際、我が家につけられた電灯は「五燭灯」がただ一つだった。私の家では、八畳四室と広い台所を照らすので、とてつもない長いコードを付けた。そして、それをあちらこちらと移動していた。私はもの珍しく見ていたのを思い出す。

電灯の出現によって、ランプの問題も解消された。

当時の照明器具で保存されていたもの（昭和四十年頃まで）

☆がん灯 ☆台灯 ☆燭台（ろうそく立）

☆弓張りの提灯 ☆馬上提灯

ランプ屋の隣は精米所である。

精米所を設置したのは、北爪和助という町の有力者で、明治二十三年、広瀬川の堰から水を引き入れるための水路「土手川」を作り、町内の前つ川に合流させ、大仕掛に精米業を始めたという。土手川は、現在の朝日町二丁目、市営住宅道路沿いにあった。

精米所脇の通路を挟んで隣屋敷が当主善太郎さんの宅で、和助さんの長男である。温厚な人柄は町の信望も厚く、広い屋敷内には土蔵が二棟もあり、町内の書類・物件・その他祭礼用の人形（たけのうちのすくね）等の保存など、町内からの依頼にこころよく、永年に亘り貸してくれたという。家の中は勿論、庭のすみずみまで手入れが行き届いて、庭木や花壇も美しかった。奥さんは町の区長さんの妹で、有名な清潔好きの人とのことである。

精米所に働く人たちは、この主人一家のめがねになつた者で、新潟方面から移ってきた人が多かった。

（付記）この精米所で働き、財を成し、立派に成功した塩崎さんは、「私は水車で三十年間も働いた。朝早くから、手元の見える限り遅くまで。おかげ様で、今では天川町に家屋敷も持ち、土地も手に入れるまでなり、小作米も充分入るようになった。これも北爪さんのお人柄のおかげである。」と。

精米所の盛んになるにつれて、町内には米穀商が目立って増して、それぞれに競争して働くので、どの家も成功した。

北爪宅の隣が町内一番の酒屋である。「泉屋」は、間口五間総二階の瓦屋根のがつちりした建物で、外見も立派な商家と見受けられた。町内の役員会、東部地区の会合等は、いつもこの二階で行われたと聞いている。父も役員だったので、時々出入していたらしい。

泉屋の主人は、新潟なまりの、色白で背は高くないがしまった体格の人で、店では余り見かけなかった。店の切盛りは奥さんが取りしきつ

ていた。奥さんは、主人よりちよつと年上に見える。ほっそり姿で、小麦色の目鼻立ちの整った顔には、「小じわ」がかすかに見えた。御髪も、地味な束髪が上品に見える。よく気のつく人で、客の応対はこの上もなく上手だ。

当時、買物は「つけ」が多く、勘定は盆、暮の二回に支払った。

酒屋には縁の少ない私の家でも、暮が近付くと、母はいくらかの支払いに店を訪ねた。奥さんは、身軽な動作で愛想よく、下へも置かぬもてなしをする。受け取りに添えて、下駄二、三足位の包みを、お礼だといって母に渡し、私にまで紙包みのお菓子をもたせる。

町には下手にもう一軒酒屋があつたが、人々の評判はこの泉屋に集中していた。

泉屋から四、五軒過ぎて、擦糸屋、葉屋、穀屋、鍛冶屋、提灯屋と続くが、この辺から町の中央になるので後の記述にゆずるとして、栄橋から南側へ移ることとする。

—南側—

橋のたもとに根岸という仕出し屋があつた。品物の新しいのが評判で、正月や忘年会等、また町の集会の折にも、この店に注文が集中した。恰幅のよい、お世辞はないが信用のある親方であつた。

（付記）朝日町二丁目の「朝日寿司」の主人は、この店で仕上げたと聞く。

根岸鮮魚の隣が、「菊屋」下駄製造販売店である。

母は、毎年の盆、暮のお仕着せの下駄はこの店で調えた。私も母について店をのぞく。

おかみさんは、六十歳に近い背のすらりとした姿のよい人であつた。にこにこ笑顔を浮かべながら、あれこれと品定めを手伝ってくれた。母親によく似た娘がいて、お茶やお菓子などのお愛想をしてくれた。



主人らしい人は見かけなかったが、年をとった職人が、奥の仕事場で働く音がした。小じんまりした店だが、上物から普段履まで数多くきれいに並べられていて買いいい店で、わざわざ上町(市の中央の商店街)まで行かなくとも充分間に合った。

母の話によると、この娘さんは町内でも珍しい女学校出で、高崎まで通って高崎女学校を卒業したのだとのことである。

(付記) 菊屋の娘の頃は前橋には女学校はなかった。前橋女学校は明治四十三年創立、当時は市立であった。

その後、娘に腕のよい職人上りの養子を迎え、店は活気づいた。私が群女師校を卒業し、群馬郡新高尾高小校通勤時代、履物はすべてこの店で調えた。何しろ六キロもある「バラス」の道を往復するので、朴歯の下駄でも一週間とはもたない。三日も通うと前鼻緒の両脇が欠けてしまう。おばあさんになった主婦が、笑いながら、爪先に薄い金板や押えの釘などを工夫して打付けてくれた。当時は袴に白足袋という服装だったので、足袋も下駄同然で、廃物が茶箱にぎっしり一箱あった。

その後、市内の中川小学校に転任した私は、おかあさんになった娘の三女を受け持つことになった。

こうして、菊屋とは永い交際を続けた。下駄屋の隣に原田の八百屋があった。品物がよく売れる店で、いつもお客が立てこんでいるのが目に残っている。話によると、その後中央に店を移し、繁盛したという。

八百屋と細い路地をはさむ松の湯は、町で只一軒の銭湯で、午後三時頃から開かれた。しもたやの隠居や夜の商売の女たちは、早くから出かけたようである。夕方から夜にかけてはずいぶん混みあったらしい。湯銭は、大人三銭小人一・五銭位で、他に、「ながし」という客の

背中を洗う男がいた。ながしを申し込むと、番台が拍子木を打って合図する。また、洗髪などもここで済ませる女の人もいた。

(付記) 貰い湯

この頃は、親戚や隣同士などで「貰い湯」をした。

農家や商家では、風呂は粗末ながら皆備えていた。しかし経済上を考えてか……風呂を湧かす回数は、薪のあくさんある物持ちの家が多かった。

風呂を湧かした家では常連の家へ告げて歩く。集まった人たちは順番に入湯するのであるが、ここはまた世間話の場ともなっていた。主婦は、湯加減やお茶のもてなしで並大抵のことではない。しかし当時は、それがあたりまえのこととしていたという。

☆当時、農家の常備品とした化粧品

洗面や浴用 糠袋

化粧用 ベルツ水・ヘチマ水・乙女肌

鞆 乙女肌(塗り薬で市販されていた)

## 五 天元社

町の中央北側に、前つ川の流れを利用して水車を作り、江原さんが経営する天元社という製糸工場があった。

天元社は、座繰りの糸から生糸の製品とする工程の、「あげ場」工場だったとのことである。

(付記) 祖母の弟宗太郎は、明治十一年、大宮警察署第一屯所詰終了後巡查を辞め、当時、製糸原社敷島組が組織されたので、一株二十五円の株を五株出資して入社した。

明治十七年、蚕糸組合員として、研究のため、江ノ島・鎌倉・

横須賀方面を視察し、製糸業の発展に尽くしたのであったが、明治十九年、糸価の暴落にあい、敷島組は解散しなければならなくなった。

そして江原芳平氏に売却され、天元社と改められた。宗太郎は、引き続き天元社で勤めることになったとのことである。

—江原芳平氏—

嘉永元年、新町に生まれ、明治十九年頃、前橋製糸原社（敷島組）の破産によりこれを買収し、天元社を新町に設立して輸出生糸の改良に努めた。また、上毛物産会社を設立し、次いで明治四十四年には貴族院議員となり、前橋の財界での重鎮をなした人である。

或日、斎藤銅造氏が一枚の短冊を手を父を訪ねて来られた。そして、「江原芳平氏から依頼されたのであるが、氏は本年喜寿を迎えられた。記念に知人たちに贈りたいとのことであるが、氏の作を読んで欲しい。」と斎藤さんからの申入れである。父は一筆入れて斎藤さんに差し出した。

作品は、

背なに彦 手に孫ひいて 喜の祝

米の祝に やしゃ子待ちけり

背なに彦 手に孫ひいて 喜の祝

米のむしろに やしゃ子まちける

父は、「江原さんらしい詠ですな。」と言ってにっこりした。斎藤さんもこれに和して、しばらく話して帰られた。

江原氏 昭和三年享年八十歳

(付記) 父と斎藤さん

当時父は六十一歳、斎藤さんは三歳年上で六十四歳であった

が、町の役を退いてからは一層深い交際が続いていた。父は、一週間も無沙汰が続くと、「斎藤さん、しばらく見えないな。」と言って出かけて行く。斎藤さんも時々我家にお見えになった。そんな時、父はとても嬉しそうだった。

寒い冬の日も炬燵には招じなかつた。八畳の間に「手炙り」をすすめ、二人とも座布団に正座して、掛軸の紹介やら、作者についての履歴やエピソード、また、その時々自作の俳句等取りかわし、楽しそうに話していた。父の活き活きした表情は忘れられない。

私も、父と共に斎藤さんを心から歓迎した。お茶うけは、菓子類にはあまりお手をつけられなかつたが、手料理の野菜の煮付けや、油菜のおひたし等をすすめると、よろこんですっかり召し上がった。

昭和十七年、父は喜寿を迎えた。十一月十五日、近親が集まり、ささやかな祝宴を開いた。席上、父は記念の色紙を披露した。

「今年 はからずも喜寿を迎えて」と題して

人真似に作りし菊の咲きにけり 柳影居 晋水

色紙には、自筆の垣にみだれ咲きの野菊が画かれていた。当日、記念の朱塗の盃と共に一同に配布した。

—義太夫の会—

私がまだ小学校入学以前のことであった。

生籾の出る前、この天元社がひととき休みになった。この期間を利用して、義太夫大会が開かれた。語り手は、中央から匠格の人や、その弟子の旦那衆が出演した。が、町内の有志も参加して賑やかだった。定刻になるまでには、広い「揚げ場」は略々一杯になった。私も母

に連れられ、叔母や近所の小母さんたちを誘い合わせて出かけた。大  
体、前座は町の旦那衆である。

まず見台については、でつぷり肥った上体に袴かばと衣裳をつけた、い  
かめしい穀屋の小父さんである。一瞬みんな緊張した。同時に拍手が  
湧き、三味線の音が強く響いた。三味線の音は、強く高く、前奏で語  
りの出を促しているようだ。しかしなかなか声が聞こえてこない。そ  
のうちに、「ウツウツ」という低い声が聞こえた。皆大声で励ます  
ので余計わからない。この小父さんは平常の話し声もしわがれて低音  
である。「何か喉に出来てるのかナ。」と私は思った。意味のわからぬ  
うちに小父さんの語りは終わった。それでも聴き手の方は、「今のは朝  
顔日記だね。」と、三味線の調子で承知していた。

次の出演は「酒屋」の小父さんだ。今度は、開幕の拍子木の人が口  
上を述べた。小父さんは、壺坂靈験記を語った。この人は、声をころ  
して呑を込めしてしまうような発声で、顔を真っ赤にしてうなづいてい  
る。やつのことで語り終わって、頭をていねいに下げた。

いよいよ師匠の番だ。みんな水を打ったように聞き入った。さす  
がに、中央からの旦那衆の語りは素晴らしかった。三味線の音もさえ  
て場内に響き渡った。

おかげで私も、お染久松や仙台秋など、幼いくせに覚えて口まねし、  
皆を笑わせた。

## 六 日赤病院

大正二年三月、日赤群馬支部病院が設置された。

日赤病院の敷地には、町の地主大部分が関係していたので、その儀  
性は並々ならぬものがあつた。区長を中心に、町の役員が何回も会議  
を開き、評議しているのを覚えている。現在の本館のあたりに、父の

畑も三段程あつた。父も役員立場にあるので、反対の地主の説得に  
骨の折れたことと思う。結局、東部発展のため、納得することになつ  
たという。

日赤病院の開院により、町の中心は上手から中央部に移ることにな  
る。

## 七 下手の人々

— 六歳時代 —

これまで私は、母の腰巾着のように母に付きまとい、(ひとりでは  
遊べないので)どこへでも連れられて行つた。勿論友達もなかつた。

それが、六歳の頃から母の手を離れ、腕白坊主達のあとについて出  
歩くようになり、近所の家々の裏通りや畑を歩き回って、土のついた  
まま蕪をかじり、仕事場をのぞくことなどがおもしろくあつた。それ  
で、蕪や大根の甘い味や、茄子畑のもぎたての茄子の甘さ、どどめ(桑  
の実)のうまいことなどを知つた。すっかんぼ、つばな(雀のてつば  
うの新芽)の味や山いちご等々……野草の味を覚えたのもこの時期の  
ことである。

町の手下というのは、私の家のまわり、道の北側と南側の家々で、  
親しい人たちばかりであつた。

祖父の隠居所の脇を通り右に折れると、両側に野菜畑をはさんで新  
町南側の裏の通りに出る。細道づたいに進むと、角にヘチマ棚のわら  
屋根の家がある。

— 竹内のおくめさん —

これが、現在私宅の隣、竹内燃料店の先々代の家で、宮沢本家の持  
家であつた。

おくめ小母さんが、脇目もふらず座ぐりを回していた。座敷には、

まだ這い這いの赤ちゃんがえんこしていた。這つても転がり落ちないように、長い紐で柱につないである。

小父さんは、息子と、味噌・醤油を近在に引き売りしているのだそうだ。

おくめさんはしつかり者でよく働き、竹内燃料店の大もとを築いた女丈夫である。

竹内さんの前を過ぎ、右に折れると「籠や」の裏手に出る。主人は仙吉といった。仙吉さんの裏手を左に折れると、七軒長屋の裏手に続く。つまり、新町南側通りの七軒続いた長屋の裏手を歩き回ったことになる。

#### —久保田建具店—

私たちは、この「久保田建具店」の裏手の通りをよく遊び回った。のぞくと、鍋・釜などがピカピカ光って棚にきちんと並べてあった。おかみさんはきりつとした顔立ちで、気性の強さを思わせる。黒髪をくずしたことのない粹な人だった。裏手の方も塵一つなく、土間が板の間のように光っていた。

主人の金さんは無口のまじめな人で、堅い仕事をしたそうである。長男はこの父にすっかり仕込まれ、後を継いだ。私は、「金さん」についてはよく知らない。記憶にあるのは、長男の「豊さん」と母との親子暮らしの頃からのことである。

豊さんは、親父に似合わぬはげしい気性の人で、曲がったことは寸分も許さない。そのきかん気は眼光に現われていた。近所の人々は恐れをなしていた。人の世話をするが、曲がったことはとことんまで追求する。

父も、久保田さんの腕を信頼し、置物の台や下枠などは必ず注文して作らせたが、「下張りをしても絶対に狂わない。親に勝る指し物師以

上の仕事をやる。」と褒めていた。

名人気質とでもいうのか、気が向かなければ仕事をしない。昼間は、頼まれもしないのに、人の世話やおせっかいななどで過ごして、夜になると仕事にかかる。時には夜中まで金槌の音を響かせていた。隣近所の人は迷惑のことだったと思われるが、本人に向かつてはなにも言えなかったようである。

二軒目は、養蚕時期に日雇に来る屑物買の為さん。三軒目は、運送屋に勤める夫婦と男の子三人の家で、四軒目は、女床屋のおしよさんの家だ。五軒目は、小林という手焼せんべい屋のおじいさんと孫（私と同年）の店で、ひっそりと暮らしている二人だった。六軒目は、いつも戸を閉め、夜は帰宅したらしいひとり者。七軒目は、鈴木大工職で、仕事熱心な人であった。

（付記）現在の元吉さんは三代目。先代と同様、仕事一途に働くので、世間の信用厚く、仕事の申し込みが殺倒しているそうである。

#### —宮沢良作とおたきさん—

祖父の隠居所に続く東隣りが、良作さんの屋敷である。宮沢良作という人は、先代勇輔の長男で、私の祖父の兄に当たる。酒癖が悪く、勇輔は後継者とは認めず、自分の隠居面を与えて、若くして隠居させたという。

良作さんは自分で働くことなく、農業は息子夫婦に任せ、自身は、絹物づくめのぞろりとした身づくりで、頸に鉄色のマフラーを巻いていた。時々、酔って真っ青な顔をして本家へ怒鳴り込み、祖母たちを困らせていた。

妻のおたきさんは、しつかりした小母さんだった。和裁ひと通り何でも心得ている。賃仕事のかたわら、和裁の師匠をしていた。農閑期には農家の娘も加わり、教室はいっぱいになった。おたきさんは、い

つも整った身仕度で人に接し、お針子の躰も厳しかったという。

母は、おたきさんを大のひいきにしていた。叔母たちを、みんなおたきさんのお針子にして修業させた。

おたきさんの出所<sup>でと</sup>については何も知らされなかったが、私は、立派な家に生まれ育った人であろうと思っっている。

私の初節句に贈られた「五人囃子」は、おたきさんの嫁入りの時持参したもので、二揃の内の一揃だそう。人形の塗りは立派で、利発そうな上品なつくりである。私は大切に、現在でも三月の節句には、母の古風なものや娘たちの新しいものと一緒に飾り、当時を偲んでいる。

#### — 立場 —

良作さんの家から、新町通りは右へ折れる。

良作おじさんの農場に続いて、桑畑が二段程ある。その隣に、通りに面して「立場」があった。新町はこの立場が境で天川に続く。

立場は、近在から上ってきた「運送引き」や「馬方」が、此所で馬を休ませ、自分も一服したり弁当をつかったりして足を留める所である。

小肥りのおかみさんが相手をしていた。酒肴も商っているらしく、夕方からは居酒屋のような賑わいをみせていた。この主人は、肥満体で力士のような人だった。派手な浴衣のような着物を着ながら、横柄に歩いていった。町の人は「馬喰<sup>ばくろ</sup>」の親方だと話していた。

#### — 柴山孝太郎さん —

立場の向かいが柴山ときちゃんの家である。柴山さんは熱心な養蚕家で、父とはよく行き来していた。ときちゃんのほかに、姉二人弟一人居た。

柴山さんは旧家で、ときちゃんの祖母さんやその前の曾祖母さんの、

古くから伝わる立派な雛人形があった。お道具一式、実物同様に細かにしつかり出来ていた。

当時、三月のひな祭りには、仲のよい友達がめいめいの御馳走を持ち寄り、雛壇の前に集まり楽しい一日を過ごした。

その人々 新井のおとら小母さんとふじちゃん 宮沢のおたきさん 柴山の小母さんと時ちゃん 私の母ととみ叔母

会場はまわり番であった。

そんな時にも、宮沢本家の叔母は参加することができなかった。

本家には、珍しい大昔の木彫りのものや、塗りのよい錦や絹織の衣裳を着けた人形が、八段飾りの雛壇に所狭きまでに並べられた。

柴山家に続く桑園を過ぎると、私の家の向かいの関口米穀店である。

この店の主人は、真面目で町の信用も深かった。町の農家は、予め玄米を託し、必要の時精米にして受け取る。つまり信用委託の方法をとっていた。

関口穀屋には、千代子さんという私より年下の子がいた。遊び相手にはならなかったが、私たちに付きまとは喜んでいた。

或朝、穀屋の店があかない！（戸閉めで商いが休業のこと）大騒ぎとなった。どういうことか、二日たっても三日たっても何の便りもない。夜逃げらしいと人は騒いだ。関係者が集って評議した。その結果、戸を<sup>こ</sup>け、家財道具を競売にした。

父はそのやり方にも納得ができないと言ってせりを中止させ、町内の人で裁判所に勤めている女屋さんに相談した。女屋さんは、「そんなことをしては大変だ。家宅侵入横領の罪で処罰される。」と注意したそう。

一同青くなって、女屋さんに任せ、指示に従ったといういきさつがあった。

—めくらのおきんさん—

私の家の裏庭につるべ井戸がある。この井戸に並んで草葺の三軒長屋がある。

井戸に接して、ひとり住居の盲婆が駄菓子の行商をしていた。勘のよい盲人で、自炊も人並みにできた。夜でも、灯火はあまり使わないが、暗がりでも**純び**の手入れなどもしていた。おばあさんは「寺沢きん」といった。前日仕入れた駄菓子の木箱を、三個程重ねて紺の風呂敷に包み、背負って、杖を頼りに朝出掛けるその姿はあわれに見えた。商いの多かつた時は、夕方ご機嫌で帰ってくる。おばあさんは、時々売れ残りの菓子を半紙に包んで、ねえちゃんにやっておくれ。」と、裏口から私のために届けに来た。母はお礼を言ってお受け取ったが、殆ど私にはくれなかつた。

母はいつも、このひとり住居の老人の身の上を注意していた。

—大谷古物商—

中の家は大谷のおりんちゃんの家である。おりんちゃんの姉さんと兄さんは年期に出ていて、今は、父さん母さんとおりんちゃんの弟の四人暮らしである。

小父さんは、農繁期は私の家で働くが、本業は古物商である。お寺の払い物や近郷の旧家の払い物で、仏像や仏画・置物などが出ると必ず見せに来た。父は気に入ると買い求めてやった。小母さんは働き者で、座ぐりの糸ひきの腕は近所でも一番であった。終日黙々として働いていた。

弟は二歳位と思われるが、目が見えず、歩けない。おりんちゃんの居ない時はずも、軒先の地面に足を投げだして、長い背負紐の端を持ち、これを両手で手繰り手繰りして、最後になるとボンと投げ、また逆に手繰り始める。この動作をいつまでも繰り返して遊んでいる。

時には真剣に、時には泣きながら……小母さんは見向きもしない。座ぐりの音は続く。

私はこの児が哀れでならなかつた。

—前田のぎいちゃん—

東の端は前田儀平さんで、年間殆ど、私の家で精やと働いていた。年の暮になると、前借の相談に父を訪れていた。

以前は江洲屋の隣で煮売りをしていたそうで、料理のことについては自信があるようだった。私の家でも、客寄せ（お祝・年忌のような人を招くとき）の際はこの人を頼んだ。

一日の仕事が終わると、夕食には必ず一本付けた。家では吞手がいないので、お酒の買い置きはない。「金ぐつや」の隣の「江洲屋」まで買いに行くのは私の役目であった。

江洲屋は居酒屋もやっていた。店には縁台が並べてあって、客がかなり立てこんでいる。小皿の肴をつつきながらチビリチビリ呑んでいる爺さんや、すっかり酔って、何やら呂律のまわらぬことを言っている人もある。小母さんは、私の渡した徳利にお酒を注ぎ、「ごころうさん」と言いながら、「貝のへり」ひとはさみを私の手のひらにのせてくれた。

儀平さんの長男は、近在の農家に住み込みで出しているようで、儀平さんの家は、私より年下の女の子と赤ちゃんがいた。肥った丸顔のおかみさんは美声で知られ、おきんさんといった。おきんさんは、田植へのすうとめ（早乙女）には方々から頼まれた。おきんさんの田植唄は、声が遠くまで通るので、すうとめの手は一段と調子に乗り、仕事が始まるといわれていた。

（注）すうとめ（早乙女）

田植の時の植え手のこと。水田の上に揃って苗を植える様子を、

水すましに見立てたもの。

(付記) 田植えは農家のお祝の行事なので、三度の食事の御馳走作りは、その家の女たちの大仕事の一つであった。

—おもしろい新井常吉さん—

宮沢本家の西隣が、父と親交のあつた新井さん宅の通路になつてい

る。  
新井さんの小父さんは父より年上だつたが、時々父を訪れて、世間の出来事を報告していた。大きな声で笑いながら話すので、父もつられて、笑いながら相手をしていた。

腰から煙草入をはずして煙管の雁首に煙草をひねり込み、火鉢で火をつけて、大きく一回吸い込んでフツと吐く。うまそうだ！二回程煙を吐くと、ポンと左手を添えて灰の中に吸い殻を捨てる。そして茶を一服して話が続く。話しながらまた、煙草入の中に右指を入れ、次の動作にかかる。

私は、父の笑い顔、笑い声が珍しく、楽しかった。

新井さんは、宮沢に次ぐこの辺の大地主である。長男を源吉という。当時は東京へ出て働いていたが、後年、帰宅して後を継いだ。源吉さんは晝画や俳句に興味を持ち、父に師事して指導を受けていた。そして、晩年の父の話相手となり、「親とも思う」と深く心を寄せてくれた。

—清水の籠やさん—

新井さんの入口が、「竹や」の彦さんという小父さんの店である。この人は四人兄弟の長男で、弟の三人も皆、町内で竹や(かごや)を営んでいる。

彦さんは、息子に手伝わせながら、店いっぱい竹を黙々と捌いていた。製品は、箆・めかい・蚕かご・桑摘みざる・しょうぎ・ごま等、注文品が奥まで積み上げられていた。

私は、この小父さんの顔は忘れられない。恩人である。私は時々店の前に立ち止まって、小父さんたちの仕事を見ていた。すると、奥からあばた顔の小母さんがにこにこして出てきて、私に、怪我の時のことを細々と話してくれた。

籠やの隣は森村石材店である。いつも三人程の職人が、石磨きや彫刻に取組んでいた。店は、清潔で整理されていて気持ちよかつた。この家に、「ちえちゃん」というとても可愛い女の赤ちゃんが居た。私は時々ちえちゃんを遊ばせてやつて、小母さんに喜ばれた。

石屋のとなりは新の八百屋である。いつも出入りの多い店で品物も大量で新しいが、雑然として、屑も売品も一緒なので清潔の感じがしない。じめじめしている店である。主人が大酒呑みで、店の若者と大声で口論しているのを見かけた。

この店の脇を裏へ抜けると、新井さん宅になる。つまり、ここまでが新井さんの地所である。

八百屋の隣は、中西金轡屋となる。

—金轡屋—

馬の足の裏に打ち付けられてある蹄鉄のすりへつたものを、新しいものと取り替える職業で、主人は中西酒店(江州屋)の弟である。

間口三間程の板敷の土間に馬を引き入れ、二本の柱に馬の手綱を縛りつけ、馬が動けぬようにしておく。そして古い蹄鉄を取り除き、次に爪の手入れをする。その際焼鏝やきあてを使う。真っ赤な鏝に水をつけ、手早く固くなった爪に当てると、物凄い臭いと煙が室内に充滿し、道路まで押出されてくる。馬はびくともしない。私は驚いた。痛くないのか。次に大きな刃物で爪を形よく整え、蹄鉄の坐りよいように切り落とす。蹄鉄をはめて周りに釘を打ち付け、しっかりと止めて仕上げます。私は橋の外に立つて、この物凄い光景に見入っていた。そして主人

に睨まれた。

私の遊びは、夏は魚とりの手伝い、蛭とりの籠もちなど、その範囲は広がった。

今思い出して、この間が、私の世間を知る唯一の機会だったのかもしれない。

## 第六章 小学生時代

### 一 一年生になつて

こんな日々が続く、いよいよ八歳（満七歳）を迎え、明治四十一年中川小学校に入学することになった。

私の嬉しかったことは、急に女の子の友達がたくさん出来たことである。同級生では、竹やのおぎんちゃん、古物やのおりんちゃん、新井のふうちゃん、一年上の柴山のおときちゃん、仙吉かごやのおぜんちゃん等。

私は毎日が楽しくてたまらない。学校から帰ると、家にもよりつかず遊びほうけていた。おはじきは誰よりも強かった。お手玉の四個どりは、ふうちゃんにはかなわない。夢中になつて練習した。

受持ちは尾高きよという女の先生で、とてもやさしい先生であった。私は、一年入学前から大谷の小母さんに、「おりんを一緒に学校へ連れていっておくれよネ。」と頼まれていた。

おりんちゃんは人のよい子で、いつも弟をおんぶして遊びに来た。友達もなく、私をたよりにしていた。

私は、毎朝おりんちゃんを誘いに寄つた。いつも御飯前であった。私は遅刻するのが嫌なので気が気ではない。小母さんは、ようやく出来た炊き立ての麦御飯を茶碗につけ、味噌汁をかけてちゃぶ台の上に

置いた。おりんちゃんは、漬物には手もつけず、ふうふう言いながら一晩食べ終えて私の後を追いかけた。十分か十五分位の間であるが、通りにはもう誰も見えない。私はおりんちゃんを促し促し、駆け足で校門に入ったが、殆ど遊ぶ時間はなかった。

おりんちゃんとはクラスが違うので、帰りは別行動であったが、十日位も続いた。

―読み方の時間―（星と校長先生）

或日、受持ちの尾高先生がお休みになった。

二時間目が読み方の時間である。校長の星野孝太郎先生が教壇に立たれた。今日は「星」の所らしい。

先生は「読める人？」と言つた。一斉に手が上がった。先生は二列目の津村さんを指した。津村さんは元氣よく読み上げた。次に、先生は内容について聞いたらしい。「星の色はどんな色か。」私は、よく知っているので勢いよく手を揚げた。先生は私を指した。私は立ち上がった。「同じ色です。」と答えた。すると、先生はいかめしい表情になり、「ほかに。」とみんなに聞いた。一斉に、「ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ」と手があがつた。先生は立川さんを指した。立川さんは、「ちがいます。」と答えた。先生は私を睨んだ。そして、「おまえはどこを見ているのだ。」と言つた。私は侮辱を感じた。私は考えた。星の色はみんな違うのかな……私にはみんな同色に見えるが……。私は何としても納得ができなかつた。

それからは、縁側に出て夜空を眺める毎日が続いた。そして星の色に見入つた。皆に見えるのに私には見えない。赤もない、緑もない、紫もない。只、光が濃く！薄く！強く！弱く！見えるだけである。それが、夜の空に黄白色に見える。どう見ても虹の色のようには見えない。



私は、四年生頃までその疑問が解けず、ひとり悩んでいた。人に話す勇氣もなかった。

私は一年生入学以来、教科書を読むことをしなかった。教科書を読んでいれば、先生の「問い」の意味もわかったに相違ない。しかし、当時はそんな事を考えることもしなかった。

学校でこんな事があって、二学期も過ぎ、お正月を迎えた。

—マイニチノツトメ—

暮からお正月の行事は、宮沢本家と一緒だったので、「しめ縄ない」は二十八日、三十日の餅搗きなど、大人たちの間をまごまごして見ていた。

いよいよ三学期の始まる七草の晩のこと、私は父に呼ばれた。父は、私の前に一冊の和綴じの帳面を出して、「あしたから、毎日したことをもれなく書いてみな。」と言った。見ると、和紙を二つ折にし、蚕の種子紙を表紙にして作った、厚さ三糎程の手製の帳面である。表紙に、「マイニチノツトメ」と書いてある。私は黙って受け取り引き下がったが、何の意味かも考えなかった。父も説明しなかった。

私は学校から帰ると、まず、学校で行ったことを「マイニチノツトメ」に記し、それから遊びに出かけることにした。

そして、一冊書き終わると二冊目がちゃんと用意してある。この日記は二年近く続いた。毎日これを繰り返しているうちに、宿題のこと、予習のことなど思いつき、遊びに出る時間がだんだん少なくなつた。

二 二年生・三年生時代

—受け持ち 佐原とし先生—

佐原先生はとても厳しい先生であつた。宿題を忘れたり、始業時間に遅れたりして先生の命令に従わないことがあると、半日も廊下に立たされた。みんなよく勉強し、規則を守つた。

—新後閑うめさん—

おうめちゃんの家は天川村で、私の家とはあまり離れてはいない。おうめちゃんは、毎朝決まったように遅刻だ。そのうえ、ぼうぼう髪で顔も洗つてない。先生は怒つて、教室の後ろに半日も立ちんぼうさせておく。ようやく許されても、まず、昨日の汲み置きのパケツの水をつけて髪をとかず。先生は、「小使室の井戸端で顔を洗つて来い。」と命じる。冬は、パケツの水は表面に氷が張つていた。おうめちゃんは、半日もかかつて午後の授業の机につくことが出来た。哀れな姿であつた。

時には、「帰れ」と怒鳴つて、階段から突き落とすこともあつた。そんな時、授業は中断され、みんなハラハラして様子をうかがつていた。おうめちゃんの言い訳は、いつもオドオドしながら、「おご飯が、おご飯が……」と答えていた。

私たちは、先生の厳しさに恐れていた。先生の顔が鬼女のように見えた。しかし、毎日同じことを繰り返しているおうめちゃんにも同情出来なくなつた。

ある朝、おうめちゃんがきれいにお髪を結び、珍しく遅刻もしないで朝礼に出た。今日は月曜日なので、私たち下級生は本校に集まり、全校合同の朝礼なのである。級のみながおうめちゃんに注目した。いつも眉を寄せて、今にも泣き出しそうな顔をしているおうめちゃんが、見違えるように明るい。分校に戻り、教室の席についた。先生が初めてにつこりして、おうめちゃんに「だれに結つてもらつた？」と聞いた。おうめちゃんは、「おっかちゃん。」と低く答えた。

私はとても嬉しかつた。そして……どうしたんだらうと、大きな疑問が湧いた。

—偉い「下山ゑい」ちゃん—

おうめちゃんの近所に、下山饅頭という製造販売の老舗がある。この店の長女がおゑいちゃん、私たちと同級生である。男のような気の強い乱暴者であり、また、町も違うので遊んだことはなかった。

そのおゑいちゃんが、今日はなぜか放課後私を待っていて、一緒に校門を出た。そして、「誰にも話さないでくれ。」と前置きして、歩きながらこんな話をした。「あたいたいネエ、おんめちゃんがかわいそうなんでもネエ、うちのおつかさんに話したら、おつかさんの言うのにはネエ、『お前が新後閑のかあちゃんに話してやんな。子供の言うのには当たり前障りがないから。』って言われたので、昨日、おんめちゃんのかあちゃんに、学校のことみんな話したんだよ。そしたらおばさんは、おんめちゃんの髪にフノリをつけて結ってやっていた。」と……。

私の大きな疑問は解けた。同時に、おゑいちゃんは偉いと強く感じた。

(注) フノリ

着物などの張り替えに使う糊で、浅海の岩にくっついて生える海藻を、干して紙のように平らにしたものを煮溶かして作る。

フノリで固めた髪は、一週間もたつと埃で灰色になる。当時、家業の忙しい商店などでも、折々見かける髪結の方法であった。

その後、おゑいちゃんは私のところへ遊びに来るようになった。

おゑいちゃんは斜視(やぶにらみ)だった。友達は、腕力ではかなわないので、「めっかち、めっかち」と言つて罵つた。「何だとッ!」と言つた時は、もうげんこつが飛んでいる。時には男の子相手に取っ組んでいることもある。「おゑいに腕を振しあげられた。」と、泣いて帰る男の子もいた。

おゑいちゃんは、するめが好物らしい。するめを噛みながら遊びに来た。縁側で、一枚食べ終わるまで、特別話もせず帰ることもあつ

たが、算術のテストの返された時など、用紙を手に飛び込んで来て、「二つ間違えちゃった。」と言つて、私にやり方を説明させ、納得していた。

(付記) 後年、久留万高等小学校へ進学してからも同じクラスであつた。男のように太つ腹で努力家のおゑいちゃんは、私を競争相手にしていたらしい。テストのあつた時や、期末試験の結果などを、浦先生に付きまといつて聞き出し、私に報告に来た。そして、先生にうるさがられたことも平気で私に報告する。

おもしろい友であつた。

— 兼田まりちゃん —

級のみんなが勉強に興味を持つようになって、それぞれ仲良しの競争相手を対象に、テストや成績表を見せ合つて、負けまいと努力した。私の相手は、兼田まりという丸ぼちゃの可愛い子だった。向こうでも意識していて、先生からテストの返された時は、必ず私の点を覗きに来て、むりやり知ろうとする。教室では、まりちゃんは活発で雄弁なので相手にならない。しかし、二人は大の仲良しであつた。

まりちゃんのお父さんは銀行家で、生活も豊からしく、毎日の服装も目立ってぜいたくで、その当時、メリンスの着物や羽織をつけていた。明治四十三年、前橋に共進会が開かれた。誘い合つては、二回も三回も出かけた。まりちゃんの求めるものは、いつも、「皮むき機」できれいにむいたりんごであつた。一個五銭のりんごを、二個もほおばつてご機嫌だった。私はまだその頃、りんごの味を知らなかつた。只、その店の前を通ると、食欲をそそるようなよい香りのするのを覚えていた。

その後間もなく、りんご・夏みかん・トマトなどの果物が、大間々の叔母から送られてくるようになった。

私は、家に帰ってからも、友達と羽を伸ばして遊べなくなつた。「マイニチノツトメ」も、無意味のようでおもしろくない。わざわざ書かなくとも……やめたいナ……と思つたが、父の顔を見ると言い出しにくい。丁度八冊目の終わつた時、思い切つて話してみた。父はうなずいて、「もうその方がいいだろう。」と賛成してくれた。

こうして、二年生、三年生を過ごした。

佐原学級は、学習態度、学力テスト共に優秀で、模範学級であると、先生方の評判になつたとのことである。

(付記)「マイニチノツトメ」——八冊にもなつた日記！

毎日同じようなことの書いてある日記帳、片仮名から平仮名に変わった日記帳、私は大切に保存することにした。

後年、私は、久留万高等小学校より女師付属小学校高等科二年に編入になり、石川淑人先生に教えを受けた。作文の時間、「私の家族」という出題をされたので、私は父について書いたところ、先生から、「マイニチノツトメ」について質問され、是非見たいと言われた。私は恥かしかつたが差し出した。石川先生は、その後何回か家庭訪問に来られ、父とも話していたが、日記帳はそのまま返してもらえなかつた。私も、必要ないので忘れていた。

—三年生の学芸会—

三年生の学芸会には、私の組から次の三題が選ばれ、出演することになった。

- 1 机のひとりごと
- 2 針の道
- 3 姉と妹

題	目	出演者	摘	要
1 机のひとりごと 教室の古机が様々な子供に扱われた体験談を語る。(教科書による)		兼田まり	私はこれから「机のひとりごと」というお話をいたします。	
2 針の道 ●おはなし 「裁縫(お針)は女子の天職である。しっかりと勉強せよ」という意味を説明する(文指導—先生) ●斉唱二回 げに世の中は衣もおされず 袖、襟あわぬ業なさば己が肩身やせまからん ●席書 「針の道」	高橋はな 矢島りう 他九名	1 一同壇上に整列 2 敬礼(オルガン) 3 高橋はな 私は針の道のお話をいたします 4 矢島 私たちは針の道の歌を歌います 5 清水 私は針の道という字を書きます 6 一同礼 7 私はお話と斉唱二回の済む間に唐紙に三文字書き終り、先生が掲示板に貼り出す 8 私は一同の列に加わる 9 一同敬礼(オルガン)		
3 姉と妹 教科書中のものを劇の形に演出したもの(佐原先生 内川先生組合同) 教科書の文章は新体詩風に書かれた次のような内容であつたと覚えてる。	新沼はる 越中あき 境野ろく 男子組	姉 妹 盲人の女の子 悪い子供大勢(五人)	北風寒き夕ぐれに 姉といもとの二人づれ	帰りの道がわかりません」 姉「そんなわるさを誰がした」

帰りをいそぐ野中みち

「悪い子供が大勢で

ふと道ばたに女の子

わたしの手からもぎ取って

ひとりしくしく泣いている

放った音はしましたが

姉のおつるはかけよって

探すことさえ出来ません」

「何でそんなに泣いている

それを聞くより妹の

おとしものでもしたのか」と

おふみは急ぎ道ばたを

言葉やさしくなくさめる

あちらこちらと探そうち

なみだをふいて女の子

少しはなれた草むらに

「いいえそうではありません

ようよう杖を見つつけ出し

わたしはまえから目が見えず

すぐに拾って取ってやる

杖をたよりに歩きます

二人のゆくえ見送れば

めくらは杖をもぎとられ

二人もうしろ振りかえる！

「ああ、ありがとうございます

二人もうしろ振りかえる！

うれしいこと！」と礼言って

見えぬ目ながら振りかえり

### 三 四年生・五年生時代

—高田金八先生—

いよいよ四年生となり、上級組となった。そして、教室は本校へ移った。

受け持ちは高田金八先生で、群馬師範を出られたばかりの新まい先生である。大まかな、元気のよい先生であつたが、北甘菜郡の御出身とのことで、土地のなまりが気になつた。二年・三年と、厳しい先生に躰られた私たちも、一ヶ月もたない間に教室はのんびり気分になり、規律も学習態度も乱れたようである。

或日、高田先生がお風邪でお休みになつた。代わりに来られた内川先生に、「騒がしい、どうしたんだ。」といつてたいへん叱られた。

内川先生は、三年の時男子組の先生であつた。私は時々、佐原先生

のお使いで先生の教室へ行つたことがある。学芸会には、私の組と先生の組との合同劇も計画されて出演したこともあつて、私たちのことはよく御存じだったのである。

先生の大きな声に一同緊張した……が、先生は不機嫌なお顔で一時間間を終わつて、教室を出て行つた。

—先生の下宿—

高田先生は、下級校舎前の「栗原」という煙草屋の二階に下宿して居られた。日曜日には、級の友達誘い合せて遊びに押しかけた。先生は、迷惑顔もなさらずに相手になつて下さつた。

教室は明るい表情になり、一年間も束の間を過ぎた。そして、いよいよ五年生に進む日も近づいた。「五年生も高田先生の持ち上げ」と聞いて、皆手を打つて喜んだ。

—あゝ！忘れられない唱歌の時間—

教壇の左側に運び込んだベビーオルガンに腰を下ろした先生は、美声ではないが、大きな声でオルガンを弾きながら、私たちに「道をはさんで……」と初めの一節を指示する。私たちは一斉に歌いだす。それは毎時間くり返す歌……

田舎の四季

道をはさんで 畑一面に

麦は穂が出る 菜は花盛り

ねむる蝶々 飛び立つひばり

吹くや春風 袂も軽く

日増し日増しに春蚕も太る

並ぶ菅笠 涼しい声で

うたいながらに 植え行く早苗  
ながい夏の日 いつしか暮れて  
植える手先に 月影うごく  
帰る道々 あと見かえれば  
葉末々に 夜露が光る

二百十日も ことなくすんで  
村の祭りの 太鼓がひびく  
稲は実が入る 日和はつづく  
刈って広げて 日にかわかして  
米にこなして 俵につめて  
家内そろって 笑顔に笑顔

松を火に焚く るろりのそばで  
夜は 四方山話がはずむ  
母が手際の 大根なます  
これが田舎の 年越しざかな  
柵の餅引く ねずみの音も  
更けて軒端に 雪降り積もる

長い斉唱が終わると、一の側から四の側まで側別の斉唱にうつる。次に、「ひとりで歌える者？」ときいて、独唱が三、四人指名されて歌う。終わって全員の斉唱である。その頃、いつも終鈴が鳴る。

こういう授業が一年間続いた。先生は、新しい歌はあまり取り扱わなかった。

そして、五年の新学期からは、女の中島先生が唱歌の担当となった。(付記)卒業後、級友が話し合い、クラス会(四一会)をつくること

になった。

招待の先生は、高田先生(眞下と改称されていた)と決定した。

—五年の教科書—

その頃、教科書は、新しいものを買わずに、予約しておいて上級生から譲ったり、下級生から申込んでもらったりして、古い本を使う風習があった。

三月の末、母から、「本家の叔母からの話だが、『K坊が、本を姉ちゃんに譲りたいって言うんだが、使ってくれるかねえ。』と聞かれたが、どうする。」と問われた。

私は、これまでに古い教科書を使ったことはなかった。同級生の古い本を見ていつも感じることは、

- ・ 表紙がすれてかさかさになっている
- ・ めくりの所が破れて手垢で黒くなっている
- ・ 中の文章の所どころに指紋がついている

そんな事を想像して黙っていた。

翌日、叔母は五年生用の本一式を持ち込んできた。叔母は、「ねえちゃん、K坊が昨日一日かかって、汚れた所をきれいにしたんだよ。使っておくれね。」と言っておいて帰った。

母は、経済上のことも考えているのだろう！私に、本に目を通すようすすめた。私も、一応見せてもらって……と、一冊一冊頁をめくり、調べた。

思っていたよりきれいである。めくりなども、落ちついてきちんとしている。書き込んだ所も、丁寧に消した跡がある。余程気を使ってくれている。どうしようかナ……と思索した。しかし、どう考えても古いものはやはり古いものだ。新しい本をめくる時の感激はない。私

は、やはり自分の本で勉強したかった。

そう決心した私は、母に、「誰かに世話して貰えないかな……」と遠慮がちに頼んでみた。母は割合にすんなりと、「いやならいいよ。今なら誰か欲しい子があるだろう。」と引き受けてくれた。

その後、私はK坊に謝るのも失礼のようで、何となく悪かったという気持ちで過ぎた。

#### 四 六年生時代

— 広羽先生 —

いよいよ最上級生となった。

受け持ちは広羽先生で、痩せ形の、顎のこけたお顔立ちは一見お年寄りに見えたが、しっかりしたベテランの先生だった。

先ず、教室の席次を学力テスト順とし、学習意欲を起こさせた。

私は、二年生以来同じクラスを続けた、仲良しで競争相手の「まりちゃん」と並んで、一の側の最後列に席が決まった。

六年は、分数・少数の掛算、割算とその応用問題……と算術は難解の課程に入っていた。先生はそんな時、余り難しい説明はされず、機械的に暗記させた。先生は、繰り返し繰り返し徹底させる教授法だった。

先生は博学で、地理・歴史・理科・読み方等、どの時間も楽しかった。

— 石村先生 —

図画と書き方は、教頭の石村猛先生が担当して下さった。

石村先生は立派な書家で、校外外の行事の立看板に、見事な揮毫を私たちに見せて下さった。先生は、書き方の時間も、文字の成り立ち・間架・結構の法則や、筆法についても、「永字八法」の指導をされた。

私は、書き方は好きな課目であったが、先生の指導を受け、一層力づけられた。そして、日曜日には、先生の教え通りに一生懸命練習した。

先生は、他校への出品を私に命じ、放課後、教員室で練習と清書をして提出したことも度々だった。

(付記) 父は私に、「日本書道協会の通信教育を受けてみよう」とすすめて手続きをしてくれた。

— 裁縫の先生、原田先生 —

その頃、女の先生方の装いは、お髪は「二百三高地」という束髪で、前髪をすごく高くし、中央に髪をまとめるというスタイルであった。高い人は、顔の長さの三分の二もあるよう思えた。着物は元禄袖で、袴は紺か紫のようだった。

先生は、お髪は高過ぎず、着物は滝縞の元禄袖をきちんと召され、如何にも上品で美しい容姿であった。

先生は、教室に入られると畳の上に正座し、「始めます。」と言われる。私たちは、先生に教えられた通りに、両手を膝の前にハの字に置き、静かに上体を下げる。一息入れて、上体と両手を膝の上に戻す。先生は、丁寧な会釈で答礼され、授業に入る。先生は、授業中の立ち居や歩き方にも注意され、躰をされた。

授業の初めに、必ず針の運び方(運針)の練習をした。そして、

・ 一ツ身単位の作り方

・ 小物、袋物

等、熱心に指導された。

— 充実した六年生時代 —

《教育勅語・戊申詔書奉読》

毎月、十三日と三十日の朝礼の際、児童代表(六年生)一名が、壇

上で朗読をする。

十三日は戊申詔書、三十日は教育勅語

朗読当番は、男二名、女二名。

私は戊申詔書の朗読に当てられ、前夜は、家中の者を前にして何回も練習した。

おもむろに踏み台に昇り、一礼して詔書の写しを開き、最敬礼をして、「朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス」と、出来るだけ大きな声でゆっくり読み上げた。くぎりや間に注意しながら……。終わって写しを閉じ、右手に持って、最敬礼して踏み台からおろる。

初回は心引き締まる思いであったが、二回、三回からはすっかり諦（あきら）んで、練習することもなかった。

この年、兼田まりちゃん、船戸ふくさんは前橋女学校へ、就職組・家事手伝い者を除いた多数の同級生は、久留万高等小学校に進学した。

## 第七章 高等小学校時代

### 一 久留万高等小学校に入学して

—入学はしたけれど—

父は、前から私を教師にしたいと思っていたらしい。「これからの時勢は、女であっても、家内に何事か故障のあった場合、一家を支えられるだけの能力をつけておかなければならない。」と言っていた。

私は小学校の先生になることを念願していたので、父の考えに賛成し、覚悟を決めていた。

その頃、一般世間の人達は、女子は家にあつて働くもので、社会に出て職場を持つことは、生意気になって縁遠くなる、「職業婦人は……」

といって軽蔑する傾向があつた。区長の斎藤さんでさえ、私の進学について、「前橋高等女学校を受験させるように」と父に勧めたそうである。

教師希望の場合、次の条件が必要となる。

県立女子師範学校の入試を受けねばならない。

入試は、高等小学校（二年間）を卒業して、

女師付属の高小、第三学年を終えてから受けねばならない。

これが当時の決まりであつた。

私は、久留万高等小学校に入学することになった。同級生も、就職者と高女入学の二名を除き、全員入学の予定であつた。しかし私は、五年間も中川村の同級で仲良しの競争相手であつた友と別れ、この学校に進むに至つたことを、何とも寂しく、張り詰めた心の弛むのをどうすることもできなかった。

久留万高等小学校は大正二年に開設され、生徒は、桃井・中川・敷島・久留万の四小学校からの卒業生で、学級編成は、男女別各々四学級に割り振られた合併学級であつた。

私は女子組の三学級で、受持は浦まつ先生と決まつた。

クラスの中に、敷島校から入つた中島という生徒がいた。はきはきしてよく気の付く人で、お互いに初顔であるのに、中島さんはすぐ馴れた。中島さんは三学級の級長に選ばれた。そしてよく働いてくれた。

私は、友をなくしたひとりぼっちの、置きどころないうかぬ気持ちで毎日を過ごした。しかし授業はどんどん進む。

—受持ちの浦先生—

先生はかつて、ご主人のお勤めの関係で台湾に居られたとのことで、現地のことについてはお委しく、珍しい話をたくさんして下さつた。

それは、丁度地理で、台湾地方の勉強の時間であつた。当時有名な

台湾バナナについても、現地で自然に熟すまで樹においたものと、内地へ送られ加工したものとでは、味が非常に違うことや、原住民の暮らしや風習についての話も、見たままの説明なので楽しく興味深く聞いた。

私は、実際を見聞している先生の授業の重みを強く感じた。

書き方・作文の時間のこと……「清水さん、書きあがったようですね。」と先生の声があった。私はホッと一息して、「はい。」と答えた。先生は一同に向かって、「お出しなさい。」と言った。みんな待ち兼ねたように教壇に押し寄せた。

作文の時間も、習字の清書にしても、級の皆さんは仕上げがとてても速い。十五分か二十分で書き上げてしまう。私は終鈴の四十分ギリギリまでかからないと仕上がらないのである。私はスローなのかな？

先生は、私の書き上げるのを「提出時」として居られたのかもしれない。

――裁縫担任の松田マサ先生――

浦先生と仲のよい松田先生は、隣教室の女子組四学級の担任で、私たちの裁縫を教えて下さった。

放課後には、毎日のようにお見えになり、浦先生と何やらお話しをしたり、お暇の節は、私たちも交えてお友達のように雑談され、お姉様のような先生であった。

後年私は、女師校卒業後、中川小学校勤務時代に、特に近しくご交際頂いた懐かしい先生であった。

――図画担当の斎藤四郎先生――

先生は、私の町「新町」の養蚕農家斎藤庄太さんの弟で、先生の姉様八重子さんも女子師範出身で、当時、山田郡大間々小学校に勤めて居られた。

先生の図画の授業……二回予定の二回目……前時間には模様の形式について説明があり、独立模様として半衿を画くことになった。

私の考案……濃い紫の地に淡色で菊を大きく五輪浮かせる。花は、黄と白の淡色、中央をピンクにぼかす。

今日は仕上げの時間である。先ず地色を作り、画面におとして太筆でならしたが、先ず地色を作り、画面におとして太筆でならしたが、混ぜあわせた色が紙の上で分離して斑になり、なかなか思うようにならない。個人指導で机間を巡視されていた先生が私の脇に立ち止まり、困っている私に、「ちよつと退いてごらん。」と言われたので、しぶしぶ立ち上り指導を受けた。先生は、斑を利用して地紋を作るべくしきりに筆を動かしている。私は自分で仕上げたくてたまらない。先生は動こうとされない。とうとう仕上げまでしてしまった。

そして放課後のことである。丁度松田先生が来合わせ、浦先生と斎藤先生三人で、全日提出した半衿模様につき、一枚一枚作品の批評を始めた。私たちも、そばで先生方の意見を聞き、作品を見せられても良かった。

どの作品も、淡色の地にあっさりとした画いた失敗のない美しい仕上げである。私の（先生の仕上げた）作品は目立って濃い地なので、先生方の批評の的となった。私は心の中で失敗作だと決めていた。斎藤先生は、「模様画としての立場からだ」と力説して、優良作だとひとり褒めている。松田先生は、「女の目から見ると」と前置きして、反発やら質問するが、斎藤先生はとり上げようとしない。浦先生がそばから、「もうおやめなさい。」とたしなめた。松田先生が私に、「どう思う？」と聞かれたが……私は困った。斎藤先生には申し訳なかったが、地色で失敗した。」とお答えした。

また、先生は水彩画がお得意であった。授業は静物を取り上げて指



導されたが、時々風景写生に出られたそうである。

赤城山を背景に「孝顯寺」を写生に来られたことがあった。仕上げまで一カ月もかかったと言われた。天候・時刻をはかり、同じ状態の時に掛けるのだそうである。その製作中、私は家が近かったので何か先生に呼ばれて、先生のお仕事を見せていただいた。その折先生は、大人に話すように細々と、写生画の要点について話された。私は只々、「こんな絵が描けるようになったらなあ……」と感心して見ていた。

先生の絵は、繊細なタッチで、整った美しい絵であった。

—一学期も終わる—

私は、同級の友や親切な先生方の中で、どうやら一学期も無事過ごせた。

そして成績発表の日、浦先生は、十番までの人名と点数を読みあげた。意外にも私はトップであった。私は耳を疑った。そんな訳はない、努力もしないのに、と半信半疑であった。先生は表を黒板に掲示した。やはり、一番に記されていた。

—学芸発表会—

先生は、二学期の終わりに予定されている学芸会に、私の「席書」を希望されているらしく、何回もお話があり、熱心なおすすめがあった。

先生は、いつも私の清書を先生方に自慢して見せていらっしやう。結局、先生のご希望に沿って、「祝 発表会」の四文字を、丈五尺の唐紙全体に書くことになった。

☆私の席書の経験 尋常小学三年 半紙二枚つづき

〃 五年 唐紙 書初め用

尋常小学六年 唐紙 半切

今回の大文字は経験外のことである。

先ず太筆を探す。父のもの—鯉のぼり用、吹き流し用、両方とも先がすり切れて役に立たない。結局、父は清水井紙店で求めてきた。

席書の当日、父の準備してくれた筆を使用し、充分練習の期間もなく、大テーブルの上に唐紙を広げ、向こう縁の届かぬ字くばりのやりにくい状態で書き上げた。

先生方も級の皆さんもほめてくれた。母も列席して満足のようだった。しかし、私は予想通りで恥かしかつた。土間で書けばよかつた。文字の太さが足りない……と反省した。

—三学期をむかえて—

三学期からは自信もつき、学校にもすっかり慣れて、受験への希望も出てきた。

三学期に入つて、父は私を、女師附属高小二年に編入させようと考えを定めて、町内の斎藤さんに相談したとのことである。斎藤さんも賛成されて、「私から桜井校長に話しておく」との内話が交わされた、と私は後日母から聞かされた。

—級友や先生方に別れる—

三学期も終わり、私は先生方や級の皆さんに別れを告げ、校長室で桜井菊次郎先生にお礼を述べ、母と共に校門を出た。(大正四年三月)

二 女子師範附属小・高等科に編入して

大正四年四月、私は、群馬県立女子師範学校附属小学校・高等科二年生となった。

受け持ちは石川淑人先生、一年生二十名、二年生十五名の複式学級であった。唱歌 中島先生、裁縫 大里先生、先生の先生 島田なつ先生・上原きよ先生。(本校から教育実習のため配属された卒業近い四

年生)

私は、四月八日、母に付添われて職員室で初めて石川先生にお目にかかることになった。先生は、すらりとした長身の体格で、お顔色が白いというよりは青白く、うすい髭を八の字につけて、グレーの少し褪せた背広を着ておられた。先生というよりは、お役所の役人という感じである。

そのあと、私は学級の皆さんに紹介された。級の人達は非常に発表的で、よく話し、よく行動した。誰もが自分よりずっと優れているような印象を受けた。級長の井部ケンさんは、はきはきして敏速で、私から見ると姉さんのようである。私は、経験したことのない雰囲気の中で、孤立したような気持ちでいっぱいであった。

通学の困難なこと―片道が四十五分もかかる馴れない道のりを、下駄履きで、その上、全教科書を包んだ大荷物を抱えて往復する。その負担はたいへんなもので、心身ともに疲れてしまった。こうして幾日かたった。

初めのうちは、遅刻を恐れるために心ばかり焦っていたが、落ち着いて考えてみると、遠い道を歩く場合、急いで走っても長続きはしないので、落ち着いた歩調で所要時間を計り、朝の出発時刻を決め、それを正確に実行することにした。

気持ちゆとりが出来るにつれて、通る道沿いの家々や人々の様子もわかり、俄雨などの時には、呼び止めて傘を貸して下さる小母さんも居た。

同級生の斎藤いんさんは、私と同町だったので、なれるにつれて下校は時々一緒だった。いんさんは、尋常科からの付属生らしく、斎藤先生(久留万校の図画の先生)の姪に当たるそうであるが、私は初対面であった。

私の通学に対する心づかいは、いつかすっかり消えていた。

一学期の半ば過ぎる頃には学校にも馴れて、学習にも自信を持った。発表的で優れて見えた友だちも、時々行われるテストの発表を見ると、予想よりははるかに下位である。

先生の先生はよく指導してくれた。生徒数の少ないのに対して先生の目がたくさんのため、細かい所まで行き届いた注意が与えられる。

私は、付属に転校したことを喜んで毎日を過ごした。

#### ―複式授業―

しかし、私は複式授業について非常に困っていた。それは、地理・歴史・理科の三科目は一年の教科書が使用されていたことである。私は久留万校で終了しているので、繰り返し授業である。反対に、久留万校二年で習うべき内容は、ここでは既に一年で終了していたわけである。

何とかしなければ……と考えて独学を始めた。そして、

☆歴史は、年表を作つて教科書の項目を記入し、内容を記憶すること。(年表をよむことを繰り返す)

☆地理は、地図を作つて色分けた内容を記入する。(地図を読むことにより内容を覚える)

☆理科……物理、化学の類は専ら暗記した。動植物は分類法。(『学生の手動・植・鉱物界』参考)

教室での勉強に幾分余裕があつたので、日曜日は専らこの補充勉強をした。

一学期はまたたく間に過ぎた。期末に保護者会があつたが、春蚕と田植えの忙しい時期であつたので、母も出席できなかった。二学期からは級長に選ばれた。

石川先生は、遠いところを家庭訪問に来られ、父といろいろ懇談さ

れたそうである。私は、先生の御足労を感じて外までお送りした。先生は立ち止まり、町の上手、下手を眺めておられたが、角に立てられた道しるべの「石柱」に目を付けられ、そばに近付いて御覧になった。そして、いつもの特徴ある笑みを浮かべて、「これ、おまえが書いたのか。」と聞かれた。私は「いいえ。」と答えたが、先生は何もおっしゃらず、そのまま帰られた。私は、先生の「問」の意味が分からなかった。

石柱の文字（筆太に）西面「至 群馬県廳 十六丁」

南面「至 駒形 伊勢崎」

東面「至 野中 二ノ宮」

二期は授業の進度も速く、テストも繁く行われた。そして特筆すべきことを知らされた。

今年から二年生も受験できるとのこと！

緊張はたかまるー私は、地・歴・理科の未学習のまとめも、二期中に仕上げたいので毎日努力を続けた。父は私のために、障子二枚の大きな二枚折り屏風を二双作り、だだっ広い八畳間の室に一坪程のくぎりを付けてくれた。

十月の運動会は本校と同じ日に行われ、私たちの競技は本校の出演の間に組み込まれ、徒歩競走に出た。幼稚園のおゆうぎは可愛らしく、好評であった。

音楽は中島先生で、いつもにこにここと美声で教えられた。そして、歌うことの指導に主力を注がれた。

裁縫は大里先生（体格の優れた大柄の先生）で、大きなお声で説明のよくわかる教授法で楽しかった。

みんな、明るく親切な懐かしい、想い出多い先生方であった。

（付記）大里先生は、私たちが女師校に入ってから、活花・茶の湯のお稽古には参加されて、一緒に練習された。

三期となった。教生の先生―中村八重子先生・桑原なみ江先生

### 三 保護者会と発表会

― 謡曲「鉢の木」―

学期の初め、私は教生の先生から、「今学期の保護者会は、授業参観の代わりに皆さんの発表会をするような先生のお考えらしいよ。」と知らされた。

二、三日経て、先生から、二月に開かれるという保護者会についての説明があった。

・ 授業参観に代えて、二年生の発表会をする。

・ 一年生は協力する。

・ その他は前回とおりとする。（懇談会）

そして二年生の発表とは、題目は「鉢の木」（教科書にあって二期に既習のもの）、これを劇に編成して（教科書により）演出するのとこと。

先生からの申し渡しに、みんな驚き、且困った。行動的な友達も、いざとなると只ざわざわするだけで中々まとまらない。私は、やるか断わるかを決めたいのだが、気早な井部さんが早くも人選にかかった。しかし、人選となると、劇としての細かい筋書を決めないうちは出来ないので、一応、今日の結果を先生に報告することにした。そして、配役についての準備にかかった。

― 謡曲「鉢の木」概要について―

北条時頼は、剃髪して最明寺と号し、旅僧として諸国を巡歴した。信濃の国に入って冬となり、降雪時季となったので、一旦鎌倉に戻

る途中、碓氷峠を越えて上野の国に出で、佐野の里まで着いた。

たまたま大雪に逢い、一寸先も見えないさまなので、とある民家に一夜の宿を乞うた。その家の主、佐野源左工門尉常世は、旅僧を最明寺時頼の仮の姿とは知らず、泊めて、秘蔵の梅・桜・松の木を焚いてもてなす。しかも、いざ、鎌倉という時にはすぐ馳せ参じる覚悟をもっていた。

之に心をうたれて時頼は、後に、源左工門を褒賞するというあらすじである。

そこで、出て来る人物と必要な役をあげてみた。

- 1 旅の僧 (ワキ)
- 2 源左工門の妻 (ツレ)
- 3 佐野源左工門常世 (シテ)
- 4 地読み(進行の役) (地)

二回目の相談は、主として配役の人選であつた。私は、責任上、劇の進行と必要人数について、調べたままを説明した。皆さん進んで引受ける者もなく、中々決まらない。大勢の意向をあげてみると、次のようであつた。

ワキ……金子ろく シテ……清水きよ

ツレ……五十嵐りゆう 地……井部ケン

私は「地読み」を希望していたので、井部さんとの役割交換をし申し出たが、皆さんがどうしても賛成してくれない。とうとう多数決で押し通されてしまった。

仕方なく、先生に結果報告と御意見を願つた。先生は一通り目を通して、「このままでよろしい。おまえに発表力をつけるよい機会だ。」と言つて笑つて居られた。

私はすっかり当惑した。たしかに、私は口数も少なく発表的でない。

皆さんのように反射的な行動はできない。いや、むしろ、あんなにあわてて挙手したり行動したりする気持が私には解せない。先生は、いつも私が手を挙げないうちに私を指名する。あれこれ考えたが仕方がない。何とかやつてやれないことはないだろう、と決心した。

— 諸準備にかかると —

学校から一番近い(四人の集まり易い)、金子さんの家の店先を借りて話し合つた。

金子さんの家は、小柳町から広瀬川にかかるひとね橋河畔にあつて、「種子屋」をしていた。店は余り広くないが、たくさんの種子が並べられ、その当時、よい種子を商うので、農家は遠くからここまで買ひに来たという。つまり、現在の金子種苗店の前身であつたのかもしれない。

私たちはうす暗くなるまで話し合つた。

- ◎ 服装 シテ 笠・布の子・くくりスカートを用意する
- ワキ 黒笠・ころも・くくりスカート //
- ツレ 長下げ髪・元禄長着 //
- 地 平常着でよい //

◎ 梅・桜・松の鉢植

◎ 薙刀・木刀

◎ 旅僧を接待する道具・いろいろの枡

居合わせた金子さんのお父さんが、

- ◇ 梅・桜・松の鉢に雪の飾りつけをして貸して下さる事
- ◇ 前日の午後運搬して下さる事

等のことを引受けて下さつた。

☆ 服装については各自工夫して整えること

☆ 薙刀・木刀・くくりスカート（二着は教生の先生より借り受ける）

☆ 接待道具・いろいろの杵は「ツレ」の五十嵐さんの担当とする  
と、大体の舞台上の計画の目安もついたので、先生に報告した。

―台詞の稽古―

私たちは、毎日、本校の体操場で台詞の稽古をすることになった。先生の一言一言を真似するのであるが、思いもよらない大きな声に驚いた。その上、耳慣れない謡曲の発声にはみんな笑ってしまった。そして先生に叱られた。中々先生の要求通りに声が出ない。先生の美声には恐れ入った。先生は仕舞もおやりになつてゐるに違ひないと思つた。慣れるにつれ、みんな真剣に声を張り上げた。先生も根気よく指導して下さつた。そして、台詞も暗記出来るようになった。それから、各自分担だけを練習することにした。  
苦心の甲斐あつて、最後の仕上げの練習もどうやらすんで、いよいよ当日を迎えることになった。

―保護者会と劇「鉢の木」発表の日―

二週間にわたる苦心の結果を発表する日が来た。

出演者たちは、意外に落着いて見えた。保護者のかたも続々集まり、廊下までいっぱいになつた。舞台右側の衝立に、先生筆の題字が堂々たる光彩を放つてゐる。金子のお父さんの三本の鉢ノ木にしつらえた綿の雪も、重そうに冬の空気を思わせる。

次 第

一、先生の御挨拶

二、劇の開始

1 「地よみ」暮の前に立ち、開始と配役紹介をする。

2 「地よみ」衝立の内に入る。（舞台左側）

3 開幕（一年生）舞台中央に妻（ツレ）座り、手仕事の形。

4 「地よみ」そのままの位置で、前記載の「鉢ノ木」のあらすじの前半を読み上げる。

これより旅僧の「出」となる。

ワキ・旅僧 下手より登場（黒のころも、黒のまんじゅう笠、杖のいでたちは共にお寺で借りたとのこと）

「これは一所不住の沙門にて候

我この程は 信濃の国に候ひしが 余りに雪深くなりて候程に

此の度は鎌倉に上り 修行に出ではやと思ひ候

（一息入れてあたりを眺め）

急ぎ候程に これはや上野国

余りの大雪にて候程に この所に宿を借り 泊らばやと思

ひ候……

（旅僧 門に立ち）

いかに 此の屋の内へ案内申し候」

ツレ・妻 （立ち上りひざまづき）

「誰にて渡り候ぞ」

僧 「これは修行者にて候 一夜の宿を御貸し候へ」

妻 「易き御事にて候へども 主の御留守にて候程に お宿は

かなひまじ」

僧 「さらば 御帰りまでこれに待ち申さうざるにて候」と……

（僧 門口に佇む）

妻 「それはともかくもにて候」（妻 門口を出て 主を待つ）

（下手より主の登場）

シテ・主

(粗末な布子につつたけ袴・菅笠を被り 右手で押え 大雪をさける様)

「ああ 降つたる雪かな……如何に世にある人の面白う候らん

それ 雪は鳶毛に似て飛んで散乱し 人は鶴警かくしよちを着て立つて徘徊すべき

(低く声おとす)

あら……面白からずの雪の日や……な……

(やゝおどろき)

主 「この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ」

妻 「さて候 修行者の御入り候が一夜の宿と仰せ候程に御留守のよし申して候へば御帰りまでに御待ちあらうずる由仰

せ候程に これまで参りて候」

主 「さて その修行者はいづくに渡り候ぞ」

僧 「我等が事にて候 未だ日は高く候へども 余りの大雪に

前後を忘れて候程に一夜の宿を御貸し候へ」

主 「易き程の御事にて候へども 余りに見苦しく候程に お

宿はかなひ候まじ此の山ばなをあなたへ十八町程御出で候へば 山本の里と申して泊りの候日の暮れぬさきに只一足も御急ぎ候へ」

(力なく)

僧 「偕々さてさて しかとお貸し有るまじいにて候か」

主 「御痛はしくは候へども 我等が二人さへ住みかねなる体

にて候程に 中々思ひもよらず候」

僧 「あら由もなや よしなき人を待ち申して候ものかな」

(僧はとぼとぼと雪の中に行く 左側の衝立に入る)

妻

(感慨深く声をおとして)

「あさましや 我等かやうに衰ふるも前世の戒行拙き故なり せめてかやうの人に知遇申してこそ後の世のたよりともなるべけれ 然るべく御宿を参らせ候へ」

主 「あら何ともなや さやう思し召さばなど前まきには承り候はぬぞ いやこの大雪 まだ遠くは御出で候まじ 某それ 追っ

付きとめ申さう……」

(主 急ぎ追いかける)

「なうなう旅の人 お宿参らせうなう 余りの大雪に申すことも聞えぬげに候」

地読み

「雪に行く手の道さえ見失い、袖に積もる雪を打ち払ひ打ち払ひ ただ一所に佇みまよふ御様は勞いたはしき御有様なり」

(主はその間に旅僧をいたわりいたわり舞台の中央・位置につく)

(これより問答にうつる)

主 (妻に向つて)

「なう 修行者にお宿は参らせ候へども 何にてもあれ参

らせうずる物も無く候ば如何に」

妻 「折かた節これに粟の飯の候 苦しからずば参らせ候へ」

主 「さらば其由を伺ひ候べし」

主 「如何に申し候 お宿は参らせて候へども 何にてもあれ

聞し召されうずる物もなく候 折節これに粟の飯の候 苦しからずばそお聞し候へ」

僧 「それこそ日本一の事にて候 賜り候へ」

(妻は立ち 客の接待に当たる)

主 「総じてこの粟と申す物は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承つて候に 今はこの粟を以て身命をつぎ候よ げにや盧生が見し栄華の夢は五十年 その一睡の夢のさめしも粟飯かしぐ程ぞかし あはれ げに我も夢にも昔を見るならば慰むることもあるべきに 御覽ぜよ か程まで住み枯れたる古里の 松風寒き夜もすがら 寝られねば夢も見ず 何思ひでの候べき」

(地読み この間に鉢ノ木を舞台に出す)

(間をおき)

主 「あら 笑止や 夜の更くるに次第に寒くなりて候 焚火をしてあて申したく候へども 恥ずかしながら焚く物もななく候に これなる鉢ノ木を焚いてあて申し候べし」

(主 立ち上がり鉢の雪を払う)

僧 「御志はさることに候へども それは思ひもよらず候」

主 「某 もと世に在りし時は鉢ノ木数多持ち候へども かやうに落ちふれては無用と存じ 皆人に参らせて候 さりながらまだ三本持ちて候 梅桜松にて某が秘蔵にて候へども今夜のおもてなしに此木を切り火に焚いてあて申さうずるにて候」

僧 「前申す如くお志は有がたう候へども おこと世に出て給はん時の御慰みにて候間 中々思ひもよらぬことにて候」

主 「いやとても此身は埋木の花咲く世に逢はんことは今の身にては逢ひがたし 只無用の鉢ノ木を御僧のために焚くならばこれぞ誠に難行の法の薪と思し召せ」

(と主 梅桜松を切りくべる)

「よく寄りてあたり給へや」

僧 「お志により寒さを忘れて候 いかにも申し候 主の御名字をば何と申し候ぞ 承りたく候」

主 「いや某は名もなき者にて候」

僧 「何と仰せ候とも唯人とは見え給はず候 何の苦しい候べき 御名字仰せ候へ」

(主 形を改め)

主 「此上は何をかつつみ候べき これこそ佐野の源左エ門常世がなれる果にて候」

僧 「それは何とてかやうな鉢には成り候ぞ」

主 「一族どもに横領せられ かやうの鉢となりて候」

僧 「さらば何とて鎌倉へ御上り候らひて 御沙汰には出でされ候はぬぞ」

主 「運の尽くる所は最明寺殿さへ修行に御出の上は候」

(これより主の動作を交えての物語となる)

「かやうに落ちぶれては候へども 今にてもあれ鎌倉に御大事出でくるならば ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ 錆びたりとも長刀を持ち 瘦せたりともあの馬にまたがり 一番に馳せ参り着到につき さて合戦はじまらば敵大勢ありとても一番に破つて入り 思ふ敵とより会ひ打ちあひ死なん此身の このままならば徒に飢えにつかれて死なん命 無念のことにて候」

(僧 感銘の様にて)

僧 「よしや身のかくては果じ 我世にあらん程又こそ参り候はめ 暇申して出づるなり」

(これより掛け問答 謡曲節づけにて)

主 「名残惜しの御事や はじめは包む我が宿の」

妻 「さも見苦しく候へど 暫はとまり給へや」

僧 「とまる名残のままならば さて幾たびか雪の日の」

妻 「空さへ寒きこの暮に」

僧 「いづくに宿をかりごろも」

主 「今日ばかりは留り給へや」

僧 「名残は宿にとまれども暇申して」

主・妻 「御出でか」

僧 「さらば 常世」

主・妻 「又御入り候へ」

僧 (ひとり言のように心をこめて)

「自然鎌倉に御上りあらば尋ねあれ けうがる法師なり  
かひかひしくはなければども披露の縁になり申さん 御沙汰  
捨てさせ候ふな」

(主、妻共に見送る 僧衝立の裏に去る)

幕(一年生)

地読み

(僧の最後のせりふを受けて)

「旅僧別れを云ひ捨てて出で行く ともに名残や惜しから  
ん惜しからん 後 鎌倉より御召しの発令あり 常世は先  
の言葉を違へず一番に馳参じ 時頼より召されて常世の本  
領 佐野の荘三十余郷を返し与へられ 梅・桜・松の礼と  
して 加賀に梅田の荘

越中に桜井の荘

上野に松井田の荘

『三ヶ所の荘 子々孫々に到るまで相違あらざるべく候』  
との自筆状賜る常世は名譽をほどこして やせ馬にまたが  
り故郷へ引上げたと云う」

幕開く(一同壇上に並び敬礼)

終了

劇は大鳴采のうちに終わった。私は、生まれて初めての経験なので、よくやったものだと思中驚いた。そして、今思い出しても冷汗が出る。先生は、「よくやったな、ごくろうさん。」とねぎらって下さった。

引き続き、先生と保護者との話し合いが行われるため放課となった。今日は、母の顔も見えていた。

四 『梅溪』という号

月曜日に登校すると、教室はすっかり整頓されていた。只、先生執筆の「鉢ノ木」の題字が、後ろの掲示板に張られていて、一昨日の発表会をまざまざ思い出させた。そして、クラスはその話でひとしきりざわめいた。

授業も終わり、放課後の掃除当番も終了した。今日は月曜で、教生指導の始まる時間である。私も急いで、先生方に会釈して教室を出ようとした。その時先生が、「ちよつと待ちなさい。」と私を呼び止められた。先生は、掲示板の「題字」の筆をはずし、筆をとり、すらすらと一筆書き入れられた。なんと! 「清水梅溪」……そして、「どうだ、よい名だろう、褒美にあげよう。」と差し出された。思いがけない出来事に、私は思わず「ありがとうございます。」と言った。

私は、発表会当初からこの書は欲しかった。帰る道々、「梅溪」「梅溪」「梅溪」と繰り返しながら頭の中で呟いた。(私の好きな花、梅の花……)がっちり構えた幹の基。春にさきがけ咲く花は、地味な五瓣の初々しく さわやかな芳香も奥ゆかしい。「梅溪」、号として頂こう!と。

帰宅後、私は父と母に、今日の報告と頂いた「書」を披露した。父



は、「先生は書も一流だ。『梅溪』もよい。」としきりに感心していた。そして、仮表装に仕立て床に掛けた。

## 五 受験勉強

三学期も半ばを過ぎ受験も迫る頃、先生は、受験者（進学希望者）四人―浅川ゆみ・小暮チャウ・五十嵐りゅう・清水きよ―を自宅に集めて、特別指導（まとめ）をして下さった。

◇ 先生宅集合 午後七時

◇ 先生より課題と指導 // 七時三十分〜八時

◇ 課題による自習 // 十時まで

◇ 先生より検討と指導 // 十時三十分

私を除く三人は自宅が近いので、終了と共に帰宅したが、私は先生宅に泊るように申し付けられた。朝食は、奥様が用意して下さいたものをひとりですませ、すぐ登校した。毎日のお弁当も、もちろん奥様が調べて下さった。（奥様は京美人と言われる程の方で、いつも日本髪をくずさず、先生の先生方にも評判されていた。）

私は、学校から帰宅すると夕食をすませ、五時半に家を出て五十嵐さんを誘い、先生のお宅に着く。こうした毎日が十日程であったが、私は、

・ 先生のお宅まで通うのに二時間もかかること（お宅は曲輪町裏通り鐘つき堂の傍であった）

・ 奥様に厄介をかけること（お心づかいを心苦しう思う）

・ 勉強の内容がひとりで充分出来ること

等を考えて、残り少ない時間を惜しくもあり、先生宅のご迷惑も気にしながら過ごした。（只、奥様の作って下さるお弁当は最上においしかった。雪のように白い艶のある御飯、鱈の子、野菜の旨煮、色どり

も美しく考慮されていて、毎日の楽しみの一つであった。）

## 六 入学試験日

大正五年三月、群馬県立女子師範学校 大正五年度第一部生入学試験場入口」と立看板の掲げられた本校の正門を潜った。

高三の上級生と、地方から来た志望者も加わり、百五十五人の受験者数となった。そして、三教室に分かれて、めいめいが全力を傾けて問題と取り組んだわけである。午後は面接が行われた。その際、「発表は、二十五日より郵送により自宅宛に発送する」との申し渡しがあり、午後四時終了した。

## 七 卒業式（小学校一年生時代の「付記」に一部しるす）

三月二十五日、付属小学校の卒業式は本校の講堂で行われた。

一同が着席すると、主事の岡田先生が来賓を案内して入場された。来賓は五人ほどで、右側の来賓席に着席された。

着席された来賓方の前列中央に、久留万高等小学校の校長先生、桜井菊次郎先生が居られるではないか！私は思いがけないことなので驚いた。が、とても嬉しかった。

私は、今日この席で、二年生を代表して卒業証書を頂くことになっている。心をこめてしつかり役目を果たそうと、引き締まる思いでいっぱいだった。

式は、主事先生のご挨拶に始まり、証書授与式に移る。六年生、高等小学校二年生、同三年生の順序で代表に渡された。

二番目に私の名前は呼ばれた。私は、来賓席の中央前列に居られる先生に向かって、お礼の心をこめて深々と頭を下げた。顔を上げると、先生ははつこりされた。桜井先生は私を覚えて下さっているのだ。

式は終わった。私はすっきりした気持ちで教室に戻った。

—先生、たいへんお世話になりました—

教壇に立たれた先生は、卒業後のことなど、訓話と云うか心構えと言おうか、長々と話された。いつも口数の少ない、そして簡潔を好まれる先生が……と思うと、みんなしんみりとした気持ちになって、先生のお話に聞き入った。

そして、ようやく気心も理解出来て、打ち解けた間柄となったのに、級友ともお別れである。大部分の友は、家事や、お稽古事に入るらしい。淡々と別れて行った。

最後まで残ったのは、四人の受験組であった。お別れの時、先生は私に、かつて先生にお渡しした日記「マイニチノツトメ」四冊（小学一年生時代の記）を返して下さった。そして、「二、三日中に受験結果が届くだろう。しっかりやれよ。」とおっしゃった。私は胸がいつぱいになった。（僅か一年間であったが、先生に教えられたことは数知れない程である。）下をむいたまま心の中で、「たいへんお世話になりました。」と頭を下げた。

四人は思い思いに、四人一緒に合格を祈りながら連れ立って校門を出た。

八 待っていた合格通知が諸書類と同封で着いた。

五十嵐さんからも連絡があったので、二人で先生宅を訪れた。先生のお話によると、私たちの組では、浅川さんが残念であったが、三人は、合格者三十五人の中に入った。そして私は五番、五十嵐さんも十番以内の成績で合格したとのことであった。浅川さんの落ちたことは、返す返すも残念なことで、先生の御心痛も察せられてさびしかった。

（浅川ゆみさんは、尋常小学一年から付属で修業して高等科に進んだ。

先生の秘蔵っ子でもあったらしい。）

九 石川先生

先生は、私たちが進学して寮に入ってから、時々寮にお見えになり、励ましの声をかけられたり、週末には、テストの様子など気にか、質問されたり、何かと様子を見守っていて下さるようだった。

一年生の頃は、五十嵐さんと、御年始や夏休みにお宅をお伺いして、寮のこと、上級生のこと、先生や学科のことなど雑談して、先生に笑われたり注意されたりして楽しんだ。

そんなゆとりも、二年生になって、私が学芸部の幹事を命じられた為少なくなり、勉強以外の初めての仕事に忙しく、三人揃うことも稀になってしまった。先生も、その頃から見えにならなくなった。

三年生になって、私は寮の購買部の幹事も兼ねて申付けられた。私は、日曜日も遊んではいられなくなった。（学科の復習や、裁縫・工作物の遅れを補充するための日として）私は、忘れるともなく、考える暇もなく、先生に御無沙汰してしまった。

そして、同室の四年生（教生期間中）から、「石川先生は健康を害されて退職された」と聞かされたのは三月末のことだった。私は驚いて、五十嵐・小暮の二人に話した。

私たち三人は、年度末の休みに揃って御見舞に伺った。先生は少しやつれて見受けられたが、思ったよりお元気で、とても喜んで下さった。

## 第八章 女子師範学校時代

自大正五年四月 至大正九年三月

一 女子師範学校に入学して

大正五年四月、私は群馬県立女子師範学校に入学した。そして、寮生活に入った。

◎ お世話になった先生方―本校の先生―

- ・教育(校長) 奥平 覺治
- ・管理 岡田 与一
- ・漢文 文法 大河原欽吾
- ・博物 君塚康次郎
- ・数学 萱島 徳
- ・英語 本沢 清一
- ・日本史 中倉 はま
- ・物理 化学 大瀧 圭一
- ―舎監室(寮)―
- ・国語(室長) 篠原みやの
- ・数学 中澤 琴路
- ・洋裁 中桐 みへ
- ・外国史 前川 武雄
- ・図工 小山 友矩
- ・書道 内田桑太郎
- ・音楽(ピアノ) 賣間 さく
- ・体育 高野 常政
- ・水彩油絵 幕谷 四郎
- ・音楽(声楽) 山城 てる
- ・和裁 古屋 くに
- ・家庭科 荻原 まつ

◎ 学年担任  
学年担任

一年 萱島先生	大正五年四月、初就職され新入生の私たちの担任をされた。大正五年四月、初就職され新入生の私たちの担任をされた。予習をしていかないと授業に追いつけない。厳しい指導法の先生。
副 中倉先生	石川県七尾の御出身。何のこだわりもない先生は、色白のすらりとした御体形。先生の日本史はわからずかつた。
二年 萱島先生	大正七年、私たちの二年修了の日、三重県の御出身地に転任された。授業時に厳しく、担任としては心配りの行き届いた立派な先生であった。
副 中倉先生	

三年 小山先生	幕谷先生の後任として来られた(図工担当)。先生は木工・金工・粘土・彫刻・写生画・記憶画・投影・透視画等順序を立てて指導して下さいました。熱心な先生で私たちの実力を増した。
副 中澤先生	長野県御出身。舎監室を兼任され、静かな口数少ない上品な先生であった。「数学」は説明をしながら自身でどんだん板書して授業を進める。私たちは復習に主力を入れた。
四年 高野先生	時々「金言」をもって私たちを戒められる「おとうさん」のような先生であった。運動会に体操服姿の全体体操。四年生の薙刀試合の型は、当日の呼び名であった。
副 中澤先生	当時女の先生は「紫色の羽織制服」を着ておられた。色白の先生はよくお似合であった。先生は私たちの卒業後、嫁がれて「三石」と姓が変られたとか。

―三寮十三室―

上級生の指図で、私たちは三寮の十三室に案内された。母の調べてくれた、規定通りの寝具や衣類、その他日用品の荷を解いて、決められた場所にきちんと納めた。

そして、室長さんから紹介されて、私は十三室の一員になった。

四年生 高田なを(室長)

四年生 落合キサ(兎・鶏飼育係)

三年生 丹下八重(音楽を得意とする人)

二年生 岡田ちよ(父君は男師校の画の先生 スケッチブックを

離さない人)

いよいよ明日から学校の授業も始まる。毎日が緊張の続きで、学校と寮の往ったり来たり……時間通りに動くのが精いっぱい……心のゆとりとは寸分もなく、一カ月ほどは過ぎ去った。

そんな或日、体操場の廊下でひょっこり石川先生がお顔を見せて、

みんなどうしているかと気遣われ、「しつかりやれよ。」と力付けて下さった。私は、思いがけない先生の励ましのお声に目がさめるような思いであった。

先生に励まされた私は、心を引き締め日々を過ごした。やがて心のゆとりも出て、お隣の同級生や上級生とも打ち解けられ、寮生活の内容も理解できるようになった。

—お隣の同級生（清水イマさん）と室長（高橋タカジさん）—  
夕食後のことである。

室長の高橋さんがイマさんに、「一年生は、本校の宿直の先生に、『朝のおひげ剃のお湯はお温にしましうか、お熱にしましうか。』とお伺に行くことになっているので、行って来なさい。」と言いつけた。からかわれるのを真面目に受けたイマさんは、早速その夜宿直の本沢先生にお伺いに行った。先生から、「それはお前がかつがれたのだよ。」と笑われたそうだ。イマさんはきまり悪そうに帰ってきた。

## 二 寮生活の仕組

—舎監室長・篠原先生—

先生は舎監室の長老で、学校の伝統を守り、寮生を監督・育成し、一生を独身で通された尊い存在の方であった。私たちの先輩や後輩も、みんな先生の薫陶を受けている。教科は国語を担当されていた。

当時はまだ万年筆は禁じられていたので、筆記用具は鉛筆が大半で、あとはインク持参のペンを使用していた。ところが、先生は毛筆と決められていた。先生の時間は硯を持ち歩くことになるので、不注意の者は、墨汁をこぼして先生に注意されていた。

テストの時間などは、出題の文章を写すだけで二十分は過ぎてしまふ。「気が急かれない」と、毛筆不得手の者たちからの不平は多

かった。先生の意図も分からないでもなかったが……。

先生は、教科書による「読み」「解釈」「書き取り練習」に中心をおき、内容についての突込んだ指導はなかった。従って、質問も殆どなく、やさしい先生であった。

しかし、寮に戻り舎監室の先生となると、別人のように微細にわたって目を通され、その都度注意の言葉をかけられるので、寮生には敬遠されていた。

—寮生の監督・指導に当たる人々—

◎舎監室 寮生の生活を護り、監督・指導に当たる先生五名 室長—篠原先生—

◎週番（舎監先生の補佐）

1 四年生 二名

2 一週間交替とする。

3 期間中は週番室に起用して舎監の補佐をする。

4 主な仕事

・消灯後の見回り……先生と小使と四名

・週末に、一週間に亘る諸々の注意・要望事項を発表する。

—食堂にて—

5 週番日記を提出する。

（付記）週番は、室順に輪番とし、係・幹事等の役を持つ者を除くことになっていたので、私は週番の経験はなかった。

—寮生の食生活にかかわる人々—

◎主任 萩原まつ先生

炊事場

◎釜番

◎料理婦

男子二人

女子三人

◎月番（一カ月交替） 四年生二人・献立作り（案）

・材料仕入（案）

・主任先生の承認を経て実行する。

◎料理婦手伝い（一週間交替） 寮生四人（六人）

・室単位に、放課後、料理の下拵えをする。

—寮の朝—

午前五時半、寮の一日は始まる。

小使の浅田さんが、ゴム裏草履の音をパタパタと、遠慮なしに四寮の廊下を走って来る。起床の鐘を鳴らしに来たのだ。この足音が前ぶれで、気の早い四年生の落合さんは、こっそり寝巻を着替えてしまう。浅田さんは、年の頃は五十歳半ばを過ぎていて、小柄な、しっかりした体格で、左の目がすがんでいる。とても無愛想な人らしいが、私はまだ一言も話したことはない。

「ジャンジャンジャン」、鐘の音に静けさは破られた。一斉に飛び起きて布団をたたむ。（布団は四角にきちんと揃えて、寝巻と枕は上段に置く。）そして、急いで自分の持場に活動を開始する。

朝の作業は ○室内・廊下

叩かけと箒で掃き出す。

雑巾がけ……しっかりと絞った布（手拭

を四折にし、刺したものを）を使う。

乾拭き……くるみを使用して廊下を磨く。

○後架掃除（十三室用便所）

以上の作業の分担は一週間交替とする。

朝の仕事が終わると、洗面具を手に一直線に理装室に急ぐ。理装室と浴室およびこれに続く炊事場・食堂は、寮とは別棟であるが、渡り

廊下で繋<sup>つな</sup>ぎつている。理装室の正面には、縦一メートル横三メートルの大鏡が嵌<sup>はめ</sup>込みになっている。周囲の窓際には蛇口が取り付けられ、コンクリートの流しが続ぎ、洗面用となっている。しかし、朝のこの時間は、うしろ半数の者は顔も写らず、手さぐりで髪を結び、洗面をすませることになる。

ようやく室に戻る……と、午前六時、朝食の鐘が鳴り渡る。皆々<sup>こぞ</sup>挙つて食堂へ。

食堂は、風致園を中心に挟んで、寮の南側にある大きな建物である。いつも百五十人位の食事を賄っている。渡り廊下づたいに炊事場の出入口から入ると、右奥が食堂になっている。炊事場との境は、大きな衝立で仕切られている。

一つの食卓に五人乃至<sup>ないし</sup>六人の席が出来ていて、直径十八センチ、深さ二十センチ位のお櫃が、各台に二個づつ配られている。先ず上級生のものから先にご飯や味噌汁をつけ、一同席に着いて舎監の先生のおいでを待つ。先生の席は食堂の中央で、私たちと向かい合いのテーブルで、お相手はその時の炊事当番の室の人たちが当たる。

「炊事当番」とは―室単位に行われる私たちの炊事実習の機会で、一寮から室順に、一週間この当番をつとめる。献立も材料も方法も全く自由で、室の総意により行われる。と共に、先生と食事を共にし（昼食は除く）、お相手をするものである。

この一週間、室の者は「起床」よりは二十分は先に起き、朝食の料理にかかる。夕食は特に料理の数も多くなるので心遣いが必要になり、私たちには大きな負担であった。

しかし、最後の土曜日の夕食は何でも好むものが作れるので、食欲旺盛の私たちは、お萩・お寿司・うま煮・天ぷら……と、日頃あこがれている様々な料理を一気に作り出す。その熱心さは大したもの

あつた。が、この間の費用はすべて自己負担であつた。

先生が席に着かれると、全員着席のまま、「おはようございます、いただきます。」と朝の食事が始まる。席の中央に座つた者は、両端の人のお替りの給仕をしなければならぬ。

給仕の作法―その方法は、右隣の者がお替り近くなると、中央の者は箸を置いて、お櫃（直径十八センチ、深さ二十センチ）を自分の所に寄せ引き、蓋を取り脇に立てかけ、右の者の茶碗を右手に添えて左手で受け取り、ご飯をつけて右の人に渡す。中央の給仕は、お櫃の蓋をして元の位置に返す。右の者は給仕の所作の終わるまで待つ。二人揃つて一礼し、食事は続く。

食事は済んでも、先生の退場までは席を離れないことになつていた。先生は食事の後、その時々報告や注意などをされた。食事の遅い者は、箸を置いて謹聴するのであつた。

先生のお話は終わった。急いで室に引きあげ、登校準備をする者、予習補足に忙しい者、時間に余裕のない私たちは、少しの間も無駄には出来ないのである。

（付記）間食―おやつ―の出る日

水曜日と土曜日の夕食には、「片原饅頭」二個とか、三村屋の「三色だんご」二串、「田舎饅頭」二個といったような、食事以外の菓子類が出るので、私たちにとつて此の上ない楽しみの一つであつた。

土曜日放課後の共同作業

- ・寮に属している花壇
- ・風致園
- ・校舎内の空地

の清掃

### 三 授 業

―本校生活―

―校長殿（修身・教育担当）―

午前八時登校、ベルが鳴る。

十分、校長殿が静かに教室の入口にお立ちになる。一同起立。先生、教壇に立たれる。一同敬礼。先生、かすかな笑みを浮かべて……答礼。重々しい口調で講義が始まる。一言一句正確に、教育勅語を奉読される時のような口調である。私たちの小学生の頃の振り仮名を記憶しているが、例えば、

元日・感銘・観覧・完全・軍艦・貫通

といった単語を、先生はそのとおりに発音される。板書はなさらず、先生の筆跡を知ることにはなかつた。

期末試験は、教科書のまとめをしつかりして居れば解答できる、素直な問題であつた。

私と一緒に入つた五十嵐さんは、「暗記」に自信を持ち、どの科目も暗記で一貫すると自負していた。試験期間に入ると朝の分担当作業もそこそこに、洗面所にも行かず、お髪の手入れもせず、「暗記」に熱中していたということである。つまり、諦みじめる記憶法を採つたわけである。

校長殿の講義は範囲が広く、文章も内容が複雑なので、暗記することは容易ではないと思う。

こんなことがあつた。試験用紙を提出しての帰り、「今日は、三節目の段落の次に来る始まりの言葉がどうしても口に出てこないで、後が続かず、半分しか書けなかつた。」と私にささやいて残念がつていた。五十嵐さんは、一寮の二室で特別の役も命じられず、勉強一途に努力した精励家であつた。

—岡田先生(学校管理法担当)—

岡田先生は付属の主事先生で、授業以外の時間は本校には居られなかった。講義はとても委しく解説して下さるので、私たちはよく理解することが出来た。先生の授業は、いつも午後第一時間目なので、食事と昼休みの運動の疲れも手伝って、頭の冴えないのが遺憾であった。お声が低く、丁寧に繰り返される説明に、教室のあちこちで不躰にもこっくりこっくりしている者が居る。ともすると、自分もまぶたの弛みを覚えるが、そうした様を見せ付けられると、ぐつと気持の引き締まるのを感じた。

先生は、小暮さん(二寮七室)の伯父さんに当たる。

—大河原先生(漢文・文法担当)—

先生の漢文の授業は楽しかった。

始鈴の合図に、急いで一同が揃う頃は、先生は黒板に向かって板書が終わろうとしている。二枚の黒板一杯に、見事な特徴のある文字で、しかも諳んじて書いて居られる。先生の授業は、すべてこの板書によって進行する。

1 読みの指導

- ・先生は、範読をしながら「返り点」「句読点」を入れる。
- ・新しく出てくる文や句について、急所急所をしっかりと指示する。
- ・斉読

2 文章の解釈

今日の詩は、顔回が敵の野望を見抜いて使者を睨み返すという文章である。

顔回は、中国春秋時代魯の賢人で、孔子の十哲と言われ、孔子の信望が最も厚かった人である。当時、諸国の内部では、諸侯や貴族の地位をめぐる親族間の争いや、また、その陪臣たちの権力

争いが絶えなかった。その中であつて、「徳をもつて人を動かす」賢人顔回が、隣り敵国の野望を退け、使いを睨んで追い帰したという内容であつたと記憶している。

先生の解釈

先生は、文の内容をからだ全体で表現して理解させた。実に、ドラマを見るようであつた。

お顔色の浅黒い、痩せ形でのつぽの先生が、目を輝かせて、怒った顔回が、まん幕を揚げて鋭い形相で敵の使者を睨みつけ、「毛髮天にさかだち……」の場面になると、先生が顔回のように見えてくる。

しかし先生は、こうして、大げさな漢文のおもしろさを教えられたのであつた。

3 斉読

先生のドラマと文意を照合しながら、仕上げの斉読をする。

—君塚先生(博物学担当)—

先生は、博物学教室でいつもコツコツと働いて居られた。

教科について何を質問しても、質問以上の細かいところまで答えて下さつた。熱心な研究家の先生であつた。

一・二年生時代は動植物、三・四年生は礦鉱物、実地に採集・解剖等の指導を受けた。

また、先生は、寮の行事にも参加された。赤銅色のがつちりした先生は、いつも先頭にたつて私たちを指揮された。

—本沢先生(英語担当)—

英語科一年生必須科目、二年生より選択科目

私たち高二から入学した者や地方からの者は、勝手の違う未知の英語の授業にはすっかり当惑した。(高三から入った者は、ローマ綴りや

基礎教授は受けている。先生は、そんなことはおかまいなしで授業を進める。

初め、ローマ綴りを教えた。私たちはABCから入るので必死である。二十六文字とローマ綴りのうちはまだ調子よく進んだ。いよいよ教科書に入る。発音で苦労した。先生の

a pen a book

に真似る。先生は、アではない、エではないと言って怒鳴る。アとエの中間音だと言われるが、そんな音はおいそれと簡単に出るものではないし、先生の発音がア……としか聞こえない。授業の進むにつれ、先生は諦めたらしく、アでもエでも文句なしに進んだ。

寮に戻ってからは、ペン習字で黙学時間の大半は過ぎた。声は出せないで黙読で終わる。

こんな努力を繰り返し繰り返し、一年の三学期には「可愛い赤ずきん」の物語まで読めるようになった。

二年からは選択科目となる。ようやく、苦労してここまでになった英語の勉強を打切るのは如何にも惜しい。どうしようか迷った。洋裁・手芸も重要な科目である。将来を考えた結果、私は洋裁・手芸科を選んだ。

英語科 本沢先生  
選択 洋裁科 中桐先生

必須 和裁科 古屋先生

— 高野先生 (体育担当) —

私は、学業についての好き嫌いという科目はなかったが、小学校の頃から「かけりっこ」「リレー」などが不得手で、運動会は楽しいものではなかった。それが体操を嫌いにさせたのかもしれない。団体遊戯やポロネーズ・薙刀・弓道などの課目は進んで出たが、庭球などの球

戯は、女師校に入ってから好ましくなれなかった。

小学校の運動会で一位になった競技

◎提灯競走……提灯にろうそくの火をつけ半周

◎登校競走……風呂敷に本を包み背負ってかえる

◎スプーン競走……スプーンにゴムまりを入れ一周

◎お掃除競走……たすきをかけ手拭をかむりバケツと箒を持つてかえる

そんな私が、女師に入ってから高野先生に体育の指導を受けることになった。先生は、心の豊かな、隔りを感じさせない人格者であった。

器械体操後の小憩のひととき、こんな話をされた。「あなた方は今、両親の保護を受けて幸せに学業に励んでいる。あなた方はこれから、教育者として実社会に出て働くことになる。あなた方の後ろには、いつも『背景』という影があなた方を価値付ける。今、あなた方は毎日その『影』を習得しているのである。毎日心して、『立派な影』を身につけて卒業してもらいたい。」と、そんな教訓を説かれる先生は父親のようであった。

体育の時間は見学者が多かった。生理期間中の者は記帳して見学することにしていた。が、中には期間を延ばして見学の仲間に入る者のあった……とか。

先生の人となり、私等の上を思う深いお心遣いに、私はどうしてもそんな不まじめな気持にはなれなかった。

— 山城先生 (音楽担当) —

先生は、賣間先生の後任として赴任された。

声楽家の先生は、授業にもピアノはあまりつかわない。すばらしい肉声で、発声・斉唱・合唱・独唱等の歌唱指導に力を入れた。



— 賣間先生（音楽担当） —

入学以来二年間指導を受けた先生は、ピアノを専攻され、オルガン・ピアノの演奏、楽典については特に力を注がれ、教則本についての検閲は厳しかった。

先生はまた、三浦環たまきさんと同級生であったとのこと、夫君、三浦博士の墓に詣で、歌われたという。絶唱「夜のしらべ」を指導して下さった。

また、先生の紹介により、年一回の公開音楽会も開かれ、いつも東京音大生の協力を得られた。そして、こちらの申し入れのとおり、黒木綿紋付・紺の袴（これは私たちの式服姿である。）という服装で出演された。指揮は、外義邦彦先生であった。そして、当時の「赤い鳥」童謡の中のいくつか（まちぼうけ・叱られて・波浮の港・浜千鳥等）も同時に紹介された。

— 内田糸太郎先生 —（一八六一—一九四一）

音楽教育家で、文久元年東京に生まれ、慶応三年前橋に移り、岩神町に住んだ。厩橋小学校第十回の卒業生。明治十六年、文部省の「音楽取調係生」生徒募集に合格し、卒業して母校群馬師範の教師となる。「西洋音楽作曲の草分け」といわれた。その後、東京音楽学校の助教、高崎女学校の教師等を勤めた。小学校唱歌「秋景」の作曲者でもある。昭和十六年没す。

私たちは、書道の先生として昭和五年から同八年の四年間指導を受けた。

内田先生はもともと音楽を専攻されて、音楽教育で知られた方であるとのこと、当時、男子師範の音楽を担当されていた。

先生は香川松石流の書家であった。当時、小学校のお手本は松石先生であったので、私はそのまま先生の教えに溶け込んでいった。

先生の授業は実に巧みで、特別製の大きな太筆に水を含ませ、筆の「あたり」「打ち込み」「右払い」「左のはね」等の筆法について実演された。穂先の向きの時は慎重に、筆の運び速度の場合は掛声かけて、間架、結構も納得の行くまで、みんなを笑わせながら会得させる授業である。私は、文字に対する規則が鮮明になったようで、習字に対する一層の興味を覚えた。

二年生の頃から、先生は私たち二―三名を指名して、特別の文字を指導することがあった。（他校へ出品のためとのことである。）

付属高三から入った同級生の宮田藤枝さんは、鳴雀流（くさかべめいかく書家）の達筆家であると、私は一年生の頃からきめていた。

宮田さんは、練習の域は過ぎて自分のものとなっている。宮田さんの清書は、お手本が松石先生であっても、指導の先生が誰であろうとも、立派な鳴雀の筆法で書きあげてある。

しかし、宮田さんは先生の人選からはいつも外されていた。

その後三年生の二期の初め、私は先生から、唐紙半折に楷書十文字（お手本にある既に練習済の文章）を清書して出すようお願いされた。

私は前々から考えていたので、思い切って先生に宮田さんを推薦した。先生はちよつとお考えのようであったが、「それでは宮田にも書いてもらおう。」と言われ、二人で書道教室に残り、練習することになった。

三回目清書を書きあげた。宮田さんの出来栄は実に立派だった。

鳴雀特有の筆使い、しつかり落着きのある文字。私は感心した。二人でお互いの作を眺めていると、先生が見えて、二人の書きあげたばかりの清書の中から一枚ずつを選んでお持ち帰りになった。

一週間程過ぎた放課後のこと、私は校長室に呼ばれた。急いで校長

室に駆けつけ、扉をたたき入り口に立って礼をした。内田先生が校長殿と何やら話しておられたが、私を見て、「表装が出来た、見てごらん。」と。私は先生の後に二、三步近付いた。校長殿のうしろの壁に、私の清書が軸に仕立てられて掛けてある。思いがけないことに私は言葉も出なかった。内田先生は、「今回、親善作品の提出につき指定を受けたので書いてもらった。」と説明された。校長殿からは、「毛筆はいつ頃から始めたか、特別の先生についたか。」などの質問があった。私は緊張してしまつて、宮田さんのことは何も聞けずに引き下がった。

やはり「流」の違うことが原因ではないのか……惜しいことだと考えながら寮に戻った。

その後、私は幾度か校長室に呼ばれて、校長殿の揮毫のお手伝いをした。そして、先生の直筆を初めて知ることができた。

—校長殿、奥平寛治先生—

学校では、校長さんのことを、「先生」ではなくて「殿」と呼ぶことになつていた。

奥平校長殿は、お顔が浅黒く、頭髮は五分刈り、ごま塩のお髭は目立たぬほどにお顔を引き締めて見せる。御夫人とお二人暮らしのご住居は、学校から百メートル足らずの清王寺にあつて、三大節には文官の礼装で登校されたが、そのお姿は乃木大将を思わせるような風格であつた。

しかし、放課後の運動時間に、「鬼ごこと」や「陣取り」などに参加され、目を細めて私たちを追いかける様は、「やさしいおじいさん」のように入れた。

私は時折、校長殿のお呼びを受けて、校長室で先生の揮毫のお手伝いをした。

立派な硯石に水を注ぎ、墨をすり、一応濃くなつたらテーブルの上

に唐紙を広げ、文鎮で押さえ、再び墨の濃さを見ながら、「よろしいでしょうか。」と先生にお知らせする。先生は椅子からお立ちになり、太筆に黒光りの汁をたつぷり含ませ、穂先を整えて唐紙の上をじつとご覧になつた。と思うと、横書きに力強く筆を運ばれた。

私は、先生の表情と筆の動きとに、息を呑んで見入つた。書き上げられた一行は、気号のあふれる重々しい行書であつた。校長殿の御筆跡は、内田先生とは趣の違う立派さがある。口には表せないが、心を打つ「尊さ」を感じる。

私がそんなことを考え、先生の書にとられていると、先生は二枚目の唐紙を催促された。私は急いで次の用意にかかつた。先生は、「縦書きにしよう。」と言われたので、文鎮の位置を変えた。文字は同じ一行であつたが、「縦書き」は一層引き立って見えた。

校長殿は筆を置かれて、御自分の書には何のお言葉もなく「お前一枚書いてごらん。」と言われた。私はびっくりした。そんな大それたことが出来るものではない……と心のうち。私は黙って立ちすくんでいた。校長殿はにこにこされて、「おまえの好むものでよい、書いて持っておいで。」と言葉を替えて宿題を出された。

私はほつとした気持ちで寮に戻つた。

仰せ付かつた宿題についてあれこれ考えたが、特別の勉強もしていない私なので、結局、小学校時代から手元に置く「村田海石」書の千字文から選ぶことにした。そして、文意も爽やかなので、「鳴鳳在樹」の楷書体四文字を取り出し、日晴日に練習してようやく一枚仕上げ、月曜日の放課後お届けした。

その後、お手伝いのため校長室を訪問したのは三学期の初めであつた。前回の宿題「鳴鳳在樹」の楷書が、先生のお机の左脇の壁に仮装されて掛けられてあつた。私はすぐ気がついた。そして逃げ出した

い気持におそわれた。が、じっと思いかえして、私はいつもの通り準備にかかった。

先生はこれまで、行書体で漢詩？を書かれた。私は、先生の筆の運びを拝見する機会を重ねる毎に、「書く」ということの気構えを痛感した。先生はこれまで、揮毫された文章についての、読みや意義についての説明をなされたことがない。今日も、漢詩と推察されるが、二行に書かれた。(おめだたい文章らしいが)私はおそろおそろ、読みについてお聞きしてみた。「休暇中忙しくて筆を執ることもなかった。今日は書き初めだよ。」とにっこりなされた。そして先生は、筆跡鮮やかな詩をお読みになって、解釈を加えて下さった。山田素行の「元日試算」と。

その日、私は書き初めの一枚を頂くことが出来た。

先生の書は、書家とすれば「立派な大家」であると思う。先生は、私に書の指導をして下さったのではないだろうか……それに相違ない。しかし、先生のお心のうちはわからない。只、私は先生に感謝するばかりである。

以上、先生方の授業を中心に、その時々のおい出を記録してこの項を結ぶ。

#### 四 本校先生と寮生との交流

昼食は、一週間を通して材料にも料理にも主力をおき、栄養のあるごちそうが出た。そして、校長殿をはじめ本校の先生方も見えて食事をとられた。

当時の想い出の料理

	朝	昼	夕
右の料理一汁一菜	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご飯(麦三分入り)</li> <li>・納豆</li> <li>・生卵</li> <li>・ほうじし</li> <li>・土佐しょうゆ</li> <li>・味噌汁</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご飯(麦三分入り)</li> <li>・てんぷら</li> <li>・いんげん等</li> <li>・片原</li> <li>・甘藷</li> <li>・やな川</li> <li>・肉井又は肉類</li> <li>・おひたし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご飯(麦三分入り)</li> <li>・カレー</li> <li>・けんちん汁</li> <li>・塩鮭</li> <li>・干物</li> <li>・かき卵</li> </ul>
間食 三村屋の三色だんご			右一品

#### 五 放課後の生活

午後四時、授業は放課となる。

〈放課後の日程〉

放課後の日程

曜日	内容	参加者	指導者	備考
月	華道	四年		作法室にて
火	弓道 庭球 薙刀	部員	弓―大河原先生 庭球―本沢先生 薙刀―高野先生	
水	外出日			
木	陣取り 綱引	全員		本校の先生も参加 (子供の遊びも取り入れる) 大庭にて
金	茶道	四年		
土	清掃作業	全員		
日	外出日			自由日

ひと汗かいた私たちは、五時終了して寮に引きあげる。そして風呂に急ぐ。満員の浴場はなかなか空きそうにもない。みんな「烏の行水」で、五時半の夕食に間に合うように工夫する。髪を梳き室に戻る。

—夕食—

夕食の鐘は響く。こぞって食堂へ。

午後から何も口にしない私たちは、夕食時は特に空腹を感じている。麦の御飯でも、おかずは少なくとも、そんなことは問題ではない。朝と昼は二杯で遠慮しているが、夕食は三杯とらないと胃の腑がおさまらない。

そんな時の間食（おやつ）は、どんなにか心を和ませてくれたか。だれも自己の沽券にかかわるとして、それを言わなかったのか？しかし卒業後、クラス会での思い出話には、そのことが異口同音に高らかにさげられた。まさに真実の声である。

また、土曜日は週末であるので、夕食後、週番の四年生から、一週間に亘る寮生の生活態度について、微に入り細にわたる注意や要望があった。（週番は下級生にはとても恐れられた。が、気の毒な役割でもあった。）終わってようやく各自の室へ引き上げる。

—黙学—

午後六時半、黙学時間を知らせる鐘が鳴る。これからの二時間は、吾々にとって大切な時間である。私語は絶対許されない。・授業の予習・宿題の整理・今日の復習などをするのであるが、考えること、記憶することは、この時間を逸しては出来ないの、裁縫、手芸等の手作業は日曜に予定しておく。

室の人は真剣に教科書や辞書に取り組んでいる。しんとして物音ひとつしない。

静けさは破られた。浅田さんのゴム草履の音がする。二時間はまた

たく間に過ぎた。鐘の音はけたたましく響く。

—体操—

一斉に体操場集合。就寝前の体操である。指揮は週番の四年生。当直先生、立ち合われる。

徒手体操を二回繰返し行う。終わって先生壇上に昇り、「お休みなさいませ。」そして解散する。

—消灯—

消灯までの作業

- 1 机の整理
  - 2 室内掃除
  - 3 髪の手入れ
  - 4 布団を敷く
  - 5 室員挨拶……就寝
- 九時半、電灯パチッと消える。

—週番の見回り—

四、五分過ぎた。四寮の廊下伝いに上草履の音がする。提灯を持った週番二人と舎監の先生が、ひと室ひと室障子をあけて、提灯を掲げて員数を確認して回る。室の者たちは、息をこらして寝込んだ振りをして、上履きの遠ざかるのを待つて深い眠りに入る。

（付記）「消灯後は、廊下を歩くのに履き物の音をさせないこと。」とは寮の決まりであるが、夜の見回りはこの限りにあらずともいいうのか……。

こうして寮生活の一日は終わる。

毎日が、隙間のない行程を、一点見つめて走り続け、走ることだけに集中して一年は過ぎた。二年は僅かながら心のゆとりも出来て、青

空を仰ぎ、咲く花にも心を寄せ、三年を迎えて、寮生活もやや我ものように感じられてきた。

## 六 帰 省

寮生活の緊張した毎日を送っている私たちにとって、年三回の帰宅ほど楽しいことはない。私たちはこれを「帰省」といった。

前橋に父母の住む私でさえも、夜のひととき、冷たい布団の中でうちのことを思い浮かべないことはほとんどない。まして、遠く、吾妻・利根・甘菜の奥から来ている友達は、口には出さないが、帰省の喜びは如何ばかりかと察せられる。

いよいよ三回目の夏休みも近づいた。土産物など買い込んで、二人寄れば話は郷里に飛んでいる。みんなわくわくして落着かない。

### — 夏休み中の研究調査 —

今年の課題は、「居住地の神社・仏閣・旧跡の調査」である。

私たち前橋は、話合いにより次の四ヶ所を選び、二組に分かれて調査することに決定した。

龍海院・天川双子山↓鈴木・大日向・小暮

妙安寺・朝倉古墳↓清水・五十嵐・長谷川

調査日時・方法は組員の自由とする。

### — 暑中休暇（家の手伝い） —

待ちに待った帰省はしたものの、秋蚕の四眠を過ぎた養蚕家の忙しさはたいへんなもので、私も、只のんびりと傍観してはられない。昨夜は蚕の裏除り（糞を除く仕事）を手伝って、寝たのが十二時近かった。

二階住居の朝は、思ったより涼しいので寝過ぎます。けたたましい桑切機の音に起こされた。朝の「桑くれ」が始まったのだ。

父母ととみ叔母、精やと日雇人が三人で仕事に当たるのであるが、秋蚕の上蔭を二日後に控えて猫の手も借りたい今日明日である。一仕事済ませて朝食となる。

毎年のことだが、お中元回りと、お盆の「お迎え」と「送り」のお墓詣りは、当然私が引き受けることになっている。今日は、昨日母から預かった品々を親戚や親交の家々に届けなければならぬ。

親交の家とは―耕地整理の行われていない当時は道路の整備が不充分で、自分の畑に行くためには、他人の畦道を通らせてもらわなければならぬ。また、「高台」の畠には、端氣川にかかる橋を渡らなければ行くことは出来ないが、廻り道になるので、下田さんの架けた一本橋を利用してもらう。このような家に対して、お中元とお歳暮を届け出ることになっている。

馴れない帯付きの支度にかかった。白地に細かい黒と緑地縞おりの着物に、ピンクと黄色の横段地にふくら雀が飛んでいる海絹（この布は、麻屋呉服店の福袋に入っていた品で、帯地ではないらしい。）の帯をお太鼓に締めた。この暑さになぜこんな出で立ちをするのだろうか？自分でも不合理のことと思う……が、しかし、次のような理由があるのだ。

土曜日の課外授業として華道と茶道の授業が行われた。

お花は古流で、私たち以外に本校や付属の女の先生方も参加されて、気軽な女のお師匠なのでみんな楽しく勉強した。作品は、校長室や応接室、金監室等に飾られ、花の終わるまで係が手入れすることになっていた。

問題の「帯付の服装」は、次の茶道の稽古にある。茶道は裏千家の先生であった。先生は、自宅で教室を開かれていた。そのかたわら、女学校や和裁の学校に出張教授をされていた。先生は、授業に当たり、

まず服装を定められた。

・着物↓袖丈一尺二寸の長袖を長めに着る。

・帯↓腹あわせ帯をお太鼓に結ぶ。腰紐 帯揚げ 帯止を使用する。

・白足袋↓清潔なものを用う。

※袱紗ふくさと懐紙くわしを持参する。

私たちは、この先生に二年間茶道とお作法の教授を受けた。そして、帰省中は「帯を付けた日常生活をするように」との申付けがあった。

そんな理由から、私たちは平素は半巾帯でいるが、少なくとも外出時は「帯付き」に着替えなければならぬ。

汗を拭き拭きどうやら帯も締めた……が、肥った体に「つつたけ」（足の蹠くろしの見える程度の長さ）に着た着物姿は、どう見ても格好よいとは思えない。此処には、姿見も大鏡もないのがせめてもの幸せだ。

家を出たのは十時頃であつたか？まず、町内の親しい交際の家や、新盆の御仏前の供物等六軒程を済ませ、小憩の後、午後は、兄の家とその親戚（清王寺の女師校近くにある）を訪問する。

二軒とも、私の家とは異なり勤め人なので、いろいろもてなしを受け、何かと細かいことを聞かれ、大人として扱われるので、私もぞんざいな振舞いは出来ない。お作法通りに応対することにした。それに、私と同年位の気さくな娘さんも居合わせて、ついつい時を過ぎてしまった。

思いがけなく暇どつた。桑畑の続く裏道を、汗を拭き拭き帰りを急いだ。艶のよい「ろ桑」の大きな葉が、右と左から顔になぶりつく。

これを避け避け、ようやく本家の野菜畑に出た。

ホツとした目の先に、みずみずしい小粒のビー玉を思わせるような房の実が、垣根に寄り掛かるように生り下がっている。折からの西日

を受けたその実は、白く細い縦縞を表面にくつきりと浮き出して、うす緑に、黄に、ピンクに透き通つて見える。その爽やかさ！私は、汗だくも、左手にかかえたお土産の重さも消えて、一瞬、吸い付けられるように見入つた。初めて見るこの実……何というのだろう。葉は葡萄に似ているが……。枝に刺らしいものが見える。

カサツと人の気配がした。思わず振り返ると、ろ桑のかげに従兄のKが立っている。私は思わず、「Kちゃんじゃないん。」と声をかけた。Kは本家の三男で、私より一つ年上である。幼い頃からの遊び相手なので別に驚くこともないのだが、余り突然のことと、……

かれこれ一年余り逢つていないのでいささか驚いた。「しばらくね。」と挨拶してから、すっかり男性らしくなったKをしげしげと見上げた。瞬間いつもにかえつた私は、「このきれいは実は何と言うの。」と聞いた。Kは何も言わない。（知らないらしい。）ビー玉はみずみずしく、いよいよ美しい。Kは黙つて右手で一枝ちぎつた。そして、「これ、『すぐり』っていうんだ。」と差出した。「とてもすっぱいんだよ。」（やっぱり知っていたのか……）私は、一枝下さいとも言ひ兼ねていたので、「有り難う。」と嬉しくお礼を言った。

そしてKが言うには、「俺、東京へ出て画を習いたいと思うんだ。」と……。不意の言葉に、私はしばらく何とも言えなかつた。東京へ出るというが、それは大変なことだ……。しかし、考えてみれば、Kは伊勢崎工業も卒業している。画はもともと得意で立派だ。三男坊で、農家を継ぐ責任のある立場ではない。百姓仕事には向かない体格であり、性格でもあると、私は前々から見ていた。私はようやく考えをまとめて、「Kちゃんは画が好きだし素質もあるんだから、田舎で百姓で過ごすより、自分の好む道に打ち込むほうが、意義もあり希望も持てるんじゃないかしら。私もKちゃんの意見に賛成する。」と、真実の気

持で賛成した。Kははじめてにつこりした。そして、持っていた一枚の水彩画を差し出した。今日の写生は、赤城山を背景に画いてある。私は、「それで、当てはあるん？」と聞いてみた。「これから考えてみることにする。」と、しつかりした口調で答えた。私は気になったので、「画の道といつても、なかなか容易のことではないと思うけれど、どっちにしても、叔父さん（Kの父で、私の母の弟）や大兄ちゃんに話し、理解してもらって専門学校に入り、基本から勉強するよう考えてほしいよ。よくよく頼めば、叔父さんもわかってくれるんじゃないの。」と、繰り返し繰り返しすすめた。Kはうつむいていたが、「そうしてみる。」と低く答えた。

私は不安になった。Kは、頼りにならない親や兄たちを見限って、自分の道に進もうと決心しているのだ。こんな時うちの父ならば、本人の才能を認めた場合、どんな工面をしても本人の希望をかなえてくれる。叔父さんさえその気になれば、美術学校くらい気楽に出せる力を持っているのに……。私はKに同情しないではいられなかった。

榛名の空に夕立雲があらわれた。一雨来るかな！涼風がさつと汗ばんだ肌に吹きつけま。雲はもくもくと足早に押し寄せてくる。遠くで雷鳴がする。「ではね、うちのおとうさんにも、叔父さんに頼むように話しておくからね。」と言い残して、今貰った水彩画とすぐりの枝を右手に、お土産を左手に抱えて、裏口まで突っ走った。ポツリポツリ降り始めた雨粒を肩に受けながら……。

（付記）「すぐり」について

ゆきのした科の落葉低木。中部地方山地（長野県）の特産で、高さ一メートル位。三つ五裂した葉が互生し、葉の付け根に三本の刺がある。春、白色の花を葉腋に付け、夏、一〜二センチ位の球形の実を付ける。皮は薄く光沢があり、縦に数本

の筋がある。果汁は甘酸っぱく、食用となる。地中海地方・北アフリカ原産のカーランド（房すぐり）は、果樹として栽培されている。現在は日本でも栽培されている。

私はその後もすぐりを見ることはなかった。が、何年かぶりかで、熊谷さんの畑に、竹ぐねに寄り掛かるように美しく熟れている一枝を見掛けた。いつも畑の手入れのよい御主人が居合せたので、お聞きすると、御主人は名も御存知ないようで、「自然に出たのですよ。」と答えられた。

御盆の行事も、蚕の上簇中の合間に終わり、繭かきも上々の結果をおさめ、忙しさの落ち着いた頃、私は、夏休みの課題である古跡の調査に、組員の同級生と走り回った。

Kのことも時々思い浮かぶので、父の憩いの折を見計らって、先日のあらましを話して応援を頼んでおいた。

予定の課題も、一週間程かかってやっとまとまりをつけた。

晩秋蚕のはき立ても始まる。

九月一日からは二学期も始まるので、寝具や下着、日用品等の手入と整備にかかり、一括して荷作りを終わった。

八月三十一日、精やかに頼んで搬入してもらい、私も一緒に寮に戻った。

―正月の帰省―

二学期の試験も終わり、成績通知を気にしながらも、十二月二十五日からのお正月の帰宅は楽しかった。父母や家の人たちと、ゆっくり寛ぐことのできる年間にただ一回の機会である。話すことは山程あるように思えて、心はずませて家に戻った。

その時、私は思いがけない出来事を知らされた。それは、母の発病のことである。

母の病気 それは大正七年九月上旬のこと……。母は、大間々の叔母の長女が、耳の病気で日赤病院に通うために来たとの知らせを受けて、大急ぎで片貝の畑から帰って来た。

(注) 片貝の畑

西片貝広瀬川畔の三段余の山地で、母の父宮沢駒太郎の所有地であった。駒太郎祖父は、父に、開墾して使用せよという条件で与えた。父は農閑期を利用して、精吉と三、四年かかり、桑畑にしたという。―母と精吉よりの話―

しかし、登記等の手続きはしていなかった。―父の話―  
晩秋蚕の忙しい最中なので、桑摘みに出ていたのである。姪をもてなそうと、竈に火をつけ、御飯を炊く途中、発作を起こして倒れ、右半身が動かなくなったのである。

その後、病状も軽かったとので、手当の結果、ひとり自由が利くようになり、回復に向いた。私がこの春の休暇に帰宅したときは、屋敷内の散歩や、宮沢の祖母の所へ遊びにいけるまでに回復していた。母は、自分の発病のことを、私には知らせないよう強く言い張ったとのことである。

母は、私を見てとても嬉しげに、元気にして見せた。言葉ははつきりしているが、右手が自由にならない。私は、寂しさがこみあげて言葉が出なかった。頼りの柱が急に挫けたように……。そして、これからの母の毎日を思つて悲しかった。

父は、「発作が軽くてまだよかつた……。が、この病気は、三年、五年と時をきつて発作が来るそうだ……。」と低い声で話した。

それからは、私は母のそばを離れなかつた。知らなかつたとはいへ、母の不自由な姿を見ては、申し訳なきで、「いっそ、寮に戻らず母のそばに居てやりたい……。」と、滅入る気持をどうすることもできなかつた。

た。気丈な母は、「かあちゃんのこととは心配しないで、正月の支度を手伝つてやりな。とみ一人では間に合わない。」と心を配る。私の気持を察してか、暮の仕事に苦にしてか、いらいらした様子なので、私は母に代わつて暮の仕事を引き受けることにした。

これからの仕事の予定

1 二十六、七日頃までに終了させること

男たちは

○農機具おさめ(清拭して)

○屋内外の大掃除

○庭の敷藁(寒中、庭の凍るのを防ぐため、庭に藁を敷き、周りを止める。この藁を、正月松の内は福藁と呼ぶ。)

―父の句に、『福藁や 神の雀のあそび處』―

女たちは

○お勝手用具の手入

○食器磨き

○正月着用の衣類・履物準備

○お歳暮のやり取り

2 二十九日の行事

◎米磨き

朝食を早目に済ませた本家や分家のおばさんたちが、めいめいのもち米・桶・バケツ等を本家の井戸端に運び、米磨きが始まる。

とみ叔母も早目に足場のよい所をとり、糯二斗二升ともち粟三升を磨き上げた。本家の叔母は一人で一俵も磨ぐので、早く済ませたとみ叔母は、手伝うのが毎年の例になっている。

二俵余り磨き上げた。糯米は、めいめいの容器に入れて一晩浸しておく。磨ぎ水は別の手桶に溜めて置き、夕食後から始まる注連縄作り



の男衆の入浴用とする。

◎注連縄作り

本家の勝手の板の間には作業用の筵が敷かれ、それぞれに藁束が敷かれ、米の磨ぎ水の風呂も沸いた。

身を清めた男衆は、従兄・作男・分家・精やで七、八人。一斉に輪じめ作りにとりかかる。藁を捌く音、新藁の香りが室いっぱい満ち満ちて、見る見る御注連の数を増す。輪じめや午莠じめは、材料も少なく作り方も簡単なので、従兄たちも自信があるらしい。しかし、正月棚に飾る大注連飾りは、材料も量が多くなり、込み入っているため、古参の番頭やうちの精やが共同でないと仕上らないので、最後の作業となる。

私は従弟の迎えを受けたので、父に留守を頼み、母に断って、本家のくぐり戸からお勝手にまわった。注連縄作りには父も必ず参加するのだが……。今年には精やがひとり……。とみ叔母は、おでん作りで夕方からかり出されている。板の間には、出来上った注連縄が山と積んである。

そろそろベテランたちの大注連縄にかかる頃、私は次兄に「ねえちゃん、ちよっと。」と呼ばれた。何ごとかと後についた。次兄は中の間の入り口に立ち止まり、「Kは画の道に進みたいと言つて奈良へ行つたよ……。置き手紙をして……。」とささやいた。「やつぱりね。」と私は思った。「東京ではなかったの……。どうして奈良へ？」次兄は、「そのことについておやじに頼んだのだが、おやじは、Kを百姓にするつもりだから、絶対に話にも相談にもならないんだ。兄貴にも相談したのだが、ああいう気性だから、好きなようにやったらいいだろうと言うが、資金なんかの相談には乗る気も力もないんだ。丁度諏訪町の伯母が来合わせて、細谷さんに話してくれた。そして、取りあえず細谷さんの所

で修業してみてもどうかとのことで、Kはそこを頼って行つたんだよ。」と話してくれた。

私は何か割り切れない気持で腹が立った。そして、注連縄作りにも参加せずに、酔った足取りで自宅へ出かけて行く叔父の後姿に、軽蔑の気持を押さえることができなかった。

細谷三郎さんは、叔母（母の妹で太田家に嫁す）の婚家太田家の親戚で、生家は一毛町にある。現在奈良で彫刻家として知られているということは、私も聞いていた。

（付記1）細谷三郎（而樂）乾漆工芸家

明治十一年 一毛町に生る

明治三十五年 東京美術学校卒業。高村光雲に師事す

新薬師寺十二神将中波羅大将を再現。

※前橋公園の彰忠碑の蔦およびポート池の慈光観音は氏の作である。

（付記2）

平成元年六月十六日夜十時より、テレビ東京の、「極める」の番組で、天平の鬪将『新薬師寺十二神将と古代国家のエネルギー』の放映を見て、細谷さんが再現に当たられたという（発掘は昭和三十二年とのお話）波夷羅大将外十一大将が、薬師如来の御座像を中心にして群像の形を成しており、その一人一人の姿態、表情からほとばしる魂というか迫力というか、そういうものに私は圧倒された。

服装は皮の鎧で、「中国の伝統を受けたもの」との説明があった。

（付記3）

新薬師寺 奈良市高畑町にある華嚴宗の寺。七四七年（天正一九）光明皇后が聖武天皇の眼病平癒を祈り、行墓を開山として建立し、七仏薬師を安置して東大寺の別院とした。

南都十大寺の一つで、境内には壮嚴な伽藍を配置していたが、七八〇年(宝亀一一)、落雷のため、本堂だけを残して焼失した。現存の南門・東門・地藏堂・鐘樓などは鎌倉時代に再建されたものであるが、本堂は天平時代の素朴な様式を備え、内部中央に円形の土壇を築いた珍しい形式で、安置する薬師如来座像および十一神將立像とともに国宝である。なお、白鳳時代の代表的な金銅製の薬師如来像(香薬師として著名)を蔵したが、昭和十八年の盗難以来、所在が知れない。

### ◎恒例の味噌おでん

台所では、大釜いっぱいの大根・蒟蒻・竹輪が、祖母(母の母)の指図で大皿何枚かに盛り付けられ、艶のよい味噌を添えて出来上がった。正月棚の大飾りも立派に仕上がった。山なす注連縄を前に、今晚の「おでんの大振舞い」が始まる。いくら作っても足りないのは毎度のことであるが、年に一度のこのしきたりの味は、将来忘れられない思い出となることだろう。

何処に居たのか、小さい従弟妹たちも加わって競争で頬ばる。その賑やかなこと……。大盛の皿はたちまち平らげられて、幾切れが残った大根が叔母たちの口に入る。

こうして、正月の注連縄もめでたく「緋い納め」られた。

私は何となく浮かぬ気持ちで家に戻った。父は、本家の叔父の考え方にはいつも賛成できなかった。「可愛そうなことをした……。しかし男だ、覚悟のうえのことだ……。細谷さんは上方で名のある彫刻家だ、師に不足はない……。」とポツリポツリ呟いた。

### 3 三十日の行事

#### ◎餅搗き

いよいよ今年も三十日となった。私たち一家恒例の餅搗きの日である。

一時を聞くと準備にかかる。二時頃には威勢のよい杵の音が聞こえてくる。朝食までには、一俵は搗きあげることになっている。

杵は三丁、捏どり<sup>ねんどり</sup>と手合わせはとみ叔母、せいろうふかしはベテランの本家の叔母。かまどの火燃しは従兄で、鏡餅は祖母と母であったが、今年是新参の私が母に代った。永年の習慣で、分担が自然のうちに決められていて、きびきびとみんな油断なく動く。白い羽二重餅が次々と搗き上がる。寒い最中<sup>さなか</sup>というのに、杵の男衆はシャツ一枚となった。

昼(正午頃)までには終わり、最後のひと臼で、餡餅<sup>あんびん</sup>や餡ころ、辛味餅を作り、お昼の休憩となる。

#### ◎お飾りづくり

午後からはお飾りづくりにかかる。一夜かざりは忌み嫌う昔からの風習なので、今日中に仕上げねばならない。

門松六本、輪飾り二十六本、庚申様の御幣づくりと、お正月棚の組立てやお飾り付けなどで、短い一日は夕方までかかった。

#### 4 三十一日(大晦日)の行事

#### ◎大掃除

昨日までの忙しさに、母にもゆつくりとつきあっていられなかった。が、今朝は母の機嫌がとてもよい。私は嬉しかった。父は、「お前が来たら元氣になり、食べ物もよく食べるようになった。」と喜んでいて。朝から、今年最後の<sup>おとし</sup>大掃除にかかる。

昔からのしきたりで、元日は箒を使ってはいけないことになっている。その訳は、「掃き出す」といって、支出を嫌っての縁起ではないかと思う。人によると、雑巾は、「拭き取る」といって使ってもよいとか

……これ縁起をつけたその類であろうか。

日常、掃除には余り関心のない農家にとつて、暮から正月にかけての心遣いは並々ならぬものがある。人はもともと清潔を好むもので、只、日常仕事繁多のため、忘れられて了うのである。そしてそれが習慣となり、不潔を気にしなくなる。年改まる正月は、神を迎えるので、自分では意識しないが、一気にそれを埋め合わせようとして努力する心の現れではないかと私は思う。

大掃除も念入りに済んだ。さすがに気持ちよい。室が広々として見える。お飾の蜜柑が如何にも春らしくて神々しい。

#### ◎晦日蕎麦づくり

午後からは、「とみ叔母の腕の見せどころ！」と褒められて気をよくしているとみ叔母が、腕に縊りをかけて、恒例の芋（とろろいも）つなぎの蕎麦を作りはじめた。

分量と割合 蕎麦粉 一升（1）

小麦粉 三合（0.3）

長芋 大一本

※長芋は、蕎麦粉と小麦粉をよく混ぜ合せて耳たぶ位の硬さにこね上げる程度に用う。水は使わない。

家族六人の我が家でも、晦日蕎麦だけは蕎麦粉三升位は作ることにしていた。そして、三ケ日の夕食に当てて楽しんでものである。（芋蕎麦は、三日たつても味も硬さも変わらない。）

#### ◎お雑煮づくり

元旦から三日間は、三ケ日といって新餅のお雑煮を神々に供える。この料理づくりには、婦女子は手を出してはいけないことになっていく。これも昔からのしきたりである。（その年の料理担当者を年男と呼ぶ。）

そのために、我が家では暮のうちに材料を整え、用意しておくことにしている。材料は、大根・人参・里芋の三種類で、形は、どれも短冊型に、長さ五センチ位に薄く刻む。（これを「こ」といった。）刻んだ材料は、三分分に容器を別に入れて入れておく。

#### （注）「こ」とは

うどん・蕎麦の汁の中に入れ、味を引き立たせ栄養を加える。ほうれんそう・人参・うど・蒲ぼこ等の材料を、五、六センチ位の長さに薄く切り揃え、食膳に添えて出す。これをこの辺ではこといった。その意味を知るため「用字」を見付けたが判明しない。ちなみに、よく似た言葉に『薬味』・『具』があるが、『薬味』は料理に添えて味を引き立て、食欲を増すための香料。

『具』は、ちらし・五目めし等の料理に、細かに刻んで入れる材料。ということ、ことは微妙に違う。

夕食後風呂を浴びて一年間の垢を洗い流し、清掃された家で、心新たに新春を迎えるすべてが整った。

炬燵を囲んで、過ぎ行く年を振り返り、来る年を話し合い、反省や雑談などで除夜の鐘を待つのが例であるが、私は、母を気遣って早目に寝床に引き上げた。

家のみんなが、除夜の鐘を聞き納め、床に就く頃、表を通る初詣の人達の下駄の音が聞こえる……。

#### 七 三学期

いつしか松の内も過ぎて、七草粥もそこそこに、まだ覚めやらぬ正月気分も、母を想えば重く暗くなりがちな心を引き締め、かくては申し訳ないと自分に言い聞かせ、寮生活に戻った。

しばらく両親のもとで過ごした後の寮の室は如何にも味気ない。八畳の室に只一つの木製の火鉢がひっそりと置いてある。五、六かけの炭火は半ば灰に埋められて、灰の隙間から、消えてはいないという程度のうす赤い光が見える。

今日戻ったばかりの室の五人は、同じ想いか黙々として寒さをこらえているようだ。黙学の時間である。

ふっと、静かに笑っている母の顔が浮かぶ。今夜はどんな夢を見るだろう。

— 舎監室に呼ばれて —

毎日の生活も軌道に乗ってきた。

一月の或日、放課後の運動時間を終わって室に戻り、隣室の同級生のSさんと雑談をして楽しんでいると、「ごめん下さいませ。」と廊下で訪れる声がある。「どうぞ」と答えると、障子が三寸程開いた。四寮の二年生が小腰をかがめ、「清水さん、舎監室で篠原先生がお呼びです。」「はい、わかりました。」と私は答えた……が、「何だろう!」

舎監室に呼ばれる多くの場合を考えると、何か落度があつてお叱りを受ける時なので、誰もが篠原先生からの呼び出した恐れていた……しかし私は何の心当たりもない。

イマさんは心配そうに、「何だろうね。」と私の顔をのぞき込んでさやいた。「わからない、何しろ行ってみる。」と言い残して立ち上がった。

怪げんな気持で舎監室を訪れた。先生は、「中からお入りなさい。」

私は一礼して先生のお顔をまともに見た。先生は、一通の部厚い角封筒を私の前に置いて、「この人、あなたは知っていますか。」私は封筒を取り上げ、裏を返して差出人の名を見た。驚いた! 奈良へ行ったKからだ。「従兄です。」先生の「何している人ですか。」という間に、私

は、「彫刻家を志して細谷三郎さんという先生の宅に住み込みで弟子入りしたと聞きました。」と答えた。先生、「開いてよいですか。」私、「はい。」先生は封を切り取った。十五、六枚程のはがき大の用紙に、毛筆で、様々な動物の姿態が達筆で画かれているのが見える。

私は先生の表情を伺いながら、先生の言葉を待った。はがきの中に、文字や文章は書かれていなかったようだ。一応お目をとおして調べた先生は、「わかりました。よろしいですよ。」と言われて、封書を私に押しつけた。お許しが出たわけである。私は心中穏やかでない。「何がおわかりになったのですか。」と問い返したい気持がいつぱいであった。

— 反省 —

私は、封書をそのまま机のひきだしに突込んでおいた……が、気になるので次の日曜日に外出許可を取り、家に持ち帰った。そして父母に話した。

父は一枚一枚丹念に目を通して、「なかなかおもしろい。うまくなったものだ。」と感心してしきりに褒めていた。母は、私の話を聞いただけで、絵など見向きもせず、「本家の叔母に注意する。」と意気込んでいた。その態度は、発病以前の母のように元気に見えた。

私は、父の言葉を聴き、父の態度を見て落着きを取り戻した。自分の浅はかさに気付いた。そして、自らの小さな考え方や、つまらぬ見栄を深く深く恥じた。私はすっかりした気分になって寮に戻った。

— 母の歩行 —

母はその頃から、「杖なし」の歩行を懸命に続けるようになったとのことである。

私が三月の終わりに関西旅行から帰った時には、室内を、杖を持たずにゆっくりゆっくり歩いていた。

## 八 大正八年の夏休み

### ―母の散歩―

秋蚕の忙しさは例年の如く、私は手伝いのかたわら、とかく忘れがちな母の病気を気遣って、食事と運動には特に心を配った。母は、若い頃から胃弱の持病を持っていた。そのためか、食事は至って細く、間食もあまり好まない。

私は、涼風の吹く夕方には、母に付き添って散歩に出ることを欠かさないように心掛けた。ひと回りすると、母は食事を進んで摂る気になる。

夏は雷雨が多い。そんな時は、朝の日の出前の涼しいうちにひと回りして食事とする。日の出前の空は美しい。母は散歩を喜ぶようになった。

母は杖を使わない。凸凹道は危ないので、手や上体を支えようとすると、断ってひとりで足を運ばせる。その真剣な横顔に、私は胸が詰まった。何と気丈な人なんだろう！

### ―散歩のコース―

裏口から出て、三軒長屋の前を通り、野中道に出る。そして我が家の野菜畑に着く。そこで私は畑に入り、手さげかごに、茄子や胡瓜、時にはとうもろこしなどもぎとる。母は、私の敷いた座の上でひと休みしながら、私の仕草を見ている。

それから、大通りを左に折れ、畑路を進む。右手に三峯様の赤い鳥居がある。奥の椋の茂みの中に社殿があり、ご本尊が祀られている。この社は宮沢の先代（母の父）の建てたもので、秋祭りには、ほおずき提灯など灯して、近所の人たちも参詣に来て賑わった。

お宮に続く百坪程の広場が本家のお花畑である。お花畑をひと回りして、長屋の前を通り、家に着く。

これで丁度一時間半くらいかかる。

お花畑は本家の二兄が作っているので、居合わせた時は、デージーや矢車草、なでしこなど取り揃えて花束を作ってくれたり、時には、孝願寺方面のコースを案内してくれたりした。

### ―夏休みも終わる―

複雑な気持で……自分としては忙しく過ごした夏休みであった。母も大分元気になった。嬉しいことだ！歩くことは毎日続けてほしいが、急かずに、あせらず、ゆったりとした気持で……と願う！

秋蚕も上簇した。可なりの仕上りだと喜ぶ父の顔に安心しながらも、早く養蚕をやめて、母と静かな毎日を過ごせる日の来るよう祈って止まない。

二期期からは教育実習も始まる。研究課題も仕上げねばならない。今年一杯は、責任をもって、将来心残りのないよう最後の仕上げに取り組みたい。当分は帰ることもないだろう。

晩秋蚕も九月中頃には片付くだろう。父も心休まることだろう。母のことを気を付けて下さいと心に念じながら寮に戻った。

## 九 成長期

### ―女先生方の服装―

三年生の頃から、女先生方の服装が変わった。それは、お羽織の色が一樣に紫色系統のものを召されるようになったことである。

篠原先生が一番のご年配で、茄子紺の濃いもの。古屋先生、中桐先生、荻原先生は茄子紺の明るいもの。中沢先生は上品な紫色で、音楽の山城先生は明るい派手な羽織を召されていた。着物は銘仙の縞物で、大小の柄は御自由のようであった。

私たちの目からも、よくお似合いの先生方はお人柄までが美しく感

じられた。四年生ともなれば、そうした先生方の服装についても感じ易く、世の一般の娘たちと比較して、饒舌の話題となることも無理からぬことであつたのかも知れない。

同級生といつても、私たちの組の年齢は同年ばかりではなく、私のように高等小学二年卒もあれば、付属高三を出ている者も多数あり、他府県からの入学生は、二歳くらい年上の者も居た。

特に、東京方面の、立川市・世田谷区・中野区・葛飾・澁ノ川・横浜市等からの同級生は、姉さんのような感じであつた。が、それも三年間の交流で、年の差などはすっかり解消されていた。

しかし、帰省中の生活は、私などとは全く違つている。旅行にも出かけ、海水浴で楽しみ、友だちと登山にも出かけたという。一ヶ月を自由に過ごして帰る。

その結果は服装に表われ、髪のかき方も七、三に分けたり、前髪をふくらしみたりして当時の流行を取り入れてくるため、舎監の先生方からは注意的としてにらまれていた。

そうした人の話していることは大人で、男性に対する関心が強いのか、私には理解できないこともあり、全然興味もないことが多かった。

時には、寮の規則についても激しく批判していた。それは、「入寮規則の改革」について、次のように要望するということである。

#### 1 服装

◎衣服……木綿の地縞柄 色は目立たぬもの

◎結髪……中央で一束にまとめ、しつかり巻いてピンで止める。

★要望 個性を尊重して、衣服の柄、髪型の選択の自由を認めると。

2 化粧品……認めない。(症状により申出のこと)

★要望 化粧品、クリームの常用を認めること。

3 郵便物……届出のないものは舎監室で点検する。(本人立会いの上)

★要望 本人より理由をただして、内容の点検をやめること。  
4 食品の持込み……寮の室での飲食は一切禁ず。

面会人は寮内に立ち入らないこと。

★要望 日曜・祭日は自由にしてほしい。

面会は談話室で行うこと。

この要望問題については、私も大いに同調する所があつたが、こんな叫びも影の聲で終わった。

#### 十 教育実習

翌八年、私たちはいよいよ師範教育の総仕上げの年を迎えた。教育実習という、将来に備えての勉強と、これに付随する研究課題のまとめである。

本校での授業も、全員揃つて受けられたのは三学期だけであつた。

教育実習は、前期班と後期班の二組に分かれて、付属の各学年に配属され、それぞれの訓導から指導を受けた。

私は後期に属し、低学年は小学二年、訓導黒沢とう先生、高学年は高等科一・二年、訓導清水勝太郎先生の両先生について勉強した。

付属内の実習が終わると、県内の小学校に配置され、一週間の予定で現地の小学校についての視察と実習を行うことになつている。私は、市内の敷島小学校と市立幼稚園に配置された。

私たちは、この地方実習を終えて、地方の先生が、教授法そのものよりも受持ちの子供一人一人をよく知つていふこと、親を知り家庭の中の子供の状況を理解していること、先生は、「その土地の先生」として溶け込んでいることなどに感銘を受け、新しい発見をした。

## 十一 卒業と惜別

大正九年三月、私たち三十一名は卒業することになった。

四年間に亘る、校長殿をはじめ諸先生の御薫陶と、寝食を共にした寮生、特に姉妹以上の親しみを覚えていた同級生との惜別は、就職を控えた不安と入り交じって、予期した以上に私たちを感傷的にさせた。

涙に終始して式は終わった。一同揃って先生方へのお礼の挨拶にまわった。そして、申し合わせたように校長室に足を運んだ。さすがに、みんな涙ぐんで俯いたきりであった。

校長殿はやさしく話し出された。「あなた方は私と同じ年(五年)にこの学校に入った。私は、一年生の頃から今日まであなた方をよく見ている。今私にとって、あなた方は第一号の卒業生として送り出すことになる。自信を持って立派に努めてもらいたい。任地についても、出来るだけの努力はいたしておる。」と、先程の訓辞とは異なり、にこやかに私たちを力づけて下さった。みんな、心を込めてひとりひとり先生にお礼を述べて校長室を辞した。

職員室には先生方が揃って居られた。私たちがおひとりおひとり御挨拶を上げると、先生方は、それぞれに注意やら激励のお言葉を下さった。

先生方に最後のお別れをして、寮に戻り、ゆっくり語り合う暇もなく、荷物の送り出しや、舎監の先生方への永年のお礼の御挨拶をねんごろに済ませ、寮の友だちに送られ、校門を後にして各々郷里へと急いだ。

## 十二 任地決まる

―奥平先生に誓う―

卒業後私たちは、任地の思惑もあり、落着かない日を過ごした。

同級生の五十嵐さんは、通知を待ち切れず、私宅まで出かけて来てはあれこれと気を使っていた。「こんな時石川先生が居られたら……。」との愚痴も出たが、結局通知を待つことにしたわけである。

大正九年三月二十八日、私は、次のような辞令伝達式出向通知を受けた。

赴任地は群馬郡新高尾村で、新高尾尋常高等小学校。

四月一日午前九時四十分までに、高崎市役所に出向せよ……と。私は勢多郡を予想しており、利根川を隔てた群馬郡については考えなかったので、一瞬当惑した。

地図をたよりに位置を確かめ、当日は早目に家を出て、汽車で高崎駅に着き、途中一回通行の人に道を聞き、高崎市役所に出向して辞令を頂いた。

それから、新高尾校に挨拶のため立寄る予定である。

高崎市内の街並みを過ぎると、高崎前橋間に通じる国道となる。新高尾村はその中頃にある村と思う。

塚沢村、井野村を過ぎると、右手の畑中に学校の建物が見えた。新高尾村だ。道のりの遠いこと、バラスの道の歩きにくいことに今更驚いた。ホツとして歩を速め、商店や局などの続く村外れの学校への通路に入った。

門内に入ると、右手の小使室らしい室に人の声があった。訪れると、日直だと名乗る若い少年のような先生が現れた。来意を告げると、「校長先生は役場へ行った。呼んでくるから少々待つて下さい。」と、少年先生は急いで出ていった。

しばらくすると、校長の荒木正恭先生が見えた。役場はあまり遠くはないらしい。立派な八の字髭が目につく。私は、頂いたばかりの辞令を出して鄭重に挨拶を申し述べた。先生は快く応対して下さいました。

そして、学校内外のあらまし、先生方のこと、子供たちの状況など説明して下さい。お話を聞くうち、私は充実した学校であることを感じました。

先生は言葉を改め、「先日、奥平校長さんが来られた。あなたの通勤について、たいへん心配されて居られた様子であった。先生自ら、『前橋から歩いてみた。』と言われ、『少し遠いと思うが、通勤出来ないこともないのでよかった。』と安心された様子で、『貴君からも力付けてやって下さい。よろしく頼む。』と言われて帰られた。あなた（私のこと）についても、先生から大体お話し頂いた。私の自宅も清王寺なので、奥平先生にはお逢いしたこともあり、よく存じ上げている。馴れるまでの辛抱ですよ。現在、前橋からも高崎からも女の先生が通勤してきますよ。」と話して下さい。

私は、不安でいた自分が恥かしくなった。そして、校長殿の暖かいお心遣いが胸に沁みて有難かった。私は、「何としても立派に努める。」と、固く心に誓った。

## 第九章 部活動について

### ― 女子師範時代 ―

この章では、特に私の在学中の部活動について取り上げ、まとめてみた。

### 一 学芸部

一年生も無事終了し、大正六年四月の二年生からは、学芸部の幹事を命じられた。

学芸部とは、部長先生の指導により、学校および寮の行事に、自主

的に携わり遂行されるもので、選ばれた部員により成り立っている。

### 一、部の仕組

◎部長 大河原叙吾先生

◎幹事（六名） 二年生二名 三年生二名 四年生二名（一名を代

表幹事）

### 二、行事

◎学校行事

・一学期 各科目に亘る自由発表

・二学期 夏休み中の研究・作品展示会

◎寮の行事

・観桜会

・観月会

・卒業生を送る会

### 三、部会の役割

・企画案作り 部長の認可を受ける

・プログラム作成 部長に提出

・行事の実施 司会・進行

・反省・感想を添え 記録提出

・部長の講評を受ける

以上で一つの行事は終了する。

### 四、部員の活躍

学年幹事は、部会の決定により、級長を交えて、出品・出演等の必要事項の手配をし、期日までに部会に報告する。部会はこれに基づきプログラム作成をする。

部員は、行事遂行までは、日曜日まで返上しなければ間に合わないことになる。



ようやく整って、部長に報告し、プログラムを提出する。そんな時先生は、「苦勞だったね。これだけにするには、時間もかかったことだろう？」とねぎらいながら、詳細に目を通される。そして、内容について細かい質問をされ、組合わせや順序等、急所を挙げて教えて下さる。そして、改めて「よくやった。これが、おまえたちの将来、身に付いた力になるのだよ。」と、大きな声で私たちを励ました。

先生の御意見・指導点を勘案訂正し、毛筆で清書して、私は翌日提出した。先生はよくよく目を通され、「結構だ。」と言われ、私の毛筆を褒めて下さった。

その後先生は、折にふれ、私に、「書道の免許をとっておけよ。少し勉強すれば、今なら簡単にとれる。」とすすめて下さった。そして、関係書籍の紹介までして下さった。

私は、二年生の一学期に学芸部幹事を命じられたわけであるが、以来三年間、幹事として部活動に励んだ。

特に、上級生として部の責任を負うことになってからの三、四年生時代は、行事の計画に当たって、自分の意見も認められ、自分を活かした活動となり、私にとって、意義ある仕事となったことを痛感した。また、折にふれての部長先生の的確な御指導は、私に自信を持たせてくれたのである。

#### — 観桜会 —

春ともなれば、校舎を囲む桜の老木は、内から外から花いっぱい風の風景である。外出日の往きかえりに、しばし歩みをゆるめ、♪春のうららの隅田川……♪と口ずさむ。

☆学芸部より発表 明日、お花見の会を開きます。

・とき 放課後（五時まで）

・ところ 運動場集合

・挨拶 部長先生

・自由散歩 校内より校外へ

・お茶の会 食堂にて（おやつ 三色だんご 甘辛せんべい）

本校の先生、舎監の先生方も参加され、三々五々連れ立って……。校外から見る花はまた一段と美しい。楽しい一時間の散策であった。

— 秋のお月見の会 —

中秋のお月見は、会場を公園の下河原に移して行う。

夕食後、学年別に整理して、本校の先生に引率されて現地に着く頃、あたりは夕闇に包まれ、川面を渡る夕風が、心地よく河原芒をなびかせ、爽やかに襟元を過ぎて行く。雲はかなり広がっている。お月見には心もとないが……と気がかりもあつたが、しばらくして、東の空の雲間が明るくなった。待ち受けた月だ。十五夜の月が昇り始めたのである。と、一斉に拍手と歓声が起こった。月は、昇るにつれ小さくなる。月は薄雲に入る。足早に雲を抜け、明るくなった。また雲に姿を隠した。

暗がりの中で、利根の水音がすごく高く響く。プログラムは次々と進む。

・独唱 四年生

・合唱 三年生全員

・独唱 二年生

・斉唱 一年生全員

最後に、全員の手唱

♪秋の夜半の み空澄みて

月の光 清くしるく

雁の群れの 近く来るよ

一つ 二つ 五つ 七つ

月は高く昇る。歌声は大空にこだまして遠く余韻を引く！

各自持参のおやつは、二本のふかし芋とぶどう一房。

ゆっくり自然に浸って、身も心も伸び伸びと……。先生方に護られて、街の夜道を黙々と、校門に戻る。

――卒業生を送る会――

私たち学芸部幹事は、年度末の試験の終了を待って、すぐに「卒業生を送る会」の計画に取りかかった。

1 学芸部員の会を開く。

① プログラムの原案

② 余興 前例により各学年一点（全員参加のこと）

③ ②については、学年幹事に委せる。

④ 締切日 三月二十日

2 三年の部員、級長との協議により、

劇一点「舌切り雀」

独唱一点（音楽部より一名）と決定する。

3 プログラム（案）作成

一年生 年中暦

二年生 うかれだるま

三年生 雀のお宿

先生方 二名

4 プログラム（案）提出

5 手続き終了。学年別に準備にかかる。

日常の生活の規則を左右することは出来ないのです、放課後の自由時間、日曜を使うことになるので、必死の協力体制を必要とする。

会場は体操場。紅白の幕張り。ステージ作り。体育の高野先生の指揮のもとに、部員総出で、前日の放課後終了した。

そして、いよいよ当日を迎えた。

午前中、小道具の整備・確認と演習を行う。（確認は出演者が行う。）

① 半てん二枚と頭巾一

② 友禅の長袖着物八枚

③ つづら大小二個 ①②③は叔母に依頼して調べた（私宅に依

頼）ものである。（部員扱いとする）

④ みやげ……出演者の工夫により作ったもの、および、部員の

発想で「水素入りゴム風船」を作ることになっている。

※水素風船の目的……こわい怪物の出現により、「おばあさん」が反省する最後の場面に使う。会場一同、アツと驚き、笑いのうちに

幕。

◎劇の予行

1 この劇は、童話「舌切り雀」というレコードを基本として考えたもので、筋書き・進行・劇中の独唱・合唱は、すべてレコードそのままを取り入れ、ピアノの伴奏により、合唱隊の唱歌で筋を運んでいく。踊りの振り付けは出演者が工夫した。

2 出演者

・おじいさん おばあさん

・子雀一人

・お宿の雀 親雀合わせて十人

・合唱隊 三年生

・伴奏者 音楽部一人

・監督 部員

午後は、部員と出演者で、ゴム風船に水素を注入する作業にかかった。

理科室に君塚先生が居られた。来意を告げると、先生は気やすく材

料戸棚の鍵を貸して下さった。

風船の数も多く、私たちは気のむくままに、水素を大量に出すつもりで、フラスコも大きいのを取り出し、水槽・硝子管・ゴム栓等を用意した。水素については既に実験済なので、何の躊躇もなく作業を進めた。亜鉛屑をフラスコに入れ、希硫酸を注ぐ。予期通りどンドン泡立ち、水素が出はじめた。

気の早いひとりが、フラスコの口にマッチの火を差し出した。とたん、どかん！と耳をつんざく音と共に、閉め切った窓硝子がガタガタと揺れた！みんな真つ青になった。硝子の破片が周りに居た者の顔や手に当たり、血が流れている。

私はすぐにランプの火を消し、用意した水槽にフラスコを投げ入れた。只呆然としている部員を励まし、綿密に後片付けをした。そして、君塚先生に報告し、状況を見て頂いた。

◎水素と空気を混合する時、爆発を起こすこと。

◎水素発生の有無は、ゴム栓を通して試験管に集め、これにより実験する。

これ等のことについては、既にテストにも出題されたことで、そのうかつさをつくづく反省した。

君塚先生は、「大事でなくてよかつたネ。」と、血の流れている顔を眺めて大笑いして居られた。

開会の時刻は迫る。いつまでも驚いてはられない。私たちは風船を断念して、「意地悪ばあさん」の演技に期待して会場に急いだ。

四年生を送る会プログラム

一、開会の言葉 幹事代表

二、挨拶 部長先生

三、送る言葉 校長殿 舎監長先生

四、お礼の言葉 四年生代表

五、茶菓と余興 司会 幹事

1 年中こよみ 一年生一同

2 うかれだるま 二年生一同

3 詩吟 本校の先生

4 独唱 三年生

5 舌切雀 三年生一同

6 独唱 音楽の先生

送る歌（二部合唱 全員）

月 雪 蛍と学の窓に

早くも過ぎけりこの年月日

今よりもますます我が身を修め

家をもととのえ 国にもつくせ

六、閉会の言葉 幹事代表

感想と声—とんだ失敗のため、大望は崩れ去ったが、「可愛らしい雀のおどりや、意地悪ばあさんの表現など、堂に入ったものだ。」との声は四年生の評。一年生の『年中こよみ』は、「様々な扮装の中に、上品あり、滑稽あり、初出演ながら上々の出来であった。」との評は本校の先生方。二年生の『うかれだるま』は、「オペラ式によく組み立てられた見事な出来ばえだった。」とは、音楽の山城先生のお言葉であった。目まぐるしい一日であった。水素の失敗は中々頭から消えない。しかし、室に落ち着くと、四年生から礼を言われたり、室の人たちの賑やかな今日の話に引き入れられて、初めて、四年生を送る、別れるというしんみりした気持になった。

—関西旅行— 大正八年 自三月二十六日〜至四月一日  
四年生を送り、いよいよ最上級生となった。私たちは、気持もゆつ

たりとして、関西旅行の話で持ち切りであった。

小山先生からは、京都・奈良を中心とする、文化財・建築物・絵画・彫刻等、特に仏像についての細かい説明と、見所の要点についてのお話があった。また、付添の中沢先生からは、服装・携帯品や旅行中の行動等について、細かい申し渡しがあった。

先生方の御指導、御注意を勘案し、学芸部員が中心となって旅行案を作った。次の要項を目的として。

- 1 日程
- 2 順調に旅行を遂行させるためには
- 3 より多き収穫を得るためには
- 4 経過のまとめと後の参考として残すための記録を要す係員つく

◎日程と係  
日程と係

月日	行先	見学場所	要項の係	旅行中の係班
3/26	出発	・東西本願寺 ・清水寺 ・京都御所 ・嵐山保津川下り		・渉外係三名 旅館の連絡 宿泊に関すること 衛生係 病気、怪我の処置 連絡係三名 その他の連絡
3/27 3/28	京都 二泊	・三十三間堂 ・知恩院 ・苔寺 ・銀閣寺		・記録係(要項係)六名 旅行中の記録 終了後のまとめ 礼状等の書類作りと発送 部長への報告
3/29	大阪	・道頓堀付近 ・東大寺 ・春日神宮		
3/30	奈良	・二月堂 ・三月堂		

3/31	伊勢	・内宮参拝 ・外宮参拝 ・茶話会 ・赤福餅	三班二名
4/1	二見 ・夫婦岩海岸 ・日の出 記念撮影		

◎見学要項作り

小山先生の講話を三班に分かれて収録し、冊子を作り、全員に配布して見学の指針とする。

そして、いよいよ関西旅行の途につく。

引率 高野先生 中澤先生

参加者 三十一名

大正八年三月二十六日～四月一日、四泊六日の旅は始まる。

◎京都二泊

君塚先生のお手配で、先生の後輩の京都大学の学生さんが、二日間の案内をして下さった。

まず、東・西本願寺を手はじめにコースは進む。境内の広いこと、建物の豪壮なことに心惹かれた。全国の信者の崇拜の対象となる風格は、充分備えられている。

次は、音に聞く清水寺である。ここは、大衆の喜び集まりそうな雰囲気のお寺である。

朴歯の下駄履き、緋の着物に角帽の学生さんは、どんどん説明をすすめる。終わるとさっさと次の見学場所に移る。そして、後統部隊のことはおかまいなしで説明を始める。余分なことは言われず、すらすらと簡単明瞭な話しぶりであるが、後から馳せ付けた者の着く頃は、背を見せて歩いている。私たちも下駄履きであるが……朴歯の高足駄で、よくもあんなに速く歩けたものだ。私は記録係なので、一日間に

亘る、この学生さんの後を追いかけることには苦勞した。

(付記) 後日、お世話になった礼状を出すため、君塚先生に姓名をお聞きした。駕瀨正男という人であった。

この日印象に残ったこと 嵐山の保津川下りのひとときのこと―渡月橋を渡り、船着き場から、一行三十一名は、二艘の川船に分乗して保津川下りを楽しんだ。声高らかに「花」の二部合唱。船頭のこぐ櫓の音が、ギーツギーツと間奏のように響く。

### ◎大阪一泊

京都をあとに、大阪行きの電車に乗ったのは午後四時頃であった。

京都の電車は、すうつと発つて湫やかにすうつと止まる。大阪の電車は、がったんと大揺れに揺れて発車、がったんと急停止。体は前めりに飛び出す。乗車の人たちはそわそわと落ち着かない。私たちもつられて、落ち着いてはいられない。これが大阪での第一印象である。私たちは、高野先生の案内で宿へ急いだ。さすがに大阪は商業の町である。道頓堀の雑踏と騒音は予想以上である。街の灯は昼のようにかがやく。田舎者の私たちは、その真ん中に吸い込まれるようだ。

小一時間も歩いたが、目指す宿は見当たらない。渉外係のSさんたちは気が気ではない。地図を見たり交番でお巡りさんに尋ねたりして、ようやく探し当てた。宿屋には、予約はないと断わられてしまった。私たちは、あつちかこつちかこつちかと引き回されるので、疲れと空腹で、不平を越えて黙り込んでしまった。

どんな解決をしたのか、九時過ぎに、場末の宿に落ち着くことができた。それは粗末な、みすぼらしい宿であった。窓はなく、三方の白壁は黒ずんでいる。予定していた夜の道頓堀の見学も、その勇気もなく、入浴もなく、夕食を終えるとみんなみんなくつすり寝込んでしまった。

### ◎奈良に向かう

翌朝奈良に向かう。

東大寺大仏殿を拝観する。千三百年前に建立されたという。寺院内に入り、正面から拝んだ。何と雄大な、そして静かなみ仏なのだろう！自分の小さな存在が、蟻のように感じられる。

先生に促され、春日神宮に向かう。五重塔・二月堂・三月堂とめぐり、午後は奈良を引きあげねばならない。人馴れのした鹿の群れが、私たちの方へ寄ってくる。おせんべいの餌を買う暇もなく、心残りのことをしたと悔むのも束の間、先生の号令に一同整列した。いよいよ奈良ともお別れだ。

気の早いイマさんは、先頭に出てどんどん列を離れて進んだ。そして、若草山に登り始めた。続く十人程が、腹まで登ったとき、後続の一隊が着いた。先生が大きな声で、「若草山には登らない。直行直行！」と指示された。イマさんは頂上近くまで登っている。若草山はその名のとおり美しい柴山で、なだらかな低い山なので、登るにも下るにも左程困難とも見受けられないが、斜面距離は長い。

先生のお声に、後続の友たちは一斉に声をかけた。「早く下りていらつしゃーい！」みんな気付いてすぐに下り始めた。が、先頭のイマさんひとり気付きそうにもない……。登りつめたイマさん……。こちらを向いてにっこりした。とたんに気付いたのであろう。あわてて下り始めた。日除けにさした黒の洋傘を肩にかつぎ、走りだした。みんなハラハラして見ているが、どうしよう術もない。なだらかといつても坂のこと、加速度がついてだんだん歩幅が広くなってくる。そして速度も増し、宙に浮くようになった。突然、こうもりがイマさんを離れてくるくると舞い降りた……。と、イマさんがストーンと麓の休憩台の下にのめり込んだ。

さあ大変！とみんな駆け寄った。急いでイマさんを抱き起こして怪我の状態を気遣う。衛生班は用意してきた救急箱を取り出し、応急手当をした。幸にも、頬と手足のかすり傷ですんだが、しかし気の毒な出来事であった。

何とも口に表わせない心境で、私は、電車の中でも付きつきりて介抱した。イマさんは、隣同士親しい友である。

#### ◎伊勢内宮参拝

「五十鈴川で身を清め……」とは、旅行案を作る時のことであった。忙しい切りつめた時間内の行動では、それは許されないことであった。緊張した気持でおごそかな参道を進み、五十鈴川を横目に見て、内宮の参拝を「かこい」の外からすませた。二十年毎に建てかえるという神殿づくりを心ゆくまで拝観した。

#### ◎二見一泊

二見の旅館（朝日館）に着いたのは七時を過ぎていた。イマさんの傷も痛みが軽くなり、骨には異常なほどのことで、みんな「よかった、よかった。」と慰めたり、その時の様子を思い出して笑ったりして、最後の夜を楽しんだ。

宿にたのみ、予約しておいた名物「赤福餅」で茶話会を開催し、お二方の先生に御礼の気持を申し述べた。「名物にうまいものなし」との言葉を聞くが、これは大違い。吟味された味で、お土産にという希望者も多かった。

#### ◎夫婦岩海岸にて日の出を拝む

翌朝五時起床。我等一行は、二見ヶ浦の日の出を拝むべく宿を出た。大勢の見物客が岸に集っていた。待つことしばし！夫婦岩の上空が紅色に染まった。皆眼をこらした……。眉ほどの光が矢のように光った。海面は金色に輝く。一斉に拍手がわく。神秘的な一瞬！実に爽やか

な朝である。

朝日館の裏手の波打ちで、我等一行三十一名、記念撮影を行う。朝日をまともに受けた、まばゆそうな十九歳の顔々。佳き思い出なることを祈る。

今日（大正八年四月一日）は、いよいよ帰宅である。沿道には、さざえの壺焼の店が立ち並び、よい匂いを漂わせていた。

#### 一日光旅行

大正八年九月二十七日～二十八日

付添責任先生 奥平校長殿

引率担任 小山先生

参加者 四年生三十一名

行程Ⅱ日光東照宮↓中禅寺（宿泊）↓奥日光↓戦場ヶ原↓華厳ノ滝見学↓帰校

今回の日光旅行は、私たち女師校生として最後の旅行である。引率は、美術方面にお委しい担任の小山先生。責任者として付添って下さるのは、奥平校長殿である。教育実習をあとに控えての心せわしい旅であるが、ご造詣深いお二方先生に伴われての旅なので、初めから期待されるものが多かった。

#### ◎東照宮

まず、東照宮に参拝する。そして、陽明門を背景に記念撮影。陽明門の華麗なのに目を見張る。先生の説明は次々と続き、私たちは熱心に聴きいった。

先生の蘊蓄あるお話により、この造形の美を極めた大事業を完成させた徳川幕府の権勢の、如何に浸透していたかを思い知らされた。先生のお話によると、どの壁画・彫刻・仏像も国宝級の作であるとのこと。極彩色をほどこした建物は、山の緑の中に浮き出て、一層鮮やか

である。日の暮れるまで見ていても飽きることがないといって、「日ぐらし門」と時の人が呼んだというのも尤もなことである。

奥の院の参拝を終わり、二荒山輪王寺に詣でる。

### ◎中禅寺湖に向う

東照宮の見学を終わった私たち一行は、大谷川沿いに中禅寺湖に向かった。

川の水足は速く、嵩<sup>かさ</sup>はあふるるごとく、両岸は高く絶壁をなしている。緑いよいよ濃く、足元は、水滴を受けてしっぽりと濡れる。上流に進むに従い、流れは清流から白波に変わり、大きな岩石に打ちつけられて盛り上がる水は、あたかも塩を押し流すようだ。どうどうと狂ったような流の音は、耳をつんざくばかり。壮絶というか、凄絶と叫ぼうか。大自然の手の中に被われたように、私たちはしばし歩を進みかね、棒立ちになって動けなくなった……。

馬返しからは狭い登り道で、草や木に手を借り、たどりたどりして華厳ノ滝近くに出た。滝の見学は明日の予定なので、うす暗くなった中禅寺湖を眺めながら宿に着いた。

### ◎湖畔の宿

湖畔の朝はさわやかに明けた。改めて、目の前にうつる湖と男体山の雄姿に心身共に洗われて、昨日の疲れはどこへやら……。

### ◎奥日光へ

早朝、私たちは戦場ヶ原・奥日光へと歩を進めた。湯の湖の水は、どんよりとして神秘である。

帰路、戦場ヶ原で少憩。小山先生の説明を興味深く心にとめ、昔を偲び、芒の群れを繁る広野を後にした。

### ◎華厳ノ滝

午後、待望の華厳ノ滝を見学する。

何段かの細い崖道を降り、滝口に近い眺望台に出た。ごうごうと瀧の落ちる音。山なす量の水は、何丈かの白布を広げたように、くねくねと大きく揺れながら滝口へと落ち込む。あたりには、真っ白なしぶきが飛び散り、大きな渦を巻いている。

吸い込まれるような恐れが、悪寒となって私の背を走った。身動きもせず、何時か<sup>なんどき</sup>?……先生に促されて、急いで一行に加わった。

帰路は、いろは坂を下り、帰校の途に着いた。

### 二 購 売 部

私は、二年生の後半から購売部幹事を命じられ、二年半、購売部の仕事に活躍した。(学芸部と兼任)

一、部の仕組 君塚先生

◎部長 君塚先生

◎幹事 各学年より二名 合計八名

二、購売部の仕事

1 取扱う品

・学用品 ・日用品 ・衛生用品 ・郵便 切手 葉書

・その他

2 開店 (販売)

・夕食後、一時間限りで行う。

3 売上処理

・現金

・伝票まとめ

私たちは、所持金については、限られた金額のほか持ち合わせはないので、伝票扱いが大半を占めていた。

・集計と記帳

4 部長の検閲、承認の印を得て、その日は終了する。

### 三、月末集計

月末近くなると、

・ 伝票を学年毎にまとめ、学年幹事により集金する。

・ 部長先生立会いの上で集計する。

・ 先生の認印を頂いて終了。

平常の月は、すんなり一回で全員の算盤が合うが、学年初めなど大量の扱いになると、中々計算の合致しないことがある。部員は、消灯後まで算盤と苦闘しなければならない。

### 四、棚卸し

また、年一回、「棚卸し」といって仕入と現品の確認をする。この時は、先生が先頭に立って指揮され、部員一同、販売を休んでこの大仕事を終了した。

購売部の仕事は簡単のようであるが、現品の種類の多いこと、現品と現金の扱い上、正確さと緻密さを必要とすること、そして、一銭一厘誤算は許されないこと等を痛切に感じた。

― 君塚先生 慰労の茶会をして下さる ―

夜遅くまでの、部員の者たちの奮闘をねぎらうお気持か、予算のな  
い部のこととて、先生は、御自分の郷里から取り寄せたとおっしゃつ  
て、山国では見られない、「蟹」「しゃこ」などのゆでたものをたくさ  
ん用意して、御馳走して下さいました。そして、「ずわい蟹」や「しゃこ」  
の食べ方、漁業の話など、おもしろく説明された。私たちは、興味深  
く、海の人たちの働きを聞きながら、慣れない手つきで、「蟹」「しゃ  
こ」の味を楽しんだ。

### 前編しめだひの出来に当たって

茲こゝに、これまで私をお導き下さった先生方に感謝とお礼を述べ、併  
せて、この編集に協力してくれた私の子女たちに、深甚の謝意をこめ  
て……しばし筆を置く。  
一九九一年十二月 きよ敬白



# 広瀬河岸の想い出

鈴木なを

あとがき

## 序 文

広瀬河岸の町名のvari方

旧藩時代、広瀬河岸という町名

本町、細ヶ沢、紺屋町、等々と同格

維新後一毛町、一栄町―現在城東町一ノ一が滝のある所。

東西の道路の北側は住吉町。

まんが本二七頁に住吉町愛宕神社付近とあるのは少し違うと思  
う。

## 目 次

序 文

墓碑銘

広瀬川

鈴木家

さい姉ちゃん

新 宅

めぐり会い

柳 座

ラジオの話

空襲余話

柳座（つづき）

成功者

広瀬河岸の変遷

牡蠣船

若い頃、といつても二十年程前（六十五、六歳）、萩原先生が口伝で

は駄目、何か書いたものがないかとおっしゃったので、曾祖父の墓の  
後に何か彫つてあるのを、拓本にとりたいと思つてはいたが、やりつ  
けないことではあり、つい〳〵八十四歳の今日迄やれなかったことを  
残念に思う。その頃ならもつと体に楽にやれたらうに。しかし鈴木  
の家に生きていた証に何代か後の子孫の中には興味をもって読んでく  
れるのが出るかもしれない。市政百周年記念の「まんが前橋の歴史」の  
中にも前橋市史第三巻、第三章、第九節にくわしく記してある敷島屋  
の件が「一将功成つて万卒枯る」の通り、責任者となつて横浜に行き  
幕府に知れないように、敷島屋の庄さんで通した鈴木昌作の名は出て  
こない。速水堅曹さんの目のつけ所がよかつた生糸の直売所は、後々  
の前橋の繁栄につながり、下村善太郎のボンと差出した金一万両が元  
になり（約一億円）、県庁を前橋へ持つてくることができたのだ。その  
生糸商人の心意気がなければ、今頃はやつと渋川位の都市にしかなれ  
なかつたのだとのこと。（まんが本にくわしい）

一般の家庭でも男が働くより、子守りをして母ちゃんに糸をとつて  
もらう方がいいと、男の人が言つたという（佐藤とし子談）

生糸の全盛期は明治・大正から昭和の初め迄続いた。

その間の思い出を一人の女の目から記してみたいと思う。

## 墓 碑 銘

居士姓鈴木通称昌作旧前橋藩士也父曰鈴木昌作以次男安政五年家督相  
統為人伶俐捷敏能興衆交元治元年藩主遇築城于前橋鈴木氏與土功事拮

据亀勉慶応二年二月土木功竣進級増秩明治二年以藩命開店於武州横港  
商法措置得宜矣明治十一年大募□里有志輩與□製糸改良築産繁殖事  
結社於邸側哉曰交水社其社員親睦擬水魚交云爾来産業益日□為上野製  
糸家模範明治十四年疾病而遂□不起実四月十七日也年五十有五諡号常  
信院呼前橋隆興精舎先登傍義 鈴木小十郎其築家声益  
銘日創業為可 其功績偉哉

## 広瀬川

目をつむると清らかな流れが私の生まれた家（広瀬河岸）の邸の、  
三角州のはじまり所で、突然にドツと漣になって落ちる。昼も夜も流  
れの音がザーツと止まらない。厳密にみると冬の時期だけ水が流れ  
なくなる。川底を掃除するためだ。（今は春だ）

音のない夜はすぐく淋しい。川幅の三分の一ほど干上って、邸に二  
カ所ある川棚という河面に下りてゆく石段を、生まれた頃からずつと  
いるねえやと一緒にかけ下りて、お祖父さんのお酒の肴にする雀の羽  
根を、むしりに行ったのを寒さと共に思い出す。

ねえやとは、ずい分永くよく遊んでもらったつけ。名は豊島はつ代。  
少々足りないが、お金の中にころがして置いて、大丈夫だと皆がい  
う。立派な名前だ。世が世なら前橋松平藩の勘定方のお孫さんだそう  
な。維新の廢藩置県のために、藩主から預いたお金を、使い果たした  
人たちの一例であろう。

そうくここで、その頃の鈴木のご先祖のことを書いて置こう。私  
が死んでしまえば、何がどうしたのか分からなくなるからー。

あなた方、お墓参りに行った時、気が付いたことありますか。墓碑  
銘です。あの十畳大の墓地の正面の、背の高いのは私の祖父の小十郎  
からで、右の過去帳の通りですが、その右手に二つ並んだ男女の墓、

常信院（昌作）様の裏に婿である小十郎祖父様が、刻んだ文面がある  
のです。もう百年以上たつた今、拓本にとることは磨滅が多くて不可  
能なので、主人（角太郎）と二月の寒い日に書きとって来ました。竹  
冠りか草冠りか等夫婦喧嘩をしながらー。ズック靴をはいて行ったの  
で、足の裏から冷え込んで「私死んじゃう」とばかり、庫裡へかけこ  
みお炬燵へ入れて頂き、熱いうどんをとつてもらい、やつと人ごこち  
がついた。お話をしたら、前橋市史があるからと第三、四巻を貸して  
下さった。

ふるさと読本、前橋の巻も一緒に。図書館なら県立にも市立にもあ  
るけれども、余り長くは借りられない。仏様のお陰と喜んでさがすと、  
第三巻の第三章「養蚕製糸の展開」の部に第九節（五百四頁）「藩の生  
糸統制」のところに、鈴木昌作の名が出てきたのです。あと十六頁に  
わたって記してあるのに驚きました。公の本に名があるだけでも大変  
なのに。思えば大分以前、市の図書館長だった萩原進先生が、「交水社  
のことは文書に残っているが、敷島屋は残っていないのでお宅に何か  
ありませんか」と、いらつしやつて下さったが、「戦災で蔵が焼けてしまっ  
たので何もない」と申し上げたので大変失望してお帰りになったこと  
があった。しかし市史にはくわしくのっている。市史編纂の先生方  
ご苦労をしみぐくと感謝します。

書き残そうとしている私でさえ、一冊千六百頁の本を読む勇氣が  
中々大変だったのに、子孫が読むとは思われない。十年も前に直系で  
ある一朗君に「おばさんの生きているうちに残してもらわないと、僕  
達何も分からなくなってしまう」と言われたことを思い出し、八十五  
歳になってたどくと筆をとった次第です。

そもく敷島屋庄三郎商店とは何であるか。幕末上州地方は養蚕製  
糸はやっていたが、鎖国で輸出ができないので余り盛んではなかった。

通商条約により外国へ出せるようになり、その利益が莫大なのに前橋藩が目をつけ、横浜に藩営の直売店を作ろうと速水堅曹氏等の建白が実り、明治二年三月、岩田屋和助の土地五十坪を借用、知事寺島氏と接渉、晦日開業の運びとなり、その責任者に選ばれたのが鈴木昌作。商店名は利根河岸の敷島河原をとり、庄三郎の庄は昌をもじってつねたものらしいと市史にある。まだ幕府はあつたから、藩としては公然とやるわけには行かなかつたのではあるまいか。何のことはない小説の主人公のようだ。これは藩に多大の利益をもたらしたようだ。

但しこれを実現するためには、前橋の大商人たち二十二人を集め相談し(先輩等ですものね)、長い時間をかけてやつと実現した様子。この時知り合つた大商人に、後年組合製糸を作るための有形無形の力を頂いたことと私は思う。松井文四郎 藤井新兵衛 勝山源三郎 下村善右衛門 江原芳右衛門等々

君侯十両両市民二十万両、予り手形四十五万両、計七十五万両をまかされたのだから大したものだ。これが続くかと思われたのに、廃藩置県で天地がひっくり返るような騒ぎ(明治四年)すべて停止、六年閉店、わずかの間であつた。

私が曾祖父昌作に好感をもつのは、藩士としての身分は大分下の方だつたらしく、市の議会史編纂の主任の佐藤寅雄先生に調べて頂いたが、分からないとのご返事でも察しがつく。しかし蔵二階に長持があり、上下や漆塗りの乱れ箱、衣服箆等の他に浅い引出しの刀箆箆に十数振りの大小が納めてあり、足軽ではなかつたと思われるが、士社会で身分が低いのに、責任ある仕事―それも多くの町民と藩の運命をかけた新しい仕事をまかされた人であつたこと、商人と一緒に働いたことが嬉しいと思います。上司の速水堅曹氏の先見の明に頭が下がります。維新のために全国の各地で士族の商法は殆んど失敗し、その家族

が大変苦しみをした中で、前橋藩は主君から頂いた金を使い果たさないうちに、組合製糸という大きな会社を数多く設立し、交水社という検査所に糸を集め合格しなければ横浜へ出せないことにしたので、全国輸出生糸の模範となり、士族の清廉潔白さを人々に認めさせたと記録されています。町に最初に出来たのは、深沢雄象の精糸原社(曲輪町 現千代田町)、次いで桐華組、広瀬組(鈴木昌作 高須仙平―祖父小十郎の兄)他六社合同。

それで町中活気づいた。後に赤城の大鳥居から少し登ると、南の前橋の街は櫛の歯を並べたように煙突が林立しているのが盛観だった。

昭和七年度の市勢要覧(戸塚能見氏蔵書提供)によると、大正九年の国勢調査の時に、人口六万二千三百二十五人なのが、実際は調査の対象からもれた人が一万人近くいたと、当時の新聞に出ていたのと。生糸が如何に盛んであつたか推定できるものである。

明治生まれの母の話に、一般の人は生糸がそんなにお金になるとは思つていなかったけれども、横浜へ出してみたら「オリになつた」と、あの社会の符丁でいう、元金と利益が同額になつたので、それじゃというので盛んになり、小さな長屋でも座繰りをやるようになった由。女が現金収入を得られるのだから喜ぶわけだ。かかあ天下とはもつと前から言われていたらしいが、その起源は知らない。これも大きな一因ではなからうか。私が廃嫡になり、分家をして広瀬河岸から清王寺町の群馬県師範学校の周りの堀外(南西角)の家へ引越してからも(大正十三年)、収入源にと祖父が作つてくれた四軒長屋の一軒でも、朝早くからおかみさんが糸をとつていたのを覚えてる。

次に話をお寺へ戻す。お寺の墓碑銘によると、安政五年家督相続、次男とあるので、初代昌作氏の石塔の側面を見ると辞世が彫つてあり、女性の方に、童子一体、童女三体があるので皆幼没したことが分かつ

た。これも百年以上たつて磨滅している。

なきのちの世に

おもはるゝかな

をしえのおやと

きみのみめぐみ

お世辞にもよいうたではないが、下つ端侍の初代昌作が辞  
世らしきものを刻まされたところに、文学を愛した真面目さ  
が忍ばれてうれしい。

みんな変体仮名なので、私は四苦八苦して読んだ。変体仮名も幾通り  
もあるそうで、学校以外に勉強をしなかったことを後悔した。

元治元年前橋城築城に力を尽くしたので、ご褒美を頂いたとある。  
というのは、利根川の度々の氾濫で城がもたないので陣屋として残り、  
君侯は川越へ移つてしまわれたので、何とかして帰つて頂きたたく築城  
に尽力したらしく、慶応三年落成し帰国までこぎつけ、町民も安堵し  
た。城下町であるか否かは大変な差であつたらうから、君侯もさびれ  
た前橋を盛んにしたくて、前に書いたように生糸を作ることを奨励し  
たのである。

そこへ廃藩置県という大問題が起きた。

何百人かの家士と家族が当分生活するためのお金を下げ渡したけれ  
ども、徒食すればすぐ無くなるので、組織をこしらえて助けたいと考  
えた前述の速水氏・深沢氏が中心となり、それに成功したのである。  
明治十一年、一般大募集し昌作は高須仙平と共に広瀬組を起こし、鈴  
木邸の隣に交水社（検査所）を建て、その傘下に揚場である丸交組、  
丸ト、丸二、二重丸と続々拡大した。丸交は今の日産本社と中央郵便  
局を合わせた広さ（もつと東迄）に千人近い工女さんを毎冬越後、信

州から募集して、町全体では数千人に及び、四月の花見、八月の盆踊  
りは実にみものであつた。それ／＼のお国ぶりだ。

昌作は明治十四年病氣になり五十四歳で死去。隆興寺に埋葬、早死  
でしたね。（初代も五十五歳）後継者として同志の高須仙平氏の弟小十  
郎を入婿に迎えたものと思う。この人が、昌作に劣らず商才があり、  
交水社初代社長は高須仙平、二代目となり生糸の全盛期を迎えた。

この祖父は昭和五年八十五歳まで元氣であつた。

兄仙平氏が萩小路（国領町一）から出社すると、鈴木へ立寄り玄関  
で「舎弟はおるか」と二人共昔のまま。あのシャテイのおじいさんだ  
とばかり子供は一階へ隠れたものだ。今は舎弟という言葉は暴力団位  
のものかしら。後に人に聞くところによると、栃木の一地方にはまだ  
残っているそうなの。

広瀬河岸というのは、本町・紺屋町・向町等と共にレッキとした町  
名であり、昔は伊勢崎方面から物資を運ぶ舟付場であつたそうで、ト  
ラックのない時代、便利だつたであらうと思われる。私が物心ついて  
からは交水社になつていたから見たことはない。ただうちのねえやが  
すしなどを電話で注文するのに「河岸の鈴木ですが」と言っていた  
のを度々耳にしている。

## 鈴木家

鈴木の家は祖父小十郎が建つたらしく、薫（従妹）の覚えていた話  
に、明治初年に「土蔵造りが千両で建てられたのに、大正十三年に清  
王寺（今の日吉町）に改体移築した家が千円かかったよ」と祖父が呆  
れていたとのこと。時代の流れを感じさせられた。後で出てくるが、  
私の分家としての家のことである。土蔵造りというのは今の住居には  
見られない。北陸方面の由緒ある旧家には残っているらしいが、蔵の

厚い壁が住居全体なのである。コンクリートより厚く、夏は涼しく、冬は暖かいのが特徴である。

祖父は交水社へ毎日行くのに、北の石橋を渡って表通りへ出ないで東の境の、板塀に木戸をつけて、行き来をしていたらしい。最初からそのつもりで隣へ交水社を建てたものと思われる。

私と二つ年下の初子は六歳と四歳、ねえやと三人で踊りのお稽古に紺屋町（千代田町）へ、その木戸から川つぶちを通って（遊歩道路はない）社の私橋を渡り一日がかりで通ったものだ。現在のコンクリート橋は、社の人等の便利のために、架けた私橋ではない。今は市のものである。その木製の橋の途中でいつまでも遊んでいて、ねえやを困らせたものだ。欄干にもたれて川をのぞき込むと、橋の足部分にごみがひっかかって、川の流れにさからって目の錯覚で橋がグーツと前へ進んでいるように見えるのが実に面白かったのだ。

この橋は、私等だけが喜んだだけでなく、後年十年以上後迄、親類の子ども等が喜んで通った夢の橋であった。高間の満智子、俊亮、正己、そのお友達迄が毎日群師附属小学校へ通うのに最短距離として一寸位叱られても唯々夢の橋として通り続けたと、懐かしんで話してくれた。（平成四年やす様新盆の時）

それにその頃踊りを習うのは、洋服のない時代だから、立居振舞がよくなるために習わせられたもので。行きたくて行っているのではない。毎日一銭もらって途中の駄菓子屋で買うのが無上の楽しみだった。稽古事は六つの六月六日に始めると決まっていたのである。今でも指揮者になるための絶対音の勉強は、満五歳迄に始めなければ駄目と聞く。昔の人はそんなことは知らなかったろうにと感心する。夏の帰り途、駄菓子屋の近くの水屋で一杯一銭の白いかき氷に舌鼓を打ち、二銭出すと赤い苺の汁のかかったのが食べられる。二銭使うのには菓子

の方を五厘ので二日我慢しなくてはならない。苦心惨憺の巻をなつかしく思い出す。水屋は弁天通りの大門花屋の前の荒物屋の横丁を東へ入るとすぐの所だった。私は女学校の入学試験勉強のため十二歳で止めたが、従妹の初子はずっと続けた。

その年初子に妹が生まれた。薫である。鈴木の家は私で五代になるが（以前は分らない）女ばかりで婿取りが続いている。子供が少ない。母が明治元年生まれ、弟哲男が二十一年生、私が四十一年生まれ、二十年間隔だ。哲男に女児二人目が出来たというので「今度はハシヨツタね」と親類の人が言って笑ったとのこと。会社もそうだが、家も人的資源が少ないのは困ったものだと思う。その婿の一人、私の父は横浜で生糸の中継という仕事をしていたそうだが、四十四年の秋、私が満三歳の時、食道癌が悪くなり帰橋して四十七歳で亡くなり、母はずっと祖父の世話になってしまった。父は祖父の甥である。母は祖父にとつて前夫の子なので、血筋の近い甥と結婚させたものらしい。父が祖父の跡取りなので、チビの私が自然に跡取りになってしまった。しかし祖父の子哲男は青年、私の十八歳になるのを待つて廃嫡。叔父が跡取りになり名実共に事業を継いで丸交組の長となった。

今考えれば当然のことなのに、娘の私は内心おだやかでなかった。今考えればバカバカしいことだが、それほど鈴木家は分限者になっていたのである。それから新宅と呼ばれた。

今でこそ全国民に選挙権があるが、明治二十年頃には多額納税者でなければ一票を投ずることが出来なかったのである。祖父はその仲間になっていた。下積みの藩士が時流に乗ったとはいえ、努力して得た宝物だ。しかも多くの旧藩士を救うことが出来たのである。前橋の生糸産業の黄金時代を作ったところに意義がある。

さい姉ちゃん

私が少女期から娘時代を送った大正初めの頃のお話をしよう。広瀬河岸の家族は、祖父小十郎と後添いのそうばあちゃん（やせぎすの色白の明治美人）家督を継いだ叔父哲男、嫁さい。長女初子に薫、それに母と私、ねえやと九人の大世界。この嫁のさいが大した婦人で、桑町（千代田町）の伊勢屋（現鈴木薬局）という生薬屋の三女、姉は萩原朔太郎の心の恋人なか（洗礼名エレナ）で大の仲よしだった。

私の生まれる前に十六歳で嫁に来て、気むずかしい祖父の気に入り、さいでなければ夜も日も明けぬ位、大人数の食事、ご飯だけはねえやが炊いたが、お菜は私等の分迄作ってくれた。豆腐の田楽などというむづかしいものからコロッケ（その頃ハイカラといわれた）までそれも手早で美味しいのだ。それだけではない、生糸が盛んになるにつれて、繭の乾燥という男顔負けのことを男衆をやとってやった。蔵造りの四十五坪程の家の半分は繭の大袋でいっぱい、蔵前とよぶ蔵に下屋をつけた板敷きには、乾燥が間に合わなくて、はい出した蛾がピラ／＼はい廻るのを拾わせられた記憶もある。西の裏に間口五間程の二階建の乾燥場があり、下は終日終夜炭をカン／＼おこして、二階の棚に繭を平らな長方形の籠にひと並べして何段もさし込み、乾くと取出して床の穴から下の大袋につめ込み、丸交や丸二へ運送する。一晚中寝ずの番の交代もあり、よくもまあ体が続いたものと思った。

不思議なことにその叔母と私と薫は体つきも顔もよく似ている。何代か前に重縁だったのではないかと思う。嫁の話があった時、仲人に祖父が「フンフン」と承知しながら「時にどの娘だい」と言ったそう。な。（二男四女）それ程昔の嫁は、本人の意志などというのは認められていなかったもの。考えれば私の場合も、私の夫角太郎が伊勢屋の御

曹子丈夫の家庭教師（その頃では珍しい）だったのを、伊勢屋夫妻の肝入りで世話され、祖父が家へ呼んで面会し、気に入ってすぐ婿入りが決まってしまったのも。（昭和四年）明治なら当たり前と思わなくてはならない。

二階の十二畳半の座敷に私たち母子は居候の形で、母が裁縫を教えていたから、若い女たちで賑やかだった。裁縫学校のない頃で親類知人の娘さんは皆通って来た。

昌作の妻、母にとつては祖母（りき）が針仕事が上手で母を可愛がり、助手をつとめたお陰である。お墓には弟子たちが建てた燈明台に名が彫りつけてある。

戒名 錦繡院金針貫通大姉

## 新 宅

大正十三年に交水社の倉庫を建増しするので、いらなくなった事務所木造三十坪余りを祖父が謙り受け、解体移築することになった。事務所といっても椅子で多勢書物をするのではなく、座敷で時々落語家などを呼んで社員のいこいの場所になっていた家である。

丸交の石炭ガラで群馬県師範学校の堀の西南角外に田んぼを埋め立て、解体移築をした。祖父の隠居所ということで出来上がると、順に泊り込んだ。終りに私たちの番がきたら「もう帰って来んでもいいよ」と言われて、ああこれが新宅として分家の住まいなのだ、と分かった。

家の廻りは四つ目垣で中はすけ／＼、月見草とコスモスが生えていた。昭和五十二年に戦後の区画整理で今のコンクリートの家に移るまで住んでいた。小学五年生だった。

家の前の学校の堀には、どじょうがいて夜になるとカンテラという

灯をつけた昔の照明具を持った人が、竹竿で水をつつく音がポクポクと聞えた。水が澄んでいてホタルが飛んでいた。まだ縁側の欄間にガラス戸が入っていない所から何匹も飛び込んで来て、蚊帳をつつて寝ているのに、蚊帳の外側に止まって光っていたのが懐かしく目に浮かぶ。蛍が中の人間を見ていたなんて嘘のような平和な話。

夜中にどこかで梟がホーホーと鳴くのが淋しくて困った。多分師範のポプラにでも止まっていたのではないか。

見渡すかぎりの田んぼで、五・六月には蛙のガア／＼鳴く声がうるさくて話し声も消されそうだった。蛇も時々目にした。

春は蓮華がいっぱい。その美しさは夢の様としか形容出来ない。佐久間川も金魚藻が生えていて、男の子が泳いでいたものだ。

その佐久間川も今は暗渠になって見えないが、丸交組の工場は、現在の群馬日産本社と中央郵便局を合わせた広さに、もう少し東迄あった。その局の程に煉瓦造りの大煙突があった。丁度その南東の方向が東京方面だとみえて、震災の夜は遠くポーツと灯がともった様に見えた。東京が焼けていたのだ。朝鮮人が利根川から押し寄せるなんて流言鄙語が広がって自警団ができて夜人がウロ／＼していた。罪もないのにひどい目に会った人があったとか。

それが戦災となると目もあてられない。私の長男明夫と初子の長男一郎は同級生で小六、主人の郷里吾妻の山へ預かったもらったので恐い経験をしないうですんだが、従妹薫とその子二人は照明弾の下を東の方へ逃げた。

あの頃の私も若かったから、重い亮子を背負い、薫にはチビの洋志を背負わせて、主人の友人宅（茂木）へ避難した。も少し先の道には焼夷弾が雨のように降って、死人があつたとのこと、最近その時の御礼に伺って可愛いらしいこけしを頂いて来た。家の玄関に飾ってあり

ますから、お立寄りの節はご覧下さい。

### めぐり会い

今回くらい私の導きということを感じたことはない。この世に生まれて何も残さず死んでしまうのが惜しく、先祖様のことだけでも書いて置きたいとはじめた所、お寺に市史があり、ふるさと読本前橋の巻を貸して頂いた。二月から書き始めているのに、四月になつても一向に進まないで、家の雑用のせいだということにし、鳴物師田中佐喜稲師が上牧温泉に逗留するのに一緒に連れて行ってもらい、お昼の食事まで作って頂き、やつと下書きを仕上げるところまでこぎつけた。

そのお風呂の脱衣所で汗を乾かしている女の人と話しているうちに、福井の人で羽二重はちりめんと違い、糸に少しのむらがあつても出来ないことを教えてもらった。そこで気がついたのは、父禄三郎の遺品に九谷焼が多く、山の様な大福帳は福井と上書きしたものばかり。子供心にもなぜかと不審に思っていたのが氷解した。父は全国一の上質の前橋の糸を大量に売っていたのだと。上牧迄来て、そうした話を聞き、仏様のありがたさをしみじみ感じた。横浜だけに行っていたと思つた。ロンドンでは生糸をマエバシと呼んでいたそう。（吉田先生談）父は珠算が達者で、皆がソロバンで計算しているのに、暗算で先に答を出して驚かれたという人の話だが、今なら珠算塾で当り前だろうが、その頃はめづらしかったかもしれない。

鈴木は婿さんばかりである。

### 柳座

前橋の唯一の芝居小屋。一敷島座、一愛宕座、と火災により名が変つた。ついこの頃その敷島座を作ったのは椎名さん、表町材木店の祖先

だと聞いて驚いた。(娘さんは東音出のパリパリの長唄の先生だ)その為財を失ったとやら。今私はその千枝子さんに何くれとなくお世話になっている。不思議なものだ。

私が知っているのは柳座で、よく古典物や股旅物がかかり幟がはためいて賑やかだった。松井須磨子(一八八六一一九一九)日本の女優の最初の人。島村抱月と共に明治から大正にかけて大きな足跡を残した人。それが大正九年柳座でトルストイの「復活」をやったのだから町中はカチューシャ可愛いやの唄声がどこに行っても耳にする位の大事件だった。

ラジオも何もない時代ですからね。今有名になった四国の金比羅様の近くの芝居小屋の様な建物でしたが、群馬会館もなし、他に興行の出来る所がなかったのです。広瀬河岸から丁字路を入って一、二分で愛宕神社、その隣の公民館と母子寮を合わせた広さで、二階建てでした。出前持ちが口笛でカチューシャを吹いて通り、私も扮装を真似て長い髪を三つ編みにしてたらし、後の境目に長いリボンを蝶結びにしてつけてたらし、カチューシャ取りで喜んだものでした。何しろ女形ではなく女の大人が洋服を着て西洋(ロシヤ)の芝居をするのですもの、みんなため息をつけて見たのです。やっと女の子(私等)が母の手縫いの洋服を着始めた頃でしたから。

両花道があり、中央の一番見よい席が平戸間ひらどまといって一番安く、庶民の見る所。ちよつと高い横向きの所がうずらうずらといって高価で芸者衆やお大尽が娘を着飾らせて連れて行く所。毛布なんか敷いて、座布団もいいのを貸す。あすこで座つて見たいなと思つたものだ。平土間でも、冬はアンカと呼ぶ小さな火鉢のような小さな炭に木のかこいのあるものを、いくらか出すと貸してよこす。朝からお弁当持ちで行き来しんだものだ。「エー、おせんにアンパン」と男衆が売り歩いて、のど

かな風景だった。平土間の俵を残しているのは、相撲の土かぶりどかぶりという升席である。今なら一等席が一番安かつたのだからおかしなものだ。但し低くて傾斜はないから後は大変見にくかつた。

### ラジオの話

それで思い出したのは、ラジオはその頃からポツク、出はじめた。女学校を出ると箏の方が上品だからという祖母の言で、出来るだけ堅い所ということで関口幸寿さんに山田流を習つた。ラジオがどうにして放送されるのか誰も知らない頃で、ラジオの実演が行われることになつて、関口一派が指名された。どんなことをするのか、リハーサルなしだからやる本人も五里霧中、場所は柳座の楽屋(舞台から大分離れたプレハブみたいな部屋)で演奏するのを客席へ聞かせるのだ。舞台にはラジオ受信機が一台屏風の前にポツンとあるだけ。

それでもお客はいっぱい大真面目で聞いてくれた。ラジオの普及のためのピーアールだったのだと今になって思い当たる。箏と三味線と尺八と唄で長唄越後獅子だった。途中で全体に音が低くなつた時があつたので、従兄の北海道帝大生の下山俊雄さんが「ナーチャンの声が低くなつたので、皆がそつと弾いたのかと思つた」と後で言つたが機械の加減だったのだ。そんなインテリまで来てくれたのには感謝感激雨霰の状態だった。これにはちよつとおまけがつく。それに出るのにつけ祖父が芝居小屋へ出るとは不屈とばかり駄目になるところを、関口さんがさい姉ちゃんに頼んでとりつくるってもらい、やつと出られたという一幕もあつたのである。それが昭和十三年頃になると、さい姉ちゃんの次女薫が私と同じ様に、広瀬河岸の名のない橋を渡つて紺屋町(千代田町)の若柳吉駒師の元で習い、柳座でおさらい会が開かれ、吉啓さん(当時は啓子)と連獅子を踊つた時は、一家を挙げて



見に行ったのだから隔世の感ありだ。ここで若柳吉駒師のことを記したい。私の家のあつた群馬県立男子師範学校（主人の出身校）の敷地は、明治四十三年九月、一府十四県の共進会場で舞台が出来、三味線鳴物入りで踊が披露され、十三歳の吉駒師の姿があつたという。今も九十四歳で立派に舞っておられる。従姉たちはよい師匠につけて幸せだつた。（私の師匠は西川安之助）

明治四十三年の共進会が如何に盛大であつたか、小学生の頃附属小と師範学校の寄宿舎との境に台湾館というのが残っていたのを覚えてゐる。白い壁と、赤と緑のそり返つた屋根が珍しかった。

### 空襲余話

その学校の庭で思い出した。前橋空襲直後五百人以上の死者があつたそうだが、収容する所に困り一部が集められたから大変、暑さは著しく腐つたじゃが芋のような臭いが風下へ臭つてきた。思い出すのも恐ろしい。敗戦国のみじめさをしみぐ感じた。

### 柳座（つづき）

ラジオの件の、後間もなくのこと、柳座へ箏の宮城道雄先生が、その頃牧瀬と名乗っておられた喜代子さん、数江さん（振袖姿が美しかった）を連れて出演された。黒紋付の羽織の乳に白い羽織紐をつける金具が本金で、灯の光を受けてピカッと光つたのを忘れない。その時先生はこれから演奏するのは、箏の生田流でもなく新日本音楽ですとおっしゃつたのを感じ深く聞き入つた。「春の海」や「瀬音」だつたと思う。

### 成功者

広瀬河岸から出た成功者が、名は岡田金次郎夫婦、無一物から丸二製糸所（三千坪）を興し、前橋の生糸の発展に尽した。交水社傘下の工場は、皆組合製糸で一軒でなく、何軒かが寄つて工場を作つたのに、この人は一人で作つたのだから大したものだ。

工場以外にも大分土地を買つたのだ。丸交組、丸一、丸二、二重丸その他個人の小さいのを合わせると、前橋で生糸に関係しない人が極く稀であつた。祖父に岡田のおじさん（家では皆そう呼んだ）が二万円たまつたから独立したいと話していたのを薫が聞いている。その頃の二万円がどんなに大金だつたか驚くばかりだ。岡田家は邸の西の萱ぶきの小さい家に住んで、製糸の勉強をしていたのだ。そもくのはじめは明治の中頃、父が桐生に奉公していた岡田さんを将来見所のあつた子だからと連れて帰つて、祖父に仕込んでくれと特に頼んだ人である。昭和に入つて脳硬塞を病んで一時よくなると毎日人力車で祖父の所へ御氣嫌伺いに見えたが（商売上のことも兼ね）玄関迄は決して乗りつけなかつた。少し手前で下りて歩いて来られた。杖をついた姿を今も懐かしく思い出す。昔のことを忘れず私等母子の陰になり日向になり、結婚するまでめんどうをみてくれた恩人である。経済的にも鈴木より上になつても鼻にかけるようなことはなかつた。岡田のおじさんくんと本家でもなくてはならない人になつていたので、長女初子の婿の政治が気を悪くしたこともあつたそうである。

### 広瀬河岸の変遷

広瀬河岸に生まれ八十五年を過ごしてふり返れば、よい祖先を持ち生糸の全盛期に青春を味わい、幸福であつたと思う。

考えれば祖父も岡田のおじさんも生糸商として一番よい時代に生きてよかつたと思う。昭和四年には世界大不況だが、祖父は病臥して五年に亡くなり、岡田さんは十二年病死。その頃から不景気、アメリカはナイロンの発明で売行きバツタリ、段々会社が立ちゆかなくなり、経営者になった叔父哲男は全財産を売り払い、土蔵造りの家は足立眼科医に貸して、邸の西の隅の岡田さんのいた家を増築して引き込みつけてしまった。余り丈夫ではなかつたのに苦勞が重なり胃潰瘍から狭心症を起こし、間もなくこの世を去り、長女初子は主人の勤務先本州製紙の社宅へ去り、次女薫は信沢巖と結婚、東京住い。戦災で蔵も焼け落ち、さい姉ちゃんもは戦災住宅でガンバツタが、居住権があるので足立さんから取り返すわけにはいかず、一朗共々社宅へ移つて行き、広瀬河岸には昔のものは人も物も失くなつてしまった。

「売家と唐様からようでなく三代目」これをそのまま絵にしたような本家である。丸交を助けるためにつき込んだ結果だから仕方がない。

## 牡蠣船

失くなつたものの一にかき舟がある。名は浮舟。終戦後すぐ、滝の下の向う岸に和船を浮べて小さい橋を渡つて小部屋で川魚料理を食べるしゃれた風情に見えた。いつの間になくなつたと思つたら、県から大水が出るとごみがひつかかつて災難が生じるからと、取払いを命じられたそうである。昭和二十六年、料亭金光の昔の仕事だつたそうである。相当はやつたそうなのに。広瀬川は前橋の誇である。

## あとがき

二月にはじめてとう／＼半年、やつと終つた。下書き迄はよかつたが、原稿用紙に楷書で書くのが大変で、その上漢字は忘れているし、

学生時代から六十年も文章から離れて生活してきたことに、我ながら呆れている。途中何カ月も放り出してしまい、続きが変になつたり四苦八苦の末まとめた。おばあさんの情ない顔を想像して笑いながら見てほしい。何にしてもおじいさん角太郎の協力なしには仕上らなかつたかもしれない。思えば随分大勢の方々のご助言を得て私もはじめて知つた事もあり、ありがたいことと感謝する次第。今年の稀な暑さも半分しのぎ易かつた様に思う。これで何日でもお釈迦様の側へ行けると安心した。

平成四年八月十四日夜

鈴木なを 八十五歳

## 国領町は生きている (抄)

国領町一丁目生涯学習奨励員 桃井幸吉編集

### 目次

- 一、町名のルーツとその沿革
- 二、市制施行と糸の街
- 三、国領に市内初の野球場
- 四、震災につぐ三年連続の台風
- 五、復興事業の推進と区画整理
- 六、緑地公園と記念碑
- 七、琴平宮の歴史と大山車
- 八、歴代区長と自治会長名
- 九、国領町一丁目の略図

### 一、町名のルーツとその沿革

「国領」の町名のルーツは郷土史家の説によれば、中世期時代、その地方は国司所管の公田(公の領地)であったが、私墾地であった庄園しやうえんが各地で発達し、いわゆる国司の治める領地がだんだん少なくなつた。その庄園に対して国司の治める土地のことを国領こくがと称し、国領公田といつたことから、この地名が生まれたといわれる。

明治十四年の古文書によれば、その頃は国領村といい、南勢多郡に属していた。同村の小字名には薬師小路、沼ノ内、中琴平裏、十軒小路など「小路」という名のついた小字名が多かつた。その頃は大部分農家が占められていたが、明治二十一年に渋川街道(今の国道一七号)が開かれてから「国領町」になつた。次いで同二十三年には例のチン

チン馬車が前橋駅前から渋川まで通つたが、その後、東武鉄道の資本により電車に切り替えられ、伊香保まで運転されたもので、それ以来、国領も次第に交通の便がよくなつてきたわけである。(町名にこだわるわけではないが、同じ「国領」という町名は、県内では伊勢崎市にもあるが、東京では調布市にもあり、同市を通る京王線には「国領」という駅がある)

### 二、市制施行と糸の街の変遷

前橋は明治二十五年(一八九二)に市制が施行された。当時の人口は三一、九六七人で、関東では東京、横浜、水戸に次いで四番目であり、今から丁度百年前だが、初代市長は下村善太郎氏だつた。その頃国領町全体の人口は僅か七五四人程度だつた。その以前、安政六年(一八五五)横浜開港に伴ない、生糸の対米輸出が盛んになりつつあり、養蚕、製糸業者は次第に脚光を浴びようとしていた。その生産地、群馬の中央に位置する前橋の我が国領町は、市の北の玄関口としての立地条件に恵まれ、隣接の勢多郡富士見村、南橋村とは特に生活上の交流が多かつた。当時国領町を中心として才川町(現若宮町)、清王寺町(現城東町)、萩町(現昭和町)、向町(現平和町)には大小の製糸工場をはじめ、燃糸、玉糸工場が次々とでき、付近一帯には交水社関係の丸二、共同組、丸交組、丸大製糸、丸登、郡是等の大手以下中小の工場が、大正年代の中期をピークとして全盛期を迎えた。(その頃市内の製糸工場数は三三五軒を数えた)その中で、製糸業に最も必要な井戸水が特に豊富な市の北部を中心に発展した工場の高い煙突から吐き出される黒い煙は、文字通り「糸の街」らしい隆盛を誇示していた。そのため製糸業ブームで、人手不足の結果、県内はもちろん、新潟、長野、福島などの各県から募集した数千人の女工さん達が朝早くから夕方まで

で働き、前橋の繁栄を支えたわけである。その原料繭の生産農家との取引は、毎月四・九日を市日と定めて才川、細ヶ沢、本町をはじめとし市場が開かれ、ひと際賑わっていた。

その影響で、製糸業界の繁盛期には「江北の住人、前橋市政を牛耳る」という不隠な流言が流れた。おそらく広瀬川を支那大陸（現在の中国）中央を流れる揚子江になぞらえて、広瀬川以北から選出された多くの生糸関係業者の市会議員が結束して他業界出の議員の発言まで押さえ、圧力をかける横暴ぶりに対する流言らしかったが、その言動に憤慨した市民の中の政客が、仕込杖を持って議場に乱入した事件が起り、その後、昼間の議会は危険と思い、当時小柳町（現住吉町）に常設されていた柳座（芝居興行）の昼間興業が終るのを待つて、夜半まで借りて議会を開いたこともあり、世間ではこれを「ローソク市議会」といったそうだが、この場所も嗅ぎつかれ危険を感じたので、ついに生糸輸出関係の多かった横浜市の議場を借りて開いたこともあつたという意外なエピソードが残っている。今思うと全くナンセンスな話である。

そのように糸の街として隆盛を極めた製糸業者や、繭関係業者は、第一次大戦の終結で、米国の不況とともに生糸相場の大暴落で十分に値下りしても買手がないため、売るにも売れず、土地を担保に借金した銀行にほとんど差し押えられ、身動きも出来ず、工場を閉鎖するもの、中には農家の繭代金を踏み倒して事業主一家で夜逃げしたのも段々と消えていった。その後も続いた不況の中に生き抜いてきた工場も、第二次大戦で容赦なく焼き尽くされ、壊滅的狀態となり、市を賑やかに潤おした女工さんたちの姿は、全く見えなくなった。

終戦後の現在は、僅かに家内工業的に一家が中心となって営業して

いる小工場が十数軒あるのみである。

### 三、国領に市内初の野球場

現在一丁目の中心地にある県営と市営住宅の団地には、明治時代から大正の初期にかけて市立敷島小学校があつた。その後市の発展に伴い、児童の数も増加し、校舎の狭隘と通学区の関係で、現在地の昭和町に新築・移転したが、その周りを含め広大な空地を、当時の国領町の青年会（会長 船津保平）が市から五年間の無償の約束で借り受け、野球場造りを計画した。北部地区に居住の若者を中心に野球好きの人達が、自分達が自由に使える球場が欲しい”という熱意に動かされた青年会が一役買って出たものだ。その結果、学校の校舎は市が片付けしたが、その跡地には大きなコンクリートの土台が残されており、その片付け作業は大変な仕事だった。しかも校庭は、北側から南に向かって相当の勾配（落差）があり、青年会員は毎晩勝手の違う作業に汗を流して取り組んだものだ。

南に穴を掘りコンクリートの塊を運んで埋めるなど、奉仕的な作業に感動してトラックを貸してくれる業者もあつた。東京電力会社は無料で電灯線を張り、夜間作業が出来るよう電灯をつけて応援してくれたものだ。

一方、会の幹部は、昼間、市の有力者宅を訪問し、寄付金集めに汗をかいた次第。

さてグラウンドの整地もでき、大バックネットも張られ、市内で初めて自前の本格的野球場の竣工が見えてきたのは大正十二年の夏で、その年の九月一日に球場開きの大会を挙行する準備ができた。地元にも生まれた太陽クラブチームと東京の立教大学野球チームを迎えて、球場開きの対戦が行われるというので、関係者は当日の盛況を夢見ながら

待ち構えるとともに、自分たちの家業を犠牲にして協力した大事業の成功を祈っていた。

ところが忘れもしない球場開きを予定していた九月一日の正午直前、突然大地を揺かす大地震(M7.9で、後に関東大地震といわれた)が勃発した。「さあ大変だ」東京から来るはずの立教大学チームを前橋駅へ迎えに出た数名の青年会員が待てども、その汽車が来ない。駅員に聞いたところ、東京は大地震で火災が起り、全市が火の海だとのこと。驚きあわてて町に戻っての報告だった。本部も全く突然の天災に無念やり方なかった様子だったのは当然である。その後、新聞その他の報道で、東京の悲惨な状況を更に知り、驚いた大会本部は止むなく開場を当分延期して、寄付で集めた金を全部出して早速東京の罹災市民のためにと米を買い、トラックに満載して県庁に運び込んだのを知った県の役人さん方は、余りにも手廻しが早かったのに驚き喜ばれたそう、後で立派な感謝状が手渡された。

思わぬ大天災でてんやわんやの揚句、一ケ年過ぎ改めて落付いたところで、相手チームを招いて球場開きの野球大会を行ったが、当時市内で全盛を誇った麻屋呉服店寄贈の立派な「前橋球場」と金糸銘入りの球場旗が、今もそのまま残されている。

この旗を見ると当時の国領町青年会員の意気込みが身にしみて感ぜられる。その頃の大陽クラブ野球チームの記念写真が残されているが、当時の青年会員は、残念ながら一人も生存していないと思う。

#### 四、戦災につぐ三年連続の台風

さて前項にも触れたとおり、前橋は大きな戦災を受けた。終戦の直前、すなわち昭和二十年(一九四五)八月五日(広島原爆の前日)夜十時三十分頃B29約六十機により空襲を受け、旧市内の大半が未曾有

の戦災による犠牲者を出した。市の資料によれば、当時市の総人口は九三、一三一名(戸数二〇、八七二戸)だったが、空襲による死者は、五百三十五人、うち国領町(一・二丁目)の死者は十九人を数えた。全市の罹災者数は六〇、七三八人(戸数一一、四六八戸)、うち国領町は三、六九八人(七百七十九戸)にのぼった。全焼建物は、中央部が特に多かったが、うち国領町では平方裁縫女学校、交水社第三工場、琴平宮も全焼した。全国的に悲惨な戦禍が伝わる中に、同年八月十五日終戦となった。

長い間の戦時生活に苦難を強いられた市民に追い打ちをかけるように、二十二年には例のカスリン台風襲われた。三九一・九<sup>ミ</sup>の大豪雨で白川、桃木川、佐久間川が氾濫したため、国領、琴平、細ヶ沢、才川の被害が大きく、国領の流失戸数二九戸(百九十八名)、床上・床下浸水戸数は非常に多かった。

次いで二十三年のアイオン台風では、また前記河川の氾濫で国領は百十四戸浸水(うち床上百九戸)したが、更に翌二十四年にはキティ台風が襲来、風速三十三・五<sup>ミ</sup>の大暴風雨で岩神、敷島公園の道路は不通、大渡橋が流失、六供の市営住宅四戸が屋根をはがれ、床上浸水十七戸、半壊八戸を出すまで風台風の被害が大きく、国領など北部もひどくやられたが、この三年間の連続的台風で製糸工場の浸水が多く、操業停止を余儀なくされたことは記憶に新しい。(市立図書館「戦災と復興」参照)

#### 五、戦災復興の推進と区画整理

戦災都市の前橋は、戦後逸早く復興事業の推進をはかり、市民がよく協力して二十余年の苦しい生活から這い上がり、耐え抜いて今日に至ったのである。戦災復興事業が進むとともに区画整理が行われ、ほ

とんどの町名が変更されたため、大部分の町から不便になったとか、不平の声が出たようだが、我が国領町は北半分が二丁目と分割され、その一部が若宮町三丁目に編入された程度で、『国領町一丁目』として町名の変更もなく残ったのは幸いなことと思う。『国領町は生きていく』というタイトルにした所以でもある。また地理的には町の東側は、佐久間川を境にして若宮町に接し、西側は吉野川を境に昭和町に接している。市の交通の大動脈である国道一七号が町の中央を南北に走り、早朝から夜半も休みなく大型・小型のトラックや自家用車・バスが通り、環境の変化と時代のテンポの早さが分かる。

次に若宮地区に編入された地域にある国領町公民館は、建設当時市有地を町で無償・無期限の約束で町が借り受け（約七〇坪）、建築関係業者は瓦業者を除き町内在業者が一丸となって当たり、すべての経費は全町民の負担で立派に完成し、今日まで活用されているとのこと、先人の愛町精神に満腔の感謝をせざるを得ない。従って、地域が若宮町になっても、国領町一・二丁目の自治会が交互に管理し、両町民が仲良く使用していることはご承知の通りである。

なお平成三年十月現在の市の人口は、二八六、五五〇人、世帯人数は九七、二二七戸、うち国領一丁目は人口一、一五七人、世帯数四二五戸である。

## 六、緑地公園と記念碑

昭和六十二年末に国領一丁目南方の吉野川沿いに緑地公園（約千平方メートル約六百坪）が造成された。周りにはケヤキ、カシ、サンゴ樹、モクセイ、ツツジ、サザンカ、キョウチクトウ、カンナなどが植え込まれ、豊かな緑の中に季節の花が見事に咲いている。それに南側には東屋と子供の遊び場も備えられているが、広場のメーンはゲートボー

ルコートで、老人の楽しい健康づくりといこの場として利用されている。周りの草むしりや清掃は、定期的に老人会が奉仕、隣接の駐車場は自治会役員が当たるなど、よく管理しているため、国一緑地公園愛護会（会長 自治会長）に対し平成三年六月、市長名の感謝状もらった。

なお同年八月末、同公園の東西入口にコンクリートブロックの上に二重の白みかげ石を台とし、その上に乗せた黒みかげ石の立派な記念碑「国領町一丁目 緑地公園」と横書きした記念碑が建立された。

## 七、琴平宮の歴史と山車

町の鎮守様、琴平宮の歴史は、昭和四十年氏子（総代 阿部一次）自治会長）により建てられた記念の石碑に記されているので、それを要約すると、その大昔、金毘羅大権現を称して慶長六年（一六〇一）徳川家康の命により、酒井河内守重忠が川越城主から厩橋城主に代った時、当社に家臣をつかわして着城奉告を行ない、以後酒井氏が代々崇敬してきた神社である。徳川家綱（四代）が征夷大將軍に任ぜられた時、厩橋城主酒井忠清（四代城主）が大老下馬將軍といわれたが、家綱に代り京都の朝廷へお礼に出向いた折、道中の安全を祈願して大任を果たした。慶安四年のことである。その後寛延二年（一七四九）に松平大和守朝矩が姫路から厩橋城主として移って来た時も着城奉告祭を行ない、前の酒井氏と同様に当社を篤く崇敬した。また当社は、庶民の信仰を集め、旅立ちに当たり道中の無事を祈願する人が多く、文化・文政のころ（一五〇年〜一七〇年前）は、広瀬川の舟の往来が盛んで沿岸住民からの奉納などが随分あったようである。文化十二年（一八二九）に続き、三年後の天保三年（一八三二）にはそれぞれ立派な燈籠が一對ずつ奉納されている。そんなわけで、十月の大祭には

参拝の人が列をつくり、広瀬川にかかっている厩橋を経て細ヶ沢から当社に通ずる道筋は露店が連なり、遠くは利根、吾妻、新田、佐波、多野にわたる広い地域からも集まり、境内には小屋掛け舞台を設けたり、一隅の土俵では氏子連の奉納相撲をやったりしたので、近郷・近在切つての賑やかさであったといわれる。このように由緒ある長い歴史とともに生き、大木に囲まれて人々に親しまれ、憩いの場でもあった琴平宮は、太平洋戦争末期の前橋空襲の際には社殿が焼失し、往時をしのぶすがとてないのはまことに惜しまれる。その後、昭和三十三年再建されたが、境内は区画整理のためおおよそ三分の一に縮少された。境内には二社があつたが、現存するのは稲荷神社（正一位北野稲荷大明神）だけである。幸い完全に焼け残り全く不思議といおうか、神明の加護の有難さを知らされたようだ。

このゆかりのある琴平宮の祭礼（十月九・十日の前橋まつり当日）を飾るため、昭和五十四年自治会（阿部一次会長）以下、各種団体と全町民の協力で立派な山車（祭神、大国主命）を建造し、かつ車体も改修して町内安泰の象徴とした。

その琴平宮の東側は、今の国道一七号をはさんで大きく変つた。昔は国道に面して電話局があり、私たちは子供の頃（大正初期）は蓮池になつていた。そこを製糸工場から運ばれた石炭ガラで埋めつくし、平方裁縫学校の校舎が建てられたが、やはりあの戦災で焼失したため、父兄らの応援で復校し、学校校舎も拡張し、現在の昭和町に移転した。その跡地に今のN T T群馬ネットワークセンター（無線中継所）ができ、屋上に高い塔のある九階建のビルに変つた。その隣り角は、東和銀行（北支店）、向い側には北群信金（前橋支店）、小野里住宅サービ

ス、その他がある。特にこの辺の移り変りは今昔の感に堪えない。いずれにしても戦後、他町名が大部分変つた中に、由緒ある歴史を

持つ国領の名が先祖から引継がれたまま、今に残っていることは何より有難いことで、町民の一人として誇りと自信を持って、我が町が発展するよう祈つてやまない。

## 八、歴代区長と自治会長名

明治二十五年前橋に市制が施行された当時は、各町の運営は「区長」がその責任者として選ばれていたが、当初の氏名は定かではない。

明治末期から昭和期以後の区長（途中、自治会制度に改正）は次の通りである。

国領町区長	池田寿之氏（明治末期）
同	井出仁作氏（大正時代）
同	船津保平氏（昭和初期）
同	蜂巣忠次郎氏（同十一年～二十年）
同	小林辰平氏（同二十二・二一～二十四・三三十一）
同	藍沢豊治氏（同二十四・三一～三十九・四三十一）
同	石田重礼氏（同二十九・五・一～三十五・三三十一）
同	川添光芳氏（同三十五・四・一～四十三・七一）
（但し昭和四十二年四月行政自治委員会制度に改正。区長は自治会長に改められ、国領町は一・二丁目に分かれた）	
国領町一丁目自治会長	島田 武氏
同	（昭和四十三・四・十五～四十八・三・三十一）
同	阿部 一次氏
同	（同四十八・四・一～現在に至る）

## 堀川町小史(抄)

### 堀川町々名の由来について

堀川町は明治六年に誕生した。

それ以前は、この町は川窪かわくぼと沙堀すなほりに分かれていたのである。前橋は古くは厩橋城うまはしの城下町として栄え、城は上杉、武田、北条、三氏の争奪の的となったので、町自体も栄枯盛衰が激しかったわけである。

慶長六年(一六〇一)酒井河内守重忠がここに封ぜられて以来、酒井氏が九代、百五十年の永きにわたり城主となり民を治めた。この間、酒井家五代の城主、忠孝ただたかの時代に「厩橋」の名を「前橋」に改めたのである。

寛延二年(一七四九)酒井氏が姫路に移り、代って松平大和守朝矩ともりが城主となったが在城十九年で川越に移つてからは前橋は廃城となり、僅かに陣屋が置かれる程度となり、人口も年々減つていったのである。そしてこのような状態が九十九年間も続き、慶応三年(一八六七)になつてようやく城が再築され町も次第に蘇生したのであるが、大政奉還、明治維新とまつりごとが大きく変つた明治四年、廃藩置県となつて前橋藩は「前橋県」となつた。この時、県内の九藩も同様九つの県となつたのである。(明治四年七月)

注 川高崎藩が高崎県というように現在の県内がいくつもの小さな県に分かれていたのである。

次いで同年十一月諸県廃合により「群馬県」が設けられ、県庁が高崎に置かれた。翌五年五月、県庁は前橋に移り「大小区制」というのが敷かれた。そして前橋は第一大区中に編入された。

明治六年群馬県は入間県いづまと合併し熊谷県となり、熊谷市に県庁が移されたが、同九年再び群馬県となつて高崎に仮県庁を設置した。そして、その後間もなくもとの前橋に県庁が移つてきたのである。これが現在の県庁であり、当時建物は前橋城の書院が当てられたのである。

さて、前橋は明治六年町名整理が行われ、新しい町名がいくつも生まれた。その時できたのが「堀川町」なのである。はじめに書いたように「川窪」と「沙堀」を合わせて「堀川」といったようである。以来「堀川」という名は連綿として百年近く続いてきたのである。

こえて明治十一年には「郡区町村編成法」施行により、四つの聯合体が置かれ、各聯合に「戸長役場」が置かれた。この時、堀川町は曲輪町他七カ町の聯合に属し、戸長役場は曲輪町にあった。

前記四つの聯合体はそれぞれ郡の下に置かれ、堀川町の属する聯合体は東群馬郡といった。これがしばらく続き、明治二十二年には町制度を施行して前橋町となり、同二十五年四月に市政を施行し前橋市となり、かくして現在の前橋市堀川町という名称が生まれたのである。

以上が沿革のあらましであるが、堀川町の基礎となつた川窪、沙堀はだいたい旧前橋城の城外で、北部の一部が城内に位置していたのである。昭和十年頃まではまだ鯉や金魚を飼育する池があちこちに見受けられ、時に龍海院の森に巢喰う鶯の水面をかすめる羽音に、行く人の耳目を驚かせたものである。

この池を利用し維新後禄を剥がれた武士たちは養鯉業をやつたが、武家の商法成り立たずで逐次なくなつてしまつた。

また藤や菖蒲の美観をうたわれ茶店まで出て賑わつた児玉の名園も、明治四十年頃廃園となつた。いずれにしても龍海院と大泉寺の間が狐の通う道だつたという、明治初年から比べると隔世の感が深い。



## 町政の沿革

堀川町が明治六年にいくつかの町とともに生まれたのは前述の通りであるが、その当時の行政については資料がないので詳かでない。しかし区長の下に代理や伍長のような町役がいて、補佐していたことは事実のようである。

堀川町は明治十一年、つまり誕生してから五年目に「郡区町村編成法」施行により、四つの聯合体の一つになった。その時の編成は「第一小区」といい、南北曲輪、曲輪、石川、田中、堀川、神明、柳町の八カ町であり、「第一大区」という中に十ヶ町内外の小区ができていたのである。

その後、明治二十二年に「町制度」が実現し、それまでの「群馬県東群馬郡堀川町」という呼び名が「前橋市堀川町」となったのである。（この後明治二十五年四月、市制が敷かれた）

ここでいささか余談めくが、市制が敷かれ初の市会議員の選挙が行われたのであるが、現在のように性別、階級別、何等の差別を受けない者には嘘のような選挙の方法がとられた。つまり明治二十五年四月八日に市では「公民名簿」というものを発表し選挙が出来る者を三階級に分けて公示したのである。勿論婦人には参政権はなかった。さてその三階級のなかに入る者は、

一級Ⅱ納税額百五十七円九十二銭から七円六十八銭九厘まで

二級Ⅱ以下、一円八十八銭八厘まで

三級Ⅱ以下……となっていて当時堀川町には、一級に該当する者無し、二級九人、三級二十二人であった。つまり投票出来る者は三十一人きりということになる。

一方、被選挙人も三階級に分けられ、三級の者は二級の候補者に投

票するというような方法であった。その後この制度は改訂され二級一本となり、やがて普通選挙となったのである。

このような変遷の中で、明治三十一年には九人目の区長であった三ツ井亀久松氏や詫摩清秀氏（大正十四年）また市長の石井繁丸氏（大正十二年）等市会議員に当選している。

堀川町という所はその名の通りどちらかといえば湿地帯であり、堀や池が何ヶ所かあったようだ。また家並みはだいたい緑高二百石以上の侍屋敷で形成され四百坪（一、三三〇平方メートル）を一つの区画として邸を持つていたようである。松村、秋山、厚木、内池、児玉、平野、井口、大関、長山、大藤、保岡、成田、丹下、斎藤、清見、渥美、大畑、堀永等の諸家があり、現在も斎藤、成田氏が居住しており、また丹下家は現前橋信用金庫の理事長の先祖であった。

さて大正十年に中岡太荘という人が十人目の区長としていた頃、当時伍長は葬式の世話や組内の雑用をしており、実際の町全体の運営については区長のすぐ下に「協議員議員」というものを置いた。これは他町にもあったようだが、今思えば民主区長の「はしり」ともいえる。この協議員は十名ぐらいで故人の太田一学さん（大田病院の先代）が議長となり、根岸十平さん、阿部七太郎さん（故人）、湯山作治さん等が顔を連ねていた。そしてこの制度は伍長の性格が変わってくるととり止めたようである。

一方、他町内もそうであったように堀川町にも青年層や婦人層の組織ができており、前者は青年同志会とか青年団、または戦争中の在郷軍人会等があり、片桐常吉さん、大沢愛次郎さん、田中駒三郎さん（駒形医院先代・ともに故人）や、久家政吉さん、橋本一郎さん等がリーダーとして活躍した。

婦人層の組織は婦人会があり、戦時体制に入るや「国防婦人会」と

なつて銃後を守つた（男子が殆んど出兵したので、家庭にあつて留守を守つた）のであり、現在の婦人会活動とは本質的に違つていた。また国防婦人会とは別に「愛国婦人会」という団体もあつて、これは主として日赤（日本赤十字病院）の会員が母体となつて組織され、活動内容は前の国防婦人会と同じようであつた。

昭和十六年太平洋戦争勃発と同時に世はあげて戦争色となり、「勝つために」あらゆる犠牲を強いられた。町内組織も平時とは違つて防衛部、更にその下に隣保班というものをつくり、伍長が隣保班長や常会長という名で呼ばれたりしたのである。町民は毎日「ゲートル」を巻き「戦斗帽」をかぶつて防火訓練に明け暮れたのである。「防空頭布」や「雑のう」「火はたき」「防火用水」等の言葉が生活の必要語となつたのもこの時代であつた。

弁当箱に「芋」や「雑すい」を入れて勤め、ローソクの下で毎夜を過ごすという我慢をしたが結局は敗れたのである。しかもアメリカ軍の爆撃による全町罹災という悲しみの中で町民は唯ぼう然とするのみであつた。……

当時区長であつた橋本藤三郎さんは「戦災と復興」という本の中にこう語つてゐる。

注 川前橋市は昭和二十年八月五日に罹災した。

「空襲当夜、堀川町ではだいたい盲啞学校（現在の盲学校）方面へ避難することになつていたが、先ず敵機が久留万国民学校校舎（現在の中央小学校）の所に投弾したため同校が炎上し、退路を遮断されてしまった。それでも町民のいく人かは学校のそばを通つて避難せんとし、顔面にやけどをした人が五人ほどいた。また死者は四人いて榎町の人が一町内で死んでゐた。死亡者の中には裁判官のお母さんも含まれてゐた。

町民は南へ逃げられず龍海院方面に逃げた者もかなりいた。当時は三百戸足らずの町だったが、五軒ぐらい残つただけで、あとはみんな焼失してしまつた。そのうち佐藤さん宅は防空看視隊員が助け、十二番地の秋山さん（当時、相原守男さん居住）は家主が水をかけて防いだ……一部略」

このようなわけで当時を思い出すと新たな憤りと恐怖が脳裡を去来する。そして無条件降伏したのが八月十五日であつた。敗戦となり「マッカーサー司令官」が厚木飛行場に降りて占領軍政策が始まるや、国政も一八〇度の転換を余儀なくされた。国政が変われば当然、町の運営も変化し、進駐軍が何かにつけて干渉し、町有地についても「没収」という厳命があり、物に動ぜぬ町の首脳部も非常に驚いて急拠、複数登記を行つて難を逃れたのである。

当時区長だつた谷貝英男さんの話

「占領軍の命令により町内会は解散し、町内代表は昭和二十二年三月十九日解任された。そして町有財産は一カ月以内に処分し住民に分配せよ。万一処分せざる時は没収する、という厳命である。そこで町内首脳部は急ぎ相談し、公民館の所有地は青年会より三名を選び、その者に無償で譲渡した、という形式をとつて事なきを得たのである。

現在の公民館は昭和二十三年二月に岸真三郎さんが建設委員長となり、二十五万円の予算を以て建てた。尚、先ほどの青年会三人というのは橋本一郎さん、師如栄三郎さん、久家行夫さんである。」

昭和三十年代に入ると、堀川町は常に他町のリーダー的存在を示した。

戦災復興事業として進められた道路や町並みの整備についても、他町より常に一歩先んじて実施したのもその一例である。そしてこれは町民の協力もさることながら、町内には市の指導者的存在であつた

く人も名士の努力も忘れることができない。特に現在の市長と市会議員が同一町内に居住していることは前代未聞であり、特筆大書すべきことと思う。

現在の町制は長張知一郎区長を頂点として顧問、相談役に町政のポイントを諮問し、十五組からなる各組に伍長を置き、その伍長と区長代理及び会計が町政の責任者として町全体の運営に当たっている。また必要に応じ、青年会や婦人会の幹部が町内役員会に参画して側面からの協力を続けたのである。そして町民と役員が車の両輪の如く円滑なもの「住みよい環境」をつくり出した先輩の努力に負うところが大きい。 (以上町内の古老の対談から収録したもの)

#### 青年会の歩み

青年会の活動も戦争を境にして大きく変わったのである。戦前の青年同志会から戦中の在郷軍人会、戦後の青年会と若い人達の集りであった組織も、時代の背景とともに戦時色から平和色に塗り変わったのである。

終戦直後「リンゴの唄」で蘇生し、復興の槌音も高く市民もようやく光を見出した当時、つまり昭和二十一年十月十三日前橋市の主催で群馬会館において復興祭市民演芸大会が開かれた時、町内からも塩沢暁子さん等が町推薦で出演し上位に入賞した。この頃青年会長も戦中の橋本一郎さんから岸善三郎さん、小山幸一さんと替わり、そして昭和三十三年七月、それまで一時途絶えていた会が全く新しい構想で誕生したのである。そしてその時推されて会長となり数々の輝かしい実績を残した片桐孝雄さんは、現在も町の中心人物である。

三十三年再編成された青年会は、その年の七月野球チームを結成、前橋市青年会主催の大会及び前橋市主催の町内野球大会に臨んだのである。町内野球といえは栗原さん兄弟、神田さん(神田医院)、村山さ

ん(村山医院)という大先輩が思い出されるが、過去二・三回は他町内との試合もやってみたが優勝という経験はなかったのである。ところが先に結成された新チームはその年早くも頭角を現わし、双方の大会に見事優勝したのである。大河原輝雄監督の率いる堀川町チームは、この素晴らしい実績により県内にその名を轟かせ、向う所敵無しといった時期が続いた。そして翌年にも前記二つの公式試合に挑み、見事連続優勝したことは決してフロックではないことを物語っている。しかしこのような華やかな裏には監督、選手のためまぬ努力と練習、後援会の応援、そしてチームワークのよさがあったればこそと思う。

野球とは好対象なのが「納涼盆踊り大会」で、これは三十三年の再結成を期に公民館広場において行われたものである。なにしろ「踊り」という行事なので、専ら女性会員や婦人会の人達によって進められ、男性軍は援後射撃を余儀なくされたのである。青年会主催とはいえ、全町民の協力がなければあのような楽しい催しは実現できなかったであろう。この盆踊り大会は二年程やって一応中止したが、それは準備が大がかりすぎると、天候に支配される心配があるため、止むを得ず見合せたのである。当時を思い出すと「佐渡おけさ」や「花笠音頭」のメロディが懐かしさを一層かきたてる。その他三十三年には第一回の町内大運動会を中央小学校において開催し、これは三十七年まで五回続けて行い、その後学校別の市民運動会へ移行したのである。町内大運動会の規模は小さな小学校の運動会ぐらいのスケールで、一町の運動会としては市内でも一番大きなものであった。

体育指導面ではこの他夏休み中のラジオ体操等があったが、これらの指導については橋本之利さん、羽鳥一美さん、中林昭三さんがいつも中心になって適切な指導してくれたことは、子ども達にとって大きな幸せであった。子どもの育成については青年会としても常に計画

を立て、昭和二十二年頃の少年野球大会から現在の子ども育成会まで、いく多の行事の中に溶け込んできたのである。毎夏休み中に行われる子どものための日帰りレクリエーション等は、今後時代が変ったとしても続けられていくだろう。

#### 婦人会の思い出（塩沢キヨさん談）

昭和二十一年の終戦直後はまさに混乱時代で、衣、食、住すべてが不足し「ぼら穴」に起居し餓死する者もずい分いた。こんな世相の中にあつて堀川町婦人会は昭和二十三年九月に結成され、斎藤こと子さんが会長になり、現在の会長である塩沢さんが副会長となつて発足された。

さて会として町内のために何をやろうかと協議した結果、当時としては奇抜なアイデアである「バザー」を開いたのである。実施までに役員や会員が何回も話し合つて真心のこもつたバザーは大成功に終り、当時の純益金一万円余が会に入った。早速全員で協議してその用途を考えた結果、終戦後のこととて当時「理髪店」など殆んどなく、子どもはたいいてい家で間に合わせていた。（その頃の子どもはみな坊主頭だったので、手もかからなかつた）家事に追われるお母さん方が余暇にバリカンを持つて刈つてやるのが、殆んどの家庭のしきたりのようなものであつた。婦人会ではここに目をつけ「バリカン」を買うことに決め、何丁かのバリカンを購入すると、町内に住む子どもの頭を次々に刈つていった。これには各家庭でも非常に喜び、一躍婦人会は「女」をあげたのである。この快挙はたちまち市内に広がり美談として今でも語り草となつてゐる。

この臨時床屋は世の中がいくら落ちついた昭和二十七・八年頃まで続いた。

#### 婦人会記録

昭和二十四年九月十一日 日赤奉仕団結成 会長、副会長

昭和二十五年四月 各家庭より一品寄付を乞ひ、奉仕団員の手にて人形などを沢山製作、バザー開催、希望者に市価の半額程度にて売却し奉仕団の資金を作る。その時は純益金一万一千円也。

昭和二十五年 バザーの収益にてバリカンを買入れ、町内児童にバリカン奉仕を初め三ヶ年続行。そのうち婦人会も発足し、堀川町婦人会は日赤奉仕団城南分団に参加し、表裏一体となつた活動せり。

昭和二十七年一月三十一日 午後十一時頃堀川町に火災発生（会員数三十名）全焼 石原さん、斎藤小夜さん 半焼 小山さん、堀川町日赤奉仕団員の皆さんは早速罹災者の御家庭に対し一生けんめい奉仕した事に付き、罹災者の斎藤さんから日赤支部へ寄せた感謝状を城南分団から朗読して頂いた事など記録に残る。

昭和三十二年四月 中央地区婦人会発足

昭和三十二年十一月 公民館座布団製作 町内各戸よりボロを寄付して頂き、関東繊維会社に依頼して綿に加工し婦人会員十一名の協力により立派な座布団五十枚を完成したのである。

昭和三十三年二月 新入学児童に文房具十品をお祝いする事に決定、現在に至る。（現在会員数百三十六名）

#### 公民館の由来

公民館という呼び方は終戦後の民主政治になつてからで、以前は「堀川町事務所」といった。

そもそも堀川町事務所は大正末期に現在の大泉寺の東隅に二階建の立派な建物を持つていた。当時の区長は中岡太荘さん（大正十年から十四年まで在任）であり、この事務所は渋川市（当時渋川町）にあつたものを買入れ建て直したものである。ところがその後区長に

なつた田中駒三郎さん、宮田勝三さん、中岡染次さんの三人が現役中死亡したりしたので、町内の幹部も移転を考えていた矢先、当時市長を辞めた田中稲一さんがこれを買取ることになり、町内でも喜んで手離した。田中さんはこの建物を現在の野沢さん（二二番地）の所へ移して居住したのである。

事務所のなくなった町内では相談した結果、屋代医院（一四番地）の病室を買って堀川町事務所としたのである。この時の資金を集めるために「評議委員会」という組織が生まれ、橋本藤三郎さんや湯山作治さんが経済的援助をした。また現在の東京電力から買入れ資金の半額を寄付してもらったのである。（現在の公民館の東で横浜銀行の寮がある所）そして戦争中この事務所から幾人もの出征兵士が軍歌とともに送り出されたのである。太平洋戦争が激しさを加えた昭和二十年八月に大空襲を受けた際、堀川町事務所も跡形もなく焼失してしまつたのである。

終戦となつて早速復興計画が進められ、全町一体となつて物心両面の協力体制が確立し、昭和二十三年二月に岸真三郎さんが建設委員長となり、二十五万円の予算を以つて現在の公民館ができたのである。（別掲参照）尚、昭和四十一年八月、補強及び増築工事を行い、記念会館として町民が永久に使用できるよう改装された。

#### 東照宮と祭礼

町や村にはよく「鎮守様」といわれる神社があるが、堀川町の中には昔から神社はなかった。しかし旧松平藩の藩士が住んでいた町、即ち神明町、南曲輪、北曲輪、曲輪町、堀川町、石川町の六カ町の住民は東照宮（北曲輪町競輪場入口）という県内でも格式の高い神社の氏子であり、事あるごとに東照宮を崇拜してきた。これらの町内は総代や世話人を出して交替で例祭の指図をしたのである。

また神社とお祭りはつきものであり、そのいくつかをあげると

◎昭和四年には東照宮が県社昇格となり、その祭りが行われた。この時は太田市からわざわざ大名行列を招き氏子町である先の町内は勿論、街の中心まで練り歩き氣勢をあげた。

◎昭和十年と十二年に「おみこし」二台を購入し、十三年の秋祭りに堀川町でそのうち一台を借り盛大な祭りをやった。

◎昭和十五年には紀元二六〇〇年祭を全市的に行い、堀川町も他町とともに参加して祝った。この時は山車を借りて引き歩いた。

この他、昭和二十二年の復興祭や昭和三十三年の堀川町大通り舗装完了祝典等の祭りには山車やみこしをくり出して祭り気分にしたものである。尚、祭りには直接関係ないが、戦災による復興都市計画という大きな事業を市では全町の協力を得て遂行したのであるが、堀川町でもこの事業には今井敏雄さんを代表委員として推し、今井さんも意に添えて町内のためあらゆる努力を傾注して他町よりは常に一歩先んじた復興事業を進めたのである。

## 北 曲 輪 (抄)

### 活動写真館の思い出

川 崎 正 三 (七十歳)

今ではすっかり斜陽となった映画界ですが、昔は私達庶民にとって最高の娯楽でした。六十年の記憶をたどって映画の思い出を書いてみます。

館は電気館、帝国館、第一大和、前活館の四館がありました。中でも第二大和について書いてみます。昔は映画のことを活動写真といいました。時代劇を旧劇、現代劇は新派といい、昼夜入替の二回興業で、入場料はたしか大人十銭、小人五銭で夜七時頃から割引となりました。昼の開館前には二階の出窓から数人の楽師が音楽を流して客の呼び込みをしたものです。館内では二階から四方に提燈が飾られ、年中祭りの感じでした。今のような冷暖房はないので、夏は映画の一本終るごとに戸や窓を開放しては風を入れ、始まる前に閉めるのです。客は団扇や扇子を使ったり、水やラムネで涼をとったりしていました。冬は客席の後方にある大火鉢で炭火を焚いていました。一階席は全部四・五人掛けの長椅子で、一般席と婦人席が区別され、後の高い位置に警官席がありました。二階は一等席で履物は下足番に預けるのです。「お二階さん御案内」と声がかかると、女給さんが座布団を持って案内をしてくれます。冬は火鉢も注文できました。売店も一階と二階にあつて、売りが売箱を肩から下げて「おせんにキャラメル」といいながら通路を売り歩きます。映画は大体三本位が多く普通の作品の場台、男性弁士二人と楽師一名で済ませますが、盆や正月の休日に嵐寛

の鞍馬天狗が上映されると、豪華なもので弁士は女性弁士を含めて五・六人、楽師も鳴り物を合わせて十人位の編成となります。映写前には主任格の弁士が長々と口上を述べるのです。満員札止めの状態になると、舞台の上から更に映写幕の裏側までも客を収容するのです。裏側から画面を見ると左右が逆になり、まことに見にくいものです。それでもチャンバラのシーンともなると、活劇の魅力、熱の入った弁舌と伴奏で観客は十分満足したようです。当時はすべて無声映画なので画面の約三分の一は字幕で写ります。弁士は字幕を読みながら自己流の言葉をつけ加えて熱弁をふるうのです。この時代は琵琶とか流行歌がよく映画の中にできました。歌手の代りに女給さんが歌詞を見ながら舞台の脇で歌っていました。舞台には花道もあり、年に一、二度関東各地の弁士が集まり役者に変身して歌舞伎芝居を見せてくれました。華やかなレヴューも時々上演されました。踊り子の衣裳から落ちるビーズを拾い集めては姉や近所の子にやったりしたものです。無声映画からオルトーキーに変わって初めて林長二郎の肉声を聞いた時、弁士と違って余りにも悪声なのがっかりしたものです。旧劇を見て感動した晩、布団の中で母親に配役やストーリーを真剣に聞かせたことがあります。私の懐かしい思い出です。幼い頃、映画の出入口が自由に館内を遊び場代りにしていました。遊び疲れて長椅子に寝込んでしまい、女給さんに抱かれて家に届けられたことも幾度かあったそうです。バラバラに記憶を書きましたが、現在でも映画が好きで平均月一回は見に行っております。

## 大正の二四三九番地

岩田善平（七十六歳）

群馬県中部の「ある町」の二四三九番地の商家の次男として生まれ「ある町」と仮名で話を進めます。

大正も中・末期の懐かしき良き時代、この地番の辺りが田舎町ですが、町の中心繁華街で、向い前に川辺文蔵というお大尽がおり、大きな黒光りする米蔵が三棟、そしてそれと同じ作りの母屋が道に面し「ふみ子」という「オカツパ頭」の可愛い女の子がいて同級生でした……。遊びに行ったある日のこと、この家の番頭が米蔵の床の「こぼれ米」を集めており、尋ねるとこれがこの家の主食米とのことで、お大尽が「こぼれ米」を食べるとは意外でした。

秋になると（この辺では運送と呼んでいた）荷馬車に米俵を山と積んだ車が列になる程来て、蔵に米を納める様子は壮観でした。当時の荷馬車は両輪に鉄輪を巻いた台車を駄馬が「馬方」に引かれ、素朴なもので、道は砂利道、蹄の音と砂利、鉄輪の音で騒々しいものですが、時々通るその荷馬車をうるさいとも感じず、今思えば情緒のあるものでした。

駄馬は歩きながら時折り湯煙の上がる固まりを落して行き、止れば固まりの山ができ、それを箱車を引いて集め肥料にする人もありました。駄馬の奴、巨大なる男根を丸太の如く伸ばし蛇口の勢いで真下に垂れ流し、道々に穴があくこともありました。

小魚取り どじょう、うなぎ、ふな、ハヤ等小魚取りによく行ったものです。どじょうの丸飲み競べ、活の良い野生のどじょうを一気飲みですが、大きな奴は後が大変、飲み込んだ後、腹の中で大あばれ、気味の悪いものです。

道祖神（どんどん焼き） 正月十四日早朝に門松を焼きあげるが、

前日の十三日夜は前夜祭と申しましようか、子供全員集合、道祖神小屋の内で、おたのしみ会煮込みおでん、アメ、菓子等を配り遊びます。「ジャリ」共は早目に帰り、それからは本番。ある年のこと、やはり親分格がいて居残り五、六人で道祖神様のお賽銭から駅前洋食屋へ「カツレツ」を注文すると、両肩にピラピラのついた真白いエプロン姿（大正時代のピールのポスターによくある姿）のお姉ちゃんが、岡持ちを持って道祖神小屋まで出前してくれたので、小屋内の道祖神様に上げてあるお神酒徳利を下げて御神酒を頂きました。その「カツレツ」なるものを食べたのが、生まれて初めて食ったカツでした。

二、四三九番地付近は田舎町ながら町の繁華街、二・七の市といつて二の日、七の日に市が立ちます。大道商人もこの日を目当にやって来て、最初は子どもを集め話をしてくれ大人がボツボツ顔を見せる頃、子どもは追い帰されます。ある時、商売用の小道具を子ども達に隠され、商売にならなかつたこともありました。

駄菓子と「くじ」 一銭の小遣いも大変なものです。やっと一銭手に入れ、駄菓子屋へ一銭でアメ二つ、「くじ引き」が当たりならば大きなアメ、当然くじとまいます。駄菓子屋の「ばあさん」ひとひねり、出た「大当り」「今日はよく当りが出るねエ」位で（ハテ、我より先にやった奴もいる）大きなアメ菓子一人占め、大得意。

自転車 自動車はメッタに來ない。初めて見た貨物自動車は後輪の厚いゴム輪で空気ナシ。その後空気入れタイヤ。何しろ前橋、高崎方面から來るので、すでに「オーバーヒート」。運転台の横に「バケツ」をぶら下げて、車の先端から湯煙を吹き上げながらやって來ます。駄馬に飲ませる水飲場が町の所々にありますが、馬でなく自動車がこの水飲場へ冷却器の給水に「バケツ」で來るわけです。すでにこの辺り

から時代の流れは変わってきました。時は矢の如く、また夢の如く、七十年を懐かしく思い過す今日この頃の年になりました。明治は遠くと申しますが、このたびの「市制百年祭」、百年祭といえば、更にこれより三十年前、さぞかし激変の三十年間であったと思われる。また代の昭和となり初期頃より世の中は大分キナ臭く、日支事変、世界大戦と我等大正生まれは、甘く、楽しなるべき青春時代の大半を戦争に捧げ、生き永らえて参りました。

世はまさに平成の今日、霞の如く風化する大正の「ロマンチック」な情景の一端でも後の世へと拙い一文をもって書き下しました。

## 半世紀前の公園

伊藤 一枝（六十七歳）

今の遊園地は下公園といった。

東南の角からかなりの急な坂を下りたものだ。樺の大樹はその頃も大きい木でした。その木の東に回転ブランコがありよう遊んだものです。背丈のない私は地に足がつかず、絹のサンジャク（三尺帯）を手拭い代りに使い、ずたずたに切らして叱られたことを思い出します。

北側には砂場があり、その中にコンクリートで造られた二人一緒にすべれる大きなスベリ台があり、高い所の下はブランコが二台あった。にわか雨の時などは雨宿りが出来て助かったこともありました。

風呂川の水を利用して滝を造り、小川があり石の太鼓橋がある所は昔のままである。その先は大きな池があった。（今の水鳥や舟の浮かぶ遊具の所）かなり高く噴水が出ていて夏などは涼しさを覚えたものです。

お猿の電車の所は広場になっていて、子ども達の野球や幼稚園の運動

会、夏は盆踊り、それから種々の式典などに使われていました。

道路を貫ぬく短かいトンネルは今も変わらず懐かしい……。トンネルの手前は杉、椿、もみじ、錦木、アジサイ、ツツジと色々な木があり、その下草は芝や三葉のクロバーが一面に生えていました。トンネルをくぐると、ここはひょうたん池です。昔のままで子どもの頃を想い出す好きな場所です。東屋があり晩村の碑があり落ち着く所だが、池がよごれ、あやめ、花菖蒲がないのがさみしい。（今年初夏の頃、久しぶりに散歩しました。池の水がきれいになり鯉や錦鯉が生き生きと泳ぎ、あやめも植えられ、手入れが行き届いていました。本当にうれしく思いました。折角きれいになりましたので皆さん協力して汚さないように致しましょう）

さて上公園は私達の氏神様である東照宮が鎮座し、神社の北側は今より広く、そこは花見の頃ともなると桜見物で大賑わいでした。屋台が出たり見世物小屋が来たり、小さな店は屋台や自転車売りに来たものです。屋台は今と変わりなく、だんご、焼まんじゅう、ところ天、おでん、ラムネ、いも串などで大人と一緒になければ入れなかったものです。

子どもだった私達は屋台店がなうかしく思い出されます。ふき豆、塩味の金時豆、ぶどう豆、その他くり焼やコロツケ、水アメ、アイスクリーム、ベッコウアメと、子どもの買う物でとりわけアイスクリームはハンドベルでおじさんがチリンチリンと鐘を鳴らして子どもを集めたものです。トンガリ帽子のような最中のかわの器にアイスクリームを入れて売っていた。値段は一、二銭でした。それと今は殆んど見られなくなった物で海藻はおずきです。（海辺に行けばあるかも知れませんが）金魚のような型をした赤いおかめはおずき、薙刀はおずきとさまざまなおずきを戸板に並べて売っておりました。



この様な時代は昭和初期の花見の頃のことです。屋外ステージの所は高台になっていて、その場所に下村善太郎翁の銅像が羽織・袴で。県庁を見守り立っておりました。県庁を前橋に持って来たことは皆さんご存知の通りです。銅像は戦時中に供出してしまいました。

芝生と花壇の所は広場になっていて、大きな式典がある時この所を使いました。東の角にあずま屋があり、幼児を子守りするおばさんの格好の場所でありました。

東照宮の横の坂道を下りると下河原になります。大人も子どもも泳げるプール（今の中央大橋の下です）がありました。囲りは石垣を積み、底は前の方からだんだんに深くなっていて、玉石が敷き詰められていました。縦二十メートル横十五メートルの大きさだったように思います。プールの囲りは四・五メートルの道になっており、外側には樫の木が何本もあって、水泳の出来ない私は木の下で涼しい所でよく見ていました。プールの北は五・六メートル低くなっており清水が三個所もあり、水がこんこんと湧き出ていました。夏は冷たく冬は温かくてよく利用したことを思い出します。三箇所の清水が合流してきれいな小川になっていました。

この小川は浅くて川底は砂地ですから危いことはなく川菜、川芹、金魚草と水草が生えてとつても素敵な自然でした。春になるとオタマジャクシ、メダカ、フナ、夏はミズスマシ、アメンボウなど追い廻す男の子の元気な声がしていました。小川の土橋を渡ると、市民農園です。（今の幸の池の所）猿、クジャク、きつね、にわとりなどの動物がいました。農園といっても樹木や草花が多く、大根、菜、とうもろこしと野菜があり、中でも苺つみが楽しい思い出です。

農園の横の道は桑畑で細い道を少し行くと、T字路になり、右に曲るとポート園、左に行くとアカシヤの並木道になり、木の高さは十メートル

もあり、道の長さは八十メートルか百メートルも続いていたように思いました。夏の暑い日は利根の川風と、このアカシヤの木陰がとても涼しくよく散歩しました。戦後いつの間にか伐採されたか……（今のドームの前の道が開発された頃と思います）これも前橋の発展のため仕方ないと思いました。

ポート園の池はかなり広く二人乗りの舟が十五・六隻あった。私は数える程しか乗らなかつたですが、売店ではかき氷があり、子ども達は梅の型に固めて竹串にさし黒蜜をかけた氷を食べたものでした。

池に沿って利根川の方へ行き左に曲がると、石で固めた防波堤に出ました。低い堤と高い堤防が前後して三個所あり、玉石の上を跳び歩いたものです。今はテトラポットになり、上流のダムで洪水になる恐れがなくて安心です。野球の練習場や自動車の駐車場になっています。利根の河原に昨年立派な前橋グリーンドームが出来上り、昔の面影はなくなりました。

茫茫とした笹藪や雑木林は跡形もなく、河原のすすきも見当らず、若い二人連れ姿もなく、忙しい世の中になったようです。

### 思い出の遊び

本 間 晴 二（七十四歳）

ある日、遊園地で遊ぶ子ども達の様子を眺めながら、ふと自分達の子どもの頃の遊びを思い出して、懐かしく感じました。

私は大正七年に富士見村に生まれましたが、大正から昭和初期の頃の田舎の子どもの遊びを思い出しますと、何となく自然の四季（春夏秋冬）に合った遊びが多かつたように思われます。

例えば、春は草摘み、山菜採り、小川での魚取り等々ですが、草摘

み、山菜採りに使う鎌等の研ぎ方を大人や年長のボス的な子ども達の研ぐ様を見て、どのように研いだら良く切れるように研げるかと見よう見真似で覚えたものでした。

初夏の蛍の時期には、夕方になると子ども達が手に手に竹箒や桑の枝（春蚕飼育のため株元から刈り取り、葉をもぎ取り棒にしたもの）等を持って小川の辺の草叢を掃くように探すと、驚いて光を発するのでしょうか、数十匹もの蛍が捕れました。これを蛍籠に入れて生態を観察することも楽しみの一つでした。

昔は農業は殆んど使われなかったもので、何処の小川も水がとても綺麗でした。ですから、蛍の幼虫の餌のカワニナ（私達はカニラと呼びました）が川に無数にいたので、蛍も何処でも見ることができ、時には農家の庭先までも飛んで来ることがありました。

今では農地改革や農業使用によりカワニナが絶滅し、蛍の飛び交う田圃の風景も見られなくなってしまう本当に残念です。

昔の小学校には水泳プールなどはありませんでした。夏休みになると、学校の宿題や夏休み日記などは放りばなしで、上級生の餓鬼大将が子ども達を集めて、毎年決めてある小川のやや広がった所まで連れて行き、小枝を切り集める役、石を集める役などを指示します。

親達や先生の言付けを聞かない子ども達も不思議に餓鬼大将の命令には従い、不平不満も言わずに喜々として働くから面白いですね。

餓鬼大将も大声で怒鳴りながら先頭に立ってせつせと働きます。やがて流れが堰止められ、胸までつかかる位に水が溜まると、餓鬼大将が先頭で順に川ね入り、水遊びが始まり、翌日も翌日もと真黒に日焼けして、泳いだり、甲羅干しをしてりして戯れたものでした。

このような遊びの中から集団行動・団体活動の大事なことを覚えさせられたものです。

今の子どもの達のように恵まれ過ぎた環境に育かれたものには味わい得ない体験と思います。

秋の雑木林での鬼ごっこも、忘れ得ぬものの一つです。

戦中戦後の食糧難時代に、山里に近い林野は殆んど開墾されて農地となり、残された里山もその後のゴルフブームでゴルフ場として開発され、昔の様子はすっかり変ってしまいました。

私な子どもの頃は、至る所に雑木林があり、錦の紅葉が散り、小枯が吹く頃になりますと、これまた餓鬼大将が子ども達を集めて樹の上での鬼ごっこが始まります。ルールは簡単で、初めにジャンケンで負けた者が鬼となつて、樹の上で枝から枝へと逃げる者を追かけ、鬼に捕まった者、地上に降りた者が次に鬼になつて追いかける、ただそれだけの遊びですが、吹く木枯しも何のその、汗にまみれて夕暮れ近くまで続きます。

樹の枝から枝へと跳び回るので、樹の種類と性質、例えばえごの木・くぬぎ・なら等は柔軟性があつて折れにくい、みずき・ぬるで・にわとこ・みずなら等は折れ易い、枝の太さも瞬間的に感知する。そして体の柔軟性、体力や敏捷さの訓練にもなります。

最近アスレチックが所々に設置され、体軀の向上に意を注いでいるようですが、あの頃の体中に擦傷をつくり、或は地上に落ちたりしながらの遊びは忘れ難いものがあります。

危険だから駄目、怪我をするから駄目というよりも、子ども達を信じて自由にやらせてみては如何でしょうか。心配の余り、刃物を持たせない親達が多いようですが、そのために殆んどの子も達鉛筆も満足に削れない有様で心寒く思われます。

昔から日本人は手先の器用な国民と自他ともいわれてきました。私達が子どもの頃は、竹蜻蛉・風車・独楽・凧等を作ることが流行っ

て、鉈や鋸ナイフ等を使って、先輩達が器用にいろいろな物を作るのを見ながら、一生懸命に真似て作りました。

自分の作った竹蜻蛉が高く飛び上った時、凧が空高く上った時、風車が風を切つて勢よく回った時の喜びは格別でした。

独楽を作るには、その木は削り易いか、芯が通っているか、よく回るにはどのように優ればよいか、子どもながらいろいろと研究し競い合いましたが、そうした中から新しいアイデアも湧いてきます。

また忘れられない思い出に、「天神講」といって子どものいる家庭に宿をお願いして、床の間に空箱等を利用して祭壇を造り、半紙に「奉天満宮」と墨書きして祭壇に掲げ、それぞれ持寄った野菜や果物等を供えて礼拝し、聖徳太子・小野道風と並んで書道の三大聖人といわれた菅原道真公にあやかつて成績が良くなり文字が上手になるようにと、それぞれ半紙に奉天満宮と筆で書いて奉納し、一緒に食事をし、たわいもない話をしながら泊つたものでした。

男の子ばかりでしたが、年上の子どもの指図でどうか御飯を炊いたり料理も作れました。

冬の寒い季節は会館の庭で、かねたが回しや竹馬乗り、メンコ等、室内遊びでは日月ボール(けん玉)、国とりゲーム等種々遊びを行いました。国とりゲームは屋内の土間に適宜の大きさに正方形の線を引き、それぞれの角に陣をとり、ジャンケン又は賽ころで進む数を決めて、領地を広くとつた者が勝ちというゲームです。

その他数えればまだまだ沢山の遊びがありました。時代の遷り変わりとともに子ども達の遊びも激しく変わつてしまつたようです。

長所短所は一口には論ぜられませんが、昔の遊びはなんとなく情緒があり、知らず知らず自然との調和が保たれ、友達同志の信頼感が育くまれ、また遊びの玩具も自分で作ることに、手先の技術を修

得するなど、学校での勉強以外のものを身につけることができたように思います。

遠い昔のようにも、また昨日今日のようにも思われる、腕白時代の遊びの幾つかを懐かしく追想しながら記しました。

### お祭りの思い出

佐藤 充子(六十三歳)

私は横山町で生まれ育ちました。横山町とは今の千代田町二丁目銀座通りです。余り広い町ではありませんが、子どもは大勢いました。町の氏神様の小石神社を私達はお天王さまと呼んで親しんでおりました。私の名前も従姉妹の名前も、おてんの様の宮司さん(実相寺)につけてもらいました。境内は子ども遊び場で、かくれんぼには絶好の場所でした。

お祭りは毎年九月九・十日でした。小学校から帰ると、もうお祭りの太鼓が鳴っています。「ドーン、ドーン、カツカツカツ。ドーン、ドーン、カツカツカツ」その音は「早くおいで、早くおいで」と私には聞えます。ランドセルを投げるように下ろし、母の鏡台から白粉を見つけて出し(大人は忙しくしているので)自分で鼻の頭に白く一本線を塗り、口紅をつけ半纏を着、手拭で鉢巻をして、駆けて行きました。

今思いますと、子ども達の引く屋台はリヤカーに太鼓を乗せ、囲りを紅白の幕ではつただけの、まことにお粗末なものでした。それでも太鼓の音を聞ながら綱につかまって練り歩いた嬉しい気持は忘れられません。そして横山町の通りを練り歩き、どこかの家で梨を一つずつ頂き、その美味しかったこと。それは今思うと柄の長い自分の握り拳ぐらいの小さな長十郎梨なのです。食べきるとまた出発です。他の家で

も何い頂いたような気もするのですが、はつきり覚えているのはその小さな長十郎梨の味です。

夜は大人のみこしが出ました。黒光りのする大きなおみこしは、若い衆が大勢で重そうに担いでいました。「中に鉛を入れて重くしてあるのだ」と大人に聞いたような気がします。子ども心に立派なおみこしを誇らしい気持で見守ったものでした。

十二月はお酉様でした。毎年祖母にくつついてお参りし、縁起物の熊手を買いました。境内の表から裏手まで、いっぱい高い高々と熊手を並べて威勢よく縁起物売る店が並び、通りには露店、神社の入口には神棚にまつる大神宮様のお社を売る店が並びました。お金をもらって何を買おうかと迷いながら、恐る恐る露店でおしこ細工やべつこうあめを買った事を思い出します。

その小石神社もスズランデパートに変わりました。目をつむると神社の境内、そして太鼓の音、今でもありありと浮かんできます。子どもの頃味わったその事柄は、深くしみ込んで忘れることはありません。

### 想い出の運動会

藤 川 一 朗 (六十三歳)

季節も秋を迎え、やがて運動会の時期がやって来るこの頃、ふと昔の想い出の一コマが浮かんできます。

当時は自家用車がある家は少なく、出席人数が大勢で子どもだけでも百名以上おり、行きは殆んどの人が列を組んで敷島公園まで歩いて行き、帰りは前橋行のバスで帰ったものです。私達の名称は先発隊と名付けられ、運動会用具一式を持って現場に向かいました。良い場所を確保し、ビンのカケラやゴミを片づけ、危険のないように整地する

こと、三時間余りかかりました。白い石灰で凸凹地面に線を引きます。単純な作業ですが、これはこれで根気のいるものです。そしてこの白い線が運動会の基本となるわけです。

「運動会」この言葉のひびきに、大人も子どもも心を躍らせます。それは当時娯楽も少なくこのようなイベントが皆の数少ない憩いの場なのです。拡声機、演壇などの本部席の準備が済み、いよいよ運動会の始まりです。

子ども達は風のように走ります。中には裸足の子もおります。足の速い子もそうでない子も、皆一生懸命です。そんな子ども達を見てみると、テープを切る順番にかかわらず、皆んなに一等をあげたくなります。

現在ではパン喰い競争といえば、当然パンのわけですが、当時はお煎餅ですから、さしずめ煎べい喰い競争でしょうか。ともかくそのユーモラスな動きが、会場の公園に笑いを誘います。そしてなにより私がこの競争に好感を持ったのは、この種目が単にかけっこの速い子が勝つのではなく、お煎べいを食べるタイミングとコツが勝利を導くのです。大人たちも幾つか競技に参加します。先程のお煎餅喰い競争、婦人部の活躍する風船運び（この種目もかなり難しいものです）などです。風船運びはおしやもじの上に風船を乗せ、ゴールまで落とさずに走る競技です。そして運動会のハイライトは綱引きです。もう大人も子どももありません。一心不乱に綱を引く様は、童心に返り子どものようです。赤組も白組も『ガンバレ、ガンバレ、フレー、フレー』と大歓声がかかります。このようにして運動会はやがて終わりを迎えます。

公園の樹々たちは皆の走る姿や、お弁当のおかず、空に飛ばした風船や、一等をとって大喜びしている子ども、ピリで泣きべそをかいて

いた子ども、年がいもなく思い切り走って疲れた足をさすっている大人たち、全てを見てきました。

そして、そして……あつという間にあれから歳月がたちました。あの当時小さかった子どもたちも成人し、就職結婚と人生の階段を昇って行ったことでしょう。また運動会を裏で支えた役員や、一般の方達も頭に白い物が見え始めたり、すでに遠い世界へ旅立った方もおります。そうして今、古いアルバムをめくっていると、一つの想いが私の体の中に湧きあがります。あの時あの子達が、あの晴れた日のことをいつまでも、大切に想い出として残っていてくれたら、それが我々先達の最高の喜びだということを。そして今成人した彼らが、自分たちの子どもと同じ感激を与えてくれるようにと、願っています。

## 回想 前橋の映画館

横田 英二（七十三歳）

映画という言葉が定着したのは、おそらく昭和十年以降のことであろう。私の少年時代は、活動写真、略して「カッドウ」と言っていた。今でも活動屋という人もいる。当時は旧劇、新派と言っていた。旧劇は時代劇、新派は現代劇、西洋もんは洋画であった。今も昔も、マスコミは造語が巧みであった。昔の榎町（現代の千代田町三丁目辺りか）に前活館があった。（前橋活動写真館の略）隣りが「大和劇場」初めは第一大和といったらしいが、いつか「大和」となる。「マエカツ」は再上映物？が多く安かった。「大和」はマキノ映画を中心としながらも、帝キネ、極東、河合とか、群小製作所の物が多かったらしい。殆んどがいわゆるチャンバラ物が多く子どもにはそれ以外は判らなかつた。市川百々之介の物を多く見た記憶がある。切腹した男が、また次の映

画に出ているので疑問を持ったこともあった。

もちろん当時は無声映画で、弁士が付き奈落に楽団がいて、状況により伴奏を流していてチャンバラの場面には、鏡獅子？その他勇しい音楽が少年の血を躍らせた。あの頃（十年ごろ）は何々あんなに混んでいたか知らないが、スクリーンの前の板の間で見たり、裏側から見ただこともあった（子どもの故か）が、これはおかしいもので、すべて逆さまでマキノ系だけに、まともな映画が多く、嵐カンの「鞍馬天狗」、千恵蔵の「万花地獄」、右太衛門の「紫頭巾」を見たのは「大和」で、今でも主任弁士長尾某の名調子が記憶に残っている。暗い映画館の中で一つ灯りがついているのは売店で、安いセンペイを新聞の袋に入れて売っていた。前活、大和は所謂映画館通りであったが、他の二館、帝国館「電気館」はやや離れ、帝国館は現在のオリオン座の所であり、電気館は立川町通りであった。この二館は系統がはっきりしていて、帝国館は松竹系、電気館は日活系であった。この二館を見る頃には筆者もやや成長して、題名、監督、俳優等を選択するようになった。帝国館（松竹）は現代劇、電気館（日活）は時代劇に重点を置いていることも判るようになり、松竹では小津安二郎、保津保次郎、清水宏、五所平之介物を好んで見、吉村公三郎も「暖流」で売出してきた。当時は「割引」があつて、夜八時頃になると鐘を鳴らして入場料を安くした。三本立の一本位しか見られなかったが、「暖流」を見たくて何回も通った。石渡ぎん（水戸光子）、志摩啓子（高峰三枝子）、日匹裕三（佐分利信）の名も忘れられない。

日本最初のオールトーキー「マダムと女房」（五所平之介）が上映されたのも帝国館（昭和六年）であった。帝国館の前を通り抜けると立川町で、そこに電気館があった。上述の三館は野中興業の傘下だが、この館は平石門弥氏経営と聞いている。熊野神社の前である。一説に

は大概関東封切館といわれるが、昭和十年代に大映映画を見た記憶はなく、大概日活映画だった。大河内伝次郎の「丹下左膳」の一連、月形半平太もこの館で見たが、はねると東側の大きな木戸が開いて熊野神社の境内に出るが、西陽が当たり映画を見た眼には異様に眩しかった。日活が多摩川撮影所に移り、現代劇に優れた物を作るようになった。文芸物に力を入れ「人生劇場」「情熱の詩人啄木」「緑の地平線」等、また「土」「麦と兵隊」など、松竹と肌の違った骨の太い男性的な作を上映して若者の夢を誘ったが、作品評はまたの機会にしたい。平石氏の偉かったのは電気館と並列した「テアトル」を洋画上映館とした事であろう。記録によれば「昭和九年洋画専門のテアトルを隣接経営した」とあるから別棟だったのであろう？はつきりした記憶がない。

その頃の前橋は、無名の地方都市（蕪糸で知られてはいたが）で、外国映画は新聞、映画雑誌で知るのみで、上映館が無く見る機会がなかった。そこに欧州映画を主体にアメリカ映画が上映されたので、われわれは乾いた土に水が滲みるように吸収した。まだ戦前で余り反米感情はなかった。「モロッコ」「未完成交響曲」「武器よさらば」等、話にだけ聞いていた映画にも接することができた。また欧州名画祭を催し、「たそがれのウイーン」「白き処女地」「舞踊会の手帖」「望郷」「地の果てをゆく」「外人部隊」等、映画史に残る名作を上映し、暗い世相の中に夢を灯してくれた。また「ナイトショー」を開催し、遅い時間から一本立てで洋画の名作を上映し、若かった私達を喜ばせてくれた。太平洋戦争に突入寸前の、最後の光茫であった。名作を見た後の感動を映画館裏の茶房「おごにか」で友人達と熱く語り合ったが、その友の大方は大陸に、太平洋に行つて再び帰ることはなかった。

思いつくままに、戦前の映画館のことを書いたが、茫々、半世紀も前のことで、思い違い記憶違いもあると思いますので、気がついての

## 宗甫分今昔物語（抄）

### 序

長年青年会の特別事業として、「郷土史」の編纂を計画しておりましたが、今、茲に「宗甫分今昔物語」を発刊することが出来ました。この喜びは単に「物語」の編纂にたゞさわった私達だけでなく、宗甫分の方々や宗甫分に関係のある人達の大きな喜びであると思います。

この「今昔物語」は座談的文章で記録されており、ユーモア的な場面も相当にあり、年寄、子どもから一般の方々にも面白く読んで戴き、この村の様子がはつきりわかるように仕組まれております。

この「物語」が郷土の社会研究の資料となりますならば、望外の喜びであります。

稿を草するに当たり、村の長老 小林喜藤治（七十九歳）、林千治氏、林利忠氏には幾晩も夜更けまで御足労願ったことに対して感謝致すとともに、発刊に際して極力奔走して下さった小林富次郎氏、中村利三郎氏をはじめ、青年会有志の方々には厚く御礼申上げ発刊のことばと致します。

昭和二十五年十月

前橋市宗甫分青年明星会会長 林 楨一

### 宗甫分今昔物語 座談会記

司会者（小林富次郎氏）お待たせ致しました。それではこれから座談会に入りたいと思います。小林（喜藤治）さんと林（千治）さんは、御忙しい所を御出席下さいまして有難う御座居りました。

われわれの宗甫分の村が、いつ頃出来たか、又どういふ風に移り変わってきたか、いろいろ御二人に御伺いして、わが郷土史を記録に残したいと思ひ、青年会と農青連の共同主催で、この会を開いた訳であります。

みなさん、御遠慮なく、どしどしお尋ねになって下さい。

#### 1 今昔明治初年の宗甫分

はじめに、おじいさん達が、子どもの時分と今と比べて特に変つていたことはどんなことですか。

小林喜藤治氏 「渡」だなあ、「渡」といっても船橋で、渡し舟ではない。船の上に板を並べて橋にしたものだ。この船橋は、明治五年生まれの私が子どもの時分、渡つたことがあるのだから、少くともそれの前からあつたものだろう。

何時頃出来たか知らないが、今年私は七十九歳だから、百年位前からあつたのではないだろうか。それから、この船橋では不便だといふので、木橋が架けられたが、この橋は忽ち廃橋になつてしまつた。

林 千治氏 私は喜藤治さんより一廻り（十二年）下で、明治十七年生まれですが、私の記憶では、もう橋桁等はなかつたが、材料は立派な樺の木でした。この橋は、明治十二、三年頃出来たもので、明治九年頃までは船橋だつたそうです。宮内文作氏等が発起人で株を募り、その金で架けたのだそうですが、僅な間だけしか使用されませんでした。

今の利根橋の出来たのは、明治二十年頃だつたと思います。今の利根橋ははじめ無賃橋と称した。それは前の宮内さん等の架けた橋は「渡し賃」を取つたが、利根橋の方は取らなかつたので、そう呼ばれたのです。

宮内文作という人は、片原住吉屋旅館の主人で、上毛孤児院を創立した人です。それから利根橋は明治三十二年に架替したもので、その時今のように橋詰を高くしたのです。最初の橋の橋詰は煉瓦でした。

## 2 実政の由来 実政の渡 東街道 実政という人

○宗甫分を実政というのはどういう訳ですか。

林氏 宗甫分は殿様の時代から宗甫分で、実政が宗甫分になった訳ではない。実政というのは「渡場」の名称で、それが俗称になったのです。

この「渡場」は東街道の要所で、遠く東都から奥州辺りまで、その名を知られていたそうです。「東街道」というのは、昔日光へ行く大名の通った道で、京都から塩尻、諏訪を経て、ここ「実政の渡」を通り足尾を抜けずに鹿沼を廻って日光へ出た道です。

林芥二さんの屋敷の東の三本辻の所に、庚申塚の石碑があって、それに西、実政、東、二宮、と書いてありましたが、年号は薄くて分からなかった。二宮というのは勢多郡荒砥村の二宮のことです。今その石碑は見当たらないが、十歳位の子どもがわるさをするのに手頃の石でした。

○「実政の渡」について話して下さい。

林氏 「実政の渡」というのは、平家の何とか実政という人が開いたからだそうだが、よく知らない。野村敬徳さんに聞けばわかるだろう。(注 補遺参照)

高崎方面から来る本街道で、「大渡」や「新堀」は裏渡だった。それで此処の船頭達は表渡の船頭だといって、大分巾が利いたらしい。

実政の渡は橋ではなく船越でした。「新堀」は今の福島橋の手前で

下川淵村の最南端の所です。

## 3 宗甫分は三分の一

○宗甫分は紅雲町と一緒だったという話もありますか。

林氏 宗甫分が現在のように前橋市に編入になったのは明治三十何年かで、その以前は東群馬郡上川淵村字宗甫分でした。その当時の東群馬郡は、今の上川淵村と下川淵村の二カ村だけで、上川淵の中には東群馬郡の外に、西群馬郡があり、勢多郡も又、南北勢多郡に分かれていました。北勢多郡が今の利根郡となり、南が今の勢多郡になったのです。

宗甫分というのは、宗甫分、紅雲分、内藤分。内藤分というのは今の石倉です。この三分の一の一つで、この三分は皆殿様の特別の領地だったそうです。

## 4 村のはじまり 船頭七人、新建十七軒、明治初年の戸数、戸籍調べ

○村の歴史を調べるのに参考になる文書など知りませんか。

林氏 本家(林利忠氏)や後閑さん(実太郎氏)の所になどはあったのだが、今はどうかな。

○林さん(利忠)の所には随分あったらしいが、みんな整理してしまっただけです。その過去帳をみると宝暦以前の人のことは全然載っていませんね。

林氏 位牌は元禄時代のものも残っているが、墓は全然ない。もとはあったらしいが、普通のもののみならず取除かれました。

小相木の大徳寺の墓碑も元禄時代以前には取除かれた筈です。

○お寺はどこですか。お寺から調べると詳しく判るのですが。

林氏 大体堀川町の大泉寺と百軒町の高岑院だね。高岑院の檀家は二



十軒位あるだろう。

○何時頃から村が出来たのですか。人の話では昔は本家（林利忠氏）が名主で、あとは船頭が三、四人しかいなかったそうですね。

林氏 さア、それは判らないなア、昔は船頭が主で、平家の人達もここに留ったということです。天川原は信州の人が多いが、ここは大體新潟の出（出身）が多いようです。

○林利忠さんの家は四百年も続いているそうですね。

林氏 そうさ本家（林利忠氏）の家などが一番古い方だろう。兎に角私にはよくわからない。

○船頭は何処の家などですか。

林氏 市之坪に船頭屋敷があつて、船頭が七人いたそうだ。

高橋芳松（当主、優介氏）関口政吉（当主喜平氏）、石田の擦糸屋（当主石田喜作氏）などの先祖は船頭だ。信沢栄吉さん（現在この家はない）船頭屋敷は今の市之坪の清水万平さんの屋敷のすぐ前の方にあつたそうです。

○私が憶えがあつてから船頭をしていたのは、関口政吉（喜平氏の祖父）、信沢栄さんです。渡場だったら商店なんかもあつたでしょう。

後閑（実太郎氏）さんの家をタナ（店）と呼んできた。あすこの家は昔の雑貨屋です。（田村房太郎氏）の所も元は酒や菓子を売っていたのです。

○新建十七軒について新建というのは、今の開墾者みたいなものですね。

そうだよ。新建十七軒というのが実際は十五軒で、その十五軒はみんな他所から、主に新潟の方から来た人達です。

あとの二軒は、もとから村にいた人がこの時分家して、殿様から一緒に分け前を貰ったのです。新建を建てる時は殿様から金と河原

の割地を貰ったもので、今でも河原に割地を持っている家が新建組です。新建は全部古家を買って来て建て直したのだから、柱などに余分な穴があいているだろう。殿様から貰ったゼニに足し前をして家を造った訳さ。その時殿様から十五両貰ったと伝えられているが、中にはあました家もあつたそうです。当時の河原は殿様の持分で松山だったそうです。

○川原に割地を持っている家はどここの家ですか。

林氏 村山駒吉、信沢長作、細井伝平、吉田芳雄、信沢忠八、小林藤太郎、川島峰二郎、小林喜藤治、小林安太郎、斉藤伝重、前田己之吉、信沢篤五郎、後閑余五郎、村山良造、あと一軒は忘れたが、確か今紅雲町へ行っている後閑茂七さんの所だったと思います。この中、後閑余五郎さんと村山良造さんは他所へ移って、現在村にはいない。この時分家して出た後の二軒は私の家と林初治さんの家です。新建以前の旧い家といえば、林、信沢、それに高橋、石田、関口など僅かなものでした。

信沢良徳、信沢勝四郎、信沢福寿、信沢角太郎さんなどは皆一家です。信沢忠八さんの所は同じ信沢でも別の系統です。

○関口さんの家では、この過去帳を見ると関口薫工門という人が一番古く、宝暦九年の三月二十五日亡となっております。

○斉藤（伝重）さんの所は天保年間から始まっております。

小林氏 信沢勝四郎さんのお祖父さんは貞治という人で、明治四十年に七十九歳で亡つていますが、この人は実際は天保十二年の生まれだが、上川淵から前橋へ戸籍が移る時、十年が落ちて只の二年生まれだということになり、実際は七十歳だが、八十歳の御祝を貰ったことがある。

○田村（房太郎）さんの所は昔本町にいたそうですね。

林氏 そうかも知れません。比較的新しい家だよ。中村正光、中村仙吉さんの所など、みな新しい組だ。

○中村正光さん、中村仙治さんは何れも新潟の出ですね。

○村山家の祖先は林利忠さんの所にいたそうですね。

林氏 駒ちゃん(村山駒吉氏)のお祖父さんという人が本家の作男だったのです。村山は今が駒吉、その前が平三郎、それからその前がやはり駒吉です。それから林鳥蔵さんのお祖父さんは利八という人で、今の竹内工場の所に水車があつて其処に住んでいた。この家は林姓を名乗っているが、林一家とは別に姻戚関係はない。

○この過去帳によると、江戸の神田の生まれで、文久三年二月二十二日亡、左官の熊工門というのがあります。姓がないのですが、関口の熊工門という人と同じ人ではないでしょうか。

林氏 左官の流れがチョイチョイいたよ。二、三日から長いものになると一年も滞留していた者もチョイチョイいました。

○西村家は鹿の字がつくのですね。明治九年二月九日亡 西村鹿五郎という人が載っております。

林氏 西村は西村安太郎さんの方が本家らしい。今では鹿之助さんの方を本家といっているが、確かな事は分らないなア。

西村さんは川原の地所を買って持っているものです。それから橋の棟梁という人がいた。石田留吉という人で、その人のお父さんは増田浅吉といった。父子の姓が違うことについては私はわからない。○過去帳でみると越中の人で新川郡増田村の生まれとなっている。明治七年二十八日亡くなっています。

小林氏 この人は背の高い、そっくりしては歩いた人でした。

○松沢君五郎さんのところは  
あれは新しい耕地整理以後に前代田の松沢から分家して来た人で

す。

○松下さんのところは

私の家は平家の出だという話だ。親父は群馬郡の清里村から来た人です。

○元村に住んでいた人で他所へ移った人は

林氏 田町の神田のお医者のお母さんは宗甫分の人で、林初次さんの叔母さんに当たる。神田(医師)さんのお祖父さんは信州の人で、酒屋でした。神田さんのお父さんの政吉さんという人は、滋賀の人で、神田へ養子に来た人です。青木通泰さんのところは、現在栃木県の今市に移っている。根岸善太郎さんは東京へ行つた。前田良太郎さんは東京へ出て綿糸問屋で成功しています。

○明治初年頃の戸数はどの位ですか。

林氏 明治九年の改正の時の話で、戸数は四十余軒だったろう。何でも大日堂、山本さんの所が戸番の終りで、四十三番地でした。それから明治二十二、三年頃水車の林登平さんが本家(林利忠氏)から分家して四十四番地になったのです。

あの水車は、はじめ松本久吉という人が水車を廻していたもので、松本久吉さんは林登平さんの母の弟で、登平さんはそこへ養子に行つたのです。

大日堂というのは、大日如来をお祭りしたもので、念仏講というのがあつて、その念仏講の人達が鈴を鳴らしながら喜捨を集めて建てたもので、本家の林登平という人が、その先頭になってやったものです。

○もと百姓をやつていて、今全然やつていない家はどこですか。

林氏 川島(当主 峯三郎氏、アミノ酸製造)、林平さん(関口正吉、日通社員)、角ちゃん(当主、信沢角太郎氏、撚糸業)、吉田芳雄(公

吏)、林富美雄(市役所勤務)、西村安太郎(雑貨商)、石田善作(擦糸業)、前田巳之吉(商業)。それに実ちゃんの兄貴の後閑源次郎、関口喜平さん辺りだろう。後閑源次郎と関口喜平さんは今どうしているか知らない。

○屋根屋(当主 山本隆三郎氏、もと山本興三郎氏という人が葛屋根屋をしていた)の家は相当古い建物ですね。

林氏 あれは相当古い。大日堂も百年位経っているだろう。

○村で一番古い家(建物)はどこですか。

林氏 この間(昨年)利根川へ落ちた石田(善人)の家だ。

○あの家は鉈を全然使っていない。チヨナだけでした。

林氏 惜しいことをした。

○福寿さんの家を上宿といえますね。

林氏 あれは福寿さんの家が一番上(北)の方にあったので、そう呼んだのだ。昔はあすこまでしか家がなかったのだ。そしてその家を通って鎮守様へ行ったものだ。喜藤治さんは信沢良徳さんの家のあつた事を憶えていますか。

小林氏 憶えていないね。

林氏 それはさいさんの家が斉二さんの西にあったが、火事で焼けて

しまい、今の所へ移った。これは年寄りの話だ。私にも憶えはない。

○上宿時代の家は今の松下(元男)さんの家の様に葛家ですか。

林氏 そうだ。

○龍巻当時(大正九年)はまだ家も少なかったのですね。

林氏 その頃はまだ、中村の正ちゃん(正光氏)の家は出来てなかった。中村さん(利三郎氏)の家は何時頃ですか。

○私が前商へ入学した年ですから、昭和六年です。前代田から引越して来ました。

そうすると脳病院(今の関東殖産会社の所から江木へ移った。厩橋病院があつた)が出来たのは昭和四年頃ですね。(注 厩橋病院の創立は昭和三年五月十五日)

小林氏 この家(小林寅次郎氏宅を指す)の東に、今の長屋のあるところに関口林平さんの水車があつたね。あれはあんまり長続きしなかった。(注 この長屋はもと、川島家の地所を小杉直吉氏が買受け、分譲地としたもの)

林氏 その水車は大正十二年に出来たのです。昭和六年頃まであつたかな。林平さんの水車が止めると、直ぐ今の長屋が出来たのです。

下の水車、あれももとは吉田芳雄氏の東にあつた。

今前代田の大島(大島政吉氏)さんの作っている田圃の東にあつたものを、タイヤ屋の信沢の鳥松という人のお祖父さんがそこに

たのです。

○信沢良徳さんの家を瓦屋といいますが、瓦屋だったのですか。

林氏 そうではない。あすこの家は家根が瓦葺きだったので瓦家と呼ばれたのです。

○それから信沢良徳さんの東を、お蔵、お蔵と言いますが、どんな由来があるのですか。

林氏 あれは昔、殿様に納める米蔵があつた所です。

○そのお蔵というのは、今の高橋道郎さんの所の倉庫位、大きい蔵だったのですか。

林氏 いや、三六、十八の十八間の蔵でした。

○信沢林作さん(良徳氏の父)の家はその蔵材で造つたそうですね。

林氏 そうではない。あの家はもと渡場の北にあつたのですが、火事で焼けた時にこんな河淵では危険だということで、今の所へ移つたんです。今の家を造るね、村では始めて瓦葺きにしたのです。それ

でカワラヤと呼ぶのですが、それまで瓦葺は神社だけでした。

○西村（鹿之助氏）の二階のはしご段（階段）はその蔵のやつだった  
そうですね。

林氏 いや、それは違う。あれは揚げ場のはしごだったのです。揚げ  
場というのは座繰の共同作業所で、それが二階建の家だったのです。  
明治三十年頃の話さ。

お蔵のあった跡に長さんの家があった。長さんというのは林長二  
郎の事で、今は林トシ造さんが住んでいる所です。林トシ造さんの  
トシという字は字引にない金偏に長と書くのです。（注 銀 これを  
トシと読むせる）

下の水車は東に高橋道郎さんの以前に、荒木五郎平という人が始  
めたのです。そして西が林登平さんの水車でした。そしてもとの水  
車は、今の道郎さんの水車の裏の方で、そこには六供の荏原久吉と  
いう人がいました。今の竹内工場がある辺は昔、滝があった。その  
滝を利用して工場が出来たのです。今の竹内の前が鐘紡、その前が  
三井でした。

○竹内は経営が変わったそうですね。

林氏 今迄は不二蚕糸の前橋工場でしたが、今度は大同銀行の経営に  
替り、前橋製糸になったそうです。

#### 5 利根川 崖潰れ、新橋、鉄橋と両毛線開通

○利根川はもと、市中を流れていたそうですね。

林氏 そういう話だ。昔は用水堀だったともいうが、今の本流はもと  
の支流だった訳だ。昔は川幅も非常に狭く、両岸は笹がしなだれる  
と絡み合ったといわれています。

○利根川の変流は大同年間だということです。

利根川は大部欠けたようですね。

林氏 私の母は小相木の人ですが、その話によると、昔、小相木の浅

間神社の裏の河原に六畝位の雑木林を持っていたそうですが、その  
雑木林の所が今は河の真中より東側になっているということです。

小林氏 私共の憶えがあつてからでも、大分欠けたかなア。吉田（当  
主豊吉が、現在紅雲町居住）のおこのさんの住んでいた所など欠け  
てしまつて今は跡形もない。吉田の小屋のあつたところは、もとは  
道だった。傍に大きな竹藪などがあつた。

今の若い人は、おこのさんの前に道があつたことなど、知らない  
だろう。それからその前に、信沢の擦糸屋（当主信沢角太郎氏）の  
でかい家があり、其処には小相木から引張つて来た土蔵があつたが、  
後年水が出て崖が潰れ、壊れてしまつた。それから事務所の前、福  
寿さんの家の前の方に、西村安太郎さんの家があつた。

その前は木村傘五郎という人の屋敷があつた。今の畑の前の方だ。  
それから今は村にいないが信沢金三郎という人がいた。その信沢  
金三郎さんの畑があつた。この人は私と同年だが、とつくなモグラ  
堀に出かけてしまつた。其処はこちら（小林富次郎氏宅を指す）か  
ら行つて道の西の方だ）

林氏 そうです。そこには怖い程深い道があつて、その先に御獄山と  
いうのがあつた。それは道の西側でした。御獄山の東に二軒家があつ  
たが、今これは影も形もない。その前の方に石田留吉という橋を架  
けた頭梁が住んでいた。昔の橋は今の林島蔵と後閑（実太郎氏）の  
境目の所にあつたのです。

○そうすると今の道からまだまだ西だった訳ですね。利根川も随分狭  
かつた訳だなア。

林氏 そうさ。田村の屋敷の下に林文夫の家があり、その欠けた西に  
信沢栄吉さんの家があつたのです。林文夫さんの屋敷が、もとの御

番所跡で、その前を通って北に曲り橋を渡ったものです。昔は群馬郡から来た人も手形がないと橋は渡れなかった。何しろここが前橋の本通りだったのだからなア。

○御番所の話は明治の前ですね。

小林氏 そうだ。山田のきいさん（山田喜平氏）の西を通って、上つて来た道を曲った所だそう。私共の知っているのは東の方だった。今その道はない。とうになくなってしまった。

今の入沢の屋敷の裏、山田の屋敷の廻りに道があった。その道がおこのさんの所を通って今の事務所の所へ出たが、それがだんだん欠けてきたので、今のよう廻り道になってしまった。今の林今朝一郎さんの前を通って本家のワキに出た道だ。

林氏 今朝一郎さんの家の前に、信沢金三郎さんの家があった。そこは本家の土蔵の西に当たる所です。それが入沢の屋敷に通じていた。そして今の事務所の所から川が流れていたのです。

駒ちゃんの裏にも道があったが、あそこは人が通らなかつた。私が憶えがあつてからでも、利根川は随分欠けた。

西村のやつちゃん（西村安三郎氏）、田村（田村房太郎氏）、角ちゃん（信沢角太郎氏）の所は全部なくなつてしまった。信沢の金三郎の向屋敷がその東にあつたがなくなつてしまった。それから林齊二の家、後閑、林文夫の家が欠けた。十屋敷位なくなつた訳です。

○福寿さんなんか、家の西に粘土を掘つた所を知っていますか。

小林氏 知らない。畑のあつたのは知っています。

林氏 畑は池の西だろう。豚小屋の西に畑があつたのだ。粘土を掘つたその向うに畑があつたが、そこは今丁度、利根川の真中になつています。

○利根川の渡り始めに行きましたか。

林氏 行かない。初めはやはり吊橋で、鉄線で引張つたもので、下にいた頭梁が造つたものだ。

橋脚は鉄の柱で、周囲が鉄で中にコンクリートを詰込んだものだ。その橋脚は後年（明治四十三年）の大水の時流れた。今でも鉄橋の辺りの下にあるだろう。二人抱ぐくらいあるやつでした。

○その時今の鉄橋は？

林氏 勿論なかつたね。あの鉄橋は汽車が通る時できたが、鉄道のひかれたのは明治二十三年です。

○その当時の模様を

林氏 はじめて両毛線が通つた時は、機関車が二台通つて鉄橋の下に技師がいて、何寸位下つたか重さを計っていた。

鉄橋が出来るまで鉄道は石倉までしか敷かれなかつたのです。当時は石倉から元総社へ行く道の所に停車場があつた。総社へ行く途中、上越線のこちら側の窪んだ所、上石倉から下石倉へ行く所に今でも煉瓦が残っているだろう。乾燥場のカマダの所を北へ上るところだ。そこが、その停車場の跡だよ。

#### 6 天災地変 龍巻、洪水、火事

○天災地変で特別の思い出はありませんか。

小林氏 大正九年の龍巻だなア。あれはほんの瞬間の出来事だった。

林氏 秋蚕が上がり、休みで縁先で腰を下ろしていたら、本家のじいさんの益治さんが六供の方から帰つて来て、私の名を呼ぶから立ち上つて庭へ出ようとしたら、パラパラと屋根瓦が落ちてきました。

小林氏 私はあの時丁度、関口林平さんのところへ行つていた。風が吹くなア、と思つて急いで家へ帰つてみたら、女子どもが必死になつて障子を押えていた。

林氏 この時は長ちゃん（信沢長作氏）、駒ちゃん、福寿さんと西村の

本家が倒れた。お稻荷様とやっちゃんの家が半壊した。

山田のきいさん、入沢の家が潰れた。それから品ちゃん、のいた葛屋も潰れた。怪我人は沢山出たが、死んだのは一人だけで、長ちゃん、の所の婆さんだけでした。龍巻の始まった時は、雨はなかったが降るは降るは物凄い大雨になった。

福寿さんの所の物置は葛屋で、低い二階屋だったが、その二階に積んであった蚕籠が、みんな川(利根川)の中へ落込んでしまった。それ程この龍巻は大きいものでした。

小林氏 私が潰れた駒吉さんの所へ行ってみたら、駒吉のお婆さんが潰れた家の下敷きになっていたが、うまい具合に柱と柱の重なり合った僅かな隙間に挟まれたお陰で、生命だけは助かったが、引きずり出してみたらお化けみたいに髪は振髪で、泥ボタモチになって出てきた。

○洪水で記憶に残るものはありませんか。利根川が大分荒れたでしょう。

林氏 天明三年の大洪水の話は別として、明治四十三年に大洪水があつたが、それも大した被害を受けたわけではない。

天明三年浅間の大噴火の時は、溶岩のために吾妻川の水が五昼夜止まったそうです。

今の竹内工場の南、櫛島へ行く道のある堤防はその時造つたのだそうだが。

私のお祖父さんのお祖母さん、だから私から六代前の人が位牌を背負つて、今の生川住宅の所へ避難して行って、そこから西の方を見たら水が見えたそうです。

だから大した大水だったのだろう。

明治四十三年の大洪水の時は、刑務所の□室、今自動車の通る道

があるだろう、あそこが流されてしまったものです。

○今は余り聞かないけれど、「火事はどこだ、実政だ……」などと前代田の方の人が言つたのを聞いたことがあります、そんなに火事は宗甫分の名物ですか。

林氏 そんな事はないね。私の憶えがあつてからは三、四回で、川島の火事が昭和十年頃だったかな。

その前、信沢の角ちゃんの所が大正五年頃と、小林喜藤治さんと小林藤太郎さんのところが焼けた。

小林氏 私の家は大正七年に焼けた。藤太郎さんの所も、大正時代だったが年は憶えていない。

## 7 神社・御輿

○次に神社のことを聞きましょう。

林氏 あんまり知らないなア。

○いくらかでもよいのですが、先ず水神様の由来は？

林氏 よく知らない。前代田の代田

神主が詳しく知つている。書いたものを持つている筈です。

○今の神社が建つたのは何時ですか。

林氏 明治二十年頃だろう。それ以前は葛屋で、今の福寿さんの家の

西の方にあつたのです。

○もとの神社は架橋の向う側にあつたそうですね。

林氏 もとの神社は福寿さんの家の

所が大門で、当時の神殿は今では



南町 水神社

利根川の真中になっている。福寿さんの家は大門の南側にあった家です。

小林氏 われわれの子どもの時は、利根川も真実に狭かった。

林氏 小相木の浅間神社も二度引越して、今度で三度目です。

○神社にある日露戦争の時の大砲の弾丸は、誰が持って来たのですか。

林氏 あれは中村五郎吉（仙治さんの兄）さんが持帰ったものです。

○神社の白蛇に絡る伝説について。

林氏 全然知らないなア。

○昔の御輿はどんな風でしたか。

林氏 今と同じさ。そう変つてはいない。尤も昔は、船頭の仲間が福島新堀辺りから揉みに来たものだ。

○若い者だけでしたか。

林氏 いや相当年寄りも一緒になって揉んだものだ。大体夕食後からはじまって、四、五人の者で担いで廻った。今度の戦争中も揉んだ

よ。御輿は大小二組あつたのです。

○夕立に会つた時の話を。

林氏 一度、何時だったか御輿の晩におそろしい夕立があつた。若衆

がビックリ仰天、御輿をほうり出して逃げ出した事があつた。

○以前から七月十五日に決つていたのですか。

林氏 いや、もとは七月三十一日だったのだが、養蚕の都合で十五日

早くして、今のようになつたのです。約二十年位前から

らだろう。だから以前はよく、夕立に出会つたものさ。

8 農業のはなし 養蚕も盛んだつた。トマトや甘藷の元祖は

誰か？

○宗甫分の農業は明治時代も米麦中心だったのですか。

林氏 一時養蚕が盛んだつたね。大豆も十俵、小豆も一俵位とつた事

もある。陸稲と甘藷だけは作らなかつたね。

○甘藷の元祖は誰ですか。

林氏 勝つちゃん（信沢勝四郎氏）だろう。私のはじめて作つたのは

川越芋で、葛ばかり、筋ばかり出来て食べたものではなかつた。だ

から甘藷は作つても駄目だと思つていた。丁度ネズミの尻尾位のもの

のしか出来なかつた。

宗甫分のような所では甘藷なんか到底出来なかつたと思つていたの

だよ。

○馬鈴薯なんかありましたか。

林氏 多少あつたね。本家の斉造さん（利忠氏の父）の親父の嶺治さ

んなんか、こんなものは人間の食べるものではないなどと言つてい

た。その頃の藪は苦かつたものです。

○トマトなどあつたのですか。

林氏 あつたね。はじめ赤茄子と言つていた。トマトは今のと種子が

違ふのか食えなかつた。食えない位だったから、確かに品種も悪かつ

たね。

金子才十郎さんの親父さんが、広瀬川の比利根橋の際で戸板店で

はないが、小さな種子屋をやつていて、この家は半分川の中に出張つ

ていたものです。そして名前は何と言つたか知らないが、私はこの

人からはじめてトマトの種子を教わつたのです。

当時、赤茄子は西洋料理に付いているだけで、前橋で西洋料理を

食べさせるのは赤城亭だけでした。

才十郎さんの親父さんが赤茄子を作つてみると言うので、四作、

作つてみたところ出来た、出来た、大出来だった。桑摘籠に一杯か

ついで来た。

丁度この時、大渡（今の橋際に住んでいた）の方から、目刺や塩引を売りに来る魚屋が来ていて、これを見て、「これは氣違茄子だ。俺は群馬郡の方へ商売に行くが、向うではこれを食べて氣違いなったものがある」と言う。これを聞いて家の親父が怒り出した。

捨ててしまえと言うので仕方なくみな利根川へ捨ててしまった。

それから又、秋になって大根の種を買いに金子さんのところへ行つたところが「トマトはどうしたか」と言うので、こういう訳で沢山とれたが皆川へ捨ててしまったと話したら、「惜しいことをした。どうして俺に話してくれなかったか」と非常に悔まれた。

その話のあつた翌年、トマトはこうして食べるのだといつて、金子さんのところで一緒に始めて食べてみた。それからずっと四十年来私はトマトを作っている。トマトは私が元祖だ。はじめはこの村でも食ひ手がなかつた。あの当時のトマトは小さく、色も真赤で、丁度ほおずきのようなでした。

○西瓜はどうでしたか。

林氏 昔は西瓜より真瓜というのが流行ね。

## 9 刑務所

いつ頃出来たか、昔の刑場は、博徒

○刑務所はいつ頃出来たのですか。

林氏 あれは明治十八年に起工して二十年か二十一年に竣工した。

○刑務所ははじめからあんな立派な煉瓦塀だったのですか。

林氏 そうだ。もと、あの敷地は田圃だった。

○みんな宗甫分の人を作っていた田圃ですか。

林氏 いや紅雲町の人も来て作っていたが、大分は宗甫分の人達でした。

○工藤（政吉氏）の親父は大手（注 看手の下役）だったのですが、

あの人の親父が槍で受刑者を刺殺したとかいう話ですが。

林氏 絞殺の筈だったからそんな事はないだろう。槍で刺した話は、この刑務所の話でなく、殿様時代天川町の方でやったそうだがね。小林氏 県庁の西の方に刑場の跡が残っていた。お濠の直ぐ傍には半屋も残っていた。

林氏 お城の話が出ましたがね、信沢栄吉という人は十四歳の時元服して、その年、今の県庁、当時のお城の濠掘り、モッコ担ぎに行つたそうです。

県庁の土堤の上に植わっている松の木の根は土堤の下にあるのです。今九十四、五歳の人は、皆使役に行つたそうです。だからあの土堤もそう古いものではない訳です。

○博徒うちがいたそうですね。

小林氏 弥三郎という本職がいた。でかい男だった。

## 10 教育 人物

○村の教育について話して下さい。学校がなかつた時からの事から話して下さい。

学校のない昔は、林斉造さんの祖父の登平さんが手習の先生だったそうです。

この人はなかなかの学識家で、この人が松前屋五郎兵衛の一代記を手写した本がある。私も見たことがある。きつと今でも本家にあるだろう。

それから冷泉院の寺小屋へ行つたものです。その次が六供の学校で今の寿延寺の傍にあつた。はじめ寺の本堂で教えていたが、そのうち草葺の二教室ができ、一年、三年、四年はその教室、二年だけが別の長屋の方の教室でした。その前に前代田にも学校があつたのです。



喜藤治さんなんか冷泉院へ通ったものだ。

私は今の神明幼稚園のところに前橋高等小学校が出来て、そこへ通った。

この村で高等小学校へ通ったのは私をはじめです。そうさ。中等学校は林利忠さんが一番はじめだろう。あの人は農学校だ。中学は利忠さんの死んだ弟さんが一番はじめでした。

○学問で成功した人はありますか。

林氏 大体この村は余り教育は盛んではない。学問するより、ためめ後押しをしろと言われて、学問はさせなかった。

学問で成功した人といえば、まあ根岸由太郎さんだろう。この人は私の従弟ですが、小学校を終えるとすぐ異人館へ行き、それから東京に通学して築地の神学校へ入り、それから慶応大学を卒業して、竹越興三郎さんとアメリカへ行つて苦学しながら勉強し、遂にアメリカの文学博士になった。それから日本へ帰つて来て立教大学の教授になり、三十年間教職にあつた人です。

竹越さんという人は、しゃべる事より文章がうまかったが、根岸の由太郎さんは十四、五歳の時からペラペラと英語の会話のうまい人でした。

○人物が出ましたね。外に立志伝の人はおりませんか。

林氏 小林藤太郎さんの弟で三次という人がいる。海軍大佐になった人ですが、この人なんか十七歳の時、司厨で出て行つて勉強し、特進となつて再役、又再役でとうとう大佐まで昇進した。努力家でした。

○変わった人物では。

林氏 細井の伝平さんのお祖父さんの森平さんには面白い話がある。この人は非常に働きの者でした。

昔は家を建てる時にはみんなで手伝つてやつたものですが、この人だけは自分だけでやつてのけた。

鬼瓦も自分で軽石をとつて来て彫つた。だから石の鬼瓦なんかどこの家にもない。あの人は身生(財産)を残す博士でした。だから、秋だつて人が忙しいという時でも銭湯に行つてた人でした。とうがをいつでも担いでいた。頭が良く、米でも何でも早売した。あの人は商売のある人で、儲るとなれば屋敷でも何んでも手放した。

下のせいちゃん車(水車)だつてもとは細井のものだつたようですが、電気が来るといので急いで売つてしまつたのです。鬼に角稼ぎ家です。

## 11 思い出

風俗、マツチ、電気、自転車、リヤカー、ラジオ

○明治時代の風俗はどうでしたか。面白かったですか。

林氏 明治時代は羽織、袴に靴でした。官員様だつて洋服なんか余り着ていなかった。半靴で横に布の付いた靴があるだろう。あれだよ。この辺では刑務所の看手や巡査だけが制服制帽で、洋服を着ていたのです。

○電気は何時頃、宗甫分に入つて来ましたか。

林氏 大正六年頃だつた。その前明治四十一年に共進会があつて、その時はじめて前橋にも電灯がついたのです。

小林氏 私の子どもの時分は、行灯でマツチなんかなかった。烙口箱(はくぐちば)というのがあつて、火打石でカチカチやつたものだ。あれも慣れないとうまくゆかない。それから付木に付けるのが大変だつた。それから間もなくマツチが出るようになったね。小林のおじいさんの仁太郎さんなんか、マツチを面白がつて摺り、当時は皆山から木を切つて来て棚を作つたものだが、その棚に火をつけて、河島のおじ

いさんの利八さんに見つかり、ひどく叱られた事があった。明治十五年頃の話しだ。

○ラジオの入ったのは最近ですか。

林氏 極く最近だよ。関口の林平さんが一番先だ。レシーバーを耳に当てて聞かやつてした。

○そうすると十五年位前ですね。

林氏 そんなものさ。

○自転車は誰が一番早く乗り出したのですか。

林氏 細井の森平さんが一番最初だろう。

○その時伝ちゃん(当主伝次氏)はいたかね。

林氏 伝ちゃんが生まれたばかりの時だ。

前橋にはじめて自転車が流行したのは、今の関口市長さんの家の前の方に池があつて、その廻りに自転車の練習場があつた。一日だけ、半日だけ、いくらくと金をとつたものです。当時は金輪で六ヶ位自転車でした。勿論その頃の自転車だつてチェーンはあつたさ。

私が一番はじめに自転車を見たのは、今の竹内工場(前橋製糸)もとあれが鐘紡工場でした。その頃あすこの鉄工が乗つて来た。前の車が大きく、後の小さい車体でした。

明治二十三年頃の事だつたらう。当時自転車は丁度今の子ども自転車をみたいなものさ。自転車をみてから五十年以上になるだろう。私が何時から乗り出したか忘れてしまったなア。

○それではリヤカーは誰が一番はじめですか。

林氏 面倒な話だなア(大笑) はじめは誰だつたか覚えはないなア。自転車にしても、リヤカーにしても当時の値段は今から思うと嘘みたいな値段だつたよ。それでも仲々買えなかつたものだ。自転車なんかもとは十六、七円だつたし、リヤカーだつてやはりはじめは二

十円しなかつたらう。

小林喜藤治氏 荷車を使い出したのだから、そう古い話ではない。昔の運搬はみんな担いだものだ。『ジョロータ』といつて、藁で作つた背当を用いてなア、そうさ、二宮金次郎が薪を背負っているだろう。あれだよ。私の子どもの時分はみなあれだよ。リヤカーなんてごく最近だ。

○福寿さんなんか、リヤカーのはやりはじめを知っているかい。

○知らないなア。

○私(松下元男氏)の前商時代(昭和六年〜十一年)つて、まだガラコン、ガラコン車でした。

林氏 リヤカーは死んだ煙草屋の長さん(林長二郎氏)なんかが早い方ではないかな。先を押しに行くリヤカーがあつたらう。百姓はあれは使わなかつた。大演習は昭和九年だから、そうするとその少し前から使い出したのだろう。

○私(信沢福寿氏)の親父は昭和十三年に死んだが、リヤカーを使っていたから、もうその頃は少しはあつたのでしょうか。

○変な話ですがね、河原淵に火葬場があつたそうですね。

林氏 今の刑務所の墓地の南、信沢長作さんの墓地の河原に下りる所に刑務所の火葬場があつて、受刑者の火葬が行われたのです。

村の火葬場もあすこにあつたのですね。天川の焼場が出来る前、神田宇一さんの叔母さんを焼いたのが終りで、戦場で焼くのと同じで切石が二つあつて、その上に死体を載せ、周囲に菰をかけ、蒸焼にしたものです。

## 12 昔ばなし

戸長役場、水戸浪士の事件、検見役人

○言い伝えられた昔話があるでしょう。そういう話をして下さい。

林氏 昔は名主様がいた。明治五年に戸長役場が出来た。戸長役場は今の林（林千治氏）の精米所の所だ。戸長役場時代に使っていた椅子や火鉢が今でも神社にある。初代戸長は本家だった。その後、私の祖父（伝治氏）がやった。だからよく西村のやつちゃんのお婆さんが戸役様と呼んでいた。

初代戸長は林登平という人だ。勿論今の林登平ではない。この人は中風で死んだ。

戸役の前はその登平さんのじいさんがやっていて、林登平さんが最後の名主で、又はじめての戸長でした。安政時代の名主に久右衛門さんという人がいた。その人の時に、水戸浪士の事件というのがあったのです。

○何ですかその話は。

林氏 それは安政六年、水戸の浪士が福島を渡って前橋城へ押掛けて来るとい注進があつたので、城主から触出しが出た。当時、公田に中渡があつたので、早く船を引揚ろという。その触出しの使に私の父の伝治が行つたそうだが、前橋藩では実政の渡を切つて、今の後閑の屋敷の所へ大砲二門を据え、迎え打つことになった。そして女、子どもまで集めて気声をあげ、大軍が警備しているように見せかけたそう。ところがその頃の武士なんて意気がなかったらしい。ブルブル震えて戸棚の中に隠れていたそうで、亡くなった当時の村人達が笑っていた。

兎に角敵は来たけれども事は納まり、みんな小相木の大徳寺へ連れて行き、そこで武装解除をして弾丸はみんな桜の木の下に埋めさせた。

それから一時龍海院に置いておいたそうです。当時の槍が最近まで大徳寺にあつたように聞いている。その時敵の大將が持つていた

蝙蝠傘というものを始めて見たそう。尚その時来た浪士の数は七、八十人で、その分されが下仁田戦争の勇士だと言ひ伝えられています。それから……

○それからまだあるんですか。

林氏 殿様時代には藩役人の検見が来るまでは、稲を刈らされなかった。不況の時だけ周囲三尺だけ刈つて食べた。それでそんな不況の時、名主が検見に来る藩役人をあげて飲ませたり、食べさせたりして、検見を負けてもらったそう。

今と同じようなものさ。又、村の人達は馬に荷をつけて駄賃取りをやつたり、那須や立田などへ石灰取りに行つたそう。

それから又、藤岡へ瓦造りに行つた人もいる。

○今市役所にある明治九年に作つた測量図に、戸長 林伝治、副戸長 信沢茂平、立会人 川島利八、林益治、信沢定吉とありますが、これは今、どこの家の人達ですか。

林氏 戸長の林伝治というのは私の祖父、副戸長信沢茂平というのは信沢良徳さんの曾祖父、立会人の川島利八は川島峰三郎さんの祖父、信沢定吉は信沢勝四郎さんの祖父で、みんな三、四代前の人です。

○忌事はありませんか。

林氏 別にないね。片貝のコクゾウ様はうなぎを食べないといふので、村中の人がうなぎを食べなかつたといううな話もあるが、この村には昔からそんな事はなかつた。

○昔、宗甫分に一年中絶えなかつたものがあつたそうですね。何ですか。

林氏 さあ何かね。よく知らないなア。昔はよく六分や、ゴゼさんが来て、宗甫分で泊つていった。その位の事で後は知らない。六分というのは、坊主（僧）の事です。

○富士見村の大河原にある共有林は、昔からのものですか。

林氏 あれはもと、殿様の官有林でした。そして昔から入会権とい  
ますか、村の人達が行って落葉や薪を採って来た所です。明治になっ  
て御料林となったものです。大正十四年に二十五ヶ年の年賦償還で、  
宮内省から払下げを受けて、村の共有林としたもので、私外二十三  
名の名儀になっており、大体の面積は十二町歩、大河原と白川の二  
ヶ所にあつたのですが、今度の農地改革で政府に買取られました。

今の松は終戦の前の年に植林したものです。  
司会者（小林富次郎氏）それではこの辺で、どうも長時間有難う御座  
いました。

これから今日の速記を整理して、村の郷土史を作り上げてゆき  
たいと思いますが、今度共いろいろ御指導協力をお願い致します。

## 補 遺

宗甫分 林 利忠氏談

先日の座談会には折角御招きを受けながら、所用のため出席出来ず  
残念でした。

私の家は先祖代々名主をしておりましたので、昔の文書等も沢山  
あつたのですが、私の子どもの時分整理してしまつて、今は殆んどな  
い。しかしまだ少し残っているかも知れませんが、近く土蔵を探し  
てみてあげましょう。

それでは座談会の方に洩れていることで、私の聞き知っていること  
を申し上げます。

## 実政の関所

宗甫分の郷土史を綴るからには、先ず第一に実政の関所のことを載  
せてもらいたい。

口碑によると、利根川を挟んで前橋領と高崎領の間を往来するには



宗甫分村復原絵図  
(南町二丁目)

五料、実政、大渡  
のいずれの渡しを  
通らなければなら  
なかつた。その中、  
実政はただの渡し  
ではなく関所だつ  
たのです。その関  
所当時の御番所跡

の石垣が、つい最近までありましたが、例のアイオン台風ですつかり  
潰されてしまいました。関所には槍を持ったお役人がいて、手形がな  
ければ通ることが出来なかつた。通行人は河からあがつて来ると御番  
所前に平らな飛石が敷いてあつて、その上を下駄を持って跣足で通ら  
ねばならなかつたのです。そしてこの「実政の渡し」には高山彦九郎も  
通つたということが本に載っているそうです。

私の死んだ弟は中学を出てから長年教職にあつて、後、彦九郎の伝  
記編纂に携わつたものですが、その弟からこの話を聞いております。

## 利根川の変遷

座談会でも林千治さんが利根川の流れが変わつたことが述べられて  
あつたようですが、私の伝え聞きでは、利根川は大同年間（平城天皇  
の御代・西暦八〇六年から八一〇年まで）に現在のところに変つた  
そうです。

勝島と下新田の牛込家は、昔は一緒だったのでしたが、利根川がまわつ  
たために今のように兩岸に分かれてしまつたのです。牛込家は勝島の  
方が本家です。

利根川がまわつた時の状態は、丁度アイオン台風の時、白川が小沢  
で切れたのと同じようないきさつだったのではないかと思ひます。

## 墓碑・位牌

宝曆以前の墓碑は村中どこにもないが、位牌なら私の家に元禄十三年に死んだ夫婦人が残っている。これがまア現存するものではないか。古いのではないだろうか。

墓の古いのは宝曆以後で、それから下って明和、安永、天明頃のは大分あります。

信沢、入沢一家も宝曆以後のものばかりです。

## 人情

君達、今の宗甫分の青年は非常に真面目でいろいろ村のため積極的に行っている。感謝してはいますが、昔の宗甫分は百姓を真面目にやる者は殆んどなかった。それは年貢が高いことも原因するが、村人達は主に駄賃取をした。高崎領から前橋領へ来る荷物の運搬をする今の運送業のようなことが、毎日それがあり日銭が入ったために、百姓を真面目にやらなくとも生計が立つ事と、渡場のため諸国旅芸人が多数、年中村に集まっていたのです。当時芸を聞きたければ実政へ行けと言われた程でした。

旅芸人はゴゼ、サイモン、ヂョロリ、オカレ節などでしょう。

ゴゼは越後から来る三味線をひき歌う婦人です。ヂョロリは今の義太夫。サイモン、オカレ節は浪曲といったようなものです。サイモンはシャクヂョウとホラの貝を持っていました。

私共の子どもの時代まで、林千治さんの門の所に越後生まれのばあさんがいまして、それを訪ねて親子連れのゴゼが来て、変わるがわるゴゼ宿をした事も覚えております。又正月十四日、道祖神の晩などには厄年の人でも出来た家では厄落しにオカレ節、サイモン等をよくやった事も、明治の末期頃まではありました。昔の人の方が今の人より呑ん気のようにした。それは社会情勢が今とは違っていたからで

しよう。

私の祖父の益治という先代は、年中黒前掛けを掛け、金米糖をたもとに入れ、よい娘でも来ればそれをぶつけ、渡場へ行っても遊んでおったそうです。それでもどうやらやって行けたのですね。

## 昔の名主

宗甫分は昔、七百石の領地で、年貢が非常に高かったところでしたので、田圃の作り手がなかった。だから私の家でも登平という人の言い伝えて、孫子の代まで田圃の欲をかくな、という家訓が残っている程です。

昔の年貢はみな名主の庭に積上げて納めたもので、そんな時には若い衆が大勢集まって、米俵を捧げあげて、力試しを競争し得意がったそうです。

名主の給金はわりかたよくて、米十五俵、それを現物でくれたのです。

そして名主は苗字を許され、なかなか権力のあったものです。名主は米年貢をはからせられた。今の供出の担当者ですね、だから士族ではないが殿様に直接お勤めしたわけです。

名主は又、殿様へ時々人足達をしたものです。

私の家には松平侯が川越から移って来る時に、当時の名主が人足達をしたので、その時もらった盃があります。それから又、オツキといって築城の時の人足達をしたのです。

前橋城は出来上ると間もなく、御維新のため廃城になってしまいました。したが、前橋城を造る時のオツキも致しております。

## 明治の戸長

明治時代の戸長を一番長くやった人は、東の家(林千治氏)の伝治という人で、この人は上川淵時代(前橋市へ宗甫分が編入前)に今の

利根橋を架けるのに功労のあった人で、利根橋通りの繁華の基礎をつくった人です。だから、宗甫分、紅雲町の両方に権勢をもっておりました。

### 実政の渡

石川町 野村敬徳氏談

私にも確かな事はわからないから一説として聞いてもらいたい。上杉謙信が前橋の城を囲んだが落ちず、空しく引上げて行った事は日本外史にも見えている。当時の前橋城は小田原の北條の一族が持っていたものです。

みなさんも御存知でしょうが、龍海院へ行くと上杉謙信の兜掛松というのがある。尤も龍海院は酒井侯の寺ですから、そこへ上杉謙信の兜掛松があるというのも一寸おかしいが、兎に角、上杉謙信が前橋へ来たことは確かです。謙信は越後から来て、前橋の南口から攻めたと思うのです。何故ならば、前橋城は南面していた城だからです。

しかし城の守りは固くて、なかなか落ちない。ものの本によれば、その時前橋へ館林の文福茶釜が歩いて来たわけでもあるまいが、館林方面から援兵が来るといういわれなのです。そこで謙信も遂に空しく城の囲みを解いて引揚げて行ったという事です。茶釜の話は巷説ですから本気で聞かないで下さい。

その当時既に作戦上、渡河点ということが、多少なりとも考えられていた訳で、その渡河点に当てられたところが、君達の宗甫分だったのです。そしてその渡河点の前線を守ったのが、謙信の武将、宇佐美実政という人だったので、後世「実政」の名が残ったらしいのです。

この宇佐美実政という人は、謙信の武将の中でも水戦の権威だったらしく、君達も御存知の例の「鞭声肅々」で有名な川中島の戦で謙信が信玄を切り損ねて、長蛇をいっして越後勢が引揚げる時に、この宇佐美実政が千曲川の渡河点に、所請收容陣地を作り、無事越後勢を退

却させたという事が史実に残っております。

せつかく訪ねて来て貰って、詳しい話が出来ないのは残念ですが、私の知っている実政の渡の由来はこういうのです。

### 船屋敷七軒

宗甫分 高橋優介氏談

これは私の亡父（芳松氏）から聞いた話ですが、宗甫分は船屋敷七軒からはじまったそうです。私の家には今でも家譜があつて、それによると三百七十年位伝わっております。それで船屋敷七軒は次の家々だそうです。

#### 1 高橋家（当主 優介氏）

私の先祖 高橋茂工門（戒名 三学院青山從徳 宝永四年三月十六日）は、前橋藩の漢学者でしたが、この人の何代目かがある事情のため失脚して城を追われ、転々と職を変え、遂に宗甫分に来て船頭の群に入つて土着した。それから降つて、私から四代前の高橋□之助の中年頃から百姓になったということで、先祖は大渡、今の岩神町に住んでいたのだそうで、岩神町の高橋家（元、市会議員をしていた清太郎氏）とは一家をなしているのです。

#### 2 入沢家（当主 三代吉氏）

その祖は高橋家と同時代、今から三百七十年位前に宗甫分土着、船頭となる。

#### 入沢家と高橋家の関係

今から六代前に入沢から高橋へ養子が来て、親戚関係が出来た。それで今でも入沢家では高橋家を新宅と呼んでいる。

#### 3 後閑家（当主 実太郎氏）

後閑家は元上川淵村字後閑の出で、やはり三百七十年前に宗甫分に移つて来て庄屋をしていた。

安政三年二月二日亡くなつて後閑庄三郎という人は、新建十七

軒を創設するのに尽力した人だと伝えられています。

#### 4 関口家(当主 喜平氏)

その祖は関口熊エ門。この人は宝暦九年三月十五日に亡くなっている。

#### 5 信沢家(当主 甚太郎氏)

信沢長兵衛がその祖、信沢福寿氏、信沢長作氏等はいずれもその分家。

#### 6 石田家(当主 善作氏)

過去帳によれば、円悦道喜禪定門(宝暦五年八月三日)という戒名の人が載っているところからして、その当時に同家も居村していたことが覗かれる。

#### 7 入沢家(当主 菊三郎氏)

#### 水神様と神長宝様

前代田 代田宮司

宗甫分の水神様はその祭神は神社明細帳によると、水波能女之神であるが、深い由緒については古文書等もなく、僅かに利根河岸のこの地方の水害に対する守護神として先人が奉斎されたものと思われる。

又、神長宝様は病災及五穀豊穰の守護神として祭られ、古来から盛大な夏祭りを行ってきたのでありまして、その御神名は群馬県内には他にないようです。しかし祭神は天王様と称される八坂神社と同じで素盞鳴之命を祭ったのであります。

両社共に現在の社殿は明治中期の建築で境内の老松が年代を示しているのみです。

県内には千二百社からの神社がありますが、いづれも由緒の不詳多くして伝統的な社家の奉仕されておられた神社は往古を偲ぶ文献を存しています。俗に上野十二社といわれている神社は、延喜年間既に衆

人の崇敬の厚かった神社で、千年以前から奉斎されているのです。

宗甫分、六供の辺りは前橋でも早く開けたところで、今僅に字名に残っている京安寺等の建立された当時が懐古されます。

当地方の古い文化も戦国時代箕輪城長野氏の滅亡に伴い、大きな変遷をしているとみられます。今後はこのような関係からも出来得る限り調査を進めて往古における郷土の姿を知りたいと念じております。

#### 編者のことば

本書は宗甫分青年明星会と宗甫分青壮年連盟で共同主催した「古老にものを聴く会」の座談会速記に林利忠、高橋優介、野村敬徳、代田宮司の四氏の談話を加え編纂したものである。

座談会は昭和二十五年八月二十五日、九月二日の夜二回に亘り小林富次郎氏宅で開いた。語り手は村の長老七九翁小林喜藤治、元市会議員その他の公職を歴任された林千治の両氏、聴き手は青年明星会長、林慎一、同副会長の林憲也、吉田喜久枝、東青運委員長の松下元男、同副委員長の信沢福寿の諸氏で、司会は小林富次郎氏、速記は編者が行なった。

談話は主として小林、中村の両名が集録してきたものである。

はじめての試みなので、意に満たないところも多々あり、特に補遺をもっと詳細に加えたかったが都合で後日に譲り、一応このままで史料として今後の郷土研究の端緒を開くために上梓することにした。

本書の出版に当たり、座談会の出席者又は談話を寄せられた方々に改めて謝意を表わすと共に、多数の宗甫分出身の方々が出版資金を援助され、又印刷に際しては編者の学友、株式会社北斗社の島田芳郎氏が営利を離れて援助された事を付記し、深謝する次第である。

特に扉絵は島田氏の奔走によって本市出身の二紀会同人近藤嘉男画

伯をわずらわす事が出来たのは望外の喜びである。

一言本書刊行までの由来を記して編者の言葉にかえる。

(昭和二十五年十月二十二日 編者 中村利三郎)

## 大正初期の前橋を偲んで

郷土研究

### 前橋見物

停車場 前橋市の大玄関、新浮世小路哲学

黎明、高崎駅発車を迎え、夜更けて下界の眠る十一時に高崎信越方面に汽車を送る迄、発着迎送の回数実に四十六回、前橋市の大玄関として、はた浮世小路の関門として蓋し停車場は逸してはならぬ。

### ○駅の雰囲気

本町を油屋旅館前から電車のレールに沿ひ行けば、段々と停車場の近くに随ひ旅館や運送店や鳥渡した飲食店迄が既に旅という人生倉忙の不安と動揺とを泌々と感知させ、一帯の雰囲気が塵埃に塗れ運送車や電車や人力車杯が殊更人生の傷はしい半面を露出してるかの様に思われる。時刻が来ると一声の汽笛を相図に轟然と着車し停車し、亦出發するが其時には此雰囲気は渦の様に動く

### ○諸国の旅人

前橋駅は交通の中心点では無いから、停車場の位置からいえばお隣の高崎より低い、何しろ県庁、裁判所を控えた群馬県の首都として、且北部に豊富の温泉あり。貴顕縉紳の往復が頻繁な所から、見掛は野暮でも莫迦には出来ない所、電車から吐き出され車から下され、急ぎ足で駆付けて時間毎に諸国の旅人が此一廓に引き牽けられる。昼となく夜となく機関車は旅客を拉してポーツ！

### ○文明の関門

喜怒哀楽有ゆる人間の感情を極度に昂らせ緊張した気分を湛えた旅



人は魔物に浚はれる如に箱に引ずり込まれる。又、列車がボーツと息して吐出す旅人は孰れも愉快相な面持で、出口へ雪崩を打って流れ出る。此の時なり、東京の最新流行や欧米の新発見や新文明が一团の旅客に擁せられて前橋に持ち込まれ、退嬰動ともすれば文明に遅れんとする田舎の都市に新生命を吹込むのは――

#### ○人生の旅路

涯し無く続く人生の旅路の一角に立ち、日暮れて路遠き寂しき遺瀨無き泌々と感知させるは停車場程深刻な所は他にあまり。不安、畏怖、動揺之等暗憚たる人間の表情は最も赤裸々に最も不用意の間に発露させる。見玉へ、時刻が来れば一分一秒の猶予なく情無く、一声の汽笛を名残りに駛って行くではないか、汽車は出て行く煙は残る。薄情な冷酷な人生の行路は恚うしたものか。

#### ○汗と油と塵

停車場構内に在って金モールの服や赤い帽子を冠った人々の動作を見るに孰れも汗と油と塵に塗れて、足取りもセカ／＼とせき立てられてる如で少しも心に余裕が見えない。汗と油の力とを売らねばならぬ現代の生存理法を見窮めんとすれば須らく停車場の職員に就いて研究しなくては不可ない。夫から停車場に付随した貨物倉庫と倉庫に置かれる貨物の行衛を調べるも面白からう。

#### ○浮世巷哲学

時や十八日の午前十時、前日の空ツ風に引換えて、空はドンヨリかき曇り、雨か雪か頗る気遣われる天候でステーション界限の空気は一層灰色に引き締って恚う滅入る様な気がして、前橋駅の事務の状況や貨物の模様や交番の出来事を聞く気になれ無いので、チリン／＼動きまアす……の電車に飛び乗って帰社した。要するに停車場は新浮世小路の関門にして其の真相を語る所である。

#### 県庁舎 上毛の中央政庁 厩橋城の夢の跡

前橋が群馬県の首都として誇るは、人口が多いからでもなく、製糸業が発達しているからでもない。県下唯一の大政庁であり、百万県民を統治し命令する県庁を松みどりなるお城の跡にもっているからである。

#### ○県庁の大門

今さらここで言うのも野暮なことだが、昔、松平侯十七万石のお城の本丸は、素町人の分際として我等如きには、この御門は拝めもしなかつたのに、聖代の有難さや、大玄関からのし上ることが出来るのみならず、広々した本殿の在りしままなる部屋をも見て歩ける。古老の語るところによれば、本丸の御門はもつと南で仰々しく弓矢で固められていたとか。

#### ○警察部内部

殿様ならでは登れなかつた大玄関を上って右とつときは警察部の受付で、内部は警務課、奥まった一室に宮沢課長控え、警務課の廊下を伝って左手の一室は、機密に話声も打沈める刑事室、のぞけば土井刑事、目をジロリ、保安課長の安間さんの室には新聞記者が黒山のように集まって、相対の衛生課はもの静か。奥まった所は岸本警察部長室、電話交換室、衛生課の試験室の本舎より離れてあり。

#### ○農務と会計

警察部内は金モールや金ボタンのぴかぴか光るいかめしい人たちが、内務部は背広かセルの袴に紋付という平たいお姿、引返して大玄関から左に行けば、西側は農務課で課長の青山技師は南の隅のストーブの燃えている所に控え、永井、新、宮崎、谷口の三技師は各椅子にもたれる。東手の広い一廊は会計課で田中理事官はむずかしい面をして書類を見つめてござる。会計課に隣って統計課、東に突出した所は

学務課となる。

○各課と食堂

学務に添って東の端は商工課の別天地。託摩課長の眼鏡がピカピカ光る。逆もどりして南につっかけると土木課。技術官と内勤とは東西に分れ、安永課長の室は洋館ばり。土木を出て奥まった所へ行こうとするところに日赤、愛婦の支部。農務課と庭を画して相對するは庶務課と社事兵事。兵事の奥が県参事会室、庶務の西隣に山本理事官、それに対して内務部長室、お隣室は高等官食堂なり。

○知事室まで

高等官の食堂と向い合つて知事官房、食堂の隣が一番奥まった所が大芝知事閣下の政務をとられる御居間である。今なればこそ、われら新聞記者風情でも丹後官房主事に一葉の名刺を渡せば、勅任官群馬県知事に親しく面謁することができる。昔ならば殿様の御前に膝行するのは容易のことではない。少なくとも庶民が殿様にお目見えするには生命がけの事業なり。さてここで御殿の昔を偲ばん。

○悲しき夢の跡

大玄関の右は中の口でお侍衆が恐る恐る参殿した所。家老年寄の詰めし政府は大玄関か。内務各課の辺は大広間で、襖で仕切つた大書院、小書院には武道の達人が殿様をお守り申しあげ、それから何の間、何の間と幾間かを隔ててお居間に至る。庶務の奥がまさにその所であろう。お次の間、御寝所、詰所の跡は何処ぞや。小姓の美男や佳人の香を女人禁制の県庁に嗅ぐも今は徒爾なれや。

裁判所 神威なる御紋章 法廷に立つ人々

前橋で大手前といえは県庁正門から裁判所や巡查教習所の前を経て、赤城館に添い曲輪町の交番の角までであるが、道幅が広いだけで殺風景なさびしい通りだ。ここで見舞わなければならないのは裁判

所ぐらい。

○菊花の御紋

前橋地方裁判所、前橋区裁判所といかめしく門柱に記した門を潜つて行けば、右は区裁判所の人民控所、左には地方裁判所の人民控所で、突き当たつた正面は芝生や常盤樹を扱つた前栽。これに沿つて玄関の前に立てば、先ず敬けん崇高の念に打たれる。うやうやしく仰げば大玄関の棟木に木彫の菊花の御紋章をいたたく限りは断獄のことはすべからず神聖にして権威無るかるべからず。

○陰気の廊下

玄関から上つて左の廊下を拾えば、検事局書記課、検事正室、検事室、検事廷、法廷、書記室、登記室で、北に行けば電話室、会計、廷丁室等がある。引返して大玄関の左をそぞろ歩けば庶務課、書記室、判事室、図書室、予審法廷で、この辺は地方裁判所の領内、廊下は天井が高く、光線はよく入るが気のせい何となく陰気で、冷やかで、冬の野路を辿るような感にたえない。

○眠い記者室

二階は食堂と応接室と広間とに分かれ、応接室の一部が新聞記者控室に分かれてゐるが、控室の椅子にもたれてじつと耳をすましてゐると、階上階下静まり返つて、時折庶務のそろばんをはじく音や、法廷の人声や、囚人馬車の轍の音が聞えるだけで、あせた黄色のカートンを下して原稿紙とにらめっこしていると、暗い窟へでも引きずり込まれるような気がしてコクリコクリとつい睡魔に囚われてしまう。

○罪状審問所

忍び寄るように草履の音も憚つて予審廷の廊下の辺を拾えば、帝国刑法の条項に触れて、哀れや縄目の恥を身にさらし、予審廷に罪状を取調べられる暗い悲しい運命に泣く忍び音や犯罪をそらとぼけて凶太

く隠し、判事に看破されて威嚇される叱声や、或いは悪党といえども心の底に通う天真爛漫の情の花等、悲喜劇は渦の如く、日々秘密を以て掩れるこの廷に展開す。

○悲しい法廷

人民控所に隣つて弁護士控所あり。地方裁判所の法廷に入れば、上段には裁判長、判事、検事、書記がずらり、いかめしい法官服を着て控え、やつれて青い顔をした刑事被告人はガチャリ手錠を外されて、腰縄をピシヤリ廊下にならされて、おずおずと法官の前にたたずむが、親兄弟、知己や親戚の傍聴する前で、前に法官を仰ぎ、後に看守ににらまれながら罪を断ぜられるとは、情無くて泣くにも泣かれまい。人生の悲劇、これではないか。

公園地 春の光はみちわたり、のどかにして静かなり

お正月三日の日は大師様のお祭で、すさまじい大風が荒れたが、四日にはけろりと忘れたように凪いでよく晴れ、酒に浸り餅にもたれた連日の倦怠を忘れるにはお誂えむき。午前十一時公園に杖を曳く。

○さすがに松の内

さすがに松の内だけあって、山の手一帯は門松の緑も色ゆかしく、輪飾のさやさやと静かにそよぐも治まれる聖代の表徴なれや。東照宮祠前の御蔭石の大鳥居に初春の光てりはえて、社頭の杉の一本無きがうらめしく、人口門の休憩茶屋ののれんを肩で切れば、味噌饅頭焼く角火鉢の傍に座せる美人の声もあやしく「いらっしやい」赤い毛布を敷いた縁台に腰を掛けて、早速お馴染の焼饅頭をといいつける。

○味噌付饅頭

汲んで出す洪茶をがぶりがぶり飲み乍ら、焼きたてはやはやの煙立つ味噌付饅頭を頬張れば、味噌の匂いと饅頭のふつくらした暖味とがしみじみと舌頭になじんで美味極りなし。嬉野の山海の御料理より赤

城亭の異人料理より、ここでこうしてぱくつく味噌付饅頭の方が粹にして品あり。饅頭二串と茹卵一個とみかん一個にてお茶代金十銭とは、さてもお安いものかな。

○祠畔の梅樹

口の端に残る焼饅頭の味噌の香を拭い乍ら、大鳥居をくぐつて祠畔の梅林の下にはるけく頭上を撫でる梢の蕾、幾程か膨らんでやがて来る春の光を待つ気配なれど、樹幹空つ風にやせて味も卒気も無し。石碑たてる芝生の上に嬉戯する少女の赤いリボンにも春の光あふれて、鬼ごっこする心ばえものどかなり。彰忠碑の鉄柵にもたれて宙をかける雄々しき鶏をふり仰ぐは盛装したる工女の両三人。

○池畔のあずまや

堤に立つて貴賓館下の池の畔を眺めやれば、樹梢影を小波立てる池の面に投げて臨江閣庭園より奔躍する瀑の音も冴えて、樹の間より見ればさながら銀蛇のよう。樹々やせて草枯れたりとはいえ、地に埋れし春の光は柔かに四辺にこめてみちわたれり。誰が家の子ぞや、あずまやのベンチにもたれ、涼しくも清らかなる唱歌を奏でいたり。見たるところ、十五、六の乙女にして海老茶の袴を五人ともはけり。

○堤上の眺望

歩を移して堤上にたたずめば、碧を湛えし利根の流れは虎が淵の鼻にて流れを二、三分ち、とうとうと岸を洗つてまた一流に合し、鉄橋の橋柱にしぶく。その碧を湛えた河の面は、千古に高き山々の翠をこらし下河原にはかげろうがちらちら燃えている。大渡の吊橋、下河原大渡界わいに群がる人家、遠くは越路境の雪積る山、浅間の煙、御荷鋒の連山、利根向うの群馬の大平原など、さながら活ける自然の絵画は躍如として一瞬に集り来る。

○下村翁銅像

堤上の飽かぬ眺めに見とれることしばし。堤上には年賀廻りのへべれけや良家の令嬢や女学生さん、学生、工女の群、いずれお正月の樂しからぬはなし。耳の素的に大きい下村翁の銅像は、千代に八千代にこの世のあらん限りは耳大きく、ちよんまげも堅かろう。ろは台にもたれて男乞食が悵然と頭をたれるは時節柄あわれに、いたいたしく感ぜられる。

大渡り 古雅な匂い溢れ 春意水より動く

電氣館界わいで強烈な現代的気分に触れた頭を癒さんと、遊歩を大渡に移す。馬鹿にしちゃいけない、ここは閑静で前橋の昔ながらの匂いのするゆかしい所、一、二時間さまよえば、けだし得るところなからざるべし。

○大渡の情緒

電信や電話が通じ、くもの巢のように電線が張り回され、ガスがつき、電車がチリンチリンと市内を横行するようになり、空をおおう製糸工場の煙突の煙は、天日をさえぎり町並に藁屋根、板屋根もとりこわされて、昔の松平侯十七万石の御城下らしい面影は今や見る由も無けれど、ただ向町通を西に進んで広瀬川を渡り、大渡界わいに行くと、昔ながらの前橋に帰る心地して、しみじみと生まれざりし先の世がしのばれる。

○洋館と水車

向町から来て広瀬川を渡り一步十五軒町に入れば、四辺の気分はがらりと一変す。両側に並べる瓦屋根、板屋根も幾春秋の星霜に黒ずみ、軒傾いて破れ廂風になる。共愛女学校の広庭の芝生も黄に枯れ静かに日の光は赤塗りの異人館に流れて、街を流れる小川に軋る水車もガタリゴトリと眠げに動き、一带の空気が物静かに沈んで、色彩や音響がロマンチックの旋律にふるえているのが嬉しい。

○古雅な匂い

大渡は十五軒町以西、利根川に至るまで十五軒町の空気に官能を驚かしたものは、ここへ来ればひとしお古めかしい匂を嗅ぐであろう。瓦屋根もあるにはあれど、ごく稀で、二階屋も少なく古い藁屋根、板屋根が多く、家並は死んだように物さびて、商家等も至って少ない。界わいの中程にだらだら坂があり、坂の付近には汚い銭湯屋、軒の低い飲食店や汚い長屋が立ちすくんでいる。

○渡舟場と筏

坂を下つていわたる大渡の橋までは約二町、屋根には石を積んで何れの家も船頭か舟夫か船大工。河原の地続きとて歩けば、砂煙があがって紺足袋が白くなる。空つ風が荒れる日には、目を開いて通れまい。家並が尽きると下河原で、左手に一条二条堤防が横たわり、右手に行けば渡賃をとる番小屋に出る。金一銭の渡賃を払って橋にかかろうとすると、付近は山から切り出した筏がいっぱい。

○春意水より

吊橋を渡ればギチリギチリと鳴って上下に揺れる。中程に立ちて四顧すれば、小出河原の松翠りに赤城・榛名の山々紫にそびえ、越後境の雪山は天際に横たわつて、橋下の碧流は山の精が溶けたものかと疑われ、河原、柳原公園地、県庁の崖より利根橋がかかり、折から風凧、日和ぎ、春意水より動いて止まない。

煙の街 名物生糸製造所

上州前橋といえ、直に生糸が思い出される。イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、インドの黒奴に至るまで、日本前橋の生糸よろしいあります。前橋イ生糸の産地あります……とばかり大評判。

○広瀬川以北

広瀬川を境にして北は名物の生糸製造工場町、林立せる煙筒から日

夜もくもくと飛騰する煤煙は夕立雪の如く一天を掩うて、日の目もろくろく見られない。風無き静かな日には棚引く煙からばらばらと煤を降らし、厚化粧した美しい顔は直ちにインドの黒奴のように、なるほど朝は黎明より夜は月が出る頃まで、河北の空は煤煙と汽笛の世界で、この世界から玉のような生糸ができるのであります。

#### 可憐な工女

この煙、この煤、この汽笛の中にいて可憐な工女たちが汗と油と涙をしぼつてもうもうと立ちのぼる湯気にひたされながら繭から美しき生糸をとり出すのだが、その工女は信州、越後、埼玉、甲州辺から嫁入仕度の金を得たいばかりに、こうしてここで働いている。その工女の一人の歌を聞け。哀怨としてそぞろに涙にむせばではいられぬ。―信州信濃の更科よりむしろお主のソバがよい―

#### ○宙に舞う梓

向町に共同組の前、岡部工場を見舞う。また春の仕事がはじまつたばかりで、諸国からの工女が集まらず、定員八十名には半分も足りない。四馬力の蒸気機関はすごい勢で煮えたぎつて熱管が工場に通い、行儀よく二列に居並ぶ工女は、何れも月形の釜の中で繭を転じながら蒸気の力を借りて、スースーと一様の音をたてて梓に生糸をからみつける。各自の頭上では蒸気の力で佐藤式ベルトが動く。

#### ○湯煙り漲る

ジージーと機械が回転し、白い湯煙がもうもうと立ち上つてむつとするような中で、低い腰掛にもたれて脰髪、銀杏返しや桃割れの白い手拭を襟にかけ、赤い襷もかいがいしく、静かになよやかに手を操つて、釜の前にある四つのボタンに糸巻いて、四つの梓がぐるぐると頭の上で宙返りする。一日百匁内外の糸が月には十五円から二十円の収入となる。

#### ○元祖交水社

岡部工場から前橋の生糸業の元祖の親玉交水社に行けば、ハイカラの事務員が喜んで案内役。大小製糸家二十六軒でひいた生糸が車に積まれて毎日ここに運ばれ、この揚場で梓から大きな梓に揚返され、やがてそれが束装されて勝糸にくくられて、横浜の異人さんの手に移る。広い揚場には大きな梓が二側宛四列に並んで静かに風を煽つて小さい梓の糸をからみつけている。

#### ○荷造りまで

黒い仕事服を着た工女がデニールを調べ、糸の節や切断を調べ乍ら、揚げ終つた梓は検査場に運ばれて、デニールや糸の切断や節や漲気や強弱を精密な機械にかけて検査し、それが終わると束装課というのに運ばれる。ここにもやはり黒い服を着た工女が十二人、大きな梓からはずした糸をさながら飴細工でもするように、よじつてくるくる手頃にまいて、お次で括糸でくくつて行李に納められる。

#### ○夕暮の汽笛

蒸気と水車の力が隅々まで広い交水社内を動いて、それによつて雑多な生糸精整機を回転し、別嬪の工女はその間をいそいそと動く。

交水社の汽笛をはじめとして四辺の工場の汽笛が五時の夕食の合図にポーツと鳴れば、通勤は帰途に、宿舎にいる工女は食堂にバタバタと蜘蛛のように散つて、界限の通りは一日の仕事を終えた工女の話声でえらい喧噪なり。かくて名物の前橋生糸ができました。

#### 電気館 電気館付近の繁華、若い男女の媒介所

お江戸ならば浅草公園、上方ならば大阪の道頓堀のにぎわいを上州第一の大都会前橋に求めるなら、さしずめ立川町の電気館界限で、空つ風が吹こうが、雪が降ろうが、常世の春の栄華を現前し、千客万来いらつしやい、いらつしやい。

### ○色彩と騒音

松の内も日が妙義の肩に沈んでは、年始回りの人影も稀に、そぞろ歩きの工女や学生の群も少な、街路に寂しう暮れ行けど、立川町の界限は今し、わが世が来れりとはかり、電気館をはじめ都館、川を越えれば柳座、花電気、花瓦斯、大提灯、鬼灯提灯でさんらんと空を焦し、はたはたと幟や旗やペンキ絵を花のように輝かし、ブカブカプーの馬鹿囃、四辺の喧擾にはヒステリーの女は狂いもすべし。

### ○闇に光る眼

チラチラと音を立ててフィルムは刻々に画面に展げられてゆく。弁士は之にお調子を合わせて黄色い声やしわがれ声を振り上げ、面白おかしく説明するに過ぎざれど、それにつりこまれて泣いたり、笑ったり喚いたりする観覧人の心なや、暗黒の世界にうごめく幾千の眼はざらざらと正面映画に注がれているが、眼を閉じて鼻を動かせば、煙草の煙や人いきれ、安香水、髪油の匂いなどでむせびかえるほど。

### 豎町通り 前橋第一の盛り場、現代社会の縮図

「チリンチリン、えー動きまアす……」岩神の停留所から電車をとばし厩橋から新豎町の坂をギイと曲る。「えー陳列館前工、お降りの方はございませんか……」お声がなくとも降りまして再び豎町通りを見て歩く。

### ○前橋の銀座

桑町通りを大阪の心齋橋筋に擬するならば、豎町はさしずめお江戸の銀座であろう。新豎町の坂の上に立つて眺むれば、いかにもとうなずかれる。電車の往復も頻繁で、両側の商家も東京風めき。料理店あり、旅館、勸工場、陶器、海産物、呉服、時計、洋物雑貨、荒物問屋、医院、理髪店等ハイカラに店を飾って屋並も井然と整い、田舎のぼつと出は卒倒もし兼ねない程、車馬路沢として絶えず。

### ○道幅が狭い

悪口を言うのじゃないが、電車の窓から手を差しのべると、両側の軒に手が届きそう。電車がチリンチリンと通る時に、運送車でも来て見給え。道は電車と運送とでいっぱいになって、人っ子一人歩けない。朝七時半から夕暮六時半まで間断なく空電車が通るが、人を轢いた事を聞かぬのがむしろ奇蹟。男、女、美、醜、馬、車、平等無差別に行き交うと雲の如く花の如し。

### ○牛鍋の匂い

懷中でお鳥目を数え乍ら敷石を踏んで行く。お馴染の女中「いらつしゃい、お一人？」と昼飯を食べに来たのだから、わざととつき右手の入室。間毎に数寄をこらして頗る居心地がいい。「あの、ご注文？」「そうさ、牛鍋にお銚子たった一本」胃袋が暖くなったところで、ご飯をいただいて五十何銭。ここでは牛鍋はお手前物、異人料理、日本料理、お好み次第に調進します。安くてお美味しくて、官吏にも向き、商人にも万人に向くが赤城亭の特色とするところなり。

### ○寂しい勸工場

時代は刻々に変遷し、商業も之に伴うて進む。前橋唯一の勸工場は電車が通りガスがついても、依然として旧態を改めず。うす暗い陰気なU字形、陳列しました商品は安小商物や三文小説、五行本位。「何かいかがでございます」と店番がおすすめ下されど、見るだけがせいぜいなり。時代の進歩につれて、も少し何とかしてはどうだ。美人をおいてぎん新な商品を飾り、休憩室でも設けては。

### ○嬉野の料理

前橋の盛り場の中央にして、美味と上品と通とで知られた嬉野の入室に陣どつてみたまえ。渋い好みの数寄は、楯間や欄間にも溢れて、汚れた板場のお料理を食べるには、先ず両頬に鉢巻をしてかかれ。し

かし給仕する女なしとて怒っちゃまずい。百二、三十人の芸妓が「え、嬉野から」と電話がかかれば、大切なご用も捨てて「今晚ありイ」乙にすますにはお一人金十円。

○三つ角の賑わい

嬉野の角で電車は停るが、東にそれてはいけません。米の値を知らぬ白痴はいざ知らず、日夜さんざめく大小料理店の巷。又、西へ曲つてもならん。幽霊の出そうな寂しい山の手へ出てしまう。電車道に浴うて北へ行けば、いよいよ賑やかで、立川町の三つ角の辺は最絶期。常世虚栄心の煽動所にして且つまた流行の奨励所たる河内屋洋品店あり。自称高襟は休憩室で茶を呑んで財布を叩くも妙であろう。

○問屋が多い

三つ角の界限にはいわゆる大商人、大問屋が軒を並べて近在かけて、さかんに荷を下ろす。金物、小松屋、三河屋、吉野屋の両荒物店。戸野屋呉服店、岩田市会議員の雑貨店、白子屋紙店、浅野屋砂糖店、両荒井瀬戸物店、真下海産物店に糸白子屋等、数えたられば際限がない。

八幡宮 前橋の総鎮守社、藪入りで一きわ賑わう

一年三百六十五日たった二度しか無い藪入りで普天の下、率土の浜や奉公人の天下なり。小正月藪入り十五日から十六日の賑わいを見んとて。連雀町は前橋の総鎮守にして県社八幡宮境内をさ迷い行く。

○放たれし鳥

前橋繁華の連雀町の四つ角を南に行けば、程なく鎮守社八幡宮の御薩石の鳥居の前に出る。本殿に続く長い石畳は下駄の音、話声、喚き気と共に、ぞろぞろと黒潮のように人が続く。お亀が厚化粧したような在の姉御や、ひよつこのような自任ハイカラ。襟巻き紺足袋の小僧や丁稚、髪の色も匂うお三やお鍋どん、籠から離れた鳥のような喜びと嬉しさに駆られて夜も厭わず。

○露店の賑わい

石畳南側は安玩具や安石けん、組紐類、果物ないしいかさまな自称専売特許を並べまして、口上巧みに効能を述べたてる。「ちよいちよい買いなよ。買うなら今だよ。よりどり五銭」と間の延びた調子に呼付けられ、よりどり店の前には唐棧の綿入れも滅相寒そうな工女風の三人連れが「曇口下さい。赤い羽織の紐下さい」改良新案特許の万年筆はここにて買えば、わずかに五銭。いずれの店も客脚をひかんとして大車輪。

○御神灯の影

道根坊の横町は、両側の軒毎に点る御神灯の影も艶めいて、格子の先や小暗い路次には素見ぞめきの客の領内で、いずれも肉の臭を嗅ぐ豚のように……「ねえ鳥渡、遊んでいらつしやいねえ、ねえ、鳥渡インバの旦那」甘えるように縋るように、だらしない物腰で安香水の匂いを浴びせ乍ら、デレちゃんや薄野呂らしいおめでたき若い衆の手を握ったり、袖を引いたり。

○社殿の広場

肉も爛れて意気なく張りなく熱のない娼婦に、血の出るような金を絞られて、赤い帯を解かせて結んだ藪入りの、その夜の冷たい夢はさて如何に。阿呆らしいじゃないかね。社殿前の広場は、アイヌ人の見せ物、大人は三銭、小人は二銭。いらつしやい、いらつしやい、おでんの味噌の匂い、鯛焼やきんつば焼、安本、安石けん、赤い青い風船玉にどっこい店。北の方には医科大学でびっくりした程の大層な奇形児の見世物。

○荘厳な神殿

神鈴を振ればリンリンと四辺を払って響き、丁と賽銭投げれば、カントと応えて奥の院に点る御灯の火影が揺ぎ、森厳の気胸に迫る。白装

の神主の静かに太鼓を打ち、祝詞をあげるかたじけなき。再拜合掌し辞して境内をさ迷えば、老樹枝を交えて寒天にそびえ樹間にきらきらと輝く星影も青く樹下は静寂として、境内の雑踏を知らず。それにしても娼家がこの霊境を包囲するとはなげかわしい。

双子山 南郊の新遊園地、人文は北に歩む

古い中折を目深に冠り、襟巻に頸を沈めてインバの下で懐手し乍ら、大地の匂をかぐようにとぼとぼと歩いて行く。

○市日の本町

曲輪町の角から電車道を発見して、按摩のように軌道を拾って行けば、小正月の市日だけに、本町通りだけに、人や馬や車の往来も頻繁で、時々電車の魔のように去来する轍の音もそうぞうしい。群商、三九、第二、物産、農工の各銀行も決算期と市日の金融とを控え、店頭人の山、建並ぶ糸繭商の店先は、生糸や籠につめた繭や在の衆や仲買人や取次商人が群がって、パチクル算盤の音高し。

○前橋の東南

油屋の前から軌路は直角に停車場へ折れるが、軌道に沿わず真直ぐ行けば片貝町。左側には何寺何院の山門並び、右側は飲食店や金物店や三文菓子屋、古道具屋等、汚い屋並が続き、つき当たって坂を下りて南に進めば中川町、天川町に出るが、家並は片貝町を汚くしたようなもので、南の涯に行くにしたがつて益々寂れる。文明は北進するという。前橋も南東が衰微して、北へ延びるのであるうか。

○新町の誇り

前橋の新町は、沈滞し萎縮し頹れゆく町ではあるが、日赤群馬支部病院と前橋第一等の金満家にして、且つまた貴族院議員たる江原芳平君の邸宅あり、ために新町は万丈の気炎を吐くに足りる。日赤病院は八万余円の費を投じて建築したる宏壮峨々たる群馬県第一の模範病院

で、立派なお医者と完備した設備と精選した薬石と慈愛の神たる看護婦とを擁して前橋市内開業医の領分を荒らしつつあり。

○閑静な高台

江原上院議員閣下の邸宅の塀に沿うて西へ拾えば、鉄道線路を越え端氣川の流れを渡って、高台の一廓に出つ。界限は御維新前は極く身分の高いお侍が住んでいて、桑畑あり雑木林あり、丘あり、その間に散在せる藁葺の古びたる軒も朽ち、糸紡ぐ老嫗の南縁の日ざしに、ピンピンと車の音を立てるも昔を偲ばせる。今も昔ながらの零落した士族多く住み、瓦屋根、板葺の家は稀である。

○南郊の野趣

砂地を踏んで土の香をしみじみ嗅ぎながら、細道を辿って行けば、ふとん着て寝たる姿の双子山が眼の前に見えるが、幾程歩いても近づかない。今日は折よく小春のような日和で、笹鳴きも床しく、ちらちら陽炎が燃え、紅い蹴出しに白い脛をあらわした嫁御の麦踏も野趣を添え、畑を動く農夫の鋤も光つて、塵と埃にまみれた編集局より逃れ来た男をよみがえらせる額に汗にじむ。

○古墳の匂い

いよいよ双子山に辿りつく。空腹抱えてよたよたと登れば、この山は古墳である。瓢形しているところから見ると、太古の貴人を葬つたのに相違あるまい。范漠たる毛野の統治に東下りし豊城入彦尊かその一族か。松の木陰に憩い、低頭沈思して濛昧の太古にかえり仰いで波濤の如く北上。毛の中空を限る連山や、越後境の雪被ぐ山並を眺むれば、今更ながら山河悠久の感に堪えず

○山上の眺望

起つて四顧を展望すれば、南の方遠く関東平野を見渡せる。もし望遠鏡が進歩したならば、品川の沖の鷗まで数えられよう。北は大赤城



の大傾斜が平原とちか合い、数千の臺の波、林立せる煙突、官公衙寺院の大建物、ポツポツと煙を吐いて行く汽車、停車場、市街をめぐる近郊の森、遠く浅間の煙を眺めて、近く鳴き交す鶏犬の声を聞く。この墳上から利根の流れが見えれば、前橋一の遊園地がなあ。

## 夜の世界

夜見世 八幡宮の浪花節、棒組と不良少年

闇黒の世界から光明の巷へとさ迷い出る市人の群を見給え。さながら蟻の砂糖に集まるように、彼等は何処へひきつけられるか。八幡社か、下の町か？

夫婦連れ、老人に子ども、独身者、お役人さん、美しい娘、職工、町方の兄き、不良少年、糸ひき工女、私娼婦等、あるゆる階級の人々が、夏の夜の暑さ忘れんと、ぞろりぞろり練り歩くさまは、あに前橋の「夜の世界」の偉観ならずとせんや。人波に投じ街道をそぞろ歩けば、軒毎に店毎にガス灯や電灯の光もまばゆく、ぼろをまよとつて歩く人までもきらめく光の波をあげて一段と立派に見える。

連雀町の通りから前橋の総鎮守八幡宮の境内に入れば、狭い両側にずらり幾十個の広告灯がともされて、有象無象のいきれがむつと鼻をつく。

余り広くもあらぬ境内は、射的屋、ドッコイドッコイ、青物屋、鯛焼屋、豆屋、氷屋、イカサマ屋、なんどが景気よく客を呼んで、二進も三進も足掻きがとれないが、さりながら八幡社の夜の世界から名物の浪花節を□□したならば、残る景気は果たして何程であろうぞ。

よしず張りの極く粗末な小屋掛ではあれど、例の擗猛な面構えの治太やん（浪花節語のあだ名）が相も交らず豚をしめ殺すようなら声をしばって弁じあげます一席を縁台に腰うち下ろし、聞きほれる浪狂

間抜面を絵にしたら面白いポンチにもなるう。

「新刀正宗の一席を……」と叩く扇子の音に寄り集うは職人か、糸ひき工女の手合で、一日の生活の苦患をここに忘れたといわんばかり御輿を据えて、しばしは夏の夜の歓楽に身も魂も忘れてる。ああ、治太やんのどら声に魅せられてふけ易きこの頃の宵を、バツトの煙をぷーんと匂わせ乍ら、馬鹿面して聞き惚れる、是等の男衆女衆もまたおめでたからずとせんや。浪花節のはねし後の幕はどんなものだけか。

浪花節席の南の隅に大道哲学者の売卜者がぎろぎろ異様に光る眼をして、四辺の群集をへいげいし乍ら、相性とか九星とか、運とか何とかしゃべり散らしているが、その人を馬鹿にしたような態度が面白い。

植木屋のカンテラ灯や射的や吹矢や煎豆の匂いや群集のいきれやガス灯の光線や、それらのあるゆる刺激で青くただれた界限の空気を乱す喧騒をのがれて、石段を上つて神苑の裏に來れば、一帯は幽闇の世界で、はや直ぐ下の境内の騒擾はけりり忘れたかのようなだが、その闇がりの大銀杏の根株の石灯籠の陰に、ひそひそと秘めたる意を打ち語らうは誰が家の子ぞ。

「貴女の真実の心から出たのじゃないでしょう」「……」「淋しかったね。彼の夜……は」と書生風の麦藁帽子が白地のゆかたの廂髪の肩に手をおいてじゃれついていた。しかし目を擬らせば、この一組ばかりではなく、ここに一組そこに一組「えへん」するとはなし□□いしたので棒組は敏捷にさつと手に手をとつて暗に消えてしまった。跡を追う値打ちも無ければ神苑を東に下りて相生町の通りまで出ると、黒闇に咲く白粉の鼠なきを連発されたので、いささか恐縮してしまい、回れ右をして神苑に添って境内の雑踏にわり込み、道根坊の娼家の巷に曲れば、淫らな女と火を募う夏のような蕩児の群がだらだらと格子より格子に流れてゆく。

こうして八幡社の夜はふける。

細民窟 貧しき者は福か、田町の三井長屋

人道の光地上に投げられて、野の白百合に栄光を見出してより二十年。「貧しき者は幸いなり」と神の子キリストの垂訓は今もなお、千古の福音として宣伝しているが、貧しき者果して幸福であろうか。

我が親愛なる読者諸君！諸君もし飄々乎として夏の夜の行楽を連雀町八幡社界限に追うついでをもつて少し御足労ではあるが、八幡宮の石磔を南に拾つて津久井医院前の貧民長屋をたたいてみたまえ。いわゆる貧しき者、果して幸福であるかどうか。のろうべき運命と悲惨なる生活難は暗たんたる貧民長屋界限に渦を巻いて、彼等細民は正に貧苦と飢餓とに迫られて、瀕死の状態に苦吟している。時や五月、雨じめじめと屋に漏れて、その日その日の糧に窮乏を告げること、いや増したり。

このあたりの貧民窟は俗に三井長屋といつて八軒二棟を筆頭に、その奥一帯は抜裏続きの蜘蛛の手に乱れ藁葺、板葺、亜鉛張、八軒に六軒に四軒とごちゃごちゃ並び間口は九尺、奥行は二間、雨戸はぼろぼろに破損してうす暗い、豆ランプの灯影が物凄く余光投げて悪臭がぶんとくる。

時に六月十七日午後十時四十分、所は前橋の貧民窟田町十二番地、蛇の目の傘をふりかざして辺りをぶらつくは、職掌柄の夜の世界担当記者、軒別に覗かずとも歩きながら見やれば、見え透く破れ屋の内にぼろ単衣を身にまとつた蓬髪垢面の人たちがうごめいている。いたわしい運命に支配され、浮ぶ瀬の無い貧苦のどん底に落ち込んで何やら呻いている。

さて、これらの人たちはどんな生活の道程を辿っているか。八軒長屋の取付から順に数えれば、古道具の商、人夫、仕事師、下駄の齒入

れ屋、紙屑拾い、疊職人、周旋屋、たたき大工等。こんな職業の手合が浮世の窮極のどん底に沈りんして、各々身分相当の生活をしているのである。これらは悉く社会最下層の労働者である。終日激しい労働に骨身を碎いて、夜は宵の口から雨戸をしめてはや夢にだけは華やかに遊んでいるのであろう。女房は豆ランプの下に坐つてマニラ麻をつないでいるが、油代だけかちうることも難かしい。いずれ昼間はがらがら座繰を回して玉繭でもひくのであろう。夫婦共々に稼ぐとも貧乏神は一步先へ行っている。

界限で一番困窮しているのは、左側八軒長屋の手前から二軒目の赤石元吉という仕事師の家族である。入口からずーっと土間が左へ曲つて、四枚の破れ畳を敷き込んだ六畳の一間を囲んでいるだけで、このむさ苦しい所に元吉の女房のおきよとの間にできた子どもが五人、汗と油と垢で黒光りするふとんに包まつて寝込んでいる。見渡すところ頼れた荒壁に三尺の吊戸棚が拵えてあつて、入口の突き当たりがかまど、その右手に勝手道具や米櫃が並んで、それらをただ一個の豆ランプが幽かに気味の悪い光線を投げて織出し、一種いうべからざる凄惨陰森な情調を漂わしている。

小胆の人ならばすでに一場の光景に昏乱してしまふであらう。しかしまだ、ここで僻易してはいけない。元吉の女房が必死になつて麻をつないでいるが、その苦しい痛々しい生活難、圧迫に対する彼等の訴えを聞かなくてはならぬ。——元吉は昨今の霖雨に仕事をしたくても無く、これといつて金に代えるような家財道具も無いのだから、三度の御飲がいただけがないで、お粥のような飲を二度食べてその日をかろうじてごまかしているとかや。すやすやと寝入れる子どもも、飢餓と遊びの疲れとで正体なく夢をむさぼっているのかと思えば、無心な彼等の寝相にも万斛悲憐の涙にたえぬではないか。ああ、誰か貧しき

者は幸いなりというぞ。

### 一等地 曲輪町十字街、夜十時の五分間

本町より連雀町へ、桑町より堅町へ、堅町より曲輪町界限にかけて一括して前橋の一等地として許されてあるだけに、市の繁栄もこのあたりに渦を巻いて、夜更けてもお場末の町よりも人に車に頻繁な往来を見ることが出来る。

堅町通りを南に電車の曲る十字街に立てば、梅雨の最中の夜として、しめりを含んだ東南風が西へ流れて、白昼のむし暑いのにひきかえて今宵の涼しさ、むしろうすら寒さを覚えるくらい。さりながら夜は十時とふけたればとて、目抜き場所だけに堅町通りから曲輪町の繁華にかけてずらり並んだ商店は、黄色い電灯に青色のガスの光を交えて、赤や紫や白や色さまざまの美しい夏物の商品が黒い夜の色に鮮やかな影を投げて、白昼をあざむくばかりの明るさ美しさ。そしてその煌々たる光波の裡に据えられた蓄音機は渋い呂昇や越路のさわりで顧客を呼んでいるが、何としても初夜更けた十時、奥様御同伴の御役員様も、乳母車に嬢さんに乗せた紳士も、老婆の手をひく親孝行も皆、夜店の賑わいに酔うてとうにお宅へ帰られし後とて、ちよつと立聞きも悪くない店頭もお客らしい人の影も無い。

「なかなか景気は持ち返さない」と投げけるようにささやいて中年の角帯が二人、堅町から曲輪町へ朝日を輪に吹き乍ら、折れて行くのに続いて、彼方からも此方からも一人、二人ぼつぼつと十字街道を思い思いに脚を運ぶ。その中には華美な白っぽい単衣一枚で気取っている者もあるが、五分はネルで四分は羽織に単衣。

角の煙草屋の店先にお邪魔して腰をかけていると、五分間に男が四十三人、女が二十六人新繭を満載した荷車が二台、ゴム輪が二輪、この街頭を通った。聞けば昼間の五分間には男女三百十五人も通るそう

だが、昼と夜の違いは大きい。

さらに街頭の往来について研究すれば、曲輪町方面行はいずれも山の手に住っていらつしやる上品の方で、連雀町の方面には主に町家の人、両者の人数は相伯仲するが、曲輪町、連雀町から堅町のたらたら坂へ下りて行く人影が一番多い。また一番雑多な階級の人たちが行く。四街道のうち物産、陳列所前から堀川町の暗闇に消えるが一番淋しく、わずかに男三人に女が二人。これを見て南前橋はだんだんと衰えて、北前橋がめきめき栄えてゆくことがわかる。

暑い晩と寒い夜、よく晴れた晩とうすら曇った夜、これら天公の手加減で、夜の世界に住む人の心をこななに支配するかということが、街行く人を一見して判然する。暑い晩は白い色あいに低い庭下駄か草履が多く、そして二、三人ずつ連れ立って何やら話し乍らゆるりと涼みに出た顔付きで、どことなくのんびりしている。今夜は親子らしい一組と御夫婦連れが二組、男ばかりの二人連れが二組通っただけで、残る全部は皆一人ぼつちで、思い思いに淋しそうに中齒の音を響かせたり、吾妻草履を小刻みに拾って歩いて行くのである。

帽子に白い条の入った中学生の少年達が、面白そうに飛行機の話をし合って行くのを見て、時代の推移にしたがって少年の好みまで移り変って行く様が面白く感ぜられた。

今や大正の新時代、もうサーベルやヒンヒンのお馬では乳をすすする嬰兒でさえ満足されなくなつて、飛行機や自動車と奇想天外な新発明でなければ、泣く兒も黙らない。

これは単に小児の玩具ばかりじゃない。大人の玩具も最新の文明を通した新機軸でなければ、承知されないのだ。バスや電灯や電車が、さん然と前橋の「夜の世界」を飾っているではないか。

坂梨春水著「郷土研究」より 大正三年十一月九日発行



補

遺



# 一 民 具 (調査全地域)

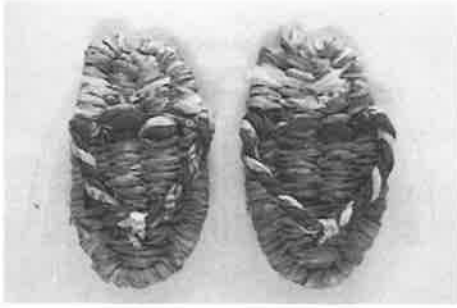
## 一、衣生活に関する資料

### ワラゾウリ (上細井)

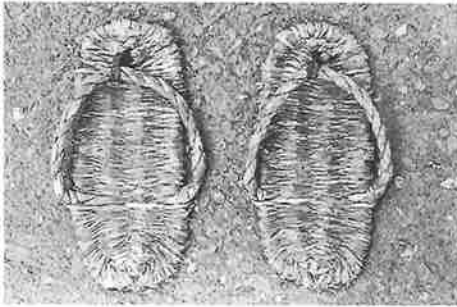
幅一九センチ 長さ一六・九センチ

ゾウリは日常の履物であった。写真のワラゾウリは、子供用で五、六歳用の小さなものという。

鼻緒には紅白の布をよった紐が使われており、台部の踵部分も藁と一緒に布を編みこませて装飾にしている。鼻緒をとめるのにビニール



ワラゾウリ



タケノカワゾウリ

が使われていて最近作られたものである。

### タケノカワゾウリ (亀泉)

幅一九・八センチ 長さ一二二センチ

ゾウリはかつての日常の履物として最も一般的に利用された。材料は、主に稲藁を使うことが多かったが、写真のような竹皮を使ったものや藁(いぐさ)、菅(すげ)などを利用することもあった。

消耗が激しいので、年間に家族が使うゾウリは、冬場の夜なべ仕事で作られていた。

### スゲガサ (下新田)

径一三八センチ 深さ一二二センチ

農作業で日差しや雨を避けるための菅製の笠である。

スゲガサは、近くの雑貨商から毎年買っていたという。農作業では、田植えや田の草取りに使っていた。田の草取りの時は、日差しが強くても涼しく、また、田の中を這って歩いても、稲が顔を擦らないので必需品だった。

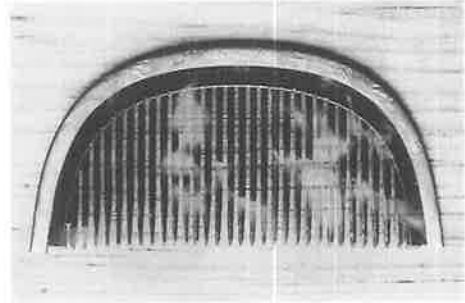
### クシ (上泉)



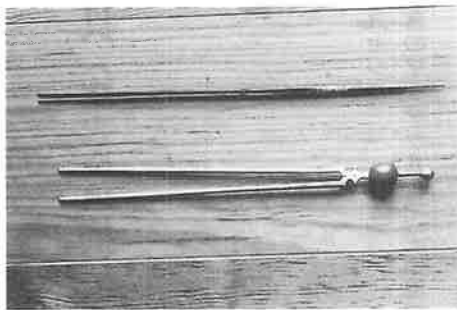
スゲガサ



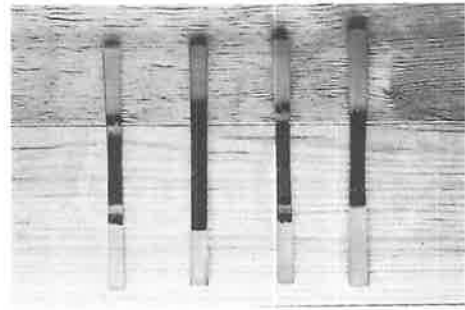
コウガイB



ク シ



カンザシ



コウガイA

コウガイ (荻窪)  
 長さ一五・九センチ 最大幅  
 一・二センチ  
 クシやカンザシとともに女性の髪飾りの一つである。写真のコウガイ

足で髪をはさむようにできている。写真のコウガイは銀製で、下のものには耳掻き部にサンゴが飾りとして付いている。

コウガイAは、鼈甲製、Bは銀製で両端には草花の模様が見られる。カンザシも髪飾りの一つで、二本で髪をはさむようにできている。写真の飾り櫛は、縦に長い縦櫛で、<sup>ベッコウ</sup>鼈甲製であり、縁には草花の彫り物がある。この他に、平櫛もあつて一組をなしている。

コウガイは、もともとは髪をとりたりすいたりするための用具であつたが、次第に髪装飾品になつた。これらは、いずれも女性の髪を飾る結髪化粧用具の一種である。大正時代の中頃、嫁入り道具の一つとして実家から持参したものである。

長さ一七・五〜一八・九センチ  
 コウガイA (上泉) 長さ一五〜一五・四センチ  
 コウガイB (上泉) 長さ一四・四センチ  
 カンザシ (上泉) 長さ一七・五〜一八・九センチ



コウガイ



は、鼈甲製で、中央がやや細く両端がやや撥形になっており、そこに亀などの縁起ものを刻んでいる。

コウガイは、もともと髪掻きといわれ、髪をすくう道具であったが、次第に女性の髪飾りとして変化してきたものである。

髪形が変わり、和服を着ても日本髪に結わないことが多くなってき  
てから、次第にコウガイを飾りにすることも少なくなってきたが、明治・大正頃までは髪を飾る大切な装飾用具であった。

### ハリイタ (下阿内)

全長—二二七センチ 幅—五〇・五センチ

古くなった着物などをほぐして、新しい着物に作りかえる仕立て直しの布を伸ばす張り板である。



ハリイタ

着物をほぐしてきれいに洗濯した後、米で作った糊をうすく付けてハリイタに張る。布が波をうたないよう、しっかりと伸ばして正確に張り付ける。布目にそって張らないと上手

な仕立てにならないという。張り終わった後、余分な糊を乾いた手で拭き取り、天日で乾かす。乾いた後は、両端をもって剝がす。

作業が終わった後のハリイタは、糊が付いてゴソゴソになっているので、雑巾でよく拭いてしまっておいた。

### ヒノシ (鳥取)

全長—三七センチ 火入れ径—二・七センチ 火入れ深さ

—六・二センチ

衣類の皺をなおしたり、裁縫後の衣類を仕上げたりするための裁縫・洗濯用具の一つである。

火入れは真鍮製で、この中に炭を入れ、火入れの底で布を押しつけて皺などをなおす。アイロンの登場後、次第に姿を消していった。

## 二、食生活に関する資料

### コネバチ (萩窪)

径—三九・二センチ 深さ

—二二・八センチ

小麦粉やそば粉などを使った粉食の種類は多いが、写真のコネバチ

は小麦粉やそば粉に若干の湯を加え、こねたり練ったりするために用いた調理用具である。

かつてはウドンを夕食に食べる家が多く、また、冬の寒い時期にはオキリコミ(ニボウト)などと呼ばれる煮込みうどんを食べる機会も多く、これらの粉食の調理にコネバチは欠かせないものであった。

写真は、陶磁器製でかなり重いも



コネバチ



ヒノシ

のである。コネバチとしては他に、木製の鉢も広く使用された。

コネバチA (上泉)

径一五七・四センチ 深さ

一二センチ

コネバチB (上泉)

径一七〇・八センチ 深さ一

五・五センチ

コネバチC (上泉)

径一四四・二センチ 深さ

一八センチ

小麦粉やそば粉などをこねる際に使った調理用具である。

A、B、Cともにトチを材料にした木鉢で、トチの木の中をえぐって作られている。



ナ ベ

左のAは、しっかりと形をしていて比較的新しい。中央のBや右のCは、かなり使い込まれた年季もので、縁の角は丸く減っており、ひび割れがあったり、木目など浮き出たりにしている。Bは大正以前からあったものという。

ナベ (荻窪)

径一三四・四センチ 深さ

一三・九センチ

鉄製の鍋である。一般の炊事用の



ナベは、イロリの自在鉤や竈にかけて、汁や煮込みうどんなどを作る時の調理用として使用された。写真のナベは、ふつうのナベより広がりがありすぎ、摺り鉢状の形態をしているのが特徴である。このような形のは、繭から糸を取り出す際に使用されるイトトリナベによく見られる。ナベの中が瀬戸びきになっていないことや釣り手のあることから、炊事用のテツナベとして使用されたかと思われるが、イトトリナベとして使われたのかも知れない。

サンジュウニンナベ (竜蔵寺)

計測なし

大型の鉄鍋であるが、これをサンジュウニンナベというのは、大量に料理ができるという意味での通称だという。

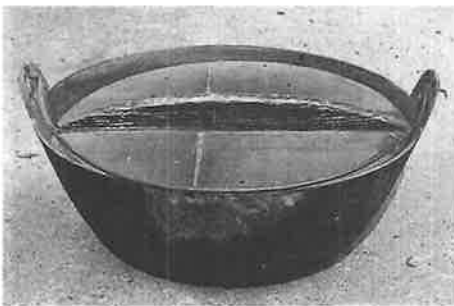
タテマエ、結婚式、葬式などの人寄せの際に、組内のオンナシユ十人くらいが味噌汁、キンピラ、豆腐のカラなどを作るのに使用したものとす。また、蚕の上簇が終わった後の上簇祝いでも、手伝つてくれた人を含めて大人数の料理を作るのに使われたという。

鍋鉸(なべつる)を通す両端の鉸耳には、五つの穴が穿つてある。これは、重さで鉸耳が切れたときに、別の穴に鍋鉸を通すための予備であるという。

鍋に穴が開いたり痛んだりしたときは、イカケヤに直してもらった。

ジュウニンナベ (竜蔵寺)

計測なし



サンジュウニンナベ



ジュウニンナベ



リョウリナベ

サンジュウニンナベと同様に人寄せの際に使った鉄鍋で、サンジュウニンナベと組んで使ったものという。サンジュウニンナベで足りない味噌汁などをこれで作った。

リョウリナベ（竜蔵寺）

計測なし

今のフライパンに相当する鉄製の大きな片手鍋である。人寄せのときに、主に卵焼きを作るのに使用したものという。

コンロを使って卵焼きを作ったが、これで三十人前は作れたという。

網製ナベ（下新田）

柄長一〇センチ 径一二三センチ 深さ一四・五センチ

銀杏の実やイナゴなどを焼くのに用いた網製の鍋である。

銀杏の実やイナゴなどのように焼くとはねる物をオンナシユ（女衆）がこのナベで焼いたという。イナゴは、胃腸の薬として焼いて食べた。はねるのを防ぐために、網の蓋が付いている。



網製ナベ



ホウロク

ホウロク（竜蔵寺）

計測なし

イロリのカギダケなどに吊るして、胡麻を炒ったり、ヤキモチやジリヤキを焼いたりするのに使ったという。ホウロクに水を使つては危ないの諺で、「ナベにホウロク危ないところ」などと言われた。

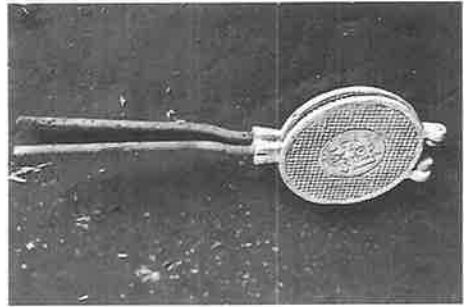
胡麻は、一合の半分程度を入れて炒った。

ヤキモチは、小麦粉が材料である。共同田植えのときには、仕事をする家が当番になって三時のコジユハンとして作つたり、八月一日の「カマノクチアキ」のときには、特別にあんを入れたものを作つたりした。

ジリヤキは、朝食の残りのヒキワリの麦飯に小麦粉を入れてこねて焼いたもの。麦飯五合に小麦粉一合の割合で混ぜ、麦飯に含まれる水気がよくこねてホウロクで焼く。ホウロクにのせ、片方が焼いたらホウチョウで裏返しにして両面をよく焼いた。写真のホウロクだと一度



ホウロク



センペイヤキ

に七個焼けたという。

ホウロク（川曲）

径一三三・五センチ 深さ一六センチ

底の浅い鉄製の鍋である。

ホウロクをヘツツイの上にかけてヤキモチなどを焼くのに用いたといわれ、戦後間もない昭和二十年代まではよく使ったものだという。

小麦粉に水を入れ柔らかめにこねたものをホウロクの中に流し込んでジリヤキとして焼いたり、余ったご飯を水で洗ってねばりを取り、これに小麦粉と重曹、微塵切りにした葱などを入れてヤキモチとして焼いたりしたものだという。

センペイヤキ（下新田）

幅一四・七センチ 長さ一四一・六センチ

磯部焼き用の煎餅焼き器である。

戦後の物資がなかった時代に、子供のおやつとして磯部煎餅を焼い

てあげたという。

小麦粉を磯部の源泉の湯でこねて、トロトロにしたものをこの中に  
入れ、トロ火で焼いた。源泉の湯は、磯部温泉まで行って、一升ビン  
や醤油ダレで買ってきたという。

オハチ（竜蔵寺）

計測なし

炊いた飯を釜から移して入れておく飯櫃で、薄く漆がかけられている。

写真のオハチは、曲げ物でできており、右がやや大きめで蓋無し、  
左が小さめの蓋付きの飯櫃である。

人寄せなどの客用として使われたものである。お客をザシキに座らせ、初めは蓋無しのオハチでご飯を盛るが、おかわりでご飯が足りなくなると、初めのオハチを下げ、蓋付きのオハチを出したという。

小さめのオハチに蓋が付いているのは、おかわり用として後で出すことから、中のご飯が冷えないようにするためであるという。



オハチ



ワサビオロシ

### ワサビオロシ（竜蔵寺）

計測なし

オロシは、大根や人参などを摺りおろすための調理用具である。木製の柄に鋸歯状の竹を取り付けたものや、金属でできたオロシガネなどがあるが、写真は磁器製である。

名前の通りわさびをおろすのに使ったが、柚子や生姜をおろすときも使った。これで摺ると、わさびや柚子の香りがよく、味もよかったという。

### ウドンモリ（竜蔵寺）

計測なし

茶柄杓の先の尖った爪にうどんを引っ掛け、汁とともにすくう竹製の自作用具である。

冬の寒い日には、イロリのカギダケに吊るした鍋で煮込みうどんを作って食べ、体を暖めた。写真のウドンモリは、イロリで作ったナベ



ウドンモリ



ミソコシザル

ウドンを鍋から取り出して、どんぶりに移して食べるのに用いた煮込みうどん用のウドンモリであるという。

### ミソコシザル（下新田）

径一・二・四センチ 深さ一・一センチ

味噌こし用の調理用具である。

味噌汁で使う味噌には、味噌をそのまま汁の中に入れる場合のオトシミソと、写真のようなミソコシザルでこす場合のコシミソがある。うどんを食べるときはコシミソの汁、シルカケメシを食べるときはオトシミソの汁で食べるとおいしかったという。

ミソコシザルの中に味噌を入れ、汁の中につけてシャモジで掻き回してコシミソにする。中に残ったカスは、牛馬の餌にしたという。

### シヨウズ（竜蔵寺）

計測なし

摺り鉢型をしたざる編みの調理用具で、こしあんを作るのに使用したものという。

ボタモチやアンピンモチのあんを作るのに用いたという。こされたあんを受けるために、鍋などの容器を台にした。シヨウズの中に煮た小豆を入れ、スリコギボウで潰すと、シヨウズの間からあんが出てくる。多くて五合の小豆を入れることができた。

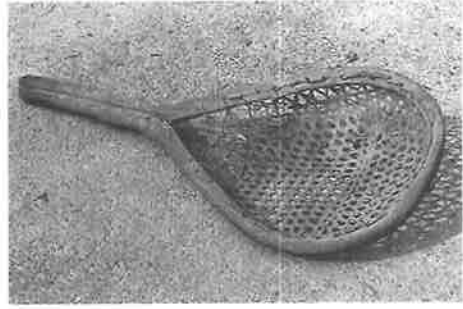
### スイノウ（竜蔵寺）

計測なし

鍋や釜で茹でたうどんやそば、団



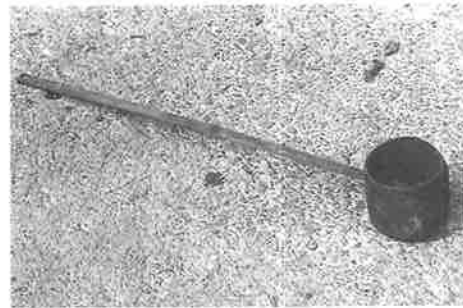
シヨウズ



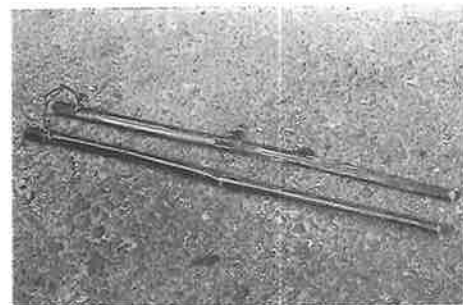
スイノウ



アゲスイノウ



タケビシャク



サイバシ

子などをすくい上げて水切りするのに用いた粉食用の調理用具である。

うどんなどをすくう部分は竹製で、水切りしやすいように、六つ目編みによるかごになっており、柄や縁の部分はアケビの蔓を利用して

アゲスイノウ (竜蔵寺)

計測なし

冷えたうどんを、暖かい湯につけて食べるためのざる編みの竹製の道具である。

釜にアゲスイノウが沈むだけの湯を沸かしておき、アゲシヨウギの上の玉になっっているうどんをアゲスイノウに入れて、湯の中につける。頃合を見計らってゆすぶって湯を切り、どんぶりに入れて食べる。

カゴヤの職人に作ってもらったものという。

タケビシャク (竜蔵寺)

計測なし

少量の醤油をすくうための竹製の柄杓である。醤油をすくう器の部分は、竹の表皮をナイフで削っているが、これは表皮を削るとひび割れが入らないためという。

醤油にはカタクチを使うこともあるが、少しの醤油を使うには、これが便利だった。汁のように醤油の量を加減する場合には重宝だったという。

サイバシ (竜蔵寺)

計測なし

食器類としての箸には、食事用の箸と調理用の箸があるが、写真のサイバシは、煮ものなどをつかむための調理用の箸である。

長い篠製の箸で、鍋でうどんやそばを茹でるときに、麺がからまないよう掻きまぜるのに使ったものという。

スリコギ (竜蔵寺)

計測なし

摺り鉢と対で使用される棒状の調理用具である。胡麻や味噌などの食物を摺り鉢に入れ、摺り鉢の内側の線状の溝を利用して粉状や練り状に摺り潰す。

スリコギの端を手でおさえ、もう一方の手で中ほどをつかんで回転させ、スリバチの中のを食物を潰す。

カタクチ (竜蔵寺)

計測なし

醤油などの液体を注ぐために注ぎ口を片側に付けた陶製の容器である。陶製の他に、木鉢の片側を張り出させて注ぎ口とした木製のカタクチもある。写真のカタクチは、胴部から注ぎ口を張り出させた形をしている。

主に醤油さしとして使用されたが、酒樽から徳利に酒を移しかえるにも用いられた。写真のカタクチは醤油さしで、蓋が付いている。



スリコギ



カタクチ

ジュウバコ (竜蔵寺)

高さ一四・五センチ 幅

一〇センチ 奥行二一・

五センチ

梅に鶯の模様をあしらった漆塗りの重箱である。幕末の医者で教育者でもあった竜蔵寺出身の渋川杲庵は、漆物もよくしたといわれ、写真は、重箱も杲庵作と伝えられている。

慶事のお祝いをもたらったときに、赤飯や餅をこの中に入れて返したという。

フカシとカマシキ (下阿内)

フカシ

幅一五三センチ 奥行五三センチ

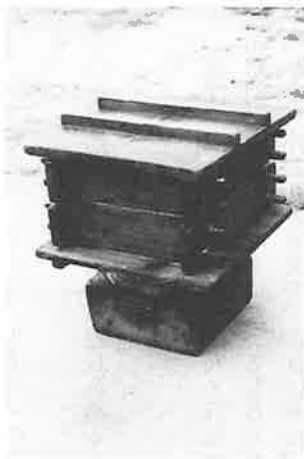
カマシキ

幅一三四センチ 奥行一三四センチ

フカシをのせた高さ一六一・八センチ

赤飯やマンジュウ、茶碗蒸しなどの蒸した食物を調理するための蒸し器で、いわゆるセイロである。

写真は、板を井桁に組んだ角型のフカシであるが、曲げ物を使っ



フカシとカマシキ



ジュウバコ

た丸型のものもある。フカシの底の渡し木に敷いた簀(す)の上に布巾をのせ、その上に蒸すものを置いて、写真のように湯を沸かした釜などの上にかけて湯気で蒸す。写真は、カマシキの上にテツガマをかけ、その上に二段重ねのセイロを置いた形になっている。

かつてはセイロを使う機会が多く、味噌づくりのミソタキの時の麦をふかしたりするときに使った他、暮れの正月準備、正月十四日のオカザリカイ、一月二十八日のシマイ正月、三月節供、初午、春蚕の上簇後のオコアゲモチ、トウカンヤ、冬至の前のアブラモチなど、農家で餅を作る時には必ず登場したという。

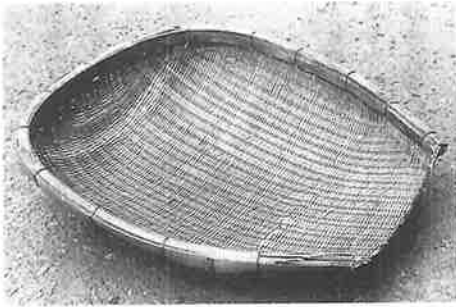
一つのフカシには、餅米で四升入。二段重ねて使うときは、下のほうが早くふけるので途中で下と上のセイロを交換するが、これをアゲカエルという。

### アング(竜蔵寺)

計測なし



アング



アゲショウギ

オカツテの柱などに吊るし、シャモジやシャクシ、サイバシなどの調理用具を入れる用具である。

太い竹の各節ごとに四つの口を設けて、調理用具が差し込めるようにしてある。

### アゲショウギ(亀泉)

幅一四一・二センチ 奥行一四七センチ 深さ一九・五センチ  
竹製のザルの一つで、昭和初期に近くのカゴヤに作ってもらったものという。写真のアゲショウギは三升入りの容量で、これ以外に、四升、五升入りのショウギが組になって一組をなしている。現在も使われており、暮れの餅つき用のもち米を冷やすのに使っているという。

アゲショウギの用途としては、洗い米を入れて水を切る他に、湯でたウドンを水にほとばして水切りしたり、洗った野菜類の水を切ったりするときにも使われた。

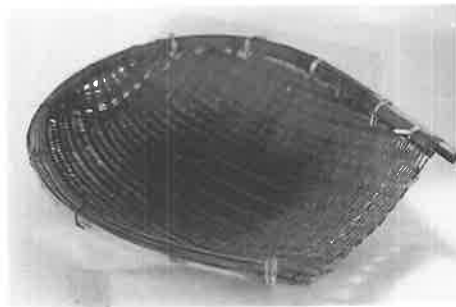
竹のひごをザル編みにしたものであり、周りの縁の竹は、古い民家のスス竹を使っている。縁をとめている針金は、元は藤蔓を使っていたという。

### アゲショウギ(上細井)

幅一二七・八センチ 奥行一四三・五センチ

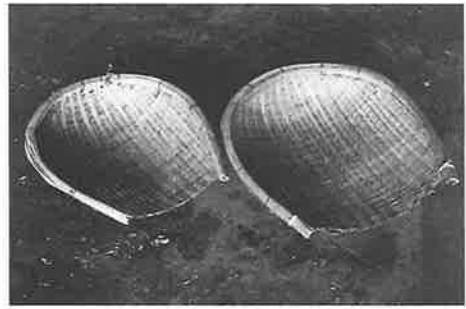
餅米やうどんなどの水切り用に使用した炊事用具の一つである。

餅つきときには、餅米をといで冷やしたものをこの上にあけて水を切った。うどんのときは、鍋でうどんを煮て、水で冷やしたのをスイン



アゲショウギ





アゲシヨウギ

ウですくってこの中に入れ、水を切った。

他にも、みそづくりのときに使ったり、梅干しを作るのにこの上に梅をのせて天日で干すのに使ったりもした。

みそづくりは、大豆と大麦の両方を使うが、大豆の方は、大釜で煮たものをスィノウですくってアゲシヨウギの中に入れ、ウスの中に移してキネでつぶしたという。

アゲシヨウギ 大(下新田)

幅一三八・五センチ 奥行一四九・五センチ

アゲシヨウギ 小

幅一二七・七センチ 奥行一四五センチ

竹製のシヨウギで、米を洗ったり、うどんをゆがいたものを上げて水切りした。大ききの異なるものが組になっていることが多く、写真右のアゲシヨウギが、一番大きい。

ヒシヤク(竜蔵寺)

計測なし

水や湯などの液体をすくう用具である。

写真はカネビシヤクで、水などをすくう杓(ひしゃく)部が金属であるが、この他に、杓部に木製の曲げ物や竹などを使ったものがある。写真のヒシヤクは、前橋の弁天通りで購入したものである。かつては、柄に杓部を差し込んだだけのもの、釘で留めることがなかったためにすぐに抜けてしまい、一年に三回は購入したという。杓部が金



ヒシヤク

属になったのは、昭和三十年頃で、それまでは曲げ物のヒシヤクを使っていたという。

容量は、一升五合入り。ナガシのミズガメの上などに置いて使用した。

ミズガメ(竜蔵寺)

計測なし

陶器製の水を保存しておくための甕である。

容量は三斗五升入りで、ナガシのそばに置いておいて、ヒシヤクでナベやテツピンに水を汲んだ。ミズガメの水で湯を沸かすと、お茶の味がよく分かったという。

ミズガメの水は、ふだんはカメに半分くらい入れておいた。ミズガメに水を入れる水汲みの仕事はワカイシユの仕事で、朝と夕方の二回、二升程入るテオケで、外のポンプ井戸から汲んで来て入れた。ポンプ井戸になったのは大正十年頃で、それまではハネツルベの井戸から汲んできた。水道になってからも、火災などの非常時に備えて水をためておいたという。

写真のカメは町で買ったものだ、値段は、葬式で使うカメの二倍ほどし、五十



ミズガメ

銭くらいだったという。

ツボ (萩窪)

口径一五・二センチ 最大径二三センチ 深さ一三一・五センチ

食料保存用の容器である。胴の中央部が膨らみ、上下がすぼまっている陶磁器などの容器のうち、中のもの出し入れが便利のように口径が大きいものをカメ、口のすぼまったものをツボなどと呼ぶが、写真の容器はツボに相当するものであろう。何に使ったかははっきりしていないが、ふつうは、漬物や、味噌・塩などの調味料、酒や水・油などの食料の保存容器としてカメなどとともに広く使われていた。



ツボ

シヨウチュウガメ (総社)

計測なし

一斗入り容量の焼酎甕である。

かつては、焼酎をカメごと買ってきて飲んだものという。こうしたシヨウチュウガメは、古い農家の庭や物置などによく見かけますが、シヨウチュウガメ



シヨウチュウガメ

として使った後は、自家製の醤油などの入れ物に転用して利用されることが多かった。

ハコゼン (竜蔵寺)

計測なし

かつては、家族一人一人にハコゼンが用意されて、蓋を裏返して膳にして食事を行った。食事が終わると飯椀、汁椀、皿、箸などをこの中に入れ、再び膳を裏返して蓋を被せた。写真のハコゼンは、四代前のおじいさんが戦前まで使っていたものという。箱の側面には、持ち運びができるように手掛けが付いている。

ハコゼンの上には、飯椀、汁椀と、菜っ葉やコウコ (沢庵) などの副食を入れた皿がのせられ、これを三角膳と呼んだ。飯椀は、お茶を飲んできれいにした後、ハコゼンの中にかぶせて収納した。おじいさんの食器だけは、夜に限っておばあさんが洗ったという。当時は、イロリのそばで食事をしたが、嫁は全員の給仕を行い、みんなが食べ終わってから一人で食べたものだという。

クルミゼン (竜蔵寺)



ハコゼン



クルミゼン



クルミゼン

計測なし

膳の四隅に胡桃を半分に分ったものを足として取り付けて赤漆を施した四つ足膳である。

略式の膳ではあるが、足付きの膳として親戚などの大事なお客が来たときの食事用として使ったものという。

クロゼン (竜蔵寺)

計測なし

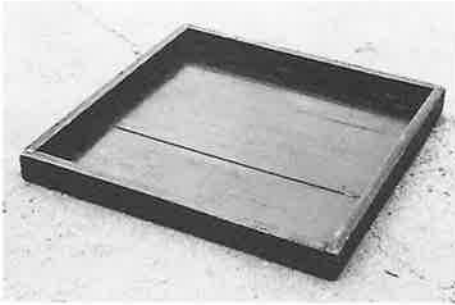
足の付かない折敷のような平膳で、黒漆が施してあるところから、クロゼンと呼んだという。

足付きのクルミゼンが上等のお客が来たときに使ったのに対して、クロゼンは並のお客が来たときに用いたという。結婚式のときには足の高い膳が使われるが、料理の手伝いに来た人には、クロゼンを使っただという。

オゼン (下阿内)



クロゼン



オゼン

幅一三二・五センチ 奥行一三二・五センチ 高さ一三センチ

来客のための食事を出すときに使用した略式の膳である。

足の付いていない平膳で、正方形の薄い板の四方に低い縁をめぐらし、薄く漆をかけている。この上に椀や皿をのせた。

昔は、お客が来たときに使ったが、今では正月やオイベスコウなどの特別のときくらいしか使っていないという。

正月十四日のオカザリカイには、アンのない餅を作り、オゼンの上に十二個か十六個のせて、大神宮に供物として供えたという。

ウス (下阿内)

径一五七センチ 高さ一四九・五センチ

檜材で作られた餅搗き用の搗き臼である。

古くなった臼が欠けて餅搗きのとときに木のくずが入るようになったため、切った檜の根元の部分をもらって掘ってもらったものという。切り株の形がそのまま見える素朴な臼である。

ウスは、テオキ (保管) をよくしておいたという。かつては、ダイド

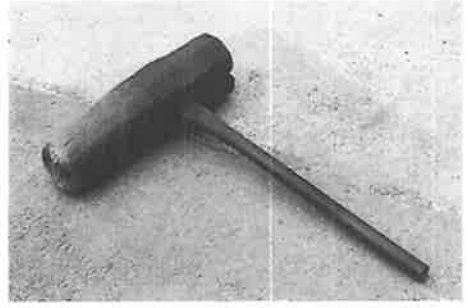
コロが広がったので、ウマヤの近くのドマの片隅に板を敷き、その上にゴミが入らないように逆さに置いておいた。ウスを使うときには、ぬるま湯を入れ布巾でこすって汚れを落とした。餅搗き後も、タワシを使わずに熱湯でネバを取った後、布巾できれいに拭いておいたという。

キネ A (下阿内)

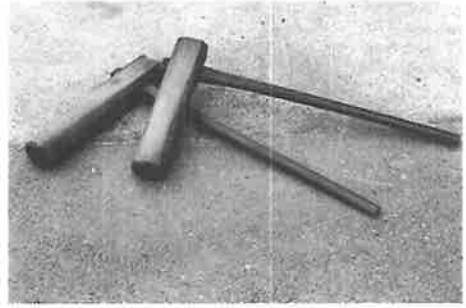
柄長一六四・一センチ 杵長



ウス



キネ A



キネ B

一四七センチ 杵最大径一三・八センチ  
キネB (下阿内)

杯長一七三・八センチ 杵長一四五・八センチ 杵最大径一八・三センチ

写真右のキネAは、餅搗き、穀類の精白などに使われた櫛製の横杵である。

搗き手が一人の時に使ったので、ヒトリヅキと呼んでいる。かつては、キビやアワの精白・精粉にも使ったという。キビは、ウスの中で搗いて皮と身にした後、テミでふるって身だけにした。これを蒸して搗いて食べたという。アワは、これで搗いて粉にした後、米の粉と一緒に蒸らして食べたという。

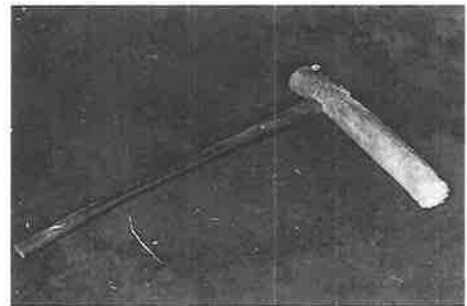
写真左のキネBは、餅搗き用のフタリヅキの杵である。二人で調子よく合わせながら餅搗きすることをテアワセという。

サンボンギネ (川曲)

柄長一八六センチ 杵径一七センチ 杵長一五二・二センチ

餅搗き用の横杵である。

年に数回ある餅搗きのときには、家のデエドコで、三人一緒にかわるがわる臼の中の餅を搗いた。男の子の誕生祝いには、近所の人を手伝いに来てくれたという。誕生祝いをくれた家のお返しには、この餅を持って行った。



サンボンネギ



サイトウ

サイトウ (下新田)

幅一四センチ 深さ一九・五センチ 戦時中の兵隊の水筒である。

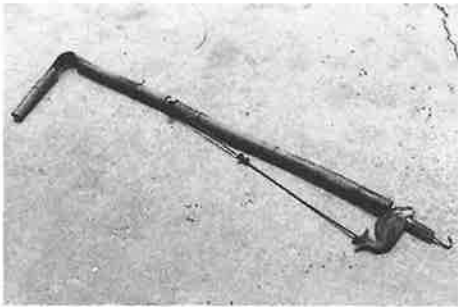
### 三、住生活に関する資料

オカツテ (竜蔵寺)

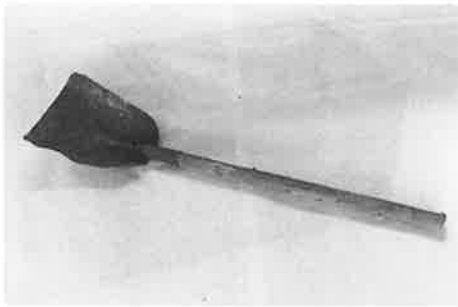
ナガシの向かい側は障子紙の張られた格子がはめられ、三段の棚の



ダイドコロ



カギダケ



ジュウノウ

柄長一四九・一センチ 皿部  
 長一二〇・九センチ 皿部幅  
 一七・二センチ  
 竈やいろりで木を燃した後にでき  
 る燠(おき)や灰を掻き出したり、  
 すくったりするのに用いる道具であ  
 る。  
 燠や灰をそのままジュウノウです  
 くったり、ヒバシで炭などをつまん  
 でジュウノウにのせて火鉢などに移  
 したりした。  
 かつては、桑の根や株を燃した後



オカッテ

上には皿やコップなど  
 の食器類、金網製のザ  
 ルやボールなどの調理  
 用具が置かれている。  
 また、右側の柱にはス  
 リノウやフライパン、  
 スリコギのようなもの  
 などが掛けられてい

る。右側のトボグチの上には、カマガミサマの数年分のメ縄が重ねて  
 張られており、手前のドマにはミスガメやバケツなどが置かれている。  
**ダイドコロ (竜蔵寺)**  
 農家のダイドコロの様子である。  
 手前のドマにはヘツツイがあり、ハガマが二つかけられている。写  
 真中央には、コンクリートで囲われた簡単なイロリ、その上には天井

から吊り下がった鉄製のカギダケが見られる。左側の上がりかまちが  
 アガリハナ、その奥がオカッテである。セド(裏)に抜けるトボグチ  
 の右には竹製のシヨウウギが二つ掛けられている。

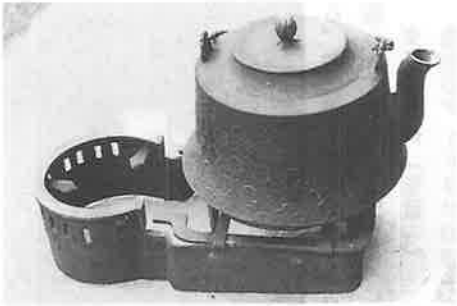
カギダケ(田口)

全長一二七・六センチ 幅一二七センチ

いわゆる自在鉤であるが、カギダケと呼ばれる。天井から吊るして、  
 鉤にテツピンやナベをかけ、イロリの火で湯を沸かしたり、物を煮た  
 りする。

写真のカギダケは、天井の梁に棒を渡し、その棒にカギダケの上部  
 の湾曲部を引掛掛けて縄で縛って吊り下げたという。

カギダケの長さを調節するストッパーの鯉の彫り物は、先々代の自  
 作という。カギダケは、イロリのあつた昭和二十年代まで使っていた  
 という。  
**ジュウノウ(上細井)**



ドウコ

長火鉢の火入れに当たる落としの中に入れて、テツピンなどをかけておく道具である。落としにはゴトクを置くこともあったが、このような

の煖を、こたつの中に移すのにも使ったという。また、春蚕や晩秋蚕の寒い日には、桑の根っこを火鉢の中で燃して部屋を暖めたが、火を燃さずにとっておくのに、このジユウノウで灰を被せていたという。



テツピン

全高一四センチ 全幅一二センチ

テツピン (荻窪)

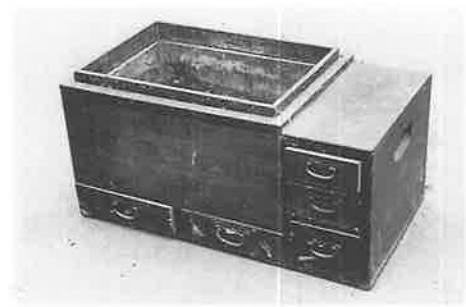


ネコヒバチ

落としに灰を入れ、木炭の炭火や残り火の煖をとった。また、落としにはゴトクやドウコ (銅壺) を置き、この上にテツピンなどをかけ、湯を沸かしてお茶などを飲んだ。

ネコヒバチ (上泉)

長径一九・六センチ 短径一五・五センチ 高さ一一



ナガヒバチ

銅製のドウコを置いて炭火で湯を沸かしたり、保温したりした。

ナガヒバチ (荻窪)

幅一六一・七センチ 奥行一三五・八センチ 高さ一三

三・三センチ

暖房具の一つで、特に町屋などの家庭生活では、イロリに代わるものとして重宝された。

手などを暖める暖房具には、火鉢を用いることが多かったが、これには陶製の丸火鉢などの他、木製の角火鉢や金属製の火鉢など種類が多い。ナガヒバチは、樺材や檜材などのしつかりした材質で箱型を作り、写真のように引き出しをつけ、灰を入れる落としの部分の銅の金属で覆っている。

## 二センチ

ヒバチと呼んでいるが、中に燠や炭火を入れて暖をとる暖房具で、いわゆるアンカである。猫が背を丸くした形に似ているのでネコヒバチと呼んだものと思われる。

冬に手足を暖めるために用いられたが、アンカを行火と書くように移動用の暖房具である。ここでは、中にカタズミを入れて暖かさが長もちするようにし、冬場の機織りの時などにイザリバタの下に置いて足を暖めたという。

土製の火入れに蓋を被せた簡単なつくりで、周囲には空気口が見られる。

## アンカ(上泉)

径一九・七センチ 全長一二九センチ

火入れを六角柱の木製の框(かまち)で囲んだアンカで、こたつの中に入れて手足を暖めたが、こたつに足が当たっても引つ繰り返らないしくみになっているという。

一般的には、火入れを木製の箱形の框の中に入れ、それに置きごたつを被せ、さらに暖が逃げないようにこたつ蒲団を被せて使用する。

## シヨクダイ(荻窪)

台座径一二九・五センチ 高さ一七一センチ

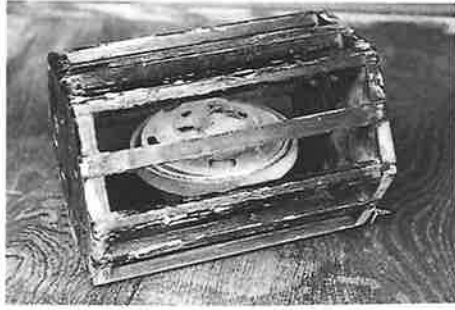
油火を使う灯台に対して、ロウソクを光源とする照明具である。木製のシヨクダイも多く見られるが、これは鉄製である。

上部のロウソク受けの中央の突起にロウソクを立てて点火し照明としたもので、室内の据え置き用として使用された。ロウソクを用いた照明具では、行灯の他、移動用として提灯や手燭などがある。ランプが登場するまでは、イロリの火とともに照明の中心的な役割を果たしてきた。写真に見られるロウソク受けの円形の框は、ロウソクが倒れないようにしたもので、柱の中央の鉤形突起物は、ロウソクの芯を切るハサミをかけておくためのものである。ロウソク受けを支える柱の途中に鋸歯状の切り込みをつけ、これをストップパーで止めて、シヨクダイ全体の高さを調節できるのが特徴である。

## ボンボリ(竜蔵寺)

高さ一六九・八センチ 火袋高さ一二九・五センチ 火袋幅一一・三センチ

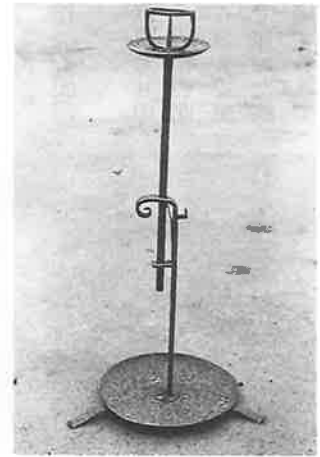
灯台や燭台の灯火の周りにおおいを付けて火袋にしたものをボンボリという。



アンカ



ボンボリ



シヨクダイ

写真のボンボリは手作りであるが、木製部には漆も塗られ、大変丁寧に作られている。火袋の中に入れる光源は油皿やロウソクではなく、ランプを使用したという。主に、お盆のときの灯明用として使われ、盆棚の上に位牌を乗せ、その右隅において灯をともした。ふだんは、仏壇の中に入れておく。

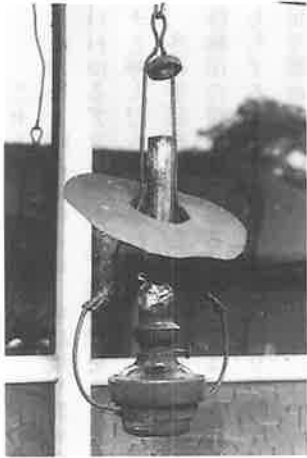
命日の時には一日、お盆の時は三日、彼岸の時は一日ともしたという。

ランプ（萩窪）

幅一三一・二センチ 全高一四三・四センチ



ランプ



ランプ

石油灯火具で、ツリランプなどと呼ばれ、ガラス製の笠を被せて（写真のランプは傘が欠損している）、居間などに吊るして明かりとした。炎を覆うガラス製の部分はホヤといい、これを被せることで光が周りに広がった。下部の油壺の中に石油を入れ、木綿糸を編んだものを芯にして石油を吸い上げる。写真左下の油壺の上部にあるツマミを回すことで、中の歯車が

回転し、芯の具合が加減されて火が調節された。

それまでの灯火具の中心だった蠟燭を備えた燭台などと比べて飛躍的に照度が得られた反面、毎日石油を補給したり、ホヤの掃除をしたなどの世話があり、これが子供や主婦の仕事であった。

ランプ（下阿内）

幅一四四・五センチ 高さ一五〇センチ ホヤまでの高さ一三五センチ

下阿内で電気が引かれたのは大正五年頃で、それまではランプを照明にしていたという。

油壺の中の灯油を吸い上げる芯の上げ下げは、右下のツマミで行うが、芯を少なく出せば火が小さく、大きく出すぎると煙が立った。

ホヤみがきは、子供の仕事だった。

レンタンキ（総社）

径一二二センチ 高さ一五七・七センチ

炭に代わるものとして、かつてはこたつや七輪に練炭を燃して暖房や調理を行ったが、レンタンキは、この練炭を作るための用具である。練炭は、ふうつは購入する家が多いが、このように、自家で直接作って使用する家もあった。

写真のレンタンキは、直径七寸の練炭を作るためのもので、昭和初期から昭和十三〜十四年くらいまで使用していたという。これで作った練炭は、石油ストーブが登場するまで



レンタンキ



養蚕火鉢に入れ、蚕室の保温用として利用していたという。

練炭の原料になる粉をレンタンキの器の中に入れ、写真右の重しをのせて、これをカケヤで叩いて固めたという。

### タバコボン (上泉)

幅一〇センチ 奥行一〇センチ 高さ一〇センチ

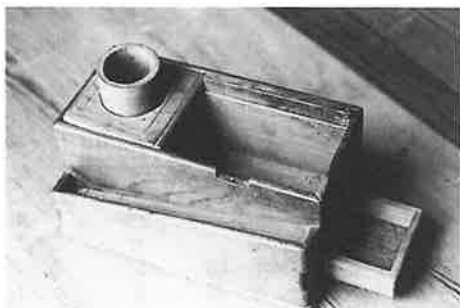
お客が来たときに出す喫煙用具セットである。

写真右の四角く溝を切つてあるところは、煙草に火をつける火種の炭火を入れておく火入れ、左の竹の筒は煙草の吸いながら捨てる灰吹き、手前の斜めの細長い溝はキセルかけて、キセルを置いておく。引き出しには、刻み煙草を入れる。

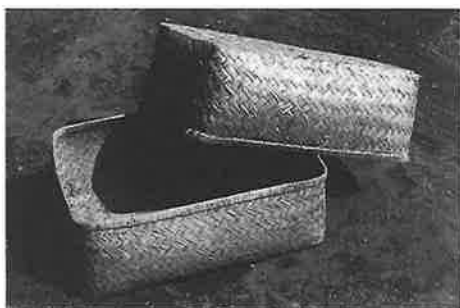
かつては、来客があつたときには、お茶を出すのと同様に、接待用としてこうしたタバコボンも出した。

### コウリ (総社)

幅一六五センチ 奥行一四二・五センチ 深さ一二四センチ



タバコボン



コウリ



シブゴウリ



ツクエ

割つたスズダケを三本並べて、網代編みで編んだ弾力性に富んだ竹行李(たけごうり)である。

変形や破損がなく、保存がよい。

着物やシャツなどの衣類を収納・整理するのに用いたという。

### シブゴウリ (亀泉)

幅一六一センチ 奥行一四二・五センチ 深さ一二六・五センチ

チ

竹あるいは柳を材料にして作った衣類などの収納具で、竹製を竹行李、柳製を柳行李という。行李は、主に日常の衣類や書類などを収納したり、運搬したりするのに用いられる。小さいものでは弁当行李や書籍を入れる文庫行李などがある。

写真のシブゴリは竹行李で、衣類を収納しておいたものという。行李の周りに、渋柿の渋を塗った和紙を張り付けて補強している。角の部分に布が縫い付けてあるのも補強のためである。大変丈夫にできて

いて、子供が上に乗っても平気だったという。シブゴウリの名前は、渋紙を張り付けたところからきていると思われる。

ツクエ（川曲）

幅―九一・四センチ 奥行―二七・七センチ 高さ―二五・三センチ

座敷などに置いて、物書きや勉強をするのに使った座卓である。かつては、勉強机や毛筆の練習などに使ったという。

#### 四、生産・生業に関する資料

##### (一) 耕作用具

マワリオンガ（下新田）

計測なし



マワリオンガ

井岡式の牛馬耕用の犁である。昔のスキは土が反転できなかったが、写真の井岡式のオンガは、犁先に連動したハンドルで土を返すことができた。井岡式の他にも、イノムラオンガや高北式、上田式の犁などがあったが、井岡式は牛馬の引っ張る力が少なくてすむので楽だったという。こうしたオンガによる耕起作業は、昭和三十年頃まで続けられたという。

水田の中央から渦巻き状に外側に

向けてすき起こしていくことをナカツケエシといい、ぐるぐる回りながら起こすので、マワリオンガと呼ばれた。

オンガによる水田の耕起は二人で行われる。犁を操作する人をシンドリ、ハヨウナワで牛馬を引く人をハナドリと言った。

犁の部分名では、犁先をケエシイタ、牛馬に繋ぐ腕の部分をはきんボウなどと言った。

エンガ（亀泉）

全長―一九五センチ 高さ―一〇四・五センチ 床部長―九四・八センチ 床部幅―一九・四センチ

関東や東北に分布する踏み鋤の一種で、耕運機が登場するまでは主に畑地の耕起に使われたが、水田の耕起用としても使われた。

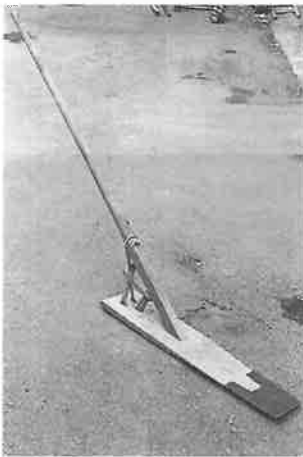
養蚕が盛んだった頃は、桑畑の手入れが大事で、冬にはこれでクラバラウナイをして堆肥を入れたり、夏には草が勢いよくなるのでこれであらって草退治したという。また、稲の収穫後の水田では麦作をするので、麦蒔きの前の荒起こしの道具としても活躍した。

重く、長い柄を持つているので使うのにコツが必要で、上手な人はテコの原理であまり力を入れなくても操作できた。

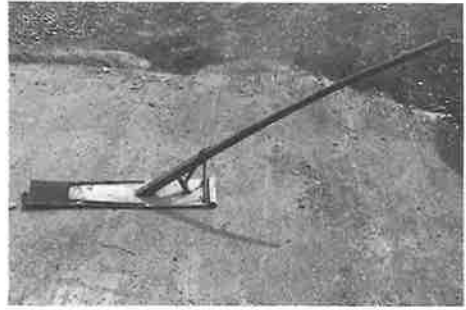
写真のように木の床に鑄鉄の鋤先をはめこんだ風呂鍬形式のものと、床が全て鑄鉄でできた金鍬形式のものがある。

エンガ（総社）

柄長―一七五・五センチ 床部長―九六・五センチ 床部幅



エンガ



エンガ

—二〇・二センチ  
主として、クワハタ(桑畑)のクワバラウナイに使用した耕起用の鋤である。

クワバラナイは、二回行った。一番ウナイは春蚕が始まる前、二番ウナイは春蚕が終わり田植えも終わった七月の上旬頃である。クワバラウナイは、クワハタの草の伸びるのをおさえたり、伸びた草を土で被せたりするために行う。エンガで起こした土を草の上に被せて草を腐らせて

しまうのである。この仕事は力仕事で、早い人でも二日で一反程度しかできないが、マンノウの作業よりも楽だったという。二番ウナイが終われば、桑の葉が大きくなって畑に日陰ができるので、草は成長しなくなり、クワバラウナイをする必要もなくなった。

写真のエンガは、クワバラウナイだけでなく、インゲンやナス、ナツパなどの野菜の種蒔き前に行う畑の耕起にも使ったという。

床部は、木製の風呂に鋤先をはめ込んだ風呂形式の鋤である。柄を肩にかけ、床の端に足をかけて踏み込み、鋤先を地面に落らせて土を起こす。写真中央の柄が床に取り付けられた部分に、エンガに付いた土を落とすタケベラが差し込まれている。

テンガA(総社)

柄長—一二五・七センチ 床幅—一二・七センチ 床長—四〇センチ

テンガB(総社)

柄長—一二六センチ 床幅

—一三センチ 床長—四一センチ

テンガC(総社)

柄長—一二六センチ 床幅

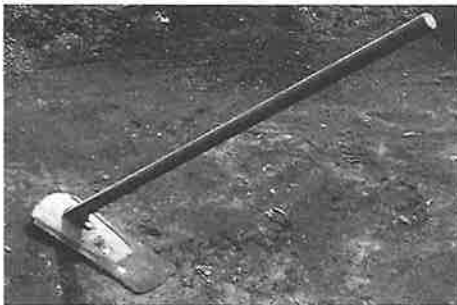
—一三センチ 床長—四一センチ

田畑の耕作用の引き鋤で、特に畑の中耕に多用されるが、耕作全般に渡って使われる農家の中心的な農具である。床全部が鉄でできた金鋤と木の床に鋤先を詰め込んだ風呂鋤がある。

写真A、Bはともに金鋤だが、Aの柄は床にボルトで取り付け、Bの柄は床を作り出したシツに詰め込む



テンガ B



テンガ C



テンガ A

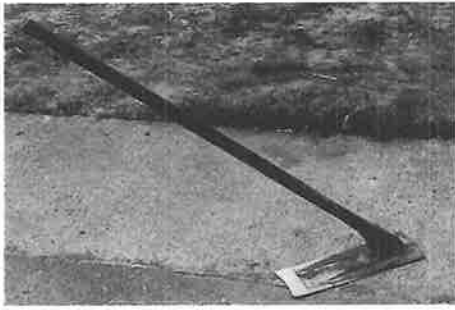
違いがある。

写真Cは、木製の床に鉄先を差し込んだ風呂鍬である。柄の取り付け方は、床を穿った穴に柄を差し込み、楔（くさび）で固定している。金鍬のテングも、風呂鍬のテングも麦や野菜などを作るときにサクキリなどに使ったという。カネのテングの方は、値段が高く重いけれど、使いやすかったという。風呂鍬の方は値段が安く、種を蒔いた後のサクに土を被せるのには軽くて便利だったが、使う前に水に半日くらい浸けておかないと柄が抜けてしまう欠点があった。

鉄先が減ってくると、カジヤにサキガケして新しい鉄先をすげてもらい、何年も使ったという。

テング（下阿内）  
柄長—一二五・五センチ 床幅—一二・三センチ 床長—三九・八センチ

最も一般的な農家の耕作具で、水田のクロヌリから畑のサクキリま



テング



テグワ

で、農作業の様々な場面で使用される。

柄と床からできており、柄は床にボルトで固定されている。床が鉄製なので金鍬と呼ばれ、刃先が減るとカジヤにサキガケして新しい刃先を取り付けてもらった。

テグワ（鳥取）

柄長—一二四・六センチ 床幅—一四・六センチ 床長—四三・三センチ

床部が木製の、いわゆる風呂鍬である。柄のことはエ、風呂部のことはザン、刃先はホサキ、木製の床に差し込んだ鉄製部分をクワサキなどと呼んでいたという。

これ一丁あれば農事万端できると言われ、麦の中耕、除草から水田のアゼづくりまで幅広く使われてきた。畑のサクキリでは、サクの床を平らにするのに都合がよかったという。

クワサキが減って使わずらくなると、近くのボウヤサンに、サキガケと言って刃替えをしてもらっていた。

床が全て鉄製の金鍬は、昭和になつてから入ってきたという。

テングワ（上細井）

柄長—一二五・九センチ 床幅—一二・一センチ 床長—四一・三センチ

柄と床の角度が小さい引き鍬で、農家の代表的な耕作具として田畑の様々な仕事に用いられている。

水田では、主にクロ塗りに用いられた。クロ塗りは、田植え前のあら掻きをする際に、水田の縁から水が漏れないよう、よくこねた泥を縁に塗り付ける作業であるが、このテングワで泥をすくって縁に塗り付け、テングワの床の後ろで塗り付けた泥を平らにする。

畑では、大根、人参などの野菜の種を蒔くためのサクを作るサクタ



テングワ

テヤ、畑の草取り、麦の土寄せなど、ほとんどの作業に使った。

昭和五十六年ごろに買ったもので、刃先が減ると荒砥で研いだが、減りが激しくなるとサキガケといって、野鍛冶のボウヤに新しいクワサキを取り付けてもらったという。

ピッチュウグワ A  
(亀泉)

柄長—一〇六・

六センチ 刃長

—三五・七セン

チ 刃幅—一



ピッチュウグワ A

七・二センチ

ピッチュウグワ B (亀泉)

柄長—一〇六センチ 刃長—二六・五センチ 刃幅—一八センチ

ふつうのテング(手鋏)のように手前に引いて使用する引き鋏と異なり、打ち下ろして土を起こす耕起用の打ち鋏として使われた鋏である。

写真の A は刃が三本、B は四本の違いがあり、柄と刃がつくる角度も若干異なっている。それぞれ三本鋏、四本鋏などと呼ばれることも

ある。刃が数本に分かれていて、柄と刃の角度が大きいため、粘土質や水分の多い土質の場所でも容易に掘り起こすことができ、田植え前の水田の耕作やクワバラウナイなど、田畑の掘り起こしに多用された。

マンノウ (亀泉)

柄長—一一二センチ 刃長—二五・七センチ 刃幅—一六・七センチ

万能などと漢字を当てる場合があるが、ピッチュウグワ(備中鋏)と同様に田畑の耕起用具である。マンノウをピッチュウグワと呼ぶところもあり、写真 A・B のピッチュウグワと大きな違いはないが、マンノウと呼ばれる鋏の

ほうが柄と刃の角度が若干大きい。

ピッチュウマンノウ  
(鳥取)

計測なし

水田の土をすき起こしたり、馬鈴薯や甘藷などの芋掘りをしたりするのに用いた深耕用の打ち鋏である。

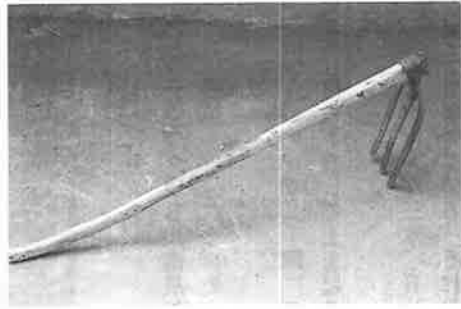
春の田植え前のすき起こしや秋の麦蒔き前の田のすき起こしなどで、牛馬のいない規模の小さい農家ではピッチュウマンノウを使っ



ピッチュウグワ B

マンノウ





ビッチュウマンノウ

て人手ですき起こした。また、牛馬ですき起こした後に残る四隅の部分もこれで掘った。

トウグワ (上細井)

柄長一九〇・二センチ 刃長

一三一・六センチ 刃幅一

四・六センチ

土を掘り起こすための鋤で、刃が重く、床と柄の角度が大きい打ち鋤である。

主に開墾用として、畑に生えた篠を掘ったり、桑の古株を掘り起こしたりするのに使ったという。



グワ

重くて柄の角度があるので深く掘れた。

スキ (田口)

柄長一八〇・二

センチ 風呂部

幅一四・一セ

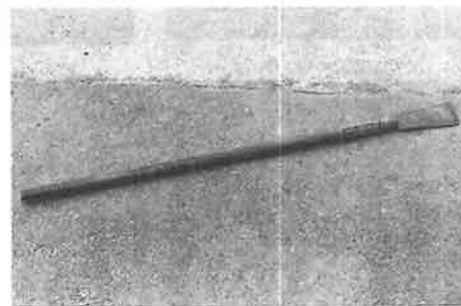
ンチ 風呂部長一三六センチ

写真の道具をどのように呼んでいたかは分からないが、いわゆるスキである。

スキの場合は、牛馬用の犁と人力による鋤があり、このうち鋤はエングなどと呼ばれるくの字型の大型のものと、スコップ状の小型のものでいわゆる踏み鋤がある。写真のスキは、柄と風呂の部分が直線の



ク



キ

踏み鋤で、「農具便利論」には、関東鋤などといわれる形態のもがあった。

用途は、粘土質の土地や水分の多い土地で溝切りや土さらいに用いられる。場所によって水田の水を通す溝を切ったり、水田のクロつくり、池の泥さらい、ごぼう掘りなどにも使われる。

柄と風呂は一木で作られ、木製の風呂の部分に鋤先をはめこんでいる。

トロホリ (下阿内)

全長一一二・八センチ 刃幅一七・二センチ 刃長一一六・

二センチ

トロは、ジネンジョと呼ばれる山芋のことで、トロホリは山芋を掘るための道具である。

トロは、酒のつまみでそのまま食べたり、ご飯にかけて食べたりする他、ソバのつなぎにもしたので、よく採りに行ったという。二年ぐ

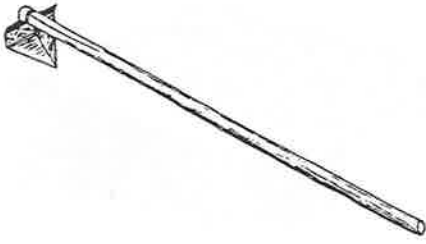
らしいものが太くて掘りやすい。暮れの頃、トロの葉が全部落ちきらないうちに採りに行くが、見つけにくいので夏の盛りに麦の種を蒔いておいて成長した麦の青い茎を目印にすることもあったという。スコップで周りを掘った後、芋を傷つけないようトロホリを垂直に立て穴の周りの土を落とす。土はスコップで掘り上げる。これを二〜三回繰り返してトロを掘る。畑で掘る時はスコップだけでやるが、山や土手のトロ掘りは、地面が固いのでトロホリを使った。

マネヒキ (総社)

柄長—一二〇・七センチ 刃幅—一七センチ 刃高さ—一七・五センチ

マネヒキのマネは、麦蒔きするときのすじのことをいい、文字通り畑の中をこの道具で引っ張ってすじをつくった。これをマネを立てるとか、ウネマを立てるなどと言った。

マネを立てるには、マネヒキの柄を両手でつかみ、刃を地面に立て



マネヒキ

て後退する。すじがまっすぐになるように、畑の端から端に縄を張り、この縄に沿って後退した。一本マネを立てると、縄を張り替え、再び同じ作業を繰り返す。縄を張り替えることをナワヒキなどと言った。

マネヒキ (端気)

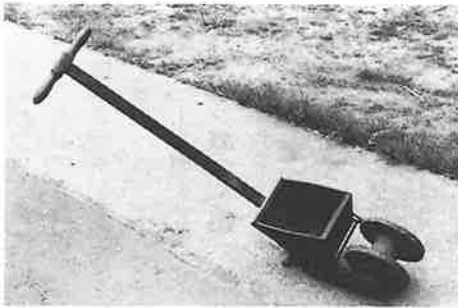
柄長—一二三・九センチ  
刃幅—一四・八センチ  
刃高さ—一九・五センチ  
種蒔き用のサクを立てるための

道具で、麦のサク間に大豆や胡麻、小豆などを蒔くためのサクをこれで作ったという。

麦が成長すると、そのサク間を有効に利用するために、小豆などの別の種を蒔いた。この種蒔き用のサクを立てるのに、テグワでは麦がじゃまになって使えないため、引っ張るだけでサクが立てられるマネヒキを利用したという。

タネマキ (下阿内)

全長—一二一・五センチ 幅—二七・三センチ  
手押し車形式の麦の播種用具である。



タネマキ

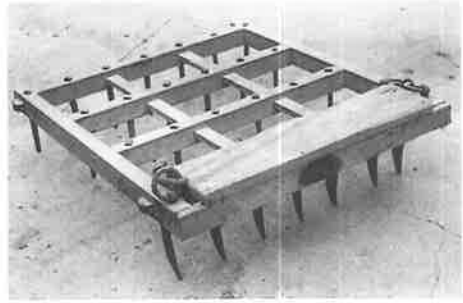
箱の中に麦種を入れ、畑のサクの中を押して転がすと、箱の下から麦種がこぼれ落ちる仕組みである。蒔く麦種の量も調節できる。これが使われる以前は、手で蒔いていた。モグリマキといって、稲の収穫後の株間にサクを立て、これで麦蒔きする方法もあった。

ズリマンガ (荻窪)

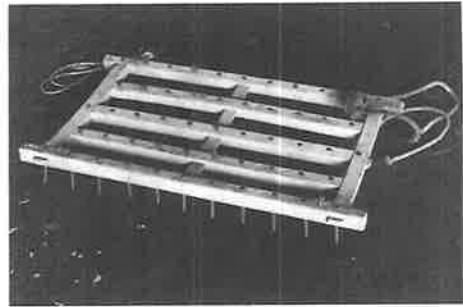
幅—九五センチ 奥行—一九・四センチ  
高さ—二六・三センチ



マネヒキ



ズリマンガ



ツナップリマンガ

このズリマンガは、秋の稲刈りが終わった水田の麦蒔き前に使用したという。馬を使ってスキで耕起した後の、大きな土くれを細かく砕くための碎土用具である。ほぼ正方形の井桁に組んだ木枠に鉄の歯を取り付けたもので、これを馬のクビキから結んだ縄に取り付け引つ張らせた。

昭和三十年代の前半まではこのズリマンガで整地したという。

ツナップリマンガ (下新田)

幅一九〇・四センチ 奥行一五五センチ 歯長一六・二センチ

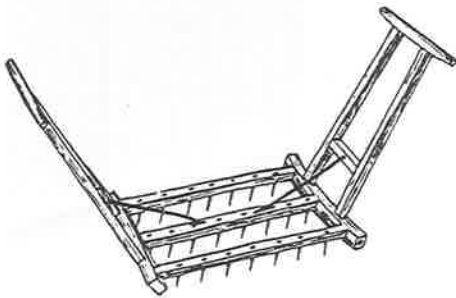
フリマンガともいわれる田畑の碎土・整地用具である。

水田の裏作で表を作るときに、スキオコシた土の塊をズリマンガで一度こなしした後、さらに小さな塊を砕いたり、平らに整地したりするのに用いられた。

ツナップリマンガの両端に綱に取り付け、その綱を持って二人で呼吸を合わせて左右に振りながら土の塊などを細かくする。二人のバラ



フリマンガ



フリマンガ

ンスが合わないと性情がつかず、動きがぎくしゃくして地面を平らにならすことができなかつたという。

整地は二回やり、初めをアラッコナシ(一番コナシ)、二回目を二番コナシといった。二人で一日に二反はできたという。耕運機が出てくる昭和三十年頃まで使っていたという。

フリマンガ (端気)

幅一六七センチ 奥行一三四・四センチ 高さ一九・五センチ  
牛馬で整地した後の田には、まだ粗い土塊や稲株物が残っているの  
で、これをさらに細かく平らにし稲株物を取り除いて、麦蒔きなどが  
しやすいように整地しなければならぬ。

写真のフリマンガはフウフマンガなどとも呼ばれ、この第二次の土こなしに使われる整地用具である。フウフマンガは、夫婦で使うことが多いことからの名前であるという。両端の綱を持ち、呼吸を合わせながら左右に振りながら、蟹の横歩きのように横に進んでいった。



フリマンガ (総社)

幅一・二九センチ 奥行一四三・五センチ 高さ一七〇・五センチ

二人で使う田畑の整地用具である。

二毛作の総社では、稲作後の水田に麦を蒔いた。十月末から十一月上旬にかけてエンガで田をウナツタ(耕起)した後(牛馬を使わない家ではエンガで田を起こしたという)、フリマンガで土を細かく砕いて整地した。これをジゴシラエという。

フリマンガでジゴシラエをするときは、夫婦でエンガの把手のトリイを持って調子を合わせて左右に振りながら移動する。一反のジゴシラエするのに、半日から一日かかったという。

フリマンガ (端気)

計測なし



フリマンガ

フウフマンガと同様に、麦蒔き前の整地用のマンガであるが、フウフマンガが二人用なのに対して、これは一人用である。歯が乱杭状に交互に打ち付けられており、把手を両手で握って、左右に振りながら土塊を砕いたり、地面を平らにしたりする。

マンガ (端気)

幅一・九二センチ 高さ一七三・八センチ

田畑の整地用具で、犁がけして起こした田畑の土塊を細かくしたり



マンガ

平らにしたりするために、これに牛に引かせた。この作業の後、さらによく整地するためにフリマンガでこなした。

歯の短いものは夏マンガといい、主にしろ掻きなどで水田をならし、歯の長いものは秋マンガといって、主に麦づくりのために畑をならすというように、歯の長さによって使い分けていたという。

マンガ (萩窪)

幅一・九一・三センチ 高さ

一七二・五センチ 奥行一三四センチ

水田の田植え前に行われるシロカキなどで使われる牛馬耕用の水田整地用具である。牛馬に取り付けたクビキから引いた繩を、マンガの両端の把手に結び付けて水田の中を引かせる。写真は、把手が木製であるが、鉄製の鉤を取り付けたものもある。

シロカキをする際に、マンガを押さえて操る人をマンガオシと呼び、牛馬を引く人をハナドリなどといったという。また、シロカキは、水田に水を入れて最初に掻くのがヒトクワ、次に掻く方向を変えて二回目に掻くのがフタクワ、最後をミクワな



マンガ

どといったという。

ヒトリマンガ(トリー  
イマンガ)(下新田)

幅一五七・二セ

ンチ 奥行

一四・九センチ

齒長一三・六セ

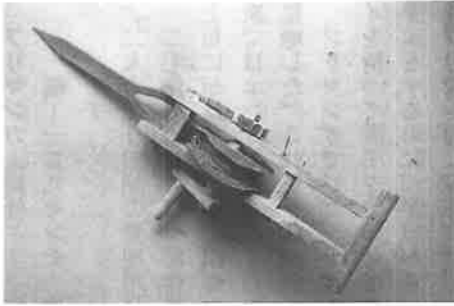
ンチ



ヒトリマンガ

ツナツプリマンガと同様に、碎土・整地用具で一人用である。鳥居の形をしているところからトリーイマンガとも言ったという。

コツのいるツナツプリマンガと比べると、初心者でも使えた。ツナツプリマンガのように、広い面積をやるのではなく、相手のいないときに、田畑の隅の手直しをするのに用いられたという。



ハリヅナ

トリーと呼ばれる把手の部分をつかんで左右に振りながら整地する。齒のことはマンガツコなどとい

い、マンガツコは台部に交互に斜めに打ち付けられている。マンガが左右に振られると、カブツはこの齒で弾き飛ばされた。

ハリヅナ(田口)

全長一七四・三センチ

幅一八・八センチ

田植えの際に、苗を植える位置や幅を決めるための田植え用具である。

ハリヅナそのものは、巻いてある

針金自体のことをいうが、これには弾力性のある丈夫な針金が使われており、一尺ほどの間隔に赤い印が付いている。ハリヅナを巻く車を固定している木枠の把手や齒車は木製で、齒車を止めるストッパーも木製である。

ハリヅナを張る人をツナハリ、田植えの人をスウトメなどと呼んだという。

まず、水田の畔に金属性の足を挿してハリヅナを二人で張り渡す。これをオヤヅナといい、ツナの赤い印に沿ってナカウエをする。その後、シャクボウで苗四株くらいの間隔を測ってハリヅナを移動し、再びナカウエをする。こうやって苗を植える位置や間隔が決まってから田植えをしたという。

シャクナワマキ(亀泉)

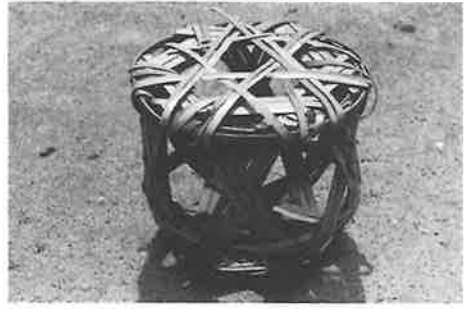
全長一四三センチ幅一八センチ



シャクナワマキ

田植えの際には、直線に一定の間隔ごとに苗を植えていく。田植え繩は、水田の端から端まで張り渡して、田植えの直線と苗の間隔の目印にするが、亀泉ではこれをシャクナワといい、シャクナワマキはこの繩を巻いておくための道具である。今では田植え機が普及したので、機械の入らない手植えの水田ぐらいしか使われていないが、かつては田植えに欠かせないものであった。

シャクナワには金属性の弾力のある鉄線が使われているが、所によつてはタウエナワなどと呼ばれる、ま



ナエトリダイ

たシャクナワのナワにもみられるように、かつては縄を使っていた。苗と苗の間隔は一尺ほどで、縄を使っていた頃は、その縄を巻き付けるシャクボウで間隔を測っていた。

ナエトリダイ (下阿内)

径一・二九・五センチ 高さ一・三八センチ

稲の苗を育てるナエマで、苗を取る作業の腰掛用に使ったものである。

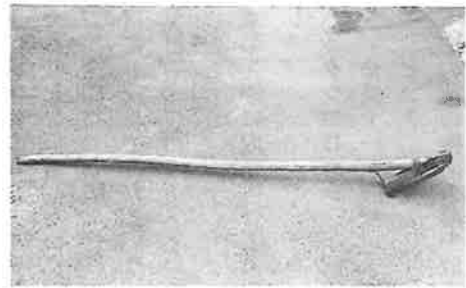
ナエトリダイに座って苗を取るが、すぐ前の苗を取り終わるとこれをずらして前進した。  
体重がかかるので、三本の竹を並べて六つ目編みに編んだ丈夫な作りになっている。

## (二) 管理用具

タノクサトリキ (亀泉)

柄長一・八四センチ 除草部幅一三〇・二センチ 除草部長さ一・二・五センチ

所によってはタコスリなどとも呼ばれるが、ハッタンドリと同様に水田の除草具で、ハッタンドリよりも前に使用されていた道具である。柄が大変長いので、使用するときには、草取りをする右側の株間を歩きながら、柄を脇に抱えるようにして前後に動かしながら水田の中を移動したという。



タノクサトリキ

草取りの部分は、鉄の歯が鋸状になっており、これを水田の底に押しつけるようにしてこする。

タノクサトリ (総社)

柄長一・六一センチ 草除部幅一・一七センチ 草除部幅一・三二センチ

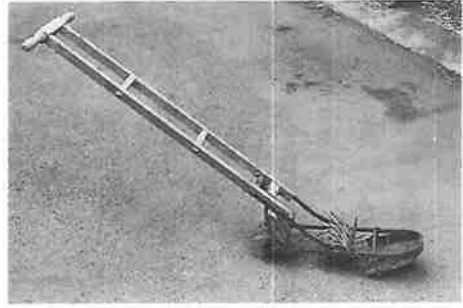
水田の株間の草をとるための除草具である。

長い柄の先に舟型の枠を取り付け、枠に横木を渡して、その裏に金属の歯を打ち付けたもので、これで株間の水田の底をこすりつけながら前進する。

八寸く九寸ある株間の水田の縦と横を十文字にかけて除草したが、ハッタンドリの車付きの道具と比べると滑りが悪かったので、田植え後十日くらいの一草の草の生え始めのころに使ったという。力とコツが必要なので子供にはさせられなかった。  
ハッタンドリ (亀泉)



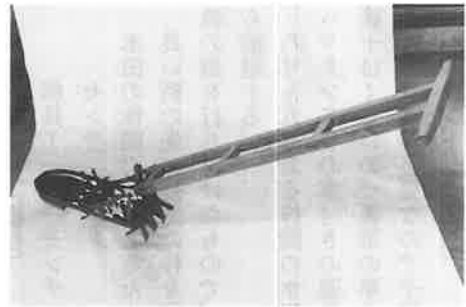
タノクサトリ



ハッタンドリ



ハッタンドリ



ハッタンドリ

柄長一〇〇センチ 草除部  
幅一五・五センチ 草除部  
幅一三二・五センチ

水田の中耕をしながら除草する除草具で、車が付いているのでタノクサトリよりも使いやすく、婦人や子供でも扱えたという。

田植え後、一週間前後に行う一番草や、八月下旬頃に行う二番草の除草に使った。三番草は、道具を使わずに稗抜きだけを行った。

ハッタンドリ(上細井)

柄長一〇〇・二センチ 除草部幅一六・八センチ 除草部

長一五四センチ

水田の除草具で、正条植えの水田の株間を転がして土を掻き回し、雑草を掻きとったり、浮き草にしたりして除草する。

写真のハッタンドリは、鉄の歯の付いた車が二つついていて、これが使われるようになったのは戦後だという。それ以前では、昭和十五・十六年頃に一つ車のものでしたが、歯が弱くとれてしまったという。

株に沿って縦に平行に転がし、全部が終わったら次に横をやるというように、水田を十文字に転がして除草する。ハッタンドリの除草が終わったら、手で浮き草を取った。ハッタンドリとはいうが、十文字にやるとせいぜい二反くらいだったという。

除草は、田植えが終わって一か月ごろに行うのが一番草、真夏に行うのが二番草で、大体二番草で終わりにした。

ハッタンドリ(総社)

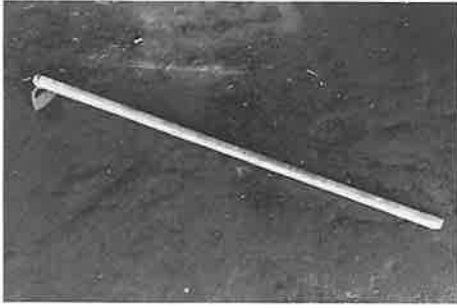
水田の中を転がして、株間に生えた雑草を取り除く除草具。今は使わないが、かつては田の草取りでは欠かせなかった。苗を植えて二週間たった頃に行う一番草では、これで水田の中を転がした。一日に五反はできたという。夏に行う二番草や、十月ごろの適当な頃を見計らって行うトメといわれる三番草は、主に稗抜きの田の草取りだったという。

車の先端に取り付けてある金属の板の部分は、泥除けの働きをするという。

ハタンコロガシ(下阿内)

全長一四四センチ 幅一三九・三センチ 除草部長さ一五五センチ

水田の苗の株間の草を取るための除草具で、タツコロガシとも呼ば



クサカキ

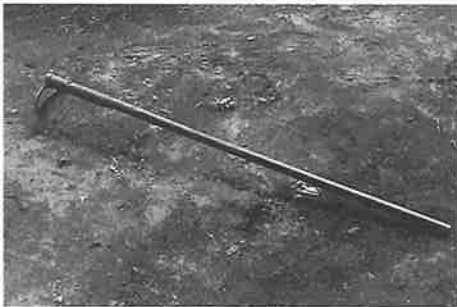
畑の除草具で、麦畑などの草を削り取るのに使った。  
サク蒔きした麦畑では、一尺二寸  
一尺八寸のサクとサクの間の草を

クサカキ(下新田)  
柄長 一二五・七センチ 床  
幅 一一・二センチ 床長  
一六・九センチ



ハッタンコロガシ

れる。腕のいい人は一日八反の仕事  
ができると言われたという。  
水田の苗の株間は縦が九寸、横が  
八寸あり、田の草取りでは、この株  
間をハッタンコロガシで縦に全部転  
がした後、横に転がす。これを十文  
字に転がすといい、縦に転がすこと  
を一番、横に転がすことを二番と  
言った。このハッタンコロガシの田  
の草取りは、除草だけでなく、苗の  
根元に空気を入れる役目もあった。  
転がし方は、前後に動かしながら  
前進する。戻す動きをしないと、齒  
に草が噛んでしまうからである。こ  
のハッタンコロガシの除草の後、手  
で草取りする。カキツメを指にはめ  
て、根っこの周りの草を掻き回して  
取ったという。



クサカキ

畑の除草具で、アサクワとも呼ば  
れる。  
茄子、胡瓜、葱、枝豆、キャベツ、  
白菜、人参、大根など諸々の作物の  
ウネマに生えた草を削り取る。  
写真のクサカキは、重さを軽くす  
るために床に窓をきった窓鉞になっ  
ているが、同じクサカキでも窓のな

クサカキ(総社)  
柄長 一二七・五センチ 床  
幅 一一・五センチ 床長  
二・五センチ



クサカキ

削り、ケタ蒔きした麦畑では、七寸  
一八寸の株と株の間の株間の草を  
削った。  
クサカキ(鳥取)  
柄長 一三四・二センチ 刃  
幅 一〇・八センチ 刃長さ  
一〇・四センチ

いものもあつた。

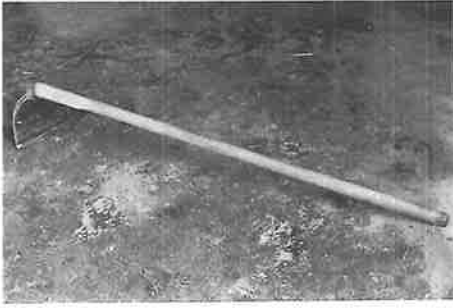
ウネとは、種を蒔いた後に土を寄せて、土がやや山盛りになつた部分のことをいい、ウネマとは、そのウネとウネの間のことである。ウネマはクサカキで除草するが、株と株の間のカブマは手で草をむしつて取つた。クサカキで削つた草は、削つたままにしておく、天気がよければ自然に枯れてしまつたという。

アサグワ (鳥取)

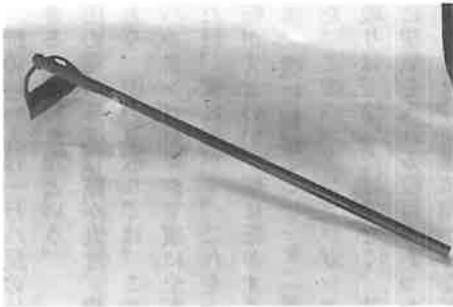
柄長—一二一・五センチ 床幅—二三・六センチ 床長—一三・四センチ

クサカキ、アサカキなどとも呼ばれ、畑の整地後一週間ほどで生える草を退治するのに使つたという。この除草具が使われていた頃に、「精農は草を見ずして草を取る。中農は草を見てから草を取る。怠農は草を見て草を取らず。」のような諺があつたという。

アサクワ (上細井)



アサグワ



アサクワ

柄長—一二五・八センチ 床幅—二四センチ 床長—一三・四センチ

畑の草掻き用の除草具で、金鋏に窓が切られた窓鋏である。

桑畑のカブツの間の草取りや、麦畑・野菜畑などに生えた雑草を削り取るのに用いたという。アサクワで削つた草が乾く頃になつてから、ムツゴで掻き集めた。

ヨツゴA (総社)

柄長—一二四センチ 歯幅—二一・八センチ 歯高さ—九・二センチ

ヨツゴB (総社)

柄長—一二四センチ 歯幅—二二センチ 歯高さ—五・三センチ

ヨツゴC (総社)

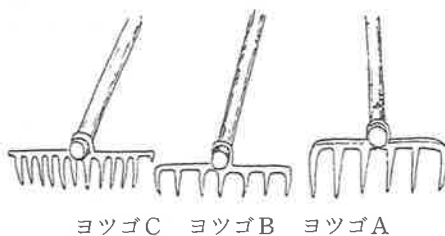
柄長—一一九センチ 歯幅—二二・五センチ 歯高さ—六・五センチ

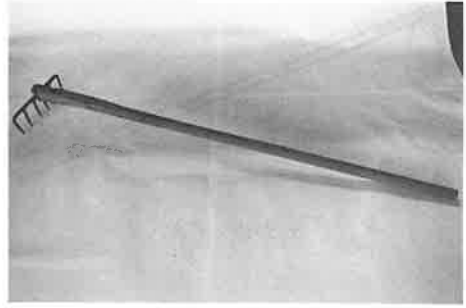
田畑を平らにならして整地したり、草やごみなどを掻き寄せたりする道具で、ムツゴなどとも呼ばれる。

平らにならすことをジゴシラエといい、田

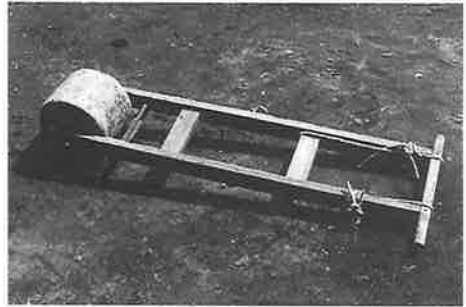
では、シロカキをした後の凸凹を平らにならすのにヨツゴを使つたという。畑の場合は、麦や野菜を蒔く前のジゴシラエに使つたが、フリマンガの代用にすることもあり、これで、石や土の塊であるコゴリをとつて平らにした。また、草の生え始めのときに歯の細かいヨツゴでメクラジョソウするなど、除草の役目ももつていたという。

図のように歯の本数や隙間、高さなどが違ういくつかの種類があつた。





ムツゴ



ムギフミローラー

ムツゴ (上細井)

柄長一・二〇・三センチ 歯幅一・二三センチ 歯高さ一・七・五センチ

アサクワなどで削り取った雑草を櫛の歯の部分で掻き集めたり、麦蒔きのときなどに畑の土を平らにならしたりするための道具である。鉄製の歯が六本あるところから、ムツゴと呼ばれた。

アサクワ後の雑草集めだけでなく、庭のごみや畑のごみ集めにも使ったという。アサクワで削った草は、根に付いた土がよく落ちるよう、少しほおっておいてからこれで集める。集めた草は、畑の低くなつたところに入れたり、堆肥に入れて腐らせたりしたという。

ムギフミローラー (総社)

全長一・一四・五センチ 幅一・四六・四センチ ローラー幅一・八・六センチ ローラー径一・二二・三センチ

麦づくりでは、根の張りをよくし、茎が倒れないようにするために

麦踏みをするが、写真のムギフミローラーは、昭和に入ってから購入し、麦踏み用として使ってきたという。それまでは、足の麦踏みだった。今でも、小豆を蒔いた後の土を固めるのに使っているという。寒いときに麦踏みをする時、よく根が張るといわれ、暮から三月にかけて、一カ月に一度くらいは、これで麦踏みしたという。一日一〜二反くらいの作業で、把手をもつて前方に押しながらんべんなく圧力をかけた。

ツマジリザマ (下阿内)

径一四七・八センチ 深さ一・二七センチ

麦蒔きのサクに肥料を入れるための施肥用具である。

麦蒔きの肥料には、よくキリカエして完熟した堆肥を使った。リヤカーに堆肥を入れて畑まで運んだが、その前は馬を使ってビクに入れて運んだという。ビクで運んだ堆肥は、畑の中に落としておき、ツマジリザマに取っては旋肥することを繰り返した。

ツマジリザマにかけた縄を首に巻き、ザマを少し傾けながら、手で堆肥をつまんで立てたサクの中に入れた。この動作をツマジルという。

堆肥を運ぶのは男の仕事だったが、畑に肥料を入れるのは女の仕事だった。

写真のツマジリザマは、ザル編みと六つ目のカゴ編みを組み合わせたいわゆるザマカゴで、丈夫なつくりになっている。

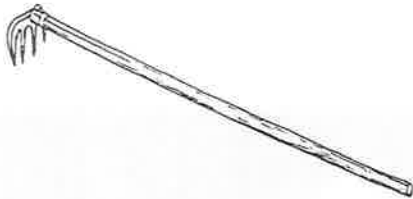
ツマジリザマ (鳥取)



ツマジリザマ



カナクマデA



カナクマデB

牛小屋や馬小屋に麦藁を入れ、牛馬に踏ませたものを堆肥

牛馬の小屋の掃除や堆肥の切り返しなどに使う道具で、図は爪が二本と四本であるが、三本の爪のクマデもある。



ツマザマ

径一四五センチ 深さ一二四センチ

施肥用のザマで、写真のベルトを肩にかけ、中の肥料をつまんで麦のサクに入れていった。

カナクマデA (総社)

柄長一一二センチ 爪幅

一一二・一センチ 爪高さ

一一四・五センチ

カナクマデB

柄長一一九センチ 爪幅

一一三・二センチ 爪高さ

一六・五センチ

場の堆肥にした。小屋の掃除は一月に一回は行われた。牛馬を小屋の外に出し、中の踏まれた藁をカナクマデで掻き出したという。堆肥場の堆肥は、切り返しと違って、厚く積まれた堆肥をクマデで崩し、再び元の山にする作業をした。この作業は、藁などを空気に触れさせてよく腐らせるために行う。

ザル (下新田)

径一四五・八センチ 深さ一二六・五センチ

麦の病気の生臭黒穂病(なまぐさくろほぼう)を防ぐための温湯浸法(おんとうしんぼう)の際に、麦種を入れる容器として使ったザルである。

温湯浸法は、稲刈りが始まる前に、近所の農家が集まって共同で行った。風呂釜を四〜五个集めて湯を沸かし、麦種を入れたザルを五分間浸ける。次に、石灰溶合剤の入った湯に五分間浸ける。ついで、冷たい川の水に入れゴシゴシ掻き回して急に冷やす。この後、日陰干しをする。

写真のザルはこの作業で使ったものであるが、一斗の麦を入れ湯や水に浸けると重くなるので、ザル編みとカゴ編みを組み合わせた丈夫なつくりにしており、縁も持ちやすいように縁編みを太くしている。牛馬耕の消滅で、ザルも使われなくなった。



ザル



(三) 収穫・調整用具

イネカリガマ(上細井)

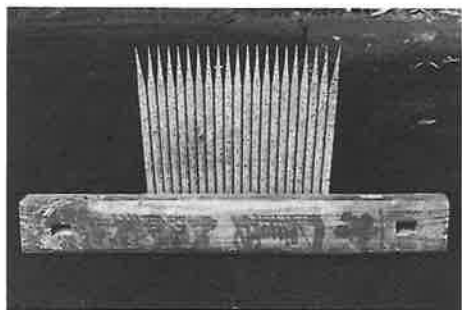
柄長―一九・七センチ 刃長―二・八センチ 刃幅―一七センチ



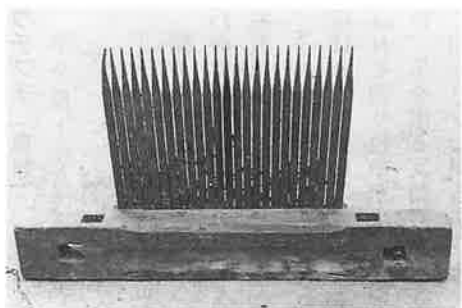
イネカリガマ

稲刈り機が入る前の手刈りの稲刈りの際に使った鋸歯の鎌であるが、今でも機械が残した隅の稲はこれで刈るという。

手刈りの時は、家中でイネカリガマを持って稲刈りをしたものだ



センバ



カナゴキ

という。稲株を片手でつかんで、これで引くように刈り取る。

センバ(川曲)

幅―六〇センチ 高さ―二八・五センチ

稲の脱穀用の千歯抜きで、稲の穂を歯の間に引っかけて、手前に引いて穂を抜き落とす。

中央の歯に製作者名や屋号、製作場所などが刻まれていることが多いが、写真のセンバにも二十三本の中央の十一本目の歯に

「駒形」「カ」羽鳥作 大正九年」

の文字の該印が見られる。

カナゴキ(荻窪)

幅―五七センチ 高さ―三〇・四センチ



カナゴキ

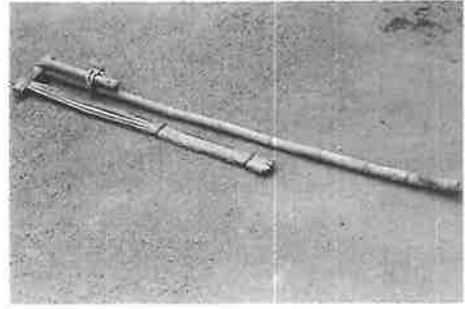
いわゆる千歯こきと呼ばれる稲用の脱穀用具である。

台部のほぞ穴四か所に木の棒を差し込み、歯を斜めになるように設置する。ムシロを敷いた上などで、籾の歯

のようになっている鉄の歯に稲束を引っ掛け、手前に引くことで実を抜き落とす。

江戸時代には脱穀にコキバシも使われていた。またこの道具以後は、足踏み脱穀機、さらには発動機や耕運機の動力を使った脱穀機に変わっていった。

写真のカナゴキの歯は二十五本あり、中心の十三本目の歯には、「大正四年駒形「カ作」の刻印が見られる。



ボウチブチ

ボウチブチ (亀泉)

竿全長一六四センチ 幅  
 一二センチ 回転棒全長  
 一一一・五センチ 回転棒  
 幅一六・四センチ

いわゆる唐竿(からさお)といわれる脱穀用具であるが、県内ではクルリ、クルリボウ、ボウチボウなどとも呼ばれる。竹の竿の先にクルリと呼ばれる割り竹や椶などの棒を取り付け、竿を振る反動でクルリを調子よく回転させながら脱穀する。写真

真のボウチブチは、竿が竹、クルリが割り竹でできている。主に麦の脱穀に使われるが、大豆や小豆などの豆類の脱穀にも使用された。

小麦の脱穀はサナとかムギブチダイと呼ばれる脱穀具でやったが、大麦の場合は芒(のぎ)が取れにくいので、数人で大麦を取り囲むようにして調子を合わせながら脱穀をボウチブチで行った。

ボウウチボウ(端気)

竿全長一八  
 五・六センチ  
 幅一八センチ  
 回転棒全長一一  
 一センチ 回  
 転棒幅一六・四  
 センチ



ボウウチボウ

稲や麦の脱穀した後の芒(のぎ)を取るための穂打ちや豆類などの脱穀に用いたという。

大麦の場合は、収穫したものをカナゴキで脱穀し、この後、庭に広げて麦打ちを行った。これをムギボウチといい、ボウチボウを使って家中が交替で一日中ぶったものだという。ムギボウチが終わると、トウミにかけて実とゴミとを選別し、ムシロに広げて乾燥させた後、俵に詰めて保存した。

トウミA(嶺)

幅一五一C 奥行  
 一三四・四センチ 高  
 さ一〇七・九センチ

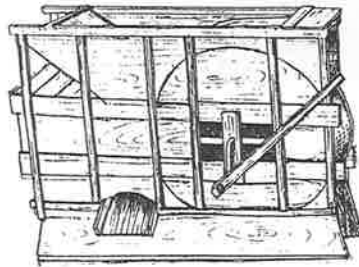
トウミB(嶺)

幅一九七センチ 奥行  
 一五六センチ 高さ一一  
 六・二センチ

脱穀後の麦や米などの穀物の中に混じった藁屑やごみなどを取り除き、穀物の粒を精粒と屑粒に選り分けるための選別用具である。また、籾摺り後の玄米に混じった籾殻を取り除くのにも用いられる。上部の漏斗部に穀物を入れ、円形の風胴部に取り付けた握り手を回すと、風胴部の中の扇が回転し、この風力



トウミB



トウミA

よって、重い実が図下部の一番口から、軽い実は反対側の二番口から流れ出、さらに藁屑やごみは左側の吐き出し口から吹き飛ばされる。トウミBよりAの方が古く、風胴部の扇を取り付ける軸に鉄棒を使っている他は、全て杉板製である。穀物を流し込む漏斗部は本体に組み込まれており、左上の板を手でスライドさせながら、風選する穀物の量を調節する。トウミBは、風胴部が金属製で、握り手もハンドル式、他はベニヤの厚板やラワン材で作られている。漏斗部は取り外しができ、漏斗部の中の穀物の量は、漏斗部のすぐ下の小さな円形のハンドルで調節できる。



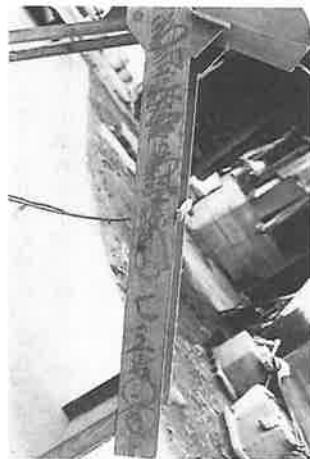
マンゴク



マンゴク

マンゴク(荻窪)  
マンゴクドオシ  
とかセンゴクドオシ  
とか呼ばれる穀物の脱穀後の選別用具である。

穀物を流し込む上部の漏斗部と、斜めに穀物が流れ落ちる間に粃や米などを選別する篩部から構成された単純なつくりをしている。篩部に張られた篩の目の大きさは何種類かあり、選別の用途に



よって使い分けられた。

脱穀された粃は、ドウスなどで粃摺りをした後、トウミで玄米と粃穀に選別されるが、この玄米の中にはまだ粃が混じっているの  
で、さらにマンゴクドオシにかけ、完全に玄米と粃に分ける。

写真の漏斗部に、  
「大正八年  
拾式月新調」  
の墨書が見られる。



ミ(総社)

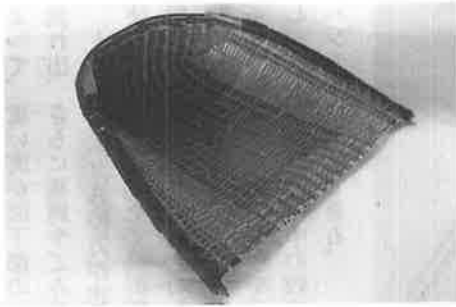
幅一六三センチ 奥行一五〇センチ

ミの使われる場面は、米や麦を脱穀したとき、トマスなどで計るとき、俵に詰めるときなどである。

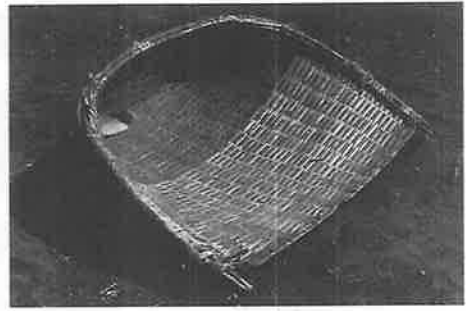
写真のミは、荒物屋で買ってきたものだが、昭和五十年頃までは、春先や初秋にミナオシがやって来て、ミの縁を直したり、新しいミを作ってもらったりしていた。

ミ(下新田)

幅一五七・五センチ 奥行一五〇センチ 深さ一一五・五センチ



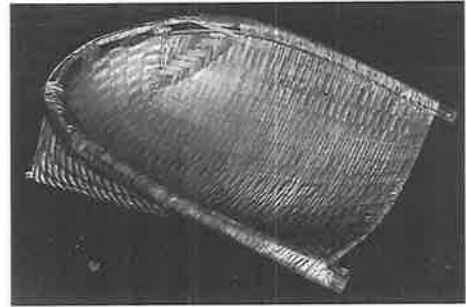
ミ



ミ



レイキ



ミ

脱穀後の穀物の中に混じるごみや皮などを吹き飛ばして取り除くための脱穀・調整用具である。また、米や麦、大豆などを運ぶのにも用いられた。ミの中はざる編みで細かく編み、縁には竹を回しその上を植物の皮で巻いて、丈夫で弾力性のあるつくりになっている。

ミ(上細井)

幅一六八・五センチ 奥行一五九センチ

米、麦などの穀物のごみや皮などを吹き飛ばして実を選り分けたり、穀物を他の入れ物に移したり、運んだりするための脱穀・調整用具の一つである。

写真のミは、米を俵に詰めたり、麦を袋に詰めたりするのに使ったという。また、精米機から白米を運ぶにも使ったという。

レイキ(上細井)

柄長一八八・三センチ 掻き出し部幅一二・五センチ 掻き出

し部長一一センチ

脱穀が終わった後の小麦は、ムシロを庭に敷いて、天日で乾燥させるが、写真のレイキはムシロの上の小麦を平らにならしたり、平均的に乾燥するよう小麦を掻き回したりするのに用いたという。

今は、乾燥機で乾燥させるが、それでも乾燥機の中の小麦の乾燥をまんべんなくさせるために、これで掻き回すという。

手作りの素朴な木製の道具で、昭和五十年頃に製作したものという。

スナブルイ(総社)

径一三五・六センチ 深さ一九・五センチ

チュウブルイ

径一三六・三センチ 深さ一七センチ

ウワブルイ

径一三六センチ 深さ一九・二センチ



スナブレイ



チュウブレイ

穀物の粒を選別する調製用具で、三つのフルイとも周囲を曲げ物で作られ、底に金網を張っている。金網の目は、スナブレイ、チュウブレイ、ウワブレイの順で細くなる。米や麦などを同じ大きさの粒に選別したり、ごみと実を選別したりするのに用いた。用途によって目の異なるフルイを使い分けた。

米・麦の選別の他に、葱の種を取るときにも使った。六月の上旬、葱坊主の実がはねてこぼれてくるようになったものを収穫し、よく乾燥させた後、まずスナブレイにかける。手で揉みながらフルイにかけると、実が落ちてカスだけ残る。次に、落ちた実をチュウブレイにかけると、細かいアイ（軽い実）が落ちる。それをウワブレイにかけた後、トウミでトウミセンすると、きれいに種が取れた。

スナブレイの曲げ物の胴に  
「北軽井澤上毛農工仕」  
ウワブレイの胴に

「昭和三十五年七月二十八日新 関口良作」  
の墨書が見られる。

スナブレイ（上細井）

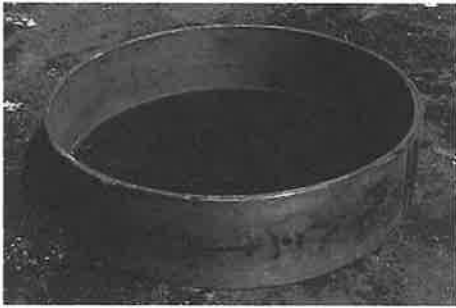
径一三五・八センチ 深さ一九・二センチ

脱穀した穀類のうち、小麦は庭で三日ほど乾燥させた後、トウミで吹いて袋に入れた。粃は乾燥させた後、スルスで粃摺りしマンゴクで仕上げて俵に入れた。

写真のスナブレイは、小麦や粃をムシロで乾燥させた後に入る砂やごみを取り除くための選別の用具である。

周囲が曲げ物の丸型のフルイで、網の目の大きさにより、大ブレイ、中ブレイ、小ブレイの三種類があったという。大ブレイは、小麦を中に入れてふるって大きなごみを取り、中ブレイは小麦や粃をふるって小さなごみや砂を取り除いた。

カイリヨウブレイ（亀泉）



ウワブレイ

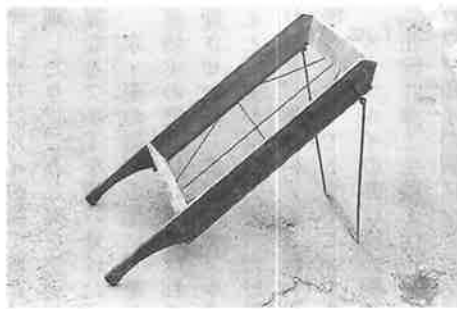


スナブレイ



キ ネ

柄長一六五センチ 杵部長  
 一一三・二センチ 杵部長  
 一五三・五センチ  
 檜製の横杵で、玄米から白米にする精白に用いたキネであるが、千本杵と同様に餅搗きにも利用したという。



カイリヨウブリ

全長一一〇センチ 幅一五  
 六・二センチ 深さ一〇・  
 八センチ  
 米や麦、あるいは豆類などの選別に使われた穀類の調製用具である。フルイには、周囲を曲げ物で丸く囲んで篩部を細かい金網で構成したものや周囲も篩部も竹で構成したものなどがあるが、写真のフルイは、周囲を厚板で囲んだ方形をしており、篩部はやや粗目の金網で構成している。

このカイリヨウブリは、金属の足を支点にして、手前の把手をもって前後に揺き振り、脱穀後の麦と穂首、粃と藁くずなどを選別した。このような形式のフルイは、ジャリの選別作業にも使われている。

キネ (総社)



ザブトン



ウマノアシアライオケ

今は精米所にだして精白するが、かつては自分の家で精白もした。ボウヤに作ってもらった檜製のウスに玄米を入れ、キネで搗いて玄米の殻を取り白米にした。重いキネなので、精白のときも、一人で搗いたという。

餅搗きでは、暮、大正月、小正月、三月の春祭りの際のモチ、十月の農休みのアブラモチ (アンピン) を作るときに活躍したという。

(四) その他農耕に関わる用具

ザブトン (下新田)  
 幅一五二センチ 奥行一五六センチ  
 農作業用に作ったザブトンで、中の綿は藪のケバ取りで出たケバを入れていた。

俵編みなどの座つてする仕事の際に尻に敷いたものという。

ウマノアシアライオケ (荻窪)

長径一六〇センチ 短径一四六センチ 深さ一八・五センチ  
 オケの呼び名がついているが、形態上はタライの仲間に入り、前橋市今井町あたりでは、ソソグライなどとも言っていた（前橋市城南地区の民俗）。

名前が示すように、水田のシロカキなどで汚れた馬の足を洗うための馬の手入れ用具である。タライの中に水や湯を張り、馬の足を入れて藁やタワシなどで足をこすり、汚れを落とした。

形は、縁が小判型をしており、底は浅く、馬の足を入れるのに都合よくできている。ウマノアシアライオケとしては、小振りであり、これよりもはるかに大きいものがある。

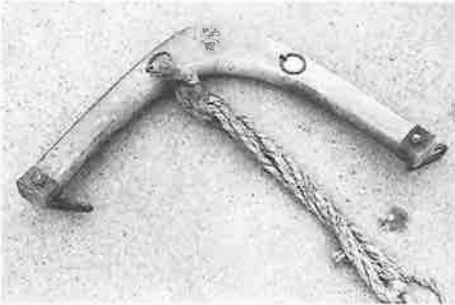
クマゼ（亀泉）

全長一八九六・五センチ 幅一七三・四センチ

冬の仕事として山の落ち葉を集めてきて、馬小屋などに入れ、厩肥とすることがよく行われた。写真のクマゼも近くの山で落ち葉を



クマゼ



クビキ

掻き集めるのに用いた道具だという。

落ち葉集めのことをクズカキといい、朝の暗いうちから、馬に荷車を引かせるニグラウンソウで出かけ、弁当持ちでクズカキしたという。クマゼで集めた落ち葉は、藁を広げて敷いた上にツクヤマに乗せ、藁縄や藤蔓で寿司巻きに巻いて束ねた。

クビキ（荻窪）

幅一五九・四センチ 高さ一二九センチ

クビキは、牛馬用の耕作具あるいは荷車などの運搬具の付属用具である。農耕用として、田畑を耕起したり、整地したりする際には、ズリマンガやスキ（オンガ）などの耕作具が使用されたが、それらを取り付けるための必需品であった。これを牛馬の首にかけ、両端についた鉄製の鉤に鎖を結びつけ、その先にズリマンガなどの耕作具を取り付ける。鎖の引き方で牛馬の進行方向を変えることができる。

馬用と牛用で形態が異なるが、写真のクビキは牛用である。用途としては、主に運送用として使用したという。

イモミザル（下新田）

径一三九センチ 深さ一四一センチ

イモミザルと呼ばれたが、蚕の桑摘みや野菜の収穫など様々な用途に使われたという。

ザルの名称であるが、編み方は四つ目のかご編みである。

里芋を入れたまま川で水に入れたり出したりすると、芋のケバがとれたという。一本だ



イモミザル

けの縄を取り付け、肩に担いで移動をした。

クワキリガマ (総社)

柄長—一三・七センチ 刃長—一八・一センチ

イネカリガマ (総社)

柄長—一九・二センチ 刃長—一六・七センチ

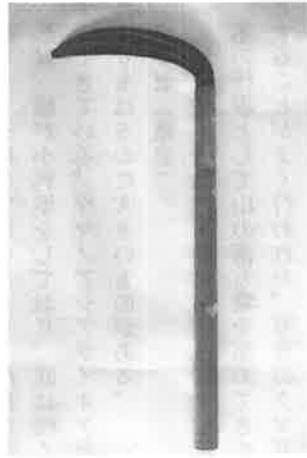
クサカリガマ (総社)

柄長—四二・三センチ 刃長—一七・七センチ

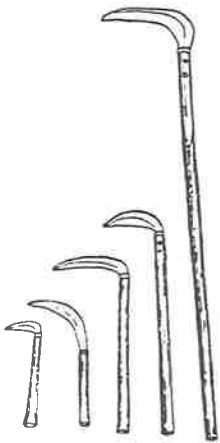
クサカリガマ (上細井)

柄長—四二・五センチ 刃長—一九・一センチ 刃幅—三・二センチ

クサカリガマの名前であるが、麦刈りにも使っていて、三十年くら

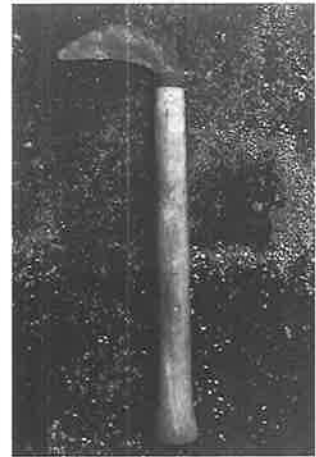


クサガリガマ



左からクワキリガマ、イネカリガマ、クサガリガマ、ナタガマ、ヤマカリガマ

い前に機械が入るまでは、これで麦刈りをしていた。今でも機械の残した隅はクサカリガマで刈る。昭和四十五年頃までは牛を飼っていたが、この飼料にするために、朝早くにク



クワキリガマ



クサカリガマ

サカリカゴを背負って、畑の土手や水田の畔に生えている草を刈りに行ったという。これをアサメシ前の仕事

といい、クサカリカゴがいつぱいになるまで草を取ってきた。早く刈りに行くと、つゆが草に付いていて、刈りやすかったという。

ナタガマ (総社)

柄長—五五センチ

刃長—一四・八センチ

ヤマカリガマ (総社)

柄長—一二四・

五センチ 刃長—三一センチ

クワキリガマは、ハルゴ(春蚕のことでハルサンともいう)のときに、桑を根刈りするのに用いた。桑の枝のことをクワジョウウといい、これを手で持って曲げ、枝の根元をクワキリガマで切る。柄を握った手がすっぽぬけないよう柄の端が膨らんでいる。

イネカリガマは、ウスガマとも言った。稲を刈るのに用いた。刃は鋸歯になっていて、稲株をつかんで根元を掻き切る。写真のイネカリガマは、金物屋から買ってきたもので、刃が切れなくなると、カジヤにブチカエシ(ハガネを足して焼きを入れ打ちかえす)てもらったと



いう。

クサカリガマもウスガマと呼ばれた。昭和四十年頃まで牛を飼っており、牛の餌にするのに、朝仕事として田圃のアゼの草を刈ってきたが、クサカリガマはこの草を刈るための鎌である。

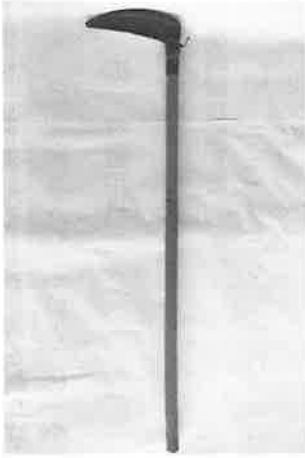
この鎌は、草刈りだけでなく、麦刈りにも使った。草刈りは、子供の仕事で、朝飯前の仕事として青草をセエカゴに一杯刈ってきたという。

ナタガマは、刃が厚く腰がしっかりしているもので、畑の中に生えた竹や篠、萱（かや）などを切るのに使った。ナタの代わりの役目をしたという。

ヤマカリガマは、山のシタガリ（下草刈り）に使う鎌である。しかし、総社付近には山がないので、畑のそばの土手に生えた篠や萱をヤマカリガマで刈った。昭和三十年頃までは使っていたという。また、農林学校の時代に、春、山の下草刈りに使ったこともあったという。

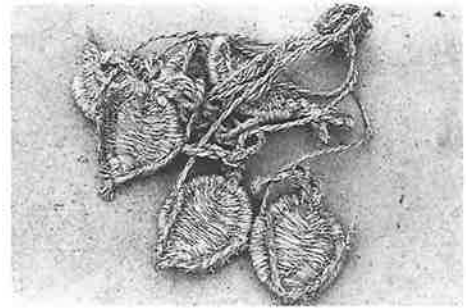
#### オオガマ（上細井）

柄長―九九センチ 刃長―二三センチ 刃幅―六六センチ  
山林の手入れのために、植林した木の下草を刈り取るのに用いた鎌である。



オオガガマ

下草刈りは、昭和の初期までやっていたという。下草刈りは男の仕事で、五月の梅雨前に行った。草がひどくなると、篠まで生えるので、ナタガマも持参したという。



ウマノゾウリ

#### ウマノゾウリ（荻窪）

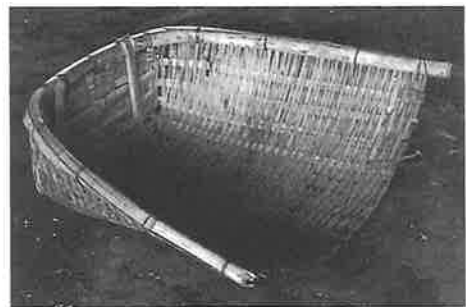
幅―一六・五センチ 長さ―一九・五センチ  
ゾウリという呼び名であっても、実際はウマノワラジ、あるいはウマノクツ、ウマグツなどとも呼ばれる馬のワラジである。馬だけでなく、牛用に履かせるものもあった。

蹄鉄のなかった時代や蹄鉄が取れてしまったときなどに、蹄を保護するために履かせた。また、冬場などに滑り止めとして履かせる場合もあった。四つの足全部か、前足二本に履かせた。

荷物運びなどで履き潰す量が多かったので馬を使うときには余分に持って行った。ムシロや人が履くゾウリなどと一緒に、冬の農閑期の夜なべ仕事でたくさん作って保管しておいた。

#### ゴミトリショウギ（下新田）

幅―六八センチ 奥行―四九センチ 深さ―二一・五センチ  
庭のゴミなどを集めるためのチリトリがわりの用具である。



ゴミトリショウギ

ミなどと比べると、使っている割り竹の幅が太く、編み方も粗い。また、ゴミを掃き入れやすいようにやや角張っている。

(五) 養蚕用具

種屋の用具（鳥取）  
種繭雌雄鑑別器

幅一三三・六センチ 奥行一二五・七センチ 高さ一二七・七センチ



種繭雌雄鑑別器

「最新専売・行田式自動種繭雌雄三分鑑別器」の銘や、「渡辺諸機械製作所 東京市横倉製作部」のプレートが見られる。

顕微鏡

幅一八・四センチ 奥行一〇・四センチ 高さ一二六・四センチ

蚕種の病気などを発見する顕微鏡。

種紙製造器

幅一三三・七センチ 奥行一二・五センチ 高さ一五七・二センチ



種子製造器



顕微鏡

ワクセイの種紙を製造する道具。

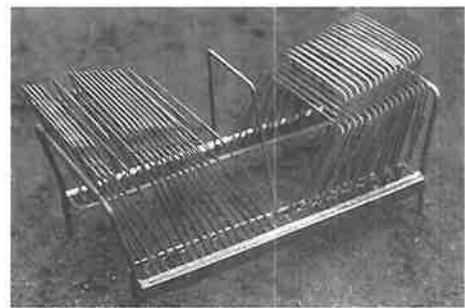
名称不詳

オカイコバコ（下新田）

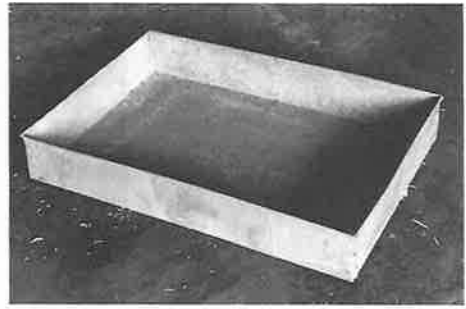
幅一八九・八センチ 奥行一六二・二センチ 深さ一一四センチ

かつては、蚕の種屋から蚕種を買って来て、自分の家で卵からケゴ（毛蚕）に孵化させていた。これを催青という。蚕種は厚紙に円形に産み付けさせた種紙からバラ種（グラム売り）に変わっていったが、写真のオカイコバコは、バラ種に変わる昭和七、八年頃に使っていた。トタン製のハキタテ台で、一箱で十グラムのハキタテができたという。オカイコバコは、ハキタテから最初の脱皮後の初眠（シジ休み）まで使った。

オカイコバコによるハキタテは、まず、オカイコバコの底に水を湿らせた砂を薄く敷いたり、湿らせた新聞紙を敷いたりする。湿気を保



名称不詳



オカイコバコ

つようにするためである。その上に薄い紙を敷いて種紙を置く。種紙は、種屋から催青してもらってケゴが付いているものを買って来た。種紙の上には、テンパと言われる柔らかい桑を細かく切ったものをくれる。この後、インドウ蓋をして、消毒をして暖めた蚕室で蚕棚の中段に差ししておく。すると、桑を食べるためにケゴが種紙から這い出し次第にオカイコバコの中に広がっていく。

写真のオカイコバコを使う前は、

ロウ紙を使っていたという。  
カイコカゴ（上細井）

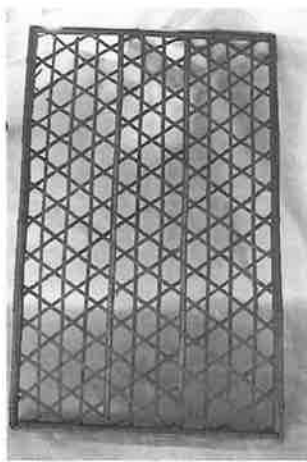
幅—九九センチ 奥行—一五二センチ

竹製の蚕座で、これに蚕座紙（さんざし）を敷き、その上で蚕を飼う。

カイコカゴは、オオカゴ、ヒトメヅマリ、フタメヅマリと呼ばれる

三種類が主に使われる。写真は、ヒトメヅマリである。

ヒトメヅマリは、オオカゴより縦の目が一目だけつまっている大きさ、フタメ



カイコカゴ

ヅマリは二つの目がつまっている大きさである。幅はオオカゴと変わらない。かつては、オオカゴの半分の大きさのハンカゴというものもあった。

昔は棚飼いでコノメと呼ばれる棚を家の中に立て、そこにカイコカゴをさして蚕を飼った。

カイコカゴは、カゴヤに頼んで作ってもらっていた。

メヅマリカゴ（下阿内）

幅—九九センチ 幅—一六一・五センチ

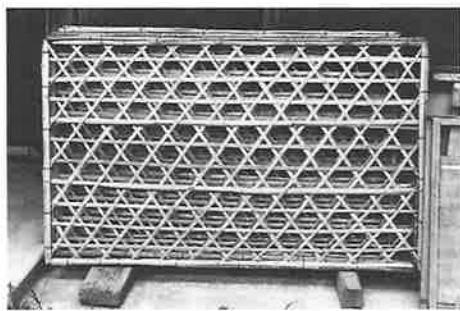
蚕の飼育・上簇用の養蚕カゴである。写真はメヅマリカゴと呼ばれる大きさの養蚕カゴで、この他にメヅマリカゴよりカゴの目が一つ大きいオオカゴ、オオカゴの七分の大きさのシチブカゴなどがある。

オオカゴは、大ガイコ（養蚕を多くする家）で多く使われていた。

また、繭を作らせる蚕巢が改良マブシだった頃は、上簇用のカゴとしても使われた。メヅマリカゴは、主に飼育用として使われ、棚飼いと

いう蚕の飼い方の時は、カイコダナから引き出して給桑などをするのに、二人がかりで作業した。シチブカゴは、一人での作業ができる大きさで、小規模な養蚕農家や手狭な農家などで主に使っていた。このように、家によって使うカゴが異なっていたという。

この辺りでは、米を作っていて忙しかつたので、ハルサン、ナツゴ、バンシユウの年に三回だけの養蚕だったが、多くやる家ではナツゴ、



メヅマリカゴ

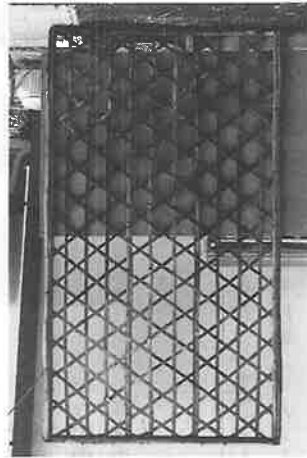
バンバンも加えて、年五回もやっていた。  
 養蚕カゴは何年も使うが、こわれて足りなくなると、近くのカゴヤに二十枚とか、三十枚とかを作ってもらっていたという。

オオカゴ(総社)

幅一〇〇センチ 奥行一七六・三センチ

カイコカゴといわれる蚕を飼うための蚕座で、これ以外にも数種類があった。

写真のオオカゴは、縁が針金で巻かれているが、その以前は藤か竹を使って巻いていた。総社辺りでは、ほとんどの農家がカイコカゴに



オオカゴ

オオカゴを使っていたという。



コノメ

カイコカゴは買ってくるのではなく、カゴヤに家に来て作ってもらい、賃金は一日いくらのテマで払った。材料の竹は、竹藪のない農家では、竹藪を持っている農家から買ったものだという。古いカイコカゴを修理することもあるが、大体三年から五年に一回は新しいものを作ってもらっていた。百貫ゲエコ(大きな養蚕農家)をする

農家では、一回に五十枚くらいを作り、カイコカゴ作りに十日から二週間もかかったという。

コノメ(上細井)

幅一八四センチ 奥行二〇七・四センチ

養蚕で棚飼いをしていたときのカイコカゴを差し込む棚である。

写真のコノメの向かい側にカイコカゴの幅でもう一つのコノメを立て、柱の刻みに竹を渡して縄で縛って棚を作る。竹のことはコノメダケという。これにさらにもう一つの棚を続けて取り付けて、二間幅のコノメで使うことが多かったという。

棚飼いは、昭和三十年くらいまで行っていたという。給桑したり、蚕の糞や残桑をとるウラトリをしたりするときは、二人がかりで棚からカイコカゴを引き出して作業を行った。

カゴ(上細井)

径一四三・五センチ 深さ一〇・四センチ

蚕の共同飼育のときに、桑を計るのに用いたカゴという。

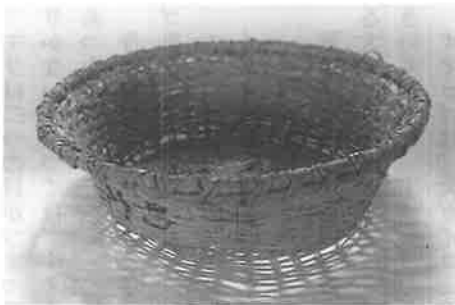
蚕が小さい稚蚕のときは、細かく切った桑を給桑するが、写真のカゴは、初眠から二令く三令位までの大きさの蚕にくれる三分切りの桑を計るのに使ったという。十グラムの稚蚕で、これ一杯の量であった。

メドブルーイ(又カブルーイ)(下新田)

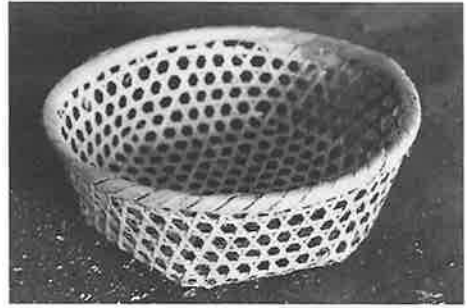
径一二四・五センチ 深さ

一八・五センチ

稚蚕のときの給桑と、蚕座の乾燥



カゴ



メドブレイ

のためにヤキヌカをふるうのに用いられた篩である。

ハキタテの後の卵からかえったばかりの蚕は、毛が生えているところからケゴといわれる。これには、柔らかな桑をクワキリボウチョウで刻んで細かくしたものを餌としてくれるが、メドブレイは、切った桑をケゴの上に均一にふるうのに用いられた。

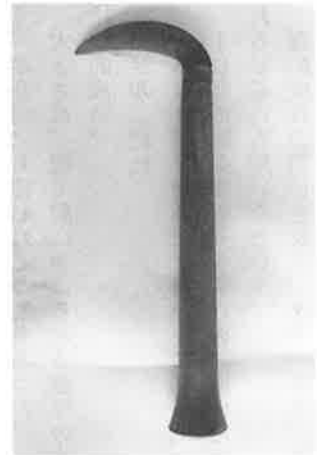
また、脱皮を繰り返しながら成長する蚕は、脱皮ごとに桑を食べるのを止める。これをシジ休み、タケ休み、メドブレイは、フナ、タケ、ニワの休みのときに、蚕座を乾燥させるためのヤキヌカをふるうのに用いられた。

ヤキヌカは、籾殻を焼いて木炭状にしたもので、水分をよく吸収する。稲の脱穀後に庭などで焼き、カマスなどに保存しておいて使う。ニワ休みのときは、蚕が成長して食べる桑の量も多くなり、残桑などが蚕座に厚く堆積しているので、ヌカブレイで振り撒くヤキヌカの量も多かったという。

クワキリガマ(上細井)

柄長―二三・七センチ 刃長―九センチ 刃幅―二・二センチ  
蚕の給桑用の桑枝を切るための採桑用具の一つである。

共同飼育した蚕は、三令の大きさになると配蚕され、各農家で飼われた。条桑育では、桑枝をそのまま、蚕の上に乗せて桑くれをする。写真のクワキリガマは、三令以後の給桑のための桑を採る道具である



クワキリガマ

せ、株の根元から切るとよく切れた。

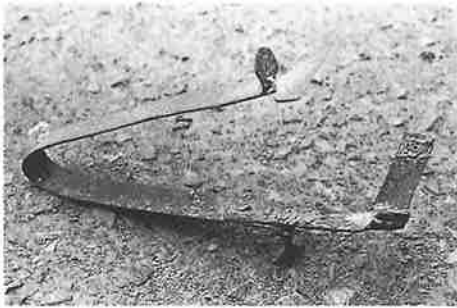
クワコキA(亀泉)

長さ―一七・三センチ

クワコキB

長さ―一六・五センチ

蚕にくれる桑を枝からもぎ落とすための採桑用具である。採桑用具



クワコキA



クワコキB

が、これが使われたのは、シュンサン(春蚕)の場合で、シヨシユウ(初秋)やバンシユウ(晩秋)のときには、センテイバサミが使われたという。

桑枝を持って湾曲さ

としては、他にクワキリガマやクワツミ（クワツメ）などがあり、このうち、クワツミは秋蚕のツミハで使われた。

条桑育が普及する以前は、春蚕の場合、桑畑から取ってきた桑枝から葉をいいで給桑していたので、クワコキで枝をこいで葉を落とした。写真のクワコキは、手作業で行われるが、柱にクワコキを取り付けたクワコキダいで葉をもぎ落とす方法もある。

クワコキの種類はいろいろあるが、Aのような形が一般的である。Bはその改良型という。左利き、右利き用があるが、写真のクワコキは両方とも右利き用で、左手にこれをはめ、右手で桑枝をこいで桑葉を落とす。

#### クワクレザル（上細井）

径—四四・三センチ 深—二二・三センチ

蚕の桑くれである給桑のときに使った給桑用具である。

条桑育の稚蚕のときや、昔の棚飼いのときは、クワバに置いておい



クワクレザル



クワツミザル

た桑を垂直に立てるようにしてクワクレザルの中に入れ桑くれをしたという。

棚飼いのときは、コノメといわれる棚からカイコカゴを二人で引き出し、キュウソウダイの上に乗せて桑くれした。棚には何枚もカイコカゴが差してあるので、この作業を何回も繰り返した。

写真のクワクレザルは給桑だけでなく、繭を計量するときにも使った。このザルに山盛りで四キログラムの繭が入ったという。

クワツミザルが同じザル編みで形も似ているが、給桑しやすいうに深さがやや浅いのが特徴である。

#### クワツミザル（亀泉）

計測なし。

蚕がまだ小さい稚蚕のときや秋蚕の摘み葉で給桑するときなどには、桑畑で桑を取ってこなければならぬ。クワツミザルは、その際に使用された採桑用具であり、運搬用具でもある。

クワツミザルは、クワトリカゴとも呼ばれ、採桑中は肩から紐で吊るして、クワツメなどで採った桑を貯えるようにする。壮蚕の頃になると蚕が食べる桑の量も多くなるので、ザマやエカキなどと呼ばれる大型のザルに移し替えて家まで運んだ。また、採桑用としてだけでなく、給桑用にも使われることもあった。

大きさは、紐で肩にかけられる程度の小振りなもので、軽く、底も比較的浅い。

#### コザル（総社）

径—四三センチ 深—二〇・七センチ

主に蚕の給桑用の桑を摘むのに用いたザルであるが、桑くれといわれる給桑にも用いたという。

蚕の成長の節目をシジ、タケ、フナ、ニワなどというが、このコザ



コザル

ルは掃き立てから二齡のタケくらいまでの小さい蚕にくれる柔らかい桑（コバクワ）を採るためのザルである。

桑枝の先端から四枚〜五枚をヒカリツパといい、これがコバグワになる。コザルに取り付けた縄を肩に掛け、いい桑を吟味して採ってはこの中に入れたという。

写真のコザルはざる編みの底の浅いザルで、主として給桑に使うクワクレザルに近い形をしているが、編

んだ竹の幅が広いのが特徴である。

メケエ（亀泉）

径一五〇センチ 深さ一五四センチ

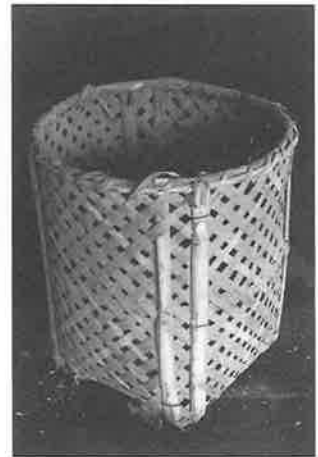
メケエという呼び名自体は、様々な用途に使われるカゴの一つであるが、写真のメケエは、桑摘みに用いられた採桑・運搬用具である。

エカキより一回り小さいので、カゴに取り付けた背負い縄を肩に通して、背負って家まで桑を運んだ。

編み方は四つ編みである。カゴを構成している竹は、身を削って薄くしているので重量も軽いが、二本ずつの竹をタ



メケエ



メケエ

テ・ヨコ交互に組み合わせているので、丈夫にできている。

メケエ（下新田）

径一五一センチ

深さ一五五・五センチ

オンナシユ（女衆）

の桑摘み専用のかごととして使われたという。

竹の身の部分を三枚

に剥がして薄くした割

り竹（三枚はぎという）

を使って、四つ目に編

んだもので、軽くて丈

夫だったという。また、

かこの底は力を加えた

ときに変形しないよう

に、四角の形に作っている。

ナツゴ（夏蚕）やバンシユウ（晩秋蚕）のときは、桑畑の中で摘ん

だ桑を入れては移動した。人を頼んで桑摘みをしてもらうときには、

カンメツミといい、一貫目くらいで手間賃を払った。メケエ一カゴで

約三貫から四貫の桑を入れることができたという。

メケエ（鳥取）

径一四六・五センチ 深さ一五八・六センチ

採桑用具で、ツミハで摘んだ桑を入れて運ぶのに使った。

八月一日はハツサクの節供で、新婚の嫁は実家に帰ったが、戻って



エ カ キ

くるときはメケエを  
買ってきたという。

エカキ(亀泉)

径一六二・五セ

ンチ 深さ一六四・八

センチ

蚕の給桑用の桑を入  
れて運ぶための運搬具  
である。

桑畑の桑をクワトリ

カゴで採った後、この

エカキに移して背負つ

たり、牛馬に引かせる

荷車に乗せたりして家

まで運んだ。萎びた桑

は蚕が食わないため、

この上にムシロなどを



ザ マ

被せて天日があたるのを防いだという。

編み方は、底があじろ編みで、周囲がざる編みになっており、ザル  
編みとかご編みの組み合わせだったザマカゴより軽くて使いやすかった  
という。

ザマ(上細井)

径一六五センチ 深さ一六四・五センチ

桑畑で採った桑を運ぶための運搬具である。

前橋市上沖町の大黒様の正月甲子の日のお祭りには、カゴ、ザル、

シヨウギなどの竹製品を販売する店がたくさん出るが、このザマも大

黒様のお祭りで買ってきたものという。

稚蚕の飼い方をコバガイというが、秋蚕のコバガイのときなどは、  
手で摘んできた桑を蚕にやった。この桑摘みを鉄の指輪状のツメとい  
う道具で行い、摘んだ桑を写真のザマに入れて運んだ。二十キログラ  
ムくらいの桑を入れることができたという。

ザマで運んできた桑は、木製のクワバコに入れ、萎びないように湿  
らせた布をかけて、必要なときに給桑した。

ザマはふつうざる編みとかご編みを組み合わせたカゴをいうが、  
ここではいわゆるエカキといわれるカゴをザマと呼んでいた。

キバチ(上細井)

径一二七センチ 深さ一六センチ

上簇前の熟蚕を拾ったり、マブシに熟蚕を入れたりするときに使  
た木鉢である。木を彫って作ったものだが、熟蚕拾いには、この他に  
厚紙製のカルトンなどと呼ばれる容器を使うところもある。

上簇前の熟蚕のことはズウとい

い、カイコカゴの上にズウが開始

した頃は、その数も少ないのでキバチ

で拾ってマブシに入れる。その後、

一、二回桑くれをすると、一気にズ

ウが出てくるので、キバチは使わず、

まとめてマブシに入れてしまう。

また、カイリヨウマブシを使っ

いた頃は、写真のキバチ二杯か三杯

を目安にしてズウをマブシの上に撒

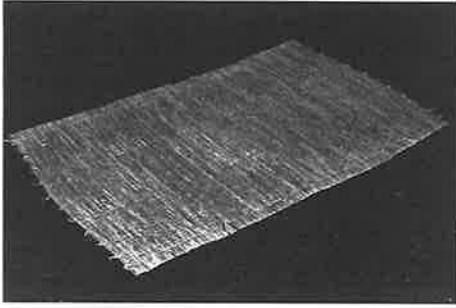
いたという。回転マブシのときには、

天井から吊るしたマブシの下にズウ



キ バ チ





ミナガワ

上簇に使用する糸でかがられた葉製の薄い筵である。  
 アゲシロとも呼ばれ、サブロク(オオカゴ)のカイコカゴの上に敷いて、その上に熟蚕のズウを広げる。広げるズウの量は、木製のオコアゲバコ(ズウバコ)に八分目ほどであったという。さらにミナガワの上に蚕巢



ズウバコ

が落ちるので、それを拾うのにもこのキバチを使った。  
 ズウバコ(下新田)  
 幅一六〇・七センチ 奥行  
 一四二・四センチ 深さ  
 一四・五センチ  
 熟蚕を拾って入れるための上簇用具である。  
 蚕は家の一階で飼い、二階では上簇を行っていた(二階上簇)ので、一階で拾った上簇間際のズウは二階に運ばなければならぬ。ズウバコは、キバチで拾ったズウを移し変えて二階に運ぶための用具として使っていた。

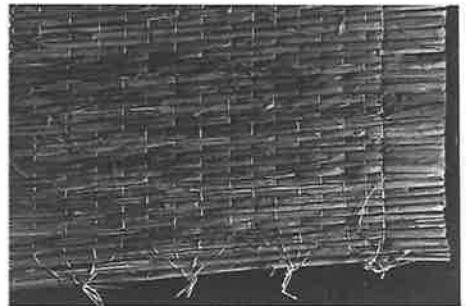
ミナガワ(下新田)

幅一五六センチ 奥行一九六センチ



カイリヨウマブシ

カイリヨウマブシは、そのたびごとくに新しく作らなければならないシマダマブシと違って、何回も使える便利さがあってかなり普及したが、欠点として蚕の排便でヨゴレマユに



ミナガワ

のカイリヨウマブシを置き、繭を作らせるようにする。  
 ミナガワの利点は、ズウの小便を吸収しやすいので繭が汚れにくく、また薄いので早く乾き、軽量で収納も容易なことであるという。百貫ゲエコ(大養蚕農家)の家では、三百枚ものミナガワを使っていたという。耐用年数は三年程であった。  
 ミナガワは、冬場の葉仕事で作っていた。早い人は、一日三十枚くらい作れたという。

カイリヨウマブシ(上細井)

幅一自在 奥行一八一センチ

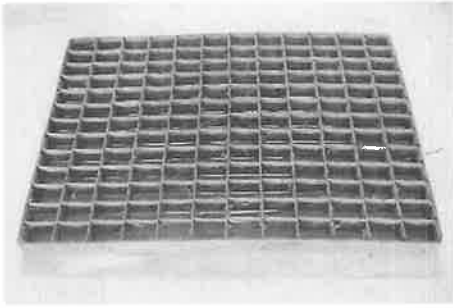
なりやすく、複数の蚕が作る大きなタママユができやすかった。また、マブシから繭をとるマユカキも手仕事で大変だった。回転マブシは、そういう欠点が少ない、次第にカイリヨウマブシから回転マブシに切り換えられるようになったという。

ボール（上細井）

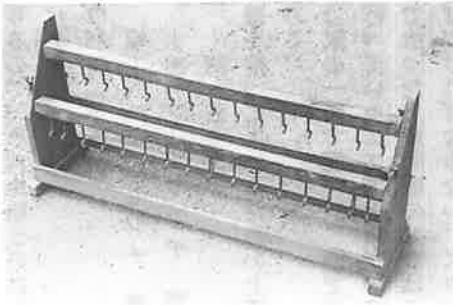
幅一五四・四センチ 奥行一三九・二センチ 厚さ一三センチ  
蚕に繭を作らせるためのボール紙製の蚕巢で、カイリヨウマブシ以後に使われたいわゆる回転マブシである。

これを木製の回転枠に十枚組み込み、それぞれのボールの上に熟蚕をちりばめて天井から吊るして繭を作らせた。新しくおろしたばかりのボールは、蚕がひっかかるところがないので落ちやすいが、数年立つと繭のケバがボールに付いて落ちることも少なくなる。

できた繭はカイリヨウマブシのときは手で一つ一つ取ったが、これは押し込み型の簡単な道具で落とすことができた。



ボ ー ル



マブシアミ

マブシアミ（亀泉）

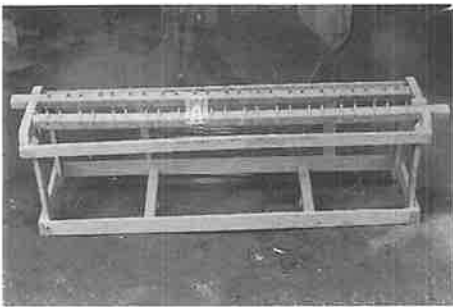
全長一九八・六センチ 奥行一二四・二センチ 高さ一四六センチ  
蚕の上簇用の蚕巢づくりの道具である。

繭巢はマブシといわれる。写真のマブシオリは、藁を材料にしたカイリヨウマブシを製造するものだが、戦後のボール紙製の回転マブシの普及により、蚕種をとるなどの特別な場合を除いては使われることがなくなった。

マブシオリキ（鳥取）

幅一九九センチ 奥行一二五センチ 高さ一三六センチ

カイリヨウマブシを織るための簇織り機である。藁を交互に織っただけのシマダマブシが昭和の頃まで使われ、その後、このマブシオリキによるカイリヨウマブシが普及し、さらに戦後になって回転マブシになってきたという。



マブシオリキ

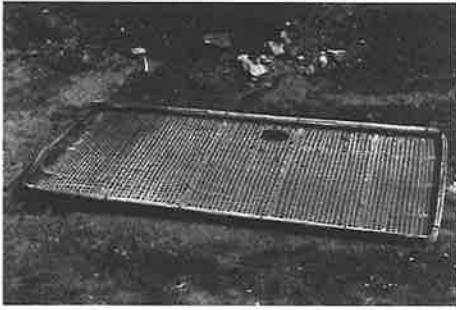
冬の農閑期の仕事として織り、一日に十枚程度作ったという。

カイリヨウマブシは、ムシロの上に置いてズウを広げるので、蚕が繭を作りやすかったが、繭をとるのは大変だったという。

マユカゴ（亀泉）

径一五七センチ 深さ一八四センチ

繭かきでケバを取った繭は、ユタンと呼ばれる繭袋に入れ、さらにこのマユカゴに入れて出荷する。繭出



繭のカソウカゴ

繭の出荷には、かつては生繭のまま出荷する場合と、乾繭にして出荷する場合があった。写真の繭のカソウカゴは、自分の家で乾繭にしていた頃に使用していた繭の乾燥用のカゴである。

繭は、生繭よりも乾繭の方が高くなる場合があるので、これで乾繭にしたものを保存しておき、年が明けた三月節供前後に出る繭の相場をみながら売ったという。

繭は、炭火を使って一昼夜乾燥させる。カソウカゴの上に繭を平らに並べ、これを蚕を飼う柵のコンノメに十二枚ほど差し、コンノメの一番下には半俵くらいの量の炭をのせた鉄



マユカゴ

荷用の運搬具である。ユタンの袋に合わせ、やや細長いのが特徴である。荷車やリヤカーに乗せて出荷するが、馬につけて出荷する場合は、四個つけられたという。

編み方は、六つ目編みを基本にしながらも、繭の保護やカゴの補強も考えて、横に回す竹を余分に入れメツブシカゴにしている。

繭のカソウカゴ(総社)

幅一四九センチ 奥行一七三センチ



繭のカソウカゴ

板を置く。火力が弱くなると炭を足していく。繭は平均に乾燥させるため、四時間から五時間ごとに、下から上に順繰りに差し替えをする。これを三回繰り返して乾燥したという。

繭のカソウカゴ(荻窪)

直径一七〇・二センチ 深さ一三・四センチ

呼び名は特にならないが、収繭後の繭の乾燥の際に使ったかごという。繭の乾燥には、トタンだけで作った偏平な箱や木箱の内側にトタンを張り付けたような、ホイロなどと呼ばれるものが使われていたが、この写真のような竹製のカソウカゴも用いられていた。

かつて、家どつた繭は、生繭で出荷する場合と、乾繭にして保存しておいて出荷したり自家で糸や真綿などにしたりする場合とがあった。自家で乾燥する場合には、密閉された小さな乾燥室で、写真のような乾燥用具を使って、炭火の火力で繭の水分をとったり、繭の中のさなぎを殺したりした。

こうしたカソウカゴも、繭を製糸場に依頼して乾燥してもらったたり、共同の乾燥場がつくられたり、または、生繭で出荷するようになったりして、次第に使用されなくなった。

(六) 製糸・機織り用具

ザグリ (川曲)

幅一四三・七センチ 奥行一六・五センチ 高さ一三六・五センチ

繭から糸を取るための製糸用具である。

手前の把手を回転させると、その回転が組み合わさった四個の歯車に伝わり、上部の心棒にはめた糸枠が回転する。

家の入り口のトボグチのわきを障子にして糸引きする場所にしていてという。

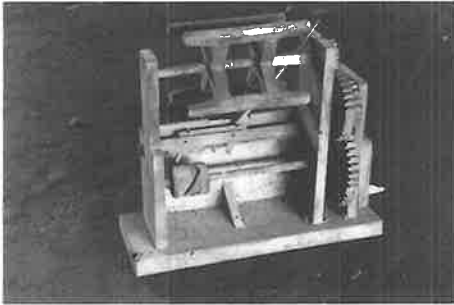
ザグリ (下新田)

幅一四四・五センチ 奥行一五・五センチ 高さ一三六・五センチ

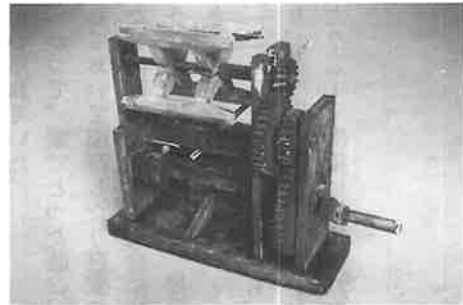
繭から糸をとる製糸用具で、シチリンの上にかけたイトヒキナベの



ザグリ



ザグリ



ザグリ

中をモロコシの穂で掻き回して繭の糸口を出し、ザグリのハズミグルマ、フリコを通して枠につなげる。右手でモロコシの穂を動かしながら、左手でザグリの枠を回転させて糸を巻き取る。

糸の太さに応じて、八粒どり、十二粒どりなどがあり、糸を取り出す繭の数が違ったという。

糸引きは、冬場のオンナシユ(女衆)の仕事で、取った糸はオトコシユ(男衆)が高崎田町のキヌイチに売

りに行ったという。また、オンナシユが冬に機織り機を使って織ったりもしたという。

ザグリ (田口)

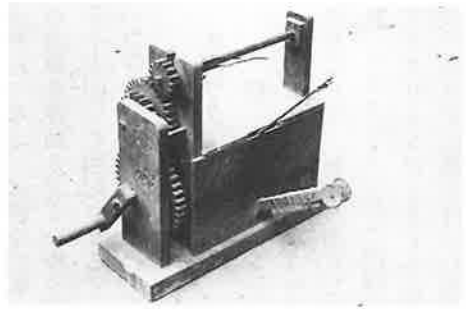
幅一四三・六センチ 奥行一四・二センチ 高さ一三六・九センチ

繭から糸にするための製糸用具である。

まず粘土製のカマドにイトヒキナベをかけ、一升程の繭を煮る。その後、手が入る程度の温度に保つようにして、繭から糸を出す。

ザグリは、数個の繭の糸を合わせて一本の糸にするが、何個の繭を使うかは、機織りの糸の太さによって決める。着物の裏地に使う糸は細いので三〜四個、着物の表地に使う糸は太いので五〜六個の繭を使ったという。

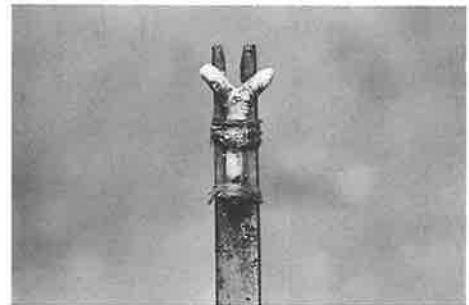
繭の糸口を出すには、モロコシを小さく束ねたものを使う。これで湯の中を掻き回し繭の糸を引っ掛ける。数個の繭の糸を合わせてすぐ



ザグリ



ツツミ



クビフリ

ザグリ(亀泉)

幅一四四センチ 奥行  
一五・一センチ 高さ一三七  
センチ

繭から糸にすることを「糸をとる」などというが、ザグリはヘツツイの上のナベで繭の糸を集めてザグリのコワクに巻に取る用具である。

繭からの糸は、ザグリの正面に斜めに突き出た棒の先のツツミ(写真)を経て、その上のク

隣に設置したザグリのワクにつなげる。そして、右手でイトヒキナベの中の湯を掻き回し繭の糸をほぐしながら、左手でザグリの把手を回してワクを回転させ糸を巻き取る。

取った糸は、ワクごと水で洗い、大きなワクに揚げ返す。その後、ひなたで乾燥させる。丈夫な糸にする場合は、イトヨリグルマで何本かの糸を縫り合わせる。こうした糸を紺屋に出して染め、機織り機で布にした。

ザグリ側面に、

商 上州前橋  
へ木 星野留吉  
標 細ヶ沢町

の焼印が見られる。

ビフリ(写真)を通してコワクにつなげられる。写真右手の把手を回すことで、クビフリが左右にふれるとともにコワクが回転して糸が巻き上がるが、クビフリの左右の動きがあるため、糸がコワクに平均に巻き上がる。

ザグリ側面に

「前橋

大島商店

本町百十五

の刻印がある。

ウシクビ(川曲)

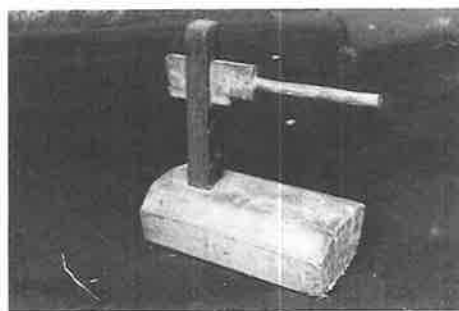
幅一三三・六センチ

チ 奥行一七・

五センチ 高さ

一三八センチ





ウシクビ

ザグリに相当する製糸用具である。

写真上部の心棒に糸枠を填め込み、繭を煮た鍋から糸を出してこの糸枠につなぎ、糸枠を回転させて糸を巻き付ける。ザグリには幾つかの齒車を連動させて糸枠を回転させる把手があるが、これは糸枠自体を手で叩いて回転させる。

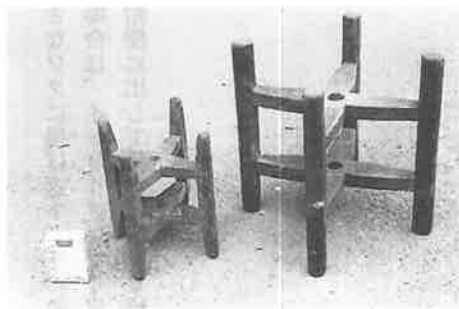
コワク (亀泉)

幅—二一・二センチ 径—一八・二センチ

オオワク

幅—二九・七センチ 径—三一センチ

右がオオワク、左がコワクである。コワクは、ザグリ (座繰り) にはめこんで、繭から糸にしたものを巻き付けるのに使った。オオワクは、イトクリトンボと同様に揚げ返しに使った枠である。オオワクは、イトクリトンボよりも大型の揚げ返し機といわれる機械にはめこんで、コワクに巻き付いた糸を巻き取る。



コワク、オオワク

イトクリトンボ (亀泉)

幅—四八・一センチ 奥行—一

三・五センチ

高さ—四九・二

センチ

単にトンボ、あるいは

ヒロメキやグルメキなどと呼ぶところもある。

繭からとったばかりの小枠に巻き付いた生糸は濡れているので、これを別の大枠などに揚げ返して乾燥させたり、大枠から外して束ねたりしたが、イトクリトンボは、この揚げ返しを自家でやったときの道具である。

その後は、共同の揚げ返し場をつくる所があり、枠のまま持って行って揚げ返しをしたこともあった。また、製糸工場ができてからは、生繭のまま出荷するようになり、このような道具で揚げ返しをすることは少なくなっていた。

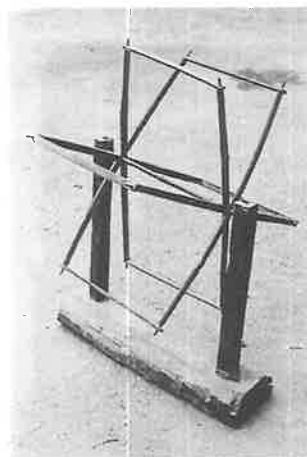
イトクリ (亀泉)

幅長—九一・五センチ 奥行—三一・一センチ 高さ—五四・

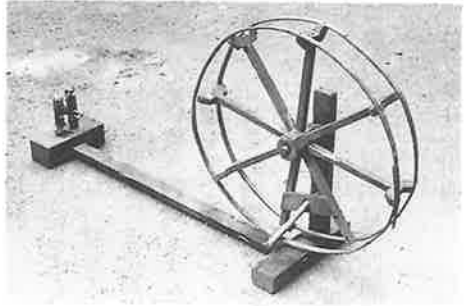
五センチ

クダマキグルマなどとも呼ばれる。かつては、絹糸と木綿糸などを材料にして、タカハタなどの機織り機を使い、自分の家で機織りをする家が多かった。写真のイトクリは、機織り用のヨコ糸をクダに巻くときに使ったものという。

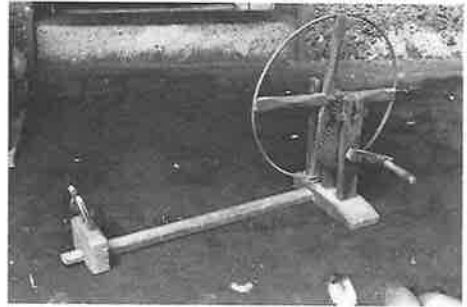
機織りは、平行に並んだタテ糸の間に杼をくぐらせてヨコ糸を組み合わせて布にするが、このイトクリは、杼の中に入れるクダに糸を巻く



イトクリトンボ



イトクリ



ブンブングルマ

ための道具である。

右手で車の把手を回して、紐で連動したツムを回転させ、ツムの先に取り付けたクダに糸を巻き付ける。

ブンブングルマ (川曲)

幅一〇九センチ 奥行一三一・四センチ 高さ一六〇センチ  
イトグルマ、クダマキグルマなどとも呼ばれ、機織りのヨコ糸をクダに巻き取るための機織り用具の一つである。

写真右の車にかけた紐を、写真左端に突き出た二本の突起に横に渡したツムにかけ、把手を回すことでツムを回転させる。クダは、ツムの軸の先に差し込んであり、右手で車の把手を回しながら、左手で糸をたぐりつつクダに巻き付ける。

車を回転させる工夫として、ザグリの歯車を使っており、車の心棒に直結した把手を回す型のものより、把手を回す位置が低いので作業がしやすい。また、車も細い溝の付いた鉄輪を使っている。

マキボウA (亀泉)

長さ一八八・二センチ 幅一五・五センチ

マキボウB

長さ一八六・五センチ 幅一七・六センチ

写真上がマキボウA、下がマキボウB。

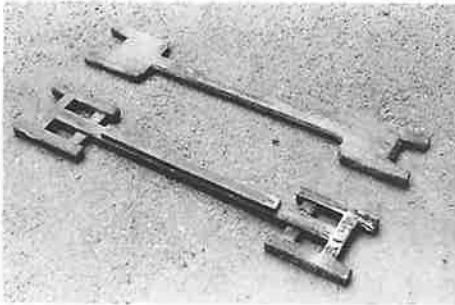
写真のマキボウは、イザリバタの機織り機のタテ糸を巻いておくいわゆるチキリである。マキボウから出たタテ糸は、杼道をあけるソウコウとタテ糸を整えるオサの間を通し、チマキの方に結ばれる。

オマキ (端気)

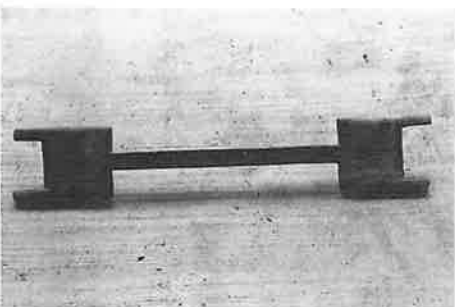
長さ一九二センチ 幅一六センチ

機織り用の縦糸を巻いて、イザリバタの機織り機に装置する道具である。

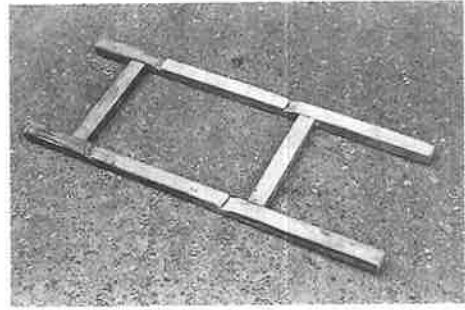
横糸は機屋に依頼したが、縦糸は自分の家でヘダイを使って揃え、オマキに巻いて機織り機にセットしたという。カベといわれるチリメ



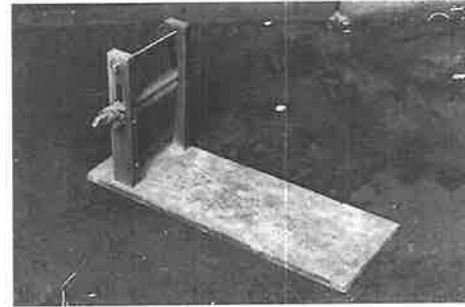
マキボウA、マキボウB



オマキ



マワタカケ



ワタクリ

う。のような平織りの布は、縦糸に絹糸を使って自分の家で織ったとい

マワタカケ（亀泉）

長さ一七〇・二センチ 幅一二七・二センチ

ふとんや綿入れの着ものなどの中に入れて綿が片寄らないようにするためのマワタを作る用具である。

マワタに使う繭は、主に玉繭を使う。ソーダを入れて煮て柔らかくなった玉繭を手で開いて、マワタカケの四隅に引っ掛けるようにして張る。これを数回繰り返して厚みをもたせたマワタにする。引き伸ばしたマワタは、この後干して乾燥させる。

マワタカケには、四角い板の四隅に竹釘などを出したものが多いが、写真のマワタカケは、四隅に切り込みがあり、これに繭を広げて引っ掛ける。

ワタクリ（川曲）

幅一五八・七センチ 奥行一三一センチ 高さ一三〇・一センチ

二本の棒を回転させ、この間に綿花を巻き込んで綿の中の種子をはじき出す紡織用具である。

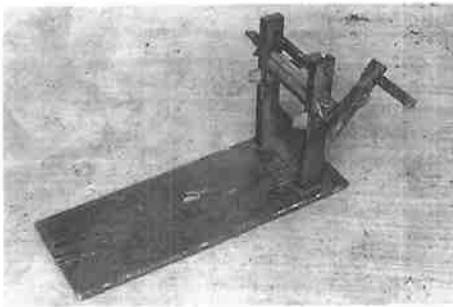
二本の棒の端は、ネジの山と谷の仕組みで噛み合っており、この棒の一つに把手を差し込んで回転させるようになっている。

ワタクリキ（端気）

幅一六〇・五センチ 奥行一三三・一センチ 高さ一三二・八センチ

夏の終わりから秋にかけて、実が割れて棉が吹くと、棉摘みを行い、これを天日でよく干す。ワタクリキは、干した棉の中に混じっている実を取り除くための道具である。とった棉は、綿打屋に出して打って綿にしてもらった。

これで木綿糸にしたものを材料にして、かつては、シジマとかニコ



ワタクリキ



ツムギキ



ニコメイセンなどと呼ばれるフダンギの木綿の布を織っていたとい  
う。

### ツムギキ (下阿内)

幅一六一センチ 奥行一三八センチ 高さ一八一センチ  
棉や真綿などから木綿糸や絹糸に紡ぐための機械であり、ツムギグ  
ルマに相当する。

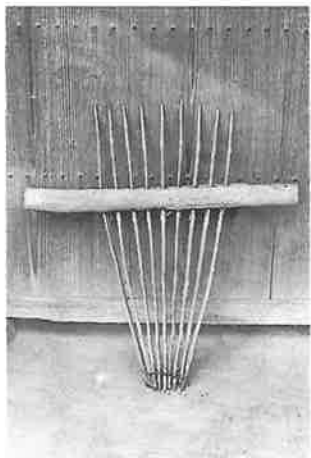
終戦後しばらくまでは、木綿布や紬を織るため、このツムギキを使っ  
てツムギ糸を紡いでいたという。イトクリキ(ツムギグルマ)に比べ  
て、椅子にかけたまま両手を使って紡げるので大変便利だった。

### 手細工・諸職に関わる用具

### ワラスグリ (端気)

幅一七七センチ 高さ一八五センチ

ワラゾウリなどの藁細工で使う材料にするための稲藁をすぐるため  
の道具で、九本の割り竹を横木に取り付けた簡単な手製用具である。  
竹の歯に藁束を引っかけて、手前に引いてハカマと呼ばれる藁の葉を  
抜き落とす。藁すぐりには、カナゴキ(千歯扱き)が転用されたり、  
手ですくったりすることもある。

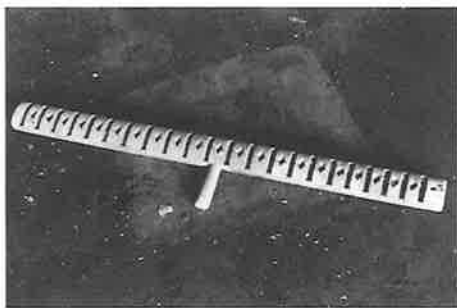


ワラスグリ

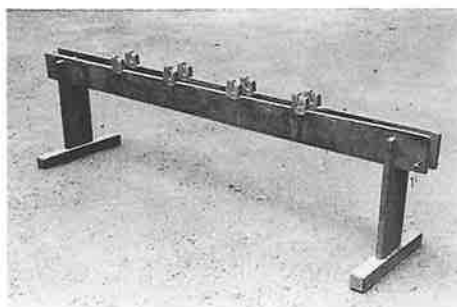
### ヒ (下新田)

長さ一〇二・  
五センチ 長径  
一七センチ 短  
径一四・七セン  
チ

筵を作る際のムシロ  
バタシに使用された杵



ヒ



タワラアミキ

である。

筵は、平行に縦に並んだ縄の間に藁を通して組み合わせる織るが、  
ヒは、横に通した藁を叩いて藁の目をつめるのに用いた。

筵編みは、縦に並んだ縄の間に藁を差し込む作業を専門に行うサン  
ゴサシと呼ばれる人と、写真のヒを使って横に通した藁を叩いて目を  
つめるヒドリと呼ばれる人の二人作業で行われたという。

筵には、いろいろ種類があるが、蚕用としてのアゲムシロや、穀物  
を干すのに用いられるハネムシロなどをよく織ったという。アゲムシ  
ロは目が粗くて薄く、端の耳は外に出すが、ハネムシロは藁をよくヒ  
で叩いて目をつませ、厚く仕上げた端の耳は織り込む。

### タワラアミキ (亀泉)

全長一二五・二センチ 幅一三〇・一センチ 高さ一三三七  
センチ

稲藁を使って米俵を作るための道具である。また、萱を材料にして

炭俵も作ることができる。

俵編みの仕事は、冬の農閑期の大事なワラ仕事の一つで、どこの家でもかつては盛んに行っていたが、戦後、俵に代わって、麻袋が登場し、さらに紙袋に変わることによって、ほとんど作られることがなくなった。

写真は、複式のタワラアミキなどと呼ばれ、その前には単式もあったという。金具が使われていたり、角材を使用したりしていることから、道具自体は古いものではない。俵編みの道具には、足の部分を二股の自然木を利用し、編み縄を巻くためのおもりに石や木などを使っているものもある。

#### マキワリ (鳥取)

柄長—九〇・八センチ 刃幅—五・二センチ 刃長—一八・五センチ

#### ユキ (鳥取)

柄長—九六・七センチ 刃幅—一八センチ 刃長—二四・四センチ

#### トサユキ (鳥取)

柄長—九〇・四センチ 刃幅—一七・七センチ 刃長—二一・二センチ

写真上より、マキワリ、ユキ、トサユキと呼ばれる。

マキワリは、普通の薪割り用として用いられ、ユキとトサユキは開墾の際に組で用いられたという。トサ



マキワリ、ユキ、トサユキ

ユキは木の伐採用、ユキは、サガラで根株を掘った後、根を断ち切るのに用いられた。

刃の背部の厚さが最も厚いのがマキワリで六センチ、次いでユキで五・二センチ、トサユキが最も薄く二・六センチである。トサユキは金質がよく、刃が一番切れる。

伐採の方法は、木の反りを見て倒す方向にトサユキでハツツてウケグチを作る。ウケグチの反対側に当たる部分をオイグチといい、このオイグチにノコギリを入れて伐採する。

#### チョウナ (竜蔵寺)

計測なし

柱などの木材を削るための大工道具の一つである。

湾曲した自然木を柄に利用し、曲がった木の端に櫃を詰め込んで刃を取り付けている。

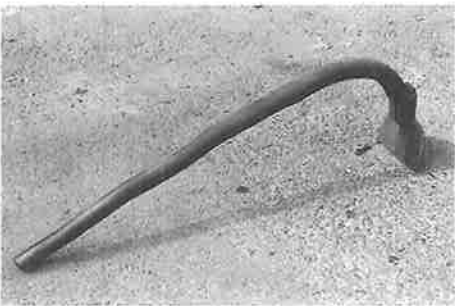
両手で柄をつかみ、手前に打ち引くように木を削る。カンナが登場する以前から使われていた道具で、古い民家の柱などにはチョウナで削った波形の跡がよく見られる。

#### サバノコ (上細井)

柄長—三九・三センチ 刃長—四四・一センチ 刃幅—一六・九センチ

刃の形が魚のサバに似ているところから、サバノコと呼んでいたという。主に木の枝を切るヨコビキ用の鋸として使っていた。

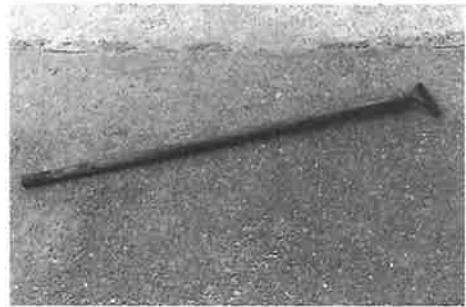
刃が丸くなつてくると自分で目立



チョウナ



サバノコ



スギノカワムキ

をして研いだという。

柄に 菊の屋号の焼印が見られる。

スギノカワムキ (下阿内)

全長—九八センチ 刃幅—一一・二センチ

杉の皮は、屋根材に利用されることが多い。杉の皮剥きには、ふつうカワムキガマと呼ばれる鎌型の刃物が使われるが、写真のスギノカワムキも、杉皮を屋根材として使うために、杉の丸太から皮を剥ぎ取るのに用いた道具である。

ここでは、屋根材といっても杉皮をそのまま葺いたものではなく、瓦の下地に葺くのに必要だった。ふつうは、二十センチ〜三十センチの長さの杉皮を束で買ってきて使うが、杉丸太を買った時には、自分で剥くこともあったという。

杉は、山から取ってきたばかりの生木がよい。水気があり、木肌がツルツルしているので滑らかに剥ける。乾いていると、きれいに剥ぐ

ことができない。

初めに、ノコギリで丸太の表皮に六十センチほどの間隔で薄く切り込みを入れる。次に、切り込みにカワムキの刃を入れ、手前に引いて皮を剥く。剥いた杉皮は、天日で干して乾燥させ、保存しておいて屋根葺きの時に使った。

屋根葺きでは、屋根板の上に杉皮を葺き、それを割り竹でおさえ、その上に瓦を葺いた。

セツトウ (上細井)

柄長—二九センチ 槌部幅

—四・七センチ 槌部長—一

〇・二センチ

石を加工する石材加工用具の一つで、金槌のような形をしているが、片手で使うハンマーの一種である。

セツトウは、石を適当な大きさに割るための道具で、石垣の石積み用の石を割るのに用いたという。

カケヤ (総社)

柄長—七七センチ 槌部幅

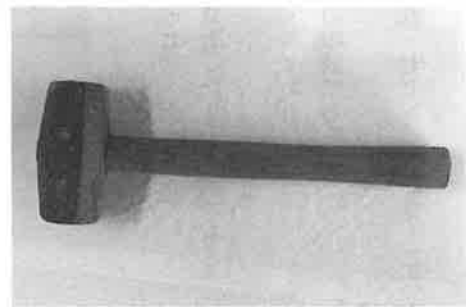
—一〇・二センチ 槌部長

—二三・五センチ

主に、土木工事などで杭を打つの



カケヤ



セツトウ

に使う木づちである。

写真のカケヤは、水田の雀よけの網を張る杭を打つのに使ったり、以前はワラジをこしらえる際の材料の藁を叩くのにも使っていたという。

### ジャリブレイ (下阿内)

幅—三九センチ 奥行—三九センチ

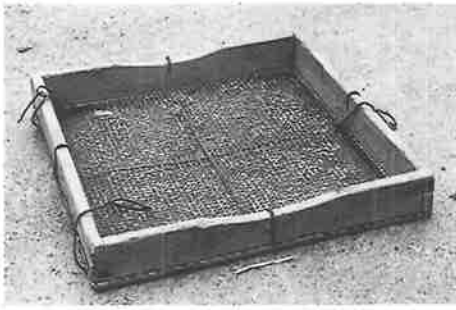
土木工事などで使う砂利や砂の粒を揃えるための選別用具である。

正方形の木枠にはめこまれた網の目の大きさは三種類ほどあり、スナブレイあるいはジャリブレイなどと呼ばれて、選別する粒の大きさによって使い分けられた。

写真はジャリブレイで、コンクリート仕事をするときに、利根川で砂利を取るのに使用したものである。

### ツチ (下阿内)

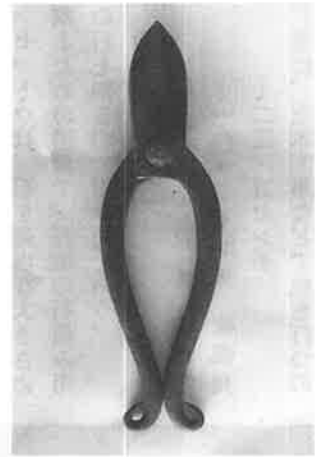
柄部長—五六センチ 槌部長—二一センチ 槌部幅—八・三七



ジャリブレイ



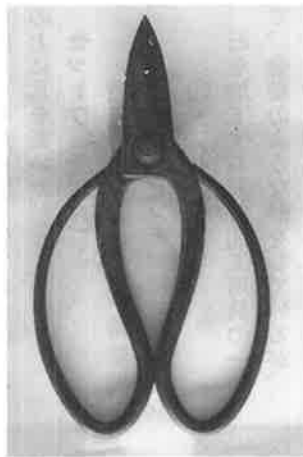
ツチ



カナモノバサミ

木綿布を柔らかくするの用にいたツチという。やや、小振りのツチである。

ンチ



キバサミ

かつては木綿を作っていたので、糸にして紺屋で染めてもらい、機織りで織った。しかし、木綿布は固いので、布を重ねてこのツチで叩いて柔らかくしたという。

### カナモノバサミ (上細井)

全長—一六・八センチ 幅—四・七センチ

針金を切断したり、トタンの平板を裁断したりする鋏である。

### キバサミ (上細井)

全長—一七・七センチ 幅—九・六センチ

植木や盆栽などの枝を切り落とすための鋏である。

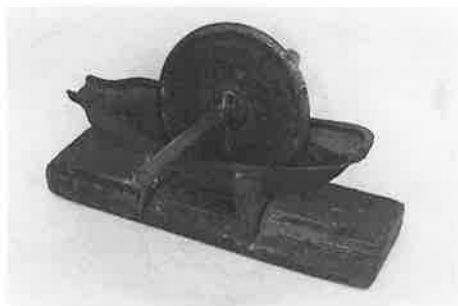
### ヤゲン (竜蔵寺)

幅—一二・六センチ 長さ—四五・七センチ 高さ—二六・五センチ



ア ミ

全長一六三センチ 径一五・五センチ  
堰や用水などに仕掛けてドジョウを取るドジョウ笥である。笥の口をこの辺りではドウという。中に入ったドジョウが逃げるのを防ぐために設けられた口の内側のカエシはアギと呼ばれ、ドジョウドウの場合



ヤ ゲ ン

葉草をすりつぶしたり、唐辛子などをすりつぶしたりする製薬用具である。  
写真のヤゲンも葉を調合するための薬草をすりつぶすのに用いたが、蜜柑の皮や胡麻を潰すのにも使ったという。  
正月十三日には、カチモチを作った。カチモチは、干した蜜柑の皮をヤゲンですりつぶして細かくしたものと、青海苔をまぜて作ったという。  
アミ(総社)  
柄長一六三・五センチ 網  
部径一四二センチ



ド ウ

はアギが一つ、ウナギドウの場合は、細長い胴で、アギが二つ付く。写真のドウは、カゴヤから買ってきたものという。  
夏は、ドジョウが川下から上がってくるので、ドウの口を川下に向けて仕掛けるが、秋風が吹く頃になると、水田の水を切って堰に流すので口を川上に向けて仕掛ける。  
堰の真ん中に置いて、水に流されないよう土くれや石をのせておいて、ドウに付いている紐を杭などに縛り付けておいたりした。夜仕掛けて朝早く引き上げるが、時にはフナもとれることがあったという。

## 五、交通・運輸・通信に関する資料

### ノリクラ(荻窪)

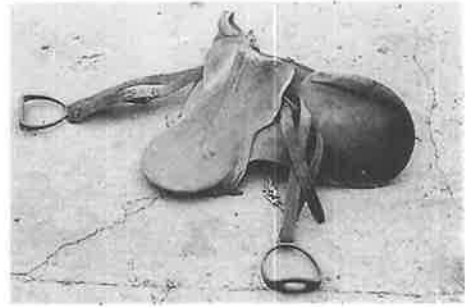
全長一四四センチ 奥行一四〇センチ

クラには、収穫物や荷物を付けて運ぶための運搬用としてのシログラや、田畑の耕起のためにスキを引いたり、田植えの時のシロ掻きでマングを引いたりするための農耕用としてのシログラがあり、農村ではこの二種類が中心であった。馬用と牛用のクラでは若干の違いがある。写真は、馬用の運搬用のクラであるが、農作業用のクラではなく、人の乗馬用として使われたいわゆる乗り鞍である。

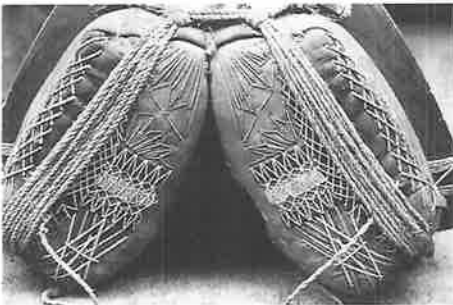
荻窪あたりでは、馬を昭和三十年代頃まで使っている家があったと言われ、写真のノリクラも終戦後しばらくまで使っていたという。



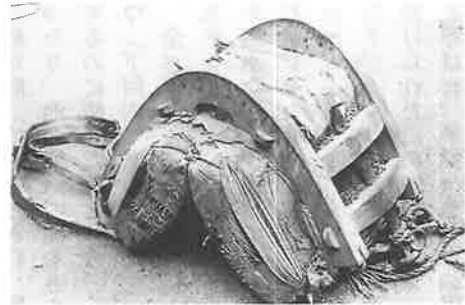
ニ グ ラ



ノ リ ク ラ



ニ グ ラ



ニ グ ラ

### ニグラ（亀泉）

全長一五〇センチ

主に、運送用として荷車を引っ張らせるためのニグラとして使ったものという。ムギアゲやイネアゲの際には、荷車に収穫したものを乗せて引っ張らせた。

側面の金具に運送のヒキボウを取り付けた。左側のバンドのような帯が、ニグラを馬に固定させるドウジメである。

### ニグラ（亀泉）

全長一七五・八センチ

馬用のニグラで、写真手前が前側である。

鞍は、木枠の部分の鞍骨とクッションがわりの藁を芯にした鞍薦（くらごも）でできているが、鞍骨のことをニグラワク、また、鞍骨の下部の横棒をカケボウなどと呼んでいたという。

ニグラを馬の背に固定するには、鞍の側面に見える繩に、麻の紐四本と布で編んで帯にしたドウジメ（腹帯）を取り付け、これを馬の前足のすぐ後ろの腹に回して結んで上下の動きをとめ、さらに鞍の前後の動きをとめるため、布製の帯を馬の首側と尻側に回して固定したという。尻側の帯は、いわゆるシリガイであるが、ここではシリドメという。

馬で運べる荷物の量は、稲や麦ならロツパ（六把）で、これをロツパニなどと呼んだ。また、俵なら、カケボウの上に両側で二俵は運べたという。

### ピクをとめる部品（下阿内）

#### 木製部品大

全長一二五センチ



ビクをとめる部品

木製部品小

全長—二七・八センチ

クラ

幅—三三センチ 高さ一〇・一センチ

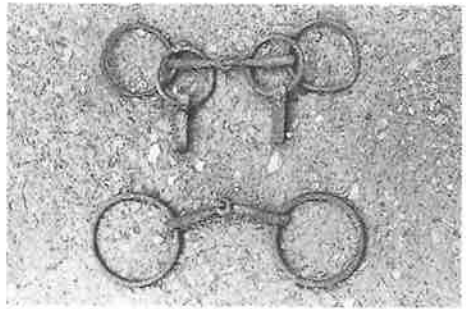
麦蒔きの堆肥の運搬には、梯子状の木枠の両端に縄でできた袋を取り付けたビクを使用した。この木枠の中央を馬の背に乗せ。両端のビクに肥料を入れて畑まで運んだ。

写真の木製の部品やクラと呼ばれる真鍮製の金具は、このビクを固定する部品である。クラの上部の山形の金具は、ビクドメと言われる。木製の部品をクラに縄で縛って止め、これにビクの木枠をのせて固定する。

フクミA (亀泉)

全長—二七・八センチ

フクミB



フクミA、フクミB

全長—二四・二センチ

馬を引く時のタズナを取り付けるための馬具の一つである。牛の場合には、鼻に取り付けた鉄の輪にタズナを取り付けるが、馬の場合は、これを口にふくませて取り付ける。

フクミAは、馬の首に回してフクミを固定するタテゴを結び付ける輪も付いている。

ショイデエ (端気)

幅—二三・五センチ 高さ—八四・七センチ

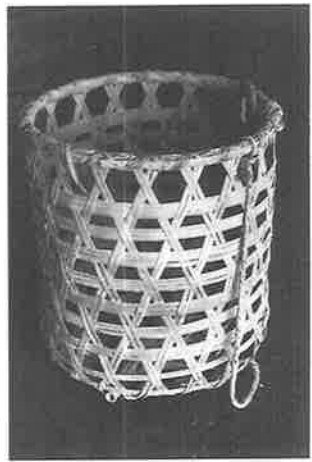
ショイデエと訛って呼ばれるが、いわゆる背負梯子といわれる背負い運搬具である。

写真のショイデエは、主に根切りしたクワゼイ(桑条)を束ねたものや麦束を運ぶのに用いられたもので、二束〜三束くらいをつけて運んだという。木枠状の柱の先の尖っている部分はツノと呼んでおり、ショイデエから上にはみだした束をさして運んだという。下部の柱に横に渡した木は、ヨコギと呼んでいる。

写真のショイデエは短いが、これ以外にも七尺ほどの長さの大型のショイデエもあったという。長いショイデエは、比較的軽くてか



ショイデエ



ザ マ

さばるもの、例えば麦束を運ぶのに用いられ、短いシヨイデエは、小さくて重量のあるもの、例えば桑束などを運ぶのに用いられていたという。

ザマ(メツブシ)(下

新田)

径一五六センチ 深さ一六二・五センチ

草刈りした後の草などを背負って運ぶための竹製、かご編みの運搬具である。ザマともクサカリカゴとも呼んでいたが、ナツゴ(夏蚕)の桑摘みなど、様々な用途に使っていたという。

馬の餌にするための草刈りは、オトコシユ(男衆)の仕事で、毎朝、まだ相手の人の顔が見えないくらい暗いうちに田圃のあぜなどに出かけ、三十分くらい草刈りしてカゴ一杯にして背負ってきたという。主に、このザマはオトコシユが使い、オンナシユ(女衆)はこれよりも軽いメケエを使ったという。

六つ編みを目潰しにした編み方で、メツブシなどとも呼んでいた。

ヤサイカゴ(総社)

幅一五一・五センチ 奥行一四〇・五センチ 深さ一三三・五

センチ

白菜や大根などの野菜を入れて運ぶ運搬用のかごである。

方形のざる編みのかごであるが、重さに耐えられるよう、縦に太い割り竹を編み込んでいる。荒物屋から買ってきたり、カゴヤに注文して作ってもらったりしたという。



ヤサイカゴ

コイオケ(総社)

径一三六・三センチ 深さ一四三センチ

畑の肥料にするコエを運ぶための桶である。

便所に溜まった人糞や、流しや風呂から出る家庭排水は、コイダメに移し変えて腐らせる。この腐らせたものをコエといい、畑の肥料にした。

便所に溜まった人糞は、コエビシヤクですくい出してコイオケに入れ、コイダメに移し変えた。コイオケの縁の耳に綱を張ってテンピンボウで担いで移動した。同様に、米のとき汁や風呂水などの排水は、オオダメといわれる地中に伏せた大きなカメに溜めておき、二カ月に一度かい出してコイダメに移した。コイダメに人糞も家庭排水も入れるのは、人糞だけの濃度を薄くするためという。

コイダメに溜めて腐らせたコエは、畑に運んで肥料として撒いたが、この畑への運搬にもコイオケが使われた。



コイオケ





ヤナ(総社)

径一四〇センチ  
長さ一六〇・四センチ  
畑の作物の肥料をコ  
エ(下肥)に頼ってい  
た頃の、下肥を運ぶた  
めの肥料運搬具であ  
る。

便所壺の人糞をコエビシヤクで汲んでコエダメに運んだり、腐敗発  
酵したコエダメのコエを畑に運んだりするのに使われた。

鉾用の綱を結んだ太い針金を両端の耳に内側から引つ掛け、この綱  
にテンピンを通して肩にかけて二人がかりで運んだ。畑に運ぶのは、  
昔は荷車がないときは馬の背に付けて運んでいたが、次第に荷車やリ  
ヤカーに変わり、後にはテラーで運ぶようになったという。

ヤナを運ぶときの揺れで中のコエ  
が飛び出すのを防ぐために蓋をする  
が、昔は藁を縛ってヤナの口に詰め  
こむことで蓋代わりにした。これだ  
と中のコエがこぼれることがなかつ  
たという。

ハコベントウ(上泉)

幅一二七センチ 奥行一  
三・一センチ 高さ一二八・  
二センチ

日常の携帯用の弁当入れには、弁  
当行季や曲げ物のメンバ、むすびな



ハコベントウ



ヤタテ A

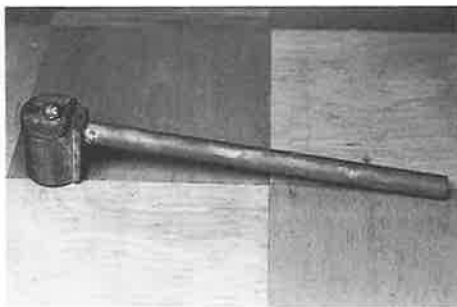


ハコベントウ

どを包む竹の皮などを用いていた  
が、ハコベントウは、春の山遊び  
や秋の月見などの行楽・遊山用の  
漆塗り弁当箱である。写真のハコ  
ベントウは、春の花見などで出か  
けたときに使用したものである。  
右側は三段重ねの重箱になって  
おり、左のユトウには、汁ものを  
入れた。これらを手提げ台にのせ  
て持ち運ぶが、持ちやすいように  
手提げ台の上に掲げカンが付いて  
いる。

ヤタテ A(上泉)

全長一二三・八センチ 墨



ヤタテ B

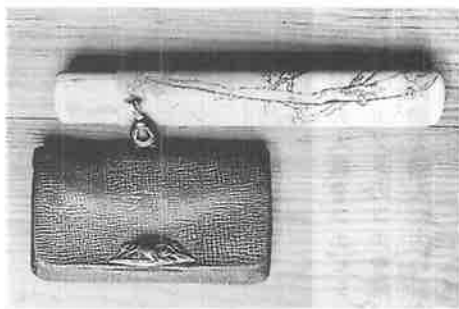
壺径一三・五センチ 墨壺高さ一三・九センチ  
ヤタテB

全長一二〇・七センチ 墨壺幅一四・四センチ

帳簿などに文字を書いたり、旅先で手紙などの物書きをしたりする際に使用されたペンや鉛筆がわりの筆記用具である。硯や筆、墨などの機能をセットとしてまとめた携帯用筆記用具として、便利な道具だった。

柄の部分は筒になっていて筆が収められ、先端の墨壺の中には墨汁を湿らせた綿が入っている。写真のヤタテは真鍮製で、両方ともひしゃく型ヤタテである。左のAは、墨壺も筆を入れる柄の部分も円柱でデザインしており、右のBは箱形にデザインするなど意匠にも凝っている。

キセルイレ（上泉）  
全長一二〇・七センチ



キセルイレ、タバコイレ

幅一三・五センチ

タバコイレ（上泉）

全長一一一・七センチ 幅

一七・四センチ

キセルイレは、煙草をのむキセルを収納する筒で、タバコイレには刻み煙草が入っている。

キセルイレは象牙製で、模様が入っており、タバコイレには根付けが見られる。キセルイレとタバコイレを根締めでつないだ腰差の煙草入れで、キセルイレを帯などに差し込

んで歩いた。

## 六、交易に関する資料

トマス（下新田）

径一三一・五センチ 深さ一三一センチ  
穀物の計量用の一斗柄である。

脱穀した後の、米や麦などの容量を計るのに用いた。

トカキ（カギ）（総社）

径一三九・五センチ 深さ一二八・五センチ

トマス（総社）

径一五・五センチ 長さ一三九・五センチ

脱穀後の麦や米を計るのに用いた容量一斗の計量具で、トマスに山盛り（山をかけるという）して、トカキで削るように表面を平らにす



トマス



トカキ、トマス

る。

夏は、六月上旬の大麥の收穫、七月上旬の小麥の收穫があつた。脱穀した麥を干して水車で搗いた後、重さ六十キロ、容量四斗入りの俵に詰める。このときにトマスとトカキボウを使つて計量して入れた。こうして保存した麥は、その後、大麥はオシムギにし、小麥はヒキワリにして食べたという。

秋には、稻を脱穀する。脱穀した後の籾は、籾摺りをして玄米にするが、これを俵に詰めるのにトマスで計つて入れた。

トマス（鳥取）

径—三一・七センチ 深さ—三〇・二センチ

トカキボウ（鳥取）

径—五・六センチ 長さ—三八・六センチ

籾摺り後の玄米を俵に計つて入れる際の計量具で、縁の周囲にカナパンを回しておらず、把手も付いていない桶の形のトマスである。太い針金で桶を締めている。

トマスとトカキボウ（亀泉）

トマス

径—三二センチ 深さ—三一

センチ

トカキボウ

径—五・七センチ 長さ—三

九センチ

米や麥などの穀類の量を計るための計量具の一つである。

トマスは、容量が一斗（十八リットル）入りの枡で、枡に入れた穀類



トマス、トカキボウ



トマスとトカキボウ

はトカキボウで余分な量を掻き落とした。俵の米は、これで計つて四斗で一俵とした。

写真のトマスは、縁などを鉄で補強しており、持ち上げやすいように鉄の把手が付いている。

トマスとしては、写真のような円筒形をしたもの他に、箱形のものや古いもので小判型をしたものなどがある。また、普通の桶の形のトオケと呼ばれるものもある。

トマス（竜蔵寺）

計測なし

トマスは、米麦などの穀物や酒などの液体の容量を計るための計量具である。写真のトマスは一合枡や一斗枡など用である。他に一合枡や一斗枡などの種類があり、計る量や物で使い分けた。

トマスの側面に

金子桃山  
五社稻荷

の刻印が見られる。

サシ（竜蔵寺）

計測なし



トマス



サ シ



サ シ

米俵から米を抜いて品質を調べるための検査用具である。写真の上と下は竹製で自家製、中央は金属製のサシである。米の検査員は、中央のサシのような専用のサシを使っていた。中央のサシには、象牙の飾りも付いている。抜き取る米の量でサシの大きさを使い分けたという。

サシ (亀泉)

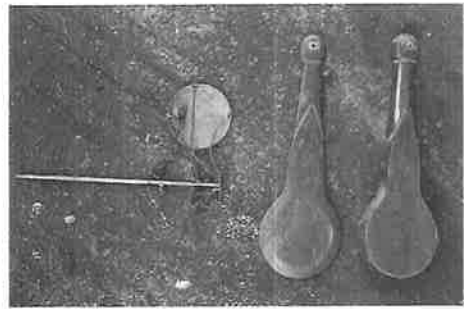
長さ—三九・一センチ

米俵に詰めた玄米を検査する際に使われた道具である。尖った先端部を俵に差し込み、米を少し抜き取って品質等を検査する。

手で握る部分は木製、差し込む部分が金属製の筒状になっている。このような金属製のしっかりしたサシ以外にも、竹の筒を利用したのものもある。

フンモンメバカリ (鳥取)

竿長—二二センチ 皿径—六・六センチ



フンモンメバカリ



イトバカリ

竿秤の一種であり、軽量の物の重さを計るのに用いた。

イトバカリ (端気)

長さ—三九・六センチ

生糸の重さを量るための竿秤であるという。ザグリでとった糸は、揚げ返しをして乾燥させ、これを束にしてカセとするが、イトバカリは、このカセにした生糸の重さを計量したものである。

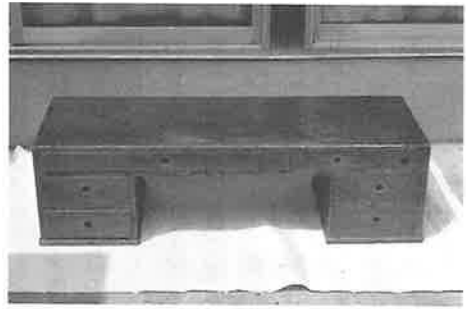
軽量の小型の竿秤で、錘には「貳貫」の刻印がみられる。写真上の皮袋は、竿と錘を収納する容れ物である。

チョウバツクエ (竜蔵寺)

幅—一五センチ 奥行—四二センチ 高さ—三二・六センチ

チョウバゴウシ (竜蔵寺)

幅—二一・四センチ 奥行—三七・三センチ 高さ—三七・八センチ



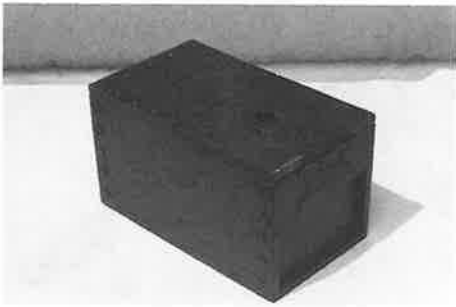
チョウバツクエ、チョウバゴウシ

金銭出納や記帳をするための場所とお客との間を区切るための帳場格子、記帳などの作業をする帳場机で、写真のようにチョウバツクエをチョウバゴウシで囲む形で使う。  
金銭出納の関係で、ゼニバコもこのすぐ近くに置かれた。

チョウバツクエには、ダイフク  
チョウヤやスズリバコ、ソロバンなどを  
収納する引き出しが付いている。  
チョウバゴウシは、両袖の折りた  
たみができる三枚物である。

ゼニバコ（竜蔵寺）

幅一四五・二センチ 奥行  
一 二六・四センチ 高さ一  
二六・二センチ



ゼニバコ

銭を出し入れするための米櫃式の  
銭箱である。檜製で、周りを鋸で打っ  
て止め、銭を取り出す蓋には鉄製の  
縁金を取り付けたしつかりしたつくり  
になっている。開け閉めをする蓋  
の縁金には、錠前を取り付けた跡が  
見られる。  
質屋をやっていた頃のゼニバコと  
思われる。

箱（名称不明）（竜蔵寺）

幅一三四・一センチ 奥行  
一 二二・二センチ 深さ一  
三センチ

なんと呼んでいたかははっきりし  
ないが、小銭や書類入れに使って  
いたという。大正十二年まで質屋を  
やっていたというので、そのころの  
交易用具かと思われる。

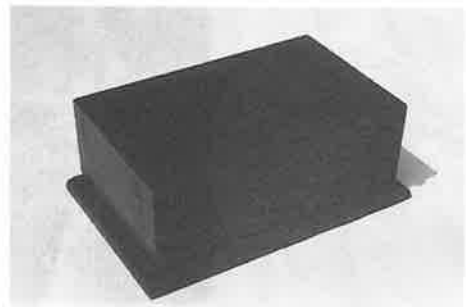
質屋組合の申し合わせ書（竜蔵寺）

明治四十年の勢多郡質屋組合によ  
る申し合わせ書である。

貸し付け金の利子の割合、質流れ  
の期限、営業時間と休業日が定めら  
れている。

テンピンバカリとタマ（下阿内）

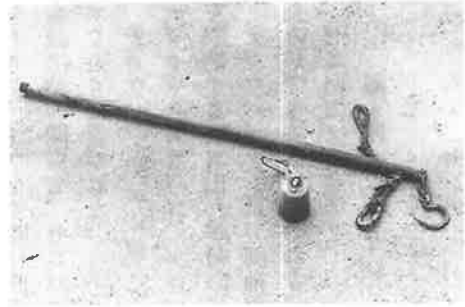
全長一四一センチ タマ径



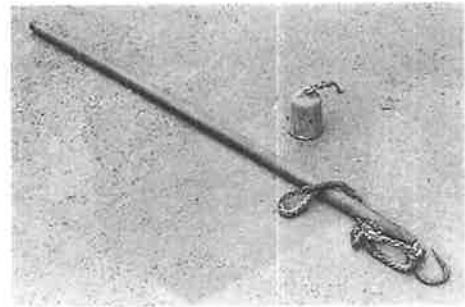
箱



質屋組合の申し合わせ書



テンピンバカリとタマ



サオとタマ

一九・五センチ タマ高さ一四センチ  
竿秤で、米麦や、繭などの重さを測った計量具である。

竿には表と裏に別の目盛りがついており、測るものの重さによって使い分けた。例えば、米俵などのような重いものは、八貫〜二十六貫までの目盛りで測り、繭の入ったユタンという袋などの比較的軽いものはウラバカリといって一貫から十貫までの目盛りで測った。梅を測るのにもウラバカリを使ったという。

米俵一俵は十六貫で重いので、米俵の周りにめぐらした縄に鉤を引っ掛け二人がかりで測った。繭を入れたユタンは、ユタンの口を縛った紐に鉤を引っ掛けて測った。

サオ (亀泉)

長さ一四一センチ

タマ (亀泉)

径一九・四センチ 高さ一四四センチ

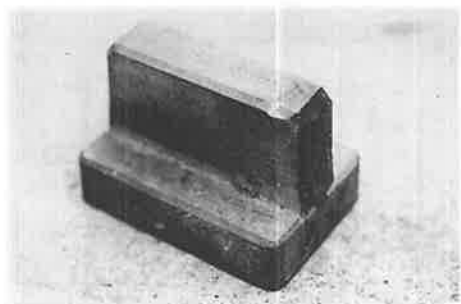
棹秤(さおばかり)で、これで米俵を計ったという。棹秤には、計るものによって大小様々あり、錘も石でできたものもあった。

写真の錘には、「群馬 秤量貳拾六貫」の刻印がある。

質屋のハン(荻窪)

幅一四・六センチ 長さ一六・六センチ 高さ一四・六センチ

かつて質屋を営んでいた頃の質札用の版である。必要なお金がないときには、着物などの物品を質屋へ持って行って、その物品に相当するお金を借りてきたが、その際、質物預かりの証拠として質札が渡された。その質札の文面をこの版で作った。



質屋のハン



## 七、社会生活に関する資料

### ホンゼン（上泉）

縦—三二・五センチ 横—三二・五センチ 高さ—一三・三センチ

人寄せ用の会席膳である。

終戦まで続いていた諏訪神社のお祭りの宿をしていたころの人寄せで使ったもので、碗のセットとともに二十人分くらいの数があるという。

ゼンは、四本の足が付く四足膳で、かつ足が銀杏の葉の形をしているところから銀杏足膳とも呼ばれる。

正式な会席の場合は、本膳・二の膳・三の膳が用意された。このうち、写真は本膳として使用された膳であり、次の写真のニノゼンよりも一回り大きい。



ホンゼン

本膳にのせられる碗や皿は、入れる料理や並べる位置が決まっている。飯や汁を入れる碗は、身よりも蓋のほう小さい。写真右上が飯を入れるオワン、左上が汁を入れるシルワンである。おかずを入れる碗は、身より蓋のほう大きい。写真右下が芋・人参・大根を煮つけたもの（葬式の場合は、油揚げやウチモノといわれる米の粉を材料にした蓮の花の菓子）を入れるヒラ、左下がザクと

いわれる野菜を醤油で味付けしたものを入れるツボである。オワンとシルワンに挟まれた陶器製の容器は、オチヨコと呼ばれ、煮た豆を入れる。また、中央のオサラには、尾頭付きの魚のをせる。

### ニノゼン（上泉）

縦—三〇・五センチ 横—三〇・五センチ 高さ—一一・四センチ

本膳と同様の銀杏足膳である。本膳と組になって二の膳として使用され、三の膳とともに本膳の左右に置かれる。

二の膳、三の膳には本膳にのらない料理が置かれた。写真のニノゼンの碗にはお吸い物が入ったという。

### ユトウ（上泉）

全長—三三・五センチ 径—一三・八センチ 深さ—一三・五センチ

お祭りや結婚式の時などの人寄せの時、ウドンの汁をシルワンに入



ニノゼン



ユトウ

れるのに使った道具という。

ウトウは、もとは銚子の一種で、婚礼などの酒宴で酒を注ぐ酒器であつたが、ここでは汁を注ぐ容器として使われていた。

曲げ物でできた容器に長い柄を取り付けたもので、黒漆が施されている。

#### チヨウシ (上泉)

径一五センチ 深さ一九・五センチ 全長一二二・五センチ  
ウトウなどとも呼ばれ、急須型の酒器で、婚礼の際や正月の屠蘇を飲むときなどに、盃に酒を注ぐのに用いられた。

写真のチヨウシは鉄製であるが、胴部には桐の紋をつけており、つくりが凝っている。二つ一組で使用する。

これに雌蝶・雄蝶を取り付け、花嫁・花婿の三三九度で稚児が神酒を注いだ。

#### チヨウシ (竜蔵寺)



チヨウシ



チヨウシ



ホカイ

全長一二三・八センチ 径一六・七センチ  
鍋型の容器に鉷(つる)を渡したいわゆる提子(ひさげ)といわれる酒宴の酒を注ぐ酒器の一つである。

写真のチヨウシは、婚礼が各家で行われていた昭和三十年前後まで使われていたものといわれる。赤と黒の一对が揃っていて、男女の花嫁・花婿の三三九度の盃のお御酒を注ぐのに使った。婚礼が近所で行われるときには、施主が借りに来たという。

金属製のチヨウシで表面に塗りが施されている。  
ホカイ(上泉)

径一三五センチ 深さ一二〇センチ

婚礼などの祭事に赤飯を入れて運ぶための食物運搬具である。

蓋付きの円筒形で、周囲は黒漆、中は赤漆を施している。

婚礼の翌日の朝、ホカイにお赤飯を入れて実家に届け、実家では長生きするようにと梅干か麻糸を入れて返したという。

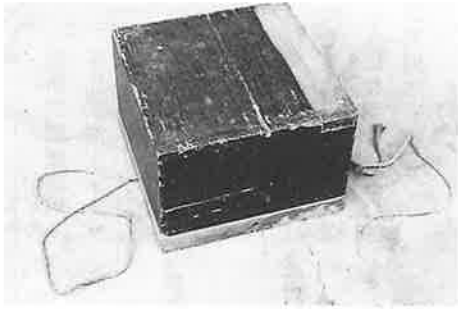
また、親戚が家を新築する際の夕  
テマエの時には、夕テマエの祝いとい  
うことで、三寸四方の薄いグシモ  
チを三升入れて持つていく。帰りは、  
投げられたグシモチを入れる他、新  
築する家がくれた付け木(後には  
マッチ)を入れて帰った。

ホカイ(竜蔵寺)

径一三五センチ 深さ一二四  
センチ

祝い事のあるときに、餅や赤飯な  
どを入れて届けるための食物運搬の





ホケエ

親戚のタテマエのお祝いの際などに、餅米で作ったゴシンモチをホケエに入れ、お包みと一緒に持っていった。ゴシンモチだと三升は入る大きさで、五枚ずつのゴシンモチを

ホケエ (萩窪)

径一三五・八センチ 深さ  
一五・五センチ 足高一四  
センチ



ホカイ

写真のホカイは、親戚の家で新築の上棟式があったとき、一臼四分の餅を搗き、薄く伸ばして切った餅五枚を藁で縛って持って行ったものという。この餅をゴシモチという。他の親戚の家からもゴシモチが届けられるが、新築する家では、届けられたホカイを、棟上げの終わった家に設けられた踊り場に並べ、集まった人たちに向かってホカイの中のゴシモチを投げる。

また、結婚式の次の日の朝、嫁の実家に赤飯を届けるのにもホカイが使われた。赤飯の上に南天の葉をのせ、嫁以外の人が持つて行ったという。



ホケエ

ショウカポンプ (萩窪)

高さ一六二・三センチ  
空気入れのような形の横に付いているタンクにプレートで



ショウカポンプ



ホケエ

藁で束ねて中に入れた。ホケエを棟に上げ、ゴシンモチを取り出しては集まった人に投げる。  
ホケエの底板に二の焼印がある。また、ホケエを収納する箱の底板の裏には、「寛保九年」の墨書が見られる。

最新式墳霧両用  
手島式消火ポンプ  
手島□筒商会  
前橋市西片貝町二九番地

とある。

写真の消火ポンプは金属製であるが、仕組み自体は木製のリュウドスライ(竜吐水)と同様に、ポンプで水を吸い上げ、水圧で水を飛ばすようになっているのである。ただし、水を飛ばすホースか筒(?)が欠損している。

## 八、醤油づくりに関する資料

### 醤油製造用具と醤油づくり(川原)

川原町では、昭和三十年頃まで十軒で一組、合計六組(六十軒ほど)からなる醤油の加工組合があった。これが醤油製造用具を共有し、用具を使用する組の順番を毎年決めて、共同で醤油づくりを行っていた。



醤油しぼりの道具  
を共同で設置する

「醤油づくりは、春の「仕込み」から始まって晩秋から初冬にかけての「醤油しぼり」までの作業である。この「醤油しぼり」は、共同の作業でやるため、組内の中で広い庭のある家が、回り番で庭を貸すようにしていた。また、最後に「醤油しぼり」の作業を行う組をカギアズカリといい、使用した用具を共有の精穀所に収納する義務があった。

### 〈仕込み〉

四月の花見の春蚕の掃き立ての頃に、麦麴づくりとモロミづくりの作業が始まる。

—小麦粉に挽く—

最初、麦麴にするための小麦粉を作る。小麦の量は、仕込みの量によつて違うが、一斗から一斗五升ほどを使う。精穀所で軽くイロムキした小麦を二斗入りのタルに入れ、タルから五合くらいずつを出してはホイロで焼く。ホイロの中の小麦粉をタカボウキで掻き回しながら、焦げて匂いがする程度にまんべんなく焼いた後、ムシロの上に出す。これを精穀所の粉碎機とイシウスで粗く砕く。これが麦麴のもとになる。

—大豆を煮る—

一方、この小麦粉と混ぜるための大豆を煮る作業が各家で始まる。



ホイロで小麦を焼く  
ホイロ 長径—93.5センチ  
短径—80.8センチ



ニガマで大豆を煮る

作業に使うニガマは、各家に順番で回す。ニガマが回ってきた家では、庭で大豆を煮る。大豆は、三家族分一緒だと二斗くらいを使用する。ニガマで沸かした湯の中に大豆を入れて煮るが、大豆が煮えてくると泡がいつぱい出てくるので、泡切り用に小糠を混ぜる。こうして、昼頃に火を入れて夕方まで煮た大豆は、一晩そのままにしておく。翌日、ニガマの中の大豆をスイノウですくってムシロの上に広げ、ガイドコロなどで日陰干しをする。この後、小麦粉、麴菌と混ぜる作業に移る。

—モロミの原料になる麦麴をつくる—

小麦粉は、麴菌を入れて何回もよく掻き混ぜる。これと大豆とをよく混ぜ、カイコカゴに敷いたムシロの上に広げてジョウロで水を軽くかけ、ミナガワのムシロを被せて発酵をさせる。発酵が終了するまで二日ほどかかる。発酵するにつれて熱が出てくるので、厚めに広げておいたものを薄くする作業をする。この熱を冷ますための作業を、一番手入れ、二番手入れなどといい、固くなっているのをほぐしたり、広げたところに手ですじを入れたりした。発酵が進むと次第に黄色く変色して、二日目の最後には真っ黄色になる。これを麦麴という。

—モロミをつくるための仕込みをする—

次は、モロミオケへの仕込みの作業になる。まず、塩を溶かした湯をモロミオケに八分目ほど入れる。次に固まった麦麴を手でほぐしながら入れる。そして、ヘラ状のボウでよく掻き回す。この掻き回す仕

事がこの後ずっと続く。モロミオケは、ガイドコロなどの日陰に置いて、初めは三日か四日に一回の割りで掻き回すが、夏になると毎日やるようになる。掻き回すのは発酵を早めるためで、これは、主に子供の仕事だった。

〈醤油しぼり〉

山仕事が終わる十二月の初旬、醤油しぼりの作業が広い庭のある家で行われる。庭には、左図のように醤油しぼりの用具が設置される。

—モロミ集めをする—

各家で作ったモロミがリヤカーで共同で集められる。集めたモロミオケは、庭の隅に一列に並べておく。

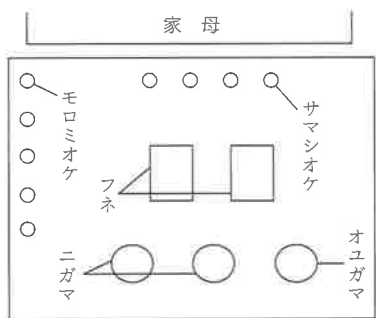
—醤油しぼりの準備をする—

まず、モロミをバケツですくって麻袋の中に入れる。さらに、袋の中の空気を抜いたモロミの四つの袋を、フネの中の底に敷いたソコイタに入れ、その上にナカブタをのせる。さらに、バンギをナカブタの上に重ねて置いて、モロミをしぼるためのジャッキボウを据え付ける。

ジャッキボウの高さはバンギで調節する。最後に、ジャッキボウをトリイで挟む。

—醤油しぼりをする—

ジャッキボウを四人がかりで締め下して圧力を加えて汁をしぼり出す。汁はフネの下の口から出てくるので、バケツに受けて、いつぱいになったらニガマに移す。





ニガマ 径—75センチ  
深さ—53センチ



ニガマをかける鉄製のヘツツイ  
径—72.5センチ  
深さ—61.5センチ



サマシオケ  
径—68.3センチ  
深さ—70センチ



醤油しぼりのフネ  
幅—100センチ  
奥行—69.5センチ  
深さ—70センチ

醤油しぼりは二回行われ、最初の醤油しぼりを一番、二回目を二番という。一番の時は濃い汁が得られる。二番のときは、オユガマの湯を入れてしぼるので薄い汁になる。オユガマの湯をスイギンサマと呼び、二番のときに湯を入れることを「スイギンサマをきかせる」、湯を足すことを「スイギンサマをおごる」などと言われた。また、ジャツキボウで汁をしぼることを「ヨントマケをする」といい、四人で歌を歌いながら作業した。

—汁を煮詰める—

汁を煮詰める作業では、ニガマに色付け用としてのカラメルと、砂糖（ザラメを使うところもある）、塩を入れ、汁と合わせてニガマに八分ほどの量になったら煮詰め始める。汁を煮ながら醤油の表面にたまった泡をアワトリで取り除き、二時間ほど沸騰させて煮詰めるようにする。煮詰め終わると、ヒシヤクですくってテオケに入れ、それをサマシオケに移しかえる。

—醤油を冷やす—

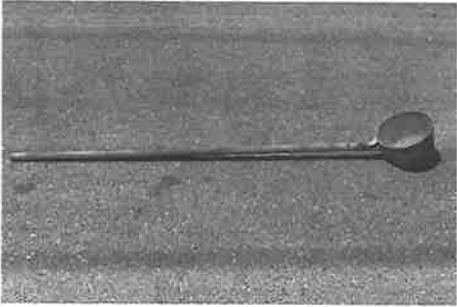
サマシオケに入れた醤油は、朝までそのままにして冷やす。翌日、冷えた醤油をヒキオケに入れ、スイカンを使って自分の家のイットダルに詰め替えて持ち帰る。



アワトリ 径—20.5センチ  
深さ—6.8センチ



ソコイタ 幅—79.5センチ  
奥行—59.5センチ



ヒシャク 柄長—137センチ  
杓部径—18.2センチ  
杓部深さ—11センチ



ナカプタ 幅—78.7センチ  
奥行—59.2センチ



ヒキオケ  
径—55センチ  
深さ—53.5センチ



ジャッキボウ 把手長—66.5センチ  
高さ—42センチ



バンギ

## 九、信仰・年中行事に関する資料

おふだ各種（上細井）

「元三大師の厄除け札」

竜蔵寺は、厄除けで知られている。左側の二枚は竜蔵寺で出された厄除けの札で、右端が魔除け、その左が盗難除け用の札である。家の入り口の柱などに貼られた。

「元始祭祝禱御爾」

一月一日の元旦に坊さんが回って配るお札である。神棚に上げておいた。

「群馬県護国神社養蚕御守護」

四月上旬に農協から配られる。蚕室の柱などに貼っておく。

「御祈禱之牘 延暦寺」



スイセン



トリイ 幅—102.2センチ  
高さ—135センチ



おふだ

シヨウガツダナ（嶺）

幅—一七二・八センチ 奥行—三七・二センチ

シヨウガツダナは、お正月様を祭るための祭壇で、天井から吊るしてメ縄を張り、供物などを供えるのに用いる。毎年、恵方の方向に向けて設置する。

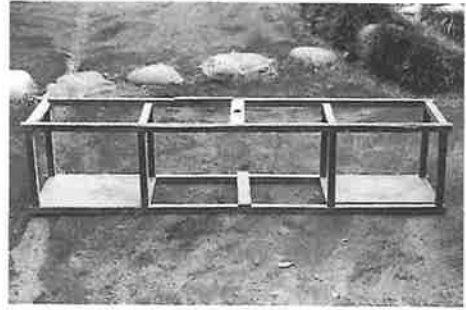
総社神社の祭り道具（総社）



総社神社の祭りの道具



アブチ



ショウガツダナ

し、三十八歳までのワカイシユ（若衆）がこの馬に乗って総社神社まで競争し、神社の周囲を回って、最後に獅子と出会ったという。この

写真の馬具や幟（のぼり）は、大正十三年まで、毎年九月九日に行われていた総社神社の祭りで使用されていた道具で、大正十四年の火災後、これらの道具を使った祭りは途絶えた。

祭りの由来は、秋元長朝が天狗岩用水の完成を祈願して総社神社に願掛けをしたことに始まるという。

九月九日の本祭りのときには、元号寺の粟島、鍛冶町、巢鳥、野馬塚の五つの集落から各二頭の馬を出

祭りのために、祭りの一週間前には、各集落のワカイシユが馬に乗る練習をしたという。

アブミ（総社）

全長—二七センチ 幅—一一・六

センチ 高さ—二七・五センチ

鞍の両側から吊り下げて騎手の足を支える道具で、鉄製である。新しいものと古いものの二組、計四足あり、新しいアブミには、

「加州友人作」

の銘が見られる。





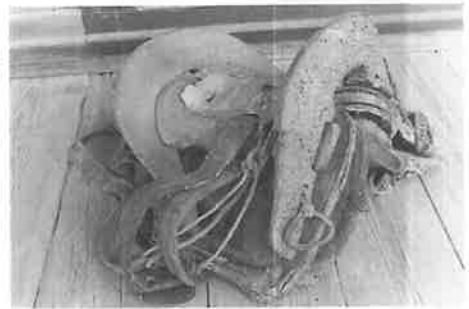
ク ツ ワ



ク ラ

騎手が騎乗する際の鞍で、鞍の骨格をなす鞍橋(くらぼね)の前輪(まえわ)、後輪(しずわ)とも木枠に厚く和紙を重ねて輪の形にしており、見かけ以上に軽く作られている。三点のクラが残されている。  
 クツワ  
 ハミ長―二五センチ 鏡板径  
 一八・七センチ

クラ  
 全長―三六・八〜三八・八センチ  
 幅―三六・五〜三七センチ  
 高さ―三四〜三五センチ



ク ラ



ジンガサ

馬の口にはませて手綱を取り付け、馬を制御するための道具で、馬の口にはませるハミと、手綱を取り付ける引手(写真では、模様布の手綱が付いている)、馬の首にクツワを固定する面繫(おもがい)の綱を取り付ける鏡板(写真では、桐の葉の模様)からなっている。  
 アオリ  
 幅―六〇センチ 高さ―四九センチ  
 障泥(あおり)と呼ばれる馬のはねる泥を避けるための馬具の一つである。



ジンガサ



アオリ





ヒシャク

ヒシャク

柄長—四九・七センチ 杓部  
 径—一・五センチ 杓部深  
 さ—一〇・二センチ



ジンガサ

ジンガサ

円錐形径—三七・五センチ  
 円錐形深さ—一センチ 土  
 分級陣笠径—三二・二センチ  
 士分級陣笠深さ—一四センチ  
 軍陣に際して被る笠で、陣笠の初  
 めは、雑兵が使用していた鉄製の円  
 錐型の陣笠であつたが、後には、笠  
 の前をめくり上げた士分用の笠も出  
 てきた。円錐型は新旧が二つが残さ  
 れており、士分用の笠とともに和紙  
 製である。



ノボリ

ノボリ

計測なし

幟は、二枚あり、そのうちの二つには、  
 「人非本業皆無檢

大正八年十月吉日 粟島町

保岡城山筆」

もう一つには、

「里有仁風即大和

□□□□□ (欠損)」

の墨書が見られる。

幟は、村の上・中・下に二本ずつ、

計六本を立てたものという。

ウマノワラジ

長径—二一センチ 短径—一  
 六センチ



ウマノワラジ

前橋市民俗調査協力者名

調査地	氏名
前橋市端気町二六四	五十嵐昌市
前橋市端気町二六四	五十嵐さだ
前橋市端気町三七〇	近藤 勲
前橋市鳥取町	大沢清作
前橋市鳥取町	佐藤一三美
前橋市嶺町	青木房男
前橋市下長磯町二八九	中沢義男
前橋市下長磯町	笠原三喜
前橋市下長磯町二九九一	中沢福治
前橋市下長磯町一九一	大沢正雄
前橋市下細井町	金子清次
前橋市下細井町	萩原美次
前橋市下細井町	天野利雄
前橋市下細井町	田子利太郎
前橋市下細井町	木村かね
前橋市下細井町	相沢ぬい
前橋市下細井町	木村かつ
前橋市下細井町	萩原幸雄

前橋市龍蔵寺町	小池もりよし
前橋市龍蔵寺町	今井福二
前橋市龍蔵寺町	今井清平
前橋市龍蔵寺町	今井ふく
前橋市龍蔵寺町	渋川いし
前橋市龍蔵寺町	今井徳次郎
前橋市龍蔵寺町三一―一〇五	渋川種吉
前橋市龍蔵寺町	斎藤恵佐雄
前橋市田口町	金子とし
前橋市田口町	金子進一
前橋市田口町	中林重吉
前橋市上新田町九七六	中島英男
前橋市川曲町四四四	関口□□
前橋市総社町	田口葉雄
前橋市茨窪町一〇八	柴崎千之
前橋市亀泉町三五四	田村忠之
前橋市上泉町	田村志づ
前橋市上泉町一八一一	角田雅夫
前橋市下阿内町四七	角田ふみ江
前橋市下阿内町四七	

醤油づくりのお話をしてくださった川原町の皆さん  
 総社神社の祭礼用具を見させていただいた総社町の  
 皆さん

## 五、民 家（上川淵・下川淵・旧木瀬・本庁管内）

今井雄二家〔櫛島町〕 当家の屋敷は、土地改良で屋敷と畑が一体と成り大変広い。敷地の形状はL字形をしており、南の道路より広い畑を通して屋敷に入る。屋敷部分を見ると、東西に長い長方形をしている。

建物配置を見ると、屋敷のほぼ中央に主家を置き、主家の東側に北からコヤ・ベンジョ・ヒガシノコヤと南に向かって立てている。西側を見ると蔵・ニシノコヤと東側と同様に南に向かって立てている。この他の建物として、裏手にコヤがある。

当家のオイナリサンは主家の北西敷地の角隅に、石垣を築いて二基の石宮で祀っている。石垣は主家の床より高く祀るために石垣を築いたとのことである。

樹木を見ると北側にカシを列状に植えて防風林としている。西側にも同様に植えたと考えられる二本のカシが今も残っている。

土地改良の為、昔の様子が定かでないが北と西に濠跡を認める事ができた。

目崎いよ家〔朝倉町〕 当家は南部水田地帯にあり、周囲の様子は平坦地が広がっている。敷地の形状は南北に長い長方形で、敷地の南東角隅をカドと呼び出入り口としている。

建物配置を見ると、敷地の中央北より主家を置いている。主家の東側にミソゴヤを置き、その南にソトベンジョを持つコヤ（ウマヤ）がある。又、主家の南西にはニシノクラがある。敷地の南東カドの北

側にミナミノクラ（土蔵）がある。この他主家の南に二棟のコヤもある。

敷地の北西隅にスイジンサマとオスワサマを一緒に祀っている。

樹木を見ると、敷地の北側と西側にカシを防風の為に植え、主家の南にツボヤマを築いている。この他、樺や柿の木を多くみうける事ができた。

持田清美家〔鶴光路町〕 当家は市の南部水田地帯にあり、周囲の様子は平坦地である。当家は敷地の周囲に濠を巡らしている。特に北側は二重の濠を巡らしている。当家は持田本家と呼ばれ、東側に二軒の新宅があり、当初は三軒が濠の中にあつたという。二軒の新宅に敷地を分けたため現在は西側半分程度の様子を残す状況である。

建物配置を見ると、主家を敷地の中央に置いている。主家の東に離れを置き、南にガレージ・サギョウジョとカイドに沿って南に向かつて立てている。主家の南西にドゾウを置き、裏手にはワラゴヤとイトゴヤを立て、ウシゴヤを北東の地に置いている。

当家のオイナリサンは、敷地北西の内濠と外濠の間で、土手上に祀っている。この他三峰様を新宅と三軒で祀っている。

樹木を見ると、濠付近を中心に雑木林で緑の小山という感じがするほど緑が多い。この他、南側の濠の土手上に松を植えている。

下敬治家〔小島田町〕 当家は国道五〇号小島田交差点北西の段丘上にある。敷地の南側は低い山地で、北側は古墳がある。したがつ

て、全体として凹地の中に建物が入つた状況である。

建物配置を見ると、敷地の西側を通る道路に接して主家を置いている。主家に続けて東に離れ・ベンジヨをもつ蚕室を続けて配している。又、離れ・蚕室の南に少し離れてコイを設けている。コイの東には下屋根を設けてドウグオキバとしている。

樹木を見ると、敷地の北側と西側を通る道路境にカシグネを設けて防風としている。古墳の頂上には、阿弥陀様と薬師様を祀り、周囲を若い樹木と竹林を植えている。

当家のイナリサマは、主家の北側中央でやや東寄りに祀っている。

**下田承男家〔小島田町〕** 当家は、国道五〇号小島田交差点北西の段丘状地形上にある。敷地は平坦で東西に長いほぼ長方形をしている。当家は、カイドを敷地の西側を通る道路の南西角隅に東向きに開いている。

建物配置を見ると、敷地の中央よりやや北西に主家を置いている。主家の西側に蔵を置き、倉の南側にデイを設けている。主家の東にはベンジヨを置き、さらにベンジヨの東に続けてヒガシノコイ（ウシゴヤ）を置いている。敷地の中央南側に門を設け、門に続けて東にナガヤ・コイと建っている。当家のイナリサマは敷地の北西隅に祀っている。この外、北東角隅にはアイゼンミウオウ・さらにミツミネサマを祀り、ツボヤマの中にサルダヒコを祀っている。

樹木を見ると、門の脇に立派なツボヤマを設けている。この他、東のコイの前や蔵の裏にも緑を多く見受けける。

**清水真家〔中内町〕** 当家は駒形十字路を西に向かって進み、東善交差点を南に向った水田地帯の中にある。敷地を見ると、南側の道路に接して南北に長い畑があり、その北に屋敷がある構成である。このためカイドが大変長く、付近の家からナガケイドンチと呼ばれている。

建物配置を見ると、敷地の中央奥に旧主家を置いている。旧主家の東に現在は無いがソトベンジヨが以前あったという。ソトベンジヨの南に下屋を持つウシ小屋を設けている。旧主家の西側には大正九年に立てた五間×二・五間の蔵がある。この蔵は内部を二つに分けてコクグラとキタグラとして使っている。現在では新しい主家を旧主家の南に立てている。

当家のオイナリサンは旧主家の北西で蔵の裏手に祀っている。

樹木を見ると、南を除く屋敷の三方向をカシグネと雑木林で囲い防風林としている。

**諸岡茂家〔西善町〕** 当家の周辺は、平坦な地形で水田地帯である。以前敷地の周囲に以前は濠を巡らしていたという。現在でも濠跡を敷地内に残しているのが確認できる。

建物配置を見ると敷地の北西奥に主家を置き、主家の東側に北からヒガシノクラ（クワバ）・ベンジヨ・クラ・ウシゴヤ・タイヒシヤと南に向けて建物を立てている。又、主家の南に養蚕のためジョウソウ育用のバラック建て、南西の濠を埋めたてた所に蚕室を設けている。カイドウは主家の南に向かって開き、濠を渡って入る形式となっている。当家のオイナリサンは、主家の北西に位置し、裏手に現在も残る濠を渡って入った所に祀っている。

オイナリサンの周囲は竹林と雑木林で囲われている。

樹木を見ると、屋敷全体が緑に包まれていると感じさせるほど多い。特に濠の周辺はうっそうとした緑の山のようにであった。

**青木清家〔亀里町〕** 当家は南部の水田地帯にあり周囲は平坦な地形である。敷地の形状は南北に長い長方形で、敷地の北東角隅をケイドという出入口として開いている。

建物配置を見ると、敷地の北で東寄りに、ケイドに接して主家を置

いている。主家の西にハナレを置き、南東にクラを置いている。蔵の西側を見ると蚕室がある。また、蔵と主家の間には現在イドナガシがあるが、以前はこの所に門があった。この他、当家の南側敷地境にジョウソウゴヤを昭和五十年頃建てている。

オイナリサンは主屋の裏手やや西寄りに祀っている。

樹木を見ると、敷地の北側にサンゴジュを列状に植え、離れの南側にツボヤマを設けている。

**三輪武男家（亀里町）** 当家は、南部の水田地帯で周囲が平坦な地形の中にある。このため敷地の周囲に濠を巡らしている。敷地の形状は南北に長いほぼ長方形をしている。

建物配置を見ると、敷地のほぼ中央に主家を置き、主家の北西に接してハナレを設け、ハナレの北にセドグラを置いている。また、主家の西側は南に向かってシングラ・ニシノクラと続けて建てている。この他敷地の南東隅にはヒガシグラを配している。東蔵の西で、主屋の正面にナガヤ（長屋門）がある。ナガヤモンの東をカドと呼び出入り口として開いている。この他の建物は主家と長屋門の間にコヤを設け、濠の外で南側にギユウシヤを置いている。

当家のオイナリサンは、敷地の北西で土手上にあり、濠を背にして祀っている。この他、ジジンサマをトーケイドと呼ぶ出入口の東に石宮で祀っている。

樹木を見ると屋敷の背後は雑木林が広がり、うっそうとした緑の森を感じるたはずまいである。

**金井義勝家（櫛島町）** 当家は、南部の水田地帯で周囲が平坦な地形の中にある。敷地の形状はほぼ菱形をしている。

建物配置を見ると、敷地の奥北側に寄せ、東と西の敷地境に接して主家を置いている。このため南に向って東側敷地境にベンジョを西側

境に物置を置いている。この他、南の道路を挟んでコイを二棟設けている。

当家はオイナリサンを主家の北西角隅に祀っている。その他サルダヒコを敷地の北東角隅に祀っている。

樹木を見ると、防風のため、敷地の北側と西側にカシを列状に植えている。その他では、主屋の南西側でカド脇にツボヤマを設けている。当家の北側を見ると濠跡を確認できる。この濠の使用目的が排水の為かカンゴウ跡かは確認できない。

**井野商店（駒形町）** 当家は、駒形十字路を北に向った所の商店街の東側に位置している。当家の敷地は、現在は主家を中心に道路に面した区域所となっているが以前は東側まであったという。以前離れと井戸を含んで他家に譲渡した為との事である。このため現在敷地は南北に長い長方形となっている。

建物配置を見ると、現在の敷地の中央で道路寄りに、店舗併用の主家を置いている。主家の北側に接して蔵を設け、主家と蔵の間をクラマエとして利用をしている。主家の東南方向に下屋を張り出して付けオカッチ・フロバ・ベンジョとしている。

当家のオイナリサンは主家の東南に祠っている。この他サルダヒコを蔵の奥北東隅に祀っている。

樹木を見ると、主家の南と東に庭を設けて樹木を植えているのが目につく。

**岡崎書店（駒形町）** 当家は、駒形十字路南側商店街の西側に位置している。当家の敷地は以前は西側道路まで通じていたというしたが、東西に長い敷地であったと考えられる。現在はこの敷地のほぼ中程を、ブロック塀で区切り東側を当家の敷地とし、西側は蔵を含めて他家の所有となっている。

建物配置を見ると、主家を敷地の北側に道路に寄せて置いている。主家の西側に渡り廊下で通じるアタラシイエを設けている。

当家のオイナリサンは以前旧敷地の北西の隅に祀っていたが、現在はアタラシイエの南西に祀っている。

樹木を見るとアタラシイエに南にツボニワを築いて植えている。

川島スズ家（小島田町） 当家は、国道五〇号小島田交差点北西の段丘上にあり、敷地は平坦でほぼ正方形をしている。当家はカイドを主屋の南東側道路に開いている。

建物配置を見ると、敷地の中央西寄りに主家を置き、主家の東にシモヤを置いている。主家の裏手を見ると、北の敷地境いに東からブタゴヤ・ツケモノゴヤ・カイコバと続けて配している。南側を見るとマエノコヤ（物置）がある。

当家のオイナリサンは、主家の北西で敷地の角隅に祀っている。

樹木を見ると主家の南西にツボヤマを設け、南東にツボキバト呼ぶ植木場を造って、沢山の樹木を植えている。また、北側にはスギやカシなどを列状に植えて防風林としている。

川島著作家（下長磯町） 当家は、市街地から南東に離れた水田地帯にある。敷地は平坦で南北に長い台形をしている。当家の現状は、該当建物は旧主屋と物置を残すのみである。そこで、建設当初の様子について聞き取り調査し再現した。

建物配置は、敷地の奥で北寄りに主家を置いている。主家の南東にソトベンジヨを持つコエを置き、南に向ってウシゴヤ・ブタゴヤ・タイヒバと続けて置いていた。主家の正面南側にツボヤマを挟んで蔵が以前あったとの事である。

当家のウジガミサマは、敷地の北西角隅にあり、三基の石宮で祀っている。石宮の中には、宝暦八年寅三月吉日と刻された古いものもある。

る。

樹木を見ると、現在はウジガミサマの周辺にわずかばかり残すのみであるが、以前はツボヤマもあり、蔵の南側には青ギリを植えて夏の暑さから穀物を守ったとの事である。

尾高俊之 当家は旧百軒町の足軽長屋があったという地域の中にある。このため周辺は狭い道路であるが、縦横に条理制を思わせる道路が通っている。この地域の一画で西側に道路を持つ地形に当家は現在建っている。しかし、この建物が足軽屋敷のものか断定できないが、付近では最も古い建物と考えられる。

建物配置を見ると、主屋の西側と南側に下屋を降ろして部屋の一部としている。また、西側道路に面して門を立てている。現在は無いが、主屋の南東に共同井戸があった。

樹林を見ると主屋の北側に櫛とわずかばかりの竹林を見受ける。南にザクロの古木が目についた。

石見章一家（亀の湯） 亀の湯は市内に残る数少ない生活住民の為の銭湯である。以前この地域は内風呂を持たない家が多かったという。このため付近にも他に二軒銭湯がある。亀の湯は北側道路に面して銭湯の入り口とし、南側に西側道路からの通路を設け、マキなどの燃料搬入路としている。

建物配置を見ると、銭湯の建物に接して主屋（一階はカマ場）を設け、主屋の東に接して居住空間を二棟造っている。

樹木は銭湯入り口西側にザクロを、東側に椿などを植えている。さらに東側の居住空間の庭にも樹木を植えている。

山田昇一家 当家は前橋南部の、周辺が平坦な地形で平野が連なる水田地帯にある。当家は敷地も広く、沢山の建物を配置している。敷地の形状を見ると東西に長いほぼ長方形である。

建物配置を見ると、敷地の中央やや西寄り奥に主屋を置いている。

主屋に続けて西側にハナレを設けている。主屋の東側は農作業空間で、比較的大きい物置が三棟ある。裏手を見ると、養蚕を手広く行った作業所などもある。敷地の南西隅には土びさしを持つ立派な土蔵がある。南東には家畜舎があり、畜舎の東には堆肥所を設けている。オイナリサンは主屋の北西にあり、一段高い石垣の上に祀られている。

樹木を見ると、門の西側にツボニワを設け、年代を感じさせる古木を植えている。離れの南にも沢山の樹を植えているが、まだ若木である。全体的緑の多い敷地である。

**渡邊うめ家** 当家は才川通り西側に位置し、古くは精米業を営む商家であった。以前才川通りは付近に沢山の製糸工場があり大変栄えた商店街であった。当家の敷地の形状は平坦であるが、不整形L字形である。これは、二軒の敷地を一つにしたためである。

建物配置を見ると、まず才川通りに面して主屋を置き、西側に離れ・蔵前座敷・蔵と続けて西に向って配置している。現在蔵の西で、以前精米所であった所にワカイモノノイエがある。若い者の家の北に物置が以前あったという。オイナリサンは以前若い者の家の所にあったという。

樹木を見ると、蔵の南にツボニワを設けている。坪庭には古木もみうける。この他若い者の家の北側にも樹木を多く見受けた。

**小島定子家** 当家は、前橋市役所北東にあり、まさに前橋城内の地域である。したがって当家は城内に住む上級武士の屋敷跡に建っているとも考えられる。

屋敷の形状は南北にやや長い長方形である。現在の敷地は西側を昭和37年の道路拡幅により狭められている。また、敷地の南側には水路が通っており、この水路に橋を架けて当家の出入り口としている。

建物配置を見ると、西側道路に接して門を設け、門に接して主屋を建っている。主屋の裏側で北東に物置を配置している。

樹木を見ると主屋の南に立派な庭園があり、年代を感じさせるに十分な古木を沢山見つけた。庭園にはかつて池もあったという。

**式部こと家** 当家は、旧藩士で城内から離れた地に居住する者の為に、藩で設けた建物である。この地域には以前同様な建物が数棟建てていたという。

敷地の形状はほぼ正方形で、平坦である。主屋は敷地のほぼ中央奥に建っている。主屋に接して西側に物置を配置し、東側は以前一段低い畑地であったが、この地にハタヤの時の工場やムコウノウチを建てている。

樹木を見ると主屋の南にある赤松と東南のラカンマキが古く立派で、屋敷の古さを感じさせるに十分である。マキは当初生け垣に植えた一本との事である。

**小関芳江家** 当家は旧藩士の屋敷である。当主は城内からは離れた地で農地を持つ武士だったと考えられる。

敷地は南北に大変長く、南側の道路に面し北側の道路とも接している。現在は南の道路より門を設けて出入口としている。が、本来の出入口は北側で現在も立派な門が残っている。

建物配置を見ると、敷地のほぼ中央に主屋を置き西側に物置を配置している。井戸は主屋の裏手、門の西にある。イナリサマは主屋の北東に祠っている。

樹木を見ると主屋の西側と北側に防風の為に列状に植えたカシが太く特に目に付く。又主屋の南側庭園には大変古い牡丹を見受け、屋敷の古さを感じるに十分である。全体として大変緑の多い屋敷である。

**佐和家** 当家は、旧市街の中心地より北東に離れた地で、付近は群

大附属小・幼稚園や県民会館もある静かな文教地区である。又当家は旧藩士で明治維新後農業を営むために当地にきたとの事である。敷地の形状は平坦で、ほぼ正方形をしている。

建物配置を見ると、主屋を敷地の中央やや奥に設けている。主屋には正面やや東寄りに設けた門から設け玄関へとむすんでいる。主屋の東側に、物置を設け収蔵庫としている。当家の井戸は以前主屋の南東にあつた。オイナリサンは、主屋の北西隅にあり主屋を向けて安置している。

樹木を見ると主屋の西側に防風の為に植えたカシや、門の脇にある梅、主家南西のチャボヒバが太く立派で屋敷の古さを感じるのに十分である。全体に緑の多い屋敷である。

**丸山家** 当家は前橋公園東側で、神明様の西側道路を狭んで西にある。当家の敷地は、以前学校の跡地であつたとの事である。敷地も広く平坦で、形状は正方形に近い台形をしている。

建物配置を考える時、大きく四分割して考えると次のようになる。北西の地には主屋を置き、南東には弁護士事務所（当主は親子二代にわたる弁護士である）を置いている。北東部分は貸駐車場である。南西は大きな樹木を沢山植えて庭園としている。また、主屋と貸駐車場の間に、アトリエを設けている。これは、当主の母親が絵画を教える教室との事である。当家のオイナリサンは主屋の北西隅に、主屋の方向を向けて祀っている。

樹木は敷地の南西の庭園や、事務所の北側付近にも多く見受けられる。全体として緑の大変多い敷地である。

**松村庫吉家** 当家は広瀬川の柳原放水路の北方で、上を風呂川が流れる通称柳原土手の下にある。このため、敷地の北側から東側にかけて高い石垣を築いている。敷地の形状は北から東は土手の曲線に沿つ

てふくらみを持った凸をしている。南側の道路も傾斜して、曲線を描いている。

建物配置を見ると、敷地の中央奥に瓦葺きの主屋を置いている。主屋の東南に棟を違った形式で蔵を置いている。蔵の東側で敷地の南東隅部に門を設け出入口としている。主屋の西側に多くの貸家の建物があつた。沢山のタナコが住んでいる。主屋の裏手（セド）には井戸があり、古くは語らい場であつたことを感じさせる。

樹木を見ると、まず前橋市の保存樹に指定されているシラカシが主屋の南西にそびえている。この他南の門と主屋の間にも沢山の樹木を植えている。全体的に緑の多い敷地である。

当家の屋敷は、旧前橋藩士の齋藤家の屋敷跡との事である。



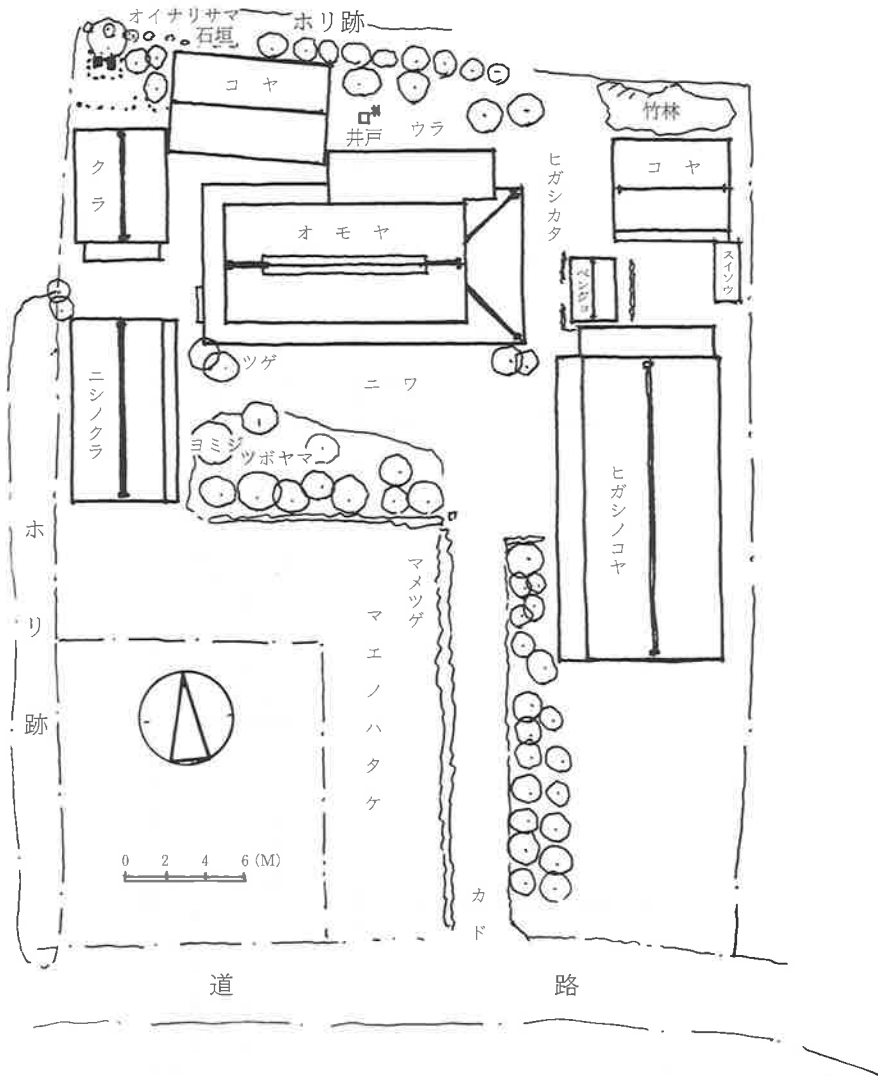


図41 今井雄二家

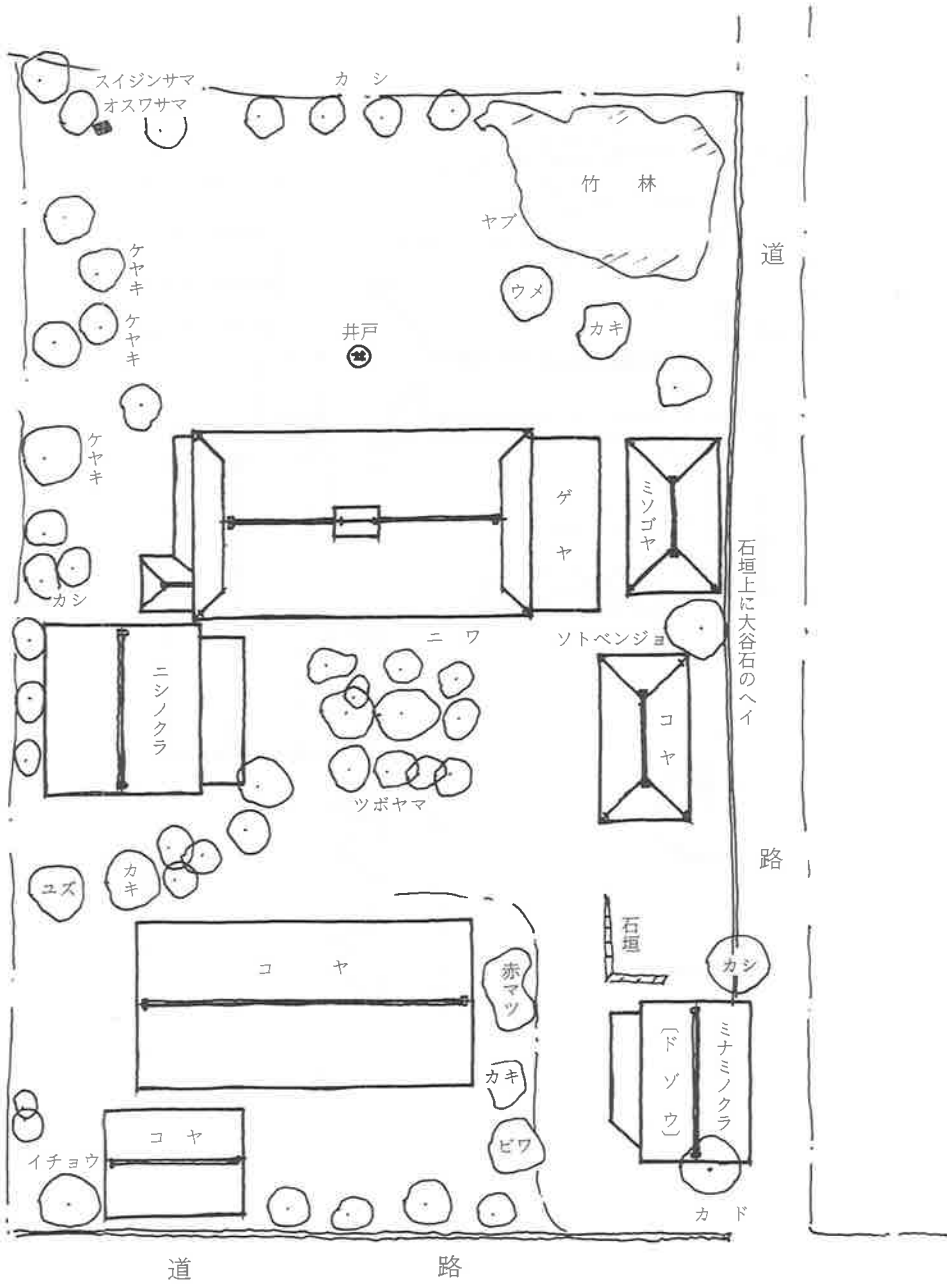


図42 目崎いよ家

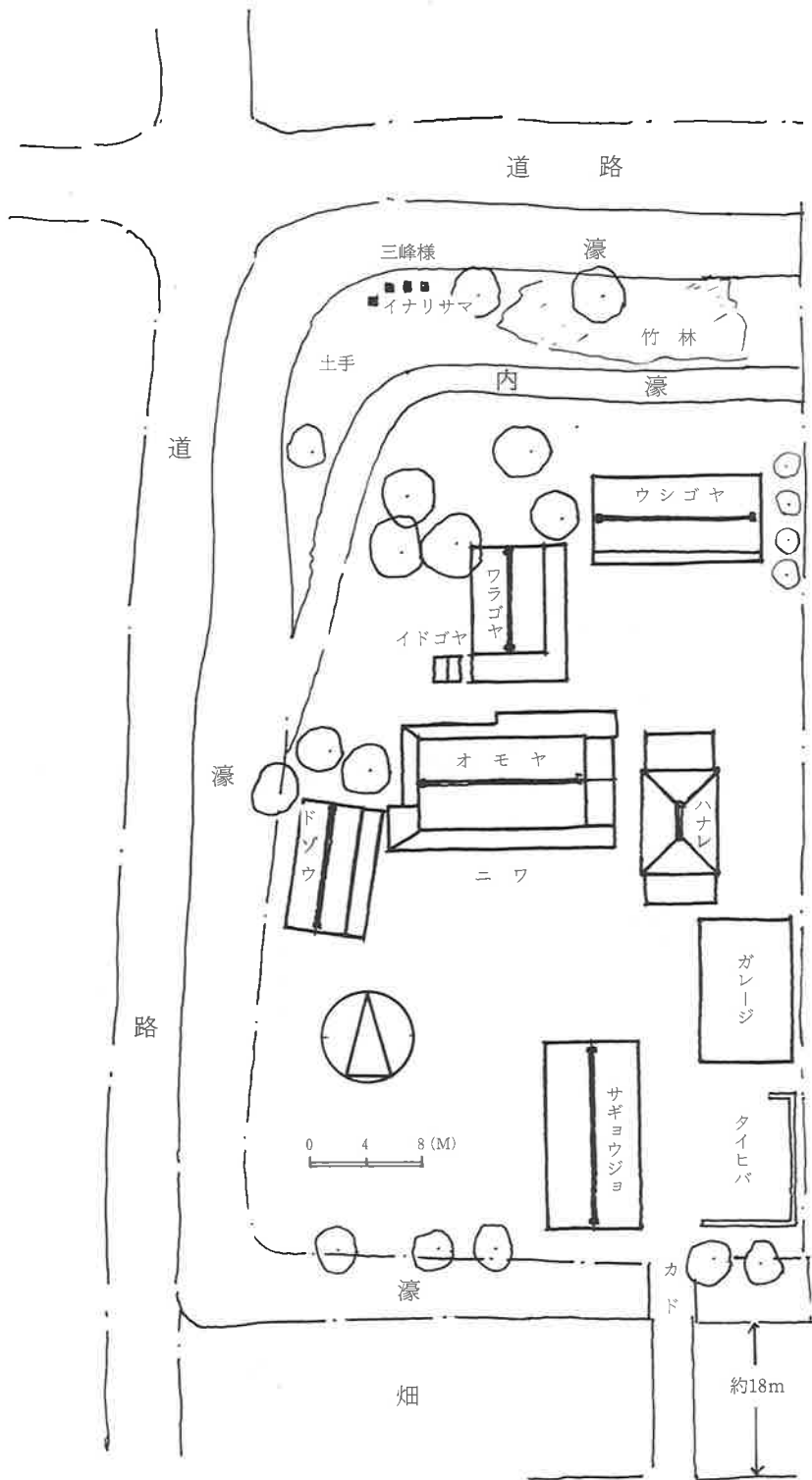


図43 持田清美家

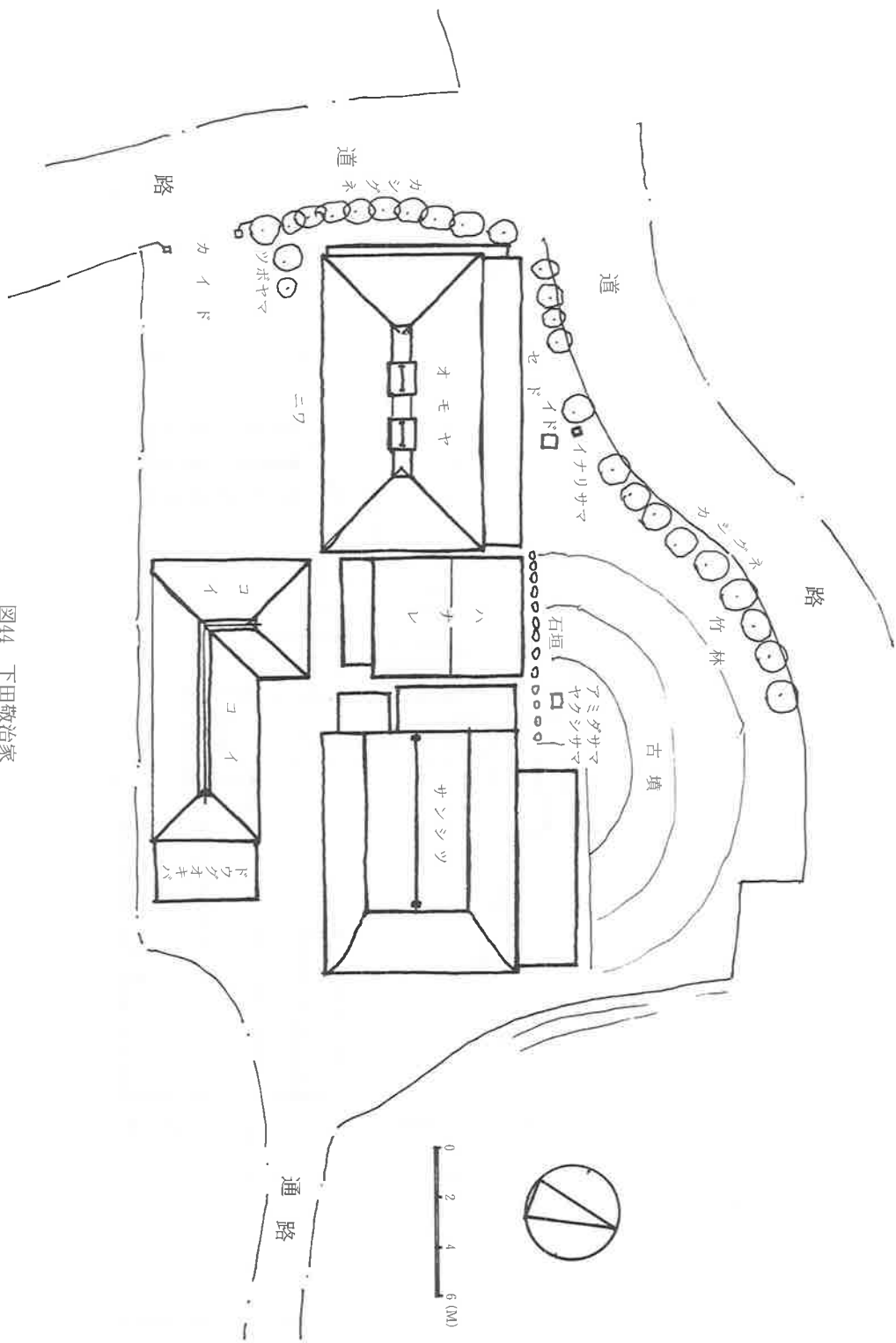


図44 下田敬治家

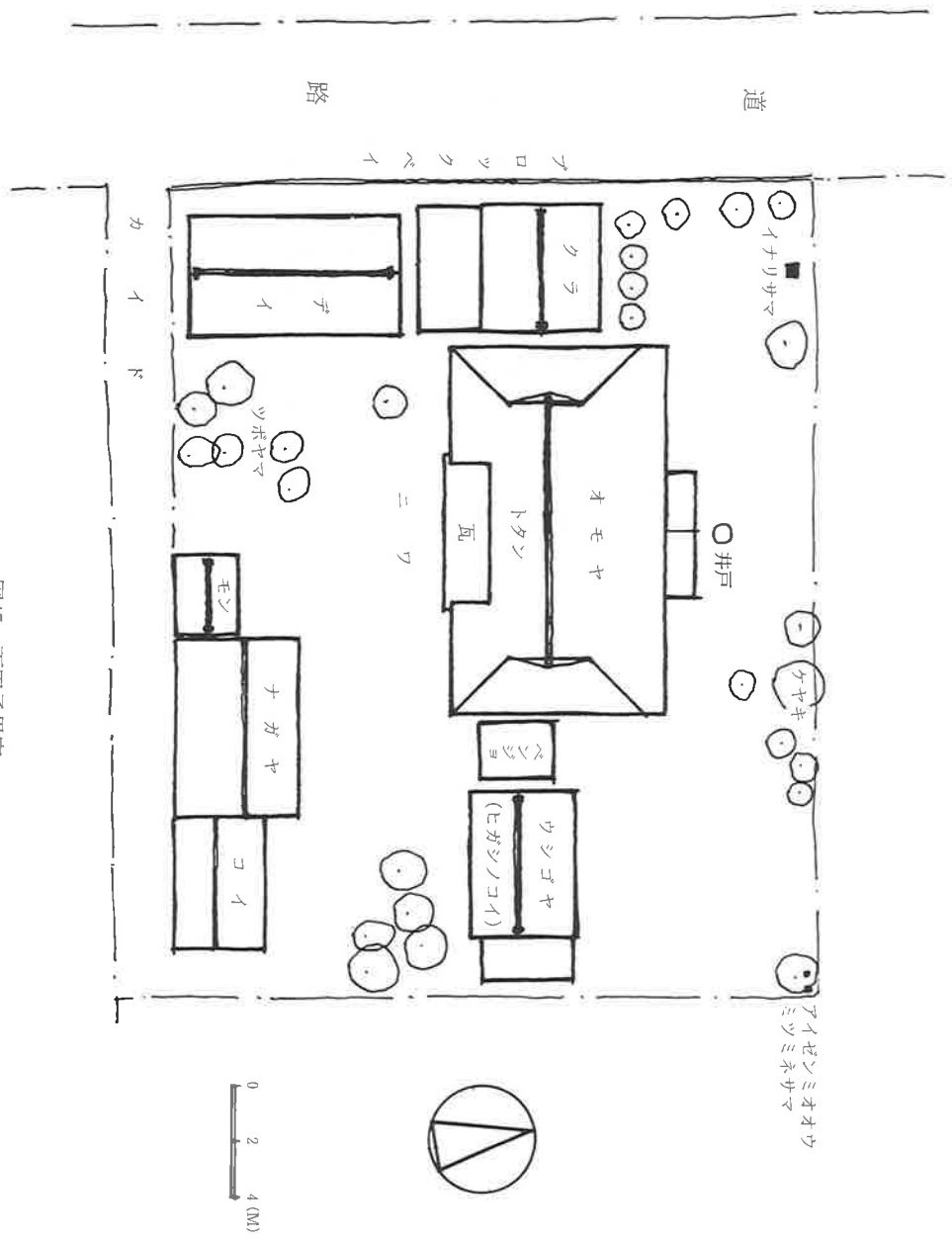


図45 下田承男家

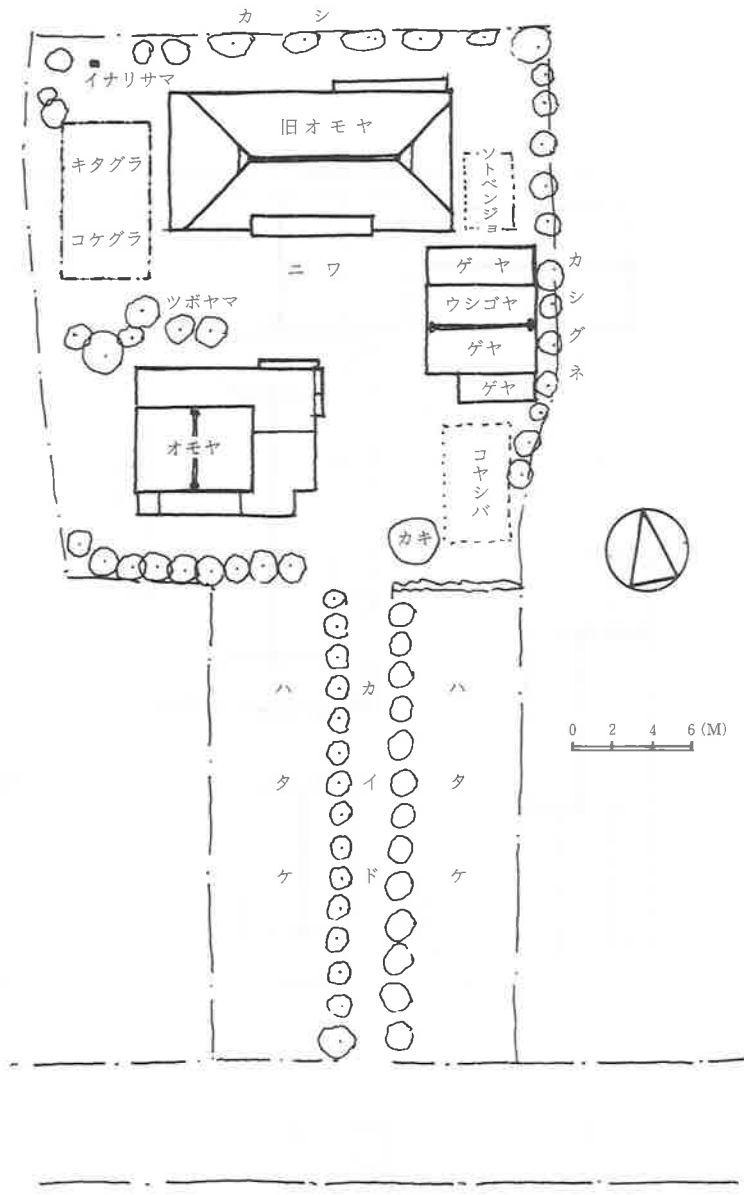


図46 清水真家

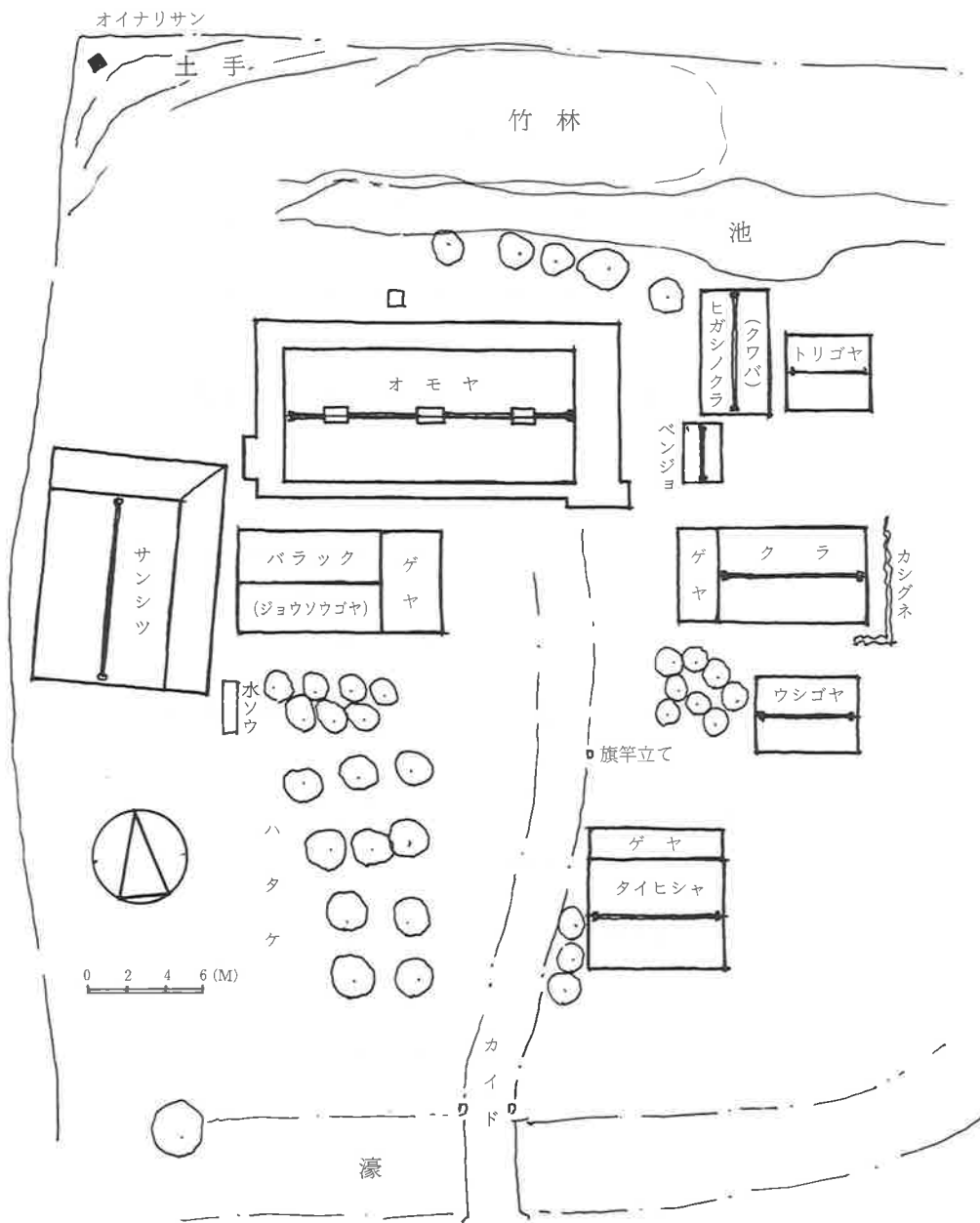


図47 諸岡茂家

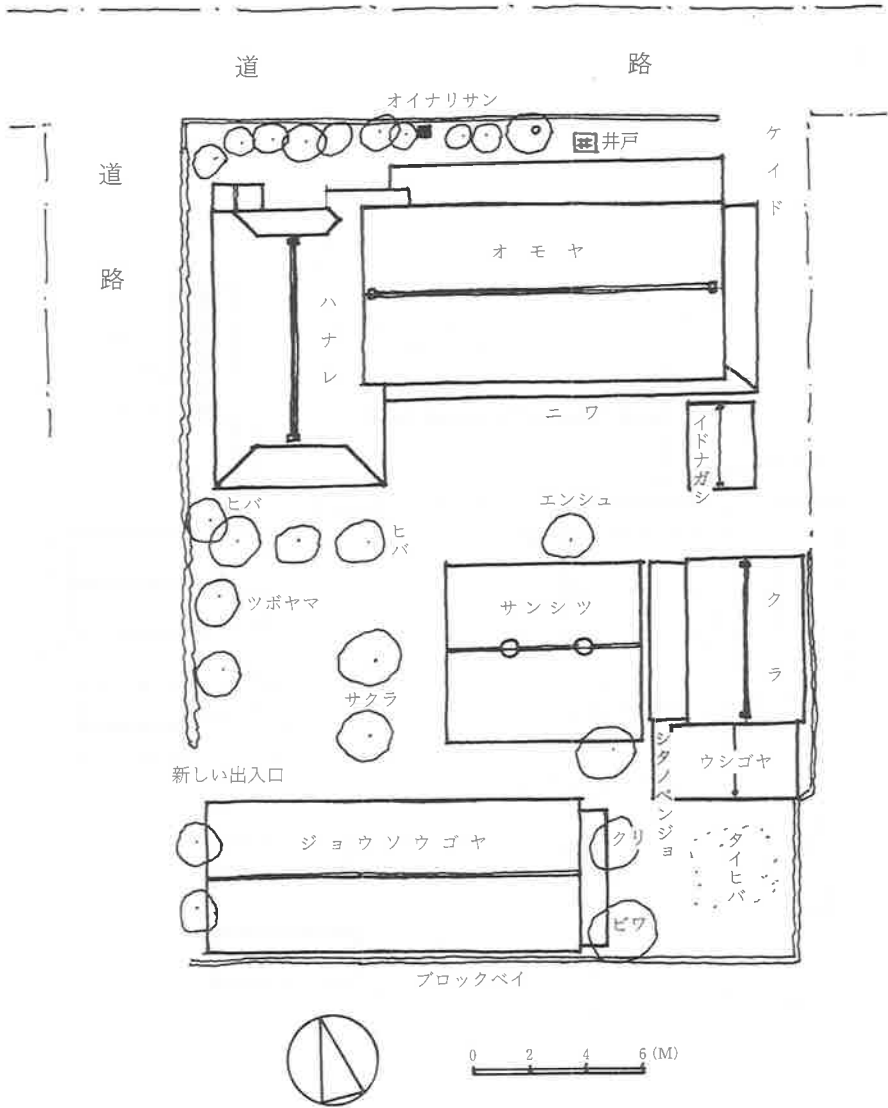


図48 青木清家



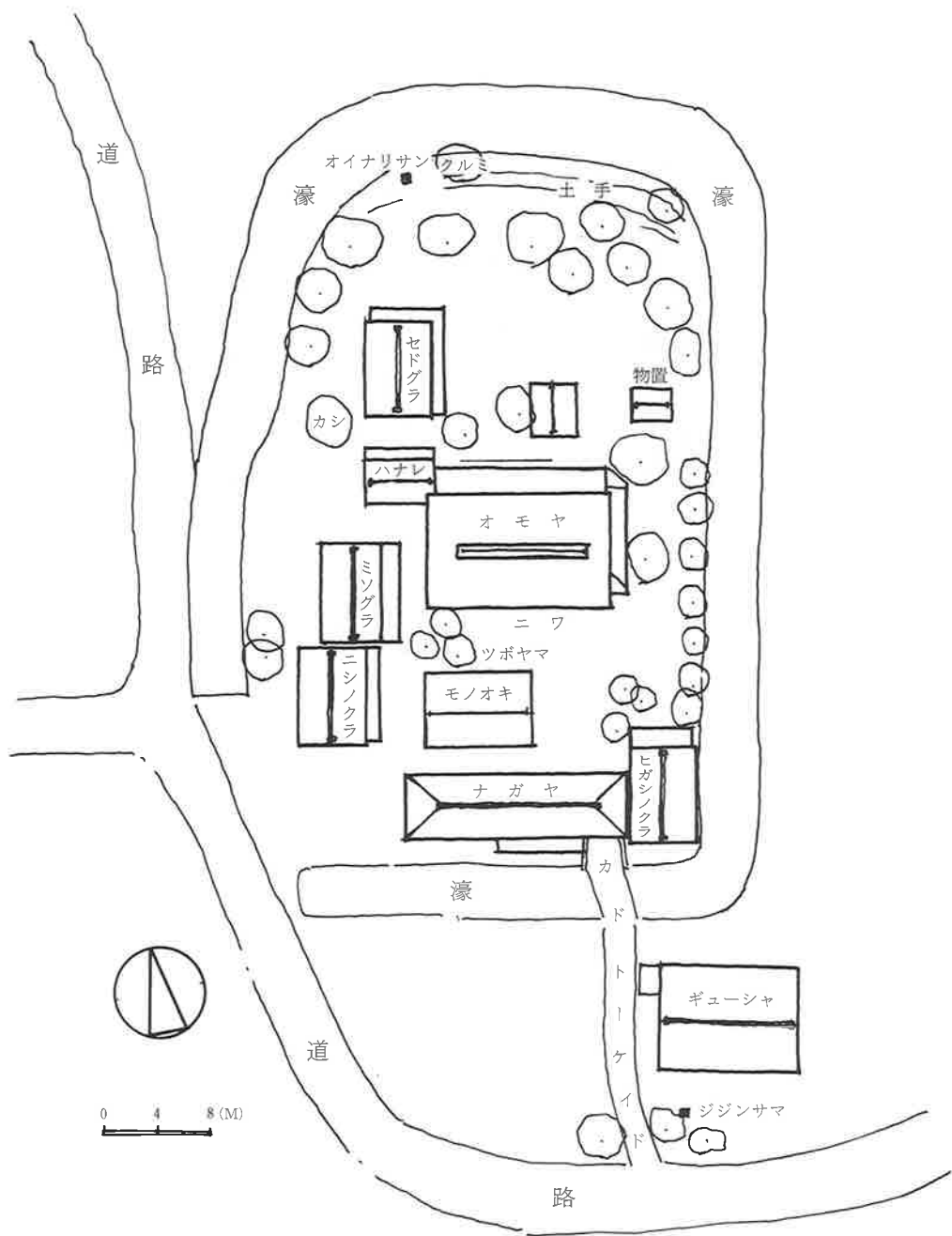


図49 三輪武男家

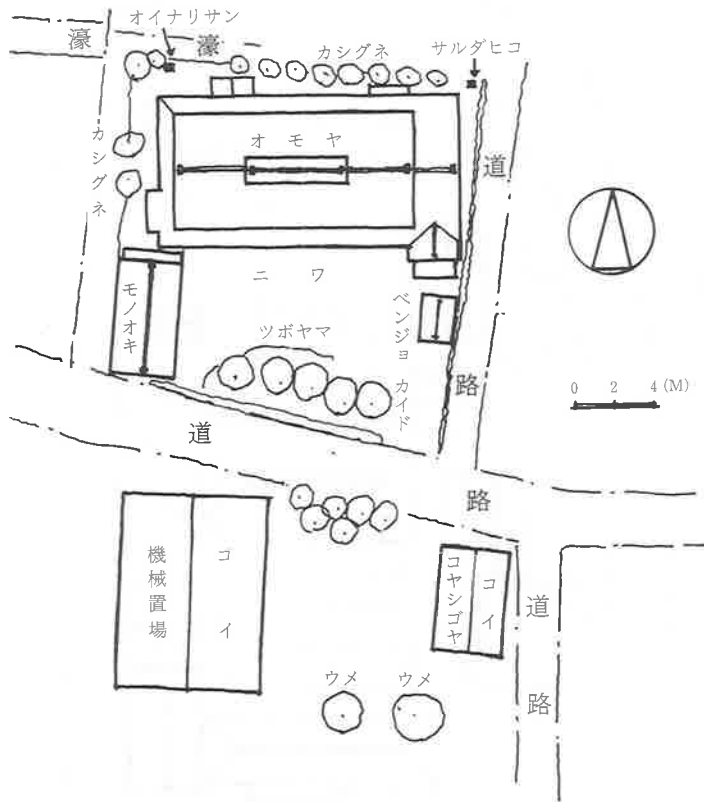


図50 金井義勝家

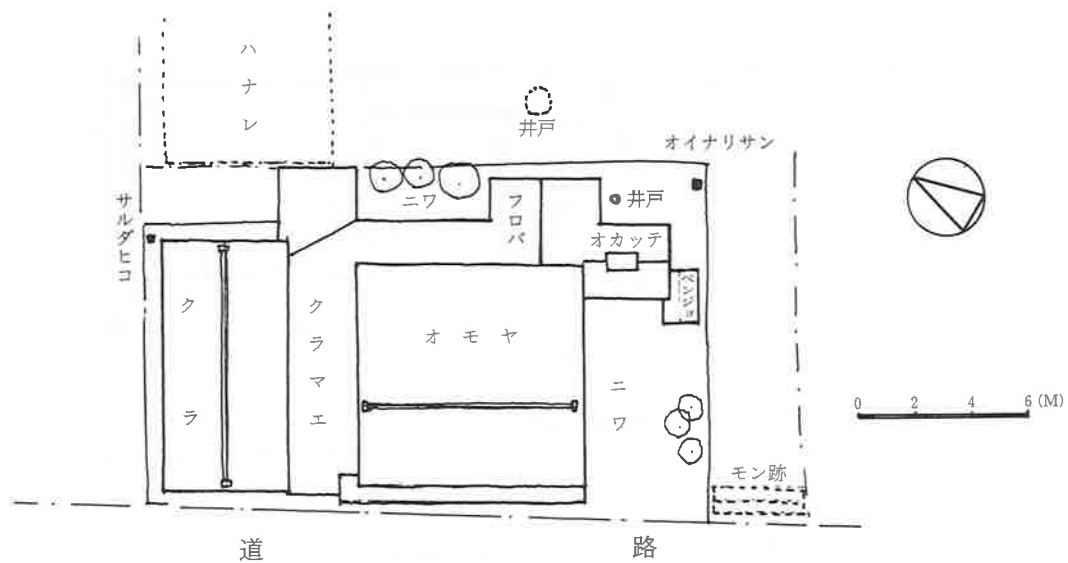


図51 井野商店

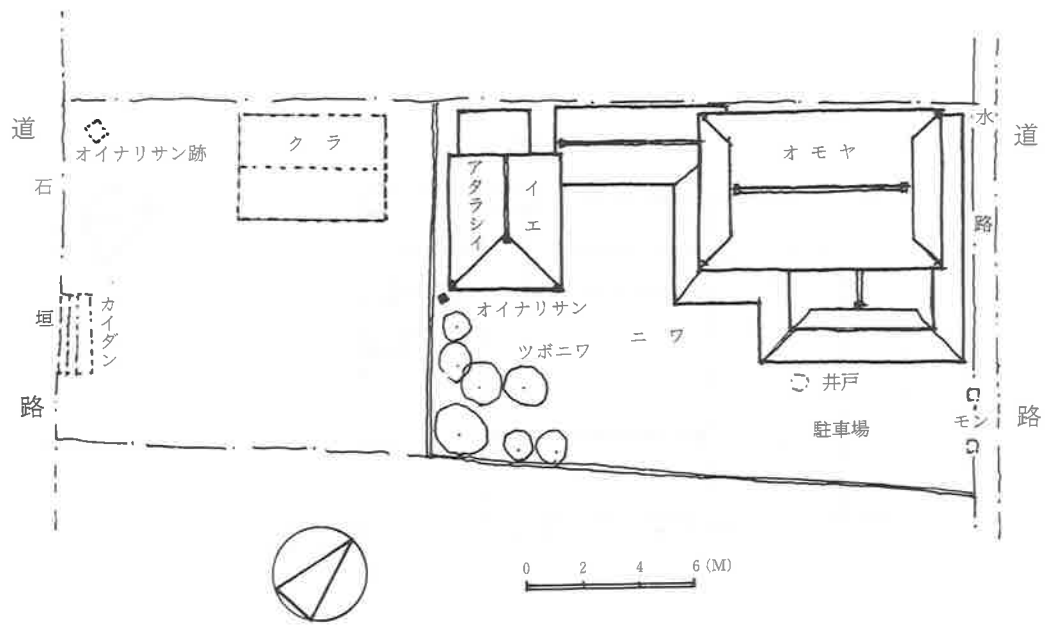


図52 岡崎商店

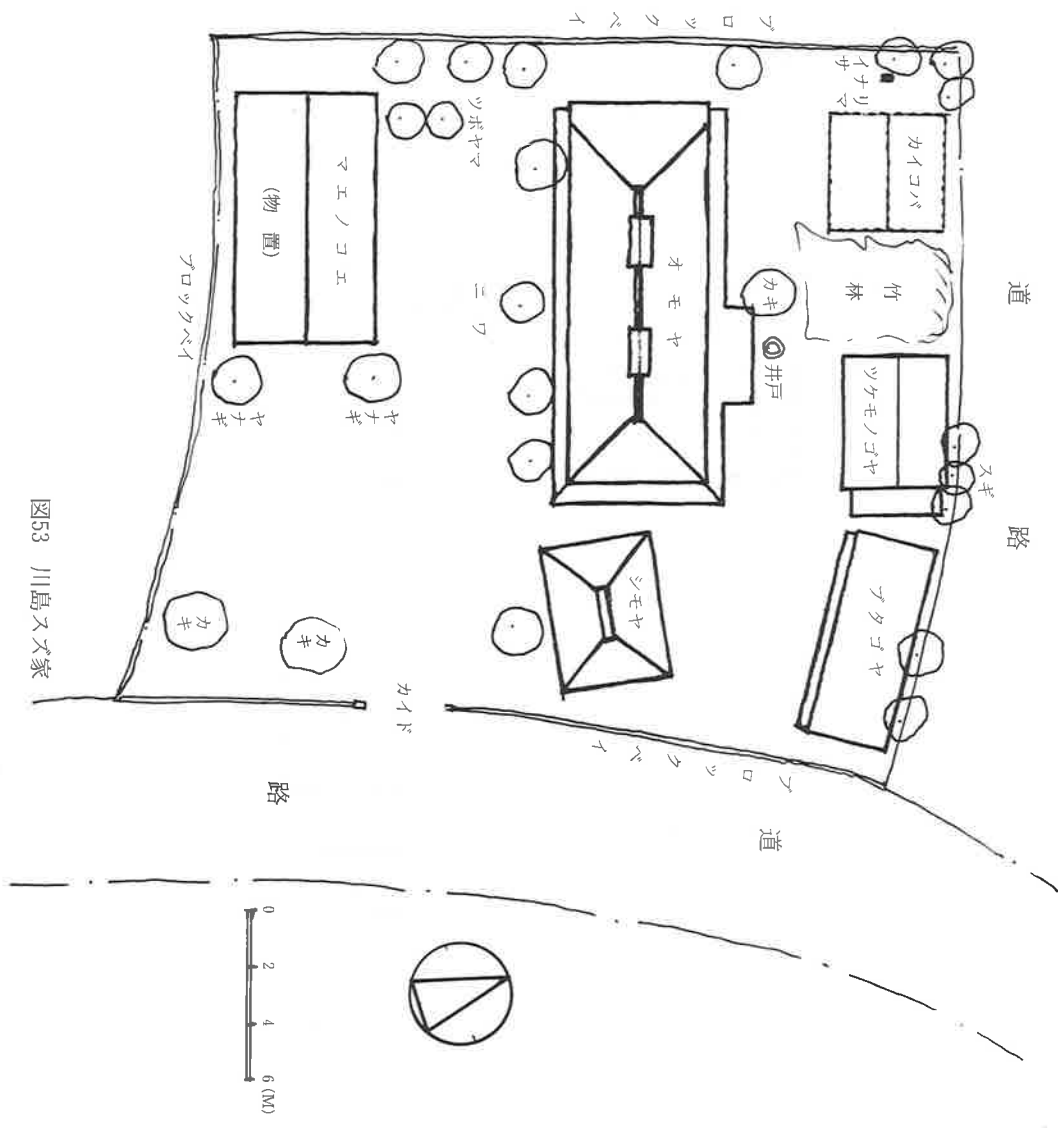


図53 川島ヌズ家

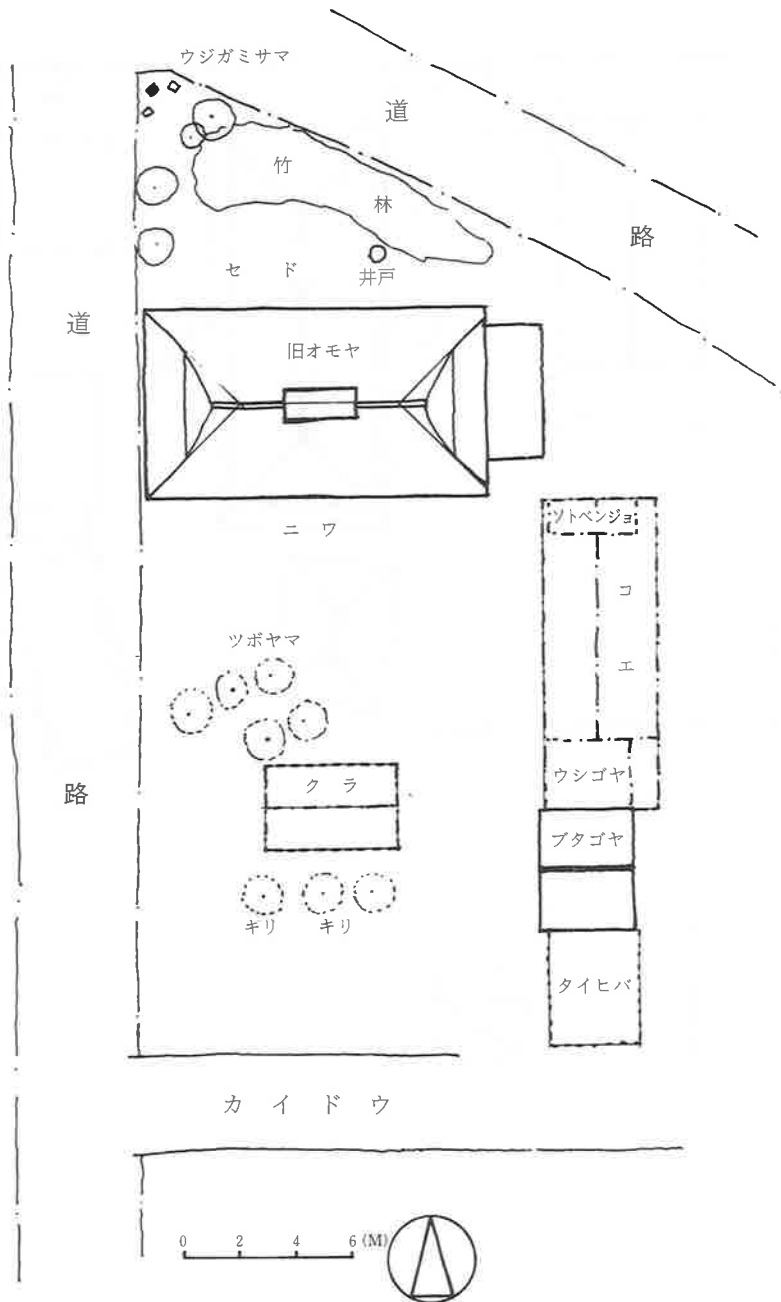


図54 川島善作家

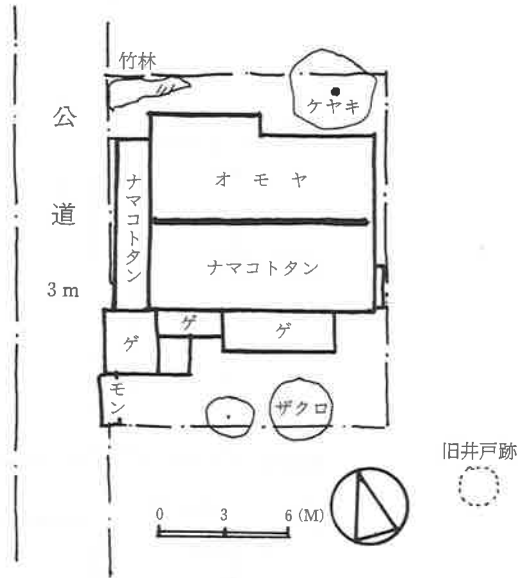


図55 尾高俊之家

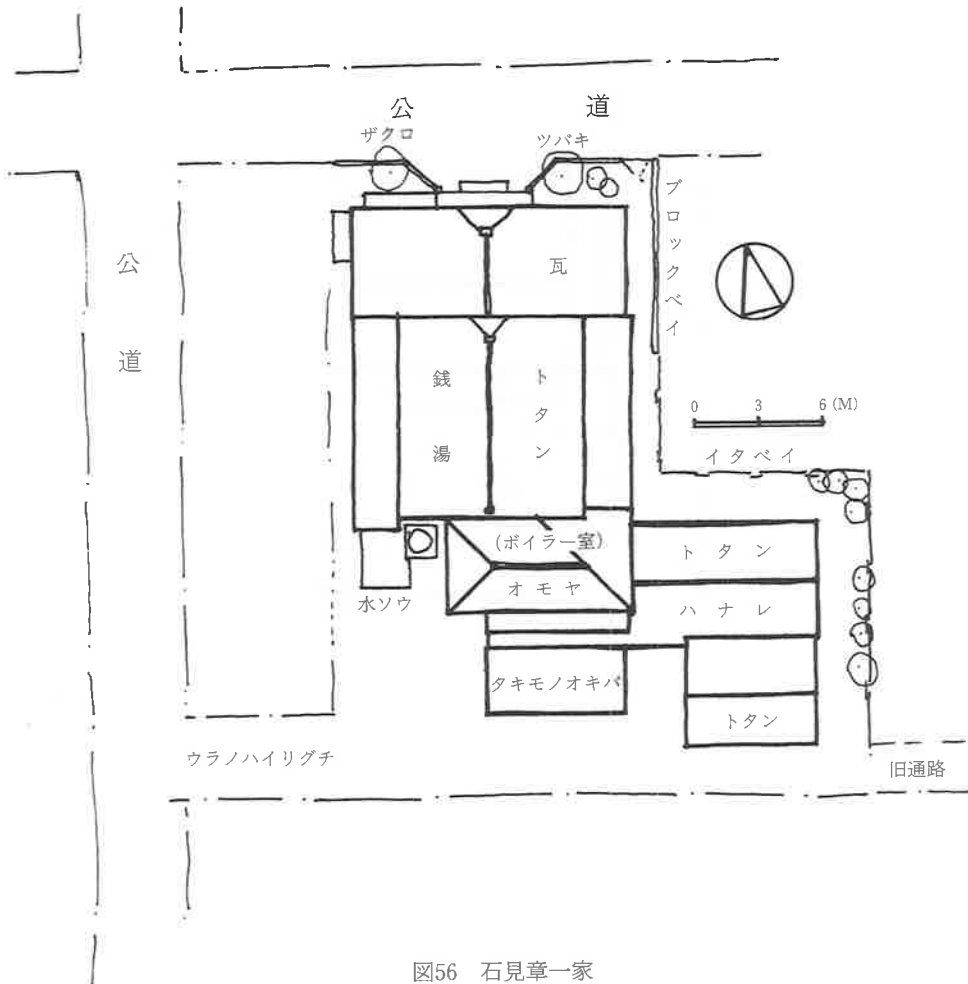


図56 石見章一家



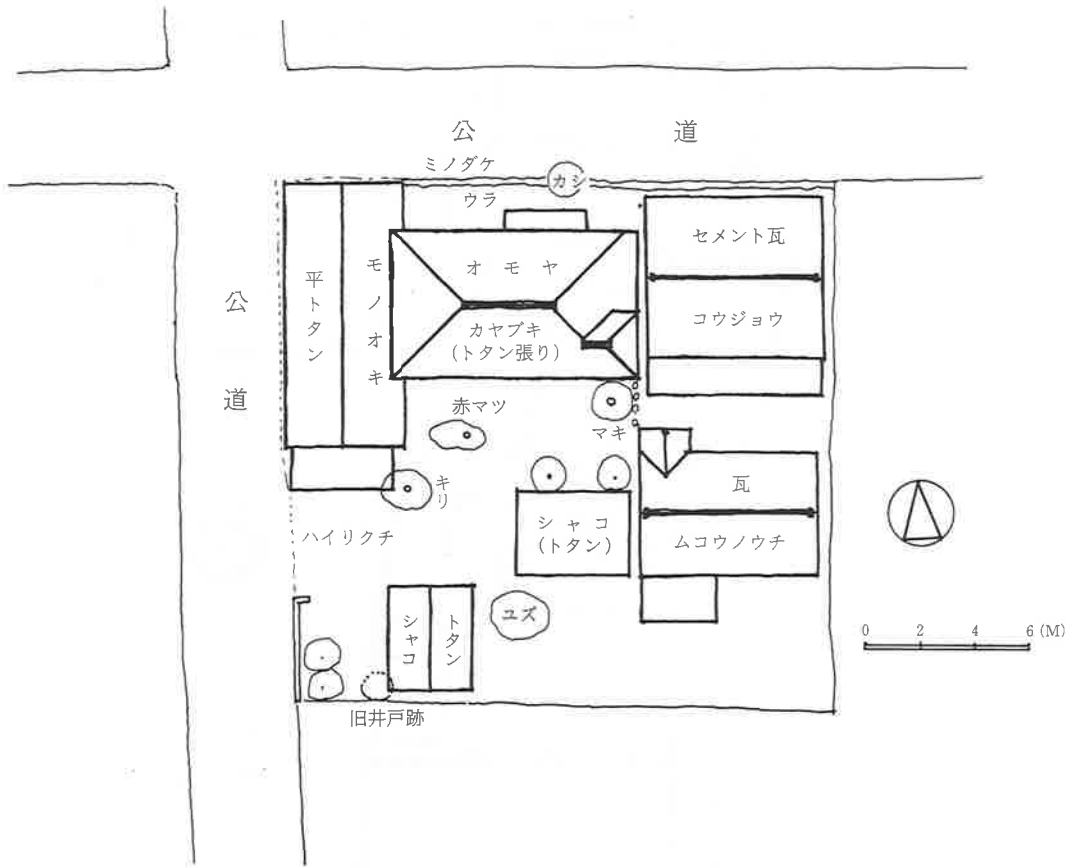
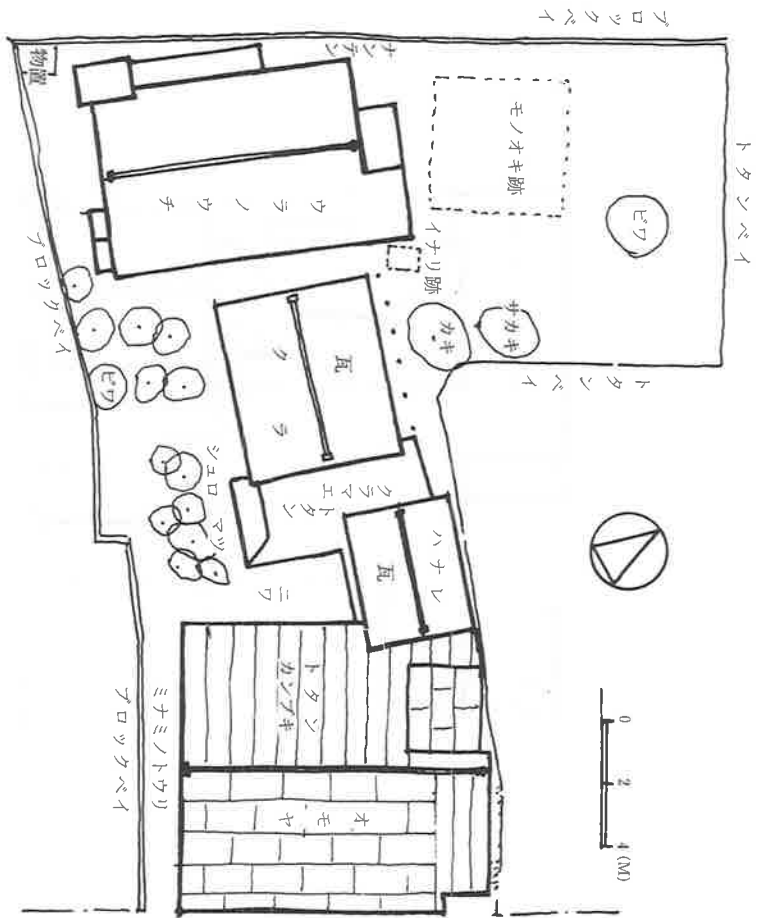


図57 式部こと家



公道 (子川通り)  
約5.4M

図58 渡邊うめ家

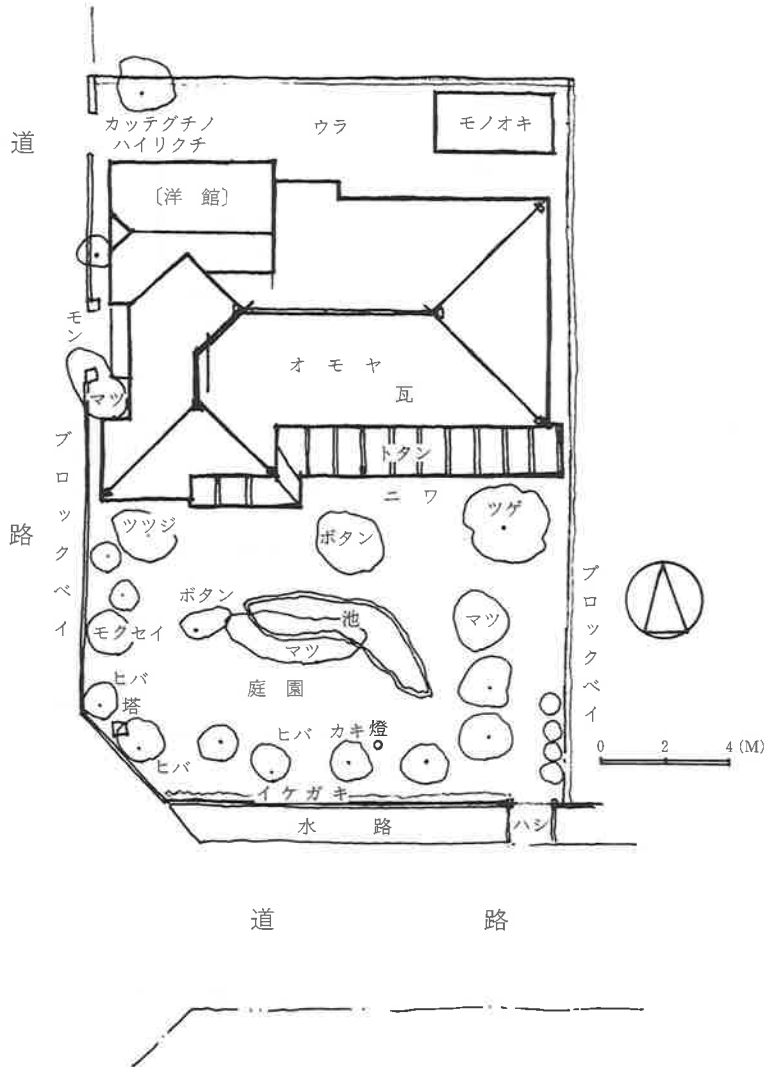


図59 小島定子家



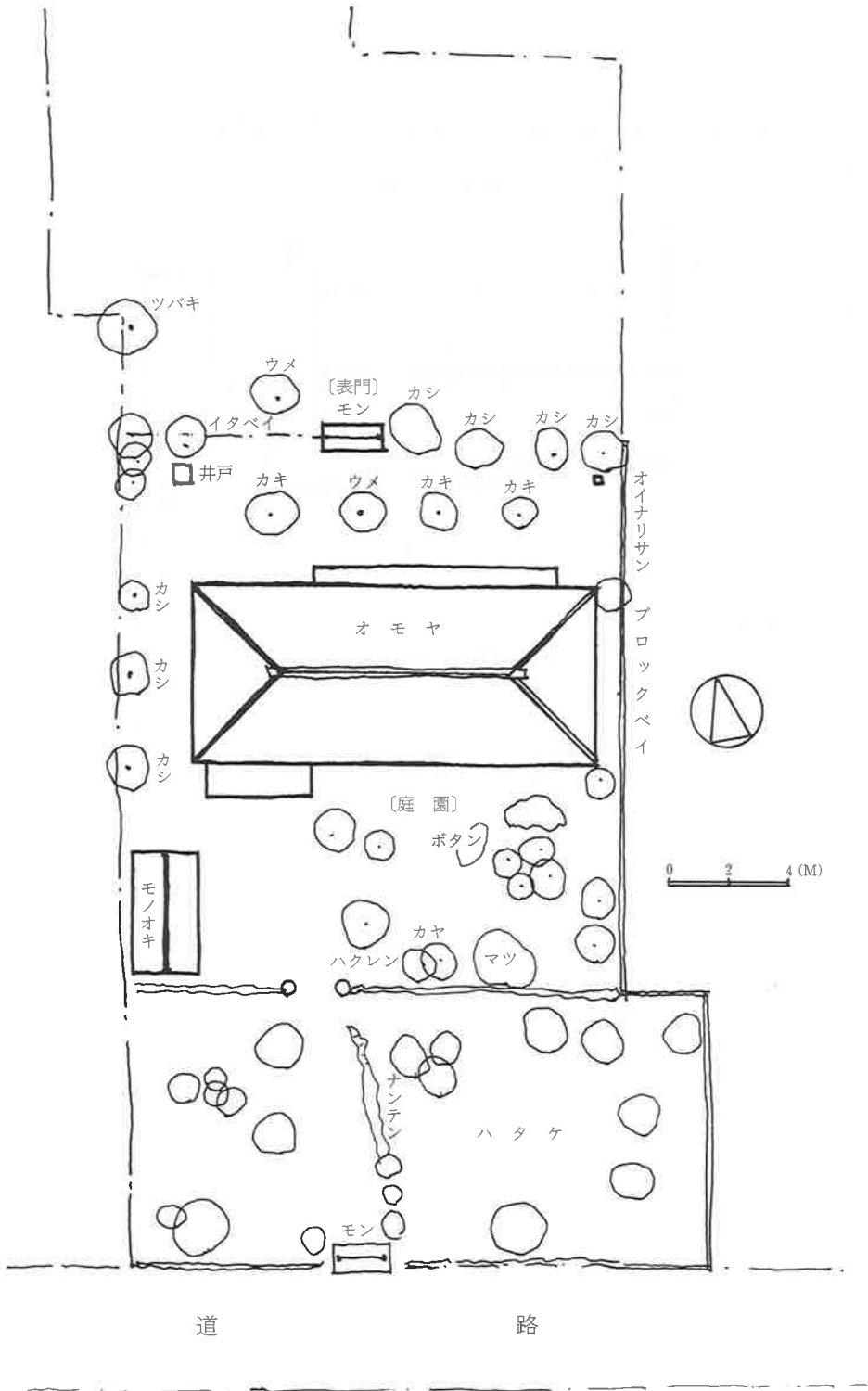


図61 小関芳江家

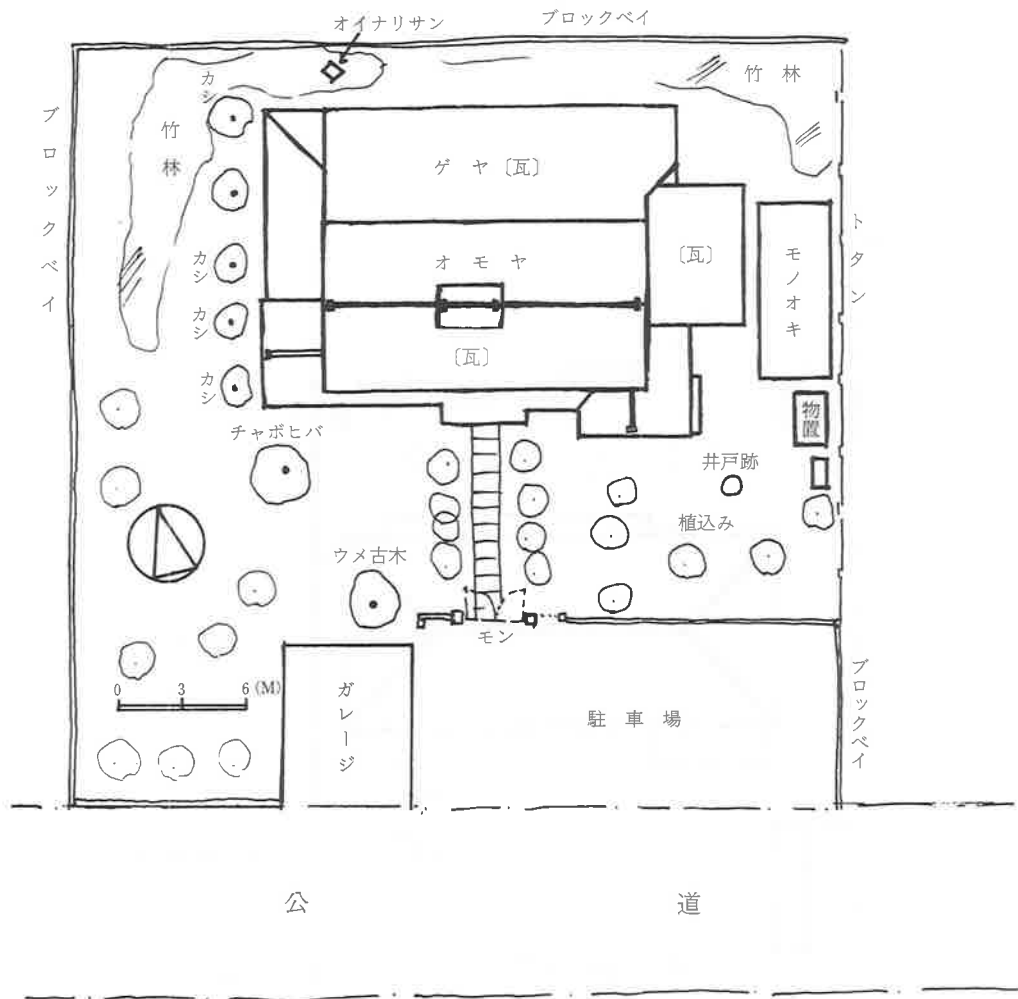


図62 佐和家



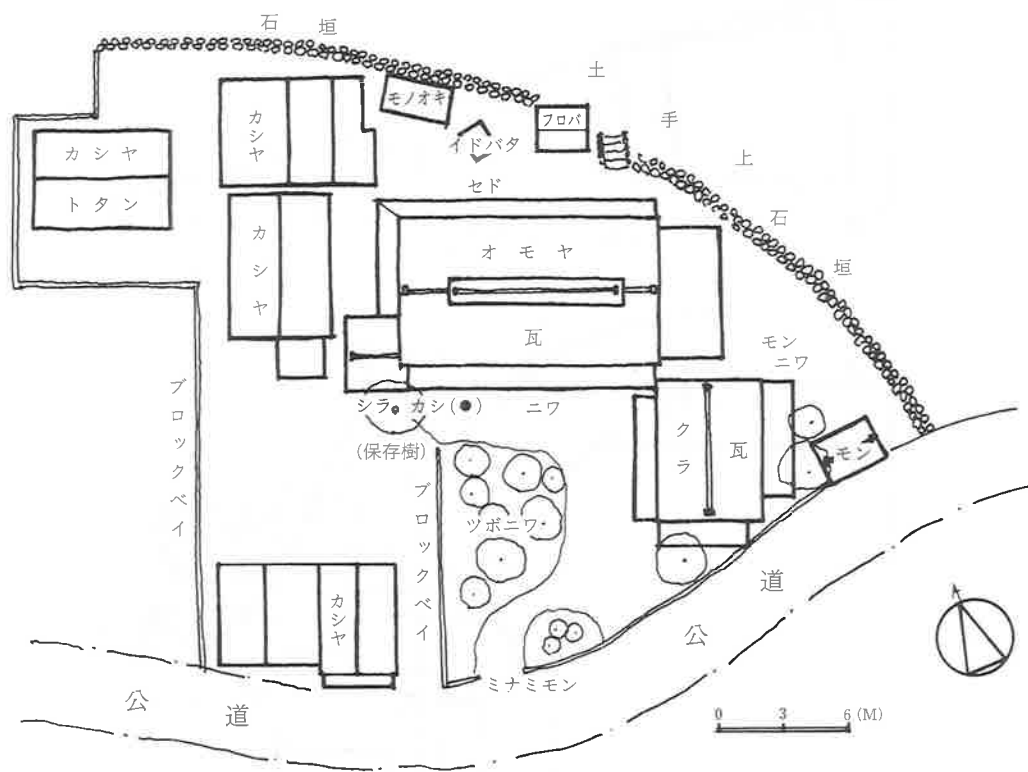


図64 松村庫吉家





臨月 .....3-291

る

るす神 .....1-373

ルスンギョウ .....1-11

れ

レイキ .....4-374

恋愛 .....2-343

恋愛結婚 .....3-348

レンガ焼き .....1-105

蓮花院 .....3-278

連作 .....3-96

ろ

労役者 .....4-48

浪曲 .....1-255

浪曲語り .....3-263

六斎市 .....1-11

六算 .....5-79

六三除け .....1-138・228, 3-209・211, 4-99

六地藏のローソク .....3-288

六所神社 .....1-121・210

六部 .....3-546

六部膏 .....2-473

ロクブ田 .....5-35

六間取りの民家 .....2-535

六文銭 .....5-174

六文棒 .....3-37・278・498

六供 .....4-130

わ

ワカイシ .....1-44, 2-47, 5-118

ワカイシ組 .....5-98

若い衆 .....2-563

わかいしゅ組 .....1-2・43

ワカিশュゲイヤク .....2-48

若一王子神社 .....1-193

わかし湯 .....3-46

若水 .....1-345, 2-310・384, 3-374, 5-187

若宮八幡宮 .....3-134

若者組 .....3-57, 5-98

ワカレン .....1-2・44・297

ワクサ .....5-56

榨屋 .....5-58

ワサビオロシ .....4-343

和讃 .....2-263, 3-260, 5-140・270

和讃講 .....5-105

綿 .....1-59

ワタクリ .....4-394, 5-295

渡し .....2-97, 3-45・124, 4-306

ワタマシ .....2-11, 5-22

ワタリゲエ .....5-23・197

ワラ .....1-100

わら加工 .....5-297

わらじ .....3-72

ワラジ .....5-59

草鞋 .....1-51

わらじ親 .....5-115

ワラジガケ .....1-54

ワラ仕事 .....1-98, 3-112, 5-60

ワラジヌギ .....1-3, 2-41, 5-115

ワラスグリ .....4-395

藁草履 .....1-52・54

わらたたき .....3-103

ワラタタキ石 .....1-89

ワラデッポー .....2-421, 3-410

薬にゅう .....5-45

ワレ .....5-94

椀 .....3-474

よ

夜あそび…1-48・294・300, 2-4・277・342, 3-58・  
267・318・530, 5-118

ヨイマチ ……………1-117

妖怪 ……………5-237

八日市 ……………3-125・499

八日節句 ……………2-314

八日だめ ……………2-399

陽気正月 ……………2-238・315

養蚕 ……1-10・103・134・453, 2-92・579, 3-15・  
109, 4-207, 5-46

養蚕祈願 ……………3-112・163

養蚕信仰 ……………5-50

養子 ……………2-51

洋食 ……………4-32

用水 ……………1-99, 2-42, 3-100

用水溜井 ……………5-95

幼稚園 ……………3-277

よかよかあめや ……………3-126

ヨギ ……………3-74

横沢重五郎 ……………3-512

ヨコサンヤシキ ……………1-137

横手の渡 ……………3-124

ヨコのあてつつぎ ……………3-449

義経の東下り ……………3-500

吉原堰の大蛇 ……………3-479

ヨソイキ ……………2-55

ヨソイギ ……………1-51, 3-68

よたろう ……………3-503

ヨチクレエ ……………5-104

予兆 ……………2-364, 3-213

四足門 ……………1-390

ヨツゴ ……………4-368

ヨトギ ……………2-20・51

淀君 ……………2-25

夜泣き ……1-224・291・391, 2-230, 3-314, 5-154

夜泣き観音 ……………1-129

夜泣き地蔵 ……………1-390, 3-522

ヨナベ ……………4-206, 5-27

夜なべ仕事 ……………1-98, 2-87, 3-103

ヨノ ……………3-74

ヨバイ ……………1-48, 2-53, 3-58, 5-118・159

よびけえす ……………3-350

ヨミズヒキ ……………5-36

夜見世 ……………4-331

嫁 ……………3-60

嫁入り ……………1-309, 5-164

嫁入り行列 ……………1-314, 2-350, 3-329

嫁入り道具 ……………3-74

嫁送り ……………3-329

よめご ……………3-223

嫁御ぎもん ……………1-5

よめごさん ……………3-218

嫁ごの大裏さま ……………5-203

嫁御よび ……………3-347・595

嫁とり ……………3-327

嫁のお客 ……………3-347

嫁の里帰り ……………3-346

嫁の出迎え ……………2-615

嫁の道具送り ……………3-332

嫁の入室 ……………3-330

嫁迎え ……………1-309, 2-349, 3-327

ヨモギ ……………2-242・407, 3-399

寄り合い ……………1-36, 3-50, 5-94

寄居 ……………1-385

頼朝公 ……………3-271

よりまぶし ……………5-48

ら

雷電様 ……………1-125, 2-28・105, 3-154

雷電神社 ……………2-463

落雷 ……………2-238, 3-154

ラジオ ……………1-94, 2-505, 4-282

ランプ ……………1-94, 2-85, 3-91, 4-354

り

力丸 ……………3-41

力丸城 ……………3-585

力丸堰用水 ……………3-100

力丸橋 ……………3-123

俚諺(りげん) ……………5-300

離婚 ……………1-327, 2-364, 3-348

リヤカ ……………1-10・108

竜宮 ……………3-500・591

竜宮の椀貸 ……………3-495

流産 ……………2-328, 3-301

龍蔵寺 ……………1-121・392

竜沢寺 ……………1-194

リュウバシラ ……………2-10・83, 3-90・223

龍門 ……………3-43

竜門五苗 ……………3-41

リョウ ……………3-54

良寛さん ……………3-506

療法 ……………5-78・79

両毛線 ……………3-121・513

料理番 ……………2-360, 3-341

旅行 ……………1-106

5-155  
やくどし餅……………3-26・385・393・588・591  
夜具無尽……………5-105  
やくよけ……………1-290・292, 3-313・315  
厄除地藏尊……………3-139  
厄除け大師……………3-278  
夜警番……………2-603  
ヤケッペ……………5-83  
ヤケド……………1-225, 2-231, 3-208, 5-78  
ヤケボコリ……………3-51  
ヤゲン……………4-398  
屋号……………2-36, 5-114  
野菜……………1-60  
ヤサイカゴ……………4-402  
八坂神社……………1-123・134・213, 4-66  
八坂まつり……………5-209  
八坂用水……………3-584  
屋敷……………2-9・78  
屋敷稲荷 ……1-23・83・114, 2-425, 3-9・414,  
5-20・137  
屋敷神……………1-12・114, 2-5・13・101, 3-18・89・  
127  
屋敷どり……………1-6・82, 3-88  
屋敷へび……………1-82  
やしき濠……………3-7  
屋敷祭り……………2-2983・318, 3-415  
屋敷養子……………5-115  
ヤシナイミズ……………5-37  
矢島……………3-41  
矢島の観音……………3-139  
休みあがり……………3-588  
休み日……………1-355  
休日……………2-44  
矢田……………3-43  
屋台……………3-229  
ヤタテ……………4-403  
弥太夫堀……………3-491  
ヤツアナ……………3-527  
ハツ穴……………3-543  
厄介田……………3-46  
ヤツデ……………1-221  
ヤナ……………4-403  
柳……………3-220  
柳座……………4-100・281  
屋根……………2-83  
屋根がえ……………1-97・3-90  
屋根職……………3-56  
ヤネツキ……………5-207  
屋根葺き……………1-96  
屋根葺き職人……………1-105

八柱神社……………1-125  
ヤブ入り……………1-355  
やぶさめ……………3-244  
山……………1-37  
山入り……………1-348, 2-387, 3-376  
山街道……………1-106  
山師……………5-57  
山仕事……………5-60  
やまど……………3-224  
山の神……………1-125, 3-473  
山の組合……………3-56  
山のつくりっこ……………2-443, 3-462  
山ハジメ……………1-21・456, 2-311, 3-376, 5-191  
山番……………5-93  
山開き……………1-22・134・362, 3-376, 5-207・318  
やままゆ……………3-111  
ヤリカマガマ……………4-378  
ヤンダジ稲荷……………5-129・206  
ヤンメ……………1-225, 2-230, 3-208, 5-71・81  
ヤンメの神様……………1-129

ゆ

結納……………1-307, 2-347, 3-324  
結納おさめ……………2-605  
夕暮れ……………2-596  
遊芸……………4-49  
夕食……………1-76・450  
有線……………1-108  
有線電話……………1-10  
夕立……………2-237  
郵便局……………3-276  
湯灌……………1-20・331, 2-366, 3-352, 5-174  
ユキ……………4-396  
ユキノシタ……………1-221, 2-242  
ユズの初なり……………3-529  
ゆで饅頭……………1-64  
油田……………3-43  
ユトウ……………4-409  
ユニゴリ……………5-231  
湯之気曲輪……………1-387  
指遊び……………3-252  
ユミアケ……………3-27・364・367  
夢……………1-226, 2-234  
油免……………3-587  
由来……………1-29  
ユルリ……………1-88

村八分……………2-46  
ムラマワリ ……1-310・323, 2-361, 3-342  
ムラヤク ……2-40, 3-49, 5-91・92  
むりどん ……3-487

め

めいがんさま ……5-133  
名物 ……1-390  
命名…1-280・455, 2-329, 3-303, 4-115, 5-152・  
239  
メカイ……………1-369, 3-395・403, 5-47  
メカゴ ……1-224, 5-20・81  
メケエ ……3-208, 4-385  
飯 ……1-61, 2-61  
飯が仕事をする ……3-518  
メズラ……………5-15  
メダマゾウリ……………5-8・59  
メツパ……………5-83  
メヅマリカゴ ……4-381  
メドブレイ ……4-382  
メハジキ ……1-339  
メンガ……………5-71

も

もぐらでっぼう ……3-410  
モグラとミミズ ……3-479  
モグラブサギ……………5-34・222  
もぐら除け ……1-227  
モシキ……………1-90, 2-85, 3-591, 4-33  
モズ ……3-218  
餅……………1-67, 2-67, 3-6・78・81・85・205  
モチグサ……………3-81  
モチつき ……1-354・376, 2-319・427・428  
物置……………1-82  
物置小屋 ……1-7  
物をさがす ……3-212  
物ぐさ ……3-506  
モノシ……………3-73  
モノツクリ ……2-389  
ものばげ ……3-537  
モノビ……………2-40, 3-222  
ものもらい ……1-224・255  
喪服……………1-4・53, 2-56, 3-67  
木綿……………3-67  
木綿糸……………2-59  
桃太郎 ……3-442  
桃木川……………3-45  
桃木川の大蛇 ……3-528

モモヒキ……………1-50, 5-8・9  
木綿……………5-11  
桃割れ……………1-56  
モヤイ身上 ……3-348  
モライ一見 ……1-310, 3-328・334  
モライ方 ……3-325  
モライッコ ……1-265  
もらい水……………1-92  
モリッコオビ ……3-312  
守っ子帯 ……5-8  
もりっこ湯 ……2-490  
モロ……………1-83  
モロコシ……………1-60  
もろこしもち……………3-83  
紋型紙職人……………4-41  
文句 ……1-389  
モンペ ……1-4・51, 3-70

や

ヤウツリ……………1-97  
ヤカガシ ……3-131, 5-200  
夜学……………2-54  
ヤキカガシ ……3-394  
やぎの乳……………3-77  
焼場……………3-46  
焼場の金 ……3-355  
ヤキバン ……5-114  
八木節 ……1-251, 3-254  
ヤキボ……………5-33  
焼き飯……………1-61  
ヤキモチ…1-6・63・450, 2-64, 3-6・80・81・84・  
85, 5-15  
やきもち地藏 ……5-143  
ヤキモチツ子 ……5-145  
野球場 ……4-286  
役員 ……1-34, 2-39  
役員交替 ……2-599  
やくおとし ……1-255  
厄おとし ……3-212・223, 5-158  
やくざ ……3-504・589  
薬師さま…1-128, 2-15・113・124・230・297・  
317, 3-136・140, 4-67, 5-138・139  
薬師信仰……………3-19  
薬師堂 ……1-177, 3-582  
薬師祭り ……2-422  
厄神送り ……3-395  
厄神の宿 ……3-143・413  
薬草取り……………3-408  
厄年…1-18・228・262・290, 2-336, 3-25, 4-116,

ミズゴ .....5-181  
 水酒 .....3-529  
 ミズシタ .....5-89・97  
 水下七ヶ村 .....5-116  
 水世話人 .....1-29  
 ミズツパリ .....5-40  
 水番 .....3-101, 5-37・93・97  
 水不足 .....1-8  
 水虫 .....1-226  
 水盛 .....1-94  
 店 .....4-217  
 味噌 .....1-72, 2-70  
 みそ・しょうゆ .....5-18  
 みそかそば .....3-418  
 味噌コシ .....1-79  
 味噌汁 .....1-68, 2-65  
 道あけ .....1-306  
 道削り .....5-96  
 道しるべ .....1-107, 3-124, 5-64・66  
 道ぶしん .....1-37, 2-42, 5-96  
 ミツボトケ .....3-43  
 三俣神社 .....1-41・190  
 みつまん .....3-506  
 三峰講・1-15・46・132・138, 2-122, 3-15・55-107  
 三峰様 .....2-122, 3-207  
 みとどけ .....2-360  
 ミナガワ .....4-387  
 水口 .....5-36  
 ミナクチアガリ .....5-97  
 南町 .....4-28・55  
 嶺の神楽 .....1-16・231  
 ミノ .....1-55, 2-58, 3-74, 5-59  
 箕薬師 .....3-137  
 見舞 .....2-53  
 三間取り .....1-395  
 耳かくし .....3-74  
 ミミズ .....1-223, 2-240, 3-219  
 ミミズクの紺屋 .....2-439  
 耳だれ .....2-230  
 耳塚の薬師 .....1-128  
 耳ふさぎ .....1-20, 3-211  
 宮子の白蛇 .....3-530  
 宮鍋さま .....2-464  
 ミョウガ .....2-449, 3-578  
 苗字 .....2-36  
 明神様 .....2-137  
 三夜沢街道 .....1-106  
 弥勒様 .....3-44  
 ミロク山 .....2-462  
 三輪講 .....5-110

三輪様 .....3-153  
 三輪箭次 .....3-503  
 三輪大明神 .....3-144  
 民家 .....4-134, 5-274

む

六日づめ .....2-311  
 六日年 .....1-349, 2-387, 3-28・376  
 六日山 .....2-388  
 無縁仏 .....2-28・133・418, 3-165  
 向町 .....4-3  
 ムカエイチゲン .....1-309  
 むかしの嫁 .....3-530・537  
 昔話 .....3-442  
 ムカデ .....1-223, 2-240  
 ムカデ退治 .....3-594  
 ムカデの使い .....3-480  
 むかでまぶし .....5-48  
 麦 .....1-60・102, 2-59・92・574  
 麦打唄 .....1-243, 3-246  
 麦作 .....3-13, 5-32  
 麦ふみ .....3-13, 5-32  
 ムギフミローラー .....4-369  
 ムギまき .....1-10, 2-598  
 麦飯 .....2-7, 3-84  
 麦わら地藏 .....1-13・128  
 ムケエダンス .....2-347  
 ムコイチゲン .....5-165  
 婿選び .....3-591  
 婿取り .....1-304  
 婿どんぎもん .....1-5  
 むこのあいさつまわり .....2-351, 3-330  
 婿のご年始 .....3-347  
 無言競争 .....3-476  
 虫 .....1-223  
 ムジナ .....2-464, 3-544  
 むじなつき .....5-74・236  
 虫歯 .....1-222, 5-82  
 虫封じ .....1-291, 3-314  
 虫干し .....2-412  
 ムシロ .....5-59  
 ムシロオリ .....5-297  
 娘をもらいたい .....3-211  
 ムツゴ .....4-368, 5-283  
 棟上げ .....1-218  
 ムラ .....2-2, 5-86  
 村入り .....2-41  
 村仕事 .....5-96  
 村人足 .....1-392, 2-42, 5-96

枕直し .....5-173  
 枕めし .....3-224  
 マクリ .....5-109・154  
 馬子唄 .....1-245, 5-266  
 マゴノテ .....1-79  
 まじない .....1-227, 2-233, 3-210・211, 4-99  
 マス .....4-405  
 増田 .....3-276  
 増田学校 .....3-277  
 増田が淵 .....3-584  
 まぜ御飯 .....1-67  
 摩多利 .....5-132  
 摩多利神 .....1-13・129  
 マダリンさま .....3-143  
 待ちあみ .....3-112  
 待ち女房 .....1-315, 2-353, 3-331  
 町家 .....2-540  
 町屋敷 .....2-33  
 町家造り .....1-430  
 松 .....3-415  
 松毬 .....1-453  
 松飾り .....2-427, 3-416, 5-186  
 まつごく .....3-47  
 松並木 .....3-45・527  
 松葉刈り .....3-105  
 まつり .....1-12, 3-228  
 祭り用の股引 .....3-115  
 間取り .....1-7, 3-90  
 マネヒキ .....2-597, 4-361, 5-38  
 間引き .....3-301  
 間引き (ミソツキ) .....5-144・149  
 マブシ .....1-104, 5-47  
 マブシアミ .....4-388  
 マブシオリキ .....4-388  
 まぶしの種類 .....5-48  
 まま母 .....3-594  
 マミサン河原 .....2-457  
 豆 .....1-60, 3-394  
 豆うらない .....5-200  
 豆なげの由来 .....2-441  
 豆ぼうち .....3-536  
 豆まき .....1-21, 3-394, 5-200  
 繭 .....1-104  
 まゆかき .....1-355, 2-398・581  
 マユカゴ .....4-388  
 3-380・396  
 マユダマ .....1-352・353・358, 2-68・391,  
 5-17・143・194  
 まゆねじ .....2-398  
 繭販売 .....2-581

魔除け .....2-234  
 摩利支天 .....3-277  
 摩利支天様 .....3-142  
 摩利支天信仰 .....3-19  
 まりつきうた 1-261, 3-252・253, 4-112, 5-264  
 丸尾講 .....1-138  
 まる火 (び) .....5-187・227  
 マルビ .....3-28・378・380・591  
 マルビヲタク .....5-183・194  
 マルブキ .....5-23  
 丸髻 .....1-56  
 マワタカケ .....4-394  
 マワリオンガ .....4-356  
 まわり舞台 .....1-257  
 マワリブチ .....3-574  
 マンガ .....3-105, 4-362, 5-44  
 マンガアライ .....2-91  
 マンカイ塚 .....4-132  
 マンガ祝い .....1-363  
 まんがおし .....3-223  
 まんから .....3-506  
 マンゴク .....4-373  
 万才 .....1-252・255  
 万才池 .....3-584  
 まんじゅう .....1-6, 2-8・74, 3-6・78・81  
 まんじゅうの味 .....3-533  
 マント .....1-52  
 万年機 .....3-466  
 マンノウ .....4-359  
 マンリキ .....5-32

## み

箕 .....3-403, 4-373  
 見合い .....1-303, 2-344, 3-321, 5-161  
 見返り稲荷 .....3-144  
 三日月さま .....3-77  
 三日月様 .....2-123  
 三日月豆腐 .....2-123  
 御荷鉾の三束雨 .....3-13・215  
 三河町 .....4-12  
 三河万才 .....3-263・265, 4-104, 5-267  
 見切塚 .....3-586  
 ミコシ .....4-70, 5-125  
 水あげ .....2-42  
 水あび .....3-63  
 水鏡 .....3-593  
 水掛け着物 .....1-342, 2-376, 3-366  
 ミズガメ .....1-88, 4-347  
 水げんか .....1-8, 5-37・116

宝篋印塔 .....3-273  
 方言 .....2-306, 3-561, 5-240・301  
 奉公 .....2-88  
 奉公人 .....2-492, 3-53  
 坊さん .....2-485  
 豊蚕信仰 .....3-21  
 法事 .....1-341, 2-375  
 帽子 .....1-54, 2-57  
 ホウシャク .....3-219  
 ほうしゃくの杉 .....3-524  
 宝乗寺 .....3-137  
 ホウジロ .....3-217  
 坊主頭 .....3-74  
 宝禅寺 .....1-201  
 ホーソー .....1-224, 3-314, 5-80  
 ほうそう送り .....3-208  
 ほうそう神 .....1-455  
 ホーソウ店 .....5-125  
 ボウチ唄 .....3-14  
 ボウチブチ .....4-372  
 ボウチボウ .....5-33・288  
 包丁 .....1-80  
 ほうとう .....2-63  
 防風林 .....1-82, 3-9  
 蓬萊山 .....2-358・605  
 宝林寺 .....1-182  
 ホウロク .....1-79・220, 4-341  
 ボール .....4-388  
 ホカイ .....4-410  
 ホカケ .....3-596  
 ホガケ .....3-94  
 ボク .....3-366  
 牧草 .....3-104  
 牧畜 .....4-48  
 ホコリカブリ・フッコ .....5-8  
 星祭 .....3-166  
 細井神社 .....1-119・157  
 細野天神 .....3-133  
 ボタ餅 .....1-67, 2-68, 3-6・81, 5-17  
 ボタモチ地藏 .....3-139  
 ぼたもちの話 .....1-384  
 ぼっくり観音 .....3-139・273  
 ポックリ観音 .....3-350  
 ホド神 .....1-113  
 仏様のお茶 .....3-522  
 仏様のお守り .....3-462  
 仏様のご飯 .....3-206  
 仏のたたり .....3-210・549  
 仏の日 .....3-383  
 宝登山の講 .....5-109

ホドシダイ .....5-77  
 ホトトギス .....3-218・580  
 ほど灰 .....5-11  
 ほどばらい .....5-173  
 ホマチ .....3-47, 5-112  
 ホラ貝 .....1-10・108  
 堀 .....3-88  
 堀あげ .....1-38  
 堀川町 .....4-290  
 堀の水かえ .....3-112  
 ホリハライ .....1-38, 3-52, 5-62・97  
 盆 .....1-22・364・456, 2-415  
 盆市 .....3-125  
 盆唄 .....3-256  
 盆おくり .....2-418, 3-406  
 盆おどり .....2-29・262, 3-474  
 盆踊り唄 .....2-257  
 盆がら .....5-216  
 盆行事 .....3-28  
 本家 .....2-50  
 本家・分家 .....5-114  
 本郷 .....3-43  
 本膳 .....1-322, 2-360, 3-341, 4-409  
 盆棚 .....2-418, 3-406, 5-212  
 ボンチ .....4-11  
 盆中の死者 .....3-360  
 ぼんでんあげ .....3-402  
 盆のウマ .....2-418  
 盆のお茶 .....3-206  
 盆の野まわり .....3-407  
 ボンプ .....5-90  
 ボンボリ .....4-32・35  
 本町申合町則 .....4-21  
 盆迎え .....2-417, 3-405, 5-215

ま

マイカキ .....5-48・197  
 埋薪法 .....1-103  
 マイ玉 .....5-201  
 まいだまかざり .....3-378  
 前橋市旧町村めぐりのうた .....4-20  
 前橋の言葉 .....4-128  
 前ぶれ .....1-227  
 マキボウ .....4-393  
 マキワリ .....4-396  
 マグサ税 .....5-97  
 枕 .....1-5・59・218, 4-426  
 マクラダ .....5-35  
 枕団子 .....1-330, 3-351



富士講 .....5-109  
 富士山 .....3-144  
 不二山古墳 .....4-131  
 不祝儀 .....5-91・110  
 不浄石 .....2-463  
 普請 .....2-84・87・602  
 婦人会 .....4-294  
 不整形田字間取りの民家 .....2-522  
 不整形田字間取り .....1-412  
 双子山 .....4-330  
 二つアガリ .....5-45  
 二つ子 .....2-225  
 二間取り .....1-395  
 フダング .....1-4・50, 2-55, 3-4・67・68・69,  
     5-9  
 仏壇 .....1-11・114, 2-417, 3-9  
 ブッチメ .....1-391, 5-63  
 ブツケ .....5-308  
 フドウ様 .....1-130, 2-400, 3-137・582・583,  
     5-142  
 不動信仰 .....3-19  
 不動尊 .....2-313  
 不動尊祭り .....3-385  
 ぶどうっこ .....3-298  
 蒲団 .....1-5・59  
 船尾の天狗 .....2-473  
 フナト .....3-44  
 船渡の松 .....3-124・493・586  
 船乗り大黒 .....5-122・135  
 舟橋 .....3-123  
 フナ餅 .....2-93・315  
 船屋敷 .....4-320  
 ブノビ .....2-38  
 フノリ .....4-228  
 フミゴザ .....1-79  
 冬ざく .....5-33  
 ふりこのよめご .....3-331  
 振り米 .....3-579  
 フリマンガ .....5-28・281  
 ふるいふるかね .....2-450  
 古川 .....3-584  
 古鉄瓶 .....3-577  
 古利根 .....3-491, 4-130  
 フレ正月 .....3-62  
 フレ番 .....1-2・34  
 触れ番 .....1-10  
 触れ番役 .....1-108  
 フロ .....1-92・225・391・452, 4-33  
 フロオケ .....3-91  
 風呂川 .....1-27

ふろしき .....3-76  
 風呂屋 .....4-10  
 文京町 .....4-29  
 分家 .....1-3・47, 2-4・50, 5-12  
 粉食 .....1-5  
 ふんどし .....5-8  
 ブンブングルマ .....4-393  
 文明開化 .....3-513  
 フンモンメバカリ .....4-406

へ

米寿 .....3-316  
 兵隊ごっこ .....1-296, 2-568, 3-267  
 兵隊のがれ .....3-62・529  
 ヘソクリ .....2-5・52  
 ヘソノオ .....1-275, 2-326, 3-297, 5-148  
 ヘッタ .....5-146  
 ヘツツイ .....1-88, 3-9, 5-25  
 へっぶり嫁御 .....1-383  
 屁徳 .....2-444  
 屁の失敗 .....3-526  
 ヘビ .....1-227, 2-240, 3-219, 5-19・34  
 ヘビイチゴ .....3-220  
 ヘビの神様 .....3-127  
 ヘビ除け .....2-233, 3-550  
 ベベかんのん .....5-229  
 ベベズキン .....5-240  
 へまた .....2-443  
 ヘヤ .....1-8・86・271, 3-293, 5-25  
 弁才天 .....3-142  
 便所 .....1-7・93・452, 2-9・79・229, 3-212  
 便所神 .....1-113, 2-101  
 ベンジョまいり .....1-18・281, 2-330, 3-303  
 弁天講 .....1-132  
 弁天様 .....1-130  
 弁天沼 .....3-584・596  
 弁当 .....1-78, 3-77・88, 4-32, 5-19

ほ

ホイロ .....1-88  
 棒打ち .....1-98, 3-108  
 棒打唄 .....3-246, 5-263  
 方角 .....2-29・238  
 ホウカムリ .....1-54  
 防寒具 .....3-71  
 ほうき .....1-218, 3-91  
 ほうき星 .....3-516  
 豊凶 .....5-73

ヒシタボ……………5-10  
 ヒシャク ……1-266・279, 4-344・347・419  
 ビションマイ ……3-111  
 ヒソカエシナノカ ……5-145  
 ひだりい田 ……3-499  
 左住居 ……1-220  
 左甚五郎 ……3-593  
 ヒツケエシナノカ ……1-341, 3-363  
 ビッチュウグワ ……4-359  
 引っぱりもん ……5-269  
 ひでり ……1-99  
 ひとえ ……3-73  
 ひとえもん ……1-5  
 人形大祓い ……4-65  
 ひとかたけ ……5-13  
 人がみたらカエルになれ ……3-487  
 ヒトザシキ ……1-311  
 ひとだま ……2-234・465・482, 3-523,  
     5-172・237  
 ひとつきにいっぺん ……3-487  
 ヒトナノカ ……1-342  
 初七日 ……3-363  
 ひとつもっこ山 ……2-443  
 日取り ……2-346, 3-323  
 ヒトリマンガ ……5-281・283  
 ヒナ市 ……5-68  
 ひな送り ……5-204  
 ひなまつり ……1-22, 2-314・404・570, 5-203  
 避妊 ……2-328, 3-301  
 ヒノウエ ……3-223・360  
 ヒノウエマ ……1-137, 3-224・533  
 火ノ神様 ……1-11  
 ヒノシ ……1-57, 4-339  
 樋の滝 ……3-493  
 火の玉 ……2-483, 3-547  
 火の魂 ……3-350  
 火の番 ……2-40, 5-97  
 ヒバ ……1-71・221  
 ヒバアシ ……5-16  
 火柱 ……3-525  
 日ばた ……5-12  
 ヒバリ ……3-218  
 避病院 ……3-46  
 火ぶせの神 ……5-132  
 ヒモカワ ……4-31, 5-15  
 火もどし ……5-83  
 百円札 ……3-535  
 百社まいり ……1-46, 3-165  
 百体観音 ……3-139  
 百日かつら ……3-581

百日咳……………5-81  
 百万遍1-364, 2-130・410・420, 3-20・158, 5-216  
 百万遍念仏……………1-135・16・246, 2-123  
 冷汁……………1-68  
 百軒町 ……4-4  
 日傭……………3-53  
 雹……………3-215  
 雹害……………3-105  
 病気除け……………2-337  
 表具師……………4-37  
 標準服……………3-115  
 雹よけ……………5-76  
 日吉町……………4-12  
 肥料……………1-99・102・454, 2-573, 4-34, 5-42  
 肥料代……………5-29  
 ひるばした……………3-85  
 ヒルバテ ……3-36・84  
 拾い親……………1-285, 2-332, 3-308, 5-115・156  
 拾い物分配……………3-478  
 披露宴……………1-321, 2-358, 3-338  
 広瀬河岸……………4-275  
 広瀬川……………3-274, 4-276  
 ヒロメキ (グルメキ) ……5-295  
 ビワ……………1-221  
 火渡り……………1-138  
 貧乏神……………3-593

ふ

ふいっさく……………2-599  
 フイトウサマ……………2-122  
 深沢……………3-42  
 フカシ……………4-345  
 ふかしまんじゅう……………1-63, 2-65, 3-80  
 深町……………3-41  
 ブク……………5-152  
 副業……………1-99  
 福島橋……………3-123  
 副食……………3-76  
 副食物……………1-5  
 福德寺……………1-121  
 福守様……………1-126・265  
 福守神社……………1-178  
 袋……………1-59  
 フゴ……………1-392  
 不幸田……………5-35  
 不幸の時の膳……………3-87  
 不幸見舞……………3-51  
 藤岡街道……………3-276  
 藤川……………3-584

初穂米 .....1-122  
 初参り .....1-345, 2-384  
 初もうで .....1-345・377, 2-310, 3-375  
 初湯 .....3-373  
 初夢 .....2-311・385  
 初ヨメ .....1-348  
 初嫁のご年始 .....3-375  
 馬頭観世音 .....2-462  
 馬頭観音 .....1-134, 2-297, 3-139, 5-143  
 ハナ .....1-351, 2-391, 3-379  
 鼻 .....1-223  
 ハナカキ .....2-391  
 花が咲く .....3-581  
 はなくさ餅 .....3-398  
 花咲翁 .....3-443  
 話の経路 .....3-553  
 鼻血 .....2-231  
 はなどり .....2-91  
 花まつり .....1-22・361, 3-397, 4-126  
 花嫁衣装 .....1-53  
 羽根つきうた .....5-266  
 羽根つき唄 .....4-111  
 ハネツルベ .....5-21  
 ハモ .....5-290  
 早口言葉 .....3-554  
 林 .....4-9  
 はやす .....3-35・574  
 腹帯 .....1-268, 2-322, 3-289, 4-113, 5-146  
 腹くだし .....1-223  
 ハラミオンナ .....5-145  
 はらみばし .....2-312・398  
 張り板 .....1-58, 4-339  
 針供養 .....1-358, 3-413, 5-192・202  
 ハリツケ田 .....3-44  
 ハリツナ .....4-364  
 ハルゴ .....5-29  
 春駒 .....1-254, 3-263, 5-70・267  
 榛名 .....2-454  
 榛名湖 .....2-458  
 榛名講 .....1-46, 2-115, 3-157, 5-108  
 春彼岸 .....2-314  
 春まつり .....1-359・361, 2-314, 3-398, 5-205  
 はれぎ .....3-4  
 はれもの .....3-210  
 班 .....1-2・35  
 番神山 .....3-512  
 ハンゲ .....1-8, 2-203・315・488, 5-16・41・45・84・  
 207  
 ハンゲ様 .....2-134, 3-588, 5-208  
 ハンゲンドン .....5-16

半夏田植 .....3-107, 5-4  
 ハンケツ .....2-328  
 ハンゲツパ .....3-220  
 番小屋 .....2-41  
 半殺し .....2-448  
 半鍾 .....1-10・108, 3-56  
 バンゾウ .....3-532  
 バンタ .....2-20・45・509  
 番地 .....2-35  
 番長 .....5-145  
 はんでん .....1-4・51, 3-114, 5-7  
 ハントウ .....5-92  
 番頭 .....2-46・87・492, 3-53・103・517  
 坂東太郎岩 .....2-26・455  
 ハンドリ .....3-223, 5-13・39  
 半日遊び日 .....3-518  
 はんねん橋 .....3-123  
 半バック .....3-74  
 番町 .....4-5  
 パンミズ .....5-37  
 パン屋 .....3-126

## ひ

ヒ .....4-395  
 ヒイヌキ祝い .....5-44  
 ヒイラギ .....1-357, 3-395  
 ヒエ .....2-60  
 日枝神社 .....1-41, 3-233  
 東箱田の地藏様 .....2-274  
 東前橋駅 .....3-121  
 彼岸 .....1-23・360, 2-405, 3-396・408, 4-126  
 ヒガンバナ .....2-241  
 引きこ .....5-261  
 ひきつけ .....1-224, 2-232  
 引き出もの .....3-342・360  
 引間の源六 .....2-469  
 引間の妙見様 .....2-136・412  
 ヒキユズリ .....5-93  
 ヒキワリ .....1-60  
 ひきわりのかんかん .....5-14  
 ヒキワリメシ .....3-5・76  
 ビク .....5-60・290  
 ビクエダイ .....3-524  
 樋口 .....3-42  
 比丘尼さま .....3-273  
 ビクニダイ .....3-43・472  
 飛行機 .....3-516  
 樋越 .....3-43  
 ヒザナオシ .....5-169

歯痛 .....1-222, 2-230  
 灰よせ畑 .....3-46  
 ハエ .....3-219  
 ハエオ縄 .....5-198  
 羽織 .....1-4・52, 2-7, 3-67  
 墓 .....1-456, 2-373, 3-361  
 羽階権現 .....2-26  
 墓づくり .....1-339  
 ばかっぱなし .....3-526  
 バカド .....5-61  
 墓場の年始日 .....3-28  
 墓ほり .....3-51  
 墓まいり .....3-205・384  
 ばかむこの話 .....2-447, 3-482, 5-233  
 馬鹿息子 .....2-447  
 掃木松 .....1-127  
 はきたて祝い .....3-16  
 履物 .....1-54, 3-72  
 萩原重左衛門 .....1-385  
 はぐさっ競馬 .....3-40  
 白山さま .....2-107  
 バクチ .....2-54  
 バクチ場 .....1-456  
 馬具塚 .....3-586  
 バクcrow .....1-105, 3-45  
 馬喰 .....5-54  
 端気川 .....3-112・125・584  
 はけた .....3-587  
 バケツ .....5-86  
 馬耕起 .....5-38  
 ハコゼン .....1-78, 2-78, 3-88, 4-348  
 箱田 .....2-455・462  
 ハコベントウ .....4-403  
 八朔の節句 .....1-368  
 はし .....3-78  
 橋 .....1-106, 2-97, 3-122  
 ハシカ .....1-291, 3-209, 5-80  
 橋供養 .....5-64  
 馬車 .....3-125  
 馬車鉄道 .....4-59  
 柱 .....1-95  
 はせ五郎兵衛 .....3-501  
 はたおり .....1-99, 3-112  
 機織り .....1-57, 2-59, 3-75・103, 5-12  
 機織唄 .....5-267  
 機織り子 .....5-105  
 機織り名人 .....2-453  
 ハダカまつり .....2-397  
 はたがみ祝い .....3-397  
 裸みこし .....4-68

機神様 .....5-134  
 ハタキマエ .....5-56  
 畑 .....1-453, 2-92, 3-95  
 ハタシマワリ .....5-58  
 ハダッコ .....5-157  
 ハタマワシ .....5-57  
 ハチ .....1-222, 2-231  
 八十八夜 .....1-361, 2-315・407, 3-399, 5-124・206  
 ハチの巣 .....3-591  
 鉢巻き .....1-54, 2-57  
 八幡宮 .....1-119・162, 2-287, 4-65・329  
 八幡様 .....1-116・125, 2-107, 3-144・582  
 八幡様の舞台 .....2-273  
 八幡太郎義家 .....2-461  
 八幡まつり .....3-230  
 八幡山 .....1-390  
 八幡山古墳 .....3-585  
 初市 .....2-311・559, 4-121, 5-191  
 初卯 .....2-311, 3-385  
 初午 .....1-21・358, 2-313・403・565・601, 3-135・  
 396, 5-201  
 初絵 .....2-385  
 初絵売り .....1-255  
 初エビス .....5-198  
 初買い .....1-348, 2-311  
 八海山 .....3-155  
 初外出 .....2-330  
 二十日エビス .....2-400  
 二十日灸 .....3-385  
 二十日正月 .....1-356, 2-313・400・563, 3-384,  
 5-197  
 初観音 .....2-399  
 初朔 .....5-99  
 八朔 .....1-22, 3-403・408, 5-217  
 八朔の節句 .....1-325, 2-317・420  
 初節句 3-306, 1-287・361, 2-333, 4-116, 5-155  
 初田植 .....2-12, 3-12  
 バッタン .....5-12  
 初誕生 .....1-455  
 ハッタンドリ .....4-365, 5-27・41  
 はっちょうぐみ .....2-39  
 ハッチョウジメ .....1-37・137, 2-2・43・315・411,  
 3-47・400, 5-207  
 発電所 .....2-85  
 初なり .....3-165・211  
 初荷 .....2-557  
 八百八塚 .....3-44  
 発表会 .....4-237  
 初穂 .....3-12・165, 5-45  
 ハッピーサン .....5-113

ね

ネエーラ……………5-53  
 ネエマ……………5-39  
 願い事……………1-227  
 ネギヌタ……………5-167  
 ネコ……………2-481, 3-219・545  
 ネコが十二支にはいらぬ……………2-446  
 ネコとネズミ……………2-446  
 ネコの分……………3-581  
 猫見塚……………3-525  
 ねじっこ……………1-6, 3-80・83・86  
 ネジッコ……………1-63  
 寝小便……………1-222  
 ねじりずんぼう……………3-70  
 ネジリ袖……………2-55  
 ネズミ……………3-218  
 ネズミ浄土……………3-593  
 ねずみつぶさぎ……………2-318  
 鼠ぶさぎ……………2-599  
 ネズミの分……………3-581  
 ネズミの嫁入り……………3-479  
 ネズミフサギ……………1-373  
 ネットキ……………1-296  
 ネットイ……………3-269  
 ネットイ遊び……………2-566  
 根っ子祇園……………1-259  
 熱さまし……………3-208  
 ネドコ……………1-414  
 寝間……………1-87  
 寝間着……………1-59, 3-74  
 子待講……………5-105  
 練肥……………2-598  
 年忌……………1-343, 2-377, 3-367  
 ねんざ……………1-226  
 年始……………2-310, 5-115  
 年始まわり……………1-348, 2-385, 3-374, 5-188  
 年代記……………5-94  
 年中行事……………3-419  
 年番……………1-34, 3-48  
 念仏……………1-246, 2-263・375, 3-257  
 念仏供養……………1-341, 3-365  
 念仏講……………1-132  
 念仏玉……………3-351  
 念仏橋……………1-107・216, 3-123・589  
 念仏申し……………3-51  
 年雇い……………2-88  
 燃料……………1-89, 2-85, 3-91

の

ノイチゴ……………1-221  
 のいんぼう……………3-576  
 農家……………4-34  
 納棺……………1-333, 2-367, 3-353  
 農業……………4-48  
 農作業……………2-571, 3-96  
 農事暦……………5-34  
 ノウデカラ……………3-10・107  
 ノウデガラ……………3-581  
 農繁休暇……………1-37  
 農休み……………1-2・22・37・363・456, 2-315・410・582,  
 3-17・102・105・399・407, 5-44・97  
 軒下……………2-224, 3-164  
 のきだれ……………3-207・579  
 ノゲ……………5-263  
 ノゲアイ……………5-35  
 鋸職人……………4-40  
 ノシアゲ枠……………5-295  
 ノゾッコミ……………5-118  
 ノチザン……………1-274, 2-326, 3-296, 5-144・148  
 ノツツケ……………5-60  
 のつつけがみさん……………3-530  
 のっぺらぼう……………3-550  
 のてっくれ……………3-576  
 のど……………1-223  
 野中の一本杉……………3-524  
 野中の大水……………3-516  
 野中の太鼓……………3-58  
 野辺の送り……………1-20・336, 2-370, 3-357  
 ノボート……………5-118  
 ノボリ……………4-419  
 野馬塚……………2-34  
 のみの夫婦……………2-495, 3-488  
 野良犬……………2-283  
 野良犬今昔……………2-280  
 野良犬の獅子舞……………2-251・288  
 ノラギ……………1-50, 2-55, 3-67  
 乗り合い馬車……………3-45  
 ノリクラ……………4-399  
 のりつけ……………5-13

は

歯……………1-226  
 バイオリン弾き……………4-104  
 梅花桜天神……………5-130・299  
 排水……………1-93  
 排水路……………1-83

なちにははなそげ .....3-576  
 名づけ親 .....5-114  
 夏下冬上 .....3-205  
 夏の虫 .....3-531  
 夏まつり .....2-133, 3-401  
 夏祭り .....3-136・278, 4-126  
 ナツマンガ .....5-281・283  
 七草 .....1-349, 2-387・558, 3-377  
 七草ガユ .....1-66・251, 2-68・311, 3-79, 4-434,  
     5-191  
 七草の唄 .....3-253  
 ナナツナキハンドリ .....5-39・84  
 七ツ坊主 .....3-312, 5-76・155  
 ナナデンボウ .....3-321, 5-162  
 七晩焼き .....2-22・132・316・417  
 浪花節 .....3-266・263  
 名主 .....4-319  
 ナノカ念仏 .....1-341  
 タノクサトリ .....4-365  
 ナベ .....4-340  
 ナベカリ .....3-375, 5-201  
 なべ飯 .....3-84  
 涙橋 .....3-123  
 ナメクジ .....3-219  
 成り木責め .....1-355, 2-400, 3-211, 5-196  
 ナレアイ .....3-320  
 縄 .....1-230, 3-579  
 縄しめし .....1-450  
 苗代 .....5-39  
 縄とび .....1-264・295, 4-110  
 なわない .....1-98, 3-103  
 ナンジョ .....5-147  
 ナンド .....1-87・271・402, 2-80, 3-8・293, 5-147・  
     174・275  
 なんふう .....3-36  
 なんまいだんぼ .....1-127  
 ナンマイダンボ .....1-135  
 ナンマインボ .....1-258  
 ナンミョウサマ .....3-166

に

ニアガリ .....5-34  
 新潟の女 .....3-278  
 仁王様 .....3-464  
 二階 .....1-89  
 ニグラ .....4-400  
 荷車 .....1-106  
 逃げがある .....1-404  
 逃げなし .....1-404

ニザン .....5-144・150  
 西川 .....3-44  
 西箱田 .....2-34  
 二十三夜講 .....1-132, 5-104  
 二十三夜様 .....2-297, 3-150  
 二十三夜待 .....1-14  
 二十二夜講 .....1-132, 2-121, 5-104  
 二十二夜様 .....2-121, 3-150  
 二十二夜待 .....2-565  
 二重まわし .....1-52  
 ニシン .....1-69  
 二反の白 .....3-525  
 日輪寺 .....1-121・175  
 日蝕 .....3-217  
 新田塚 .....1-385  
 新田用水 .....3-100  
 ニナイモッコ .....5-290  
 ニノゼン .....4-409  
 二百十日 .....1-369, 3-408  
 ニボウトウ .....1-63, 3-6・79・81・85,  
     5-14・58  
 二毛作 .....3-14  
 煮物 .....1-69  
 二夜様 .....2-403, 3-151  
 二夜待 .....3-22  
 ニュウ .....1-83  
 入家 .....2-351  
 入家式 .....3-339  
 入定墓 .....5-182  
 入植 .....1-449  
 如意寺 .....1-204  
 女体様 .....3-287  
 女体神社 .....3-133  
 庭 .....1-7・82, 3-9  
 ニワアガリ .....3-12・101・597  
 にわか大尽 .....3-593  
 庭銭 .....3-26・355・359  
 庭帳 .....1-20  
 ニワトコ .....1-230, 3-220・379, 5-193  
 にわとり小屋 .....3-88  
 人形芝居 .....5-260  
 妊娠 .....1-265, 3-287, 4-113  
 妊婦 .....1-265, 2-229・320

ぬ

抜け作 .....3-593  
 瀬島 .....3-38  
 沼田街道 .....1-10・27

床入れ .....1-322, 3-341  
 床の間 .....3-8  
 年祝い .....1-19・294, 3-316, 5-157  
 年男 .....2-310・385, 5-186  
 年神様 .....1-377, 5-185  
 年神棚 .....5-185  
 トシトク神 .....5-185, 3-418  
 としとり .....2-311, 3-394, 5-200  
 年まわり .....3-223  
 ドジョウ .....2-241  
 渡船場 .....1-27・106  
 土葬 .....1-338, 3-360  
 土蔵 .....1-7, 2-78  
 土地広げ .....3-63  
 とつきとうば .....3-209  
 どっこいしょ .....3-483  
 鳥取 .....1-385  
 利根川 .....2-26, 3-490, 4-310  
 とびあがり .....3-216・217  
 飛地 .....3-39  
 扉天神 .....3-134・143・583  
 ドブハライ .....5-91  
 ドブロク .....2-69, 5-17  
 トボグチ .....1-7・396, 2-79・135  
 トボロ .....5-148  
 ドボシ .....5-33  
 トマス .....4-404  
 トマト .....3-579, 4-313  
 富沢作衛門 .....2-461  
 トモコヨビ .....3-25・329  
 富山の薬売り .....3-126, 5-116  
 土用 .....2-412, 3-589, 5-208  
 土用の丑の日 .....2-315  
 土用のみつめ .....3-401  
 土用干し .....1-5  
 土用餅 .....3-407  
 豊川稲荷 .....2-114  
 虎が淵 .....2-457  
 ドラ焼き .....1-64  
 トリアゲバアサン .....1-272, 2-325, 3-295,  
     5-146・151  
 トリイダ .....5-35  
 鳥追い .....2-21・399  
 鳥追い唄 .....2-262  
 鳥羽 .....2-34  
 トリムスビ .....5-165  
 取り結び .....1-319, 2-357, 3-337  
 鳥目 .....1-223  
 トロツペシ .....3-575  
 泥棒除けの縄 .....1-227

トロホリ .....4-360, 5-283  
 とろめし .....3-83  
 とろろ .....1-225, 3-208  
 トロロメシ .....2-229  
 頓智話 .....2-451  
 どんどこじい .....3-507  
 ドンド焼き .....1-353, 2-391, 4-122・125  
 ドンドンヤキ .....1-44, 3-380, 5-194・306  
 呑竜さま .....1-290, 3-312, 4-197・200  
 呑竜坊主 .....3-313  
 呑竜マーケット .....4-10

## な

菜 .....3-205  
 内職 .....1-99  
 苗代 .....1-9・101  
 苗代祝い .....3-11・108  
 ナエトリダイ .....4-364  
 ナオシ .....2-365  
 直食 .....5-318  
 長生き .....3-224  
 中川町 .....4-30  
 ナカザシキ .....3-90  
 ながし .....3-9  
 ナガシゴト .....5-146  
 流し針 .....2-591  
 長っぱなし .....3-553  
 ナカノマ .....1-85  
 ナガヒバチ .....4-352  
 ナカヤ熊五郎 .....3-586  
 中休み .....5-43  
 流れ灌頂 .....1-279, 2-328, 3-302  
 投げ餅 .....2-82, 3-94  
 仲人 .....1-304・326, 2-345, 3-321, 5-145・162  
 仲人へのお礼 .....2-363, 3-348  
 仲人まわり .....1-308, 2-348, 3-326  
 夏越の行事 .....5-127・222  
 梨 .....3-108  
 梨大尽 .....3-504  
 梨の品種 .....5-55  
 名付け .....1-18  
 なぞ .....3-34  
 なぞかけ .....3-557  
 なぞなぞ .....2-501  
 ナタガマ .....4-378  
 ナタギリ薬師 .....3-140・500, 5-138  
 ナタネ油 .....3-126  
 菜種油 .....1-74  
 ナダレ .....5-47

天狗 ……1-138, 2-440, 3-552  
 天狗岩用水 ……2-26・455  
 天狗松 ……3-492・524  
 デングリゲーシ ……5-13  
 天元社 ……4-219  
 天候 ……1-228  
 天竺浪人 ……3-165  
 電車 ……2-98・282, 4-57  
 天神川 ……1-28  
 天神講 ……1-14・21・44・131・356・372・374,  
 2-115, 3-152, 5-104・199・225・304  
 天神様 ……1-125・368, 2-105・115・403, 3-134・  
 142・582, 5-130  
 天神信仰 ……3-21  
 天神待ち ……2-313  
 天水田 ……5-36  
 レンタンキ ……4-354  
 天道 ……2-450  
 電灯 ……3-62, 4-499・500・516, 5-25  
 天道念仏 ……1-45・246・360, 2-124, 3-20・28・  
 159・256・408, 5-202・218  
 天王さま ……3-400  
 天王様 ……2-108・292, 3-146, 5-130  
 天王信仰 ……3-20  
 天王まつり ……1-123, 2-584, 3-401, 4-123  
 テンピンバカリ ……4-407  
 でんぼう ……3-505  
 でんぼう馬喰 ……3-531  
 でんぼうばなし ……3-476  
 天明の泥押し ……3-512  
 天明の噴火 ……3-512

と

ド ……5-61  
 砥石 ……1-218  
 ドウ ……2-591, 4-399  
 灯火 ……1-452  
 稻荷新田 ……2-34  
 とうかのよめとり ……5-235  
 トウカンヤ ……1-23・264・456, 2-133・317・421・  
 424, 3-251・410・413・592, 4-124・128,  
 5-184・219  
 十日夜の唄 ……4-112  
 十日夜の餅 ……3-588  
 どうぎ ……1-51, 3-5  
 道具送り ……1-315, 2-354  
 トウグワ ……4-360  
 道玄橋 ……3-123  
 ドウコ ……4-352

冬至 ……1-220・225・374, 2-318・429, 3-205・216・  
 415, 5-22  
 湯治 ……3-54, 4-193  
 同志会 ……4-10  
 通し水 ……5-89  
 凍傷 ……2-231  
 東照宮 ……4-130・295  
 トウスミ ……1-94  
 道祖神 ……1-126, 2-108・131・292・391, 3-275・  
 523, 4-297, 5-122, 2-126・560  
 道祖神は兄妹夫婦 ……3-472, 2-445  
 道祖神祭り ……2-21・276  
 道祖神焼き ……2-312  
 桃中軒雲右衛門 ……3-510  
 どうどう ……3-499  
 とうなす ……3-415  
 盗難除け ……5-107  
 豆腐 ……2-66  
 動物たちの食べ物 ……3-465  
 豆腐の病気 ……3-481  
 とうふ屋 ……3-126  
 トウミ ……4-372  
 ドウモト ……5-29  
 トウモロコシ ……1-220, 2-25・508, 3-536  
 とうりゅう様 ……1-127  
 棟梁送り ……1-95, 2-82, 5-22  
 道路 ……1-27, 2-98  
 トウロウ ……1-45・368, 2-410  
 灯籠 ……1-118, 3-401, 5-98  
 トウロウツケ ……5-98  
 灯籠祭り ……1-120・125・258  
 灯籠連 ……5-126  
 道陸神講 ……1-15・132  
 トウロツ子 ……5-157  
 道路普請 ……1-15  
 十日夜 ……1-370  
 十日夜の唄 ……2-263  
 トーデエ ……1-422  
 通り庭式民家 ……1-430  
 トカキボウ ……4-405  
 戸隠講 ……1-46・133  
 戸隠神社 ……3-155  
 土方 ……5-29  
 毒消し ……5-116  
 とくせい ……3-575  
 ドクダミ ……1-222・230, 2-242, 3-220  
 徳兵衛さんのかもとり ……3-458  
 とげ ……1-225  
 とげぬき ……3-208, 5-83  
 床上げ ……1-283, 2-331, 3-305



塚……………3-44  
 月……………2-450  
 つきあい……………2-43  
 ツクエ……………4-356  
 ツクリモノ……………1-351  
 つくろい……………1-58  
 ツゲ……………1-334・456, 3-353, 5-173  
 ツケ木……………1-94  
 つけもの……………1-70, 3-77, 5-19  
 辻念仏……………5-184・209  
 ツジュウダンゴ……………2-68・424, 3-83,  
 5-16・46・223  
 つじゅうねじ……………3-83  
 ツチ……………4-398  
 土……………3-96  
 土遊び……………3-269  
 土の橋……………3-271  
 筒粥……………5-109・189  
 つつたけ……………3-76  
 堤沼……………1-390  
 堤の獅子講……………1-241  
 ツトッコ……………5-145  
 つなはり……………3-106  
 ツネギ……………1-50, 2-55  
 常さん鋤……………3-527・536・577  
 つねっき……………3-68  
 角田……………3-42  
 椿の森稲荷……………1-124  
 ツバキハツケ……………3-210, 5-73  
 ツバメ……………2-239, 3-220  
 ツバメの土産……………3-480  
 つぶどんの歌……………3-252  
 ツボ……………4-348  
 つぼ庭……………3-89  
 ツボ山……………2-10・136・224, 5-134  
 ツマザマ……………4-369  
 ツマジリザマ……………4-369  
 ツミザマ……………5-290  
 つみっこ……………2-8  
 ツミッコ……………2-63  
 ツムギキ……………4-395  
 爪切り……………3-205  
 ツメッコ……………5-15  
 通夜……………1-20・330, 2-366, 3-351  
 艶平さん……………2-465  
 吊り橋……………1-28  
 つるし柿……………5-17  
 つるな……………2-562  
 鶴の恩返し……………3-444  
 つるべ縄……………1-92

て

帝国館……………4-103  
 停車場……………4-322  
 デエ……………3-7  
 デーデッコ……………5-125  
 デードコ……………1-401  
 出かせぎ……………1-98, 3-56  
 デカワリ……………3-53・393  
 デガワリ……………5-199  
 でがわり相撲……………3-58  
 出来秋……………3-77  
 できもの……………1-223  
 デキモノ……………1-225, 2-231  
 できもん……………3-208  
 デキモン……………5-78  
 適齢期……………3-320  
 でっかいこと……………3-579  
 鉄釜……………1-78  
 てっこう……………5-9  
 手伝い……………3-105  
 鉄鍋……………1-79  
 テツビン……………4-352  
 鉄瓶……………1-79  
 鉄砲火事……………1-385  
 鉄砲馬場……………1-390  
 テト馬車……………4-53  
 手拭……………1-53, 2-57  
 出念仏……………1-338  
 デビタリ……………5-92  
 てびねっくせえ……………3-36  
 出不足……………2-42  
 手毬唄……………2-567  
 手毬歌……………3-278・440  
 デヨメ……………2-347  
 寺……………1-42, 2-108  
 寺子屋……………1-31・390, 2-298  
 寺沢用水……………1-99  
 寺総代……………1-122  
 寺の田植……………5-41  
 寺へのご年始……………3-374  
 テレビ……………1-94  
 天下……………3-61  
 テンガ……………3-206・590, 4-357, 5-102  
 てんかん……………1-223  
 天気……………2-234, 4-99  
 電気……………1-94, 2-85・506, 3-91・514・536  
 天気雨……………3-214  
 電気館……………4-103・327  
 天気まつり……………3-214

足袋……………1-5・51・54・218, 3-71  
 タビガエリ……………3-348  
 食べあわせ……………2-223  
 食べ物……………2-7  
 玉風……………3-510  
 卵……………2-61, 3-77  
 田町……………4-36  
 多間取り……………1-424  
 多間取りの民家……………2-538  
 魂呼び……………1-19・328, 2-365, 3-350, 5-172  
 田村屋敷……………3-491  
 タメ……………2-79  
 溜井……………5-95  
 ためくみ……………3-40  
 タメシ……………5-13  
 たもと袖……………2-55  
 田休み……………1-102, 5-43  
 タライ……………3-363  
 樽立て……………1-305  
 タロウジ……………3-107・581  
 タワラアミキ……………4-395  
 俵かつぎ……………3-57  
 タワラゴシャイ……………5-43  
 タワラッペシ……………5-156  
 檀家……………1-122, 2-44・108  
 ダンゴ突き……………1-368  
 誕生祝い……………1-288, 2-333, 3-310, 4-116  
 弾正林……………4-131  
 箆箆職人……………4-38  
 ダンダゴロ……………3-216・580  
 旦那坂……………3-124・497  
 壇那寺……………1-122  
 たんぼがた……………3-575

ち

チカズキ……………1-311, 5-166  
 近戸神社……………5-128  
 チガヤの縄……………5-213  
 力石……………4-70, 5-118  
 力くらべ……………3-55, 5-269  
 力ごめ……………3-299, 5-148  
 力じまん……………1-390  
 力だめし……………1-264  
 チカラメシ……………1-335, 2-369, 3-356  
 力持ち……………2-472, 3-507  
 力餅……………3-299・365  
 チギのはなし……………3-579  
 治水の碑……………4-59  
 乳……………1-277

乳づけ……………5-154  
 血の雨……………3-579  
 千葉常政……………2-458  
 チバナレ……………3-210  
 チブク (チボク)……………5-150  
 茶……………1-80, 2-69, 5-17  
 茶しぶ……………3-529  
 ちゃぞつべ……………3-36・80・86  
 茶づくり……………4-213  
 茶柱……………1-228  
 ちゃんちゃん……………5-7  
 中気……………1-225, 2-232, 5-79  
 中耳炎……………1-222  
 昼食……………1-76  
 中絶……………2-328  
 中二階……………1-89  
 忠兵衛橋……………3-123  
 ちゅうや帯……………5-7  
 中宿……………1-310・315, 3-329  
 チョイチョイギ……………3-67  
 チョイチョイ着……………1-50, 5-10  
 丁間稻荷……………2-137  
 チョウシ……………4-410  
 朝食……………1-75  
 チョウズバ……………3-89  
 帳台構え……………1-400  
 チョウチン……………4-133, 5-47  
 チョウナ……………1-396, 4-396, 5-283  
 チョウバゴウシ……………4-406  
 帳箱渡し……………5-93  
 チョウパシ……………5-77  
 チョウバヅクエ……………4-406  
 徴兵のがれ……………3-535  
 ちょうまげ……………5-10  
 調味料……………3-77  
 長命……………5-121  
 貯蔵……………1-71  
 千代田町……………4-14  
 チョボクレ坊主……………3-265  
 チョンマゲ……………5-11  
 チンケ……………1-280  
 チンゲ……………3-302, 5-78  
 鎮守……………3-131  
 鎮守様……………1-12, 2-107  
 賃機……………5-57  
 賃びき……………1-29

つ

通婚圏……………1-309, 2-348, 3-326

大興寺 .....1-121・188  
 大黒 .....1-113  
 大黒柱 .....5-25  
 太鼓たたき .....1-43  
 大根の年取り .....2-387, 5-220  
 代参 .....1-132  
 代参講 .....1-15・46, 3-20・157  
 代参(人) .....5-108  
 太子講 .....5-105  
 大師様 .....1-13  
 胎児の性別 .....2-321  
 大蛇 .....2-449, 3-551  
 ダイショ .....2-333  
 大正用水 .....5-97  
 大食 .....3-77  
 大尽 .....2-474, 3-500・509  
 大神宮 .....2-107  
 大震災 .....3-62  
 大豆 .....1-60, 3-394  
 太々神楽 .....5-125  
 太々講 .....5-105  
 ダイドコ .....5-274  
 ダイドコロ .....1-85・396, 2-80, 4-351  
 台所 .....1-8  
 大日さま .....1-385  
 大日様 .....1-130  
 大日寺 .....3-137  
 大日如来 .....2-298  
 大八車 .....1-107, 5-131  
 だいばよけ .....5-53  
 堆肥 .....5-42  
 堆肥場 .....1-83  
 台風 .....1-32, 4-287  
 大宝寺 .....1-386  
 田植 .....1-8, 101・221・362, 2-90, 226・576,  
 3-102・106, 4-34, 5-15・40  
 田植唄 .....1-241, 3-11・246, 4-112, 5-262  
 田植を忌む日 .....3-12  
 田植えをして悪い日 .....3-203  
 田植着物 .....5-10  
 田植の着物 .....5-41  
 田おこし .....3-106  
 高井 .....2-33  
 駄菓子 .....4-297  
 高田町 .....4-5  
 高山塚の稲荷 .....1-124  
 田川 .....3-43  
 タキギトリ .....1-39  
 たき木ひろい .....1-99  
 タクアン .....1-70, 2-71

田草取 .....1-102  
 タグリ .....1-91  
 竹 .....2-241  
 竹ぐね .....5-20  
 タケナガ .....3-74  
 竹の橋 .....3-277  
 竹橋 .....3-123  
 竹本国太夫 .....3-274  
 竹ヤブ .....1-82  
 タコあげ .....1-264・296, 3-269, 4-107・488  
 たこあげ大会 .....3-597  
 タコづき .....5-20・22  
 田こなし .....2-597  
 山車 .....3-231  
 ダシバリツクリ .....1-421  
 タスキ .....5-9  
 畳 .....3-92  
 タチビの餅 .....3-365  
 タチブルマイ .....5-108  
 タヅクリ .....5-168  
 脱穀 .....5-43  
 辰の日 .....1-137, 2-91, 3-203, 5-41  
 たつまき .....4-311  
 豎町通り .....4-328  
 たつみ .....3-217  
 タテドウシ .....5-171  
 たて場 .....3-125, 4-58・223  
 たてまえ .....1-95・218, 2-82  
 たとえ .....3-553  
 棚かざり .....1-375  
 タナサガシ .....1-21・348  
 七夕 .....1-229・363, 2-239・315・410・415, 3-216・  
 400・596, 5-211  
 タナモンゲエシ .....5-170  
 タノモンゲエシ .....5-170  
 タヌキ .....2-479  
 種紙製造器 .....4-380  
 タネマキ .....2-598, 4-361  
 種繭雌雄鑑別器 .....4-380  
 種モミ .....3-10・102  
 種屋 .....1-103, 3-109  
 田の神 .....1-126  
 田の神様 .....1-9, 5-134  
 田の神信仰 .....1-24  
 田野久 .....3-475  
 田の草取り .....2-493, 3-108・520,  
 5-41  
 タノクロアズキ .....3-108  
 タバコ .....1-81, 2-70, 5-17  
 タバコボン .....4-355

石尊信仰 .....1-13, 3-19  
 セキつくり .....5-97  
 赤飯 .....1-66・218, 2-66, 3-81・86, 5-17  
 堰普請 .....1-38, 3-101  
 ぜげん .....2-53  
 勢多会館 .....4-11  
 セチギモノ .....3-67  
 せちびき .....2-318  
 節供 .....1-22・360, 2-403, 3-399, 5-153  
 節句歳暮 .....2-43, 5-225  
 節句のもち .....3-78  
 雪駄 .....2-57  
 せっちん大工 .....3-586  
 セツチンまいり .....1-282, 3-304  
 セツチンメエリ .....5-144  
 セットウ .....4-397  
 節分 .....1-21・357・456, 2-313・401・564, 3-209・  
 394, 4-125  
 節分祭 .....5-317  
 節分の豆 .....3-211  
 せなご .....5-111  
 ゼニバコ .....4-407  
 セリタタキ .....5-192  
 せりつみ .....2-311  
 世話人 .....2-108  
 膳ギリ .....5-100  
 浅間講 .....5-105  
 線香 .....2-134  
 善光寺 .....3-137  
 千庚申 .....2-126  
 千手観世音 .....5-141・230  
 善勝寺 .....1-147  
 染色 .....2-59, 5-11  
 泉蔵寺 .....3-137  
 せんぞく橋 .....3-123  
 先祖まつり .....3-60  
 洗たく .....3-75  
 洗濯 .....1-58, 3-205, 5-13  
 先達 .....5-109  
 船頭 .....4-307  
 船頭屋敷 .....4-130  
 千人針 .....3-528  
 センバ .....4-371  
 洗髪 .....1-56  
 千匹がゆ .....2-313  
 せん風 .....3-516  
 センフリ .....1-230  
 センブリ .....1-221  
 センペイヤキ .....4-342  
 千枚田 .....2-449

千両祝い .....3-62  
 ぜんわん貸し .....3-277

## そ

総会 .....1-37  
 葬儀 .....1-455, 2-613  
 そうじ .....3-205  
 葬式 .....1-218・227・327, 2-42・364, 3-349, 4-119  
 葬式組 .....1-35  
 葬式の赤飯 .....3-355  
 葬式の膳 .....1-77  
 掃除番 .....2-603  
 総社 .....2-33  
 総社神社 .....2-16・143・156  
 総社神社太々神楽 .....2-245  
 総社神社本祭り .....2-272  
 総社神社祭太鼓 .....2-273  
 総社立石の獅子舞 .....2-256  
 葬制 .....5-171  
 双生児 .....1-221  
 相続 .....2-51, 5-111  
 そうでん祭り .....5-54  
 雑煮 .....3-473  
 壮年団 .....3-317  
 宗甫分 .....4-125・305  
 総参り .....1-15  
 ゾウリ .....1-54, 2-57, 3-72, 4-337  
 ゾウリキラシ .....3-321  
 ソーレイ .....3-349  
 葬列 .....3-358, 5-176  
 俗説 .....2-306  
 測量 .....2-37  
 ソダ .....5-60  
 そだ具根 .....5-110  
 外風呂 .....3-59  
 外湯 .....3-94  
 ソバ .....1-6・62・230・453, 2-62  
 ソバガキ .....1-450  
 染谷川 .....2-464  
 反町薬師 .....1-290  
 算盤 .....2-617

## た

田 .....1-100, 2-90, 3-95  
 タアラッコロガシ .....5-68  
 大火 .....2-509, 3-512  
 大神楽 (代神楽) .....5-267  
 大家族 .....5-113

シンショウマワシ .....1-47, 3-60  
 シンタク .....1-47, 2-50, 3-60, 5-111  
 新築祝 .....3-51  
 新築祝い .....1-97  
 新田 .....2-33  
 新米 .....3-12・108  
 新町 .....4-215  
 神明宮 .....1-117  
 神明様 .....1-125, 3-136  
 神明社 .....1-208  
 神明砦 .....1-387  
 真楽寺 .....3-272  
 親鸞 .....1-214  
 人力車 .....1-107

す

水害 .....1-32, 5-116  
 スイカン .....1-80  
 水産 .....4-48  
 水死人 .....2-45  
 水車 .....1-40・80・100・454, 2-77, 3-112,  
 5-24・43  
 炊事用具 .....3-87  
 水神さま .....3-142  
 水神様 .....2-135, 3-153  
 水神社 .....4-128・321  
 水田耕作 .....3-101  
 スイトウ .....4-350  
 水道 .....1-92, 4-33  
 すいとん .....1-6・63, 3-79・86・536  
 スイノウ .....4-343  
 水利 .....1-29・99, 3-99, 5-35・89  
 スートメ .....5-84, 3-52  
 ズウバコ .....4-387  
 末風村 .....2-35  
 スガキテンジョウ .....1-420  
 巢鳥 .....2-36  
 菅原神社 .....1-120・125・175・212, 2-105  
 スキ .....4-360  
 スギノカワムキ .....4-397  
 杉の木 .....3-493  
 スクミアイ .....5-62  
 スグリ .....2-328  
 村主の清水 .....5-228・300  
 すけっと .....5-111  
 すし .....1-67, 2-68  
 すじまい .....5-223  
 すすけだつ .....3-76  
 ススハキ .....1-374, 2-426, 3-597, 5-225

雀講 .....1-132  
 雀さま .....1-119  
 雀神社 .....1-171・392  
 スズメとツバクラ .....3-464  
 ススリだんご .....5-7・16  
 ススリネジ .....2-64  
 スダレ .....1-79  
 頭痛 .....1-222, 2-229  
 捨子 .....1-18  
 捨て場 .....3-577  
 須永 .....3-42  
 スナブルイ .....2-288, 4-374  
 ずになる .....3-111  
 スネッキリ .....5-32  
 ズボン .....3-114  
 すまし汁 .....5-14  
 炭焼き .....1-102  
 炭焼五郎兵衛 .....3-528  
 住吉町 .....4-3・8・17  
 すもう .....1-117・264  
 相撲大会 .....3-46・229  
 スリコギ .....4-344  
 スリバチ .....3-355  
 諏訪様 .....2-105  
 諏訪神社 .....1-118・121・199, 2-412, 3-135  
 寸法 .....1-94

せ

生業 .....1-28・452  
 整形田字間取りの民家 .....2-524  
 セイコン水 .....5-37  
 製糸 .....4-34  
 製糸業 .....4-285  
 清内橋 .....3-122  
 青年会 .....1-2・43・392, 2-340, 3-57・317, 4-10・  
 117・293  
 青年団 .....1-2・43・296, 2-47, 3-56  
 精武館 .....2-302  
 性別の見分け .....3-290  
 セイロ .....1-79  
 才文 .....3-260  
 セガイ造り .....1-426  
 せき .....1-223, 2-231  
 堰 .....1-107  
 関口栄吉 .....3-505  
 関口安太郎 .....3-504  
 石造物 .....1-144  
 石尊ごり .....3-145  
 石尊さま .....1-124, 3-144・400

朱膳朱椀 .....3-535  
 出棺 .....2-370  
 出産...1-18・221・269・455, 2-323, 3-291, 4-114  
 出産祝 .....3-307  
 出産祝い .....1-281, 2-331  
 授乳 .....2-326, 3-298  
 じゅばん .....5-7  
 巡礼橋 .....3-123・525  
 しょいこ .....1-454  
 ショイデ .....4-401  
 正円寺 .....1-207  
 商家 .....4-49  
 しょうが .....3-403  
 正月飾り .....2-427, 3-386, 4-124  
 正月行事 .....2-379  
 小学校 .....4-227  
 正月さま .....1-374, 3-581  
 正月準備 .....4-128  
 ショウガツダナ...1-111・375, 2-137・428, 3-130  
     386, 4-416, 5-185  
 正月の唄 .....2-262, 3-252  
 ショウギ .....1-80, 4-346  
 ショウズ .....4-343  
 上泉寺 .....1-122  
 上蔭 .....2-581  
 松竹梅 .....3-448  
 しょう塚 .....2-463  
 定使い .....1-2・34, 2-40, 5-94  
 ショウヅカバアサン .....5-142  
 上棟祝い .....2-82  
 上棟式 .....5-18  
 ショウブ .....2-407, 3-399  
 ショウブモチ草 .....5-206  
 しょうぶ酒 .....3-588, 5-207  
 しょうぶ風呂 .....5-207  
 ショウブ湯 .....1-362  
 消防小屋 .....3-275  
 消防団 .....2-40, 3-50, 4-9  
 ショウボウポンプ .....4-411  
 城峰講 .....3-153, 5-107  
 乗明院 .....3-491  
 照明 .....1-452  
 照明具 .....1-8  
 青面金剛 .....1-130  
 醤油 .....1-73, 2-70  
 ショウユ組合 .....5-18  
 醤油しぼり .....1-38  
 醤油製造 .....4-412  
 少林山講 .....1-133  
 浄瑠璃しばい .....3-246

ショウロ .....1-69  
 庶業 .....4-46  
 食事 .....1-74, 2-71・310, 3-76  
 ショクシン .....2-8  
 食制 .....3-87  
 食生活 .....1-74  
 ショクダイ .....4-353  
 職人 .....1-105, 2-93, 5-58  
 食物 .....3-76  
 食糧 .....1-60・450, 3-76  
 食料野草 .....5-16  
 植林 .....1-453  
 処刑場 .....3-585  
 処刑場あと .....3-586  
 女子師範学校 .....4-244  
 処女会 .....1-299, 3-57・318  
 助成講 .....5-106  
 女中 .....1-48  
 初潮 .....1-293, 2-338, 3-316  
 食器 .....1-78  
 職工 .....4-48  
 初七日 .....1-342, 2-375, 3-363  
 ジョリン .....5-285  
 女郎 .....4-103  
 女郎屋 .....3-59・63  
 シラガ太夫 .....3-597  
 白川 .....3-45  
 シラジ .....1-79  
 ジランボ .....5-84  
 シリッパショイ .....1-51  
 ジリヤキ .....1-64, 2-64, 5-15  
 ジリヤキ地蔵 .....3-138, 5-16・209  
 死霊 .....1-344, 2-377  
 汁かけめし .....5-74  
 ジローのツイタチ .....1-356, 3-393, 5-159  
 代掻き .....1-102, 3-106, 5-39  
 シログラ .....5-290  
 シロムギ .....5-32  
 シワス八日 .....3-414, 5-223  
 ジンガサ .....4-419  
 じんぎ .....3-574  
 寝具 .....2-59, 3-74  
 神宮寺 .....1-121, 2-289  
 神経痛 .....1-224, 2-232  
 真言 .....2-125  
 震災 .....5-90  
 伸子張り .....1-58  
 神社 .....3-582  
 神社総代 .....3-50  
 神社の土地 .....1-39

自治会費 .....1-36, 3-50  
 七か郷 .....3-39  
 七観世音 .....3-597  
 七観音 .....3-583  
 七五三 .....1-290, 2-336, 3-312  
 七兵衛ぎつね .....3-542  
 七本塔婆 .....1-343  
 七薬師 .....3-140  
 質屋のハン .....4-408  
 七里が土手 .....3-491  
 地鎮祭 .....1-94  
 地づき .....1-95, 2-81, 3-89  
 シツケ .....1-218, 5-121  
 して .....3-105  
 ジツマリ .....5-21  
 自転車 .....1-106, 2-98, 3-46, 4-297  
 自動車 .....3-46  
 信濃街道 .....3-122  
 じなんぼ .....5-111  
 死水 .....1-328, 2-365, 3-350  
 地主 .....3-103  
 じねえ .....3-36・210  
 篠 .....1-453  
 シノギ .....5-13  
 死の知らせ .....3-350  
 死の予兆 .....1-327, 3-349  
 芝居 .....1-254・255, 2-277・299  
 芝くれ .....5-37  
 シビブトン .....3-74, 5-25・147  
 しびれ .....5-80  
 シビレ .....1-225  
 シブクレ屋 .....5-58  
 しぼり水 .....1-101  
 しまい正月 .....1-356, 2-400, 5-199  
 島田髷 .....1-56  
 地まつり .....2-81, 5-20  
 シメ .....1-83  
 シメエ正月 .....3-385  
 しめなわ .....2-427, 3-416  
 しめなわ作り .....1-375  
 霜 .....3-215  
 下肥 .....1-100  
 下田 .....3-42  
 シモダイコク .....5-72  
 下増田の七不思議 .....3-550  
 霜道 .....3-105  
 しもよけ .....5-76  
 霜除けの餅 .....3-215  
 霜除け餅 .....3-399  
 ジャガイモ .....2-60, 3-85

シャカのねはん .....3-396  
 シャクシ .....5-39  
 シャクジサマ .....1-126, 3-133  
 石神社 .....3-133  
 シャクシヅキ .....5-177・283  
 石尊様 .....5-209  
 シャクトリひろい .....5-50  
 尺取り虫 .....2-573  
 シャクナワマキ .....4-364  
 蛇雀の大尽 .....3-475  
 しゃげ .....3-83  
 写真 .....3-205  
 社倉 .....5-31  
 シャチもたまげたはなし .....3-479  
 シャツ .....3-115  
 社日 .....1-218・360, 2-314, 3-224・397  
 社日講 .....3-525, 5-101・103・204  
 社日様 .....3-151  
 社日待 .....1-132  
 シャバズレ .....5-12  
 ジャリブルイ .....4-368  
 ジャンボン .....3-349, 5-41  
 十王堂 .....1-184  
 祝儀 .....5-110  
 祝儀膳 .....2-360  
 祝儀の着物 .....1-53  
 祝儀の膳 .....1-76, 3-87  
 十五日がゆ .....1-218・355  
 十五夜 .....1-23・367, 2-317・418, 3-407・476, 4-123  
     124, 5-217  
 十五夜まつり .....5-319  
 十三仏 .....1-138, 2-134  
 十三夜 .....1-23・369, 2-419, 3-407・596, 5-218  
 姑つとめ .....5-161  
 十二講 .....5-103  
 十二様 .....1-135・454, 2-137  
 十二さま祭 .....2-314  
 十二支 .....3-466  
 収入 .....3-96  
 ジュウノウ .....4-351  
 ジュウバコ .....4-345  
 十八日ガユ .....1-355, 2-399, 3-384, 5-197  
 ジュウハッテ .....5-125  
 周濠 .....3-92  
 ジュウロウタ .....5-59・290  
 十六日念仏 .....3-163  
 祝昌寺 .....3-137  
 しょくしん .....2-405  
 主食 .....1-5・450, 2-61, 3-76, 4-31  
 数珠廻し .....5-212

ざれうた .....3-252  
 産育 .....1-392  
 三角点 .....3-273・578  
 産業 .....4-47  
 参宮講 .....2-607  
 サンゲサンゲ .....3-400  
 さんし .....5-146  
 蚕種 .....3-109  
 三十五日 .....3-364  
 三十三年忌 .....3-368  
 三十三枚よせ .....5-156  
 さんじよさま .....3-216・588  
 三束雨 .....2-237  
 山賊の兄弟 .....3-459  
 産泰講 .....3-20, 5-105・206  
 産泰様 .....1-134, 3-154・265・287, 5-122・124・  
 144・147・187  
 産泰道 .....5-64  
 産泰詣 .....5-322  
 サンテコ .....5-262  
 サンニチ .....3-205  
 三人組の女郎買い .....3-481  
 三人三助 .....3-503  
 山王 .....3-131  
 山王様 .....3-523, 5-129  
 サンバ .....3-294  
 さんばさん .....4-114  
 サンバさん .....1-272, 2-325  
 三番ザク .....5-33  
 さんぶく土用 .....5-52  
 産婦の食事 .....5-149  
 三宝荒神さま .....1-113, 3-142, 5-87・209  
 三本松 .....3-550  
 三枚のお札 .....3-454  
 三間取りの民家 .....2-518  
 三面薬師 .....1-42  
 三夜様 .....2-122, 5-105  
 サンヤヅキ .....5-20・22  
 三夜待 .....3-22・150, 5-105  
 三隣亡 .....1-137・229, 2-124・233, 3-222・550・580,  
 4-99

し

痔 .....1-222  
 塩 .....2-507  
 シオビキ .....1-69  
 字かくし .....5-308  
 式三番叟 .....5-242・248  
 敷島座 .....4-103

仕事着 .....1-50, 3-70  
 シキビ .....1-221  
 シキビの葉 .....3-352  
 ジギョウ .....1-95, 5-22  
 地くぼ .....3-100  
 寺家 .....3-522  
 寺家柿 .....3-587  
 地工大 .....2-557  
 シコクビエ .....1-453  
 地獄餅 .....2-406  
 四郷堀 .....3-99  
 仕事着 .....2-55  
 仕事始め .....1-348, 2-310・386, 3-375・376  
 仕事休み .....2-89  
 死後の対応 .....3-350  
 私財 .....2-51  
 死産 .....2-328, 3-301  
 獅子 .....3-147  
 獅子観音 .....2-108  
 地しばい .....5-205・254  
 しじま .....3-68  
 地縞 .....1-50  
 獅子舞 .....1-255・260  
 シシマツリ .....1-359, 3-397  
 ししまわし .....1-124, 3-21  
 死者の装束 .....3-353  
 死者への供物 .....3-351  
 四十九日 .....2-20, 3-364  
 四十九のダンゴ .....5-175  
 四十九の餅 .....3-27  
 地震 .....1-229  
 地震除け .....2-234  
 地藏 .....1-127・364, 2-109・274・412・464, 3-127,  
 3-137, 5-139  
 地藏信仰 .....3-18  
 地藏っ子 .....2-585  
 地藏堂 .....1-127  
 地藏まつり .....1-257・259, 2-15・109  
 地藏まわし .....2-23・129  
 地藏和讃 .....2-274  
 四体大明神 .....3-583  
 死体山 .....1-385  
 下着 .....1-59  
 下着の種類 .....3-70  
 したきりすずめ .....1-378  
 ジダグリ .....5-130  
 仕立て .....1-57  
 仕立て屋 .....3-113  
 ジダンバニュー .....5-37  
 自治会 .....1-32, 3-48



五郎右エ門堀	3-45
五郎右衛門用水	3-100
コワク	4-392
コワメシ	5-74
コワリやきもち	4-487, 5-7・15
婚姻	1-455, 4-117
婚姻圏	5-144
権現沼	3-595
権現山	3-585
金剛寺	1-122・185
混合食	1-6
近藤さま	3-501
コンニャク一枚で伊勢まいり	3-477
コンニャク橋	3-122
紺腹掛	3-114
金比羅様	1-125, 2-109
金毘羅様	3-144
金ぴら様の日	2-312
金比羅参り	2-122
紺股引	3-114
婚約	1-305, 2-345, 3-322
婚礼	1-19

さ

再縁	1-327
災害	2-302
再婚	2-364
財産分け	1-47
サイソクマゲ	3-368
祭壇	1-335, 2-368, 3-355
サイバコ	4-396
サイバシ	4-344
裁判所	4-324
裁縫	1-57, 3-75, 5-12
細民窟	4-332
材木	1-453
才文	3-260
祭文	1-253, 2-271, 3-265, 5-68
祭文がたり	5-268
西林寺	1-202
祭礼	4-65
境	2-38, 3-47
酒蔵	3-113
サカサッコ	3-298
さかな	3-82
魚	1-69
さかなけえ	2-592
魚とり	2-590, 3-112, 5-61
魚屋	3-126

サカヤキ	5-156
酒屋道具	4-44
下り松	3-586
作業着	3-69
作業小屋	1-7
作柄	5-35
サクタテ	1-350, 2-388, 3-377, 5-192
ザクニ	3-7
桜	1-221
桜が丘	2-33
ザグリ	4-390
座繰り	5-295
酒	1-81, 2-69
酒づくり	3-270
サケの切り身	3-84
さげ穂	3-13
笹場の大火事	3-514
笹びき	5-172
サシ	4-405
ザシキ	1-396・402・414, 2-80
座敷	1-86, 2-356, 3-334
ザッコクスイ	5-62
サツマ	3-76
サツマイモ	1-60, 2-60
サツمامロ	5-19
サトイモ	1-60・220, 2-60, 3-76
サトガエリ	1-19・284・310・325, 2-363, 3-307

375

里神楽	5-251
里米	3-299
サナ	5-32
サナブチ	5-33
サナブルイ	5-45
実政の渡	4-306・320
実正の渡	4-57
ザブトン	4-376
作法	1-218, 2-223
ザマ	4-386・402
サマゴ	1-396
さまとあがり	2-224
サモト	3-8
ザル	4-343・370, 5-86
ザル観音	1-134
サルダヒコ	1-131
猿田彦大神	2-128
猿まわし	1-255
猿廻し	5-268
猿婿	2-437
猿掣	3-445
猿谷橋	2-460

呉汁……………1-68  
 小次郎薬師 ……1-388  
 小二郎薬師 ……1-128  
 ご神幸 ……5-317  
 御神体 ……3-583  
 小神明神社 ……1-145  
 牛頭天王 ……3-147・271  
 ブゼ ……1-252, 2-271, 3-263, 5-268  
 ごぜさん ……3-265  
 ごぜさんのはなし ……3-482  
 子育て地蔵 ……1-127, 3-270・287  
 子育て地蔵 ……5-139・209  
 子育て地蔵和讃 ……2-275  
 五代 ……1-385  
 御大儀振る舞い ……1-325  
 五代神社 ……1-116・149  
 子宝米 ……3-213  
 コタツ ……1-89, 5-26  
 コタツノマ ……1-86  
 コタツベヤ ……1-414  
 ご馳走 ……2-73, 3-86  
 伍長 ……5-91  
 伍長組 ……1-2  
 小づかい ……2-41  
 鼓笛隊 ……2-54  
 コデナワ ……5-59  
 後藤弁造 ……1-386  
 ことじまい ……2-425・605  
 言葉遊び ……2-498  
 コトハジメ ……1-21, 2-403・605  
 琴平宮 ……4-288  
 琴平神社 ……3-272  
 琴平町 ……4-3・6  
 子ども ……1-455  
 子ども組 ……1-2, 2-49, 3-317  
 子どもの遊び ……5-271  
 子供の神様 ……3-165  
 子供のきもの ……3-70  
 子供のぐず ……3-580  
 子供のけんか ……3-63  
 子供の墓 ……3-361  
 子供のやけど ……3-208  
 子供連 ……1-44  
 コトヨウカ ……1-358, 2-426, 3-28・395・413, 5-202  
 ことわざ ……3-33・553  
 こなべだて ……3-596  
 コネバチ ……4-339  
 コネ鉢 ……1-79  
 ご年始 ……3-56・62・347  
 御年始日 ……1-348, 3-386

ご年始まいり ……3-374  
 こばい ……2-569  
 子墓 ……3-26  
 小旗始め ……3-398  
 ご飯 ……3-82  
 コビル ……5-41  
 古墳 ……3-44  
 五平馬 ……3-530  
 五平原 ……3-498  
 コマ ……1-296  
 ゴマ ……1-74, 2-60  
 細ヶ沢町 ……4-3  
 駒形 ……3-37・513  
 駒形駅 ……3-121・272・512  
 駒形会議所 ……3-276  
 駒形小 ……3-275  
 駒形神社 ……3-270  
 駒形長寿観音 ……3-139  
 駒形茂兵衛 ……3-271・511  
 五間取りの民家 ……2-531  
 ゴミトリジョウギ ……4-379  
 古峰ヶ原様 ……3-154  
 小麦 ……1-450, 4-34  
 小麦の品種 ……5-212  
 小麦ほし ……3-108  
 米 ……1-60, 2-59・487  
 米だけのごはん ……3-77  
 コメノ ……4-382  
 米野街道 ……1-106  
 米の検査 ……4-34  
 米の検査官 ……3-108  
 米の飯 ……3-83  
 五目飯 ……5-104  
 コモタズ ……5-145  
 子守 ……1-48・289, 2-335, 3-311, 4-116  
 子守唄 ……1-249, 3-253・311  
 小屋 ……3-500  
 小屋講 ……3-597  
 こやし ……5-28  
 こやし切り ……3-104  
 コヤシバ ……1-7, 5-33  
 小柳町 ……4-8  
 小屋原 ……3-499  
 小屋原の火事 ……3-514  
 娯楽 ……1-294, 2-339, 4-105  
 ゴリョウさま ……5-132  
 五輪田 ……3-586  
 互礼会 ……1-347  
 御霊様 ……2-126  
 五郎右衛門堰 ……3-584

小石神社 .....3-155  
 小出神社 .....1-118・165  
 ゴイロ .....3-580  
 講 .....1-14, 2-121・604, 5-99・105・109  
 光運寺 .....1-159  
 公園 .....4-298  
 公園池 .....4-325  
 コウガイ .....4-338  
 工業 .....4-47  
 郷蔵 .....1-391, 3-46  
 高血圧 .....1-222  
 耕作土 .....3-96  
 こうじ小屋 .....1-74  
 こうじ味噌 .....5-18  
 香集寺 .....1-121・166  
 庚申 .....2-601, 4-67  
 高岑院 .....1-290  
 庚申講 .....1-46, 5-99  
 庚申様 .....1-126, 2-126, 3-581  
 荒神様 .....1-11・112, 3-136・142  
 庚申信仰 .....2-16, 3-21  
 庚申塚 .....1-130・386  
 庚申塔 .....5-101・222  
 庚申の日 .....5-17  
 庚申待 .....1-14, 2-296, 3-147  
 庚申祭 .....2-314  
 香辛料 .....3-78  
 洪水 .....5-116  
 耕地 .....1-98  
 講中 .....5-107  
 交通 .....4-57  
 コウデ .....1-224, 2-231, 4-99  
 甲手 .....5-82  
 香典 .....1-338, 2-372, 3-359, 5-115  
 香奠返し .....3-359  
 高等小学校 .....4-233  
 弘法井戸 .....3-467  
 弘法機 .....3-466  
 公民館 .....1-36  
 コウモリのはなし .....3-479  
 紺屋 .....4-42  
 膏葉 .....3-126  
 コウリ .....4-355  
 コウリャン .....5-14  
 御詠歌 .....3-260  
 ゴエモンブロ .....1-92  
 子を産む時期 .....3-465  
 氷池 .....1-29  
 氷餅 .....2-315・408  
 コオロギ .....3-219

蚕影様 .....3-164  
 蚕影山 .....5-134  
 子狐 .....3-276  
 虚空蔵様 .....1-13・130・259, 3-141, 4-199  
 虚空蔵信仰 .....3-19  
 虚空蔵大根 .....3-112  
 虚空蔵と鰻 .....5-299  
 虚空蔵まつり .....1-258  
 石取りさま .....3-503  
 穀箱 .....1-80  
 コグミ .....2-39  
 ごくみ .....3-47  
 伍組 .....1-2  
 極楽餅 .....2-406  
 国領町 .....4-285  
 後家 .....2-462  
 後家の親子 .....3-527  
 コケノカゴ .....5-47  
 後家の八兵衛 .....2-461  
 後家箱田 .....2-35  
 五穀 .....3-84・95  
 護国神社 .....3-132  
 コザ .....1-402, 3-8, 5-25  
 ゴザ .....1-55  
 小坂子街道 .....1-106  
 コサギリ .....1-38・82  
 小作 .....2-88, 3-53・103  
 子授け .....1-17・265, 2-320, 4-113  
 子授け祈願 .....3-287  
 子授けの米 .....3-208  
 コザル .....4-384  
 乞食 .....3-532・576  
 乞食の知恵 .....3-532  
 こじくりん .....3-576  
 コジッコメ .....3-417, 5-185  
 ごし沼 .....3-490  
 小島田の二本杉 .....3-499  
 ごしもち .....3-93  
 五社稲荷 .....5-124・129  
 ご祝儀 .....3-67  
 ゴシュウギ .....1-304・309・315・392, 3-327  
 ご祝儀の服装 .....2-350  
 五十号線 .....3-122  
 五十人講 .....5-107  
 戸主の職業 .....4-44  
 呼称 .....1-31  
 古城跡 .....3-586  
 小正月 .....1-351, 2-312・389, 3-378, 5-193  
 コジョウハン .....3-78  
 コジョハン .....2-72, 5-13

組 .....1-33・449, 2-39  
グミ .....1-221  
組長 .....1-34, 5-91  
組の付き合い .....1-35  
クモ .....1-226, 2-240  
雲切り源右衛門 .....3-510  
供養塚 .....3-164  
クラ .....4-401・418  
蔵 .....3-89  
鞍掛け松 .....3-492  
倉切り .....3-528  
蔵造り .....1-97  
くらびらき .....2-388  
くら開き .....1-350  
倉開き .....2-312, 3-378, 5-192  
蔵びらきの唄 .....3-253  
栗 .....1-60  
ぐりぼう .....5-53  
クルマヤ .....3-42  
クルリ棒 .....5-281  
くるわ .....3-47  
クルワ .....1-2・33・35  
クレ .....1-38  
暮市 .....2-429  
クレ方 .....3-325  
クレコモ .....5-36  
暮の市 .....5-68  
くれのみょうじょう .....3-217  
クロ .....3-108, 5-42  
クロクワ .....5-281  
クロヌリ .....5-39  
桑 .....1-104・390, 3-220  
桑市 .....1-11・104, 5-50・68  
桑切り .....3-111  
クワキリガマ .....4-378・383  
クワクレザル .....4-384  
クワコキ .....4-383  
桑こきぼうちょう .....5-292  
鍬たて .....2-312  
くわだて .....3-377  
鍬だて .....1-350  
桑つみ唄 .....2-258  
クワツミザル .....4-384  
桑の仕立方 .....5-49  
桑の品種 .....5-48  
クワバラマンノウ .....5-281  
桑ぶるい .....5-292  
軍艦岩 .....3-39・585  
くんち .....3-409  
群馬さん .....2-473

け

ケイアン .....1-48  
芸妓 .....4-43  
稽古習い .....3-241  
芸人 .....1-11・28・109・253・454, 2-272, 3-263,  
5-69・267  
競馬 .....1-49・260・295, 3-269  
刑務所 .....4-131  
契約 .....2-3・47  
ケエシ .....3-96  
けえつと .....3-122  
けえば .....3-105  
けが除け観音 .....1-129  
ゲコウイワイ .....5-108  
ケサカケッコ .....3-298  
ケサハハ .....3-219・579  
夏至 .....2-412  
化粧品 .....1-56, 3-75  
化粧薬師 .....2-113, 3-582  
下水まわり .....3-58  
下駄 .....1-55・219, 2-57, 5-8  
ケダイ .....1-55, 5-8  
下駄うらない .....3-210  
ケッカイ .....1-18, 3-224・298  
結核 .....1-223  
結婚式 .....2-606・614, 3-327  
ケデー .....5-58  
ケデエ .....3-74  
ケブルイ .....5-288  
煙の街 .....4-326  
ケヤキ .....1-221, 2-476  
下痢 .....1-223, 3-208  
けんか .....1-23, 2-51・277, 3-206  
源太島 .....3-490・525, 4-131  
検地 .....3-46  
建築 .....2-94  
県庁舎 .....4-323  
ケンチョン汁 .....1-68  
ケンチン汁 .....3-82・530  
けんとくをひく .....3-36・555  
げんのしょうこ .....3-208  
ゲンノショウコ .....1-230, 2-242  
顕微鏡 .....4-380  
けんまく .....3-575  
元禄袖 .....2-56

こ

小字 .....1-33  
コイオケ .....4-402

キバチ .....4-386  
 キビ.....2-60  
 木福さま...1-13・126・152・259・372・391, 2-137  
 貴船様 .....1-266  
 木部姫 .....2-458  
 擬婉.....1-18, 2-325  
 キマラ薬師 .....5-138  
 きもいり .....3-25・48  
 胆いれ.....5-93  
 着物を裁つ日.....5-12  
 鬼門.....1-83  
 逆縁 .....1-327  
 休日.....1-37  
 キュウジッコ .....5-125  
 キュウリ .....3-207  
 キュウリ天王様 .....3-135  
 キュウリモミ .....5-131  
 京安寺 .....4-131  
 境界.....1-37  
 教科書 .....4-231  
 キョウカタピラ .....5-174  
 行商.....1-11, 4-58, 5-69  
 行商人 .....1-28・108, 2-99, 3-125  
 キョウソ .....3-111  
 キョウドウ.....3-52  
 共同作業.....1-37  
 共同炊事.....5-40  
 共同田植.....3-11・52, 5-40・111  
 共同農社 .....5-110  
 行人塚.....1-24, 2-462  
 共有財産.....1-2・40  
 共有地.....1-39, 3-54, 5-94  
 共有林.....1-38  
 玉泉寺 .....1-202  
 玉蔵院 .....1-193  
 浄め .....2-374, 3-363  
 浄めの塩 .....1-340  
 キリアゲニケエ .....1-405  
 キリオトシニケエ .....1-414  
 キリギリス .....3-219, 4-491・497・520  
 きりぼし .....1-71, 5-17  
 禁忌 .....1-218, 2-223, 3-206  
 金魂神 .....3-127  
 キンピラゴボウ.....1-69  
 キンマラ薬師.....5-77  
 金融.....1-42

く

区 .....1-449, 4-7

食い合わせ .....1-226  
 食い初め .....1-285, 2-332, 3-308, 5-153  
 食い違い四間取りの民家 .....2-520  
 食い違い四間取り .....1-418  
 食いつこ.....3-59  
 空襲.....1-32  
 釘さし .....5-308  
 くぐり.....5-80  
 くさ.....5-83  
 クサカキ .....4-367  
 日下部様 .....3-143  
 草刈り.....3-104, 5-97  
 草刈り唄 .....1-246, 3-251  
 クサカリガマ .....4-378  
 草競馬.....1-391, 3-55, 4-104  
 草ばくち.....3-55  
 草分け.....1-29, 2-35, 4-11  
 クシ .....4-337  
 グシ .....3-93, 5-77  
 グシ餅 .....1-8, 3-94・224, 5-20  
 九十九谷 .....2-460, 3-500  
 鯨田 .....3-499  
 クズカキ .....1-91, 5-27  
 くずさらい .....3-112  
 クズ屋.....1-96  
 薬.....2-229, 5-78  
 薬売り.....5-70  
 薬屋 .....3-126  
 九頭竜様 .....1-130  
 クダマキ.....5-58  
 果物.....1-60  
 下り松 .....3-493  
 口がため .....1-305, 2-346, 3-322, 5-163  
 クチナシ .....1-221  
 クチボソ.....5-61  
 口見舞 .....3-367  
 区長 .....2-40, 3-50, 4-9  
 区長引継.....5-93  
 クツキアイ .....1-302, 3-320, 5-161  
 クツワ .....4-418  
 公田.....3-37  
 公田の渡 .....3-124  
 区費.....2-40  
 クビキ .....4-377  
 熊谷稻荷 .....2-107  
 クマゼ .....4-377  
 熊野 .....2-132  
 熊野信仰.....3-21  
 熊野神社.....1-120・208, 4-66  
 くまびる.....3-36

通帳 .....3-126  
 カラ .....5-32  
 カライリ .....1-69  
 カラス .....1-389, 5-34  
 カラス鳴き .....1-227・328, 3-349  
 カラスネブリ .....3-578  
 からっ風 .....3-215  
 からゆ .....1-81  
 刈りあげの祝い .....3-12・108  
 カリハライ .....5-60・97  
 カリバリ .....5-175  
 カリブシ .....3-25  
 家例 .....1-345, 2-5・73・382, 3-388・425, 5-113・  
 188  
 カロウト山 .....4-131  
 川 .....1-27  
 川神様 .....2-135  
 カワギ拾い .....3-56  
 川木拾い .....1-100  
 川さらい .....1-107  
 川棚 .....1-93  
 川のり .....2-473  
 川びたり .....3-212  
 川干し .....5-61  
 カワラチゴ .....3-219  
 かわりむこ .....3-337  
 かわり婿 .....2-358  
 カワリムコ .....3-25  
 変りもの .....1-65・391  
 寒 .....3-214  
 寛永の絵馬 .....1-385  
 棺おけ .....3-354  
 棺桶 .....3-549  
 寒九の雨 .....3-214  
 かんけい .....1-586  
 監獄 .....4-189  
 勘定 .....3-126  
 間食 .....1-76  
 乾燥芋 .....1-71, 5-17  
 カンソウカゴ .....4-389  
 ガンヅメ .....5-285  
 関東大地震 .....3-515  
 神無月 .....3-28・131・408  
 寒念仏 .....3-163・206  
 カンの虫 .....3-314  
 観音 .....2-125  
 観音川 .....1-28  
 観音講 .....3-154  
 観音様 .....3-137  
 観音様の相撲 .....3-471

観音寺 .....5-136  
 観音信仰 .....3-18  
 観音橋 .....3-123  
 観音山 .....3-142  
 千ばつ .....1-454  
 灌仏会 .....2-314  
 カンペ山 .....5-229  
 カンラン .....1-220

き

木を切る .....3-219  
 祇園 .....1-259, 2-410, 3-147・227・229  
 祇園囃子 .....5-261  
 祇園祭 .....5-304  
 聞きちがい .....3-534  
 キゴザ .....1-55, 3-74  
 きじ .....2-481  
 生地 .....1-56  
 鬼子母神 .....3-462・523  
 汽車 .....3-514  
 気象 .....3-213  
 キジリ .....1-88, 2-81  
 ギス .....3-219・273  
 きせかえの行事 .....5-127  
 木瀬貯蓄銀行 .....3-505  
 キセルイレ .....4-404  
 北上五社稲荷 .....5-129  
 北曲輪 .....4-296  
 北爪 .....3-42  
 北爪源求 .....3-271  
 北枕 .....1-329  
 義太夫 .....5-257  
 吉凶 .....5-73  
 キツネ .....1-387, 2-465・477, 3-530・538  
 キツネ退治 .....3-460  
 狐つき .....1-138, 3-223, 5-235  
 キツネの嫁どり .....3-539  
 ゴテイギブルマイ .....2-362  
 木戸 .....2-46  
 絹 .....3-67  
 絹糸 .....1-59, 2-59  
 キヌガササマ .....1-104・114・127, 2-120, 3-16・  
 163・472・581, 5-122・125・201  
 キネ .....4-349・376  
 甲子大黒 .....5-136  
 城宮 .....3-133  
 ギバが娘 .....3-279  
 キバサミ .....4-398  
 キハダ .....2-242

火葬 ……1-338  
 火葬地 ……3-46  
 嘉造天狗 ……3-506  
 かぞえ歌 ……1-249  
 数え唄 ……2-258  
 家族 ……2-52  
 カタアゲ ……5-13  
 片貝神社 ……1-195  
 片貝神社太々神楽 ……1-17・235  
 片貝の虚空蔵様 ……2-136  
 カタクチ ……4-345  
 片口 ……1-80  
 かたけ ……3-81  
 片袖 ……5-13  
     3-272・495, 5-299  
 カタピラ ……3-353  
 形見分け ……1-342, 2-376, 3-366  
 家畜 ……3-112  
 カツガレタ ……5-118  
 かつぎ石 ……3-57・588  
 勝城神社 ……1-144・241  
 ガッタン ……3-63, 5-119  
 カツドウ ……2-277・299, 4-100・296  
 カップ ……1-386・389, 3-476  
 かつぱたけ ……3-212  
 鯉節 ……1-269  
 家庭生活 ……1-3  
 かてめし ……5-14  
 カドイレ ……1-306, 3-323, 5-144  
 カドツケ ……1-252, 5-267  
 門付芸 ……1-17  
 門松 ……1-375  
 金糞黒沼 ……5-300  
 かなぐつや ……4-225  
 カナクマデ ……4-371  
 カナゴイ ……5-123  
 カナゴキ ……4-371, 5-33・43・288  
 カナババ ……1-277, 3-305, 5-153  
 金仏と木仏 ……3-471  
 金丸 ……1-449  
 カナモノバサミ ……4-398  
 カナヤシキ ……3-43  
 カニ ……1-70  
 かねがへびになったはなし ……1-379  
 カネズカ ……1-386  
 カネツキ田 ……5-35  
 カネツケ ……2-19・361, 3-343  
 鉄漿付 ……2-606  
 カネツケの祝い ……1-234, 5-168  
 かねつけのおこわ ……2-362

カネバコ ……3-579  
 カノエサルノヒ ……5-100  
 カバン店 ……4-36  
 カビタリモチ ……3-413  
 かぶと虫 ……3-219  
 カブリギ ……3-575  
 ガブリギ ……5-181  
 かぶり物 ……1-53, 3-71  
 株六 ……4-133  
 壁 ……2-84  
 壁土 ……2-38  
 壁塗り ……1-96  
 釜 ……2-77  
 カマイタチ ……3-210  
 カマカケ ……1-101, 5-45  
 釜神様 ……1-112  
 カマギツチョ ……5-240  
 鎌倉街道 ……3-121  
 鎌倉坂 ……1-385  
 カマコマゼ ……5-33  
 カマシキ ……4-345, 5-19  
 カマド ……1-89, 2-80・225, 5-25・278  
 鎌取り坂 ……1-450  
 カマノクチアケ ……1-15・364, 2-22・227・315・409  
     414, 3-400, 5-208  
 釜柱 ……1-396  
 上泉獅子舞 ……1-17・237  
 紙位牌 ……3-364  
 神送り ……1-373  
 上海道 ……3-121  
 髪かざり ……1-56  
 髪型 ……1-55, 2-58, 3-74  
 カミゴクシ ……5-84  
 神様 ……2-100  
 上宿の獅子舞 ……2-256  
 上新田 ……2-462  
 神棚 ……1-11・111・218, 3-9  
 かみなり ……1-228, 3-214・524・578, 4-99  
 雷様の太鼓の棒 ……5-231  
 かみなりのはなし ……3-580  
 雷除け ……2-234, 3-211  
 髪結い ……2-58  
 髪結さん ……2-362  
 亀里小学校 ……3-46  
 亀とムカデ ……3-480  
 かや ……2-420  
 萱 ……1-97  
 粥占 ……5-74・383  
 カユカキボウ ……1-9・127・352, 2-12, 3-379・383,  
     5-183・193・196

おやつ……………1-81  
 オ山ヅキ……………5-66  
 お湯よび……………2-43  
 おれんが岩……………2-455  
 オンカ……………5-113  
 御嶽講……………1-133, 5-109  
 御嶽山……………3-463  
 女イチゲン……………2-18, 3-25・344  
 女のよばい……………3-532  
 女堀……………1-386, 3-491

か

蚊……………2-451  
 貝……………5-20  
 カイガリ……………5-95  
 かいこ……………1-227, 2-92・571  
 かいこ祝い……………1-103, 5-50  
 カイコカゴ……………4-381, 5-47  
 蚕神信仰……………3-15  
 蚕棚……………5-292  
 蚕種……………5-47  
 かいこの歌……………3-252  
 蚕のお札……………3-163  
 蚕の神様……………1-127  
 かいこの話……………1-382  
 蚕の病気……………5-47  
 蚕のまじない……………3-211  
 かいこの休み……………3-111  
 蚕びよう……………2-45, 5-46  
 蚕品種……………2-624  
 蚕ヤスミ……………5-47  
 開墾……………1-98・450, 5-29  
 外出着……………1-51  
 開拓……………3-39  
 怪談……………3-550  
 害虫……………3-113  
 カイド……………2-10  
 かいどう……………1-7・27・106, 2-280  
 買い物……………1-109・454, 3-56・126  
 かいやし……………3-93  
 回覧板……………1-10・108  
 カイリョウブルー……………4-375  
 カイリョウマブシ……………4-387  
 カエル……………3-524  
 カエルの伊勢参宮……………3-480  
 ガエロッパ……………5-308  
 かかあ天下……………3-577  
 鏡神社……………2-105  
 鏡神社祭典……………2-600

鏡田……………3-498  
 かがやく……………2-502, 3-35・573  
 柿……………1-60, 3-220  
 書き初め……………1-377, 3-60  
 かぎ竹……………3-92  
 カギダケ……………4-351  
 ガキダナ……………2-418  
 垣根……………1-82, 5-20  
 牡蛎船……………4-284  
 ガキボトケ……………5-181  
 かくねっしょ……………5-307  
 神楽……………3-225, 5-248  
 カクラン……………1-291, 3-315, 5-81  
 かくれんぼ……………1-391  
 影絵……………1-257  
 カケオチ……………3-326  
 カケス……………3-480  
 かげ膳……………5-1・9  
 カケナ……………5-16  
 かげの俵……………3-84  
 カケヤ……………4-397  
 カゴ……………4-382  
 カサ……………1-54, 2-57, 4-337  
 傘……………2-58  
 かさかけっこ……………5-157  
 傘作り……………4-36  
 カサヌギ……………2-42  
 笠藁師……………3-463・581, 5-138  
 かざりかえ ……1-351・352, 2-312・389, 3-379,  
 4-122  
 飾りつけ……………2-319  
 菓子……………1-81  
 火事……………1-227  
 貸し借り……………1-392  
 カシグネ……………2-79  
 鍛冶町……………2-33  
 迦葉山……………1-134, 3-551  
 迦葉山の天狗……………2-439  
 迦葉山のはなし……………3-463  
 貸し椀……………5-231  
 数……………1-229  
 春日……………3-44  
 糟漬……………2-71  
 ガス燈……………2-85  
 かずのこのはなし……………3-482  
 かすみ……………3-36  
 かすみが広い……………3-576  
 緋……………1-50  
 かぜ……………1-223・225  
 風邪の神送り……………3-208



オシラマチ……………1-21, 2-397  
 オシロイ薬師……………1-46・128, 5-123・137  
 オシンコ……………2-63  
 オスマシ……………1-73  
 お諏訪ヶ淵……………3-473  
 お諏訪さま……………1-42・124・368  
 おせいぼ……………1-286・326, 2-53・318, 3-61・309  
 お節供……………1-359, 3-397, 4-122, 5-17  
 おそうでんさま……………1-113, 3-142・385, 5-51  
 おぞくる……………3-574  
 おそなえ……………1-347, 2-310, 3-418  
 お大日……………3-44  
 おたかもり……………2-358  
 オダ木……………1-38  
 オタキアゲ……………1-345, 5-109  
 オタナ……………1-111  
 オタナアゲ……………1-341, 3-364, 5-145  
 おたなさがし……………2-311, 3-376, 5-190  
 オタナサゲ……………5-197  
 おたばこぼん……………5-10  
 お茶屋……………1-387  
 男蝶女蝶……………5-168  
 オツイ……………3-70  
 オッカア……………5-108  
 オツキ……………1-330  
 オツキアイ村……………1-35  
 オツキリ川……………1-27・386  
 オツキリコミ……………1-63, 2-8・62  
 おつけ……………5-14  
 おてだま……………1-263・295, 3-266, 4-107  
 お手玉のうた……………3-252  
 オテマル……………2-68  
 お寺……………4-65  
 お寺の田植え……………1-137  
 お寺の年始日……………3-375  
 オトウカ……………1-24・387, 2-478, 3-527・537,  
     5-234  
 オトウカツキ……………3-540  
 おとがはじまる……………3-532  
 男の節句……………2-315  
 音根沢……………3-492  
 おとね沢の猫……………3-478  
 オトボウ……………3-552・588  
 お虎ヶ淵……………4-184  
 お酉さま……………4-124  
 オナメ……………1-68, 3-78, 5-14・18  
 女屋……………3-499  
 オニッコ……………1-285, 3-298, 5-156  
 オニミヨウザエモン……………2-461  
 鬼虫……………5-308

オネジ……………1-450  
 お子待……………1-132  
 おねり……………3-226, 5-251  
 お念仏ばあさん……………3-51  
 小野小町……………2-27  
 おはぎ……………2-448  
 お歯黒……………1-56, 2-59  
 お化け……………1-388, 2-483  
 おばご……………5-111  
 おばさん糸……………4-35  
 おば捨て山……………1-384  
 オハチ……………4-342  
 お花ヶ池……………2-463  
 お花の池……………2-28  
 おはやし……………1-259, 3-229  
 オハリ……………3-75  
 帯……………3-72  
 お彼岸……………1-369  
 オヒキ……………5-19  
 尾引稲荷……………4-130  
 おひなさま……………3-397  
 おひねり……………3-86  
 オヒマチ……………3-22・29・151・412  
 オヒャクドフミ……………5-145・172  
 お百度まいり……………3-165・274  
 オビズル様……………5-134  
 オブスナ笑い……………5-154  
 オフダ……………1-111・376, 3-416, 4-416  
 お遍路……………3-166  
 オボアキ……………1-18  
 オボタテメシ……………5-150  
 オボヤキ……………1-283, 2-330, 3-300, 5-129・144・152  
 お盆……………2-22・316・589, 4-123  
 おまいり……………3-124, 4-67  
 オマキ……………4-393  
 オマチニョウボウ……………5-165  
 お松市……………3-45  
 お松迎え……………5-225  
 お祭り……………4-11・301  
 お宮参り……………1-282  
 オメガンサマ……………5-71  
 おもしろばなし……………3-487  
 表座……………5-252  
 オモチザシキ……………1-7, 3-90  
 表町……………4-7  
 母屋……………1-82, 2-78  
 親子狐……………3-275  
 親子盃……………2-357  
 オヤコモチ……………3-81  
 親抱きの松……………3-271・492

王守神社……………2-26・106  
 大屋敷……………2-34・462  
 大山講……………3-154  
 オオワク……………4-392  
 大渡……………2-26・34, 4-326  
 おかいこあげ……………3-80  
 オカイコバコ……………4-380  
 オカイコビヨウ……………2-93, 3-111  
 オカオガクシ……………3-417, 5-185  
 お飾り……………1-83, 3-417  
 おかざりかえ……………1-21・456, 5-193  
 おかし……………2-70  
 オカシラツキ……………5-57  
 おかず……………1-68, 3-76・77, 4-31, 5-15  
 オカッテ……………1-88・414, 2-80, 3-9・91, 4-350  
 オカッパ……………3-74  
 オカナエカキ……………5-285  
 オカノ……………3-279  
 オカボ……………1-454  
 オカマサマ……………1-10・11・111, 3-9・127  
 オカマ様の下げ穂……………5-45  
 オカマサマの穂……………1-227  
 おかまじめ……………3-130  
 おかまの口あげ……………3-404  
 おかまのるすんぎょう……………3-409  
 オカマノルスンギョウ……………5-184・219  
 お神おくり……………3-131, 5-218  
 お神送り……………1-121  
 おかみむかえ……………2-143  
 お神むかえ……………3-131  
 おがみや……………3-166  
 おがみやさん……………3-507  
 お粥……………1-269  
 オカリヤ……………5-66・108  
 オガン……………5-146  
 オガンショハタシ……………5-109  
 菘窪神社……………1-120・206  
 オキバリ……………5-61  
 お行塚……………3-272・499  
 おきりこみ……………1-6, 3-6・79・83, 5-14  
 おこりこみ……………3-85  
 オキンマラ……………5-71  
 オクザシキ……………1-7・87・414  
 屋内神……………1-11  
 オクマンサマ……………3-135  
 お蔵……………1-40  
 お蔵屋敷……………3-586  
 オクリ……………1-87・271  
 オクリ一見……………1-310, 3-328  
 オクンチ……………1-12・23・45・120・370・456, 2-317・

421, 3-28・244・412, 4-123, 5-97・99・  
 127・184・217・304  
 オコアゲ……………2-93, 3-400  
 おこあげ祝い……………2-408, 3-17  
 おこあげ餅……………5-50  
 オコウコ……………5-19  
 オコエ……………2-72  
 オコシ……………1-51  
 おこと……………2-313・318  
 オコト八日……………5-223  
 おことはじめ……………1-358  
 オコマヤ……………5-25・148  
 オコモチ……………1-368, 2-9・73・406・407・603, 3-399  
 おこもり……………1-120, 3-412  
 オコリボトケ……………3-142  
 オコワ……………2-223  
 オコンマヤ……………1-7・85・401, 1-414, 3-9・90  
 オサイセン……………5-125・130  
 おさえ……………5-14  
 おさか……………3-501  
 オサキ……………1-138, 2-136, 3-206・207・222・543,  
 5-74・77  
 オサゴ……………1-266, 5-15・146  
 オサナブリ……………1-9・101・362, 2-91・408・409,  
 3-12・101・107, 5-16・40・44  
 お産……………1-269, 2-320, 3-294  
 オサンベヤ……………5-278  
 お産見舞……………5-151  
 オジゴ……………2-332  
 おしし……………3-146・232  
 お獅子……………3-265  
 お地藏さん……………1-388  
 お七夜……………1-282・455, 2-330, 3-303, 4-115,  
 5-151  
 オシトギ……………1-116  
 押し麦……………3-5・84  
 オシメ……………5-226  
 オジャ……………5-14  
 オシャリ……………5-47  
 お十二様……………1-126  
 お正月……………2-556  
 お正月さま……………3-416  
 和尚塚……………2-460  
 オショウデンさま……………3-127  
 和尚と小僧……………3-461  
 おしょうにんさま……………3-166・481・500・591  
 お上人さまの木……………3-492  
 オショウバン……………5-168  
 お女郎石……………3-491  
 オシラサマ……………1-114, 2-120, 3-396

ウメズメ .....5-145  
 梅干 .....1-70・269, 2-71, 5-18  
 梅若 .....1-360, 5-204  
 梅若忌 .....3-397  
 裏座 .....5-252  
 浦島太郎 .....3-442  
 占い .....1-138  
 売出し .....4-59  
 うるしの木 .....3-586  
 漆原のざる観音 .....2-461  
 うろこのもの .....5-13  
 ウワブルイ .....4-375  
 運送屋 .....1-108  
 運動会 .....4-302  
 運搬具 .....1-107  
 運輸交通 .....4-48

え

エイ .....2-88, 3-52, 5-15  
 映画 .....3-63・264, 4-100  
 映画館 .....4-303  
 永明地蔵 .....3-584  
 エエ (結) .....1-2・450, 5-110  
 エエ仕事 .....1-36, 2-41, 3-107  
 エーノウブルマイ .....5-163  
 エカキ .....5-294  
 江田 .....2-34  
 江田実業会 .....2-564  
 江田農事改良組合 .....2-618  
 江田のかつき地蔵 .....2-274  
 江田の獅子舞 .....2-246  
 江田村音楽隊 .....2-601  
 越後笠 .....1-54  
 越中ふんどし .....2-457  
 エド流し .....1-136  
 エナ .....5-148  
 榎棚 .....3-529  
 榎店 .....3-126・505  
 エビス .....1-113  
 エビス講 .....1-23・356・372・374, 2-129・313・  
 318・426, 3-153・212, 5-14・183・222  
 えびす様のお膳 .....3-82  
 エプロン .....1-51  
 えぼ .....5-83  
 恵方まわり .....3-374  
 エボ神様 .....1-126  
 えぼ地蔵 .....1-390  
 エンガ .....3-590, 4-356  
 エンガとテンガ .....2-449

エンガワ .....1-87, 2-28・224, 3-204, 5-276  
 縁起 .....1-389, 2-233・513  
 縁切り髪 .....1-20  
 縁組 .....3-528  
 延寿庵 .....1-122  
 縁談 .....1-19  
 えんまさま .....3-537

お

オイガキ念仏 .....1-138  
 お伊勢様 .....2-294  
 おいだし念仏 .....5-176  
 お稲荷さま .....1-373  
 おいなりまつり .....3-414  
 オイハガ .....5-63  
 おいはぎ .....3-63  
 追分 .....3-124  
 往還 .....3-121  
 オウサン .....2-18・346  
 近江商人 .....5-116  
 オールバック .....3-74  
 王渡し .....1-385  
 王渡 .....2-454  
 おエビス講 .....3-596  
 おえんどん岩 .....2-455  
 大岡さま .....2-487  
 オオカゴ .....4-382  
 大火事 .....4-133  
 オオガマ .....4-379  
 大きいはなし .....3-536  
 大国主命神社 .....1-191  
 大食 .....3-509  
 大胡街道 .....1-27  
 大島 .....3-498  
 大島梨 .....3-109  
 オーシメナイ .....5-225  
 大正月 .....1-20  
 大そうじ .....2-10・318・426, 3-416  
 オオド .....3-91  
 大友 .....2-462  
 大鳥神社 .....1-41  
 大祓式 .....2-147  
 大松 .....3-42・524  
 大水 .....3-63・516  
 大みそか .....1-23・377, 2-319・428, 3-418・580,  
 5-226  
 大峯神社 .....1-41・154  
 大宮様 .....1-125  
 大麦の品種 .....5-32

衣服 .....1-4, 2-6  
 イブシ飼い .....5-27・47  
 イブルシ .....5-60  
 イボ .....1-222・224, 2-231, 3-209, 5-82  
 いぼ神様 .....3-140  
 いぼ薬師 .....3-164  
 イボ薬師 .....1-128  
 居間 .....1-86  
 忌み明け .....1-343, 2-376, 3-366  
 忌木 .....5-26  
 忌み田 .....3-586  
 芋 .....1-60  
 イモガマ .....1-89  
 イモガラ .....1-71  
 いもばたけ .....2-446  
 芋畑へいこう .....1-383  
 イモホリマンノウ .....5-281  
 いもめし .....3-83・84  
 イモモミザル .....4-377  
 イヤサカ .....5-168  
 入口 .....1-84  
 イロリ .....1-8・88・218・220・227・396, 2-81, 3-9・  
     92, 5-25  
 岩神町 .....4-18  
 イワシ .....1-357, 3-394  
 イワシズカ .....1-385  
 イワタオビ .....5-146  
 岩船地蔵 .....3-139・582  
 隠居 .....2-4, 5-111  
 インキョ小屋 .....1-47  
 インキョメン .....2-50, 3-61, 5-112  
 飲料水 .....1-452

う

植野 .....2-33  
 上野神社 .....3-132  
 牛 .....3-217  
 ウシクビ .....4-391  
 牛車 .....1-108  
 氏子総代 .....1-121, 5-93  
 牛橋 .....3-123・589  
 ウス .....4-349  
 白 .....1-220・227・340, 3-363  
 碓氷講 .....2-132  
 碓氷社 .....1-103  
 失せもの .....1-227  
 うそつき .....2-474  
 謡 .....1-255・315, 3-338  
 うたいこみ .....3-338

ウタイゾメ .....1-348, 2-3・385  
 ウダツ .....3-8・36・92  
 うちうち .....5-114  
 内田忠順 .....3-274・506  
 内出 .....1-402  
 うちみ .....1-224  
 打ち身 .....2-231  
 筑井 .....3-38  
 筑井大橋 .....3-122  
 筑井橋 .....3-122  
 台橋 .....4-58  
 うで饅頭 .....2-64  
 ウデマンジュウ .....5-15・17  
 うどん .....1-6・62, 2-62, 3-77, 5-15  
 ウドン .....3-76  
 ウドンモリ .....4-343  
 ウナギ .....1-69・390, 3-83・219  
 ウナギさし .....3-551  
 うなぎ針 .....1-100  
 うば皮 .....1-380  
 姥捨山 .....2-434, 3-449  
 産神 .....1-219  
 産毛 .....1-280, 2-329, 3-302  
 ウブスナガラ .....5-162  
 ウブタテサマ .....5-144・150  
 ウブタテメシ .....1-18・274, 2-325, 3-296  
 うぶ湯 .....3-297  
 産湯 .....2-326, 5-150  
 馬 .....1-105・223・227・453, 3-40・217・533, 4-34  
 馬市 .....1-11, 5-54  
 馬入れ .....3-595  
 馬エー .....5-27・54  
 馬追鳥のはなし .....3-479  
 馬を借りる .....3-113  
 馬捨場 .....3-113  
 馬と火事 .....3-531  
 馬の足跡 .....3-500  
 ウマノアシアライオケ .....4-376  
 馬の神様 .....1-116  
 馬のくせ .....5-53  
 ウマノクツゴ .....5-59  
 馬の子とり .....3-578  
 ウマノゾウリ .....4-379  
 ウマノワラジ .....4-419, 5-53  
 うまや .....3-113  
 ウマヤ .....1-84, 3-9, 5-51  
 馬や肥いだし .....3-211・384, 5-52  
 ウマヤマエ .....5-278  
 生まれかわり .....1-344, 3-206・368・509・549  
 梅 .....1-60, 3-220

五十嵐和泉守 .....1-217  
 いきざし .....5-82  
 イキダオレ .....1-32  
 生き血とり .....3-527  
 イキヌキ .....5-292  
 生き盆 .....2-22・416・315, 3-28・404, 5-215  
 イキボンブルマイ .....3-347, 5-170  
 生きみたま .....2-136  
 池 .....1-93  
 池さらい .....3-412  
 イザリバタ .....5-295  
 石 .....3-62・224・590  
 石芋 .....3-468  
 石臼 .....2-77  
 石かつぎ .....1-264, 3-589  
 石川河岸 .....4-189  
 石川五右衛門 .....3-593  
 石倉 .....2-34  
 石堂畑 .....1-136  
 石柱 .....3-270  
 石船 .....3-125  
 イジメ .....1-79, 5-154  
 医者 .....2-229, 3-46  
 石山観音 .....5-197  
 石山の観音 .....3-384  
 いじゃりばた .....5-12  
 異常分娩 .....2-326  
 伊勢講 .....5-108  
 伊勢参宮 .....1-15, 3-157・523  
 伊勢まいり .....1-107・133, 2-135・491,  
     5-108  
 いたずら .....2-279・503  
 板葺 .....1-97  
 イタヤ .....1-421  
 市 .....1-108, 2-98, 4-58, 5-68  
 入会地 .....1-39  
 市がさかえた .....3-553  
 一月四日 .....3-27  
 一見 .....2-349・615, 3-348  
 一見座敷 .....2-355, 3-333  
 イチドリ .....2-43  
 一人前 .....1-48・293, 2-87・243・339, 3-52・62・  
     316, 5-160  
 一番えらい人 .....2-497  
 イチバングサ .....5-42  
 イチマケ .....1-3・47, 3-60  
 一夜かざり .....5-226  
 イチョウ .....1-221  
 銀杏返し .....1-56  
 一里塚 .....3-124・270

市杵島神社 .....1-125・186  
 イッケ .....1-3・47, 2-4・50, 3-60, 5-112  
 イッソン .....5-94  
 五ツ坊主 .....3-312  
 一等地 .....4-333  
 一俵 .....1-100  
 一本杉 .....3-147  
 一本松 .....1-386  
 井戸 .....1-7・91・328・452, 2-35・78, 3-91, 4-33・  
     5-21:  
 糸市場 .....4-36  
 井戸替え .....3-89  
 井戸神 .....1-113, 2-101  
 井戸久保 .....1-450  
 イトクリトンボ .....4-392  
 イトチガイ .....1-267  
 糸とり .....5-11  
 イトバカリ .....4-406  
 井戸八幡 .....2-107・460  
 糸ひき .....2-59, 89  
 糸ひき女工 .....4-35  
 イトヒキバ .....1-414・418  
 イトビンヤッコノあねさん .....3-279  
 井戸堀り .....1-100  
 井戸水 .....3-467  
 いなごとり .....2-593  
 稲作 .....1-8, 3-10  
 稲作儀礼 .....3-101  
 稲荷 .....2-14, 3-147, 5-129  
 稲荷様 .....1-12・42, 2-115, 3-128・144・396  
 稲荷様のひっこし .....3-224  
 稲荷神社 .....2-105, 3-132・135, 4-68  
 稲荷藤節 .....3-254・537  
 イナリ祭 .....1-371, 2-103・424, 3-29, 5-223  
 犬 .....3-218  
 イヌツバジキ .....5-177  
 イヌの日 .....5-100  
 犬はじき .....3-362  
 稲 .....1-102  
 稲あげ .....2-594  
 稲刈り .....1-10, 2-594  
 イネカリガマ .....4-371・378  
 稲の掛け橋 .....2-27  
 稲の品種 .....5-34  
 稲まるき .....2-594  
 井野 .....3-42  
 いのみの木 .....3-492  
 いのりくぎ .....5-77  
 折り釘 .....1-137, 3-212  
 位牌わけ .....5-180

アズキときぎ .....3-550  
 あずきときぎばあさん .....3-224  
 小豆ときぎばあ .....1-388  
 あずきぼうとう .....3-81  
 あずまおうかん .....3-122  
 東街道 .....3-121, 5-64  
 あぜかき .....5-38  
 あせも .....1-223  
 あそび .....4-107, 5-116  
 遊び .....1-261, 2-277, 3-266, 4-300  
 あそび日 .....3-55  
 愛宕さま .....3-143  
 愛宕様 .....3-136  
 愛宕神社 .....1-177  
 頭をひやす方法 .....3-208  
 アツケ .....1-222・224・292, 2-232, 3-208・209・  
 314, 5-83  
 あつけあたり .....5-81  
 アツタカ山 .....5-72  
 アトタズネ .....1-309  
 あと念仏 .....2-123・376  
 あと念仏の水 .....3-366  
 アナガタ .....3-357  
 アナップサギ .....5-35  
 アナップサゲ .....1-361, 2-423, 3-13  
 アナップポリバン .....5-177  
 アナバシ .....5-91  
 アナバン .....3-356  
 穴掘り .....1-20・335, 3-356  
 アナマワリ .....5-176  
 アネサンカムリ .....1-54  
 あの世 .....2-484, 3-549  
 あばれ .....5-118  
 アブミ .....4-417  
 油いため .....1-69  
 油だくねえ .....3-533  
 アブラッポリ .....5-97  
 油味噌 .....1-68  
 アブラモチ .....1-66・373, 2-9・318・406・407・  
 426・599・603, 3-84・78・415, 5-218・223  
 油屋 .....3-126  
 あまおち .....3-579  
 雨蛙 .....3-219  
 尼が橋 .....3-589  
 天川大島 .....3-498・532  
 天川大島住宅 .....3-39  
 天川の弾正林 .....3-493  
 天川の松並木 .....3-524  
 天川二子山古墳 .....4-131

雨具 .....1-55, 3-74  
 雨乞い .....1-8・99・137・390, 2-238, 5-37・76  
 アマサケマツリ .....5-132  
 あまだれおち .....2-224  
 天沼薬師 .....1-155  
 あまねじ .....1-6, 3-80  
 アミ .....4-399  
 阿弥陀井戸 .....5-299  
 阿弥陀様 .....3-141  
 阿弥陀信仰 .....3-19  
 阿弥陀堂 .....1-130  
 阿弥陀如来 .....1-214  
 阿弥陀仏 .....5-142  
 雨正月 .....5-38  
 アメブルマイ .....5-288  
 あめ屋 .....5-69  
 アメ屋 .....3-126  
 操翁式三番叟 .....3-244  
 荒口川 .....3-584  
 アラ汁 .....1-68  
 荒砥川 .....3-584  
 新盆 .....5-214  
 荒牧神社 .....1-173  
 アルキ .....1-108  
 アワ .....2-7・60・490  
 淡島さま .....1-265, 2-122, 3-143, 4-66  
 淡島神社 .....2-14  
 あわせ .....1-5, 3-73  
 裕 (あわせ) .....5-12  
 あわせ苗 .....3-205  
 あんか .....1-89  
 アンカ .....4-353  
 アンゴ .....4-346  
 あんこ会 .....3-55  
 あんころもち .....3-80  
 アンコロモチ .....5-100  
 安産 .....3-288  
 安産祈願 .....1-17・266, 2-320  
 安産の神 .....5-146  
 庵室 .....1-122  
 行燈 .....1-94

## い

飯玉神社 .....2-106, 3-133  
 イイツギ .....1-10・108, 5-94  
 飯土井の猫山 .....3-477  
 家 .....1-451  
 家づくり .....3-89  
 イカダ師 .....2-94

# 凡 例

1. この索引は、前橋市教育委員会が刊行した民俗調査報告書第1～4集の索引と群馬県教育委員会が刊行した民俗調査報告書第17集の索引をまとめたものである。
2. 頁の前の1～4は前橋市の1～4を5は県の報告書を示している。

## 索 引

### あ

あいさつまわり .....1-315  
あいさつ回り .....1-347  
阿内 .....3-37  
青梨子 .....2-33  
青物市 .....1-11  
青柳大師 .....1-170・348・392  
アオリ .....4-418  
赤城 .....2-454  
赤城型民家 .....1-6, 3-7  
赤城神社のおきせかえ .....5-316  
赤城講 .....1-15・46  
赤城さま .....5-122  
赤城様 .....1-42  
赤城従行 .....5-314  
赤城信仰 .....1-24・134, 5-122  
赤城神社 .....1-120・163・183・204・205・454, 5-127  
赤城神社のおのぼり .....5-222  
赤城大明神実記 .....5-309・313  
赤城と日光の話 .....1-386  
赤城と榛名の神の争い .....3-462  
赤城と榛名の争い .....1-386  
赤城の大男 .....3-462  
赤城の夕立 .....3-214  
赤城山 .....1-390  
あがたの箱 .....2-462  
赤鳥居 .....3-275  
赤堀道元 .....1-24, 2-459, 3-469  
赤堀道元の娘 .....1-383  
あかり .....1-93  
アガリハナ .....1-7・85, 3-90, 5-278  
阿感坊のはなし .....3-495  
阿感坊の竜宮行き .....3-476  
アキアゲ .....2-88・318・423, 3-14・79・105・413・  
578, 5-34・45  
アキツ田 .....5-108

あきの方 .....3-131  
秋の彼岸 .....2-317  
秋葉 .....2-601  
秋葉講 .....1-132, 2-116, 3-155  
秋葉様 .....2-116・291, 5-132  
秋葉信仰 .....1-13  
秋葉大権現 .....1-123  
秋まつり .....1-119・370, 2-317, 3-410, 4-127  
アキマンガ .....5-281・283  
秋元山壇徒定例 .....2-147  
アキヤシキ .....1-47  
アキワ講 .....1-46  
悪魔っばらい .....1-45  
悪魔除け .....1-138  
アゲ祝い .....2-315  
あげっこと .....2-599  
あげ念仏 .....3-597  
明けの明星 .....3-216  
麻 .....1-59  
あざ .....1-221  
アザ .....1-266  
朝倉ごてん .....3-491  
アサグワ .....4-368  
朝仕事 .....5-60  
麻の葉の着物 .....3-71  
浅間砂 .....3-96  
浅間の噴火 .....3-589  
朝飯前仕事 .....3-517  
朝湯 .....1-345, 2-310・384, 3-373  
アシイレ .....1-307, 347, 3-25・323, 5-144  
足軽屋敷 .....4-5  
あしだ .....5-84  
味付 .....2-616  
アシナカゾーリ .....5-8  
芦原堰 .....3-495・532  
小豆 .....1-60, 3-378・383  
アズキガユ .....1-9・21・66, 2-68・312・398, 3-79,

前橋市民俗文化財調査報告書第四集

## 本庁管内の民俗

—旧前橋町を中心として—

平成七年三月二十八日 印刷  
平成七年三月三十日 発行 (非売品)

編集 前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目十二番一号  
電話 〇二七—二二四—一一二(代)

印刷 朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七  
電話 〇二七—二五—二二二(代)